マニュアルページセクション 5: 標準、環境、マクロ

Part No: E29116
2011 年 11 月

120411@25097

目次

はじめに

SunOS オペレーティングシステムの初心者でも、熟練したユーザーでも、オンラインのマニュアルページを使ってシステムおよびその機能に関する情報を入手できます。マニュアルページは、「それは何を行うのか」という質問に簡潔に回答するために作成されています。マニュアルページは一般にリファレンスマニュアルとなります。チュートリアルとしては作成されていません。

概要

次に、マニュアルページの各セクションと、それらのセクションで示される情報の概要を示します。

- セクション 1 では、オペレーティングシステムで使用できるコマンドをアルファベット順に説明しています。
- セクション 1M では、主にシステムの保守と管理のために使用されるコマンドをアルファベット順に説明しています。
- セクション 2 では、すべてのシステムコールについて説明しています。これらの呼び出しのほとんどは、1 つ以上のエラーを返します。エラー状態は、ほかの場合には返されない戻り値によって示されます。
- セクション 3 では、セクション 2 で説明されている UNIX システムプリミティブを直接呼び出す関数を除き、さまざまなライブラリにある関数について説明しています。
- セクション 4 では、各種ファイルの形式について説明しています。該当する場合は、ファイル形式を C 言語の構造体の宣言を使用して示します。
- セクション 5 では、文字セットテーブルなど、その他各種の情報について説明しています。
- セクション 7 では、特定のハードウェア周辺装置やデバイスドライバを参照する、さまざまな特殊ファイルについて説明しています。STREAMS ソフトウェアドライバ、モジュール、およびシステムコールの STREAMS 汎用セットについても説明します。
- セクション 9E では、開発者がデバイスドライバに組み込むことができる、DDI (デバイスドライバインタフェース)/DKI (ドライバ/カーネルインタフェース) 両用、DDI 専用、および DKI 専用のエントリポイントルーチンについて説明しています。

- セクション 9F では、デバイスドライバで使用できるカーネル関数について説明しています。
- セクション 9S では、ドライバとカーネルの間で情報を共有するためにドライバで使用されるデータ構造について説明しています。

マニュアルページの一般形式は次のとおりです。各マニュアルセクションのマニュアルページは、通常この順序に従っていますが、必要な項目だけを含んでいます。たとえば、記述すべきバグがコマンドにない場合、「使用上の留意点」というセクションはありません。各セクションの詳細については `intro` ページ、マニュアルページの一般的な情報については `man(1)` を参照してください。

名前
: このセクションでは、コマンドまたは関数の名前および機能の概略を示します。

形式
: このセクションでは、コマンドまたは関数の構文を示します。コマンドやファイルが標準パスに存在しない場合は、そのフルパス名が示されます。別の引数順序が必要な場合を除いて、オプションと引数はアルファベット順に、まず 1 文字の引数、次に引数付きのオプションが記述されます。

  このセクションでは、次の特殊文字が使用されます。

  [ ]
  : 角括弧。角括弧に囲まれたオプションや引数は省略できます。角括弧がない場合、その引数は必須です。

  . . .
  : 省略記号。前の引数に複数の値を指定すること、または前の引数を複数回指定することができます (例: “`filename...`”)。

  |
  : 区切り文字。この文字で区切られている引数のうち 1 つだけを一度に指定できます。

  { }
  : 中括弧。中括弧に囲まれたオプションや引数は相互に依存しているため、括弧内のすべてを一体として扱う必要があります。

プロトコル
: このセクションは、プロトコルが記述されているファイルを示すためにサブセクション 3R でのみ使用されます。

機能説明
: このセクションでは、サービスの機能と動作を定義します。つまり、コマンドの機能を簡潔に説明します。オプションの説明や使用例はここでは示されていません。対話形式のコマンド、サブコマンド、要求、マクロ、および関数については「使用法」で説明します。

IOCTL
: このセクションは、セクション 7 のページだけに含まれます。`ioctl(2)` システムコールに適切なパラメータを提供するデバイスクラスのみが `ioctl` と呼ばれ、独自の見出しを生成しま

す。特定のデバイスに関する ioctl 呼び出しは、(そのデバイスのマニュアルページに) アルファベット順に記述されています。ioctl 呼び出しは、mtio(7I) のように、すべて io で終わる特定クラスのデバイスに使用されます。

オプション　このセクションでは、コマンドオプションの一覧と各オプションの機能のサマリーを示します。オプションは、「形式」のセクションで示されている順序で、文字通りに記述されています。オプションに引数がある場合はそのオプションの下で説明され、該当する場合はデフォルト値が示されます。

オペランド　このセクションでは、コマンドのオペランドの一覧を示し、各オペランドがコマンドの動作にどのように影響を及ぼすかを説明します。

出力　このセクションでは、コマンドによって生成される出力 (標準出力、標準エラー、または出力ファイル) について説明します。

戻り値　値を返す関数のマニュアルページの場合、このセクションには、これらの値の一覧および値が返される条件が示されます。関数が 0 や -1 などの定数値だけを返す場合は、これらの値がタグ付き段落で一覧表示されます。それ以外の場合は、各関数の戻り値が 1 つの段落で説明されます。void と宣言された関数は値を返さないため、「戻り値」では扱われません。

エラー　エラー発生時、ほとんどの関数はエラーコードを大域変数 errno に格納し、エラーの理由を示します。このセクションでは、関数が生成しうるすべてのエラーコードの一覧をアルファベット順で示し、各エラーの発生条件について説明します。複数の条件が同じエラーの原因になる場合、そのエラーコードの下に各条件が別々の段落で記述されます。

使用法　このセクションでは、詳細な説明を必要とする特殊な規則、機能、およびコマンドを示します。次に示すサブセクションは、組み込まれている機能を説明するために使用されます。

コマンド
修飾子
変数
式
入力文法

使用例　このセクションでは、コマンドまたは関数の使用例または使用方法を説明します。可能な場合は、コマンド行の入力とマシンの応答を含む完全な例が示されます。例の中で、プロンプトは example% と表示されるか、スーパーユーザーでなければならな

い場合は example# と表示されます。例のあとに、説明、変数置換規則、または戻り値が示されます。ほとんどの例が、「形式」、「機能説明」、「オプション」、「使用法」のセクションの概念を示す実例となっています。

環境変数	このセクションでは、コマンドまたは関数が影響を与えるすべての環境変数の一覧を示し、その影響について簡単に説明します。
終了ステータス	このセクションでは、コマンドが呼び出し元のプログラムまたはシェルに返す値の一覧と、これらの値が返される条件を示します。通常、正常終了には 0 が返され、0 以外の値はそれぞれのエラー状態を示します。
ファイル	このセクションでは、マニュアルページが参照するファイル、関連ファイル、およびコマンドが作成または必要とするファイルの一覧を示します。それぞれのあとに、サマリーまたは説明があります。
属性	このセクションでは、属性タイプとその対応する値を定義することにより、コマンド、ユーティリティー、およびデバイスドライバの特性を示します。詳細については、attributes(5) を参照してください。
関連項目	このセクションでは、関連するマニュアルページ、当社のマニュアル、および外部の出版物を示します。
診断	このセクションでは、診断メッセージの一覧を示し、エラーの発生条件について簡単に説明します。
警告	このセクションでは、作業環境に重大な影響を与える可能性のある特殊な条件に関する警告の一覧を示します。これは診断の一覧ではありません。
注意事項	このセクションでは、このマニュアルページの他のどのセクションにも記載されない追加情報を示します。ユーザーへの参考情報として、特に関心を引く事項を扱います。ここで重要な情報が扱われることはありません。
使用上の留意点	このセクションでは、既知の問題について説明し、可能な場合は回避方法を示します。

参 照

紹介

名前

Intro, intro – その他の序章

機能説明

このセクションでは、次の項目について説明します。

標準　POSIX (IEEE) 標準と X/Open 仕様について `standards` で 記述します。

環境　ユーザー環境 (`environ`)、言語や文化規約によるユーザー環境のサブセット (`locale`)、大規模ファイルのコンパイル環境 (`lfcompile`)、変換のコンパイル環境 (`lfcompile64`) について記述します。

マクロ　リファレンスマニュアルのページ (`man` と `mansun`) を書式化するマクロ、およびその他のテキストを書式化するマクロ (`me`、`mm`、`ms`) について記述します。

文字　文字セット (`ascii`、`charmap`、`eqnchar`、`iconv`) のテーブル、ファイルの書式化設定 (`formats`)、ファイル名のパターンマッチング (`fnmatch`)、正規表現 (`regex` と `regexp`) について記述します。

謝辞

参 照

標準、環境、マクロ

名前

acl – Access Control Lists

機能説明

Access control lists (ACLs) are discretionary access control mechanisms that grant and deny access to files and directories. Two different ACL models are supported in the Solaris release:POSIX-draft ACLs and NFSv4 ACLs.

The older, POSIX-draft model is supported by the UFS file system. This model is based on a withdrawn ACL POSIX specification that was never standardized. It was subsequently withdrawn by the POSIX committee.

The other model is based on the standards of the NFSv4 working group and is an approved standard from the Internet Engineering Task Force (IETF). The ZFS file system uses the NFSv4 model, and provides richer semantics and finer grained permission capabilities than the POSIX-draft model.

POSIX-draft ACLs

POSIX-draft ACLs provide an alternative security mechanism to basic UNIX file permissions in the Solaris release. Their purpose is to further restrict access to files and directories or to extend permissions to a particular user. ACLs can be used to change the permissions for the standard owner, group and other class bits of a file's mode. ACLs can give additional users and groups access to the file. A directory can also have a special kind of ACL called a *default* ACL, which defines ACL entries to be inherited by descendents of the directory. POSIX-draft ACLs have an ACL entry called *mask*. The mask defines the maximum permissions that can be granted to additional user and group entries. Whenever a file is created or its mode is changed by `chmod(1)` or `chmod(2)`, the mask is recomputed. It is recomputed to be the group permission defined in the mode passed to `chmod(2)`.

The POSIX-draft ACL model uses the standard `rwx` model of traditional UNIX permissions.

An ACL is represented as follows:

acl_entry`[,`*acl_entry*`]...`

Each *acl_entry* contains one ACL entry. An ACL entry is represented by two or three colon-separated(`:`) fields.

user:[*uid*]:*perms*	If *uid* blank, it represents the file owner.
group:[*gid*]:*perms*	If *gid* is blank, it represents the owning group.
other:*perms*	Represents the file other class.
mask:*perms*	Defines the `MAX` permission to hand out.

For example to give user `joe` read and write permissions, the ACL entry is specified as:

```
user:joe:rw-
```

NFSv4 ACLs

NFSv4 ACL model is based loosely on the Windows NT ACL model. NFSv4 ACLs provide a much richer ACL model than POSIX-draft ACLs.

The major differences between NFSv4 and POSIX-draft ACLs are as follows:

- NFSv4 ACLs provide finer grained permissions than the `rwx` model.
- NFSv4 ACLs allow for both `ALLOW` and `DENY` entries.
- NFSv4 ACLs provide a rich set of inheritance semantics. POSIX ACLs also have inheritance, but with the NFSv4 model you can control the following inheritance features:
  - Whether inheritance cascades to both files and directories or only to files or directories.
  - In the case of directories, you can indicate whether inheritance is applied to the directory itself, to just one level of subdirectories, or cascades to all subdirectories of the directory.
- NFSv4 ACLs provide a mechanism for hooking into a system's audit trail. Currently, Solaris does not support this mechanism.
- NFSv4 ACLs enable adminstrators to specify the order in which ACL entries are checked. With POSIX-draft ACLs the file system reorders ACL entries into a well defined, strict access, checking order.

POSIX-draft ACL semantics can be achieved with NFSv4 ACLs. However, only some NFSv4 ACLs can be translated to equivalent POSIX-draft ACLs.

Permissions can be specified in three different `chmod` ACL formats: verbose, compact, or positional. The verbose format uses words to indicate that the permissions are separated with a forward slash (`/`) character. Compact format uses the permission letters and positional format uses the permission letters or the hypen (`-`) to identify no permissions.

The permissions for verbose mode and their abbreviated form in parentheses for compact and positional mode are described as follows:

read_data (`r`)	Permission to read the data of the file
list_directory (`r`)	Permission to list the contents of a directory.
write_data (`w`)	Permission to modify a file's data anywhere in the file's offset range. This includes the ability to grow the file or write to any arbitrary offset.
add_file (`w`)	Permission to add a new file to a directory.
append_data (`p`)	The ability to modify the file's data, but only starting at EOF. Currently, this permission is not supported.
add_subdirectory (`p`)	Permission to create a subdirectory to a directory.

read_xattr (R)	The ability to read the extended attributes of a file or do a lookup in the extended attributes directory.
write_xattr (W)	The ability to create extended attributes or write to the extended attributes directory.
execute (x)	Permission to execute a file.
read_attributes (a)	The ability to read basic attributes (non-ACLs) of a file. Basic attributes are considered to be the stat level attributes. Allowing this access mask bit means that the entity can execute ls(1) and stat(2).
write_attributes (A)	Permission to change the times associated with a file or directory to an arbitrary value.
delete (d)	Permission to delete the file.
delete_child (D)	Permission to delete a file within a directory.
read_acl (c)	Permission to read the ACL.
write_acl (C)	Permission to write the ACL or the ability to execute chmod(1) or setfacl(1).
write_owner (o)	Permission to change the owner or the ability to execute chown(1) or chgrp(1).
synchronize (s)	Permission to access a file locally at the server with synchronous reads and writes. Currently, this permission is not supported.

The following inheritance flags are supported by NFSv4:

file_inherit (f)	Inherit to all newly created files in a directory.
dir_inherit (d)	Inherit to all newly created directories in a directory.
inherit_only (i)	Placed on a directory, but does not apply to the directory itself, only to newly created created files and directories. This flag requires file_inherit and or dir_inherit to indicate what to inherit.
no_propagate (n)	Placed on directories and indicates that ACL entries should only be inherited one level of the tree. This flag requires file_inherit and or dir_inherit to indicate what to inherit.
successful_access (S))	Indicates if an alarm or audit record should be initiated upon successful accesses. Used with audit/alarm ACE types.
failed_access (F)	Indicates if an alarm or audit record should be initiated when access fails. Used with audit/alarm ACE types.
inherited (I)	ACE was inherited.
-	No permission granted.

An NFSv4 ACL is expressed using the following syntax:

acl_entry[,*acl_entry*]...

```
owner@:<perms>[:inheritance flags]:<allow|deny>
group@:<perms>[:inheritance flags]:<allow|deny>
everyone@:<perms>[:inheritance flags]:<allow|deny>
user:<username>[:inheritance flags]:<allow|deny>
group:<groupname>[:inheritance flags]:<allow|deny>
```

owner@	File owner
group@	Group owner
user	Permissions for a specific user
group	Permissions for a specific group

Permission and inheritance flags are separated by a / character.

ACL specification examples:

```
user:fred:read_data/write_data/read_attributes:file_inherit:allow
owner@:read_data:allow,group@:read_data:allow,user:tom:read_data:deny
```

Using the compact ACL format, permissions are specified by using 14 unique letters to indicate permissions.

Using the positional ACL format, permissions are specified as positional arguments similar to the `ls -V` format. The hyphen (`-`), which indicates that no permission is granted at that position, can be omitted and only the required letters have to be specified.

The letters above are listed in the order they would be specified in positional notation.

With these letters you can specify permissions in the following equivalent ways.

```
user:fred:rw------R------:file_inherit:allow
```

Or you can remove the - and scrunch it together.

```
user:fred:rwR:file_inherit:allow
```

The inheritance flags can also be specified in a more compact manner, as follows:

```
user:fred:rwR:f:allow
user:fred:rwR:f------:allow
```

Shell-level Solaris API

The Solaris command interface supports the manipulation of ACLs. The following Solaris utilities accommodate both ACL models:

`chmod`	The `chmod` utility has been enhanced to allow for the setting and deleting of ACLs. This is achieved by extending the symbolic-mode argument to support ACL manipulation. See `chmod(1)` for details.
`compress`	When a file is compressed any ACL associated with the original file is preserved with the compressed file.
`cp`	By default, `cp` ignores ACLs, unless the `-p` option is specified. When `-p` is specified the owner and group id, permission modes, modification and access times, ACLs, and extended attributes if applicable are preserved.
`cpio`	ACLs are preserved when the `-P` option is specified.
`find`	Find locates files with ACLs when the `-acl` flag is specified.
`ls`	By default `ls` does not display ACL information. When the `-v` option is specified, a file's ACL is displayed.
`mv`	When a file is moved, all attributes are carried along with the renamed file. When a file is moved across a file system boundary, the ACLs are replicated. If the ACL information cannot be replicated, the move fails and the source file is not removed.
`pack`	When a file is packed, any ACL associated with the original file is preserved with the packed file.
`rcp`	`rcp` has been enhanced to support copying. A file's ACL is only preserved when the remote host supports ACLs.
`tar`	ACLs are preserved when the `-p` option is specified.
`unpack`	When a file with an ACL is unpacked, the unpacked file retains the ACL information.

Application-level API

The primary interfaces required to access file system ACLs at the programmatic level are the `acl_get()` and `acl_set()` functions. These functions support both POSIX draft ACLs and NFSv4 ACLs.

Retrieving a file's ACL

```
int acl_get(const char *path, int flag, acl_t **aclp);
int facl_get(int fd, int flag, acl_t **aclp);
```

The `acl_get(3SEC)` and `facl_get(3SEC)` functions retrieves an ACL on a file whose name is given by path or referenced by the open file descriptor fd. The flag argument specifies whether a trivial ACL should be retrieved. When the flag argument equals `ACL_NO_TRIVIAL` then only ACLs that are not trivial are retrieved. The ACL is returned in the `aclp` argument.

Freeing ACL structure

```
void acl_free(acl_t *aclp)s;
```

The `acl_free()` function frees up memory allocated for the argument `aclp;`.

Setting an ACL on a file

```
int acl_set(const char *path, acl_t *aclp);
int facl_set(int fd, acl_t *aclp);
```

The acl_set(3SEC) and facl_get(3SEC) functions are used for setting an ACL on a file whose name is given by path or referenced by the open file descriptor fd. The aclp argument specifies the ACL to set. The acl_set(3SEC) translates an POSIX-draft ACL into a NFSv4 ACL when the target file systems supports NFSv4 ACLs. No translation is performed when trying to set an NFSv4 ACL on a POSIX-draft ACL supported file system.

Determining an ACL's trivialness

```
int acl_trivial(const char *path);
```

The acl_trivial() function is used to determine whether a file has a trivial ACL. Whether an ACL is trivial depends on the type of the ACL. A POSIX draft ACL is nontrivial if it has greater than MIN_ACL_ENTRIES. An NFSv4/ZFS-style ACL is nontrivial if it either has entries other than owner@, group@, and everyone@, has inheritance flags set, or is not ordered in a manner that meets POSIX access control requirements.

Removing all ACLs from a file

```
int acl_strip(const char *path, uid_t uid, gid_t gid, mode_t mode);
```

The acl_strip() function removes all ACLs from a file and replaces them with a trivial ACL based off of the passed in argument mode. After replacing the ACL the owner and group of the file are set to the values specified in the uid and gid parameters.

Converting ACLs to/from external representation

```
int acl_fromtext(const char *path, acl_t **aclp);
char *acl_totext(acl_t *aclp, int flags);
```

The acl_text() function converts an internal ACL representation pointed to by aclp into an external representation. See DESCRIPTION for details about external representation.

The acl_fromtext() functions converts and external representation into an internal representation. See DESCRIPTION for details about external representation.

使用例

The following examples demonstrate how the API can be used to perform basic operations on ACLs.

例 1 Retrieving and Setting an ACL

Use the following to retrieve an ACL and set it on another file:

```
error = acl_get("file", ACL_NO_TRIVIAL, &aclp);

if (error == 0 && aclp != NULL) {
error = acl_set("file2", aclp)
acl_free(aclp);
}
...
```

例 2 Retrieving and Setting Any ACLs

Use the following to retrieve any ACL, including trivial ACLs, and set it on another file:

```
error = acl_get("file3", 0, &aclp);
if (error == 0) {
error = acl_set("file4", aclp)
acl_free(aclp);
}
...
```

例 3 Determining if a File has a Trivial ACL

Use the following to determine if a file has a trivial ACL:

```
istrivial = acl_trivial("file")

if (istrivial == 0)
printf("file %s has a trivial ACL\n", file);
else
printf("file %s has a NON-trivial ACL\n", file);
...
```

例 4 Removing all ACLs from a File

Use the following to remove all ACLs from a file, and set a new mode, owner, and group:

```
error = acl_strip("file", 10, 100, 0644);
...
```

関連項目

chgrp(1), chmod(1), chown(1), cp(1), cpio(1), find(1), ls(1), mv(1), tar(1), setfacl(1), chmod(2), acl(2),stat(2),acl_get(3SEC), aclsort(3SEC), acl_fromtext(3SEC), acl_free(3SEC), acl_strip(3SEC), acl_trivial(3SEC)

名前

ad – ネーミングリポジトリとしての Active Directory

機能説明

Solaris クライアントは、Active Directory (AD) サーバーからネーミング情報を取得できます。

最初に Solaris システムを AD ドメインに参加させ、次に ad キーワードを nsswitch.conf(4) ファイルの適切なエントリに追加する必要があります。Solaris システムを AD ドメインに参加させるには、kclient(1M) ユーティリティーを使用します。AD ネームサービスは、passwd および group に対するネーミングデータベースをサポートしています。

Windows ユーザーはログインできません。user_attr(4) データベースには Windows ユーザーのエントリがなく、passwd(1) コマンドは、AD とのユーザーパスワードの同期をサポートしていません。

Solaris AD クライアントは、自動検出テクノロジを使用して、ドメインコントローラやグローバルカタログサーバーなどの AD ディレクトリサーバーを見つけます。クライアントはまた、LDAP v3 プロトコルを使用して、AD サーバーのネーミング情報にアクセスします。AD サーバー方式は、AD クライアントがネイティブな AD 方式で動作しているので、変更を必要としません。Solaris AD クライアントは、idmap(1M) サービスを使用して、Windows セキュリティー識別子 (SID) と Solaris ユーザー識別子 (UID) およびグループ識別子 (GID) とを対応付けます。ユーザー名とグループ名は、AD ユーザーおよびグループオブジェクトの sAMAccountName 属性から取得され、オブジェクトが存在するドメインでタグ付けされます。ドメイン名は、@ 文字でユーザー名またはグループ名から切り離されます。

クライアントは SASL/GSSAPI/KRB5 セキュリティーモデルを使用します。クライアントを AD に参加させるには、kclient ユーティリティーが使用されます。参加操作中、kclient はクライアント上で Kerberos v5 を構成します。kclient(1M) を参照してください。

ファイル

/etc/nsswitch.conf	ネームサービススイッチの構成ファイル。
/etc/nsswitch.ad	ad、dns、および files で構成されたネームサービススイッチのサンプル構成ファイル。
/usr/lib/nss_ad.so.1	AD 用のネームサービススイッチモジュール。

関連項目

passwd(1), svcs(1), idmap(1M), idmapd(1M), kclient(1M), svcadm(1M), svccfg(1M), svccfg(1M), nsswitch.conf(4), user_attr(4), smf(5)

名前

ascii – map of ASCII character set

形式

```
cat /usr/pub/ascii
```

機能説明

`/usr/pub/ascii` is a map of the ASCII character set, to be printed as needed. It contains octal and hexadecimal values for each character. While not included in that file, a chart of decimal values is also shown here.

```
                        Octal — Character

000 NUL  001 SOH  002 STX  003 ETX  004 EOT  005 ENQ  006 ACK  007 BEL
010 BS   011 HT   012 NL   013 VT   014 NP   015 CR   016 SO   017 SI
020 DLE  021 DC1  022 DC2  023 DC3  024 DC4  025 NAK  026 SYN  027 ETB
030 CAN  031 EM   032 SUB  033 ESC  034 FS   035 GS   036 RS   037 US
040 SP   041 !    042 "    043 #    044 $    045 %    046 &    047 ’
050 (    051 )    052 *    053 +    054 ,    055 —    056 .    057 /
060 0    061 1    062 2    063 3    064 4    065 5    066 6    067 7
070 8    071 9    072 :    073 ;    074 <    075 =    076 >    077 ?
100 @    101 A    102 B    103 C    104 D    105 E    106 F    107 G
110 H    111 I    112 J    113 K    114 L    115 M    116 N    117 O
120 P    121 Q    122 R    123 S    124 T    125 U    126 V    127 W
130 X    131 Y    132 Z    133 [    134 \    135 ]    136 ^    137 _
140 ‘    141 a    142 b    143 c    144 d    145 e    146 f    147 g
150 h    151 i    152 j    153 k    154 l    155 m    156 n    157 o
160 p    161 q    162 r    163 s    164 t    165 u    166 v    167 w
170 x    171 y    172 z    173 {    174 |    175 }    176 ~    177 DEL

                     Hexadecimal — Character

00 NUL   01 SOH   02 STX   03 ETX   04 EOT   05 ENQ   06 ACK  07 BEL
08 BS    09 HT    0A NL    0B VT    0C NP    0D CR    0E SO   0F SI
10 DLE   11 DC1   12 DC2   13 DC3   14 DC4   15 NAK   16 SYN  17 ETB
18 CAN   19 EM    1A SUB   1B ESC   1C FS    1D GS    1E RS   1F US
20 SP    21 !     22 "     23 #     24 $     25 %     26 &    27 ’
28 (     29 )     2A *     2B +     2C ,     2D —     2E .    2F /
30 0     31 1     32 2     33 3     34 4     35 5     36 6    37 7
38 8     39 9     3A :     3B ;     3C <     3D =     3E >    3F ?
40 @     41 A     42 B     43 C     44 D     45 E     46 F    47 G
48 H     49 I     4A J     4B K     4C L     4D M     4E N    4F O
50 P     51 Q     52 R     53 S     54 T     55 U     56 V    57 W
58 X     59 Y     5A Z     5B [     5C \     5D ]     5E ^    5F _
60 ‘     61 a     62 b     63 c     64 d     65 e     66 f    67 g
68 h     69 i     6A j     6B k     6C l     6D m     6E n    6F o
70 p     71 q     72 r     73 s     74 t     75 u     76 v    77 w
78 x     79 y     7A z     7B {     7C |     7D }     7E ~    7F DEL

                        Decimal — Character

  0 NUL   1 SOH    2 STX    3 ETX    4 EOT    5 ENQ    6 ACK    7 BEL
```

```
 8 BS    9 HT    10 NL    11 VT    12 NP    13 CR    14 SO    15 SI
16 DLE  17 DC1   18 DC2   19 DC3   20 DC4   21 NAK   22 SYN   23 ETB
24 CAN  25 EM    26 SUB   27 ESC   28 FS    29 GS    30 RS    31 US
32 SP   33 !     34 "     35 #     36 $     37 %     38 &     39 ’
40 (    41 )     42 *     43 +     44 ,     45 −     46 .     47 /
48 0    49 1     50 2     51 3     52 4     53 5     54 6     55 7
56 8    57 9     58 :     59 ;     60 <     61 =     62 >     63 ?
64 @    65 A     66 B     67 C     68 D     69 E     70 F     71 G
72 H    73 I     74 J     75 K     76 L     77 M     78 N     79 O
80 P    81 Q     82 R     83 S     84 T     85 U     86 V     87 W
88 X    89 Y     90 Z     91 [     92 \     93 ]     94 ^     95 _
96 ‘    97 a     98 b     99 c    100 d    101 e    102 f    103 g
104 h   105 i    106 j    107 k    108 l    109 m    110 n    111 o
112 p   113 q    114 r    115 s    116 t    117 u    118 v    119 w
120 x   121 y    122 z    123 {    124 |    125 }    126 ~    127 DEL
```

ファイル

`/usr/pub/ascii` On-line chart of octal and hexadecimal values for the ASCII character set.

名前

attributes, architecture, availability, CSI, stability, MT-Level, standard – インタフェースの属性

機能説明

マニュアルページの「属性」セクションには、属性タイプと対応する値を定義する表が含まれます。属性表の例を次に示します。すべての属性タイプがすべての種類のインタフェースに適合するわけではありません。

属性タイプ	属性値
アーキテクチャー	SPARC
使用条件	system/kernel
CSI	有効
インタフェースの安定性	確実
MT レベル	安全
標準	standards(5)を参照してください。

アーキテクチャ

アーキテクチャーはプロセッサまたは固有のハードウェアを定義します。uname(1) の -p オプションを参照してください。必要なアダプタまたは周辺機器を示す場合もあります。

使用条件

これは、マニュアルページで説明されているコマンドまたはコンポーネントを含むソフトウェアパッケージを示します。このコマンドを使用できるようにするには、示されたパッケージがインストールされている必要があります。パッケージの追加方法についての詳細は、pkg(1) を参照してください。

コードセットの独立性 (CSI)

どのコードセットの特性にも依存していない OS ユーティリティーおよびライブラリは、コードセットの独立性 (CSI) を保持している、と言われます。これらは、CSI が有効な属性を持っています。これは、たとえば拡張 UNIX コードセット (EUC) でのみ動作するような、多くのコマンドやユーティリティーとは対照的です。EUC は、同時に 4 つまでのコードセットをサポートできるエンコーディング方式で、一般にアジア地域の文字セットを表すために使用されます。

ただし、実用上の理由によりこの独立性は絶対ではありません。現在の CSI 実装には、まだいくつかの仮定が適用されています。

- ファイルコードは ASCII のスーパーセットです。
- 複数バイト文字および NULL で終わる UNIX ファイル名をサポートするため、NULL および / (スラッシュ) 文字を、複数バイト文字の一部に含めることはできません。
- 「ステートレス」ファイルコードのエンコーディングだけがサポートされています。ステートレスなエンコーディングでは、単一のシフトは除外されていませんが、シフト、ロッキングシフト、指示、呼び出しなどは避けられています。

- プロセスコード (wchar_t 値) は実装に依存し、時期によって、または実装間やロケール間で、異なることがあります。
- すべてのオブジェクトが、任意の文字で構成される名前を持つことができるわけではありません。次のオブジェクトは、ASCII 文字から構成される名前にする必要があります。
  - ユーザー名、グループ名、およびパスワード
  - システム名
  - プリンタおよび特殊デバイスの名前
  - 端末の名前 (/dev/tty*)
  - プロセス ID 番号
  - メッセージキュー、セマフォー、および共有メモリーラベル。
  - 以降は、ISO Latin-1 文字または EUC 文字で構成する必要があります。
    - ファイル名
    - ディレクトリ名
    - コマンド名
    - シェルの変数および環境変数名
    - ファイルシステムへのマウントポイント
    - NIS キー名およびドメイン名
- NFS 共有ファイルの名前は、ASCII 文字で構成するようにしてください。ファイルやディレクトリの名前や内容に、ASCII 以外のコードセットの文字を使用することもできますが、ASCII コードセットのみを使用すると、ローカリゼーションに関係なくどのマシンでも NFS マウントを使用できます。CSI が有効にされているコマンドおよびユーティリティーはいずれも、2.6 でリリースされたシングルバイトおよび複数バイトのロケールを処理できます。アプリケーションが国際化サービスの完全なサポートを受けるには、動的リンクを適用する必要があります。静的にリンクされたプログラムでは、C ロケールおよび POSIX ロケールだけがサポートされます。

インタフェースの安定性

Sun は多くの場合、開発者が新しい技術をできるだけ早く評価できるようにするため、初期の段階で開発者がそれらの技術へアクセスできるようにします。残念ながら、新しい技術は変更が生じやすいため、標準化により以前のバージョンとのインタフェースの非互換性が生じることもよくあります。

リスクに対する予測を合理的に行うために、開発者は将来のリリースでインタフェースがどの程度変更される可能性があるかを知っておく必要があります。開発者がこうした予測をしやすくするため、インタフェースの安定性についての情報が、コマンド、エントリポイント、およびファイル形式に関するいくつかのマニュアルページに含まれています。

比較的安定したインタフェースについて、Sun は、将来のマイナーリリースでも引き続き確実に動作するよう努力します。このため、ほぼすべてのアプリケーションで安全に使用できます。「確実」インタフェースにのみ依存するアプリケーション

は、確実に将来のマイナーリリースでも正常に機能し続けます (ただし過去のメジャーリリースで機能するとは限らない)。

比較的安定していないインタフェースについては、実験と試作が可能ですが、将来のマイナーリリースで互換性のない変更がなされたり、削除されたり、代替のインタフェースと置き換えられたりする可能性を理解したうえで使用するようにしてください。

Sun がドキュメント化しない「インタフェース」(たとえば、ほとんどのカーネルデータ構造およびシステムヘッダーファイルの一部のシンボル) は、実装によるアーティファクトである場合があります。そのような内部インタフェースは、互換性のない変更がなされたり削除されたりする場合があり、また、通常、リリースノートでそのような変更について言及されることはありません。

リリースレベル

互換性について検討する助けとして、製品には名前とともにリリースレベルが付与されています。各リリースレベルには、低いレベルに適合する変更も含まれます。

リリース	バージョン	重要度
メジャー	x.0	重要な機能が追加され、異なる (場合によっては非互換の) 標準リビジョンに準拠していると考えられます。低い確率で、「確実」インタフェースが変更、削除、または置換される場合もあります。製品の初期リリースは通常 1.0 です。
マイナー	x.y	x.0 または以前のリリース (y!=0) と比較すると、次を含む場合があります。機能の追加、「確実」インタフェースに対する互換性のある変更、「不確実」インタフェースまたは「流動的」インタフェースに対する非互換である可能性の高い変更。
マイクロ	x.y.z	以前のリリース (z!=0) とのインタフェース互換性確保が意図されますが、バグの修正、パフォーマンスの改善、および追加ハードウェアのサポートが追加される場合もあります。「流動的」インタフェースに非互換の変更が加えられる可能性もあります。

インタフェースの安定性に関しては、更新リリース (パッチリリースと呼ばれることもある) がマイクロリリースに相当すると見なされます。

分類

次の表は、安定性レベルの分類とリリースレベルとの関係をまとめたものです。最初の列は安定性レベルです。2 番目の列は互換性のない変更のリリースレベルを、3 番目の列はその他のコメントを表します。個別の分類に関する完全な考察については、以降の該当するサブセクションを参照してください。

安定性	リリース	コメント
確実	メジャー (x.0)	非互換性は例外的です。
不確実	マイナー (x.y)	非互換は一般的です。
流動的	マイクロ (x.y.z)	非互換は一般的です。

このマニュアルページで説明されているインタフェースの安定性レベルの分類は、特に明記しない限り、ソースインタフェースとバイナリインタフェースの両方に適用されます。すべての安定性レベルの分類は公開されていますが、非公開 (`Private`) 分類だけは例外です。公開インタフェース (マニュアルページにドキュメント化されたもの) の正確な安定性レベルは、明示されていない限り特定されていません。ドキュメント化されていないインタフェースの安定性レベルは、暗黙的に非公開です。

Solaris 製品のコンポーネントのドキュメント以外のドキュメントが存在しても、Solaris 製品により提供されるインタフェースについて、いずれかの安定性レベルが暗示されているとみなすべきではありません。安定性レベルに関する唯一の情報源は、Solaris のマニュアルページです。

確実
: 「確実」インタフェースの目的は、サードパーティーがこれらのインタフェースに基づいてアプリケーションを開発してリリースできるようにし、そのインタフェースが導入された製品のリリース以降、同じメジャーリリース内であればどのリリースでも、アプリケーションの動作を保証することです。メジャーリリースでも、互換性のない変更はまれにありますが、正当な理由を必要とします。

  業界標準として定義され管理されているインタフェースは、多くの場合、「確実」インタフェースとして扱われます。この場合、管理している組織やバージョン管理された公開ドキュメントは、通常、ドキュメントの属性表やほかの部分で「標準」エントリに記述されています。

  ごくまれなことですが、互換性のない変更が加えられる可能性もあります。このような変更は、このマニュアルの「例外」セクションで説明されているように重大な欠陥がある場合は任意のリリースで、また、サポート終了プロセスに従ったマイナーリリースで発生します。「確実」インタフェースのサポートを打ち切る場合、Sun はその旨を通知し、安定性レベルを「廃止」に変更します。

不確実
: このようなインタフェースについては、あるマイナーリリースから次のマイナーリリースへの移行で、ソースやバイナリの互換性は保証されません。インタフェースの削除といった互換性のない大幅な変更がマイナーリリースで加えられる可能性もあります。「不確実」インタフェースは、通常、リリースに依存しない製品での使用には適していません。

互換性のない変更をインタフェースに加える場合には、使いやすさの考慮なども含めて実際にインタフェースを向上させるという目的が必要です。一般的な想定として、「不確実」インタフェースに互換性のない変更が加えられる可能性は低く、そのような変更が発生してもその影響は小さく、多くの場合は軽減計画が存在します。

通常、「不確実」インタフェースは、次のいずれかのサブカテゴリに分類されます。

1. 実験的または暫定的なインタフェース。通常、外部の開発者が新しいまたは急速に変化している技術を早く利用できるようにするため、あるいは、より一般的なソリューションが将来予期できる場合に、問題に対する暫定的なソリューションを提供するために使用されます。
2. 外部組織によって仕様が管理されているインタフェース。Sun は、外部仕様と同期をとれる次のマイナーリリースまで、以前のリリースとの互換性を保つために適切な努力をします。
3. 安定性より革新性 (および使いやすさ) を重視するユーザーを対象としたインタフェース。この属性は、より高い層のコンポーネントの管理インタフェースに関連付けられることがよくあります。

「不確実」インタフェースの場合、Sun は 2 つのマイナーリリース間でのソースまたはバイナリのどちらの互換性に関しても保証しません。これらのインタフェースに基づいて開発されるアプリケーションは、将来のマイナーリリースで動作しなくなる場合があります。

流動的
「流動的」インタフェースは、任意の理由でいつでも変更される可能性があります。

Sun 製品では、「流動的」というインタフェースの安定性レベルを使用することで、急速に変化する流動的な仕様にすばやく追従できます。多くの場合、この方が利用者の期待に適切に応えることになるため、インタフェースの安定性の向上よりも優先されます。

通常、この分類レベルは、Sun 以外の組織によって管理されているインタフェースに適用されます。ただし、標準化団体やフリーオープンソースソフトウェア (FOSS) コミュニティーによって管理されている、インタフェースの互換性を重視する仕様とは異なり、互換性のない変更がインタフェースに加えられることは非常にまれであるとは断言できません。また、ユーザーに安定性を提供することよりも、最小限の遅延でコミュニティーに追従することの方が重要視される場合には、FOSS によって管理されているソフトウェアに適用されることもあります。

さらに、「流動的」という分類レベルは、信頼できる組織や広く認められている組織による定義の過程にあるインタフェースに適用されることもよくあります。これらはドラフト標準と総称されます。「IETF インターネットドラフト」は、よく理解されている開発中の仕様の例です。

「流動的」は、実験的なインタフェースにも適用できます。

「流動的」インタフェースの場合、パッチも含む 2 つのリリース間でのソースやバイナリの互換性は保証されません。このようなインタフェースを使用しているアプリケーションは、将来のリリースでは正しく機能しない可能性があります。

インタフェースではない
この状況は、インタフェースであると推測できるが実際にはインタフェースでないエンティティーが存在する場合に発生することがあります。一般的な例として、人による使用だけを目的とした CLI 出力や GUI の正確なレイアウトなどがあります。

このような混乱が発生しやすいと特定される状況では、この分類を使用して簡単に明確にすることができます。エンティティーにこの分類が適用されていないことは、そのエンティティーが何らかの形式のインタフェースであることを示すものではありません。混乱の可能性が特定されていないことだけを示しています。

非公開
非公開インタフェースは、提供元のコンポーネント (または製品) 自体による使用のみが意図されたインタフェースです。それでも非公開インタフェースは、ほかのコンポーネントから見えたりアクセスできたりする場合があります。ほかのコンポーネントの非公開インタフェースを使用することは安定性の大きなリスクが伴うため、そのような使用は明示的にサポートされていません。Sun Microsystems によって提供されていないコンポーネントは、非公開インタフェースを使用するべきではありません。

ほとんどの非公開インタフェースはドキュメント化されていません。非公開インタフェースがドキュメント化されているのは例外的です。非公開インタフェースがドキュメント化される理由として、公開安定性レベルのいずれかに再分類される予定がある、普及度が非常に高い、などが挙げられます。

廃止 (Obsolete)
「廃止」という修飾子は、前述の分類レベルとともに使用できます。「廃止」修飾子は、「非推奨」になった、または一般的な使用には推奨されなくなったインタフェースを示します。既存のインタフェースは、「廃止」修飾子の適用により、ほかのステータス (「確実」や「不確実」など) から降格されることがあります。これにより、そのインタフェースが削除される (または互換性のない変更が加えられる) 前に、そのインタフェースからの移行をユーザーに促します。

廃止インタフェースは現在のリリースではサポートされていますが、将来の (マイナー) リリースでは削除される予定です。インタフェースのサポートが中止されるとき、Sun はサポートを中止する前に発表を行うよう努めます。廃止インタフェースを使用すると、警告メッセージが表示される場合があります。

例外

まれに、インタフェースの安定性に関する保証を破棄することが Sun とユーザーの両者にとって最大の利益になる場合があります。インタフェースの提供者がインタフェースの安定性に関する保証に違反する一般的な理由を、次の表にいくつか示します。

1. インタフェースに脆弱性が内在することによるセキュリティーホール。
2. インタフェースに脆弱性が内在することによるデータ破壊。
3. 適合性テストの解釈の変更や強化によって明らかになる標準違反。
4. Sun で管理されていないインタフェース仕様に互換性のない変更が加えられ、インタフェース利用者の大多数が新しいインタフェースを求めている。
5. 互換性のない変更を行わないとユーザーの理解が得られない。たとえば、DOS 8.3 の命名規則の制限が廃止されたとき、pcfs に互換性のない変更が加えられました。

互換性のない変更が例外として認められる場合、変更は常に「できるだけ主要な」リリース手段で配布されます。ただし、脆弱性やブランド契約の要件のため、やむを得ずパッチで配布されることもあります。

以前のインタフェース分類方式との互換性

Solaris 10 およびそれより前のリリースでは、異なるインタフェース分類方式が使用されていました。以前の分類方式と新しい分類方式のマッピングを次の表にまとめます。

旧	新	コメント
標準	確実	属性表の「標準」属性タイプのエントリが表示されます。
安定	確実	名前が変更されました。
開発中	不確実	実際の保証が一致します。
不安定	不確実	名前が変更されました。
外部	流動的	名前が変更され、可能な使用法が拡張されました。
廃止	(廃止)	以前は分類でしたが、現在は修飾子です。

フリーオープンソースソフトウェアの重要性が高まっているため、「安定」/「不安定」から「確実」/「不確実」という名前に変更されました。「安定」という用語は、FOSS コミュニティーでの一般的な使用法と競合していました。

「開発中」の定義があいまいなため、解釈が難しくなっていました。新しい分類方式への移行に伴い、以前の「開発中」インタフェースの多くが「確実」に昇格されました。ただし、「開発中」という用語が出現した場合は、「不確実」と見なすようにしてください。

MT レベル

ライブラリは、複数のスレッドをサポートする能力に応じてカテゴリに分類されます。複数または異なるレベルの関数を含むマニュアルページでは、「注意事項」または「使用法」のセクションでこの点が説明されています。

安全
: 安全はマルチスレッドのアプリケーションから呼び出し可能なコードの属性です。安全インタフェースまたは安全コードセグメントへの呼び出しにより、複数のスレッドによって呼び出された場合でも結果が有効になります。よく見過ごされる点ですが、この安全インタフェースまたは安全コードセグメントの結果は、すべてのスレッドにグローバルな影響を及ぼす可能性があります。たとえば、あるスレッドのファイルを開いたり閉じたりするアクションは、プロセス内の他のすべてのスレッドから表示可能です。マルチスレッドのアプリケーションには、これらのインタフェースを安全な方法で使用する責任があり、これはインタフェースが安全かどうかとは異なります。たとえば、アプリケーション内の他のスレッドによってまだ使用中のファイルを閉じるマルチスレッドのアプリケーションは、close(2) インタフェースを安全に使用していません。

安全ではない
: 安全ではないライブラリには、保護されていないグローバルおよび静的なデータが含まれています。ライブラリ内で一度に 1 つのスレッドだけが実行されるようアプリケーションで取り決めない限り、このライブラリの使用は安全ではありません。安全ではないライブラリには安全な関数が含まれている場合がありますが、ほとんどのライブラリの関数は呼び出すのが安全ではありません。安全ではない一部の関数は、MT-安全である再入可能な対象を持ちます。再入可能な関数には、関数名に _r のサフィックスが付いています。

MT-安全
: MT-安全ライブラリは、マルチスレッドのアクセスに対する準備が整っています。ロックによってグローバルおよび静的なデータを保護し、適度な量の並行性を実現しています。安全に使用できるライブラリも、MT-安全であるとは限りません。たとえば、ライブラリ全体をモニターで囲むとライブラリは安全になりますが、並行性をサポートしないため MT-安全とはみなされません。MT-安全ライブラリは適度な量の並行性を許容する必要があります。(この定義の目的は、ライブラリが安全であるとされる際に、その意味するものを明確にすることです。安全なライブラリの定義では、ライブラリが並行性をサポートするかどうかは示しません。MT-安全の定義では、ライブラリが安全で、ある程度の並行性をサポートすることを明確にしています。つまり安全の定義では、シングルスレッドを意味する場合も、任意の程度のマルチスレッドを意味する場合もあります。)

非同期シグナル安全
: 非同期シグナル安全とは、シグナルハンドラから安全に呼び出すことのできる特定のライブラリ関数のことです。非同期シグナル安全関数を実行するスレッドは、シグナルによって割り込まれた場合に、自分自身でデッドロックすることはありません。シグナルは、ロックを取得する MT-安全関数にとってのみ問題になります。

非同期シグナル安全関数は、MT-安全でもあります。非同期シグナル安全関数でロックが取得されると、シグナルは無効になります。これらのシグナルは、同じロックを取得する可能性のあるシグナルハンドラが呼び出されないようにします。

MT-安全の例外
例外の説明については、このページの「注意事項」または「使用法」のセクションを参照してください。

安全の例外
例外の説明については、このページの「注意事項」または「使用法」のセクションを参照してください。

Fork-安全
fork(2) 関数は、その関数を呼び出したスレッドだけを子プロセスに複製します。fork1(2) 関数は、以前の関数との互換性のために存在しており、fork() と同義です。fork() が呼び出されたとき、fork を実行しているスレッド以外のスレッドがロックを保持していた場合、ロックは子プロセスに引き続き保持されますが、所有者であるスレッドは複製されないため、ロックには所有者がいないことになります。ロックの取得を試みる関数を子が呼び出すと、デッドロックが発生します。

fork() が呼び出されるとき、Fork-安全ライブラリはその内部ロックすべてが fork を実行するスレッドによってのみ保持されるようにします。これは通常、ライブラリの初期化時に呼び出される pthread_atfork(3C) により実現されます。

forkall(2) 関数は、まれなケースとして、fork を実行するときにプロセスがそのすべてのスレッドを複製する必要がある場合にその機能を提供します。forkall() が呼び出されたときに、pthread_atfork() アクションは実行されません。forkall() を呼び出すことに関連する危険が存在します。プロセス内のスレッドで入出力操作を実行中に、別のスレッドが forkall() を呼び出すと、同じ入出力操作が親プロセスと子プロセスの両方で行われ続け、結果としてデータが破壊される場合があります。このような競合状態に関する理由から、forkall() の使用は推奨されていません。

Solaris 10 よりも前のすべての Solaris リリースでは、fork() の動作はアプリケーションが -lpthread (POSIX スレッド、standards(5) を参照) とリンクしているかどうかに依存していました。-lpthread とリンクされている場合、fork() は fork1() と同じように動作し、リンクしていない場合は forkall() と同じように動作していました。fork() の動作に関する混乱を避けるため、アプリケーションは状況に応じて fork1() または forkall() を指定できるようになりました。

取り消し安全性
マルチスレッドアプリケーションが pthread_cancel(3C) を使用してスレッドを取り消し (すなわち終了) する場合、対象となるスレッドがロックまたは割り当てられたメモリーなどのリソースを保持したまま終了する場合があります。ス

レッドにリソースを適切に解放する適切な取り消しクリーンアップハンドラがインストールされていない場合 (pthread_cancel(3C) を参照)、アプリケーションは「取り消し非安全」つまり取り消しに関して安全ではないことになります。このように安全でないと、取り消されたスレッドのロックが解放されないため、またはリソースリーク (たとえばスレッドの取り消し時にメモリーが解放されないなど) のために、デッドロックが生じる可能性があります。pthread_cancel(3C) を使用するアプリケーションはすべて、取り消し安全環境で実行されるべきです。取り消しポイントを持ち、ロックなどのリソースを取得したり動的にメモリーを割り当てたりするライブラリは、これらのライブラリにリンクされたアプリケーションの取り消し非安全性の一因となります。これにより、マルチスレッドプログラムでのライブラリの安全性に別のレベルが導入されることになります。 取り消し安全性です。取り消し安全性には、2 つのサブカテゴリがあります。 遅延取り消し安全性、および非同期取り消し安全性です。取り消しのタイプが PTHREAD_CANCEL_DEFERRED であるスレッドが取り消し安全であるとき、アプリケーションは遅延取り消し安全であるとみなされます。取り消しのタイプが PTHREAD_CANCEL_ASYNCHRONOUS であるスレッドが、取り消し安全であるとき、アプリケーションは非同期取り消し安全であるとみなされます。非同期取り消しタイプはどこでも取り消しができる一方、遅延取り消しタイプのスレッドは十分に定義された取り消しポイントによってのみ取り消しができるため、非同期取り消し安全性よりも遅延取り消し安全性の方が目的を達成するのが容易です。すべてのスレッドはデフォルトで遅延取り消しタイプを含んで作成されるため、非同期の取り消しを安全に行うことを心配する必要はないかもしれません。ほとんどのアプリケーションおよびライブラリは、常に非同期取り消し非安全であるものと想定されています。非同期取り消し安全であるアプリケーションは、定義上は、遅延取り消し安全でもあります。

標準

多くのインタフェースが業界標準として定義され管理されています。これに該当する場合、管理している組織やバージョン管理された公開ドキュメントは、このセクションに記述されています。

移植性のあるアプリケーションを作成するプログラマは、公的標準に基づくインタフェースのマニュアルページの説明ではなく、アプリケーションが準拠しようとする標準または仕様に存在するインタフェースの説明を利用するべきです。標準または仕様に複数の実装の選択肢がある場合、通常、マニュアルページには Sun による実装だけが説明されています。マニュアルページには、Sun が提供する標準インタフェースの基本定義に対する互換性のある拡張についても説明されています。

管理している組織やドキュメントが「標準」エントリとして引用されている場合でも、承認されているとは見なさないでください。管理している組織には、ISO や ANSII のように非常に公的な組織もあれば、それほど公式ではないが一般に認められている IETF などの組織や、FOSS (フリーオープンソースソフトウェア) の単独貢献者のように非公式なものもあります。

関連項目 uname(1), Intro(3), standards(5)

pkg(1)

名前 audit_binfile – generation of Solaris audit logs

形式 `/usr/lib/security/audit_binfile.so`

機能説明 The `audit_binfile` plugin module for Solaris audit, `/usr/lib/security/audit_binfile.so`, writes binary audit data to files as configured in `auditconfig(1M)`; it is the default plugin for the Solaris audit daemon `auditd(1M)`. Its output is described by `audit.log(4)`.

The `audit_binfile` plugin is loaded by `auditd` if the plugin is configured as an active via `auditconfig`. Use the `auditconfig -setplugin` option to change all the plugin related configuration parameters.

Object Attributes The following attributes specify the configuration of `audit_binfile` plugin:

`p_dir`

`dir1[,dir2],.. [,dirn]`

A list of directories, where the audit files will be created. Any valid writable directory can be specified.

`p_minfree`

A percentage, which indicates the amount of free space required on the target `p_dir`. If free space falls below this threshold, the audit daemon `auditd(1M)` invokes the shell script `audit_warn(1M)`. If no threshold is specified, the default is 1%.

`p_fsize`

The `p_fsize` attribute defines the maximum size that an audit file can become before it is automatically closed and a new audit file is opened. This is equivalent to an administrator issuing an `audit -n`command when the audit file size equals the value specified by the administrator. The default size is zero (`0`), which allows the file to grow without bound. The value specified must be higher than 500KB and lower than 16 exabytes (`EB`). The used file system might further lower the limits. The format of the `p_fsize` value can be specified as an exact value in bytes or in a human-readable form with a suffix of `B, K, M, G, T, P, E, Z` (for bytes, kilobytes, megabytes, gigabytes, terabytes, petabytes, exabytes, or zettabytes, respectively). Suffixes of `KB, MB, GB, TB, PB, EB,` and `ZB` are also accepted.

使用例 The following directives cause `audit_binfile.so` to be loaded, specify the directories for writing audit logs, and specify the percentage of required free space per directory.

```
auditconfig -setplugin audit_binfile active \
    "p_dir=/var/audit/jedgar/eggplant,/var/audit/jedgar.aux/eggplant,
     /var/audit/global/eggplant;p_minfree=20;p_fsize=4.5GB"
```

属性 See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT Level	MT-Safe
Interface Stability	Committed

関連項目

auditconfig(1M), auditd(1M), audit_warn(1M), syslog.conf(4), attributes(5)

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

名前

audit_flags – audit preselection flags

機能説明

Audit flags specify which audit classes are to be audited for a process. Audit classes are defined in the `audit_class(4)` file and group together like audit events as defined in the `audit_event(4)` file. The default Solaris system-wide audit flags are configured as part of the audit service using `auditconfig(1M)`. Additional per-user or per-role audit flags may be configured in the `user_attr(4)` database or in the profiles granted to the user by the *audit_flags=always-audit-flags:never-audit-flags* keyword. The audit flags of a process are called the preselection mask. The preselection mask is set at login and role assumption time by combining the default Solaris system-wide audit flags with the per-user audit flags (default flags + *always-audit-flags*) - *never-audit-flags*.

Audit flags are specified as a character string representing the audit class names to be audited. Each flag identifies an audit class and is separated by a comma (“,”) from others in the string. An audit class name preceded by “-” means that the class should be audited for failure only; successful attempts are not audited. An audit class name preceded by “+” means that the class should be audited for success only; failed attempts are not audited. Without a prefix, the audit class name indicates that the class is to be audited for both successes and failures. The special string “all” indicates that all audit events are to be audited; “-all” indicates that all failed attempts are to be audited and “+all” indicates that all successful attempts are to be audited. The prefixes “^”, “^-” and “^+” turn off flags specified earlier in the string (^- and ^+ for failed and successful attempts respectively, ^ for both). They are typically used to reset flags. The special string “no” indicates no audit events are to be audited.

使用例

例 1　Preselect to audit for successful and failed “lo” (login/logout), “am” (administration) audit events and all failed audit events except for failed “fm” (file attribute modify) events.

```
lo,am,-all,^-fm
```

例 2　Preselect to audit for successful and failed “lo” (login/logout), “as” (system-wide administration) and failed “fm” (file attribute modify) events.

```
lo,as,-fm
```

関連項目

`profiles(1)`, `auditconfig(1M)`, `auditd(1M)`, `usermod(1M)`, `audit_class(4)`, `audit_event(4)`, `prof_attr(4)`, `user_attr(4)`

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

名前 audit_remote – send Solaris audit logs to a remote server

形式 /usr/lib/security/audit_remote.so

機能説明 The audit_remote plugin module for Solaris audit, /usr/lib/security/audit_remote.so, sends binary audit records (audit.log(4)) to audit servers as they are configured with auditconfig(1M).

The audit_remote plugin is loaded by auditd(1M) if the plugin is configured as an active via auditconfig. Use the auditconfig -setplugin option to change all the plugin related configuration parameters.

Object Attributes The following attributes specify the configuration of audit_remote plugin:

p_hosts

host1[:[*port1*][:*mech1*]][,*host2*[:[*port2*][:*mech2*]],... \
hostn[:[*portn*][:*mechn*]]]

A list of audit hosts/servers. Audit records are sent to the first available host. If a host is unreachable or a timeout occurs while sending data, the next host in the list is tried. If connection to all hosts fails, the list is tried again from the beginning.

The *host* part of a p_hosts entry can be in any form acceptable to getipnodebyname(3SOCKET).

The *port* part of a p_hosts entry is the port on host that is contacted to initiate an audit server connection. If not specified, the port number is that assigned to the solaris-audit service. See getservbyname(3XNET).

The mech part of a p_host entry is the GSS-API mechanism name (mech(4)). If not specified, the local host's default mechanism is used. The recommended mechanism is kerberos_v5.

p_retries
The number of retries for connecting to and sending data to a server.

The default value is 3.

p_timeout
The number of seconds in which a connection/sending data timeouts.

The default value is 5 seconds.

qsize
The maximum number of outstanding audit records to keep.

The default is the value of the kernel queue control high water mark. See auditconfig(1M).

If set to 0, the default value is the value of the kernel queue control high water mark. See auditconfig(1M).

GSS SESSION

The audit_remote plugin is a TCP client that authenticates configured audit servers using the GSS-API (libgss(3LIB)). Binary Solaris Audit records are sent with integrity and confidentiality protection as per-message tokens generated by gss_wrap(3GSS).

The plugin initiates a TCP connection to an audit server (*host:port:mech*) and establishes a GSS security context (with gss_init_sec_context(3GSS)), with appropriate security mechanism (mech(4)).

If no port is specified, the service name solaris-audit is looked up to obtain a TCP port number. If no mechanism is specified, the GSS_C_NO_OID is used as a mech_type parameter of gss_init_sec_context(3GSS), and causes the underlying GSS-API to use the local default mechanism.

gss_init_sec_context(3GSS) uses GSS_C_NO_CREDENTIAL as the initiator credential handle and a target name of the form audit@<host_fqdn>. The server is expected to use gss_accept_sec_context(3GSS) to complete the context establishment.

Once the security context is established, the client (audit_remote plugin) calls gss_wrap(3GSS) to achieve the confidentiality of the transferred payload - the audit records. The server is expected to use gss_unwrap(3GSS) to unwrap the received data and gss_get_mic(3GSS) to obtain the MIC (Message Integrity Code) to be later sent back to the plugin as a message retrieval acknowledgment.

For example, if the kerberos_v5 mechanism is configured as GSS_API mechanism on the client and both sides agree on using this mechanism, the client side has to be eligible to non-interactively gain session keys for the audit/<host_fqdn>@<REALM> principal from the Kerberos KDC/TGS. At the same time the identity running the audit server application has to have the long term keys associated with the audit/<host_fqdn>@<REALM> principal stored in the keytab file (krb5.conf(4)) to be able to decrypt the session keys.

The audit_remote plugin initiates a connection to first server in the p_hosts list. If the connection fails or audit record sends are not responded to in p_timeout seconds, after p_retries attempts the plugin tries to connect to the next server. If the connection to the last server fails, the plugin retries to connect to the first host in the list. audit_warn(1M) is executed at every unsuccessful attempt to connect to the server or send timeout with the plugin option plugin audit_remote.so retry <count> <error>.<error> is connection <host:port> <the network error>. An EPROTO network error indicates that the client plugin did not get a successful protocol version handshake.

PROTOCOL DESCRIPTION

All protocol messages are preceded by the 4 octets of the size of the data to follow. This size is in network byte order.

The protocol begins with version negotiation followed by a GSS-API security context token exchange. On error the connection is closed (and any output token optionally sent).

The version negotiation takes place in the clear with the plugin sending an octet array of the comma (,) separated list of versions supported. The current version number is the characters

01. The receiver is expected to respond with the version that they accept (in the current case that is the characters 01). A mismatch is considered an error and the connection is closed.

The version octet array sent by the plugin and the version characters accepted by the receiver are concatenated together to make up the application data field of the channel bindings of the GSS security context establishment.

```
<plugin version characters> || <server accepted version characters>
"||" represents concatenation
```

Subsequent tokens contain a 64 bit sequence number in network byte order and a single audit record (audit.log(4)); the client uses confidentiality protection. wrap (64 bit sequence number || audit record)

The server acknowledges the receipt (and is then responsible for any data loss) with the received 64 bit sequence number and a MIC token of the unwrapped 64 bit sequence number and audit record. MIC verification on the client side acknowledges the audit record can be freed and not saved for possible retransmission.

```
64 bit sequence number || mic (64 bit sequence number || audit record)
```

Secure remote audit client/server communication flow:

```
1) Client <--> Server - TCP handshake

2) Client <--> Server - protocol version negotiation:
   a) Client  --> Server - send data size - uint32_t value (2)
   b) Client  --> Server - send clear text message of the versions
                           supported comma separated, e.g.,
                           "01,02,03" for versions 1 and 2 and 3.
                           The only version supported at present is
                           "01"
   c) Client <--  Server - send data size - uint32_t value (2)
   d) Client <--  Server - send clear text version selected
                           ("01")
   :no version match; close connection; try next host

3) Security context initiation:
   a) Client - Construct channel bindings:
         initiator address type (GSS_C_AF_NULLADDR)
         acceptor address type (GSS_C_AF_NULLADDR)
         application data value (4 octets  "0101")
   b) Client  --> Server - send token (data) size - uint32_t value
   c) Client  --> Server - GSS-API per-context token
   d) Client <--  Server - send token (data) size
   e) Client <--  Server - GSS-API per-context token
      :repeat a-e until security context is initialized; if unsuccessful,
      close connection; try next host
```

```
4) Client - transmit thread, when audit record to be sent:
   a) Client  --> Server - send data size
   b) Client  --> Server - GSS-API per-message token
                  wrap (sequence number || audit record)
      :repeat a-b while less than max (qsize) outstanding records

 5) Client - receive thread:
    a) Client <--  Server - receive data size - uint32_t value
    b) Client <--  Server - receive sequence number - uint64_t value
    c) Client <--  Server - receive MIC
    d) Client             - MIC verification - OK
    e) Client             - remove particular audit record
                            pointed by the sequence number from the
                            retransmit buffer
  :repeat a-e, on error close connection; try next host;
   retransmit unacknowledged audit records

6) Server - receive thread:
    a) Client  --> Server - receive data size
    b) Client  --> Server - GSS-API receive, uwrap, store
                   per-message token

7) Server - transmit thread:
    a) Server - MIC generation - message integrity code
                  mic (sequence number || audit record)
    b) Client <--  Server - send data size
    c) Client < -- Server - send sequence number
    d) Client <--  Server - send MIC
```

使用例

例 1 Loading audit_remote.so and Specifying the Remote Audit Servers

The following directives cause `audit_remote.so` to be loaded and specify the remote audit servers to where the audit records are sent. The `kerberos_v5` security mechanism is defined to be used when communicating with the servers.

```
auditconfig -setplugin audit_remote active \
    "p_timeout=90;p_retries=2;
     p_hosts=eggplant.eng.sun.com::kerberos_v5,
     purple.ebay.sun.com:4592:kerberos_v5"
```

例 2 Using the Configuration of Usage Default Security Mechanism

The following example shows the configuration of usage of default security mechanism. It also shows use of default port on one of the configured servers:

```
auditconfig -setplugin audit_remote active \
    "p_timeout=10;p_retries=2;
     p_hosts=jedger.eng.sun.com, jbadams.ebay.sun.com:4592"
```

属性

See attributes(5) for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT Level	MT-Safe
Interface Stability	See below.

The plugin configuration parameters are Committed. The client/server protocol (version "01") is Contracted Project Private. See audit.log(4) for the audit record format and content stability.

関連項目

auditd(1M), auditconfig(1M), audit_warn(1M), getipnodebyname(3SOCKET), getservbyname(3XNET), gss_accept_sec_context(3GSS), gss_get_mic(3GSS), gss_init_sec_context(3GSS), gss_wrap(3GSS), gss_unwrap(3GSS), libgss(3LIB), libsocket(3LIB), audit.log(4), krb5.conf(4), mech(4), attributes(5), kerberos(5), tcp(7P)

注意事項

audit_remote authenticates itself to the remote audit service by way of GSS-API (libgss(3LIB)). Default gss credentials are used as provided by the gss implementation mechanism, such as Kerberos.

The solaris-audit service port assigned by IANA is 16162.

名前 audit_syslog – realtime conversion of Solaris audit data to syslog messages

形式 `/usr/lib/security/audit_syslog.so`

機能説明 The `audit_syslog` plugin module for Solaris audit, `/usr/lib/security/audit_syslog.so`, provides realtime conversion of Solaris audit data to syslog-formatted (text) data and sends it to a syslog daemon as configured in `syslog.conf(4)`. The plugin's path is specified with the `auditconfig(1M)` utility.

Messages to `syslog` are written if the `plugin` is configured as an active via `auditconfig`. Use the `auditconfig -setplugin` option to change all the plugin related configuration parameters. Syslog messages are generated with the facility code of `LOG_AUDIT` (`audit` in `syslog.conf(4)`) and severity of `LOG_NOTICE`. Audit `syslog` messages contain data selected from the tokens described for the binary audit log. (See `audit.log(4)`). As with all `syslog` messages, each line in a `syslog` file consists of two parts, a `syslog` header and a message.

The syslog header contains the date and time the message was generated, the host name from which it was sent, `auditd` to indicate that it was generated by the audit daemon, an ID field used internally by `syslogd`, and `audit.notice` indicating the `syslog` facility and severity values. The `syslog` header ends with the characters `]`, that is, a closing square bracket and a space.

The message part starts with the event type from the header token. All subsequent data appears only if contained in the original audit record and there is room in the 1024-byte maximum length `syslog` line. In the following example, the backslash (`\`) indicates a continuation; actual `syslog` messages are contained on one line:

```
Oct 31 11:38:08 smothers auditd: [ID 917521 audit.notice] chdir(2) ok\
session 401 by joeuser as root:other from myultra obj /export/home
```

In the preceding example, `chdir(2)` is the event type. Following this field is additional data, described below. This data is omitted if it is not contained in the source audit record.

`ok` or `failed`	Comes from the return or exit token.
`session` <*#*>	<*#*> is the session ID from the subject token.
`by` <*name*>	<*name*> is the audit ID from the subject token.
`as` <*name*>`:`<*group*>	<*name*> is the effective user ID and <*group*> is the effective group ID from the subject token.
`in` <*zone name*>	The zone name. This field is generated only if the `zonename` audit policy is set.
`from` <*terminal*>	<*terminal*> is the text machine address from the subject token.
`obj` <*path*>	<*path*> is the path from the path token The path can be truncated from the left if necessary to fit it on the line. Truncation is indicated by leading ellipsis (`...`).

`proc_uid` <*owner*> <*owner*> is the effective user ID of the process owner.

`proc_auid` <*owner*> <*owner*> is the audit ID of the process owner.

The following are example `syslog` messages:

```
Nov  4  8:27:07 smothers auditd: [ID 175219 audit.notice]
\system booted

Nov  4  9:28:17 smothers auditd: [ID 752191 audit.notice] \
login - rlogin ok session 401 by joeuser as joeuser:staff from myultra

Nov  4 10:29:27 smothers auditd: [ID 521917 audit.notice] \
access(2) ok session 255 by janeuser as janeuser:staff from  \
129.146.89.30 obj /etc/passwd
```

Object Attributes

The `p_flag` attribute is used to further filter audit data being sent to the `syslog` daemon beyond the classes specified through the `flags` and `naflags` (see `auditconfig(1M)`) and through the user-specific lines of `user_attr(4)`. The parameter is a comma-separated list; each item represents an audit class (see `audit_class(4)`) and is specified using the syntax described in `audit_flags(5)`. The default (empty `p_flags` listed) is that no audit records are generated.

使用例

例 1 One Use of the plugin Line

In the specification shown below, the `plugin` (in conjunction with setting `flags` and `naflags`) is used to allow class records for `lo` but allows class records for `am` for failures only. Omission of the `fm` class records results in no `fm` class records being output. The `pc` parameter has no effect because you cannot add classes to those defined by means of `flags` and `naflags` and by `user_attr(4)`. You can only remove them.

```
auditconfig -setflags lo,am,fm
auditconfig -setnaflags lo
auditconfig -setplugin audit_syslog active "p_flags=lo,-am,pc"
```

例 2 Use of all

In the specification shown below, with one exception, `all` allows all flags defined by means of `flags` and `naflags` (and `user_attr(4)`). The exception the `am` metaclass, which is equivalent to `ss,as,ua`, which is modified to output all `ua` events but only failure events for `ss` and `as`.

```
auditconfig -setflags lo,am
auditconfig -setnaflags lo
auditconfig -setplugin audit_syslog active "p_flags=all,^+ss,^+as"
```

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT Level	MT-Safe
Interface Stability	See below.

The message format and message content are Uncommitted. The configuration parameters are Committed.

関連項目

auditconfig(1M), auditd(1M), audit_class(4), syslog.conf(4), user_attr(4), attributes(5), audit_flags(5)

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

注意事項

Activating the audit_syslog plugin requires that /etc/syslog.conf is configured to store syslog messages of facility audit and severity notice or above in a file intended for Solaris audit records. An example of such a line in syslog.conf is:

```
audit.notice                /var/audit/audit.log
```

Messages from syslog are sent to remote syslog servers by means of UDP, which does not guarantee delivery or ensure the correct order of arrival of messages.

If the parameters specified for the plugin line result in no classes being preselected, an error is reported by means of a syslog alert with the LOG_DAEMON facility code.

The time field in the syslog header is generated by syslog(3C) and only approximates the time given in the binary audit log. Normally the time field shows the same whole second or at most a few seconds difference.

名前

brands – 非大域ゾーンのオペレーティング環境の切り替え

機能説明

ブランドゾーン (BrandZ) フレームワークは、zones(5) で説明されている Solaris ゾーンインフラストラクチャーを拡張して、ブランドの作成機能を追加します。ブランドは、ネイティブでないオペレーティング環境を含む非大域ゾーンを提供します。

「ブランド」という用語は、さまざまなオペレーティング環境を指す場合があります。すべてのブランド管理は、現在のゾーン構造の拡張を通して実行されます。

すべてのゾーンに、それぞれ関連するブランドが構成されます。ブランドタイプにより、ゾーンのインストール時および起動時に実行されるスクリプトが決定されます。また、ゾーンのブランドにより、アプリケーションの起動時に正しいアプリケーションタイプが適切に識別されます。デフォルトのブランドは、大域ゾーンにインストールされているディストリビューションによって決まります。

ブランドゾーンは、ネイティブでないバイナリのブランドを 1 つだけサポートします。つまり、1 つのブランドゾーンは 1 つのオペレーティング環境を提供します。ゾーンにブランドを割り当てたあとは、そのブランドの変更や削除を行うことはできません。

BrandZ はゾーンのツールを次のように拡張します。

- ブランドはゾーンの属性であり、ゾーンの作成時に設定されます。
- zonecfg ツール (zonecfg(1M) を参照) を使用して、ゾーンのブランドタイプの設定とゾーンの構成を行います。
- zoneadm ツール (zoneadm(1M) を参照) を使用して、ゾーンのブランドタイプの報告とゾーンの管理を行います。

デバイスのサポート

各ゾーンでサポートされるデバイスについては、そのブランドに関するマニュアルページやほかのドキュメントに記載されています。サポートされていないデバイスを追加しようとすると、ゾーンインフラストラクチャーで検出され、管理者に警告が発行されます。管理者が警告にもかかわらず、サポートされていないデバイスを追加した場合、そのデバイスが期待どおりに機能するかどうかは不明です。その構成はテストもサポートもされません。

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
使用条件	system/zones
インタフェースの安定性	確実

関連項目

mdb(1), zlogin(1), zonename(1), dtrace(1M), in.rlogind(1M), sshd(1M), zoneadm(1M), zonecfg(1M), kill(2), priocntl(2), getzoneid(3C), ucred_get(3C), getzoneid(3C), proc(4), attributes(5), solaris(5), privileges(5), solaris10(5), zones(5), crgetzoneid(9F)

名前

cancellation – overview of concepts related to POSIX thread cancellation

機能説明

FUNCTION	ACTION
`pthread_cancel()`	Cancels thread execution.
`pthread_setcancelstate()`	Sets the cancellation *state* of a thread.
`pthread_setcanceltype()`	Sets the cancellation *type* of a thread.
`pthread_testcancel()`	Creates a cancellation point in the calling thread.
`pthread_cleanup_push()`	Pushes a cleanup handler routine.
`pthread_cleanup_pop()`	Pops a cleanup handler routine.

Cancellation

Thread cancellation allows a thread to terminate the execution of any application thread in the process. Cancellation is useful when further operations of one or more threads are undesirable or unnecessary.

An example of a situation that could benefit from using cancellation is an asynchronously-generated cancel condition such as a user requesting to close or exit some running operation. Another example is the completion of a task undertaken by a number of threads, such as solving a maze. While many threads search for the solution, one of the threads might solve the puzzle while the others continue to operate. Since they are serving no purpose at that point, they should all be canceled.

Planning Steps

Planning and programming for most cancellations follow this pattern:

1. Identify which threads you want to cancel, and insert `pthread_cancel(3C)` statements.
2. Identify system-defined cancellation points where a thread that might be canceled could have changed system or program state that should be restored. See the `Cancellation Points` for a list.
3. When a thread changes the system or program state just before a cancellation point, and should restore that state before the thread is canceled, place a cleanup handler before the cancellation point with `pthread_cleanup_push(3C)`. Wherever a thread restores the changed state, pop the cleanup handler from the cleanup stack with `pthread_cleanup_pop(3C)`.
4. Know whether the threads you are canceling call into cancel-unsafe libraries, and disable cancellation with `pthread_setcancelstate(3C)` before the call into the library. See `Cancellation State` and `Cancel-Safe`.
5. To cancel a thread in a procedure that contains no cancellation points, insert your own cancellation points with `pthread_testcancel(3C)`. This function creates cancellation points by testing for pending cancellations and performing those cancellations if they are found. Push and pop cleanup handlers around the cancellation point, if necessary (see Step 3, above).

Cancellation Points

The system defines certain points at which cancellation can occur (cancellation points), and you can create additional cancellation points in your application with `pthread_testcancel()`.

The following cancellation points are defined by the system (system-defined cancellation points): `creat(2)`, `aio_suspend(3C)`, `close(2)`, `creat(2)`, `getmsg(2)`, `getpmsg(2)`, `lockf(3C)`, `mq_receive(3C)`, `mq_send(3C)`, `msgrcv(2)`, `msgsnd(2)`, `msync(3C)`, `nanosleep(3C)`, `open(2)`, `pause(2)`, `poll(2)`, `pread(2)`, `pthread_cond_timedwait(3C)`, `pthread_cond_wait(3C)`, `pthread_join(3C)`, `pthread_testcancel(3C)`, `putmsg(2)`, `putpmsg(2)`, `pwrite(2)`, `read(2)`, `readv(2)`, `select(3C)`, `sem_wait(3C)`, `sigpause(3C)`, `sigwaitinfo(3C)`, `sigsuspend(2)`, `sigtimedwait(3C)`, `sigwait(2)`, `sleep(3C)`, `sync(2)`, `system(3C)`, `tcdrain(3C)`, `usleep(3C)`, `wait(3C)`, `waitid(2)`, `wait3(3C)`, `waitpid(3C)`, `write(2)`, `writev(2)`, and `fcntl(2)`, when specifying `F_SETLKW` as the command.

When cancellation is asynchronous, cancellation can occur at any time (before, during, or after the execution of the function defined as the cancellation point). When cancellation is deferred (the default case), cancellation occurs only within the scope of a function defined as a cancellation point (after the function is called and before the function returns). See `Cancellation Type` for more information about deferred and asynchronous cancellation.

Choosing where to place cancellation points and understanding how cancellation affects your program depend upon your understanding of both your application and of cancellation mechanics.

Typically, any call that might require a long wait should be a cancellation point. Operations need to check for pending cancellation requests when the operation is about to block indefinitely. This includes threads waiting in `pthread_cond_wait()` and `pthread_cond_timedwait()`, threads waiting for the termination of another thread in `pthread_join()`, and threads blocked on `sigwait()`.

A mutex is explicitly not a cancellation point and should be held for only the minimal essential time.

Most of the dangers in performing cancellations deal with properly restoring invariants and freeing shared resources. For example, a carelessly canceled thread might leave a mutex in a locked state, leading to a deadlock. Or it might leave a region of memory allocated with no way to identify it and therefore no way to free it.

Cleanup Handlers

When a thread is canceled, it should release resources and clean up the state that is shared with other threads. So, whenever a thread that might be canceled changes the state of the system or of the program, be sure to push a cleanup handler with `pthread_cleanup_push(3C)` before the cancellation point.

When a thread is canceled, all the currently-stacked cleanup handlers are executed in last-in-first-out (LIFO) order. Each handler is run in the scope in which it was pushed. When the last cleanup handler returns, the thread-specific data destructor functions are called. Thread execution terminates when the last destructor function returns.

When, in the normal course of the program, an uncanceled thread restores state that it had previously changed, be sure to pop the cleanup handler (that you had set up where the change took place) using `pthread_cleanup_pop(3C)`. That way, if the thread is canceled later, only currently-changed state will be restored by the handlers that are left in the stack.

The `pthread_cleanup_push()` and `pthread_cleanup_pop()` functions can be implemented as macros. The application must ensure that they appear as statements, and in pairs within the same lexical scope (that is, the `pthread_cleanup_push()` macro can be thought to expand to a token list whose first token is '{' with `pthread_cleanup_pop()` expanding to a token list whose last token is the corresponding '}').

The effect of the use of `return`, `break`, `continue`, and `goto` to prematurely leave a code block described by a pair of `pthread_cleanup_push()` and `pthread_cleanup_pop()` function calls is undefined.

Cancellation State

Most programmers will use only the default cancellation state of `PTHREAD_CANCEL_ENABLE`, but can choose to change the state by using `pthread_setcancelstate(3C)`, which determines whether a thread is cancelable at all. With the default *state* of `PTHREAD_CANCEL_ENABLE`, cancellation is enabled and the thread is cancelable at points determined by its cancellation *type*. See `Cancellation Type`.

If the *state* is `PTHREAD_CANCEL_DISABLE`, cancellation is disabled, the thread is not cancelable at any point, and all cancellation requests to it are held pending.

You might want to disable cancellation before a call to a cancel-unsafe library, restoring the old cancel state when the call returns from the library. See `Cancel-Safe` for explanations of cancel safety.

Cancellation Type

A thread's cancellation `type` is set with `pthread_setcanceltype(3C)`, and determines whether the thread can be canceled anywhere in its execution or only at cancellation points.

With the default *type* of `PTHREAD_CANCEL_DEFERRED`, the thread is cancelable only at cancellation points, and then only when cancellation is enabled.

If the *type* is `PTHREAD_CANCEL_ASYNCHRONOUS`, the thread is cancelable at any point in its execution (assuming, of course, that cancellation is enabled). Try to limit regions of asynchronous cancellation to sequences with no external dependencies that could result in dangling resources or unresolved state conditions. Using asynchronous cancellation is discouraged because of the danger involved in trying to guarantee correct cleanup handling at absolutely every point in the program.

Cancellation Type/State Table

Type	State	
	Enabled (Default)	Disabled

Cancellation Type/State Table		
Deferred (Default)	Cancellation occurs when the target thread reaches a cancellation point and a cancel is pending. (Default)	All cancellation requests to the target thread are held pending.
Asynchronous	Receipt of a `pthread_cancel()` call causes immediate cancellation.	All cancellation requests to the target thread are held pending; as soon as cancellation is re-enabled, pending cancellations are executedimmediately.

Cancel-Safe

With the arrival of POSIX cancellation, the Cancel-Safe level has been added to the list of MT-Safety levels. See attributes(5). An application or library is Cancel-Safe whenever it has arranged for cleanup handlers to restore system or program state wherever cancellation can occur. The application or library is specifically Deferred-Cancel-Safe when it is Cancel-Safe for threads whose cancellation type is `PTHREAD_CANCEL_DEFERRED`. See `Cancellation State`. It is specifically Asynchronous-Cancel-Safe when it is Cancel-Safe for threads whose cancellation type is `PTHREAD_CANCEL_ASYNCHRONOUS`.

It is easier to arrange for deferred cancel safety, as this requires system and program state protection only around cancellation points. In general, expect that most applications and libraries are not Asynchronous-Cancel-Safe.

POSIX Threads Only

The cancellation functions described in this manual page are available for POSIX threads, only (the Solaris threads interfaces do not provide cancellation functions).

使用例

例 1 Cancellation example

The following short C++ example shows the pushing/popping of cancellation handlers, the disabling/enabling of cancellation, the use of `pthread_testcancel()`, and so on. The `free_res()` cancellation handler in this example is a dummy function that simply prints a message, but that would free resources in a real application. The function `f2()` is called from the main thread, and goes deep into its call stack by calling itself recursively.

Before `f2()` starts running, the newly created thread has probably posted a cancellation on the main thread since the main thread calls `thr_yield()` right after creating thread2. Because cancellation was initially disabled in the main thread, through a call to `pthread_setcancelstate()`, the call to `f2()` from `main()` continues and constructs X at each recursive call, even though the main thread has a pending cancellation.

When `f2()` is called for the fifty-first time (when "`i == 50`"), `f2()` enables cancellation by calling `pthread_setcancelstate()`. It then establishes a cancellation point for itself by calling `pthread_testcancel()`. (Because a cancellation is pending, a call to a cancellation point such as read(2) or write(2) would also cancel the caller here.)

例 1 Cancellation example *(続き)*

After the `main()` thread is canceled at the fifty-first iteration, all the cleanup handlers that were pushed are called in sequence; this is indicated by the calls to `free_res()` and the calls to the destructor for *X*. At each level, the C++ runtime calls the destructor for *X* and then the cancellation handler, `free_res()`. The print messages from `free_res()` and *X*'s destructor show the sequence of calls.

At the end, the main thread is joined by thread2. Because the main thread was canceled, its return status from `pthread_join()` is `PTHREAD_CANCELED`. After the status is printed, thread2 returns, killing the process (since it is the last thread in the process).

```
#include <pthread.h>
#include <sched.h>
extern "C" void thr_yield(void);

extern "C" void printf(...);

struct X {
        int x;
        X(int i){x = i; printf("X(%d) constructed.\n", i);}
        ~X(){ printf("X(%d) destroyed.\n", x);}
};

void
free_res(void *i)
{
        printf("Freeing ‘%d‘\n",i);
}

char* f2(int i)
{
        try {
        X dummy(i);
        pthread_cleanup_push(free_res, (void *)i);
        if (i == 50) {
               pthread_setcancelstate(PTHREAD_CANCEL_ENABLE, NULL);
            pthread_testcancel();
        }
        f2(i+1);
        pthread_cleanup_pop(0);
        }
        catch (int) {
        printf("Error: In handler.\n");
        }
        return "f2";
}
```

例 1 Cancellation example (続き)

```
void *
thread2(void *tid)
{
        void *sts;

        printf("I am new thread :%d\n", pthread_self());

        pthread_cancel((pthread_t)tid);

        pthread_join((pthread_t)tid, &sts);

        printf("main thread cancelled due to %d\n", sts);

        return (sts);
}

main()
{
        pthread_setcancelstate(PTHREAD_CANCEL_DISABLE, NULL);
        pthread_create(NULL, NULL, thread2, (void *)pthread_self());
        thr_yield();
        printf("Returned from %s\n",f2(0));
}
```

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	MT-Safe

関連項目

read(2), sigwait(2), write(2), Intro(3), condition(5), pthread_cleanup_pop(3C), pthread_cleanup_push(3C), pthread_exit(3C), pthread_join(3C), pthread_setcancelstate(3C), pthread_setcanceltype(3C), pthread_testcancel(3C), setjmp(3C), attributes(5), standards(5)

名前

charmap – character set description file

機能説明

A character set description file or *charmap* defines characteristics for a coded character set. Other information about the coded character set may also be in the file. Coded character set character values are defined using symbolic character names followed by character encoding values.

The character set description file provides:

- The capability to describe character set attributes (such as collation order or character classes) independent of character set encoding, and using only the characters in the portable character set. This makes it possible to create generic `localedef(1)` source files for all codesets that share the portable character set.
- Standardized symbolic names for all characters in the portable character set, making it possible to refer to any such character regardless of encoding.

Symbolic Names

Each symbolic name is included in the file and is mapped to a unique encoding value (except for those symbolic names that are shown with identical glyphs). If the control characters commonly associated with the symbolic names in the following table are supported by the implementation, the symbolic names and their corresponding encoding values are included in the file. Some of the encodings associated with the symbolic names in this table may be the same as characters in the portable character set table.

<ACK>	<DC2>	<ENQ>	<FS>	<IS4>	<SOH>
<BEL>	<DC3>	<EOT>	<GS>	<LF>	<STX>
<BS>	<DC4>	<ESC>	<HT>	<NAK>	<SUB>
<CAN>	<DEL>	<ETB>	<IS1>	<RS>	<SYN>
<CR>	<DLE>	<ETX>	<IS2>	<SI>	<US>
<DC1>	<EM>	<FF>	<IS3>	<SO>	<VT>

Declarations

The following declarations can precede the character definitions. Each must consist of the symbol shown in the following list, starting in column 1, including the surrounding brackets, followed by one or more blank characters, followed by the value to be assigned to the symbol.

<code_set_name> The name of the coded character set for which the character set description file is defined.

<mb_cur_max> The maximum number of bytes in a multi-byte character. This defaults to 1.

<mb_cur_min> An unsigned positive integer value that defines the minimum number of bytes in a character for the encoded character set.

<*escape_char*> The escape character used to indicate that the characters following will be interpreted in a special way, as defined later in this section. This defaults to backslash ('\'), which is the character glyph used in all the following text and examples, unless otherwise noted.

<*comment_char*> The character that when placed in column 1 of a charmap line, is used to indicate that the line is to be ignored. The default character is the number sign (#).

Format

The character set mapping definitions will be all the lines immediately following an identifier line containing the string `CHARMAP` starting in column 1, and preceding a trailer line containing the string `END CHARMAP` starting in column 1. Empty lines and lines containing a <*comment_char*> in the first column will be ignored. Each non-comment line of the character set mapping definition, that is, between the `CHARMAP` and `END CHARMAP` lines of the file), must be in either of two forms:

"`%s %s %s\n`",<*symbolic-name*>,<*encoding*>,<*comments*>

or

"`%s...%s %s %s\n`",<*symbolic-name*>,<*symbolic-name*>, <*encoding*>,\
<*comments*>

In the first format, the line in the character set mapping definition defines a single symbolic name and a corresponding encoding. A character following an escape character is interpreted as itself; for example, the sequence "<\\\>>" represents the symbolic name "\>" enclosed between angle brackets.

In the second format, the line in the character set mapping definition defines a range of one or more symbolic names. In this form, the symbolic names must consist of zero or more non-numeric characters, followed by an integer formed by one or more decimal digits. The characters preceding the integer must be identical in the two symbolic names, and the integer formed by the digits in the second symbolic name must be equal to or greater than the integer formed by the digits in the first name. This is interpreted as a series of symbolic names formed from the common part and each of the integers between the first and the second integer, inclusive. As an example, `<j0101>...<j0104>` is interpreted as the symbolic names `<j0101>`, `<j0102>`, `<j0103>`, and `<j0104>`, in that order.

A character set mapping definition line must exist for all symbolic names and must define the coded character value that corresponds to the character glyph indicated in the table, or the coded character value that corresponds with the control character symbolic name. If the control characters commonly associated with the symbolic names are supported by the implementation, the symbolic name and the corresponding encoding value must be included in the file. Additional unique symbolic names may be included. A coded character value can be represented by more than one symbolic name.

The encoding part is expressed as one (for single-byte character values) or more concatenated decimal, octal or hexadecimal constants in the following formats:

"%cd%d",<*escape_char*>,<*decimal byte value*>

"%cx%x",<*escape_char*>,<*hexadecimal byte value*>

"%c%o",<*escape_char*>,<*octal byte value*>

Decimal Constants

Decimal constants must be represented by two or three decimal digits, preceded by the escape character and the lower-case letter d; for example, \d05, \d97, or \d143. Hexadecimal constants must be represented by two hexadecimal digits, preceded by the escape character and the lower-case letter x; for example, \x05, \x61, or \x8f. Octal constants must be represented by two or three octal digits, preceded by the escape character; for example, \05, \141, or \217. In a portable charmap file, each constant must represent an 8-bit byte. Implementations supporting other byte sizes may allow constants to represent values larger than those that can be represented in 8-bit bytes, and to allow additional digits in constants. When constants are concatenated for multi-byte character values, they must be of the same type, and interpreted in byte order from first to last with the least significant byte of the multi-byte character specified by the last constant.

Ranges of Symbolic Names

In lines defining ranges of symbolic names, the encoded value is the value for the first symbolic name in the range (the symbolic name preceding the ellipsis). Subsequent symbolic names defined by the range will have encoding values in increasing order. Bytes are treated as unsigned octets and carry is propagated between the bytes as necessary to represent the range. However, because this causes a null byte in the second or subsequent bytes of a character, such a declaration should not be specified. For example, the line

```
<j0101>...<j0104>     \d129\d254
```

is interpreted as:

```
<j0101>                \d129\d254
<j0102>                \d129\d255
<j0103>                \d130\d00
<j0104>                \d130\d01
```

The expanded declaration of the symbol <j0103> in the above example is an invalid specification, because it contains a null byte in the second byte of a character.

The comment is optional.

Width Specification

The following declarations can follow the character set mapping definitions (after the "END CHARMAP" statement). Each consists of the keyword shown in the following list, starting in column 1, followed by the value(s) to be associated to the keyword, as defined below.

WIDTH A non-negative integer value defining the column width for the printable character in the coded character set mapping definitions. Coded

character set character values are defined using symbolic character names followed by column width values. Defining a character with more than one WIDTH produces undefined results. The END WIDTH keyword is used to terminate the WIDTH definitions. Specifying the width of a non-printable character in a WIDTH declaration produces undefined results.

WIDTH_DEFAULT — A non-negative integer value defining the default column width for any printable character not listed by one of the WIDTH keywords. If no WIDTH_DEFAULT keyword is included in the charmap, the default character width is 1.

Example:

After the "END CHARMAP" statement, a syntax for a width definition would be:

```
WIDTH
<A>             1
<B>             1
<C>...<Z>       1
...
<fool>...<foon> 2
...
END WIDTH
```

In this example, the numerical code point values represented by the symbols <A> and <B> are assigned a width of 1. The code point values < C> to <Z> inclusive, that is, <C>, <D>, <E>, and so on, are also assigned a width of 1. Using <A>. . .<Z> would have required fewer lines, but the alternative was shown to demonstrate flexibility. The keyword WIDTH_DEFAULT could have been added as appropriate.

関連項目 — locale(1), localedef(1), nl_langinfo(3C), extensions(5), locale(5)

名前

condition – concepts related to condition variables

機能説明

Occasionally, a thread running within a mutex needs to wait for an event, in which case it blocks or sleeps. When a thread is waiting for another thread to communicate its disposition, it uses a condition variable in conjunction with a mutex. Although a mutex is exclusive and the code it protects is sharable (at certain moments), condition variables enable the synchronization of differing events that share a mutex, but not necessarily data. Several condition variables may be used by threads to signal each other when a task is complete, which then allows the next waiting thread to take ownership of the mutex.

A condition variable enables threads to atomically block and test the condition under the protection of a mutual exclusion lock (mutex) until the condition is satisfied. If the condition is false, a thread blocks on a condition variable and atomically releases the mutex that is waiting for the condition to change. If another thread changes the condition, it may wake up waiting threads by signaling the associated condition variable. The waiting threads, upon awakening, reacquire the mutex and re-evaluate the condition.

Initialize

Condition variables and mutexes should be global. Condition variables that are allocated in writable memory can synchronize threads among processes if they are shared by the cooperating processes (see `mmap(2)`) and are initialized for this purpose.

The scope of a condition variable is either intra-process or inter-process. This is dependent upon whether the argument is passed implicitly or explicitly to the initialization of that condition variable. A condition variable does not need to be explicitly initialized. A condition variable is initialized with all zeros, by default, and its scope is set to within the calling process. For inter-process synchronization, a condition variable must be initialized once, and only once, before use.

A condition variable must not be simultaneously initialized by multiple threads or re-initialized while in use by other threads.

Condition variables attributes may be set to the default or customized at initialization. POSIX threads even allow the default values to be customized. Establishing these attributes varies depending upon whether POSIX or Solaris threads are used. Similar to the distinctions between POSIX and Solaris thread creation, POSIX condition variables implement the default, intra-process, unless an attribute object is modified for inter-process prior to the initialization of the condition variable. Solaris condition variables also implement as the default, intra-process; however, they set this attribute according to the argument, *type*, passed to their initialization function.

Condition Wait

The condition wait interface allows a thread to wait for a condition and atomically release the associated mutex that it needs to hold to check the condition. The thread waits for another thread to make the condition true and that thread's resulting call to signal and wakeup the waiting thread.

Condition Signaling

A condition signal allows a thread to unblock the next thread waiting on the condition variable, whereas, a condition broadcast allows a thread to unblock all threads waiting on the condition variable.

Destroy

The condition destroy functions destroy any state, but not the space, associated with the condition variable.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	MT-Safe

関連項目

fork(2), mmap(2), setitimer(2), shmop(2), cond_broadcast(3C), cond_destroy(3C), cond_init(3C), cond_signal(3C), cond_timedwait(3C), cond_wait(3C), pthread_cond_broadcast(3C), pthread_cond_destroy(3C), pthread_cond_init(3C), pthread_cond_signal(3C), pthread_cond_timedwait(3C), pthread_cond_wait(3C), pthread_condattr_init(3C), signal(3C), attributes(5), mutex(5), standards(5)

注意事項

If more than one thread is blocked on a condition variable, the order in which threads are unblocked is determined by the scheduling policy.

USYNC_THREAD does not support multiple mapplings to the same logical synch object. If you need to mmap() a synch object to different locations within the same address space, then the synch object should be initialized as a shared object USYNC_PROCESS for Solaris, and PTHREAD_PROCESS_PRIVATE for POSIX.

名前

crypt_bsdbf – password hashing module using Blowfish cryptographic algorithm

形式

```
/usr/lib/security/$ISA/crypt_bsdbf.so
```

機能説明

The `crypt_bsdbf` module is a one-way password hashing module for use with `crypt(3C)` that uses the Blowfish cryptographic algorithm. The algorithm identifier for `crypt.conf(4)` and `policy.conf(4)` is `2a`.

The maximum password length for `crypt_bsdbf` is 72 characters.

The default number of rounds is `log(4)`. This can be increased by updating `/etc/security/crypt.conf`, for example, for `log(12)` rounds:

```
2a crypt_bsdbf.so.1    12
```

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	Safe

関連項目

`passwd(1)`, `crypt(3C)`, `crypt_genhash_impl(3C)`, `crypt_gensalt(3C)`, `crypt_gensalt_impl(3C)`, `getpassphrase(3C)`, `crypt.conf(4)`, `passwd(4)`, `policy.conf(4)`, `attributes(5)`

名前

crypt_bsdmd5 – password hashing module using MD5 message hash algorithm

形式

`/usr/lib/security/$ISA/crypt_bsdmd5.so`

機能説明

The `crypt_bsdmd5` module is a one-way password hashing module for use with `crypt(3C)` that uses the MD5 message hash algorithm. The algorithm identifier for `crypt.conf(4)` and `policy.conf(4)` is `1`. The output is compatible with `md5crypt` on BSD and Linux systems.

The maximum password length for `crypt_bsdmd5` is 255 characters.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	Safe

関連項目

`passwd(1)`, `crypt(3C)`, `crypt_genhash_impl(3C)`, `crypt_gensalt(3C)`, `crypt_gensalt_impl(3C)`, `getpassphrase(3C)`, `crypt.conf(4)`, `passwd(4)`, `policy.conf(4)`, `attributes(5)`

名前

crypt_sha256 – password hashing module using SHA–256 message hash algorithm

形式

`/usr/lib/security/$ISA/crypt_sha256.so`

機能説明

The `crypt_sha256` module is a one-way password hashing module for use with `crypt(3C)` that uses the SHA–256 message hash algorithm. The algorithm identifier for `crypt.conf(4)` and `policy.conf(4)` is 5.

This module is designed to make it difficult to crack passwords that use brute force attacks based on high speed SHA–256 implementations that use code inlining, unrolled loops, and table lookup.

The maximum password length for `crypt_sha256` is 255 characters.

The following options can be passed to the module by means of `crypt.conf(4)`:

`rounds=`<*positive_number*>
: Specifies the number of rounds of SHA-256 to use in generation of the salt; the default number of rounds is 5000. Negative values have no effect and are ignored. The minimum number of rounds cannot be below 1000.

  The number of additional rounds is stored in the salt string returned by `crypt_gensalt(3C)`. For example:

  ```
  $5,rounds=6000$nlxmTTpz$
  ```

  When `crypt_gensalt(3C)` is being used to generate a new salt, if the number of additional rounds configured in `crypt.conf(4)` is greater than that in the old salt, the value from `crypt.conf(4)` is used instead. This allows for migration to stronger (but more time-consuming) salts on password change.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT-Level	Safe

関連項目

`passwd(1)`, `crypt(3C)`, `crypt_genhash_impl(3C)`, `crypt_gensalt(3C)`, `crypt_gensalt_impl(3C)`, `getpassphrase(3C)`, `crypt.conf(4)`, `passwd(4)`, `policy.conf(4)`, `attributes(5)`

名前

crypt_sha512 – password hashing module using SHA–512 message hash algorithm

形式

`/usr/lib/security/$ISA/crypt_sha512.so`

機能説明

The `crypt_sha512` module is a one-way password hashing module for use with `crypt(3C)` that uses the SHA–512 message hash algorithm. The algorithm identifier for `crypt.conf(4)` and `policy.conf(4)` is 6.

This module is designed to make it difficult to crack passwords that use brute force attacks based on high speed SHA–512 implementations that use code inlining, unrolled loops, and table lookup.

The maximum password length for `crypt_sha512` is 255 characters.

The following options can be passed to the module by means of `crypt.conf(4)`:

`rounds=`<*positive_number*>
Specifies the number of rounds of SHA-512 to use in generation of the salt; the default number of rounds is 5000. Negative values have no effect and are ignored. The minimum number of rounds cannot be below 1000.

The number of additional rounds is stored in the salt string returned by `crypt_gensalt(3C)`. For example:

```
$6,rounds=6000$nlxmTTpz$
```

When `crypt_gensalt(3C)` is being used to generate a new salt, if the number of additional rounds configured in `crypt.conf(4)` is greater than that in the old salt, the value from `crypt.conf(4)` is used instead. This allows for migration to stronger (but more time-consuming) salts on password change.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT-Level	Safe

関連項目

`passwd(1)`, `crypt(3C)`, `crypt_genhash_impl(3C)`, `crypt_gensalt(3C)`, `crypt_gensalt_impl(3C)`, `getpassphrase(3C)`, `crypt.conf(4)`, `passwd(4)`, `policy.conf(4)`, `attributes(5)`

名前

crypt_sunmd5 – password hashing module using MD5 message hash algorithm

形式

`/usr/lib/security/$ISA/crypt_sunmd5.so`

機能説明

The `crypt_sunmd5` module is a one-way password hashing module for use with `crypt(3C)` that uses the MD5 message hash algorithm. The algorithm identifier for `crypt.conf(4)` and `policy.conf(4)` is `md5`.

This module is designed to make it difficult to crack passwords that use brute force attacks based on high speed MD5 implementations that use code inlining, unrolled loops, and table lookup.

The maximum password length for `crypt_sunmd5` is 255 characters.

The following options can be passed to the module by means of `crypt.conf(4)`:

`rounds=`<*positive_number*>

Specifies the number of additional rounds of MD5 to use in generation of the salt; the default number of rounds is 4096. Negative values have no effect and are ignored, that is, the number of rounds cannot be lowered below 4096.

The number of additional rounds is stored in the salt string returned by `crypt_gensalt(3C)`. For example:

```
$md5,rounds=1000$nlxmTTpz$
```

When `crypt_gensalt(3C)` is being used to generate a new salt, if the number of additional rounds configured in `crypt.conf(4)` is greater than that in the old salt, the value from `crypt.conf(4)` is used instead. This allows for migration to stronger (but more time-consuming) salts on password change.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	Safe

関連項目

`passwd(1)`, `crypt(3C)`, `crypt_genhash_impl(3C)`, `crypt_gensalt(3C)`, `crypt_gensalt_impl(3C)`, `getpassphrase(3C)`, `crypt.conf(4)`, `passwd(4)`, `policy.conf(4)`, `attributes(5)`

名前

crypt_unix – traditional UNIX crypt algorithm

機能説明

The crypt_unix algorithm is the traditional UNIX crypt algorithm. It is not considered sufficiently secure for current systems and is provided for backwards compatibility. The crypt_sunmd5(5), crypt_bsdmd5(5), or crypt_bsdbf(5) algorithm should be used instead.

The algorithm identifier for policy.conf(4) is __unix__. There is no entry in crypt.conf(4) for this algorithm.

The crypt_unix algorithm is internal to libc and provides the string encoding function used by crypt(3C) when the first character of the salt is not a "$".

This algorithm is based on a one-way encryption algorithm with variations intended (among other things) to frustrate use of hardware implementations of a key search. Only the first eight characters of the key passed to crypt() are used with this algorithm; the rest are silently ignored. The salt is a two-character string chosen from the set [a-zA-Z0-9./]. This string is used to perturb the hashing algorithm in one of 4096 different ways.

The maximum password length for crypt_unix is 8 characters.

使用法

The return value of the crypt_unix algorithm might not be portable among standard-conforming systems. See standards(5).

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	Safe

関連項目

passwd(1), crypt(3C), crypt_genhash_impl(3C), crypt_gensalt(3C), crypt_gensalt_impl(3C), getpassphrase(3C), crypt.conf(4), passwd(4), policy.conf(4), attributes(5), crypt_bsdbf(5), crypt_bsdmd5(5), crypt_sunmd5(5), standards(5)

名前

device_clean – device clean programs

機能説明

Each allocatable device has a device clean program associated with it. Device clean programs are invoked by `deallocate(1)` to clean device states, registers, and any residual information in the device before the device is allocated to a user. Such cleaning is required by the object reuse policy.

Use `list_devices(1)` to obtain the names and types of allocatable devices as well as the cleaning program and the authorizations that are associated with each device.

On a system configured with Trusted Extensions, device clean programs are also invoked by `allocate(1)`, in which case the program can optionally mount appropriate media for the caller.

The following device clean programs reside in `/etc/security/lib`.

`audio_clean`	audio devices
`st_clean`	tape devices
`sr_clean`	CD-ROM devices

On a system configured with Trusted Extensions, the following additional cleaning programs and wrappers are available.

`disk_clean`	CD-ROM and other removable media devices. This program mounts the device during the execution of `allocate`, if required.
`audio_clean_wrapper`	wrapper to make audio_clean work with CDE
`wdwwrapper`	wrapper to make other cleaning programs work with CDE
`wdwmsg`	CDE dialog boxes for cleaning programs

Administrators can create device clean programs for their sites. These programs must adhere to the syntax described below.

`/etc/security/lib/`*device-clean-program* `[–i | –f | –s | –I] \`
`–m` *mode* `–u` *user-name* `–z` *zone-name* `–p` *zone-path* *device-name*

where:

device-name	The name of the device that is to be cleaned. Use `list_devices` to obtain the list of allocatable devices.
`-i`	Invoke boot-time initialization.
`-f`	Force cleanup by the administrator.
`-s`	Invoke standard cleanup by the user.
`-I`	Same as `-i`, with no error or warning.

The following options are supported only when the system is configured with Trusted Extensions.

`-m` *mode* Specify the mode in which the clean program is invoked. Valid values are allo- cate and deallocate. The default mode is allocate.

`-u` *user-name* Specify the name of user who executes the device clean program. The default user is the caller.

`-z` *zone-name* Specify the name of the zone in which the device is to be allocated or deallocated. The default zone is the global zone.

`-p` *zone-path* Establish the root path of the zone that is specified by *zone-name*. Default is "/".

終了ステータス

The following exit values are returned:

`0`
Successful completion.

`1`
An error. Caller can place device in error state.

`2`
A system error. Caller can place device in error state.

On a system configured with Trusted Extensions, the following additional exit values are returned:

`3`
Mounting of device failed. Caller shall not place device in error state.

`4`
Mounting of device succeeded.

ファイル

`/etc/security/lib/*` device clean programs

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	system/core-os
Interface Stability	See below.

The Invocation is Uncommitted. The Output is Not-an-interface.

関連項目

`allocate(1)`, `deallocate(1)`, `list_devices(1)`, `attributes(5)`

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

名前

dhcp – Dynamic Host Configuration Protocol

機能説明

Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) enables host systems in a TCP/IP network to be configured automatically for the network as they boot. DHCP uses a client/server mechanism: servers store configuration information for clients, and provide that information upon a client's request. The information can include the client's IP address and information about network services available to the client.

This manual page provides a brief summary of the Oracle Solaris DHCP implementation.

Oracle Solaris DHCP Client

The Oracle Solaris DHCP client is implemented as background daemon, `dhcpagent(1M)`.

For IPv4, this daemon is started automatically during bootup if there exists at least one `dhcp.`*interface* file in `/etc`. Only interfaces with a corresponding `/etc/dhcp.`*interface* file are automatically configured during boot.

For IPv6, this daemon is started automatically when commanded by `in.ndpd` (based on IPv6 Routing Advertisement messages). No `/etc/dhcp.`*interface* file is necessary, but such a file can be used to specify an interface as “primary,” provided that IPv4 DHCP is also in use.

Network parameters needed for system configuration during bootup are extracted from the information received by the daemon through the use of the `dhcpinfo(1)` command. The daemon's default behavior can be altered by changing the tunables in the `/etc/default/dhcpagent` file. The daemon is controlled by the `ifconfig(1M)` utility. Check the status of the daemon using the `netstat(1M)` and `ifconfig(1M)` commands.

Oracle Solaris DHCP Server

The Oracle Solaris DHCP server is implemented as a background daemon, `in.dhcpd(1M)`. This daemon can deliver network configuration information to either `BOOTP` or DHCP clients. The Oracle Solaris DHCP service can be managed using the `dhcpmgr(1M)` GUI or the command line utilities `dhcpconfig(1M)`, `dhtadm(1M)`, and `pntadm(1M)`.

The Oracle Solaris DHCP server is obsolete. Use the ISC DHCP server instead. See `usr/share/man/man5/isc-dhcp.5`

DHCP Configuration Tables

The Oracle Solaris DHCP server stores client configuration information in the following two types of tables:

`dhcptab` tables	Contain macros and options (also known as symbols), used to construct a package of configuration information to send to each DHCP client. There exists only one `dhcptab` for the DHCP service. The `dhcptab(4)` can be viewed and modified using the `dhtadm(1M)` command or `dhcpmgr(1M)` graphical utility. See `dhcptab(4)` for more information about the syntax of `dhcptab` records. See `dhcp_inittab(4)` for more information about the DHCP options and symbols.
DHCP network tables	DHCP network tables, which contain mappings of client IDs to IP addresses and parameters associated with those addresses. Network tables are named with the IP address of the network, and can be

created, viewed, and modified using the `pntadm` command or `dhcpmgr` graphical utility. See `dhcp_network(4)` for more information about network tables.

関連項目

`dhcpinfo(1)`, `dhcpagent(1M)`, `dhcpconfig(1M)`, `dhcpmgr(1M)`, `dhtadm(1M)`, `ifconfig(1M)`, `in.dhcpd(1M)`, `in.ndpd(1M)`, `netstat(1M)`, `pntadm(1M)`, `syslog(3C)`, `dhcp_network(4)`, `dhcptab(4)`, `dhcpsvc.conf(4)`, `dhcp_inittab(4)`, `ndpd.conf(4)`, `dhcp_modules(5)`

`usr/share/man/man5/isc-dhcp.5`

『Oracle Solaris DHCP Service Developer's Guide』

Alexander, S., and R. Droms. RFC 2132, DHCP Options and BOOTP Vendor Extensions. Silicon Graphics, Inc. Bucknell University. March 1997.

Droms, R. RFC 1534, Interoperation Between DHCP and BOOTP. Bucknell University. October 1993.

Droms, R. RFC 2131, Dynamic Host Configuration Protocol. Bucknell University. March 1997.

Wimer, W. RFC 1542, Clarifications and Extensions for the Bootstrap Protocol. Carnegie Mellon University. October 1993.

Lemon, T. and B. Sommerfeld. RFC 4361, Node-specific Client Identifiers for Dynamic Host Configuration Protocol Version Four (DHCPv4). Nominum and Sun Microsystems. February 2006.

Droms, R. RFC 3315, Dynamic Host Configuration Protocol for IPv6 (DHCPv6). Cisco Systems. July 2003.

名前

dhcp_modules – data storage modules for the DHCP service

機能説明

This man page describes the characteristics of data storage modules (public modules) for use by the Solaris Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) service.

Public modules are the part of the DHCP service architecture that encapsulate the details of storing DHCP service data in a data storage service. Examples of data storage services are Oracle and `ufs` file systems.

Public modules are dynamic objects which can be shipped separately from the Solaris DHCP service. Once installed, a public module is visible to the DHCP service, and can be selected for use by the service through the DHCP service management interfaces (`dhcpmgr(1M)`, `dhcpconfig(1M)`, `dhtadm(1M)`, and `pntadm(1M)`).

Public modules may be provided by Sun Microsystems, Inc or by third parties.

The Solaris DHCP service management architecture provides a mechanism for plugging in public module-specific administration functionality into the `dhcpmgr`(1M) and `dhcpconfig`(1M) utilities. This functionality is in the form of a Java Bean, which is provided by the public module vendor. This Java Bean collects public module-specific configuration from the user (you) and provides it to the Solaris DHCP service.

The Solaris DHCP service bundles three modules with the service, which are described below. There are three `dhcpsvc.conf`(4) DHCP service configuration parameters pertaining to public modules: `RESOURCE`, `PATH`, and `RESOURCE_CONFIG`. See `dhcpsvc.conf(4)` for more information about these parameters.

SUNWfiles

This module stores its data in ASCII files. Although the format is ASCII, hand-editing is discouraged. It is useful for DHCP service environments that support several hundred to a couple thousand of clients and lease times are a few hours or more.

This module's data may be shared between DHCP servers through the use of NFS.

SUNWbinfiles

This module stores its data in binary files. It is useful for DHCP service environments with many networks and many thousands of clients. This module provides an order of magnitude increase in performance and capacity over SUNWfiles.

This module's data cannot be shared between DHCP servers.

関連項目

`crontab(1)`, `dhcpconfig(1M)`, `dhcpmgr(1M)`, `dhtadm(1M)`, `pntadm(1M)`, `dhcpsvc.conf(4)`, `dhcp(5)`

『Oracle Solaris DHCP Service Developer's Guide』

名前

environ – ユーザー環境

機能説明

プロセスの実行を開始すると、exec 関数のファミリの中の 1 つが環境と呼ばれる文字列の配列を用意します (exec(2) を参照)。規約上、これらの文字列は *variable* (変数) = *value* (値) という形式をとります (たとえば、PATH=/sbin:/usr/sbin)。この環境変数により、プログラムはプログラムの環境に関する情報を利用できるようになります。

環境中に名前を設定するには、sh(1) における *name*=*value* 引数と export コマンドを使用するか、あるいは exec 関数のうちの 1 つを使用します。.profile ファイル内でエクスポートされる MAIL、PS1、PS2、IFS などのシェル変数と環境変数との間で矛盾を生じさせるのは避けてください。詳細は profile(4) を参照してください。

アプリケーションが利用できる環境変数を以下に示します。これらの変数は、実行環境において設定されていることが期待されています。

HOME
: ユーザーのログインディレクトリ名。パスワードファイル (passwd(4) を参照) に基づいて login(1) が設定します。

LANG
: 国際化情報を指定するのに用いる文字列。ユーザーはこの情報を利用して、さまざまな国の慣習に従って作業を進めることができます。setlocale(3C) 関数の引数 locale に "" を設定して呼び出すと、この関数は環境変数 LANG を調べます。特定のカテゴリに対する環境変数が設定されていない、あるいは NULL に設定されている場合は、LANG がデフォルト時のロケールとして使用されます。ただし LC_ALL が空文字列でない正当な値に設定されていれば、変数 LANG やほかの LC_* 変数の代わりにその値が使用されます。たとえば、setlocale(LC_CTYPE, "") のように呼び出されると、setlocale() は、まず環境変数 LC_CTYPE が設定されていて NULL でないことを問い合わせます。LC_CTYPE が未設定または NULL の場合は、setlocale() は次に環境変数 LANG を調べて、それが設定されていて NULL でないことを確認します。LANG と LC_CTYPE の両方が未設定または NULL の場合、デフォルトの C ロケールを使用して LC_CTYPE カテゴリを設定します。

: ほとんどのコマンドは、ほかの処理を行う前に setlocale(LC_ALL, "") を呼び出します。この関数を用いて適切な環境変数を設定することにより、コマンドをさまざまな国の慣習に従って使用できるようになります。

: 以下に示す環境変数が各カテゴリの setlocale(3C) と対応しています。

LC_ALL
: 空文字列でない正当な値に設定されていれば、LANG およびすべての LC_* 変数の値に代わって使用されます。

LC_COLLATE
: 使用する文字照合順序を指定します。このカテゴリにあてはまる情報は、localedef(1) コマンドによって作成されるデータベース内に格納されています。この環境変数は strcoll(3C) および strxfrm(3C) に影響を及ぼします。

LC_CTYPE
文字分類、文字変換および複数バイト文字の幅を指定します。LC_CTYPE が正当な値に設定されていると、呼び出し側のユーティリティーは、該当するロケールに合った文字を含んでいるテキストやファイル名を表示したり処理したりできます。例: 各文字の幅が 1 から 3 バイトの拡張 UNIX コード (EUC) 文字、およびカラム幅が 1 から 3 の EUC 文字。デフォルトの C ロケールは、7 ビットの ASCII 文字セットに対応していて、ISO 8859-1 の文字だけが有効です。このカテゴリにあてはまる情報は、localedef() コマンドによって作成されるデータベース内に格納されています。ctype(3C)、mblen(3C)、および他の多くのコマンド (たとえば、cat(1)、ed(1)、ls(1)、vi(1)) がこの環境変数を使用します。

LC_MESSAGES
使用するメッセージデータベースの言語を指定します。たとえば、アプリケーションは、フランス語用のメッセージデータベースとドイツ語用のメッセージデータベースを使い分けることができます。メッセージデータベースは、mkmsgs(1) コマンドで作成します。exstr(1)、gettxt(1)、srchtxt(1)、gettxt(3C)、gettext(3C) がこの環境変数を使用します。

LC_MONETARY
特定のロケールで使用する通貨記号および区切り記号を指定します。このカテゴリにあてはまる情報は、localedef(1) コマンドによって作成されるデータベース内に格納されています。localeconv(3C) がこの環境変数を使用します。

LC_NUMERIC
小数点および千の位の区切り記号を指定します。このカテゴリにあてはまる情報は、localedef() コマンドによって作成されるデータベース内に格納されています。デフォルト値の C ロケールは、小数点にピリオド (.) を指定し、千の位の区切り記号は指定しません。localeconv(3C)、printf(3C)、strtod(3C) がこの環境変数を使用します。

LC_TIME
日付と時刻の書式を指定します。このカテゴリにあてはまる情報は、localedef() で指定されるデータベース内に格納されています。デフォルト値の C ロケールは、アメリカ合衆国の日付と時刻の書式に対応しています。多くのコマンドおよび関数がこの環境変数を使用します。例: at(1)、calendar(1)、date(1)、strftime(3C)、getdate(3C) などです。

MSGVERB
stderr にメッセージを表示するとき、fmtmsg がどの標準書式メッセージコンポーネントを使用するかを制御します (fmtmsg(1) および fmtmsg(3C) を参照)。

NETPATH
コロンで区切られたネットワーク識別子のリストです。ネットワーク識別子とは、システムの「ネットワーク選択」コンポーネントが、アプリケーション固有のデフォルトのネットワーク検索パスを提供するために 使用する文字列で

す。ネットワーク識別子は、NULL 以外の文字からなり、長さは 1 以上である必要があります。最大長は制限されていません。通常は、システム管理者がネットワーク識別子を選択します。ネットワーク識別子は、/etc/netconfig ファイルのすべての記述項の最初のフィールドでもあります。したがって NETPATH は、/etc/netconfig ファイルへのリンクおよびそのファイルのネットワーク記述項に入っているネットワークに関する情報を提供します。/etc/netconfig は、システム管理者によって維持されます。getnetpath(3NSL) で説明したライブラリルーチンが、NETPATH 環境変数にアクセスします。

NLSPATH
メッセージカタログを見つけるために catopen(3C) と gettext(3C) が使用する、一連のテンプレートを指定します。各テンプレートは、オプションの接頭辞、1 つまたは複数の置換フィールド、ファイル名、およびオプションの接尾辞からなります。例:

```
NLSPATH="/system/nlslib/%N.cat"
```

この例では、catopen() がすべてのメッセージカタログをディレクトリ /system/nlslib から見つける必要があることを定義します。このディレクトリのカタログ名は、catopen( ) に指定された *name* パラメータの %N に接尾辞の .cat がついています。

置換フィールドは、後ろに単一文字のキーワードがついた % 記号からなります。現在定義されているキーワードを以下に示します。

%N
catopen() に指定された *name* パラメータの値

%L
LANG または LC_MESSAGES の値

%l
LANG または LC_MESSAGES の言語要素

%t
LANG または LC_MESSAGES の地域要素

%c
LANG または LC_MESSAGES のコードセット要素

%%
単一の % 文字

現在定義されていない値を指定した場合は、空の文字列に置換されます。分離文字の下線文字 (_) およびピリオド (.) は、%t および %c の各置換フィールドには入っていません。

NLSPATH で定義されるテンプレートは、コロン (:) で区切られます。先頭のコロンまたは隣接する 2 つのコロン (::) は、%N と同等の意味です。例:

```
NLSPATH=":%N.cat:/nlslib/%L/%N.cat"
```

この例では、要求されたメッセージカタログを *name*、*name*.cat、および /nlslib/$LANG/*name*.cat から見つけるよう catopen() に指示しています。gettext() の場合、%N には自動的に messages にマップされます。

NLSPATH が設定されていないか NULL に設定されている場合、catopen() と gettext() は setlocale(3C) を呼び出します。setlocale3C は LANG と LC_* 変数を調べてメッセージカタログの場所を探します。

Solaris における拡張された %L の解釈には、gettext(1)、gettext(3C)、catopen(3C)、setlocale(3C)、および locale_alias(5) で説明されているように、受け入れられたロケール名別名のサポートが含まれます。

通常、NLSPATH はシステム全体 (/etc/profile 中) に設定されるので、プログラムもユーザーもメッセージカタログに関連付けられた場所や命名規約を意識する必要はありません。

PATH
: sh(1)、time(1)、nice(1)、nohup(1) などのユーティリティが、不完全なパス名しかわからないファイルを探すときに使用する一連のディレクトリ接頭辞です。複数の接頭辞はコロン (:) で区切られます。login(1) は PATH=/usr/bin を設定します。詳細は、sh(1) を参照してください。

SEV_LEVEL
: 重大度レベルを定義し、文字列をその重大度レベルと対応させ、標準書式エラーメッセージで出力します。addseverity(3C)、fmtmsg(1)、および fmtmsg(3C) を参照してください。

TERM
: 出力を行う端末の種類です。この情報は vi(1) などのコマンドによって使用され、その端末の特殊な機能が利用できます。

TZ
: タイムゾーンの情報です。この環境変数の内容は、ctime(3C)、localtime(3C)、strftime(3C)、mktime(3C) の各関数がデフォルトのタイムゾーンを変更するのに使用します。TZ の値の形式は、次の 2 つのうちのどちらかです (見やすくするために、スペースを挿入しています)。

  ```
  :characters
  ```

  または

  ```
  std offset dst offset, rule
  ```

  TZ が最初の形式である場合 (つまり、最初の文字がコロン (:) である場合)、あるいは、TZ が 2 番目の形式でない場合、TZ は、(もしあれば) 先頭のコロンを無視して、/usr/share/lib/zoneinfo/ に関連するタイムゾーンデータベースファイルへのパスを示します。

そうでない場合、つまり、TZ が 2 番目の形式である場合、TZ は次のように展開されます。

stdoffset[*dst*[*offset*][,*start*[/*time*],*end*[/*time*]]]

std と *dst*
標準のタイムゾーン (*std*) または代替のタイムゾーン (*dst*、サマータイムなど) の名前を指定します。名前の長さは 3 バイト以上 {TZNAME_MAX} バイト以下です。*std* だけが必須です。*dst* を省略した場合、このタイムゾーンに代替の時刻は表示されません。これらのフィールドは、それぞれ次の 2 つの形式、つまり引用付きと引用なしのどちらかで指定できます。

- 引用付き形式の場合、最初の文字は小なり記号 (<) で、最後の文字が大なり記号 (>) です。これら引用記号の間にある文字はすべて、現在のロケールにおける移植可能な文字セットの英数字文字、プラス記号 (+)、またはマイナス記号 (-) です。この場合、*std* と *dst* フィールドは引用記号を含みません。
- 引用なし形式の場合、std と dst フィールド内のすべての文字は、現在のロケールにおける移植可能な文字セットの英数字文字です。

どちらかのフィールドが 3 バイトより小さい場合 (*dst* を省略した場合を除く)、{TZNAME_MAX} バイトより大きい場合、あるいは、前述の文字以外の文字を使用した場合、これらのフィールドの解釈方法は定義されていません。

offset
協定世界時に合わせるために、ローカル時間に追加すべき値を示します。offset の形式は以下のとおりです。

hh[:*mm*[:*ss*]]

分 (*mm*) および秒 (*ss*) はオプションです。時間 (*hh*) は必須で、単一の数字で指定することもできます。*std* の後では必ず *offset* を指定しなければなりません。*dst* の後に *offset* を指定しないと、サマータイムは標準時間の 1 時間先と見なされます。1 つまたは複数の数字による指定が可能です。この値はつねに 10 進数として解釈されます。時間は 0 と 24 の間の値で、分 (および秒) を指定する場合は 0 と 59 の間の値で指定する必要があります。この範囲外の値を指定した場合の動作は予測できません。- を値の前に付けると、タイムゾーンはグリニッジ子午線の東です。それ以外の場合は、グリニッジ子午線の西になります (オプションの + 記号で示すこともできます)。

start/*time*, *end*/*time*
サマータイムに切り替える日時と、サマータイムから元に戻る日時を示します。*start*/*time* は、標準時間からサマータイムに切り替える日時を示し、*end*/*time* は、標準時間に戻る日時を示します。各 *time* フィールドは、変更を行う時間 (現在のローカル時間) を示します。

start および *end* は、以下のいずれかの形式をとります。

J*n*
ユリウス日 *n* (1 ≤ *n* ≤ 365)。うるう年は考えません。つまり毎年 2 月 28 日は 59 で、3 月 1 日は 60 となります。この書式では 2 月 29 日を扱えません。

n
0 から始まるユリウス日 *n* (1 ≤ n ≤ 365)。2 月 29 日を扱えるように、うるう年を考慮した書式です。

M*m.n.d*
m 月 (1 ≤ *m* ≤ 12) *n* 週 (1 ≤ *n* ≤ 5) の *d* 番目の曜日 (0 ≤ *d* ≤ 6)。週 5 は、「*m* 月の最後の *d* 番目の曜日」になります (最後の d 番目の曜日は、月の第 4 週または第 5 週に来ます)。週 1 は、その月の最初の *d* 番目の曜日が来る週を意味します。曜日ゼロは日曜日です。

これらのオプションのフィールドがない場合は、システム固有のデフォルト値を使用して *start* および *end* を指定します。

time は *offset* と同じ書式を用います。ただし、time では先行符号 (– または +) を付けることはできません。*time* を指定しない場合、デフォルト値は 02:00:00 です。

関連項目

cat(1), date(1), ed(1), fmtmsg(1), localedef(1), login(1), ls(1), mkmsgs(1), nice(1), nohup(1), sh(1), sort(1), time(1), vi(1), exec(2), addseverity(3C), catopen(3C), ctime(3C), ctype(3C), fmtmsg(3C), getdate(3C), getnetpath(3NSL), gettext(3C), gettxt(3C), localeconv(3C), mblen(3C), mktime(3C), printf(3C), setlocale(3C), strcoll(3C), strftime(3C), strtod(3C), strxfrm(3C), TIMEZONE(4), netconfig(4), passwd(4), profile(4), locale_alias(5)

名前

eqnchar – special character definitions for eqn

形式

```
eqn  /usr/share/lib/pub/eqnchar filename |  troff options
neqn  /usr/share/lib/pub/eqnchar filename |  troff options
```

機能説明

The eqnchar command contains nroff(1) and troff(1) character definitions for constructing characters that are not available on the Graphic Systems typesetter. These definitions are primarily intended for use with eqn(1) and neqn(1). It contains definitions for the characters listed in the following table.

ciplus	⊕	| |	‖	*square*	□
citimes	⊗	*langle*	⟨	*circle*	○
wig	~	*rangle*	⟩	*blot*	□
-wig	≃	*hbar*	ℏ	*bullet*	•
>wig	≳	*ppd*	⊥	*prop*	∝
<wig	≲	*<->*	↔	*empty*	∅
=wig	≅	*<=>*	⇔	*member*	∈
star	⋆	|<	⊀	*nomem*	∉
bigstar	✳	|>	⊁	*cup*	∪
=dot	≐	*ang*	∠	*cap*	∩
orsign	∨	*rang*	⌡	*incl*	⊑
andsign	∧	*3dot*	⋮	*subset*	⊂
=del	≙	*thf*	∴	*supset*	⊃
oppA	⊼	*quarter*	¼	*!subset*	⊆
oppE	⋹	*3quarter*	¾	*!supset*	⊇
angstrom	Å	*degree*	°		

ファイル

/usr/share/lib/pub/eqnchar

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	text/doctools

関連項目

eqn(1), nroff(1), troff(1), attributes(5)

名前

extendedFILE – enable extended FILE facility usage

形式

```
$ ulimit -n N_file_descriptors
$ LD_PRELOAD_32=/usr/lib/extendedFILE.so.1 application [arg...]
```

機能説明

The `extendedFILE.so.1` is not a library but an enabler of the extended FILE facility.

The extended FILE facility allows 32-bit processes to use any valid file descriptor with the standard I/O (see `stdio(3C)`) C library functions. Historically, 32-bit applications have been limited to using the first 256 numerical file descriptors for use with standard I/O streams. By using the extended FILE facility this limitation is lifted. Any valid file descriptor can be used with standard I/O. See the NOTES section of `enable_extended_FILE_stdio(3C)`.

The extended FILE facility is enabled from the shell level before an application is launched. The file descriptor limit must also be raised. The syntax for raising the file descriptor limit is

```
$ ulimit -n max_file_descriptors
$ LD_PRELOAD_32=/usr/lib/extendedFILE.so.1 application [arg...]
```

where *max_file_descriptors* is the maximum number of file descriptors desired. See `limit(1)`. The maximum value is the same as the maximum value for `open(2)`.

環境変数

The following environment variables control the behavior of the extended FILE facility.

`_STDIO_BADFD` — This variable takes an integer representing the lowest file descriptor, which will be made unallocatable. This action provides a protection mechanism so that applications that abuse interfaces do not experience silent data corruption. The value must be between 3 and 255 inclusive.

`_STDIO_BADFD_SIGNAL` — This variable takes an integer or string representing any valid signal. See `signal.h(3HEAD)` for valid values or strings. This environment variable causes the specified signal to be sent to the application if certain exceptional cases are detected during the use of this facility. The default signal is `SIGABRT`.

使用例

例 1 Limit the number of file descriptors and FILE standard I/O structures.

The following example limits the number of file descriptors and FILE standard I/O structures to 1000.

```
$ ulimit -n 1000
$ LD_PRELOAD_32=/usr/lib/extendedFILE.so.1 application [arg...]
```

例 2 Enable the extended FILE facility.

The following example enables the extended FILE facility. See `enable_extended_FILE_stdio(3C)` for more examples.

例 2 Enable the extended FILE facility. *(続き)*

```
$ ulimit -n 1000
$ _STDIO_BADFD=100 _STDIO_BADFD_SIGNAL=SIGABRT \
   LD_PRELOAD_32=/usr/lib/extendedFILE.so.1  \
   application [arg ...]
```

例 3 Set up the extended FILE environment and start the application.

The following shell script first sets up the proper extended FILE environment and then starts the application:

```
#!/bin/sh
if [ $# = 0 ]; then
   echo "usage: $0 application [arguments...]"
   exit 1
fi
ulimit -n 1000
# _STDIO_BADFD=196; export _STDIO_BADFD
# _STDIO_BADFD_SIGNAL=SIGABRT; export _STDIO_BADFD_SIGNAL
LD_PRELOAD_32=/usr/lib/extendedFILE.so.1; export LD_PRELOAD_32
"$@"
```

ファイル

`/usr/lib/extendedFILE.so.1` enabling library

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	system/library (32–bit)
Interface Stability	Committed
MT-Level	Safe

関連項目

`limit(1)`, `open(2)`, `enable_extended_FILE_stdio(3C)`, `fdopen(3C)`, `fopen(3C)`, `popen(3C)`, `signal.h(3HEAD)`, `stdio(3C)`, `attributes(5)`

警告

The following displayed message

```
Application violated extended FILE safety mechanism.
Please read the man page for extendedFILE.
Aborting
```

is an indication that your application is modifying the internal file descriptor field of the `FILE` structure from standard I/O. Continued use of this extended FILE facility could harm your data. Do not use the extended FILE facility with your application.

名前

extensions – localedef extensions description file

機能説明

A localedef extensions description file or *extensions* file defines various extensions for the `localedef(1)` command.

The localedef extensions description file provides:

- EUC code set width information via the `cswidth` keyword: `cswidth bc1 : sw1,bc2 : sw2,bc3 : sw3`where `bc1`, `bc2`, and `bc3` indicate the number of bytes (byte count) per character for EUC codesets `1`, `2`, and `3`, respectively. `sw1`, `sw2`, and `sw3` indicate screen width for EUC codesets `1`, `2`, and `3`, respectively.
- Other extensions which will be documented in a future release.

関連項目

`locale(1)`, `localedef(1)`, `environ(5)`, `locale(5)`

名前 filesystem – file system organization

形式 /

機能説明 The file system is a hierarchical structure of descendent file systems and directories that are used to organize system-related components and binaries as well as non-system-related components and home directories in the Oracle Solaris OS. By default, the root file system is installed within a ZFS root pool and specifically, is a ZFS file system with separate directories of system-related components, such as `etc`, `usr`, and `var`, that must be available for the system to function correctly. After a system is installed, the root of the Solaris file system is mounted, which means files and directories are accessible.

All subdirectories of the root file system that are part of the Oracle Solaris OS, with the exception of `/var`, must be contained in the same file system as the root file system. In addition, all OS components must reside in the root pool, with the exception of the swap and dump devices. A default swap device and dump device are created automatically as ZFS volumes in the root pool when a system is installed.

The following file system content descriptions make use of platform, platform-dependent, platform-independent, and platform-specific terms. Platform refers to a system's Instruction Set Architecture or processor type as returned by the `uname -i` command.
Platform-dependent refers to a file that is installed on all platforms and whose contents vary depending on the platform. Like a platform-dependent file, a platform-independent file is installed on all platforms. However, the contents of the latter type remains the same on all platforms. An example of a platform-dependent file is compiled, executable program. An example of a platform-independent file is a standard configuration file, such as `/etc/hosts`. Unlike a platform-dependent or a platform- independent file, the platform-specific file is installed only on a subset of supported platforms. Most platform-specific files are gathered under `/platform` and `/usr/platform`.

Root File System The root file system contains files and directories that are critical for system operation, such as the kernel, the device drivers, and the programs used to boot the system. These components are described below. The root (`/`) directory also contains mount point directories where local and remote file systems can be attached to the file system hierarchy.

`/`	Root directory of the entire file system name space. This is a special file system that is mounted by the kernel at system boot time.
`/boot`	Directory that contains files and executables that are needed for booting the system. Directory that contains files and executables that are needed for booting the system.
`/bin`	Symbolic link to the `/usr/bin` directory that contains system executables and scripts.

`/dev`	Directory that contains special device files. Typically, device files are built to match the kernel and hardware configuration of the system.
`/devices`	Mount point directory for the `devfs` file system that manages the device name space.
`/etc`	Directory that contains platform-dependent administrative and configuration files and databases that are not shared among systems. This directory defines the system's identity. An approved installation location for bundled Solaris software.
`/export/home` or `/home`	Directory or file system mount point for user home directories, which store user files. By default, the `/home` directory is an automounted file system.
`/kernel`	Directory of platform-dependent loadable kernel modules required as part of the boot process. It includes the generic part of the core kernel that is platform-independent, `/kernel/genunix`. See `kernel(1M)`. An approved installation location for bundled Oracle Solaris software and for add-on system software.
`/lib`	Directory that contains core system libraries. Historically, this directory contained essential library components for system startup.
`/media`	Directory for accessing removable media that is automatically mounted.
`/mnt`	Default temporary mount point directory for file systems. This empty directory is used to temporarily mount a file system.
`/net`	Temporary mount point directory for file systems that are mounted by the automounter.
`/opt`	Directory for unbundled application packages.
`/platform`	Directory of platform-specific objects that need to reside in the root file system. It contains a series of directories, one per supported platform. The semantics of the series of directories is equivalent to `/` (root).
`/proc`	Mount point directory for the process file system.
`/root`	Home directory for the root user.
`/rpool`	Mount point directory for the ZFS boot-related components. By default, the root pool is named `rpool` during installation.
`/sbin`	Symbolic link to the `/usr/sbin` directory.

`/system`	Mount point directory for the contract (`CTFS`) and object (`OBJFS`) file systems.
`/tmp`	Directory that contains temporary files that are removed during a boot operation.
`/usr`	Directory that contains platform-dependent and platform-independent binaries and files. The `/usr/share` subdirectory contains platform-independent files. The rest of the `/usr` directory contains platform-dependent files.
`/usr/bin`	Directory that contains platform-dependent, user-invoked executables. These are commands that users expect to be run as part of their normal `$PATH`. An approved installation location for bundled Oracle Solaris software. The analogous location for unbundled system software or for applications is `/opt/packagename/bin`.
`/usr/lib`	Directory that augments the contents of `/lib` with additional system libraries, and other supporting files that are required by programs at runtime.
`/usr/java`	Directory that contains Java files and executables.
`/usr/sbin`	Contains essential executables used in the booting process and in manual system recovery. Historically, this directory was needed to recover the system before the `/usr` file system was mounted. In this Oracle Solaris release, `/usr` is a directory, not a separate file system and is available when the root file system is mounted.
`/var`	Directory or file system that contains varying files that are unique to a system but can grow to an arbitrary or variable size. An example is a log file. An approved installation location for bundled Oracle Solaris software.

`/var/tmp`	Directory that contains files that vary in size or presence during normal system operations. The content of this directory is not removed during a boot operation. It is possible to change the default behavior for `/var/tmp` to clear all of the files except editor temporary files by setting the `clean_vartmp` property value of the `rmtmpfiles` service. This is done with the following commands:
	`# svccfg -s svc:/system/rmtmpfiles setprop\`
	`options/clean_vartmp = "true"`
	`# svcadm refresh svc:/system/rmtmpfiles:default`
	The `solaris.smf.value.rmtmpfiles` authorization is required to modify this property.

関連項目 isainfo(1), svcs(1), uname(1), automount(1M), automountd(1M), boot(1M), init(1M), kernel(1M), mount(1M), svcadm(1M), svccfg(1M), zfs(1M), zpool(1M), mount(2), Intro(4), proc(4), , ctfs(7FS), devfs(7FS), objfs(7FS),

名前

fmri – Fault Managed Resource Identifier

機能説明

Oracle Solaris subsystems such as the Service Management Facility (see smf(5)), the Fault Management Daemon (see fmd(1M), fmadm(1M)), and the Image Packaging System (see pkg(5)) identify each element they manage using a *fault managed resource identifier*, abbreviated as FMRI.

FMRIs are used to identify both hardware resources and software resources and abstractions. For hardware resources the FMRIs are usually an implementation detail, and when a component is diagnosed as faulty it is the FRU (field replaceable unit) location label which is used to identify it. If no FRU label is available, the FMRI is used. For software abstractions such as an SMF service or a pkg(5) software package the FMRI (often in string form) is the one and only means of naming the managed resource (abbreviations aside).

All FMRIs include an indication of the FMRI scheme adhered to, and the version of that FMRI scheme in use. Once the scheme and version are known, the remainder of the FMRI is interpreted as specified in the formal definition of that FMRI scheme version. Schemes exists for `svc`, `pkg`, `cpu`, `hc` (hardware component), `dev` (device), and a number of others.

The formal definition of a given version of a particular FMRI scheme is specified as an unordered series of FMRI members specified as (member-name, data-type, data-semantics) tuples. An instance of an FMRI is a series of (name, type, value) tuples wherein the name and type match the FMRI specification and the value provided is a value of the given type and derived and interpreted according the semantics described in the formal FMRI definition for that scheme and version. In Oracle Solaris C library APIs such as libfmevent(3LIB), FMRIs are represented as `nvlists` using the libnvpair(3LIB) library.

It is often more convenient to represent a given FMRI instance as a string, such as in command line interaction or in command output. The specification of each FMRI scheme version includes rules for formatting an FMRI of that scheme and version as a string instead of an name-value pair list, and given an FMRI string those same rules can be applied in reverse to recover the more-formal FMRI form. In some cases the string form of an FMRI can include a reduced amount of information as compared to the formal form, but still provide enough information to identify the resource for administrative purposes. The string form of an FMRI usually does not include the FMRI version number, and so the version is understood to be that whose formal FMRI-to-string formatting rules the given FMRI string matches. The string form of an FMRI is not unlike a URI as outlined in RFC 2396 which we use as a syntactical model. In particular, we reserve the same set of characters `:`, `;`, `=`, `@`, `/`, `&`, `'`, `$` and `,` and require the same escaped encoding conventions should these characters appear in an FMRI member value that is rendered in the string.

FMRI Members

The formal definition of a given version of a particular FMRI scheme is specified as an unordered series of:

```
(member-name, data-type, data-semantics)
```

tuples, some of which are required and some of which are optional. The formal definition also specifies how to render the FMRI in string form.

`member-name`
This associates a name with the FMRI member, with characters drawn from the following alphabet:

```
A-Z
a-z
'_' (underscore)
'-' (hyphen)
'.' (period)
```

`data-type`
This specifies the data type for this member. Legal primitive datatypes are listed in the following table, and for all primitive types we also define an array of that type as a legal datatype. The primitive integer and double datatypes are defined as in C, and we add boolean value and string primitive datatypes:

```
Primitive Datatype   Description
-------------------------------------------
boolean_value        Values can be 0 or 1
string               ASCII string
[u]int8              (Un)signed 8-bit integer
[u]int16             (Un)signed 16-bit integer
[u]int32             (Un)signed 32-bit integer
[u]int64             (Un)signed 64-bit integer
double               Double precision floating point
```

For each primitive datatype we form an aggregate datatype that is an ordered array of the primitive type:

```
Primitive Datatype    Description
-------------------------------------------
boolean_value array   Array of boolean_value
string array          Array of ASCII strings
[u]int8 array         Array of (un)signed 8-bit integer
[u]int16 array        Array of (un)signed 16-bit integer
[u]int32 array        Array of (un)signed 32-bit integer
[u]int64 array        Array of (un)signed 64-bit integer
double array          Array of double
```

A further aggregate datatype is defined - the `nvlist` (name- value list). An `nvlist` is an unordered list of (`list-member-name`, `list-member-datatype`) in which `list-member-name` names the member using the same alphabet as for `member-name` above, and `list-member-datatype` is any primitive or aggregate datatype including `nvlist` itself. We term the members of an `nvlist`: `nvpairs` (name-value pairs).

A special type of `nvlist` is an `fmri` which is an `nvlist` that conforms to one of the FMRI scheme versions defined below.

```
Synthetic Datatype    Description
-------------------------------------------------------
nvlist                Unordered list of nvpairs
nvlist array          Array of nvlist
fmri                  An nvlist that specifies an FMRI
                      scheme and version and includes other
                      members so as to be a valid FMRI
                      in that scheme version.
```

`data-semantics`
The data semantics for a given member in an FMRI definition specify how the values for that member should be interpreted, that is, their meaning. The data semantics can constrain the set of legal values that the member can assume to a subset of those representable by the member data type.

Stabilities

Some FMRI schemes, such as `svc` for SMF, are administrator-facing while others are more of a private implementation detail. Correspondingly, the definition of some FMRI schemes constitute a `Committed` interface, while the definition of others form a `Private` interface. See `attributes(5)`. As with all `Private` interfaces the definition of `Private` FMRI components is subject to possibly incompatible change at any time, and you should not consume such interfaces nor rely on the presence or assumed semantics of private FMRI members.

In defining an FMRI scheme below we list a series of (`member-name, data-type, data-semantics`), specify which members are required and which are optional, and the rules for rendering an FMRI in string form. In terms of stability assignments, there are two stability levels associated with each member:

- Stability of the (`member-name, data-type`) pair
- Stability of the corresponding data-semantics

The default in both cases is `Private`. When the stability of both aspects of a member are identical (the common case) we write the stability level just once. When they differ then we write the member name and data type stability first, followed by a comma and the data semantics stability level. Today the only stability levels employed in FMRIs are `Committed`, `Private`, and `Not An Interface` but others are allowed. The semantics of a `Committed` FMRI component do not change incompatibly for given scheme and version thereof.

FMRI Scheme and Version Identification

All FMRI definitions are required to include members for the scheme name and major version thereof. The name/datatype and data semantics stabilities are `Committed`, thus all FMRI definitions are required to begin as follows:

```
Member Name      Data Type    Stability
----------------------------------------
scheme           string       Committed
version          uint8        Committed
```

`scheme`
Names this FMRI scheme

`version`
Scheme major version

Together these select the set of rules (as below) by which the given FMRI should be interpreted. A small number of scheme names are defined to cope with identifying resources within differing subsystems, and each scheme is versioned starting at version number 0.

When using the informal string representation of an FMRI, the scheme is always written but the scheme version in use is usually not included. The version in use is understood to be the latest for which the given FMRI string matches the FMRI-to-string conversion rules.

FMRI Authority

A further required, although implicitly present in some cases, FMRI member is `authority`:

```
Member Name   Data Type  Stability
---------------------------------------
[authority]   nvlist     Committed, (Varies)
```

Every FMRI includes authority information, either explicitly with the `authority` `nvlist` if present in the FMRI or implicitly that of the local fault management domain if not present. Authority information has two flavors:

- High-level authority information, such as to identify the platform and hostname within which a particular resource that is the subject of an FMRI is located
- Leaf-level authority information, providing identity information for the specific resource that is the subject of the FMRI

For example, an FMRI identifying a disk can have high-level authority information detailing the platform (host name, product name, chassis serial) in which the disk resides, and leaf-level authority information detailing the individual disk part number, serial, and so forth.

It is an unfortunate fact that some FMRI schemes have evolved to include leaf-level authority information outside of the `authority` `nvlist` as standalone FMRI members, and written as part of the path component in string form.

Logical vs. Universal FMRI Schemes

A `logical` FMRI scheme defines FMRIs that can only meaningfully be interpreted within the fault management domain (typically an Oracle Solaris instance) in which they were generated. Identical FMRIs of a logical scheme that are native to distinct fault management domains do not necessarily identify the same actual resource. For example a `cpu` identified as `cpu` `id` `1` using the `cpu` scheme must be interpreted in the Oracle Solaris instance that generated the FMRI (that is, its native context), and many other Oracle Solaris instances also have a logical processor id number `1` but all such FMRIs do not identify the same actual processor. The native fault management domain is identified by its high-level authority information which is typically not captured in an FMRI instance but instead understood to be that of the local Oracle Solaris instance.

A universal FMRI scheme identifies resources in a universally unique manner, and two identical FMRIs in a universal scheme identify the same actual resource wherever they are interpreted. Such schemes are used when ambiguity must be avoided, such as in identifying hardware components that are faulted.

FMRI schemes do not include a member indicating whether the scheme is logical or universal.

FMRI Schemes and Versions

The following FMRI scheme versions are defined in the sections that follow:

```
Scheme Version(s) Universal? Description
------------------------------------------------------------
cpu    0, 1       No         Logical processor identification
dev    0          No         Device resources
fmd    0          No         Fault Management Daemon modules
hc     0          Yes        Hardware Components
mem    0          No         Memory modules and cache
mod    0          No         Kernel modules
pkg    0, 1       Yes        Software packages
svc    0          No         SMF services & service instances
sw     0          No         Software objects
zfs    0          No         zfs filesystem resources
```

Of these, the svc and pkg schemes are the most-likely to be encountered in day-to-day Oracle Solaris use, while the remainder are usually hidden behind command line interaction with the fault management subsystem when problems have been diagnosed.

SCHEME cpu VERSION 0

The cpu scheme is used to identify the logical Oracle Solaris processor resource that can be affected by a problem that has been diagnosed, and which can be offlined in response to that problem diagnosis. It does not necessarily identify the physical resource involved, and should not be used to identify parts for replacement.

The cpu scheme is a logical FMRI scheme: an FMRI in the cpu scheme is meaningful only within the fault management domain identified by the authority information.

```
Member Name   Data Type    Stability
-----------------------------------
scheme        string       Committed, value "cpu"
version       uint8        Committed, value 0
cpuid         uint32       Committed
[serial]      uint64       Private
```

cpuid
: The Oracle Solaris processor instance id of this logical execution unit, as listed by psradm(1M) on the Oracle Solaris instance identified by the authority information.

[serial]
: The semantics of this Private FMRI member are not documented.

String form:

```
cpu:///cpuid=<cpuid>[/serial=<hex-serial>]
```

<hex-serial> is the *serial* member written in hexadecimal with no 0x prefix.

SCHEME cpu VERSION 1

Version 1 of the cpu FMRI scheme has the same use as version 0, with some private FMRI member changes and additions.

```
Member Name   Data Type   Stability
-----------------------------------------------
scheme        string      Committed, value "cpu"
version       uint8       Committed, value 1
cpuid         uint32      Committed
[serial]      string      Private
[cpumask]     uint8       Private
[cpufru]      string      Private
[cacheindex]  uint32      Private
[cacheway]    uint32      Private
[cachebit]    uint16      Private
[cachetype]   uint8       Private

cpuid

       As per cpu scheme version 0

[serial]
[cpumask]
[cpufru]
[cacheindex]
[cacheway]
[cachebit]
[cachetype]
```

The semantics of these Private FMRI members are not documented.

String form:

```
cpu:///cpuid=<cpuid>[/serial=<serial>]
         [/cacheindex=.../cacheway=.../
         cachebit=.../cachetype=...]
```

Members cpumask and cpufru do not appear in the string form.

SCHEME dev VERSION 0

The dev scheme is used to identify devices. It is not an invariant scheme. A dev scheme FMRI should be interpreted only in the fault management domain identified within the authority information.

```
Member Name        Data Type   Stability
-------------------------------------------------------------------
scheme             string      Committed, value "dev"
version            uint8       Committed, value 0
device-path        string      Committed
[devid]            string      Private
[target-port-l0id] string      Private
```

`device-path`
A filesystem path within the Oracle Solaris `/devices` tree that identifies a device node, such as `pci@0,0/pci108e,cb84@2,1`. Beyond this interpretation that this member identifies a `/devices` path, the internal structure of such paths, that is, the structure and node naming of the Oracle Solaris `/devices` tree) is `Not An Interface`.

`[devid]`
`[target-port-l0id]`
The semantics of these `Private` FMRI members are not documented.

`String form:`

```
dev:///[:devid=<devid>]
    [:target-port-l0id=<target-port-l0id>]
    <device-path>
```

SCHEME fmd VERSION 0

This scheme is used to identify Oracle Solaris Fault Manager (`fmd(1M)`) modules.

```
Member Name  Data Type  Stability
---------------------------
scheme       string     Committed, value "fmd"
version      uint8      Committed, value 0
mod-name     string     Committed, Not an Interface
mod-version  string     Committed, Not an Interface
```

`mod-name`
The `fmd` module name, an opaque string.

`mod-version`
The `fmd` module version, an opaque string.

`String form:`

```
fmd:///module/mod-name>
```

SCHEME hc VERSION 0

The `hc` scheme is used to identify hardware components. In most cases these FMRIs should remain as an internal implementation detail, and where a hardware component is diagnosed as faulty it is identified (for example, in `fmadm(1M)`) by its FRU label or location label.

There is only one version of the hc scheme in use (version 0) but we differentiate two minor versions, distinguished by the presence or absence of a member named component. An hc scheme FMRI that includes a component member is an instance of the obsoleted legacy hc scheme.

Obsolete legacy hc variant:

```
Member Name  Data Type  Stability
--------------------------------------------------------------------
scheme       string      Committed, value "hc"
version      uint8       Committed, value 0
component    string      Committed
```

component
The FRU label for the resource.

String form for legacy hc:

```
hc:///component=<component>
```

Current variant of hc version 0:

The authority nvlist is concerned with identifying the fault management domain in which a given FMRI was generated. Thus it includes members for the hostname, product name, chassis serial number and so on. Some of these members are invariant (such as platform serial number) and serve uniquely to identify some element, while others (such as hostname) are a soft identification which could change over time (albeit infrequently).

```
Member Name   Data Type   Stability
---------------------------------------------------
[server-id]   string      Committed, Not an Interface
[chassis-id]  string      Committed, Not an Interface
[product-sn]  string      Committed, Not an Interface
[product-id]  string      Committed, Not an Interface
[domain-id]   string      Committed, Not an Interface
[host-id]     string      Committed, Not an Interface
[devid]       string      Private, Not an Interface
```

While all members are listed as optional, as many as make sense for a given FMRI should be included. If the authority nvlist is absent in an FMRI then the authority is understood to be the local fault management domain; if an hc scheme FMRI is transmitted outside of its native domain it should include explicit high-level authority information.

The Not an Interface stability for the data semantics of each means that the value can be treated as an opaque string only and any internal structure to the string is not an interface. For example a serial number can be matched using string compare, but the length of the serial number string and the meaning of individual characters therein is not an interface.

[server-id]
The hostname (uname -n) string for the entity on which the fault manager is running. Not invariant.

`[chassis-id]`
This is a serial number identifying the chassis within which the resource resides. Some large systems can include multiple distinct chassis components.

`[product-sn]`
In some cases chassis-id alone does not fully identify the system, for example, for service entitlement keyed by a product serial number and where the product can comprise multiple chassis elements. Invariant.

`[product-id]`
The product name string, such as `Sun-Fire-X4600`. Invariant.

`[domain-id]`
Identifies a particular hardware domain in the case of hardware that supports this feature. Not invariant.

`[host-id]`
The `hostid` string (see `hostid(1)` in Oracle Solaris); not generally used. Not necessarily invariant.

`[devid]`
The device id.

`String form:`
These authority members, those that are present in a given FMRI, can be written in string form as an unordered series of colon-separated *name*=*value* pairs. We'll define this as `authstr`, to be used in the specification of the string form for individual FMRI schemes below which import the default authority information.

```
authstr = server-id=<server-id>
                [:chassis-id=<chassis-id>]
                [:product-sn=<product-sn>]
                [:product-id=<product-id>]
                [:domain-id=<domain-id>]
                [:host-id=<host-id>]
                [:devid=<devid>]
```

There is no leaf-level authority/identity information included in the authority `nvlist` - instead such information (serial and part numbers) feature as top-level members of the FMRI.

```
Member Name    Data Type    Stability
-------------------------------------------------------
scheme         string       Committed, value "hc"
version        uint8        Committed, value 0
[authority]    nvlist       Committed, See above
[serial]       string       Committed, Not-an-Interface
[part]         string       Committed, Not-an-Interface
[revision]     string       Committed, Not-an-Interface
[hc-root]      string       Private
hc-list-sz     uint32       Private
```

```
hc-list        nvlist array Private
[facility]     nvlist       Private
[hc-specific]  nvlist       Private
```

`[serial]`
The serial number string of the hardware component identified in this FMRI. This is an opaque string whose internal structure is not an interface.

`[part]`
The part number string of the hardware component identified in this FMRI. This is an opaque string whose internal structure is not an interface.

`[revision]`
The revision of the part number, as a string. Again this is an opaque string.

`[hc-root]`
The semantics of this Private FMRI member are not documented.

`hc-list-sz`
The semantics of this Private FMRI member are not documented.

`hc-list`
The semantics of this Private FMRI member are not documented, however we enumerate the structure of the content (subject to incompatible change). Each member of the (ordered) `nvlist` array has the following structure:

```
Member Name    Data Type   Stability
-----------------------------------
hc-name        string      Private
hc-id          string      Private
```

`[facility]`
The semantics of this Private FMRI member are not documented, however we enumerate the structure of the content (subject to incompatible change). The facility `nvlist` has members as follows:

```
Member Name    Data Type   Stability
-----------------------------------
facility-type  string      Private
facility-name  string      Private
```

`[hc-specific]`
The semantics of this Private FMRI member are not documented.

`String form:`

```
authstr is defined above
hcauthstr = [:serial=<serial>]

                [:part=<part>]
                [:revision=<revision>]
```

```
hc-path =<hc-list[0].hc-name>=<hc-list[0].hc-id>
               /<hc-list[1].hc-name>=<hc-list[1].hc-id>
               /<hc-list[2].hc-name>=<hc-list[2].hc-id>
               ...
hcspecstr = private string formed from hc-specific nvlist,
               of the form "/name=value"

facstr = <facility.facility-type>=<facility.facility-name>

hc://[authstr][hcauthstr]/[hc-root/]<hc-path>
                                     [<hcspecstr>]
                                     [?<facstr>]
```

The high-level authority information from the authority nvlist appears adjacent to the leaf-level authority information of serial and part number, all colon separated. The components of this authority string can appear in any order, with high-level and leaf authority elements interleaved. Parsing such a string is clumsy and relies on knowing in advance which components belong to which class of authority information.

SCHEME mem VERSION 0

This scheme is used to identify memory modules and memory pages, although more recently these have been identified in the `hc` scheme. The `mem` scheme has also been used to identify `cpu` cache resources.

```
Member Name   Data Type   Stability
--------------------------------------------------------------
scheme        string      Committed, value "mem"
version       uint8       Committed, value 0
unum          string      Committed, Private
[serial]      string      arrayPrivate
[physaddr]    uint64      Private
[offset]      uint64      Private
```

SCHEME mem VERSION 0

This scheme is used to identify memory modules and memory pages, although more recently these have been identified in the `hc` scheme. The `mem` scheme has also been used to identify `cpu` cache resources.

```
Member Name   Data Type    Stability
-----------------------------------------------
scheme        string       Committed, value "mem"
version       uint8        Committed, value 0
unum          string       Committed, Private
[serial]      string array Private
[physaddr]    uint64       Private
[offset]      uint64       Private
```

`unum`
This string identifies the memory module, generally as labelled on the platform silkscreens or service label. The presence of this member of type string is a Committed interface, but the internal structure of the `unum` string is a `Private` interface. Therefore, you can use the opaque `unum` string to identify a memory module, but the interpretation of the components of a `unum` string is platform dependent and `Private`.

A `unum` can identify a group (or bank) of memory modules. These should instead have been identified by multiple FMRIs, one for each memory module, but this is an historical anomaly from early implementations.

`[serial]`
A string array of the serial number(s) of the memory module(s) named by the `unum` member. The internal structure of a serial number string is not an interface so you can use only the opaque string value in matching serial number and not apply any further interpretation.

`[physaddr]`
`[offset]`
The semantics of these Private FMRI members are not documented.

`String form:`

```
mem:///unum=<unum>
        [/offset=<hex-offset> | /physaddr=<hex-physaddr>]
```

SCHEME mod VERSION 0

This scheme is used to identify Oracle Solaris kernel modules.

Member Name	Data Type	Stability
scheme	string	Committed, value "fmd"
version	uint8	Committed, value 0
mod-name	string	Committed
[mod-desc]	string	Committed
[mod-pkg]	fmri	(fmri)
[mod-id]	int32	Private

`mod-name`
The module name, as in per `modinfo(1M)`.

`[mod-desc]`
The module description, again as per `modinfo(1M)`.

`[mod-pkg]`
A `pkg` scheme FMRI of the package which delivers this module.

`mod-id`
The module id in the current Oracle Solaris instance, as per `modinfo(1M)`.

String form:

```
mod:///mod-name=<mod-name>/:mod-id=<decimal-mod-id>
```

SCHEME pkg VERSION 0

This version of the pkg scheme corresponds to legacy SVR4 packaging as used with pkgadd(1M), pkginfo(1), pkgrm(1M), and related utilities. This scheme is universal if package name and package version conventions are adhered to.

Member Name	Data Type	Stability
scheme	string	Committed, value "pkg"
version	int8	Committed, value 0
pkg-name	string	Committed
pkg-basedir	string	Committed
pkg-inst	string	Committed
pkg-version	string	Committed

pkg-name
: The package name.

pkg-basedir
: BASEDIR as per pkginfo(1)

pkg-inst
: PKGINST as per pkginfo(1)

pkg-version
: VERSION as per pkginfo(1)

String form:

```
pkg:///<pkg-name>/:version=<pkg-version>
```

SCHEME pkg VERSION 1

This version of the pkg scheme corresponds to the pkg(5) Image Packaging System. Such FMRIs are used in string form in the pkg(1) command line and its output, and the command line permits abbreviations of the FMRI string.

FMRIs in the pkg scheme version 1 are universal: the same FMRI interpreted in two distinct contexts (such as in distinct Oracle Solaris instances) identify the same actual package (or copies thereof).

The pkg(5) command line uses the string form of version 1 pkg FMRIs, and permits abbreviations of such strings.

Member Name	Data Type	Stability
scheme	string	Committed, value "pkg"
version	uint8	Committed, value 1

```
[authority]   nvlist       Committed
pkg-name      string       Committed
[pkg-version] nvlist       Committed
```

`[authority]`
The `authority` `nvlist` specifies the package publisher, per `pkg publisher` output:

```
Member Name    Data Type    Stability
-----------------------------------
publisher      string       Committed

publisher
```

The publisher of this package, such as Oracle Solaris.

`pkg-name`
The name (stem) of the package

`[pkg-version]`

```
Member Name    Data Type    Stability
---------------------------------------
release        string       Committed
[built-on]     string       Committed
[branch]       string       Committed
[timestamp]    string       Committed
```

`release`
The primary version of the component, written as a dot sequence string (an arbitrary-length, dot-separated series of non-zero-leading decimal digits).

`built-on`
The operating system version on which the component was built, again specified as a dot sequence.

`branch`
The vendor branch version, as a dot sequence.

`timestamp`
An ISO 8601 date string: *yyyymmdd*`T`*hhmmss*`Z` in which the `T` and `Z` are literals.

`String form:`

```
pkgauthstr = <authority.publisher>

pkg://[pkgauthstr]/<pkg-name>
    [@<release>[,<built-on>][-<branch>][:<timestamp>]
```

SCHEME svc VERSION 0

The `svc` scheme describes SMF (see`smf(5)` services and service instances. In SMF command lines such as `svcadm(1M)`, `svccfg(1M)`, `svcprop(1)`, `svcs(1)` and their output such FMRI are always written in their string form, and the SMF command lines permit abbreviations.

The svc scheme FMRI is a logical scheme, and, as such an FMRI should only be interpreted in the fault management domain (Oracle Solaris instance) in which it was generated.

```
Member Name    Data Type   Stability
-----------------------------------------------
scheme         string      Committed, value "svc"
version        uint8       Committed, value 0
svc-name       string      Committed
[svc-instance] string      Committed
[contract-id]  string      Committed
[svc-scope]    string      Committed
```

`svc-name`
The service name, such as `network/smtp`. See `smf(5)`.

`[svc-instance]`
Used when identifying an instance of a service. Often `default`, but can also be things like the `sendmail` instance of service `network/smtp`.

`[contract-id]`
This identifies the numeric (although written as a decimal string) contract id (see `smf(5)` and `contract(4)` used to manage a particular running instance of a service.

`[svc-scope]`
As per `smf(5)`, all service and instance objects are contained in a `scope` that represents a collection of configuration information. The configuration of the local Oracle Solaris instance is called the `localhost` scope, and is the only currently supported scope.

`String form:`

```
svc://[<svc-scope>]/<svc-name>
        [:<svc-instance>[@<contract-id>]]
```

SMF subsystem commands such as `svcadm(1M)` permit (or even require) abbreviations of the string form above. The indication of `svc` scheme at the start of the string is considered optional and implied by the SMF command line utility. When the `svc` scheme identifier is used, the authority component is also abbreviated to `svc:/<svc-name>` instead of the more-formal `svc:///<svc-name>`. For example, in SMF we write

```
svc:/network/smtp:sendmail
```

instead of the more-formal

```
svc:///network/smtp:sendmail
```

or even the more formal

```
svc://localhost/network/smtp:sendmail
```

Furthermore, SMF permits further abbreviation if it identifies a unique service or instance. For example the instance name `sendmail` is unique and one can use `svcs sendmail`, `svcadm restart sendmail`, and so forth.

Such abbreviations are a convention of the SMF subsystem and not part of the formal FMRI definition. When a `svc` scheme FMRI is received in `nvlist` form (for example, in a `libfmevent(3LIB)` subscription it appears in the more formal form when rendered as a string.

SCHEME sw VERSION 0

This FMRI scheme is used to identify software resources such as executables, library objects, and core files. This is a logical FMRI scheme.

```
Member Name   Data Type   Stability
-----------------------------------------------
scheme        string      Committed, value "sw"
version       uint8       Committed, value 0
object        nvlist      See belowPrivate
[site]        nvlist      See belowPrivate
[context]     nvlist      See belowPrivate
```

The `object`, `site`, and `context` members are all `Private` and so subject to incompatible change, but their content is documented below for informational purposes.

`object`
This required member identifies the software object. At this time only objects resident within the filesystem are catered for.

```
Member     Type        Description
-------------------------------------------------------------
path       string      Filesystem path to object
[root]     string      If present, real path to chroot root
                       directory
[pkg]      fmri        "pkg" scheme fmri of package that
                       delivers path
```

`site`
This optional member identifies a site within the object.

```
Member   Type    Description
-------------------------------------------------------------
[token]  string  Vendor and subsystem unique publisher
                 token id
[module] string  Source module information
[file]   string  Source filename (translation unit)
[func]   string  Source function
[line]   int64   Source file line number
```

`context`
This optional member communicates runtime information.

```
Member             Type         Description
-----------------------------------------------------------
[origin]           string       "userland" or "kernel"
```

```
[execname]         string       Executable name
[pid]              uint64       Process id
[thread-id]        uint64       Thread id
[os-instance-uuid] string       Solaris instance UUID
[zone]             string       Zone name, if not the global zone
[ctid]             uint64       Contract id
[stack]            string array Symbolic stack trace
```

String form:

```
sw://[<authority>]/
       [:root=<object.root]
       :path=<object.path>
       [#<fragment-identifier>]
```

Slash characters / in the root and object path are not escaped.

<fragment-identifier> is one of:

```
:token=<site.token>
```

or

```
:file=<site.file>[:func=<site.func>][:line=<site.line>]
```

SCHEME zfs VERSION 0

```
Member Name   Data Type    Stability
------------------------------------------------------------------------
scheme        string       Committed, value "zfs"
version       uint8        Committed, value 0
[pool-name]   string       Committed
pool          uint64       Committed
[vdev]        uint64       Private
[vdev-name]   string       Private
```

[pool-name]
: The pool name, as per zpool list -o name

pool
: The pool GUID as per zpool list -o guid

[vdev]
: The semantics of this Private FMRI member are not documented

[vdev-name]
: The semantics of this Private FMRI member are not documented.

String form:

```
hex-vdev = 'vdev' in hexadecimal with no '0x' prefix.
hex-pool = 'pool' in hexadecimal with no '0x' prefix.
zfs://[pool_name=<pool-name>/]pool=<hex-pool>
zfs://[pool_name=<zfs://[pool_name=<hex-pool>
```

```
[/vdev=<hex-vdev>][:vdev_name=<vdev-name>]
```

The <vdev-name> is written without escaping any / characters.

関連項目

fmadm(1M), fmd(1M), fmdump(1M), pkgadd(1M), pkginfo(1), pkgrm(1M), psradm(1M), svcadm(1M), svccfg(1M), svcprop(1), svcs(1), libfmevent(3LIB), libnvpair(3LIB), contract(4), attributes(5), smf(5)

pkg(5)

RFC 2396

名前

fnmatch – file name pattern matching

機能説明

The pattern matching notation described below is used to specify patterns for matching strings in the shell. Historically, pattern matching notation is related to, but slightly different from, the regular expression notation. For this reason, the description of the rules for this pattern matching notation is based on the description of regular expression notation described on the regex(5) manual page.

Patterns Matching a Single Character

The following *patterns matching a single character* match a single character: *ordinary characters*, *special pattern characters* and *pattern bracket expressions*. The pattern bracket expression will also match a single collating element.

An ordinary character is a pattern that matches itself. It can be any character in the supported character set except for NUL, those special shell characters that require quoting, and the following three special pattern characters. Matching is based on the bit pattern used for encoding the character, not on the graphic representation of the character. If any character (ordinary, shell special, or pattern special) is quoted, that pattern will match the character itself. The shell special characters always require quoting.

When unquoted and outside a bracket expression, the following three characters will have special meaning in the specification of patterns:

`?` A question-mark is a pattern that will match any character.

`*` An asterisk is a pattern that will match multiple characters, as described in `Patterns Matching Multiple Characters`, below.

`[` The open bracket will introduce a pattern bracket expression.

The description of basic regular expression bracket expressions on the regex(5) manual page also applies to the pattern bracket expression, except that the exclamation-mark character (`!`) replaces the circumflex character (`^`) in its role in a *non-matching list* in the regular expression notation. A bracket expression starting with an unquoted circumflex character produces unspecified results.

The restriction on a circumflex in a bracket expression is to allow implementations that support pattern matching using the circumflex as the negation character in addition to the exclamation-mark. A portable application must use something like `[\^!]` to match either character.

When pattern matching is used where shell quote removal is not performed (such as in the argument to the `find –name` primary when `find` is being called using one of the `exec` functions, or in the *pattern* argument to the fnmatch(3C) function, special characters can be escaped to remove their special meaning by preceding them with a backslash character. This escaping backslash will be discarded. The sequence `\\` represents one literal backslash. All of the requirements and effects of quoting on ordinary, shell special and special pattern characters will apply to escaping in this context.

Both quoting and escaping are described here because pattern matching must work in three separate circumstances:

- Calling directly upon the shell, such as in pathname expansion or in a `case` statement. All of the following will match the string or file `abc`:

`abc`	`"abc"`	`a"b"c`	`a\bc`	`a[b]c`
`a["b"]c`	`a[\b]c`	`a["\b"]c`	`a?c`	`a*c`

  The following will not:

`"a?c"`	`a\*c`	`a\[b]c`

- Calling a utility or function without going through a shell, as described for `find(1)` and the function `fnmatch(3C)`
- Calling utilities such as `find`, `cpio`, `tar` or `pax` through the shell command line. In this case, shell quote removal is performed before the utility sees the argument. For example, in:

  find /bin -name e\c[\h]o -print

  after quote removal, the backslashes are presented to `find` and it treats them as escape characters. Both precede ordinary characters, so the `c` and `h` represent themselves and `echo` would be found on many historical systems (that have it in `/bin`). To find a file name that contained shell special characters or pattern characters, both quoting and escaping are required, such as:

  ```
  pax -r . . . "*a\ ( \?"
  ```

  to extract a filename ending with `a(?`.

Conforming applications are required to quote or escape the shell special characters (sometimes called metacharacters). If used without this protection, syntax errors can result or implementation extensions can be triggered. For example, the KornShell supports a series of extensions based on parentheses in patterns; see `ksh(1)`

Patterns Matching Multiple Characters

The following rules are used to construct *patterns matching multiple characters* from *patterns matching a single character*:

- The asterisk (*) is a pattern that will match any string, including the null string.
- The concatenation of *patterns matching a single character* is a valid pattern that will match the concatenation of the single characters or collating elements matched by each of the concatenated patterns.

- The concatenation of one or more *patterns matching a single character* with one or more asterisks is a valid pattern. In such patterns, each asterisk will match a string of zero or more characters, matching the greatest possible number of characters that still allows the remainder of the pattern to match the string.

Since each asterisk matches zero or more occurrences, the patterns `a*b` and `a**b` have identical functionality.

Examples:

`a[bc]` matches the strings `ab` and `ac`.

`a*d` matches the strings `ad`, `abd` and `abcd`, but not the string `abc`.

`a*d*` matches the strings `ad`, `abcd`, `abcdef`, `aaaad` and `adddd`.

`*a*d` matches the strings `ad`, `abcd`, `efabcd`, `aaaad` and `adddd`.

Patterns Used for Filename Expansion

The rules described so far in `Patterns Matching Multiple Characters` and `Patterns Matching a Single Character` are qualified by the following rules that apply when pattern matching notation is used for filename expansion.

1. The slash character in a pathname must be explicitly matched by using one or more slashes in the pattern; it cannot be matched by the asterisk or question-mark special characters or by a bracket expression. Slashes in the pattern are identified before bracket expressions; thus, a slash cannot be included in a pattern bracket expression used for filename expansion. For example, the pattern `a[b/c]d` will not match such pathnames as `abd` or `a/d`. It will only match a pathname of literally `a[b/c]d`.
2. If a filename begins with a period (.), the period must be explicitly matched by using a period as the first character of the pattern or immediately following a slash character. The leading period will not be matched by:

   • the asterisk or question-mark special characters

   • a bracket expression containing a non-matching list, such as:

   `[!a]`

   a range expression, such as:

   `[%–0]`

   or a character class expression, such as:

   `[[:punct:]]`

   It is unspecified whether an explicit period in a bracket expression matching list, such as:

   `[.abc]`

   can match a leading period in a filename.

3. Specified patterns are matched against existing filenames and pathnames, as appropriate. Each component that contains a pattern character requires read permission in the directory containing that component. Any component, except the last, that does not contain a pattern character requires search permission. For example, given the pattern:

   `/foo/bar/x*/bam`

   search permission is needed for directories `/` and `foo`, search and read permissions are needed for directory `bar`, and search permission is needed for each `x*` directory.

   If the pattern matches any existing filenames or pathnames, the pattern will be replaced with those filenames and pathnames, sorted according to the collating sequence in effect in the current locale. If the pattern contains an invalid bracket expression or does not match any existing filenames or pathnames, the pattern string is left unchanged.

関連項目 `find(1)`, `ksh(1)`, `fnmatch(3C)`, `regex(5)`

名前

formats – file format notation

機能説明

Utility descriptions use a syntax to describe the data organization within files—stdin, stdout, stderr, input files, and output files—when that organization is not otherwise obvious. The syntax is similar to that used by the `printf(3C)` function. When used for stdin or input file descriptions, this syntax describes the format that could have been used to write the text to be read, not a format that could be used by the `scanf(3C)` function to read the input file.

Format

The description of an individual record is as follows:

"<format>", [<*arg1*>, <*arg2*>, . . ., <*argn*>]

The `format` is a character string that contains three types of objects defined below:

characters	Characters that are not *escape sequences* or *conversion specifications*, as described below, are copied to the output.
escape sequences	Represent non-graphic characters.
conversion specifications	Specifies the output format of each argument. (See below.)

The following characters have the following special meaning in the format string:

„ (An empty character position.) One or more blank characters.

/\ Exactly one space character.

The notation for spaces allows some flexibility for application output. Note that an empty character position in `format` represents one or more blank characters on the output (not *white space*, which can include newline characters). Therefore, another utility that reads that output as its input must be prepared to parse the data using `scanf(3C)`, `awk(1)`, and so forth. The character is used when exactly one space character is output.

Escape Sequences

The following table lists escape sequences and associated actions on display devices capable of the action.

Sequence	Character	Terminal Action
\\	backslash	None.
\a	alert	Attempts to alert the user through audible or visible notification.
\b	backspace	Moves the printing position to one column before the current position, unless the current position is the start of a line.
\f	form-feed	Moves the printing position to the initial printing position of the next logical page.

Sequence	Character	Terminal Action
\n	newline	Moves the printing position to the start of the next line.
\r	carriage-return	Moves the printing position to the start of the current line.
\t	tab	Moves the printing position to the next tab position on the current line. If there are no more tab positions left on the line, the behavior is undefined.
\v	vertical-tab	Moves the printing position to the start of the next vertical tab position. If there are no more vertical tab positions left on the page, the behavior is undefined.

Conversion Specifications

Each conversion specification is introduced by the percent-sign character (%). After the character %, the following appear in sequence:

flags — Zero or more *flags*, in any order, that modify the meaning of the conversion specification.

field width — An optional string of decimal digits to specify a minimum *field width*. For an output field, if the converted value has fewer bytes than the field width, it is padded on the left (or right, if the left-adjustment flag (–), described below, has been given to the field width).

precision — Gives the minimum number of digits to appear for the d, o, i, u, x or X conversions (the field is padded with leading zeros), the number of digits to appear after the radix character for the e and f conversions, the maximum number of significant digits for the g conversion; or the maximum number of bytes to be written from a string in s conversion. The precision takes the form of a period (.) followed by a decimal digit string; a null digit string is treated as zero.

conversion characters — A conversion character (see below) that indicates the type of conversion to be applied.

flags

The *flags* and their meanings are:

– The result of the conversion is left-justified within the field.

\+ The result of a signed conversion always begins with a sign (+ or –).

<*space*> If the first character of a signed conversion is not a sign, a space character is prefixed to the result. This means that if the space character and + flags both appear, the space character flag is ignored.

\# The value is to be converted to an alternative form. For c, d, i, u, and s conversions, the behaviour is undefined. For o conversion, it increases the

precision to force the first digit of the result to be a zero. For x or X conversion, a non-zero result has 0x or 0X prefixed to it, respectively. For e, E, f, g, and G conversions, the result always contains a radix character, even if no digits follow the radix character. For g and G conversions, trailing zeros are not removed from the result as they usually are.

0 For d, i, o, u, x, X, e, E, f, g, and G conversions, leading zeros (following any indication of sign or base) are used to pad to the field width; no space padding is performed. If the 0 and – flags both appear, the 0 flag is ignored. For d, i, o, u, x and X conversions, if a precision is specified, the 0 flag is ignored. For other conversions, the behaviour is undefined.

Conversion Characters

Each conversion character results in fetching zero or more arguments. The results are undefined if there are insufficient arguments for the format. If the format is exhausted while arguments remain, the excess arguments are ignored.

The *conversion characters* and their meanings are:

d,i,o,u,x,X The integer argument is written as signed decimal (d or i), unsigned octal (o), unsigned decimal (u), or unsigned hexadecimal notation (x and X). The d and i specifiers convert to signed decimal in the style `[−]`*dddd*. The x conversion uses the numbers and letters 0123456789abcdef and the X conversion uses the numbers and letters 0123456789ABCDEF. The *precision* component of the argument specifies the minimum number of digits to appear. If the value being converted can be represented in fewer digits than the specified minimum, it is expanded with leading zeros. The default precision is 1. The result of converting a zero value with a precision of 0 is no characters. If both the field width and precision are omitted, the implementation may precede, follow or precede and follow numeric arguments of types d, i and u with blank characters; arguments of type o (octal) may be preceded with leading zeros.

The treatment of integers and spaces is different from the `printf(3C)` function in that they can be surrounded with blank characters. This was done so that, given a format such as:

`"%d\n",<`*foo*`>`

the implementation could use a `printf()` call such as:

```
printf("%6d\n", foo);
```

and still conform. This notation is thus somewhat like `scanf()` in addition to `printf( ).`

f The floating point number argument is written in decimal notation in the style `[−]`*ddd.ddd*, where the number of digits after the radix character (shown here as a decimal point) is equal to the *precision* specification. The `LC_NUMERIC` locale category determines the radix character to use in this format. If the

precision is omitted from the argument, six digits are written after the radix character; if the *precision* is explicitly 0, no radix character appears.

e,E The floating point number argument is written in the style `[−]`*d.ddd*e±`dd` (the symbol ± indicates either a plus or minus sign), where there is one digit before the radix character (shown here as a decimal point) and the number of digits after it is equal to the precision. The `LC_NUMERIC` locale category determines the radix character to use in this format. When the precision is missing, six digits are written after the radix character; if the precision is 0, no radix character appears. The E conversion character produces a number with E instead of e introducing the exponent. The exponent always contains at least two digits. However, if the value to be written requires an exponent greater than two digits, additional exponent digits are written as necessary.

g,G The floating point number argument is written in style f or e (or in style E in the case of a G conversion character), with the precision specifying the number of significant digits. The style used depends on the value converted: style g is used only if the exponent resulting from the conversion is less than −4 or greater than or equal to the precision. Trailing zeros are removed from the result. A radix character appears only if it is followed by a digit.

c The integer argument is converted to an `unsigned char` and the resulting byte is written.

s The argument is taken to be a string and bytes from the string are written until the end of the string or the number of bytes indicated by the *precision* specification of the argument is reached. If the precision is omitted from the argument, it is taken to be infinite, so all bytes up to the end of the string are written.

% Write a % character; no argument is converted.

In no case does a non-existent or insufficient *field width* cause truncation of a field; if the result of a conversion is wider than the field width, the field is simply expanded to contain the conversion result. The term *field width* should not be confused with the term *precision* used in the description of %s.

One difference from the C function `printf()` is that the l and h conversion characters are not used. There is no differentiation between decimal values for type `int`, type `long`, or type `short`. The specifications %d or %i should be interpreted as an arbitrary length sequence of digits. Also, no distinction is made between single precision and double precision numbers (`float` or `double` in C). These are simply referred to as floating point numbers.

Many of the output descriptions use the term `line`, such as:

"`%s`", <*input line*>

Since the definition of `line` includes the trailing newline character already, there is no need to include a `\n` in the format; a double newline character would otherwise result.

使用例

例 1 To represent the output of a program that prints a date and time in the form Sunday, July 3, 10:02, where <weekday> and <month> are strings:

```
"%s,/\%s/\%d,/\%d:%.2d\n",<weekday>,<month>,<day>,<hour>,<min>
```

例 2 To show pi written to 5 decimal places:

```
"pi/\=/\%.5f\n",<value of pi>
```

例 3 To show an input file format consisting of five colon-separated fields:

```
"%s:%s:%s:%s:%s\n",<arg1>,<arg2>,<arg3>,<arg4>,<arg5>
```

関連項目

awk(1), printf(1), printf(3C), scanf(3C)

名前

fsattr – extended file attributes

機能説明

Attributes are logically supported as files within the file system. The file system is therefore augmented with an orthogonal name space of file attributes. Any file (including attribute files) can have an arbitrarily deep attribute tree associated with it. Attribute values are accessed by file descriptors obtained through a special attribute interface. This logical view of "attributes as files" allows the leveraging of existing file system interface functionality to support the construction, deletion, and manipulation of attributes.

The special files "." and ". ." retain their accustomed semantics within the attribute hierarchy. The "." attribute file refers to the current directory and the ". ." attribute file refers to the parent directory. The unnamed directory at the head of each attribute tree is considered the "child" of the file it is associated with and the ". ." file refers to the associated file. For any non-directory file with attributes, the ". ." entry in the unnamed directory refers to a file that is not a directory.

Conceptually, the attribute model is fully general. Extended attributes can be any type of file (doors, links, directories, and so forth) and can even have their own attributes (fully recursive). As a result, the attributes associated with a file could be an arbitrarily deep directory hierarchy where each attribute could have an equally complex attribute tree associated with it. Not all implementations are able to, or want to, support the full model. Implementation are therefore permitted to reject operations that are not supported. For example, the implementation for the UFS file system allows only regular files as attributes (for example, no sub-directories) and rejects attempts to place attributes on attributes.

The following list details the operations that are rejected in the current implementation:

`link` Any attempt to create links between attribute and non-attribute space is rejected to prevent security-related or otherwise sensitive attributes from being exposed, and therefore manipulable, as regular files.

`rename` Any attempt to rename between attribute and non-attribute space is rejected to prevent an already linked file from being renamed and thereby circumventing the `link` restriction above.

`mkdir`
symlink
mknod Any attempt to create a "non-regular" file in attribute space is rejected to reduce the functionality, and therefore exposure and risk, of the initial implementation.

The entire available name space has been allocated to "general use" to bring the implementation in line with the NFSv4 draft standard [NFSv4]. That standard defines "named attributes" (equivalent to Solaris Extended Attributes) with no naming restrictions. All Sun applications making use of opaque extended attributes will use the prefix "SUNW".

Shell-level API

The command interface for extended attributes is the set of applications provided by Solaris for the manipulation of attributes from the command line. This interface consists of a set of existing utilities that have been extended to be "attribute-aware", plus the `runat` utility designed to "expose" the extended attribute space so that extended attributes can be manipulated as regular files.

The `-@` option enable utilities to manipulate extended attributes. As a rule, this option enables the utility to enter into attribute space when the utility is performing a recursive traversal of file system space. This is a fully recursive concept. If the underlying file system supports recursive attributes and directory structures, the `-@` option opens these spaces to the file tree-walking algorithms.

The following utilities accommodate extended attributes (see the individual manual pages for details):

`cp` By default, `cp` ignores attributes and copies only file data. This is intended to maintain the semantics implied by `cp` currently, where attributes (such as owner and mode) are not copied unless the `-p` option is specified. With the `-@` (or `-p`) option, `cp` attempts to copy all attributes along with the file data.

`cpio` The `-@` option informs `cpio` to archive attributes, but by default `cpio` ignores extended attributes. See `Extended Archive Formats` below for a description of the new archive records.

`du` File sizes computed include the space allocated for any extended attributes present.

`find` By default, `find` ignores attributes. The `-xattr` expression provides support for searches involving attribute space. It returns true if extended attributes are present on the current file.

`fsck` The `fsck` utility manages extended attribute data on the disk. A file system with extended attributes can be mounted on versions of Solaris that are not attribute-aware (versions prior to Solaris 9), but the attributes will not be accessible and `fsck` will strip them from the files and place them in `lost+found`. Once the attributes have been stripped the file system is completely stable on Solaris versions that are not attribute-aware, but would now be considered corrupted on attribute-aware versions of Solaris. The attribute-aware `fsck` utility should be run to stabilize the file system before using it in an attribute-aware environment.

`fsdb` This `fsdb` utility is able to find the inode for the "hidden" extended attribute directory.

`ls` The `ls -@` command displays an "@" following the mode information when extended attributes are present. More precisely, the output line for a given file contains an "@" character following the mode characters if the `pathconf(2)` variable `XATTR_EXISTS` is set to true. See the `pathconf()` section below. The `-@` option uses the same general output format as the `-l` option.

`mv` When a file is moved, all attributes are carried along with the file rename. When a file is moved across a file system boundary, the copy command invoked is similar to the `cp -p` variant described above and extended attributes are "moved". If the extended file attributes cannot be replicated, the move operation fails and the source file is not removed.

`pax` The `-@` option informs `pax` to archive attributes, but by default `pax` ignores extended attributes. The `pax(1)` utility is a generic replacement for both `tar(1)` and `cpio(1)` and is able to produce either output format in its archive. See `Extended Archive Formats` below for a description of the new archive records.

`tar` In the default case, `tar` does not attempt to place attributes in the archive. If the `-@` option is specified, however, `tar` traverses into the attribute space of all files being placed in the archive and attempts to add the attributes to the archive. A new record type has been introduced for extended attribute entries in `tar` archive files (the same is true for `pax` and `cpio` archives) similar to the way ACLs records were defined. See `Extended Archive Formats` below for a description of the new archive records.

There is a class of utilities (`chmod`, `chown`, `chgrp`) that one might expect to be modified in a manner similar to those listed above. For example, one might expect that performing `chmod` on a file would not only affect the file itself but would also affect at least the extended attribute directory if not any existing extended attribute files. This is not the case. The model chosen for extended attributes implies that the attribute directory and the attributes themselves are all file objects in their own right, and can therefore have independent file status attributes associated with them (a given implementation cannot support this, for example, for intrinsic attributes). The relationship is left undefined and a fine-grained control mechanism (`runat(1)`) is provided to allow manipulation of extended attribute status attributes as necessary.

The `runat` utility has the following syntax:

`runat` *filename* `[`*command*`]`

The `runat` utility executes the supplied command in the context of the "attribute space" associated with the indicated file. If no command argument is supplied, a shell is invoked. See `runat(1)` for details.

Application-level API

The primary interface required to access extended attributes at the programmatic level is the `openat(2)` function. Once a file descriptor has been obtained for an attribute file by an `openat()` call, all normal file system semantics apply. There is no attempt to place special semantics on `read(2)`, `write(2)`, `ftruncate(3C)`, or other functions when applied to attribute file descriptors relative to "normal" file descriptors.

The set of existing attributes can be browsed by calling `openat()` with "." as the file name and the `O_XATTR` flag set, resulting in a file descriptor for the attribute directory. The list of attributes is obtained by calls to `getdents(2)` on the returned file descriptor. If the target file did not previously have any attributes associated with it, an empty top-level attribute directory

is created for the file and subsequent `getdents()` calls will return only "." and ". .". While the owner of the parent file owns the extended attribute directory, it is not charged against its quota if the directory is empty. Attribute files themselves, however, are charged against the user quota as any other regular file.

Additional system calls have been provided as convenience functions, including `faccessat(2)`, `fchownat(2)`, `fstatat(2)`, `futimesat(2)`, `renameat(2)`, `unlinkat(2)`. These new functions, along with `openat()`, provide a mechanism to access files relative to an arbitrary point in the file system, rather than only the current working directory. This mechanism is particularly useful in situations when a file descriptor is available with no path. The `openat()` function, in particular, can be used in many contexts where `chdir()` or `fchdir()` is currently required. See `chdir(2)`.

Open a file relative to a file descriptor

`int openat (int` *fd*`, const char *`*path*`, int` *oflag* `[, mode_t` *mode*`])`

The `openat(2)` function behaves exactly as `open(2)` except when given a relative path. Where `open()` resolves a relative path from the current working directory, `openat()` resolves the path based on the vnode indicated by the supplied file descriptor. When *oflag* is `O_XATTR`, `openat()` interprets the *path* argument as an extended attribute reference. The following code fragment uses `openat()` to examine the attributes of some already opened file:

```
dfd = openat(fd, ".", O_RDONLY|O_XATTR);
(void)getdents(dfd, buf, nbytes);
```

If `openat()` is passed the special value `AT_FDCWD` as its first (*fd*) argument, its behavior is identical to `open()` and the relative path arguments are interpreted relative to the current working directory. If the `O_XATTR` flag is provided to `openat()` or to `open()`, the supplied path is interpreted as a reference to an extended attribute on the current working directory.

Unlink a file relative to a directory file descriptor

`int unlinkat (int` *dirfd*`, const char *path`*flag*`, int flag`*flag*`)`

The `unlinkat(2)` function deletes an entry from a directory. The *path* argument indicates the name of the entry to remove. If *path* an absolute path, the *dirfd* argument is ignored. If it is a relative path, it is interpreted relative to the directory indicated by the *dirfd* argument. If *dirfd* does not refer to a valid directory, the function returns `ENOTDIR`. If the special value `AT_FDCWD` is specified for *dirfd*, a relative path argument is resolved relative to the current working directory. If the *flag* argument is 0, all other semantics of this function are equivalent to `unlink(2)`. If *flag* is set to `AT_REMOVEDIR`, all other semantics of this function are equivalent to `rmdir(2)`.

Rename a file relative to directories

`int renameat (int` *fromfd*`, const char *`*old*`, int` *tofd*`, const char *`*new*`)`

The renameat(2) function renames an entry in a directory, possibly moving the entry into a different directory. The *old* argument indicates the name of the entry to rename. If this argument is a relative path, it is interpreted relative to the directory indicated by the *fd* argument. If it is an absolute path, the *fromfd* argument is ignored. The *new* argument indicates the new name for the entry. If this argument is a relative path, it is interpreted relative to the directory indicated by the *tofd* argument. If it is an absolute path, the *tofd* argument is ignored.

In the relative path cases, if the directory file descriptor arguments do not refer to a valid directory, the function returns ENOTDIR. All other semantics of this function are equivalent to rename(2).

If a special value AT_FDCWD is specified for either the *fromfd* or *tofd* arguments, their associated path arguments (*old* and *new*) are interpreted relative to the current working directory if they are not specified as absolute paths. Any attempt to use renameat() to move a file that is not an extended attribute into an extended attribute directory (so that it becomes an extended attribute) will fail. The same is true for an attempt to move a file that is an extended attribute into a directory that is not an extended attribute directory.

Obtain information about a file

```
int fstatat (int fd, const char *path, struct stat* buf, int flag)
```

The fstatat(2) function obtains information about a file. If the *path* argument is relative, it is resolved relative to the *fd* argument file descriptor, otherwise the *fd* argument is ignored. If the *fd* argument is a special value AT_FDCWD the path is resolved relative to the current working directory. If the *path* argument is a null pointer, the function returns information about the file referenced by the *fd* argument. In all other relative path cases, if the *fd* argument does not refer to a valid directory, the function returns ENOTDIR. If AT_SYMLINK_NOFOLLOW is set in the *flag* argument, the function will not automatically traverse a symbolic link at the position of the path. If _AT_TRIGGER is set in the *flag* argument and the vnode is a trigger mount point, the mount is performed and the function returns the attributes of the root of the mounted filesystem. The fstatat() function is a multipurpose function that can be used in place of stat(), lstat(), or fstat(). See stat(2)

The function call stat(*path*, *buf*) is identical to fstatat(AT_FDCWD, *path*, *buf*, 0).

The function call lstat(*path*, *buf*) is identical to fstatat(AT_FDCWD, *path*, *buf*, AT_SYMLINK_NOFOLLOW)

The function call fstat(*fildes*, *buf*) is identical to fstatat(*fildes*, NULL, *buf*, 0).

Set owner and group ID

```
int fchownat (int fd, const char *path, uid_t owner, gid_t group, \
          int flag)
```

The fchownat(2) function sets the owner ID and group ID for a file. If the *path* argument is relative, it is resolved relative to the *fd* argument file descriptor, otherwise the *fd* argument is ignored. If the *fd* argument is a special value AT_FDCWD the path is resolved relative to the current working directory. If the path argument is a null pointer, the function sets the owner and group ID of the file referenced by the *fd* argument. In all other relative path cases, if the *fd* argument does not refer to a valid directory, the function returns ENOTDIR. If the *flag* argument is set to AT_SYMLINK_NOFOLLOW, the function will not automatically traverse a symbolic link at the position of the path. The fchownat() function is a multi-purpose function that can be used in place of chown(), lchown(), or fchown(). See chown(2).

The function call chown(*path*, *owner*, *group*) is equivalent to fchownat(AT_FDCWD, *path*, *owner*, *group*, 0).

The function call lchown(*path*, *owner*, *group*) is equivalent to fchownat(AT_FDCWD, *path*, *owner*, *group*, AT_SYMLINK_NOFOLLOW).

Set file access and modification times

```
int futimesat (int fd, const char *path, const struct timeval \
              times[2])
```

The futimesat(2) function sets the access and modification times for a file. If the *path* argument is relative, it is resolved relative to the *fd* argument file descriptor; otherwise the *fd* argument is ignored. If the *fd* argument is the special value AT_FDCWD, the path is resolved relative to the current working directory. If the *path* argument is a null pointer, the function sets the access and modification times of the file referenced by the *fd* argument. In all other relative path cases, if the *fd* argument does not refer to a valid directory, the function returns ENOTDIR. The futimesat() function can be used in place of utimes(2).

The function call utimes(*path*, *times*) is equivalent to futimesat(AT_FDCWD, *path*, *times*).

Determine accessibility of a file

```
int faccessat(int fd, const char *path, int amode, int flag);
```

The faccessat() function checks the file named by the pathname pointed to by the *path* argument for accessibility according to the bit pattern contained in *amode*, using the real user ID in place of the effective user ID and the real group ID in place of the effective group ID. This allows a setuid process to verify that the user running it would have had permission to access this file.

If *path* specifies a relative path, the file whose accessibility is to be determined is located relative to the directory associated with the file descriptor *fd* instead of the current working directory. If *path* specifies an absolute path, the *fd* argument is ignored.

If `faccessat()` is passed in the *fd* parameter the special value `AT_FDCWD`, defined in `<fcntl.h>`, the current working directory is used and the behavior is identical to a call to `access(2)`.

New pathconf() functionality

```
long int pathconf(const char *path, int name)
```

Two variables have been added to `pathconf(2)` to provide enhanced support for extended attribute manipulation. The `XATTR_ENABLED` variable allows an application to determine if attribute support is currently enabled for the file in question. The `XATTR_EXISTS` variable allows an application to determine whether there are any extended attributes associated with the supplied path.

Open/Create an attribute file

```
int attropen (const char *path, const char *attrpath, int oflag \
        [, mode_t mode])
```

The `attropen(3C)` function returns a file descriptor for the named attribute, *attrpath*, of the file indicated by *path*. The *oflag* and *mode* arguments are identical to the `open(2)` arguments and are applied to the open operation on the attribute file (for example, using the `O_CREAT` flag creates a new attribute). Once opened, all normal file system operations can be used on the attribute file descriptor. The `attropen()` function is a convenience function and is equivalent to the following sequence of operations:

```
fd = open (path, O_RDONLY);
attrfd = openat(fd, attrpath, oflag|O_XATTR, mode);
close(fd);
```

The set of existing attributes can be browsed by calling `attropen()` with "." as the attribute name. The list of attributes is obtained by calling `getdents(2)` (or `fdopendir(3C)` followed by `readdir(3C)`, see below) on the returned file descriptor.

Convert an open file descriptor for a directory into a directory descriptor

```
DIR * fdopendir (const int fd)
```

The `fdopendir(3C)` function promotes a file descriptor for a directory to a directory pointer suitable for use with the `readdir(3C)` function. The originating file descriptor should not be used again following the call to `fdopendir()`. The directory pointer should be closed with a call to `closedir(3C)`. If the provided file descriptor does not reference a directory, the function returns `ENOTDIR`. This function is useful in circumstances where the only available handle on a directory is a file descriptor. See `attropen(3C)` and `openat(2)`.

Using the API

The following examples demonstrate how the API might be used to perform basic operations on extended attributes:

例 1 List extended attributes on a file.

```
attrdirfd = attropen("test", ".", O_RDONLY);
dirp = fdopendir(attrdirfd);
while (dp = readdir(dirp)) {
...
```

例 2 Open an extended attribute.

```
attrfd = attropen("test", dp->d_name, O_RDONLY);
```

or

```
attrfd = openat(attrdirfd, dp->d_name, O_RDONLY);
```

例 3 Read from an extended attribute.

```
while (read(attrfd, buf, 512) > 0) {
...
```

例 4 Create an extended attribute.

```
newfd = attropen("test", "attr", O_CREAT|O_RDWR);
```

or

```
newfd = openat(attrdirfd, "attr", O_CREAT|O_RDWR);
```

例 5 Write to an extended attribute.

```
count = write(newfd, buf, length);
```

例 6 Delete an extended attribute.

```
error = unlinkat(attrdirfd, "attr");
```

Applications intending to access the interfaces defined here as well as the POSIX and X/Open specification-conforming interfaces should define the macro `_ATFILE_SOURCE` to be 1 and set whichever feature test macros are appropriate to obtain the desired environment. See `standards(5)`.

Extended Archive Formats

As noted above in the description of command utilities modified to provide support for extended attributes, the archive formats for `tar(1)` and `cpio(1)` have been extended to provide support for archiving extended attributes. This section describes the specifics of the archive format extensions.

Extended tar format

The `tar` archive is made up of a series of 512 byte blocks. Each archived file is represented by a header block and zero or more data blocks containing the file contents. The header block is structured as shown in the following table.

Field Name	Length (in Octets)	Description
Name	100	File name string
Mode	8	12 file mode bits
Uid	8	User ID of file owner
Gid	8	Group ID of file owner
Size	12	Size of file
Mtime	12	File modification time
Chksum	8	File contents checksum
Typeflag	1	File type flag
Linkname	100	Link target name if file linked
Magic	6	“ustar”
Version	2	“00”
Uname	32	User name of file owner
Gname	32	Group name of file owner
Devmajor	8	Major device ID if special file
Devminor	8	Minor device ID if special file
Prefix	155	Path prefix string for file

The extended attribute project extends the above header format by defining a new header type (for the `Typeflag` field). The type 'E' is defined to be used for all extended attribute files. Attribute files are stored in the `tar` archive as a sequence of two `<header ,data>` pairs. The first file contains the data necessary to locate and name the extended attribute in the file system. The second file contains the actual attribute file data. Both files use an 'E' type header. The prefix and name fields in extended attribute headers are ignored, though they should be set to meaningful values for the benefit of archivers that do not process these headers. Solaris archivers set the prefix field to “`/dev/null`” to prevent archivers that do not understand the type 'E' header from trying to restore extended attribute files in inappropriate places.

Extended cpio format

The `cpio` archive format is octet-oriented rather than block-oriented. Each file entry in the archive includes a header that describes the file, followed by the file name, followed by the contents of the file. These data are arranged as described in the following table.

Field Name	Length (in Octets)	Description
c_magic	6	70707
c_dev	6	First half of unique file ID
c_ino	6	Second half of unique file ID
c_mode	6	File mode bits
c_uid	6	User ID of file owner
c_gid	6	Group ID of file owner
c_nlink	6	Number of links referencing file
c_rdev	6	Information for special files
c_mtime	11	Modification time of file
c_namesize	6	Length of file pathname
c_filesize	11	Length of file content
c_name	c_namesize	File pathname
c_filedata	c_filesize	File content

The basic archive file structure is not changed for extended attributes. The file type bits stored in the `c_mode` field for an attribute file are set to `0xB000`. As with the `tar` archive format, extended attributes are stored in `cpio` archives as two consecutive file entries. The first file describes the location/name for the extended attribute. The second file contains the actual attribute file content. The `c_name` field in extended attribute headers is ignored, though it should be set to a meaningful value for the benefit of archivers that do not process these headers. Solaris archivers start the pathname with "`/dev/null/`"to prevent archivers that do not understand the type 'E' header from trying to restore extended attribute files in inappropriate places.

Attribute identification data format

Both the `tar` and `cpio` archive formats can contain the special files described above, always paired with the extended attribute data record, for identifying the precise location of the extended attribute. These special data files are necessary because there is no simple naming mechanism for extended attribute files. Extended attributes are not visible in the file system name space. The extended attribute name space must be "tunneled into" using the `openat()` function. The attribute identification data must support not only the flat naming structure for extended attributes, but also the possibility of future extensions allowing for attribute directory hierarchies and recursive attributes. The data file is therefore composed of a sequence of records. It begins with a fixed length header describing the content. The following table describes the format of this data file.

Field Name	Length (in Octets)	Description
h_version	7	Name file version
h_size	10	Length of data file
h_component_len	10	Total length of all path segments
h_link_comp_len	10	Total length of all link segments
path	h_component_len	Complex path
link_path	h_link_comp_len	Complex link path

As demonstrated above, the header is followed by a record describing the “path” to the attribute file. This path is composed of two or more path segments separated by a null character. Each segment describes a path rooted at the hidden extended attribute directory of the leaf file of the previous segment, making it possible to name attributes on attributes. The first segment is always the path to the parent file that roots the entire sequence in the normal name space. The following table describes the format of each segment.

Field Name	Length (in Octets)	Description
h_namesz	7	Length of segment path
h_typeflag	1	Actual file type of attribute file
h_names	h_namesz	Parent path + segment path

If the attribute file is linked to another file, the path record is followed by a second record describing the location of the referencing file. The structure of this record is identical to the record described above.

関連項目

cp(1), cpio(1), find(1), ls(1), mv(1), pax(1), runat(1), tar(1), du(1), fsck(1M), access(2), chown(2), link(2), open(2), pathconf(2), rename(2), stat(2), unlink(2), utimes(2), attropen(3C), standards(5)

名前

grub – GRUB (GRand Unified Bootloader) ソフトウェア (Solaris 版)

機能説明

Solaris オペレーティングシステムの現行リリースには、GRUB (GRand Unified Bootloader) ソフトウェアが付属しています。GRUB は、Free Software Foundation によって開発およびサポートされています。

`www.gnu.org` からアクセス可能な GRUB マニュアルの「Overview」では、GRUB を次のように説明しています。

> Briefly, a boot loader is the first software program that runs when a computer starts. It is responsible for loading and transferring control to an operating system kernel software (such as Linux or GNU Mach). The kernel, in turn, initializes the rest of the operating system (for example, a GNU [Ed. note: or Solaris] system).
>
> GNU GRUB is a very powerful boot loader that can load a wide variety of free, as well as proprietary, operating systems, by means of chain-loading. GRUB is designed to address the complexity of booting a personal computer; both the program and this manual are tightly bound to that computer platform, although porting to other platforms may be addressed in the future. [Ed. note: Sun has ported GRUB to the Solaris operating system.]
>
> One of the important features in GRUB is flexibility; GRUB understands filesystems and kernel executable formats, so you can load an arbitrary operating system the way you like, without recording the physical position of your kernel on the disk. Thus you can load the kernel just by specifying its file name and the drive and partition where the kernel resides.

GRUB がサポートされるのは、Solaris マシンのうち、x86 プラットフォームのみです。Solaris に付属する GRUB ソフトウェアには、オープンソースディストリビューションには含まれていない、次の 2 つのユーティリティーが追加されています。

`bootadm(1M)` ブートアーカイブの管理と GRUB メニューの変更を可能にします。

`installgrub(1M)` ディスクからブートプログラムをロードします。

これらのユーティリティーはどちらも、Solaris のマニュアルページで説明されています。

これら 2 つの Solaris 固有ユーティリティー以外の GRUB ソフトウェアについては、GRUB マニュアル内で説明されています。その PDF 版は Sun の Web サイトから入手可能となっています。また、`grub(8)` オープンソースマニュアルページも、同じ場所から入手可能となっています。このマニュアルページは GRUB シェルについて説明しています。

関連項目

boot(1M), bootadm(1M), installgrub(1M)

『Oracle Solaris 11 システムのインストール』

『Oracle Solaris の管理: 一般的なタスク』

http://www.gnu.org/software/grub

名前

gss_auth_rules – overview of GSS authorization

機能説明

The establishment of the veracity of a user's credentials requires both authentication (Is this an authentic user?) and authorization (Is this authentic user, in fact, authorized?).

When a user makes use of Generic Security Services (GSS) versions of the `ftp` or `ssh` clients to connect to a server, the user is not necessarily authorized, even if his claimed GSS identity is authenticated, Authentication merely establishes that the user is who he says he is to the GSS mechanism's authentication system. Authorization is then required: it determines whether the GSS identity is permitted to access the specified Solaris user account.

The GSS authorization rules are as follows:

- If the mechanism of the connection has a set of authorization rules, then use those rules. For example, if the mechanism is Kerberos, then use the `krb5_auth_rules(5)`, so that authorization is consistent between raw Kerberos applications and GSS/Kerberos applications.
- If the mechanism of the connection does not have a set of authorization rules, then authorization is successful if the remote user's `gssname` matches the local user's `gssname` exactly, as compared by `gss_compare_name(3GSS)`.

ファイル

`/etc/passwd` System account file. This information may also be in a directory service. See `passwd(4)`.

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed

関連項目

`ftp(1)`, `ssh(1)`, `gsscred(1M)`, `gss_compare_name(3GSS)`, `passwd(4)`, `attributes(5)`, `krb5_auth_rules(5)`

名前

hal – ハードウェア抽象化レイヤーの概要

機能説明

ハードウェア抽象化レイヤー (HAL) は、システムに接続されている各種ハードウェアのビューを提供します。このビューは、ハードウェア構成に変化があると、ホットプラグなどのメカニズムを通じて動的に更新されます。HAL は、ハードウェアの断片をデバイスオブジェクトとして表します。デバイスオブジェクトは、一意の識別子によって識別され、デバイスプロパティーと呼ばれる一連のキーと値のペアを保持します。プロパティーには、実際のハードウェアから取得されるもの、デバイス情報ファイル (`.fdi` ファイル) からマージされるもの、実際のデバイス構成に関連しているものがあります。

HAL は、D-Bus を通して使いやすい API を提供します。D-Bus はさまざまな機能を持つ IPC フレームワークであり、特に、アプリケーション間のやりとりを可能にするシステム全体のメッセージバスを提供します。具体的には、D-Bus は非同期の通知を提供するため、デバイスの追加と削除、およびデバイスのプロパティーの変更が行われたときに、HAL はメッセージバス上のほかの相手に通知できます。

Solaris オペレーティングシステムでは、HAL は `hald(1M)` デーモン、およびデバイスの追加と削除およびそのプロパティーの変更を行う一連のユーティリティーでサポートされています。

関連項目

`hald(1M)`, `fdi(4)`

HAL の仕様などについては、HAL のページ http://freedesktop.org を参照してください。

名前 iconv_1250 – code set conversion tables for MS 1250 (Windows Latin 2)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
MS 1250	win2	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
MS 1250	win2	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
MS 1250	win2	Mazovia	maz	Mazovia
MS 1250	win2	DHN	dhn	Dom Handlowy Nauki

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

MS 1250 to ISO 8859-2 For the conversion of MS 1250 to ISO 8859-2, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1250	ISO 8859-2	MS 1250	ISO 8859-2
24-211	40	235	273
212	251	236	276
213	40	237	274
214	246	241	267
215	253	245	241
216	256	246-267	40
217	254	271	261
221-231	40	273	40
232	271	274	245
233	40	276	265
234	266	247	365

MS 1250 to MS 852 For the conversion of MS 1250 to MS 852, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1250	MS 852	MS 1250	MS 852
200-211	40	311	220
212	346	312	250
213	40	313	323
214	227	314	267
215	233	315	326
216	246	316	327
217	215	317	322
220-231	40	320	321
232	347	321	343
233	40	322	325
234	230	323	340
235	234	324	342
236	247	325	212
237	253	326	231
240	377	327	236
241	363	330	374
242	364	331	336
243	235	332	351
244	317	333	353
245	244	334	232
246	40	335	355
247	365	336	335
250	371	337	341
251	40	340	352
252	270	341	240
253	256	342	203
254	252	343	307

Conversions Performed			
MS 1250	MS 852	MS 1250	MS 852
255	360	344	204
256	40	345	222
257	275	346	206
260	370	347	207
261	40	350	237
262	362	351	202
263	210	352	251
264	357	353	211
265-267	40	354	330
270	367	355	241
271	245	356	214
272	255	357	324
273	257	360	320
274	225	361	344
275	361	362	345
276	226	363	242
277	276	364	223
300	350	365	213
301	265	366	224
302	266	367	366
303	306	370	375
304	216	371	205
305	221	372	243
306	217	374	201
307	200	375	354
310	254	376	356

MS 1250 to Mazovia

For the conversion of MS 1250 to Mazovia, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1250	Mazovia	MS 1250	Mazovia
200-213	40	310-311	40
214	230	312	220
215-216	40	313-320	40
217	240	321	245
220-233	40	322	40
234	236	323	243
235-236	40	324-325	40
237	246	326	231
240	377	327-333	40
241-242	40	334	232
243	234	335-336	40
244	40	337	341
245	217	340-341	40
246-252	40	342	203
253	256	343	40
254	252	344	204
255-256	40	345	40
257	241	346	215
260	370	347	207
261	361	350	40
262	40	351	202
263	222	352	221
264	40	353	211
265	346	354-355	40
266	40	356	214

Conversions Performed			
MS 1250	Mazovia	MS 1250	Mazovia
267	372	357-360	40
270	40	361	244
271	206	362	40
272	40	363	242
273	257	364	223
274-276	40	365	40
277	247	366	224
300-303	40	367	366
304	216	370-373	40
305	40	374	201
306	225	375-376	40
307	200		

MS 1250 to DHN

For the conversion of MS 1250 to DHN, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1250	DHN	MS 1250	DHN
200-213	40	306	201
214	206	307-311	40
215-216	40	312	202
217	207	313-320	40
220-233	40	321	204
234	217	322	40
235-236	40	323	205
237	220	324-325	40
240	377	326	231
241-242	40	327-333	40
243	203	334	232

Conversions Performed			
MS 1250	DHN	MS 1250	DHN
244	40	335-336	40
245	200	337	341
246-252	40	340	40
253	256	341	240
254	252	342-345	40
255-256	40	346	212
257	210	347-351	40
260	370	352	213
261	361	353-354	40
262	40	355	241
263	214	356-360	40
264	40	361	215
265	346	362	40
266	40	363	216
267	372	364	223
270	40	365	40
271	211	366	224
272	40	367	366
273	257	370-371	40
274-276	40	372	243
277	221	373-376	40
300-305	40		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前 iconv_1251 – code set conversion tables for MS 1251 (Windows Cyrillic)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
MS 1251	win5	ISO 8859-5	iso5	ISO 8859-5 Cyrillic
MS 1251	win5	KOI8-R	koi8	KOI8-R
MS 1251	win5	PC Cyrillic	alt	Alternative PC Cyrillic
MS 1251	win5	Mac Cyrillic	mac	Macintosh Cyrillic

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

MS 1251 to ISO 8859-5 For the conversion of MS 1251 to ISO 8859-5, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1251	ISO 8859-5	MS 1251	ISO 8859-5
24	4	310	270
200	242	311	271
201	243	312	272
202	40	313	273
203	363	314	274
204-207	40	315	275
210	255	316	276
211	40	317	277
212	251	320	300
213	40	321	301
214	252	322	302
215	254	323	303
216	253	324	304
217	257	325	305

Conversions Performed			
MS 1251	ISO 8859-5	MS 1251	ISO 8859-5
220	362	326	306
221-227	40	327	307
230	255	330	310
231	40	331	311
232	371	332	312
233	40	333	313
234	372	334	314
235	374	335	315
236	373	336	316
237	377	337	317
241	256	340	320
242	376	341	321
243	250	342	322
244-247	40	343	323
250	241	344	324
251	40	345	325
252	244	346	326
253-254	40	347	327
255	55	350	330
256	40	351	331
257	247	352	332
260-261	40	353	333
262	246	354	334
263	366	355	335
264-267	40	356	336
270	361	357	337
271	360	360	340

Conversions Performed			
MS 1251	ISO 8859-5	MS 1251	ISO 8859-5
272	364	361	341
273	40	362	342
274	370	363	343
275	245	364	344
276	365	365	345
277	367	366	346
300	260	367	347
301	261	370	350
302	262	371	351
303	263	372	352
304	264	373	353
305	265	374	354
306	266	375	355
307	267	376	356

MS 1251 to KOI8-R

For the conversion of MS 1251 to KOI8-R , all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1251	KOI8-R	MS 1251	KOI8-R
24	4	310	351
200	261	311	352
201	262	312	353
202	40	313	354
203	242	314	355
204-207	40	315	356
210	255	316	357
211	40	317	360
212	271	320	362

Conversions Performed			
MS 1251	KOI8-R	MS 1251	KOI8-R
213	40	321	363
214	272	322	364
215	274	323	365
216	273	324	346
217	277	325	350
220	241	326	343
221-227	40	327	376
230	255	330	373
231	40	331	375
232	251	332	377
233	40	333	371
234	252	334	370
235	254	335	374
236	253	336	340
237	257	337	361
241	276	340	301
242	256	341	302
243	270	342	327
244-247	40	343	307
250	263	344	304
251	40	345	305
252	264	346	326
253-254	40	347	332
255	55	350	311
256	40	351	312
257	267	352	313
260-261	40	353	314

Conversions Performed			
MS 1251	KOI8-R	MS 1251	KOI8-R
262	266	354	315
263	246	355	316
264-267	40	356	317
270	243	357	320
271	260	360	322
272	244	361	323
273	40	362	324
274	250	363	325
275	265	364	306
276	245	365	310
277	247	366	303
300	341	367	336
301	342	370	333
302	367	371	335
303	347	372	337
304	344	373	331
305	345	374	330
306	366	375	334
307	372	376	300

MS 1251 to PC Cyrillic

For the conversion of MS 1251 to PC Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1251	PC Cyrillic	MS 1251	PC Cyrillic
24	4	332	232
200-207	40	333	233
210	260	334	234
211-227	40	335	235

Conversions Performed			
MS 1251	PC Cyrillic	MS 1251	PC Cyrillic
230	260	336	236
231-247	40	337	237
250	360	340	240
251-254	40	341	241
255	55	342	242
256-267	40	343	243
270	361	344	244
271-277	40	345	245
300	200	346	246
301	201	347	247
302	202	350	250
303	203	351	251
304	204	352	252
305	205	353	253
306	206	354	254
307	207	355	255
310	210	356	256
311	211	357	257
312	212	360	340
313	213	361	341
314	214	362	342
315	215	363	343
316	216	364	344
317	217	365	345
320	220	366	346
321	221	367	347
322	222	370	350

Conversions Performed			
MS 1251	PC Cyrillic	MS 1251	PC Cyrillic
323	223	371	351
324	224	372	352
325	225	373	353
326	226	374	354
327	227	375	355
330	230	376	356
331	231		

MS 1251 to Mac Cyrillic

For the conversion of MS 1251 to Mac Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 1251	Mac Cyrillic	MS 1251	Mac Cyrillic
24	4	260	241
200	253	262	247
201	256	263	264
202	40	264	266
203	257	266	246
204	327	267	245
205	311	270	336
206	240	271	334
207-211	40	272	271
212	274	273	310
213	40	274	300
214	276	275	301
215	315	276	317
216	40	277	273
217	332	300	200
220	254	301	201

Conversions Performed			
MS 1251	Mac Cyrillic	MS 1251	Mac Cyrillic
221	324	302	202
222	325	303	203
223	322	304	204
224	323	305	205
225	40	306	206
226	320	307	207
227	321	310	210
230	40	311	211
231	252	312	212
232	275	313	213
233	40	314	214
234	277	315	215
235	316	316	216
236	40	317	217
237	333	320	220
240	312	321	221
241	330	322	222
242	331	323	223
243	267	324	224
244	377	325	225
245	242	326	226
246	40	327	227
247	244	330	230
250	335	331	231
252	270	332	232
253	307	333	233
254	302	334	234

Conversions Performed			
MS 1251	Mac Cyrillic	MS 1251	Mac Cyrillic
255	55	335	235
256	250	336	236
257	272	337	237
355	316		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前　　iconv – コードセット変換テーブル

機能説明　　以下に示すようなコードセット変換が可能です。

Code Set Conversions Supported

Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
ISO 646	646	ISO 8859-1	8859	US ASCII
ISO 646de	646de	ISO 8859-1	8859	German
ISO 646da	646da	ISO 8859-1	8859	Danish
ISO 646en	646en	ISO 8859-1	8859	English ASCII
ISO 646es	646es	ISO 8859-1	8859	Spanish
ISO 646fr	646fr	ISO 8859-1	8859	French
ISO 646it	646it	ISO 8859-1	8859	Italian
ISO 646sv	646sv	ISO 8859-1	8859	Swedish
ISO 8859-1	8859	ISO 646	646	7 bit ASCII
ISO 8859-1	8859	ISO 646de	646de	German
ISO 8859-1	8859	ISO 646da	646da	Danish
ISO 8859-1	8859	ISO 646en	646en	English ASCII
ISO 8859-1	8859	ISO 646es	646es	Spanish
ISO 8859-1	8859	ISO 646fr	646fr	French
ISO 8859-1	8859	ISO 646it	646it	Italian
ISO 8859-1	8859	ISO 646sv	646sv	Swedish
ISO 8859-16	iso16	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
ISO 8859-2	iso2	ISO 8859-16	iso16	ISO Latin 10
ISO 8859-16	iso16	IBM 850	ibm850	IBM 850 code page
ISO 8859-16	iso16	IBM 870	ibm870	IBM 870 code page
ISO 8859-2	iso2	MS 1250	win2	Windows Latin 2
ISO 8859-2	iso2	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
ISO 8859-2	iso2	Mazovia	maz	Mazovia
IBM 850	ibm850	ISO 8859-16	iso16	ISO Latin 10
IBM 870	ibm870	ISO 8859-16	iso16	ISO Latin 10
MS 1250	win2	DHN	dhn	Dom Handlowy Nauki
MS 852	dos2	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
MS 852	dos2	MS 1250	win2	Windows Latin 2
MS 852	dos2	Mazovia	maz	Mazovia
MS 852	dos2	DHN	dhn	Dom Handlowy Nauki
Mazovia	maz	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
Mazovia	maz	MS 1250	win2	Windows Latin 2
Mazovia	maz	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
Mazovia	maz	DHN	dhn	Dom Handlowy Nauki
DHN	dhn	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
DHN	dhn	MS 1250	win2	Windows Latin 2
DHN	dhn	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
DHN	dhn	Mazovia	maz	Mazovia
ISO 8859-5	iso5	KOI8-R	koi8	KOI8-R
ISO 8859-5	iso5	PC Cyrillic	alt	Alternative PC Cyrillic

```
ISO 8859-5      iso5     MS 1251        win5     Windows Cyrillic
ISO 8859-5      iso5     Mac Cyrillic   mac      Macintosh Cyrillic
KOI8-R          koi8     ISO 8859-5     iso5     ISO 8859-5 Cyrillic
KOI8-R          koi8     PC Cyrillic    alt      Alternative PC Cyrillic
KOI8-R          koi8     MS 1251        win5     Windows Cyrillic
KOI8-R          koi8     Mac Cyrillic   mac      Macintosh Cyrillic
PC Cyrillic     alt      ISO 8859-5     iso5     ISO 8859-5 Cyrillic
PC Cyrillic     alt      KOI8-R         koi8     KOI8-R
PC Cyrillic     alt      MS 1251        win5     Windows Cyrillic
PC Cyrillic     alt      Mac Cyrillic   mac      Macintosh Cyrillic
MS 1251         win5     ISO 8859-5     iso5     ISO 8859-5 Cyrillic
MS 1251         win5     KOI8-R         koi8     KOI8-R
MS 1251         win5     PC Cyrillic    alt      Alternative PC Cyrillic
MS 1251         win5     Mac Cyrillic   mac      Macintosh Cyrillic
Mac Cyrillic    mac      ISO 8859-5     iso5     ISO 8859-5 Cyrillic
Mac Cyrillic    mac      KOI8-R         koi8     KOI8-R
Mac Cyrillic    mac      PC Cyrillic    alt      Alternative PC Cyrillic
Mac Cyrillic    mac      MS 1251        win5     Windows Cyrillic
```

コード変換

変換処理は、次の「コード変換の索引」に記述されたマニュアルページに含まれる表に従って行われます。

コード変換の索引		
コード	出力側コード	参照マニュアルページ
ISO 646	ISO 8859-1	iconv_646 (5)
ISO 646de	ISO 8859-1	
ISO 646da	ISO 8859-1	
ISO 646en	ISO 8859-1	
ISO 646es	ISO 8859-1	
ISO 646fr	ISO 8859-1	
ISO 646it	ISO 8859-1	
ISO 646sv	ISO 8859-1	
ISO 8859-1	ISO 646	iconv_8859-1 (5)
ISO 8859-1	ISO 646de	
ISO 8859-1	ISO 646da	
ISO 8859-1	ISO 646en	
ISO 8859-1	ISO 646es	

コード変換の索引		
ISO 8859-1	ISO 646fr	
ISO 8859-1	ISO 646it	
ISO 8859-1	ISO 646sv	
ISO 8859-2	MS 1250	iconv_8859-2 (5)
ISO 8859-2	MS 852	
ISO 8859-2	Mazovia	
ISO 8859-2	DHN	
MS 1250	ISO 8859-2	iconv_1250 (5)
MS 1250	MS 852	
MS 1250	Mazovia	
MS 1250	DHN	
MS 852	ISO 8859-2	iconv_852 (5)
MS 852	MS 1250	
MS 852	Mazovia	
MS 852	DHN	
Mazovia	ISO 8859-2	iconv_maz (5)
Mazovia	MS 1250	
Mazovia	MS 852	
Mazovia	DHN	

コード変換の索引		
コード	出力側コード	参照マニュアルページ
DHN	ISO 8859-2	iconv_dhn (5)
DHN	MS 1250	
DHN	MS 852	
DHN	Mazovia	
ISO 8859-5	KOI8-R	iconv_8859-5 (5)
ISO 8859-5	PC Cyrillic	

コード変換の索引		
ISO 8859-5	MS 1251	
ISO 8859-5	Mac Cyrillic	
KOI8-R	ISO 8859-5	iconv_koi8-r (5)
KOI8-R	PC Cyrillic	
KOI8-R	MS 1251	
KOI8-R	Mac Cyrillic	
PC Cyrillic	ISO 8859-5	iconv_pc_cyr (5)
PC Cyrillic	KOI8-R	
PC Cyrillic	MS 1251	
PC Cyrillic	Mac Cyrillic	
MS 1251	ISO 8859-5	iconv_1251 (5)
MS 1251	KOI8-R	
MS 1251	PC Cyrillic	
MS 1251	Mac Cyrillic	
Mac Cyrillic	ISO 8859-5	iconv_mac_cyr (5)
Mac Cyrillic	KOI8-R	
Mac Cyrillic	PC Cyrillic	
Mac Cyrillic	MS 1251	

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`
　変換モジュール

`/usr/lib/iconv/*.t`
　変換テーブル

`/usr/lib/iconv/geniconvtbl/binarytables/*.bt`
　バイナリ形式の変換テーブル

`/usr/lib/iconv/iconv_data`
　変換テーブルがサポートしている変換のリスト

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv_1250(5)`, `iconv_1251(5)`, `iconv_646(5)`, `iconv_852(5)`, `iconv_8859-1(5)`, `iconv_8859-2(5)`, `iconv_8859-5(5)`, `iconv_dhn(5)`, `iconv_koi8-r(5)`, `iconv_mac_cyr(5)`, `iconv_maz(5)`, `iconv_pc_cyr(5)`, `iconv_unicode(5)`

名前 iconv_646 – code set conversion tables for ISO 646

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	**Symbol**	**Target Code**	**Symbol**	**Target Output**
ISO 646	646	ISO 8859-1	8859	US ASCII
ISO 646de	646de	ISO 8859-1	8859	German
ISO 646da	646da	ISO 8859-1	8859	Danish
ISO 646en	646en	ISO 8859-1	8859	English ASCII
ISO 646es	646es	ISO 8859-1	8859	Spanish
ISO 646fr	646fr	ISO 8859-1	8859	French
ISO 646it	646it	ISO 8859-1	8859	Italian
ISO 646sv	646sv	ISO 8859-1	8859	Swedish

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

ISO 646 (US ASCII) to ISO 8859-1 For the conversion of ISO 646 to ISO 8859-1, all characters in ISO 646 can be mapped unchanged to ISO 8859-1

ISO 646de (GERMAN) to ISO 8859-1 For the conversion of ISO 646de to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 646de	**ISO 8859-1**	**ISO 646de**	**ISO 8859-1**
100	247	173	344
133	304	174	366
134	326	175	374
135	334	176	337

ISO 646da (DANISH) to ISO 8859-1 For the conversion of ISO 646da to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 646da	ISO 8859-1	ISO 646da	ISO 8859-1
133	306	173	346
134	330	174	370
135	305	175	345

ISO 646en (ENGLISH ASCII) to ISO 8859-1

For the conversion of ISO 646en to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed	
ISO 646en	ISO 8859-1
043	243

ISO 646es (SPANISH) to ISO 8859-1

For the conversion of ISO 646es to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 646es	ISO 8859-1	ISO 646es	ISO 8859-1
100	247	173	260
133	241	174	361
134	321	175	347
135	277		

ISO 646fr (FRENCH) to ISO 8859-1

For the conversion of ISO 646fr to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 646fr	ISO 8859-1	ISO 646fr	ISO 8859-1
043	243	173	351
100	340	174	371
133	260	175	350
134	347	176	250
135	247		

ISO 646it (ITALIAN) to ISO 8859-1

For the conversion of ISO 646it to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 646it	ISO 8859-1	ISO 646it	ISO 8859-1
043	243	140	371
100	247	173	340
133	260	174	362
134	347	175	350
135	351	176	354

ISO 646sv (SWEDISH) to ISO 8859-1

For the conversion of ISO 646sv to ISO 8859-1, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 646sv	ISO 8859-1	ISO 646sv	ISO 8859-1
100	311	140	351
133	304	173	344
134	326	174	366
135	305	175	345
136	334	176	374

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前 iconv_852 – code set conversion tables for MS 852 (MS-DOS Latin 2)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
MS 852	dos2	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
MS 852	dos2	MS 1250	win2	Windows Latin 2
MS 852	dos2	Mazovia	maz	Mazovia
MS 852	dos2	DHN	dhn	Dom Handlowy Nauki

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

MS 852 to ISO 8859-2 For the conversion of MS 852 to ISO 8859-2, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 852	ISO 8859-2	MS 852	ISO 8859-2
24-177	40	271-274	40
200	307	275	257
201	374	276	277
202	351	277-305	40
203	342	306	303
204	344	307	343
205	371	310-316	40
206	346	317	244
207	347	320	360
210	263	321	320
211	353	322	317
212	325	323	313
213	365	324	357
214	356	325	322

Conversions Performed			
MS 852	ISO 8859-2	MS 852	ISO 8859-2
215	254	326	315
216	304	327	316
217	306	330	354
220	311	331-334	40
221	305	335	336
222	345	336	331
223	364	337	40
224	366	340	323
225	245	341	337
226	265	342	324
227	246	343	321
230	266	344	361
231	326	345	362
232	334	346	251
233	253	347	271
234	273	350	300
235	243	351	332
236	327	352	340
237	350	353	333
240	341	354	375
241	355	355	335
242	363	356	376
243	372	357	264
244	241	360	255
245	261	361	275
246	256	362	262
247	276	363	267

Conversions Performed			
MS 852	ISO 8859-2	MS 852	ISO 8859-2
250	312	364	242
251	352	365	247
252	40	366	367
253	274	367	270
254	310	370	260
255	272	371	250
256-264	40	372	377
265	301	374	330
266	302	375	370
267	314	376	40
270	252		

MS 852 to MS 1250

For the conversion of MS 852 to MS 1250, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 852	MS 1250	MS 852	MS 1250
200	307	270	252
201	374	271-274	40
202	351	275	257
203	342	276	277
204	344	277-305	40
205	371	306	303
206	346	307	343
207	347	310-316	40
210	263	317	244
211	353	320	360
212	325	321	320
213	365	322	317

Conversions Performed			
MS 852	MS 1250	MS 852	MS 1250
214	356	323	313
215	217	324	357
216	304	325	322
217	306	326	315
220	311	327	316
221	305	330	354
222	345	331-334	40
223	364	335	336
224	366	336	331
225	274	337	40
226	276	340	323
227	214	341	337
230	234	342	324
231	326	343	321
232	334	344	361
233	215	345	362
234	235	346	212
235	243	347	232
236	327	350	300
237	350	351	332
240	341	352	340
241	355	353	333
242	363	354	375
243	372	355	335
244	245	356	376
245	271	357	264
246	216	360	255

Conversions Performed			
MS 852	MS 1250	MS 852	MS 1250
247	236	361	275
250	312	362	262
251	352	363	241
252	254	364	242
253	237	365	247
254	310	366	367
255	272	367	270
256	253	370	260
257	273	371	250
260-264	40	372	377
265	301	374	330
266	302	375	370
267	314	376	40

MS 852 to Mazovia

For the conversion of MS 852 to Mazovia, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 852	Mazovia	MS 852	Mazovia
205	40	246-247	40
206	215	250	220
210	222	251	221
212-213	40	253	246
215	240	254-270	40
217	225	275	241
220-226	40	276	247
227	230	306-336	40
230	236	340	243
233-234	40	342	40

Conversions Performed			
MS 852	Mazovia	MS 852	Mazovia
235	234	343	245
236-243	40	344	244
244	217	345-375	40
245	206		

MS 852 to DHN

For the conversion of MS 852 to DHN, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
MS 852	DHN	MS 852	DHN
200-205	40	244	200
206	212	245	211
207	40	246-247	40
210	214	250	202
211-214	40	251	213
215	207	253	220
216	40	254-270	40
217	201	275	210
220-226	40	276	221
227	206	306-336	40
230	217	340	205
233-234	40	342	40
235	203	343	204
236-237	40	344	215
242	216	345-375	40
252	254		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目 iconv(1), iconv(3C), iconv(5)

名前 iconv_8859-1 – code set conversion tables for ISO 8859-1 (Latin 1)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
ISO 8859-1	8859	ISO 646	646	7 bit ASCII
ISO 8859-1	8859	ISO 646de	646de	German
ISO 8859-1	8859	ISO 646da	646da	Danish
ISO 8859-1	8859	ISO 646en	646en	English ASCII
ISO 8859-1	8859	ISO 646es	646es	Spanish
ISO 8859-1	8859	ISO 646fr	646fr	French
ISO 8859-1	8859	ISO 646it	646it	Italian
ISO 8859-1	8859	ISO 646sv	646sv	Swedish

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

ISO 8859-1 to ISO 646 (7-bit ASCII) For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646, all characters not in the following table are mapped unchanged.

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242 243 244 245 246 247
250 251 252 253 254 255 256 257
260 261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303 304 305 306 307
310 311 312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325 326 327
330 331 332 333 334 335 336 337
340 341 342 343 344 345 346 347
350 351 352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365 366 367
370 371 372 373 374 375 376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646de (GERMAN)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646de, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646de	ISO 8859-1	ISO 646de
247	100	337	176
304	133	344	173
326	134	366	174
334	135	374	175

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
100 133 134 135 173 174 175 176
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242 243 244 245 246
250 251 252 253 254 255 256 257
260 261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303     305 306 307
310 311 312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325     327
330 331 332 333     335 336 337
340 341 342 343     345 346 347
350 351 352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365     367
370 371 372 373     375 376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646da (DANISH)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646da, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646da	ISO 8859-1	ISO 646da
305	135	345	175
306	133	346	173
330	134	370	174

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
133 134 135 173 174 175
```

```
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242 243 244 245 246 247
250 251 252 253 254 255 256 257
260 261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303 304         307
310 311 312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325 326 327
    331 332 333 334 335 336 337
340 341 342 343 344         347
350 351 352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365 366 367
371 372 373 374         376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646en (ENGLISH ASCII)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646en, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed	
ISO 8859-1	**ISO 646en**
243	043

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
043
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242     244 245 246 247
250 251 252 253 254 255 256 257
260 261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303 304 305 306 307
310 311 312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325 326 327
330 331 332 333 334 335 336 337
340 341 342 343 344 345 346 347
350 351 352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365 366 367
370 371 372 373 374 375 376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646fr (FRENCH)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646fr, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646fr	ISO 8859-1	ISO 646fr
243	043	347	134
247	135	350	175
250	176	351	173
260	133	371	174
340	100		

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
043
100 133 134 135 173 174 175 176
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242     244 245 246
    251 252 253 254 255 256 257
    261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303 304 305 306 307
310 311 312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325 326 327
330 331 332 333 334 335 336 337
    341 342 343 344 345 346
        352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365 366 367
370     372 373 374 375 376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646it (ITALIAN)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646it, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646it	ISO 8859-1	ISO 646it
243	043	350	175
247	100	351	135
260	133	354	176

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646it	ISO 8859-1	ISO 646it
340	173	362	174
347	134	371	140

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
043
100 133 134 135 173 174 175 176
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242     244 245 246
250 251 252 253 254 255 256 257
    261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303 304 305 306 307
310 311 312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325 326 327
330 331 332 333 334 335 336 337
    341 342 343 344 345 346
        352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365 366 367
370     372 373 374 375 376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646es (SPANISH)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646es, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646es	ISO 8859-1	ISO 646es
241	133	321	134
247	100	347	175
260	173	361	174
277	135		

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
100 133 134 135 173 174 175
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
```

```
240     242 243 244 245 246
250 251 252 253 254 255 256 257
    261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276
300 301 302 303 304 305 306 307
310 311 312 313 314 315 316 317
320     322 323 324 325 326 327
330 331 332 333 334 335 336 337
340 341 342 343 344 345 346
350 351 352 353 354 355 356 357
360     362 363 364 365 366 367
370 371 372 373 374 375 376 377
```

ISO 8859-1 to ISO 646sv (SWEDISH)

For the conversion of ISO 8859-1 to ISO 646sv, all characters not in the following tables are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-1	ISO 646sv	ISO 8859-1	ISO 646sv
304	133	344	173
305	135	345	175
311	100	351	140
326	134	366	174
334	136	374	176

```
Converted to Underscore '_' (137)
---------------------------------
100 133 134 135 136 140
173 174 175 176
200 201 202 203 204 205 206 207
210 211 212 213 214 215 216 217
220 221 222 223 224 225 226 227
230 231 232 233 234 235 236 237
240 241 242 243 244 245 246 247
250 251 252 253 254 255 256 257
260 261 262 263 264 265 266 267
270 271 272 273 274 275 276 277
300 301 302 303         306 307
310     312 313 314 315 316 317
320 321 322 323 324 325     327
330 331 332 333     335 336 337
340 341 342 343         346 347
350     352 353 354 355 356 357
360 361 362 363 364 365     367
370 371 372 373     375 376 377
```

ファイル	`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
	`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
	`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目 `iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前 iconv_8859-2 – code set conversion tables for ISO 8859-2 (Latin 2)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
ISO 8859-2	iso2	MS 1250	win2	Windows Latin 2
ISO 8859-2	iso2	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
ISO 8859-2	iso2	Mazovia	maz	Mazovia
ISO 8859-2	iso2	DHN	dhn	Dom Handlowy Nauki

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

ISO 8859-2 to MS 1250 For the conversion of ISO 8859-2 to MS 1250, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-2	MS 1250	ISO 8859-2	MS 1250
24	4	261	271
177-237	40	265	276
241	245	266	234
245	274	267	241
246	214	271	232
251	212	273	235
253	215	274	237
254	217	276	236
256	216	266	236

ISO 8859-2 to MS 852 For the conversion of ISO 8859-2 to MS 852, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-2	MS 852	ISO 8859-2	MS 852
24	4	316	327
177-237	40	317	322
240	377	320	321
241	244	321	343
242	364	322	325
243	235	323	340
244	317	324	342
245	225	325	212
246	227	326	231
247	365	327	236
250	371	330	374
251	346	331	336
252	270	332	351
253	233	333	353
254	215	334	232
255	360	335	355
256	246	336	335
257	275	337	341
260	370	340	352
261	245	341	240
262	362	342	203
263	210	343	307
264	357	344	204
265	226	345	222
266	230	346	206
267	363	347	207
270	367	350	237

Conversions Performed			
ISO 8859-2	MS 852	ISO 8859-2	MS 852
271	347	351	202
272	255	352	251
273	234	353	211
274	253	354	330
275	361	355	241
276	247	356	214
277	276	357	324
300	350	360	320
301	265	361	344
302	266	362	345
303	306	363	242
304	216	364	223
305	221	365	213
306	217	366	224
307	200	367	366
310	254	370	375
311	220	371	205
312	250	372	243
313	323	374	201
314	267	375	354
315	326	376	356
366	367		

ISO 8859-2 to Mazovia

For the conversion of ISO 8859-2 to Mazovia, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-2	Mazovia	ISO 8859-2	Mazovia
24	4	323	243

Conversions Performed			
ISO 8859-2	Mazovia	ISO 8859-2	Mazovia
177-237	40	324-325	40
240	377	326	231
241	217	327-333	40
242	40	334	232
243	234	335-336	40
244-245	40	337	341
246	230	340-341	40
247-253	40	342	203
254	240	343	40
255-256	40	344	204
257	241	345	40
260	370	346	215
261	206	347	207
262	40	350	40
263	222	351	202
264-265	40	352	221
266	236	353	211
267-273	40	354-355	40
274	246	356	214
275-276	40	357-360	40
277	247	361	244
300-303	40	362	40
304	216	363	242
305	40	364	223
306	225	365	40
307	200	366	224
310-311	40	367	366

Conversions Performed			
ISO 8859-2	Mazovia	ISO 8859-2	Mazovia
312	220	370-373	40
313-320	40	374	201
321	245	375-376	40
322	40		

ISO 8859-2 to DHN

For the conversion of ISO 8859-2 to DHN, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-2	DHN	ISO 8859-2	DHN
24	4	322	40
177-237	40	323	205
240	377	324-325	40
241	200	326	231
242	40	327-333	40
243	203	334	232
244-245	40	335-336	40
246	206	337	341
247-253	40	340	40
254	207	341	240
255-256	40	342-345	40
257	210	346	212
260	370	347-351	40
261	211	352	213
262	40	353-354	40
263	214	355	241
264-265	40	356-360	40
266	217	361	215
267-273	40	362	40

Conversions Performed			
ISO 8859-2	DHN	ISO 8859-2	DHN
274	220	363	216
275-276	40	364	223
277	221	365	40
300-305	40	366	224
306	201	367	366
307-311	40	370-371	40
312	202	372	243
313-320	40	373-376	40
321	204		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前 iconv_8859-5 – code set conversion tables for ISO 8859-5 (Cyrillic)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
ISO 8859-5	iso5	KOI8-R	koi8	KOI8-R
ISO 8859-5	iso5	PC Cyrillic	alt	Alternative PC Cyrillic
ISO 8859-5	iso5	MS 1251	win5	Windows Cyrillic
ISO 8859-5	iso5	Mac Cyrillic	mac	Macintosh Cyrillic

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

ISO 8859-5 to KOI8-R For the conversion of ISO 8859-5 to KOI8-R, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-5	KOI8-R	ISO 8859-5	KOI8-R
24	4	320	301
241	263	321	302
242	261	322	327
243	262	323	307
244	264	324	304
245	265	325	305
246	266	327	332
247	267	330	311
250	270	331	312
251	271	332	313
252	272	333	314
253	273	334	315
254	274	335	316
256	276	336	317

Conversions Performed			
ISO 8859-5	KOI8-R	ISO 8859-5	KOI8-R
257	277	337	320
260	341	340	322
261	342	341	323
262	367	342	324
263	347	343	325
264	344	344	306
265	345	345	310
266	366	346	303
267	372	347	336
270	351	350	333
271	352	351	335
272	353	352	337
273	354	353	331
274	355	354	330
275	356	355	334
276	357	356	300
277	360	357	321
300	362	360	260
301	363	361	243
302	364	362	241
303	365	363	242
304	346	364	244
305	350	365	245
306	343	366	246
307	376	367	247
310	373	370	250
311	375	371	251

Conversions Performed			
ISO 8859-5	KOI8-R	ISO 8859-5	KOI8-R
312	377	372	252
313	371	373	253
314	370	374	254
315	374	375	255
316	340	376	256
317	361		

ISO 8859-5 to PC Cyrillic

For the conversion of ISO 8859-5 to PC Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-5	PC Cyrillic	ISO 8859-5	PC Cyrillic
24	4	307	227
200-240	40	310	230
241	360	311	231
242-254	40	312	232
255	260	313	233
256-257	40	314	234
260	200	315	235
261	201	316	236
262	202	317	237
263	203	320	240
264	204	321	241
265	205	322	242
266	206	323	243
267	207	324	244
270	210	325	245
271	211	326	246
272	212	327	247

Conversions Performed			
ISO 8859-5	PC Cyrillic	ISO 8859-5	PC Cyrillic
273	213	330	250
274	214	331	251
275	215	332	252
276	216	333	253
277	217	334	254
300	220	335	255
301	221	336	256
302	222	337	257
303	223	360-374	40
304	224	375	260
305	225	376	40
306	226	365	40

ISO 8859-5 to MS 1251

For the conversion of ISO 8859-5 to MS 1251, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-5	MS 1251	ISO 8859-5	MS 1251
24	4	317	337
200-237	40	320	340
241	250	321	341
242	200	322	342
243	201	323	343
244	252	324	344
245	275	325	345
246	262	326	346
247	257	327	347
250	243	330	350
251	212	331	351

Conversions Performed			
ISO 8859-5	MS 1251	ISO 8859-5	MS 1251
252	214	332	352
253	216	333	353
254	215	334	354
255	210	335	355
256	241	336	356
257	217	337	357
260	300	340	360
261	301	341	361
262	302	342	362
263	303	343	363
264	304	344	364
265	305	345	365
266	306	346	366
267	307	347	367
270	310	350	370
271	311	351	371
272	312	352	372
273	313	353	373
274	314	354	374
275	315	355	375
276	316	356	376
277	317	357	377
300	320	360	271
301	321	361	270
302	322	362	220
303	323	363	203
304	324	364	272

Conversions Performed			
ISO 8859-5	MS 1251	ISO 8859-5	MS 1251
305	325	365	276
306	326	366	263
307	327	367	277
310	330	370	274
311	331	371	232
312	332	372	234
313	333	373	236
314	334	374	235
315	335	375	210
316	336	376	242
376	331		

ISO 8859-5 to Mac Cyrillic

For the conversion of ISO 8859-5 to Mac Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
ISO 8859-5	Mac Cyrillic	ISO 8859-5	Mac Cyrillic
24	4	317	237
200-237	40	320	340
240	312	321	341
241	335	322	342
242	253	323	343
243	256	324	344
244	270	325	345
245	301	326	346
246	247	327	347
247	272	330	350
250	267	331	351
251	274	332	352

Conversions Performed			
ISO 8859-5	Mac Cyrillic	ISO 8859-5	Mac Cyrillic
252	276	333	353
253	40	334	354
254	315	335	355
255	40	336	356
256	330	337	357
257	332	340	360
260	200	341	361
261	201	342	362
262	202	343	363
263	203	344	364
264	204	345	365
265	205	346	366
266	206	347	367
267	207	350	370
270	210	351	371
271	211	352	372
272	212	353	373
273	213	354	374
274	214	355	375
275	215	356	376
276	216	357	337
277	217	360	334
300	220	361	336
301	221	362	254
302	222	363	257
303	223	364	271
304	224	365	317

Conversions Performed			
ISO 8859-5	Mac Cyrillic	ISO 8859-5	Mac Cyrillic
305	225	366	264
306	226	367	273
307	227	370	300
310	230	371	275
311	231	372	277
312	232	373	40
313	233	374	316
314	234	375	40
315	235	376	331
316	236		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

iconv(1), iconv(3C), iconv(5)

名前 iconv_dhn – code set conversion tables for DHN (Dom Handlowy Nauki)

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
DHN	dhn	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
DHN	dhn	MS 1250	win2	Windows Latin 2
DHN	dhn	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
DHN	dhn	Mazovia	maz	Mazovia

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

DHN to ISO 8859-2 For the conversion of DHN to ISO 8859-2, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
DHN	ISO 8859-2	DHN	ISO 8859-2
24-177	40	222	40
200	241	223	364
201	306	224	366
202	312	225-230	40
203	243	231	326
204	321	232	334
205	323	233-237	40
206	246	240	341
207	254	241	355
210	257	242	363
211	261	243	372
212	346	244-340	40
213	352	341	337
214	263	342-365	40

Conversions Performed			
DHN	ISO 8859-2	DHN	ISO 8859-2
215	361	366	367
216	363	367	40
217	266	370	260
220	274	371-376	40
221	277		

DHN to MS 1250

For the conversion of DHN to MS 1250, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
DHN	MS 1250	DHN	MS 1250
200	245	233-237	40
201	306	240	341
202	312	241	355
203	243	242	363
204	321	243	372
205	323	244-251	40
206	214	252	254
207	217	253-255	40
210	257	256	253
211	271	257	273
212	346	260-340	40
213	352	341	337
214	263	342-345	40
215	361	346	265
216	363	347-360	40
217	234	361	261
220	237	362-365	40
221	277	366	367

Conversions Performed			
DHN	MS 1250	DHN	MS 1250
222	40	367	40
223	364	370	260
224	366	371	40
225-230	40	372	267
231	326	373-376	40
232	334		

DHN to MS 852

For the conversion of DHN to MS 852, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
DHN	MS 852	DHN	MS 852
200	244	212	206
201	217	213	251
202	250	214	210
203	235	215	344
204	343	216	242
205	340	217	230
206	227	220	253
207	215	221	276
210	275	222-375	40
211	245		

DHN to Mazovia

For the conversion of DHN to Mazovia, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
DHN	Mazovia	DHN	Mazovia
200	217	212	215
201	225	213	221

Conversions Performed			
DHN	Mazovia	DHN	Mazovia
202	220	214	222
203	234	215	244
204	245	216	242
205	243	217	236
206	230	220	246
207	240	221	247
210	241	222-247	40
211	206		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

iconv(1), iconv(3C), iconv(5)

名前 iconv_koi8-r – code set conversion tables for KOI8-R

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
KOI8-R	koi8	ISO 8859-5	iso5	ISO 8859-5 Cyrillic
KOI8-R	koi8	PC Cyrillic	alt	Alternative PC Cyrillic
KOI8-R	koi8	MS 1251	win5	Windows Cyrillic
KOI8-R	koi8	Mac Cyrillic	mac	Macintosh Cyrillic

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

KOI8-R to ISO 8859-5 For the conversion of KOI8-R to ISO 8859-5, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
KOI8-R	ISO 8859-5	KOI8-R	ISO 8859-5
24	4	320	337
241	362	321	357
242	363	322	340
243	361	323	341
244	364	324	342
245	365	325	343
246	366	327	322
247	367	330	354
250	370	331	353
251	371	332	327
252	372	333	350
253	373	334	355
254	374	335	351
256	376	336	347

Conversions Performed			
KOI8-R	ISO 8859-5	KOI8-R	ISO 8859-5
257	377	337	352
260	360	340	316
261	242	341	260
262	243	342	261
263	241	343	306
264	244	344	264
265	245	345	265
266	246	346	304
267	247	347	263
270	250	350	305
271	251	351	270
272	252	352	271
273	253	353	272
274	254	354	273
275	255	355	274
276	256	356	275
277	257	357	276
300	356	360	277
301	320	361	317
302	321	362	300
303	346	363	301
304	324	364	302
305	325	365	303
306	344	366	266
307	323	367	262
310	345	370	314
311	330	371	313

Conversions Performed			
KOI8-R	ISO 8859-5	KOI8-R	ISO 8859-5
312	331	372	267
313	332	373	310
314	333	374	315
315	334	375	311
316	335	376	307
317	336		

KOI8-R to PC Cyrillic

For the conversion of KOI8-R to PC Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
KOI8-R	PC Cyrillic	KOI8-R	PC Cyrillic
24	4	333	350
200-242	40	334	355
243	361	335	351
244-254	40	336	347
255	260	337	352
256-262	40	340	236
263	360	341	200
264-274	40	342	201
275	260	343	226
276-277	40	344	204
300	356	345	205
301	240	346	224
302	241	347	203
303	346	350	225
304	244	351	210
305	245	352	211
306	344	353	212

Conversions Performed			
KOI8-R	PC Cyrillic	KOI8-R	PC Cyrillic
307	243	354	213
310	345	355	214
311	250	356	215
312	251	357	216
313	252	360	217
314	253	361	237
315	254	362	220
316	255	363	221
317	256	364	222
320	257	365	223
321	357	366	206
322	340	367	202
323	341	370	234
324	342	371	233
325	343	372	207
326	246	373	230
327	242	374	235
330	354	375	231
331	353	376	227
332	247		

KOI8-R to MS 1251

For the conversion of KOI8-R to MS 1251, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
KOI8-R	MS 1251	KOI8-R	MS 1251
24	4	317	356
200-237	40	320	357
241	220	321	377

Conversions Performed			
KOI8-R	MS 1251	KOI8-R	MS 1251
242	203	322	360
243	270	323	361
244	272	324	362
245	276	325	363
246	263	326	346
247	277	327	342
250	274	330	374
251	232	331	373
252	234	332	347
253	236	333	370
254	235	334	375
255	210	335	371
256	242	336	367
257	237	337	372
260	271	340	336
261	200	341	300
262	201	342	301
263	250	343	326
264	252	344	304
265	275	345	305
266	262	346	324
267	257	347	303
270	243	350	325
271	212	351	310
272	214	352	311
273	216	353	312
274	215	354	313

Conversions Performed			
KOI8-R	MS 1251	KOI8-R	MS 1251
275	210	355	314
276	241	356	315
277	217	357	316
300	376	360	317
301	340	361	337
302	341	362	320
303	366	363	321
304	344	364	322
305	345	365	323
306	364	366	306
307	343	367	302
310	365	370	334
311	350	371	333
312	351	372	307
313	352	373	330
314	353	374	335
315	354	375	331
316	355	376	327
376	227		

KOI8-R to Mac Cyrillic

For the conversion of KOI8-R to Mac Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
KOI8-R	Mac Cyrillic	KOI8-R	Mac Cyrillic
24	4	317	356
200-237	40	320	357
240	312	321	337
241	254	322	360

Conversions Performed			
KOI8-R	Mac Cyrillic	KOI8-R	Mac Cyrillic
242	257	323	361
243	336	324	362
244	271	325	363
245	317	326	346
246	264	327	342
247	273	330	374
250	300	331	373
251	275	332	347
252	277	333	370
253	40	334	375
254	316	335	371
255	40	336	367
256	331	337	372
257	333	340	236
260	334	341	200
261	253	342	201
262	256	343	226
263	335	344	204
264	270	345	205
265	301	346	224
266	247	347	203
267	272	350	225
270	267	351	210
271	274	352	211
272	276	353	212
273	40	354	213
274	315	355	214

Conversions Performed			
KOI8-R	Mac Cyrillic	KOI8-R	Mac Cyrillic
275	40	356	215
276	330	357	216
277	332	360	217
300	376	361	237
301	340	362	220
302	341	363	221
303	366	364	222
304	344	365	223
305	345	366	206
306	364	367	202
307	343	370	234
310	365	371	233
311	350	372	207
312	351	373	230
313	352	374	235
314	353	375	231
315	354	376	227
316	355		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前 iconv_mac_cyr – code set conversion tables for Macintosh Cyrillic

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
Mac Cyrillic	mac	ISO 8859-5	iso5	ISO 8859-5 Cyrillic
Mac Cyrillic	mac	KOI8-R	koi8	KOI8-R
Mac Cyrillic	mac	PC Cyrillic	alt	Alternative PC Cyrillic
Mac Cyrillic	mac	MS 1251	win5	Windows Cyrillic

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

Mac Cyrillic to ISO 8859-5 For the conversion of Mac Cyrillic to ISO 8859-5, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	ISO 8859-5	Mac Cyrillic	ISO 8859-5
24	4	276	252
200	260	277	372
201	261	300	370
202	262	301	245
203	263	302-311	40
204	264	312	240
205	265	313	242
206	266	314	362
207	267	315	254
210	270	316	374
211	271	317	365
212	272	320-327	40
213	273	330	256
214	274	331	376

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	ISO 8859-5	Mac Cyrillic	ISO 8859-5
215	275	332	257
216	276	333	377
217	277	334	360
220	300	335	241
221	301	336	361
222	302	337	357
223	303	340	320
224	304	341	321
225	305	342	322
226	306	343	323
227	307	344	324
230	310	345	325
231	311	346	326
232	312	347	327
233	313	350	330
234	314	351	331
235	315	352	332
236	316	353	333
237	317	354	334
240-246	40	355	335
247	246	356	336
250-252	40	357	337
253	242	360	340
254	362	361	341
255	40	362	342
256	243	363	343
257	363	364	344

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	ISO 8859-5	Mac Cyrillic	ISO 8859-5
260-263	40	365	345
264	366	366	346
265-266	40	367	347
267	250	370	350
270	244	371	351
271	364	372	352
272	247	373	353
273	367	374	354
274	251	375	355
275	371	376	356
375	370		

Mac Cyrillic to KOI8-R

For the conversion of Mac Cyrillic to KOI8-R, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	KOI8-R	Mac Cyrillic	KOI8-R
24	4	276	272
200	341	277	252
201	342	300	250
202	367	301	265
203	347	302-311	40
204	344	312	240
205	345	313	261
206	366	314	241
207	372	315	274
210	351	316	254
211	352	317	245
212	353	320-327	40

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	KOI8-R	Mac Cyrillic	KOI8-R
213	354	330	276
214	355	331	256
215	356	332	277
216	357	333	257
217	360	334	260
220	362	335	263
221	363	336	243
222	364	337	321
223	365	340	301
224	346	341	302
225	350	342	327
226	343	343	307
227	376	344	304
230	373	345	305
231	375	346	326
232	377	347	332
233	371	350	311
234	370	351	312
235	374	352	313
236	340	353	314
237	361	354	315
240-246	40	355	316
247	266	356	317
250-252	40	357	320
253	261	360	322
254	241	361	323
255	40	362	324

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	**KOI8-R**	**Mac Cyrillic**	**KOI8-R**
256	262	363	325
257	242	364	306
260-263	40	365	310
264	246	366	303
265-266	40	367	336
267	270	370	333
270	264	371	335
271	244	372	337
272	267	373	331
273	247	374	330
274	271	375	334
275	251	376	300
375	370		

Mac Cyrillic to PC Cyrillic

For the conversion of Mac Cyrillic to PC Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	**PC Cyrillic**	**Mac Cyrillic**	**PC Cyrillic**
24	4	355	255
240-334	40	356	256
335	360	357	257
336	361	360	340
337	357	361	341
340	240	362	342
341	241	363	343
342	242	364	344
343	243	365	345
344	244	366	346

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	PC Cyrillic	Mac Cyrillic	PC Cyrillic
345	245	367	347
346	246	370	350
347	247	371	351
350	250	372	352
351	251	373	353
352	252	374	354
353	253	375	355
354	254	376	356
303	366		

Mac Cyrillic to MS 1251

For the conversion of Mac Cyrillic to MS 1251, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	MS 1251	Mac Cyrillic	MS 1251
24	4	255	40
200	300	256	201
201	301	257	203
202	302	260-263	40
203	303	264	263
204	304	266	264
205	305	267	243
206	306	270	252
207	307	271	272
210	310	272	257
211	311	273	277
212	312	274	212
213	313	275	232
214	314	276	214

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	MS 1251	Mac Cyrillic	MS 1251
215	315	277	234
216	316	300	274
217	317	301	275
220	320	302	254
221	321	303-306	40
222	322	307	253
223	323	310	273
224	324	311	205
225	325	312	240
226	326	313	200
227	327	314	220
230	330	315	215
231	331	316	235
232	332	317	276
233	333	320	226
234	334	321	227
235	335	322	223
236	336	323	224
237	337	324	221
240	206	325	222
241	260	326	40
242	245	327	204
243	40	330	241
244	247	331	242
245	267	332	217
246	266	333	237
247	262	334	271

Conversions Performed			
Mac Cyrillic	**MS 1251**	**Mac Cyrillic**	**MS 1251**
250	256	335	250
252	231	336	270
253	200	337	377
254	220	362	324

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

iconv(1), iconv(3C), iconv(5)

名前 iconv_maz – code set conversion tables for Mazovia

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
Mazovia	maz	ISO 8859-2	iso2	ISO Latin 2
Mazovia	maz	MS 1250	win2	Windows Latin 2
Mazovia	maz	MS 852	dos2	MS-DOS Latin 2
Mazovia	maz	DHN	dhn	Dom Hanlowy Nauki

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

Mazovia to ISO 8859-2 For the conversion of Mazovia to ISO 8859-2, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mazovia	ISO 8859-2	Mazovia	ISO 8859-2
24–177	40	230	246
200	307	231	326
201	374	232	334
202	351	233	40
203	342	234	243
204	344	235	40
205	40	236	266
206	261	237	40
207	347	240	254
210	40	241	257
211	353	242	363
212-213	40	243	323
214	356	244	361
215	346	245	321

Conversions Performed			
Mazovia	ISO 8859-2	Mazovia	ISO 8859-2
216	304	246	274
217	241	247	277
220	312	250-340	40
221	352	341	337
222	263	342-365	40
223	364	366	367
224	366	367	40
225	306	370	260
226-227	40	371-376	40
256	201		

Mazovia to MS 1250

For the conversion of Mazovia to MS 1250, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Mazovia	MS 1250	Mazovia	MS 1250
200	307	236	234
201	374	237	40
202	351	240	217
203	342	241	257
204	344	242	363
205	40	243	323
206	271	244	361
207	347	245	321
210	40	246	237
211	353	247	277
212-213	40	250-251	40
214	356	252	254
215	346	253-255	40
216	304	256	253

Mazovia	MS 1250	Mazovia	MS 1250
217	245	257	273
220	312	260-340	40
221	352	341	337
222	263	342-345	40
223	364	346	265
224	366	347-360	40
225	306	361	261
226-227	40	362-365	0
230	214	366	367
231	326	367	40
232	334	370	260
233	40	371	40
234	243	372	267
235	40	373-376	40
274	212		

Mazovia to MS 852

For the conversion of Mazovia to MS 852, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mazovia	MS 852	Mazovia	MS 852
205	40	234	235
206	245	235	40
210-213	40	236	230
215	206	237	40
217	244	240	215
220	250	241	275
221	251	243	340
222	210	244	344
225	217	245	343

Conversions Performed			
Mazovia	MS 852	Mazovia	MS 852
226-227	40	246	253
230	227	247	276
233	40	250-375	40
227	327		

Mazovia to DHN

For the conversion of Mazovia to DHN, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
Mazovia	DHN	Mazovia	DHN
200-205	40	234	203
206	211	236	217
207-214	40	240	207
215	212	241	210
216	40	242	216
217	200	243	205
220	202	244	215
221	214	246	220
225	201	247	221
230	206		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

`iconv(1)`, `iconv(3C)`, `iconv(5)`

名前 iconv_pc_cyr – code set conversion tables for Alternative PC Cyrillic

機能説明 The following code set conversions are supported:

Code Set Conversions Supported				
Code	Symbol	Target Code	Symbol	Target Output
PC Cyrillic	alt	ISO 8859-5	iso5	ISO 8859-5 Cyrillic
PC Cyrillic	alt	KOI8-R	koi8	KOI8-R
PC Cyrillic	alt	MS 1251	win5	Windows Cyrillic
PC Cyrillic	alt	Mac Cyrillic	mac	Macintosh Cyrillic

Conversions The conversions are performed according to the following tables. All values in the tables are given in octal.

PC Cyrillic to ISO 8859-5 For the conversion of PC Cyrillic to ISO 8859-5, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
PC Cyrillic	ISO 8859-5	PC Cyrillic	ISO 8859-5
24	4	231	311
200	260	232	312
201	261	233	313
202	262	234	314
203	263	235	315
204	264	236	316
205	265	237	317
206	266	240	320
207	267	241	321
210	270	242	322
211	271	243	323
212	272	244	324
213	273	245	325
214	274	246	326

Conversions Performed			
PC Cyrillic	ISO 8859-5	PC Cyrillic	ISO 8859-5
215	275	247	327
216	276	250	330
217	277	251	331
220	300	252	332
221	301	253	333
222	302	254	334
223	303	255	335
224	304	256	336
225	305	257	337
226	306	260-337	255
227	307	360	241
230	310	362-376	255

PC Cyrillic to KOI8-R

For the conversion of PC Cyrillic to KOI8-R, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
PC Cyrillic	KOI8-R	PC Cyrillic	KOI8-R
24	4	242	327
200	341	243	307
201	342	244	304
202	367	245	305
203	347	246	326
204	344	247	332
205	345	250	311
206	366	251	312
207	372	252	313
210	351	253	314
211	352	254	315

Conversions Performed			
PC Cyrillic	KOI8-R	PC Cyrillic	KOI8-R
212	353	255	316
213	354	256	317
214	355	257	320
215	356	260-337	255
216	357	340	322
217	360	341	323
220	362	342	324
221	363	343	325
222	364	344	306
223	365	345	310
224	346	346	303
225	350	347	336
226	343	350	333
227	376	351	335
230	373	352	337
231	375	353	331
232	377	354	330
233	371	355	334
234	370	356	300
235	374	357	321
236	340	360	263
237	361	361	243
240	301	362-376	255
241	302		

PC Cyrillic to MS 1251

For the conversion of PC Cyrillic to MS 1251, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
PC Cyrillic	MS 1251	PC Cyrillic	MS 1251
24	4	242	342
200	300	243	343
201	301	244	344
202	302	245	345
203	303	246	346
204	304	247	347
205	305	250	350
206	306	251	351
207	307	252	352
210	310	253	353
211	311	254	354
212	312	255	355
213	313	256	356
214	314	257	357
215	315	260-337	210
216	316	340	360
217	317	341	361
220	320	342	362
221	321	343	363
222	322	344	364
223	323	345	365
224	324	346	366
225	325	347	367
226	326	350	370
227	327	351	371
230	330	352	372
231	331	353	373

Conversions Performed			
PC Cyrillic	MS 1251	PC Cyrillic	MS 1251
232	332	354	374
233	333	355	375
234	334	356	376
235	335	357	377
236	336	360	250
237	337	361	270
240	340	362-376	210
241	341		

PC Cyrillic to Mac Cyrillic

For the conversion of PC Cyrillic to Mac Cyrillic, all characters not in the following table are mapped unchanged.

Conversions Performed			
PC Cyrillic	Mac Cyrillic	PC Cyrillic	Mac Cyrillic
24	4	341	361
240	340	342	362
241	341	343	363
242	342	344	364
243	343	345	365
244	344	346	366
245	345	347	367
246	346	350	370
247	347	351	371
250	350	352	372
251	351	353	373
252	352	354	374
253	353	355	375
254	354	356	376
255	355	357	337

Conversions Performed			
PC Cyrillic	**Mac Cyrillic**	**PC Cyrillic**	**Mac Cyrillic**
256	356	360	335
257	357	361	336
260-337	40	362-376	40
340	360		

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so`	conversion modules
`/usr/lib/iconv/*.t`	conversion tables
`/usr/lib/iconv/iconv_data`	list of conversions supported by conversion tables

関連項目

iconv(1), iconv(3C), iconv(5)

名前　　iconv_unicode – code set conversion tables for Unicode

機能説明　　The following code set conversions are supported:

CODE SET CONVERSIONS SUPPORTED

FROM Code Set Code	FROM Filename Element	TO Code Set Target Code	TO Filename Element
ISO 8859-1 (Latin 1)	8859-1	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-2 (Latin 2)	8859-2	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-3 (Latin 3)	8859-3	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-4 (Latin 4)	8859-4	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-5 (Cyrillic)	8859-5	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-6 (Arabic)	8859-6	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-7 (Greek)	8859-7	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-8 (Hebrew)	8859-8	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-9 (Latin 5)	8859-9	UTF-8	UTF-8
ISO 8859-10 (Latin 6)	8859-10	UTF-8	UTF-8
Japanese EUC	eucJP	UTF-8	UTF-8
Chinese/PRC EUC (GB 2312-1980)	gb2312	UTF-8	UTF-8
ISO-2022	iso2022	UTF-8	UTF-8
Korean EUC	ko_KR-euc	Korean UTF-8	ko_KR-UTF-8
ISO-2022-KR	ko_KR-iso2022-7	Korean UTF-8	ko_KR_UTF-8
Korean Johap (KS C 5601-1987)	ko_KR-johap	Korean UTF-8	ko_KR-UTF-8
Korean Johap (KS C 5601-1992)	ko_KR-johap92	Korean UTF-8	ko_KR-UTF-8
Korean UTF-8	ko_KR-UTF-8	Korean EUC	ko_KR-euc
Korean UTF-8	ko_KR-UTF-8	Korean Johap (KS C 5601-1987)	ko_KR-johap
Korean UTF-8	ko_KR-UTF-8	Korean Johap (KS C 5601-1992)	ko_KR-johap92
KOI8-R (Cyrillic)	KOI8-R	UCS-2	UCS-2
KOI8-R (Cyrillic)	KOI8-R	UTF-8	UTF-8
PC Kanji (SJIS)	PCK	UTF-8	UTF-8
PC Kanji (SJIS)	SJIS	UTF-8	UTF-8
UCS-2	UCS-2	KOI8-R (Cyrillic)	KOI8-R
UCS-2	UCS-2	UCS-4	UCS-4

CODE SET CONVERSIONS SUPPORTED

FROM Code Set Code	FROM Filename	TO Code Set Target Code	TO Filename

	Element		Element
UCS-2	UCS-2	UTF-7	UTF-7
UCS-2	UCS-2	UTF-8	UTF-8
UCS-4	UCS-4	UCS-2	UCS-2
UCS-4	UCS-4	UTF-16	UTF-16
UCS-4	UCS-4	UTF-7	UTF-7
UCS-4	UCS-4	UTF-8	UTF-8
UTF-16	UTF-16	UCS-4	UCS-4
UTF-16	UTF-16	UTF-8	UTF-8
UTF-7	UTF-7	UCS-2	UCS-2
UTF-7	UTF-7	UCS-4	UCS-4
UTF-7	UTF-7	UTF-8	UTF-8
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-1 (Latin 1)	8859-1
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-2 (Latin 2)	8859-2
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-3 (Latin 3)	8859-3
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-4 (Latin 4)	8859-4
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-5 (Cyrillic)	8859-5
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-6 (Arabic)	8859-6
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-7 (Greek)	8859-7
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-8 (Hebrew)	8859-8
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-9 (Latin 5)	8859-9
UTF-8	UTF-8	ISO 8859-10 (Latin 6)	8859-10
UTF-8	UTF-8	Japanese EUC	eucJP
UTF-8	UTF-8	Chinese/PRC EUC (GB 2312-1980)	gb2312
UTF-8	UTF-8	ISO-2022	iso2022
UTF-8	UTF-8	KOI8-R (Cyrillic)	KOI8-R
UTF-8	UTF-8	PC Kanji (SJIS)	PCK
UTF-8	UTF-8	PC Kanji (SJIS)	SJIS
UTF-8	UTF-8	UCS-2	UCS-2
UTF-8	UTF-8	UCS-4	UCS-4
UTF-8	UTF-8	UTF-16	UTF-16
UTF-8	UTF-8	UTF-7	UTF-7
UTF-8	UTF-8	Chinese/PRC EUC (GB 2312-1980)	zh_CN.euc

CODE SET CONVERSIONS SUPPORTED

FROM Code Set Code	FROM Filename Element	TO Code Set Target Code	TO Filename Element
UTF-8	UTF-8	ISO 2022-CN	zh_CN.iso2022-7
UTF-8	UTF-8	Chinese/Taiwan Big5	zh_TW-big5
UTF-8	UTF-8	Chinese/Taiwan EUC (CNS 11643-1992)	zh_TW-euc

UTF-8	UTF-8	ISO 2022-TW	zh_TW-iso2022-7
Chinese/PRC EUC (GB 2312-1980)	zh_CN.euc	UTF-8	UTF-8
ISO 2022-CN	zh_CN.iso2022-7	UTF-8	UTF-8
Chinese/Taiwan Big5	zh_TW-big5	UTF-8	UTF-8
Chinese/Taiwan EUC (CNS 11643-1992)	zh_TW-euc	UTF-8	UTF-8
ISO 2022-TW	zh_TW-iso2022-7	UTF-8	UTF-8

使用例

例 1 The library module filename

In the conversion library, `/usr/lib/iconv` (see iconv(3C)), the library module filename is composed of two symbolic elements separated by the percent sign (%). The first symbol specifies the code set that is being converted; the second symbol specifies the *target code*, that is, the code set to which the first one is being converted.

In the conversion table above, the first symbol is termed the “FROM Filename Element”. The second symbol, representing the target code set, is the “TO Filename Element”.

For example, the library module filename to convert from the *Korean EUC* code set to the *Korean UTF-8* code set is

```
ko_KR-euc%ko_KR-UTF-8
```

ファイル

`/usr/lib/iconv/*.so` conversion modules

関連項目

iconv(1), iconv(3C), iconv(5)

Chernov, A., Registration of a Cyrillic Character Set, RFC 1489, RELCOM Development Team, July 1993.

Chon, K., H. Je Park, and U. Choi, Korean Character Encoding for Internet Messages, RFC 1557, Solvit Chosun Media, December 1993.

Goldsmith, D., and M. Davis, UTF-7 – A Mail-Safe Transformation Format of Unicode, RFC 1642, Taligent, Inc., July 1994.

Lee, F., HZ – A Data Format for Exchanging Files of Arbitrarily Mixed Chinese and ASCII characters, RFC 1843, Stanford University, August 1995.

Murai, J., M. Crispin, and E. van der Poel, Japanese Character Encoding for Internet Messages, RFC 1468, Keio University, Panda Programming, June 1993.

Nussbacher, H., and Y. Bourvine, Hebrew Character Encoding for Internet Messages, RFC 1555, Israeli Inter-University, Hebrew University, December 1993.

Ohta, M., Character Sets ISO-10646 and ISO-10646-J-1, RFC 1815, Tokyo Institute of Technology, July 1995.

Ohta, M., and K. Handa, ISO-2022-JP-2: Multilingual Extension of ISO-2022-JP, RFC 1554, Tokyo Institute of Technology, December 1993.

Reynolds, J., and J. Postel, ASSIGNED NUMBERS, RFC 1700, University of Southern California/Information Sciences Institute, October 1994.

Simonson, K., Character Mnemonics & Character Sets, RFC 1345, Rationel Almen Planlaegning, June 1992.

Spinellis, D., Greek Character Encoding for Electronic Mail Messages, RFC 1947, SENA S.A., May 1996.

The Unicode Consortium, The Unicode Standard, Version 2.0, Addison Wesley Developers Press, July 1996.

Wei, Y., Y. Zhang, J. Li, J. Ding, and Y. Jiang, ASCII Printable Characters-Based Chinese Character Encoding for Internet Messages, RFC 1842, AsiaInfo Services Inc., Harvard University, Rice University, University of Maryland, August 1995.

Yergeau, F., UTF-8, a transformation format of Unicode and ISO 10646, RFC 2044, Alis Technologies, October 1996.

Zhu, H., D. Hu, Z. Wang, T. Kao, W. Chang, and M. Crispin, Chinese Character Encoding for Internet Messages, RFC 1922, Tsinghua University, China Information Technology Standardization Technical Committee (CITS), Institute for Information Industry (III), University of Washington, March 1996.

注意事項

ISO 8859 character sets using Latin alphabetic characters are distinguished as follows:

`ISO 8859-1 (Latin 1)` For most West European languages, including:

Albanian	Finnish	Italian
Catalan	French	Norwegian
Danish	German	Portuguese
Dutch	Galician	Spanish
English	Irish	Swedish
Faeroese	Icelandic	

`ISO 8859-2 (Latin 2)` For most Latin-written Slavic and Central European languages:

Czech	Polish	Slovak

German	Rumanian	Slovene
Hungarian	Croatian	

ISO 8859-3 (Latin 3)	Popularly used for Esperanto, Galician, Maltese, and Turkish.
ISO 8859-4 (Latin 4)	Introduces letters for Estonian, Latvian, and Lithuanian. It is an incomplete predecessor of ISO 8859-10 (Latin 6).
ISO 8859-9 (Latin 5)	Replaces the rarely needed Icelandic letters in ISO 8859-1 (Latin 1) with the Turkish ones.
ISO 8859-10 (Latin 6)	Adds the last Inuit (Greenlandic) and Sami (Lappish) letters that were not included in ISO 8859-4 (Latin 4) to complete coverage of the Nordic area.

名前

ieee802.11 – 802.11 kernel statistics

機能説明

This page describes the kernel statistics that can be used to monitor attributes specific to the 802.11 physical layer. These statistics can be retrieved using kstat(1M). Not all 802.11 devices will support all statistics.

tx_frags	Count of data and management fragments transmitted.
rx_frags	Count of data and management fragments received.
rx_dups	Count of duplicate frames received. Duplicates are determined by the sequence control field.
mcast_tx	Count of broadcast and multicast frames transmitted.
mcast_rx	Count of broadcast and multicast frames received.
tx_failed	Count of frames that could not be transmitted due to the retransmission limit being reached.
tx_retrans	Count of frames successfully retransmitted after one or more retransmissions.
tx_reretrans	Count of frames successfully retransmitted after more than one retransmission.
rts_success	Count of times a CTS was received in response to an RTS.
rts_failure	Count of times a CTS was not received in response to an RTS.
ack_failure	Count of times an ACK was expected but was not received.
fcs_errors	Count of frames received with FCS errors.
wep_errors	Count of frames received with the WEP bit set but that either should not have been encrypted or that were discarded due to WEP not being supported.

関連項目

kstat(1M)

名前

ieee802.3, cap_autoneg, cap_1000fdx, cap_1000hdx, cap_100fdx, cap_100hdx, cap_10fdx, cap_10hdx, cap_rem_fault, cap_pause, cap_asym_pause, adv_cap_autoneg, adv_cap_1000fdx, adv_cap_1000hdx, adv_cap_100fdx, adv_cap_100hdx, adv_cap_10fdx, adv_cap_10hdx, adv_cap_pause, adv_cap_asym_pause, adv_rem_fault, lp_cap_autoneg, lp_cap_1000fdx, lp_cap_1000hdx, lp_cap_100fdx, lp_cap_100hdx, lp_cap_10fdx, lp_cap_10hdx, lp_cap_pause, lp_cap_asym_pause, lp_rem_fault, xcvr_addr, xcvr_id, xcvr_inuse, link_up, link_duplex, link_tx_pause, link_rx_pause – Ethernet mii kstat and dladm parameters

機能説明

This page describes the kernel statistics and the `dladm(1M)` configuration parameters used to monitor and configure the Ethernet physical layer.

The `cap_*` parameters exist in the kernel statistics for an Ethernet device. The parameters describe the maximum capability of a device. When the value of a statistic is `1`, the device has the capability described. When the value is `0`, the device does not have the capability.

The exceptions to this rule are the `cap_asym_pause` and `cap_pause` parameters which are explained later in this page.

`cap_autoneg`	Capable of auto-negotiation
`cap_1000fdx`	Capable of 1000 full duplex operation
`cap_1000hdx`	Capable of 1000 half duplex operation
`cap_100fdx`	Capable of 100 full duplex operation
`cap_100hdx`	Capable of 100 half duplex operation
`cap_10fdx`	Capable of 10 full duplex operation
`cap_10hdx`	Capable of 10 half duplex operation
`cap_rem_fault`	Capable of reporting locally detected faults to link partner

The `adv_cap_*` parameters exist in the kernel statistics and represent a mirror image of the `dladm adv_*_cap` parameter list for an Ethernet device. The `dladm adv_*_cap` tuning parameters allow fine grain control of the Ethernet device physical layer. The parameters are also a subset of the `cap_*` statistics. If the `cap_*` value is `0`, the corresponding `adv_cap_*` must also be `0`. The exceptions to this rule are the `adv_cap_asym_pause` and `adv_cap_pause` parameters.

When auto-negotiation is enabled, the `adv_*_cap` statistics show which capabilities are advertised to the link partner. When auto-negotiation is disabled in *forced mode*, the statistics precisely show how a link should function and that it must be matched on the link partner to achieve a valid link up.

Statistics with values other than `0` and `1` are also described in the following.

`adv_cap_autoneg` Advertise auto-negotiation capability

`adv_cap_1000fdx` Advertise 1000 full duplex capability

`adv_cap_1000hdx` Advertise 1000 half duplex capability

`adv_cap_100fdx` Advertise 100 full duplex capability

`adv_cap_100hdx` Advertise 100 half duplex capability

`adv_cap_10fdx` Advertise 10 full duplex capability

`adv_cap_10hdx` Advertise 10 half duplex capability

`adv_rem_fault` Fault value reported by the local system to the peer

- `0` Link is good
- `1` Fault

The `lp_cap_*` parameters exist as kernel statistics for an Ethernet device. The statistics are the advertised capabilities provided by the link partner on completion of auto-negotiation. If the capabilities match the capabilities provided in the local advertisement, the link can proceed to a link up state. If no match is found, the link remains down. In two other instances, `lp_cap_*` values might all be zero: (1) when a cable is not present and (2) when forced mode is enabled.

`lp_cap_autoneg` Link partner advertises auto-negotiation capability

`lp_cap_1000fdx` Link partner advertises 1000 full duplex capability

`lp_cap_1000hdx` Link partner advertises 1000 half duplex capability

`lp_cap_100fdx` Link partner advertises 100 full duplex capability

`lp_cap_100hdx` Link partner advertises 100 half duplex capability

`lp_cap_10fdx` Link partner advertises 10 full duplex capability

`lp_cap_10hdx` Link partner advertises 10 half duplex capability

`lp_rem_fault` Fault value the remote system reports

- `0` Link is good
- `1` Fault

The `xcvr_*` kernel statistics provide information about the physical layer device that is in use.

`xcvr_addr` MII address in the `0` to `31` range of the physical layer device in use for a given Ethernet device

`xcvr_id` MII transceiver manufacturer and device ID

`xcvr_inuse` MII transceiver type, based on the following list:

0 other	Undefined
1 none	MII present, but nothing connected
2 10Mb/s	10Mb/s Manchester encoding
3 100BaseT4	100 Mb/s 8B/6T
4 100BaseX	100 Mb/s 4B/5B
5 100BaseT2	100 Mb/s PAM5X5
6 1000BaseX	1000 Mb/s 8B/10B
7 1000BaseT	1000 Mb/s 4D-PAM5

The above values define maximum capability. In many cases, lower speeds can occur. The cap_* statistics must be viewed to establish the range of capability.

The link_* kernel statistics show the link state at the local end of the connection.

link_up	1	Link is up
	0	Link is down
link_duplex	2	Full duplex link
	1	Half duplex link
	0	Unknown

The cap_asym_pause, cap_pause, adv_cap_asym_pause, and adv_cap_pause parameters do not follow the rules of other cap_* and adv_cap_* kstats or parameters. The cap_*pause kstats provide information about the capabilities supported by the device and constrain the values that may be set to the corresponding adv_cap_*pause parameters.

cap_pause	Symmetric pause capability.
cap_asym_pause	Asymmetric pause capability.

The adv_cap_pause and adv_cap_asym_pause statistics are limited by the available settings for cap_pause and cap_asym_pause. These statistics are read-only values whose settings may be administratively controlled by setting the flowctrl property supported by dladm(1M). For a device that is fully capable of pausing both Rx (receive) and Tx (transmit) operations, the settings available are defined in the truth table that follows the adv_cap_pause and adv_cap_asm_pause parameter descriptions below.

adv_cap_pause	When adv_cap_pause is 1, the device can both assert and respond to flow control. This is the pre-Gigabit, symmetric mode of

operation, and implies a full (both send and receive) implementation of the PAUSE mechanism within the device. In addition, if adv_cap_asym_pause is 1, the device can operate either symmetrically or asymmetrically in either direction.

If adv_cap_pause is 0, advertised, flow-control behavior is determined by adv_cap_asym_pause. If the value of adv_cap_asym_pause is 1, the device can assert flow control, but cannot resend.

No flow control is available when bot adv_cap_pause and adv_cap_asym_pause are 0.

`adv_cap_asym_pause` Asymmetric pause capability.

The `cap_asym_pause` and `cap_pause` statistics show the capability of a device and also limit the legal setting for `adv_cap_asym_pause` and `adv_cap_pause`. The following truth table describes the available `adv_cap_asym_pause` and `adv_cap_pause` settings limited by `cap_asym_pause` and `cap_pause` `statistics`. The abbreviations below are used in the table.

CA `cap_asym_pause`

CP `cap_pause`

AA `adv_cap_asym_pause`

AP `adv_cap_pause`

CP	CA	AP	AA	Description
0	0	0	0	No pause in use.
0	0	x	x	Device not pause capable, cannot set.
0	1	0	0	Asymmetric Rx pause capable, but not advertised.
0	1	0	1	Asymmetric Rx pause capable and advertised.
0	1	1	0	Asymmetric Rx pause capable, but not advertised. Not capable of symmetric pause.
0	1	1	1	Asymmetric Rx pause capable and advertised. No symmetric pause capability or asymmetric Tx pause.
1	0	0	0	Symmetric pause capable, but not advertised.
1	0	0	1	Symmetric pause capable, advertising asymmetric Rx pause only.
1	0	1	0	Symmetric pause capable, advertising symmetric Rx and Tx pause capability.

1	0	1	1	Symmetric pause capable and advertised.
1	1	0	0	Symmetric and asymmetric pause capable, but not advertised.
1	1	0	1	Symmetric and asymmetric Tx pause capable. Only asymmetric Tx pause advertised.
1	1	1	0	Symmetric and symmetric Tx pause capable. Only symmetric pause advertised.
1	1	1	1	Asymmetric Tx pause capable and advertised.

In the cases above, an error is posted when a device driver cannot advertise. A new setting is ignored and values revert to the previous setting.

The `lp_cap_pause` and the `lp_cap_asym_pause` provide the advertised capabilities of the link partners.

`lp_cap_pause` When `lp_cap_pause` is 1, the link-partner can both assert and respond to flow control. This is the pre-Gigabit, symmetric mode of operation, and implies a full (both send and receive) implementation of the PAUSE mechanism within the device. In addition, if `lp_cap_asym_pause` is 1, the link-partner can operate either symmetrically or asymmetrically in either direction.

If `lp_cap_pause` is 0, the flow-control behavior supported by the link-partner is determined by `lp_cap_asym_pause`. If the value of `lp_cap_asym_pause` is 1, the link-partner can assert flow control, but cannot respond to any pause-frames sent to it.

No flow control is available when both `lp_cap_pause` and `lp_cap_asym_pause` are 0.

`lp_cap_asym_pause` Asymmetric pause capability

When `adv_*pause_cap` and `lp_*pause_cap` are compared on completion of auto-negotiation, the chosen flow control mechanism for the link depends on what is most meaningful.

`link_tx_pause` Link partner can assert flow control by sending pause frames when congestion is experienced.

`link_rx_pause` Link partner can respond to pause frames received.

The following truth table illustrates the meaningful flow control combinations related to local and link partner configurations. The abbreviations below are used in the table.

AA `adv_cap_asym_pause`

AP `adv_cap_pause`

LAC `lp_cap_asym_pause`

LPC `lp_cap_pause`

LA `link_asym_pause`

LP `link_pause`

AA	AP	LAC	LPC	LA	LP	Description
1	0	1	1	1	0	Local station will Tx a pause when Rx is congested.
0	1	0	1	0	1	Flow control in both Rx and Tx directions.
x	1	1	0	1	1	Local station honors received Pause frames by temporarily suspending Transmit.
x	x	x	x	0	0	All other combinations: Flow control not available on the link

When forced mode is enabled, the current setting of `adv_cap_asym_pause` and `adv_cap_pause` are used for the link. The `link_asym_pause` and `link_pause` become equal to the current `adv_cap_asym_pause` and `adv_cap_pause` settings. The above table also applies in forced mode, but the link partner configuration must be checked to verify that flow control is operating on the link.

関連項目 `dladm`(1M), `driver.conf`(4), `bge`(7D), `dlpi`(7P), `eri`(7D), `gld`(7D), `hme`(7D), `qfe`(7d)

注意事項 When `adv_cap_autoneg` is set to `0`, the highest priority speed and duplex is used for forced mode.

The highest priority is the highest speed at full duplex. The lowest priority is the lowest speed at half duplex.

MII transceivers can exist internally to a system or can be connected to an external MII connector. Typically, an internal transceiver has an `xcvr_addr` of `1`, while an external connection has an `xcvr_addr` of `0`.

名前

ipfilter – IP パケットフィルタ処理ソフトウェア

機能説明

IP フィルタは、Solaris システムにパケットフィルタ処理機能を提供するソフトウェアです。適切に設定されたシステムでは、ファイアウォールを構築するために使用できます。

Solaris IP フィルタは、Solaris オペレーティングシステムとともにインストールされます。ただし、パケットフィルタ処理はデフォルトでは有効になっていません。IP フィルタ機能を有効にしてアクティブ化する手順については、ipf(1M) を参照してください。

サービス

ipfilter SMF サービスは、start、stop、restart、および refresh メソッドをサポートします。これらのメソッドは、svcadm(1M) を使用して呼び出されます。

start　ipfilter カーネルモジュールをロードし、構成に従ってファイアウォールまたは NAT 規則をアクティブにします。

stop　適用されたすべてのファイアウォールと NAT 規則、および作成されたアクティブなセッション情報をクリアします。ネットワーク接続が有効な状態でのサービスの停止は、ネットワークトラフィックがホストに入るリスクがない場合にのみ実行するようにしてください。

restart　ipfilter サービスの停止と開始を実行します。動作中のファイアウォールに対してこのメソッドを使用すると、トラフィックがファイアウォールに侵入したり、フィルタリングされずに通過することができる、危険にさらされやすい期間が生じることになります。

refresh　現在の構成をロードし、セキュリティーポリシーが両方ともアクティブに使用されない時間をまったく生じさせずに古い構成から新しい構成に切り替えます。

ホストベースのファイアウォール

IP フィルタ構成の管理を簡素化するためにファイアウォールフレームワークが作成され、ユーザーはシステムレベルとサービスレベルのファイアウォールポリシーを記述することによって IP フィルタを構成できます。ユーザーが定義したファイアウォールポリシーから、必要なシステム動作が得られるようにフレームワークによって一連の IP フィルタ規則が生成されます。ユーザーは、特定のホスト、サブネット、およびインタフェースからのネットワークトラフィックを許可または拒否するよう、システムおよびサービスのファイアウォールポリシーを指定します。これらのポリシーが一連のアクティブな IPF 規則に変換されることにより、指定されたファイアウォールポリシーが適用されます。

ユーザーはフレームワークを利用しないことを選択した場合でも、独自の ipf 規則ファイルを指定できます。カスタマイズされた規則を有効にする方法については、ipf(1M) を、ipf 規則の構文を見つけるには、ipf(4) を参照してください。

モデル

この節では、ホストベースのファイアウォールフレームワークについて説明します。ファイアウォールポリシーの構成方法の詳細については、svc.ipfd(1M) を参照してください。

ユーザーは、優先度の異なる 3 つのレイヤーを利用して、必要な動作を実現できます。

Global Default
Global Default - システム全体のデフォルトファイアウォールポリシー。このポリシーは、サービスで独自にファイアウォールポリシーが変更されている場合を除き、すべてのサービスによって自動的に継承されます。

Network Services
Global Default よりも優先されます。サービスのポリシーは、Global Default ポリシーにかかわらず、その特定のポートに対するトラフィックを許可または禁止します。

Global Override
もう一つのシステム全体のポリシーで、Network Services レイヤーの個々のサービスの要求よりも優先されます。

```
Global Override
      |
      |
Network Services
      |
      |
Global Default
```

ファイアウォールポリシーには、ファイアウォールモードと、必要に応じてネットワークソースを設定します。ネットワークソースとは、システムが着信トラフィックを受け取る可能性のある、発信元の IP アドレス、サブネット、およびローカルネットワークインタフェースです。基本的なファイアウォールモードは次のとおりです。

None
ファイアウォールなしで、すべての着信トラフィックを許可します。

Deny
すべての着信トラフィックを許可しますが、指定した発信元からの着信トラフィックは拒否します。

Allow
すべての着信トラフィックを拒否しますが、指定した発信元からの着信トラフィックは許可します。

レイヤーの詳細

最初のシステム全体のレイヤー Global Default では、任意の着信トラフィックに適用するファイアウォールポリシーを定義します。たとえば、ある IP アドレスからのトラフィックをすべて許可またはブロックするように指定します。これによ

り、すべての着信トラフィックをブロックする、または望まない発信元からの着信トラフィックをすべてブロックするポリシーを簡単に作成できます。

Network Services レイヤーには、`telnetd`、`sshd`、`httpd` などのリモートクライアントにサービスを提供するローカルプログラムのためのファイアウォールポリシーが含まれています。このようなプログラム (ネットワークサービス) にはそれぞれ、サービスへのアクセスを制御する独自のファイアウォールポリシーがあります。最初は、サービスのポリシーは Global Default ポリシーを継承するように設定されています。つまり、「グローバルデフォルトを使用する」モードです。これにより、1 つのポリシーを Global Default レイヤーで設定し、それをすべてのサービスで簡単に継承することができます。

サービスのポリシーが Global Default ポリシーと異なっている場合は、サービスのポリシーが優先されます。あるサブネットからのトラフィックをすべてブロックするように Global Default ポリシーが設定されている場合でも、SSH サービスではそのサブネットの特定のホストからはアクセスを許可するように構成できます。Network Service レイヤーは、すべてのネットワークサービスに関するすべてのポリシーから成ります。

2 番目のシステム全体のレイヤー Global Override にも、任意の着信ネットワークトラフィックに適用されるファイアウォールポリシーが含まれています。このポリシーはもっとも優先度が高く、ほかのレイヤーのポリシーよりも優先されるため、個々のネットワークサービスの要求も上書きします。たとえば、サービスのポリシーにかかわらず、悪意のある既知の発信元をブロックする場合に適しています。

ユーザーとの対話

このフレームワークは IP フィルタ機能を活用するため、`svc:/network/ipfilter` が有効になっている場合だけアクティブになり、`network/ipfilter` が無効になっている場合はアクティブになりません。同様に、ネットワークサービスのファイアウォールポリシーは、サービスが有効になっている場合だけアクティブになり、サービスが無効になっている場合はアクティブになりません。ファイアウォールがアクティブになっているシステムには、実行中または有効になっている各ネットワークサービスの IP フィルタ規則が存在し、ファイアウォールモード `None` ではないシステム全体のポリシーが存在します。

ユーザーは、システム全体のポリシーと各ネットワークサービスのポリシーを設定することにより、ファイアウォールを構成します。ファイアウォールポリシーの構成方法については、svc.ipfd(1M) を参照してください。

ファイアウォールフレームワークは、ポリシーの構成と、そのポリシーから IP フィルタ規則を生成して適用することによって必要な IP フィルタ構成を実現するメカニズムから成ります。設計およびユーザーとの対話の要約は次のとおりです。

- システム全体のポリシーは `network/ipfilter` に保存されます
- ネットワークサービスのポリシーは各 SMF サービスに保存されます

- ユーザーは network/ipfilter を有効にすることでファイアウォールをアクティブにします (ipf(1M) を参照)
- ユーザーはネットワークサービスを有効または無効にすることで、そのサービスのファイアウォールをアクティブまたは非アクティブにします
- システム全体またはサービスごとのファイアウォールポリシーを変更すると、システムのファイアウォール規則が更新されます

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
インタフェースの安定性	確実

関連項目

svcs(1), ipf(1M), ipnat(1M), svcadm(1M), svc.ipfd(1M), ipf(4), ipnat(4), attributes(5), smf(5)

『Oracle Solaris の管理: IP サービス』

注意事項

ipfilter サービスは、サービス管理機能 smf(5) により次のサービス識別子として管理されます。

```
svc:/network/ipfilter:default
```

有効化、無効化、または再起動要求など、このサービスに関する管理操作は、svcadm(1M) を使用して実行できます。サービスステータスを照会するには、svcs(1) コマンドを使用します。

IP フィルタの起動時構成ファイルは /etc/ipf に保存されます。

名前

isalist – Solaris ソフトウェアに認識されるネイティブな命令セット

機能説明

isalist(1) によって、および sysinfo(2) の SI_ISALIST コマンドによって返される可能性のある命令セットの名前を、ここに一覧表示します。

このリストでは、命令セットファミリ別に、おおむね後ろに行くほど高速になるように名前が並んでいます。isalist(1) および sysinfo(2) の表示とは逆の順序です。次の値リストでは、通し番号はおおむねパフォーマンスの向上を表し、アルファベットの付いた項目は、相互排他的関係にあるか順序付け不可能なものです。

この機能は廃止されており、Solaris の将来のバージョンでは削除されることがあります。次のリストは、最近のプロセッサに追加されているすべての拡張機能を反映しているわけではありません。命令セット拡張機能のより適切な処理方法については、getisax(2) を参照してください。

SPARC プラットフォーム

適切と思われる箇所では、Sun の C 4.0 コンパイラの -xarch オプションの指定した値と対応する値が示されます。ほかのコンパイラにも同様のオプションがあります。

1a. sparc
: 『SPARC Architecture Manual, Version 8』(Prentice-Hall, Inc. 発行、1992 年) で定義された SPARC V8 命令セットを示します。特定のシステムでは、一部の命令 (整数の乗除、FSMULD および quad オペランドでのすべての浮動小数点演算) がカーネルによりエミュレートされます。

1b. sparcv7
: sparc の場合と同じです。これは、Sun の C 4.0 コンパイラの –xarch=v7 オプションで生成されるコードに対応します。

2. sparcv8–fsmuld
: sparc と同様ですが、整数の乗除がハードウェアで実行される必要がある点が異なります。これは、Sun の C 4.0 コンパイラの –xarch=v8a オプションで生成されるコードに対応します。

3. sparcv8
: sparcv8–fsmuld と同様ですが、FSMULD がハードウェアで実行される必要がある点が異なります。これは、Sun の C 4.0 コンパイラの –xarch=v8 オプションで生成されるコードに対応します。

4. sparcv8plus
: SPARC V8 命令セットに加え、『The SPARC Architecture Manual, Version 9』(Prentice-Hall, Inc. 発行、1994 年) で定義されている SPARC V9 命令セット内の命令 (『The V8+ Technical Specification』に従って使用可能) も示します。これは、Sun の C 4.0 コンパイラの –xarch=v8plus オプションで生成されるコードに対応します。

	5a. sparcv8plus+vis	sparcv8plus と同様ですが、さらに『The V8+ Technical Specification』に従って使用可能な UltraSPARC I 視覚化命令 (VIS) が加わります。これは、Sun の C 4.0 コンパイラの –xarch=v8plusa オプションで生成されるコードに対応します。
	5b. sparcv8plus+fmuladd	sparcv8plus と同様ですが、さらに富士通 SPARC64 の Floating Multiply-Add 命令および Multiply-Subtract 命令が加わります。
	6. sparcv9	『SPARC Architecture Manual, Version 9』(Prentice-Hall, Inc. 発行、1994 年) で定義された SPARC V9 命令セットを示します。
	7a. sparcv9+vis	sparcv9 と同様ですが、さらに UltraSPARC I 視覚化命令 (VIS) が加わります。
	7b. sparcv9+vis2	sparcv9 と同様ですが、さらに UltraSPARC III 視覚化命令 (VIS) が加わります。
	7c. sparcv9+fmuladd	sparcv9 と同様ですが、さらに富士通 SPARC64 の Floating Multiply-Add 命令および Multiply-Subtract 命令が加わります。
x86 プラットフォーム	1. i386	『The i386 Microprocessor Programmer's Reference Manual』で説明されている Intel 80386 命令セット。
	2. i486	『The i486 Microprocessor Programmer's Reference Manual』で説明されている Intel 80486 命令セット。(これは、事実上 i386 に加え、CMPXCHG、BSWAP、および XADD 命令。)
	3. pentium	『The Pentium Processor User's Manual』で説明されている Intel Pentium の命令セット。(これは、事実上 i486 に加え、CPU_ID 命令および CPU_ID 命令が提示する機能すべてが存在。)
	4. pentium+mmx	pentium と同様ですが、MMX 命令の存在が保証されています。
	5. pentium_pro	『The PentiumPro Family Developer's Manual』で説明されている Intel PentiumPro の命令セット。(これは、事実上 pentium に加え、CMOVcc、FCMOVcc、FCOMI、および RDPMC 命令の存在が保証されています。)
	6. pentium_pro+mmx	pentium_pro と同様ですが、MMX 命令の存在が保証されています。
	7. amd64	『AMD64 Architecture Programmer's Manual』で説明されている AMD Opteron 命令セット。

関連項目 isalist(1), getisax(2), sysinfo(2)

名前

kerberos – overview of Solaris Kerberos implementation

機能説明

The Solaris Kerberos implementation, hereafter sometimes shortened to “Kerberos,” authenticates clients in a network environment, allowing for secure transactions. (A client may be a user or a network service.) Kerberos validates the identity of a client and the authenticity of transferred data. Kerberos is a *single-sign-on* system, meaning that a user needs to provide a password only at the beginning of a session. The Solaris Kerberos implementation is based on the Kerberos(TM) system developed at MIT, and is compatible with Kerberos V5 systems over heterogeneous networks.

Kerberos works by granting clients *tickets*, which uniquely identify a client, and which have a finite lifetime. A client possessing a ticket is automatically validated for network services for which it is entitled; for example, a user with a valid Kerberos ticket may rlogin into another machine running Kerberos without having to identify itself. Because each client has a unique ticket, its identity is guaranteed.

To obtain tickets, a client must first initialize the Kerberos session, either by using the `kinit(1)` command or a PAM module. (See `pam_krb5(5)`). `kinit` prompts for a password, and then communicates with a *Key Distribution Center* (KDC). The KDC returns a *Ticket-Granting Ticket* (TGT) and prompts for a confirmation password. If the client confirms the password, it can use the Ticket-Granting Ticket to obtain tickets for specific network services. Because tickets are granted transparently, the user need not worry about their management. Current tickets may be viewed by using the `klist(1)` command.

Tickets are valid according to the system *policy* set up at installation time. For example, tickets have a default lifetime for which they are valid. A policy may further dictate that privileged tickets, such as those belonging to root, have very short lifetimes. Policies may allow some defaults to be overruled; for example, a client may request a ticket with a lifetime greater or less than the default.

Tickets can be renewed using `kinit`. Tickets are also *forwardable*, allowing you to use a ticket granted on one machine on a different host. Tickets can be destroyed by using `kdestroy(1)`. It is a good idea to include a call to `kdestroy` in your `.logout` file.

Under Kerberos, a client is referred to as a *principal*. A principal takes the following form:

```
primary/instance@REALM
```

primary — A user, a host, or a service.

instance — A qualification of the primary. If the primary is a host — indicated by the keyword `host`— then the instance is the fully-qualified domain name of that host. If the primary is a user or service, then the instance is optional. Some instances, such as `admin` or `root`, are privileged.

realm — The Kerberos equivalent of a domain; in fact, in most cases the realm is directly mapped to a DNS domain name. Kerberos realms are given in upper-case only.

For examples of principal names, see the EXAMPLES.

By taking advantage of the General Security Services API (GSS-API), Kerberos offers, besides user authentication, two other types of security service: *integrity*, which authenticates the validity of transmitted data, and *privacy*, which encrypts transmitted data. Developers can take advantage of the GSS-API through the use of the RPCSEC_GSS API interface (see `rpcsec_gss(3NSL)`).

使用例

例 1 Examples of valid principal names

The following are examples of valid principal names:

```
joe
joe/admin
joe@ENG.ACME.COM
joe/admin@ENG.ACME.COM
rlogin/bigmachine.eng.acme.com@ENG.ACME.COM
host/bigmachine.eng.acme.com@ENG.ACME.COM
```

The first four cases are *user principals*. In the first two cases, it is assumed that the user `joe` is in the same realm as the client, so no realm is specified. Note that `joe`and `joe/admin` are different principals, even if the same user uses them; `joe/admin` has different privileges from `joe`. The fifth case is a *service principal*, while the final case is a *host principal*. The word `host` is required for host principals. With host principals, the instance is the fully qualified hostname. Note that the words `admin` and `host` are reserved keywords.

関連項目

`kdestroy(1)`, `kinit(1)`, `klist(1)`, `kpasswd(1)`, `krb5.conf(4)`, `krb5envvar(5)`

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

注意事項

In previous releases of the Solaris operating system, the Solaris Kerberos implementation was referred to as the “Sun Enterprise Authentication Mechanism” (SEAM).

If you enter your username and `kinit` responds with this message:

```
Principal unknown (kerberos)
```

you have not been registered as a Kerberos user. See your system administrator or the 『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』.

名前

krb5_auth_rules – overview of Kerberos V5 authorization

機能説明

When kerberized versions of the `ftp`, `rcp`, `rlogin`, `rsh`, `telnet`, or `ssh` clients are used to connect to a server, the identity of the originating user must be authenticated to the Kerberos V5 authentication system. Account access can then be authorized if appropriate entries exist in the `~/.k5login` file, the `gsscred` table, or if the default GSS/Kerberos authentication rules successfully map the Kerberos principal name to Unix login name.

To avoid security problems, the `~/.k5login` file must be owned by the remote user on the server the client is attempting to access. The file should contain a private authorization list comprised of Kerberos principal names of the form *principal/instance@realm*. The */instance* variable is optional in Kerberos principal names. For example, different principal names such as `jdb@ENG.ACME.COM` and `jdb/happy.eng.acme.com@ENG.ACME.COM` would each be legal, though not equivalent, Kerberos principals. The client is granted access if the `~/.k5login` file is located in the login directory of the remote user account and if the originating user can be authenticated to one of the principals named in the file. See `gkadmin(1M)` and `kadm5.acl(4)` for more information on Kerberos principal names.

When no `~/.k5login` file is found in the remote user's login account, the Kerberos V5 principal name associated with the originating user is checked against the `gsscred` table. If a `gsscred` table exists and the principal name is matched in the table, access is granted if the Unix user ID listed in the table corresponds to the user account the client is attempting to access. If the Unix user ID does not match, access is denied. See `gsscred(1M)`.

For example, an originating user listed in the `gsscred` table with the principal name `jdb@ENG.ACME.COM` and the `uid` `23154` is granted access to the `jdb-user` account if `23154` is also the `uid` of `jdb-user` listed in the user account database. See `passwd(4)`.

Finally, if there is no `~/.k5login` file and the Kerberos V5 identity of the originating user is not in the `gsscred` table, or if the `gsscred` table does not exist, the client is granted access to the account under the following conditions (default GSS/Kerberos auth rules):

- The user part of the authenticated principal name is the same as the Unix account name specified by the client.
- The realm part of the client and server are the same, unless the `krb5.conf(4)` *auth_to_local_realm* parameter is used to create equivalence.
- The Unix account name exists on the server.

For example, if the originating user has the principal name `jdb@ENG.ACME.COM` and if the server is in realm `SALES.ACME.COM`, the client would be denied access even if `jdb` is a valid account name on the server. This is because the realms `SALES.ACME.COM` and `ENG.ACME.COM` differ.

The krb5.conf(4) *auth_to_local_realm* parameter also affects authorization. Non-default realms can be equated with the default realm for authenticated `name-to-local` `name` mapping.

ファイル

`~/.k5login`	Per user-account authorization file.
`/etc/passwd`	System account file. This information may also be in a directory service. See passwd(4).

属性

See attributes(5) for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed

関連項目

ftp(1), rcp(1), rsh(1), telnet(1), gkadmin(1M), gsscred(1M), kadm5.acl(4), krb5.conf(4), passwd(4), attributes(5), gss_auth_rules(5)

名前

krb5envvar – Kerberos environment variables

機能説明

The Kerberos mechanism provides a number of environment variables to configure different behavior in order to meet applications' needs. Environment variables used within the Kerberos mechanism are:

KRB5_KTNAME

Used by the mechanism to specify the location of the key table file. The variable can be set to the following value:

[[<*kt type*>:]<*file name*>]

where <*kt type*> can be FILE or WRFILE. FILE is for read operations; WRFILE is for write operations. <*file name*> is the location of the keytab file.

r

If KRB5_KTNAME is not defined, the default value is:

FILE:/etc/krb5/krb5.keytab

The keytab file is used to store credentials persistently and is used commonly for service daemons.

Specifying the FILE type assumes that the subsequent operations on the associated file are readable by the invoking process. Care must be taken to ensure that the file is readable only by the set of principals that need to retrieve their unencrypted keys.

The WRFILE type is used by the kadmin(1M) command. Specifying this type allows the administrator to designate an alternate keytab file to write to without using extra command line arguments for file location.

KRB5CCNAME

Used by the mechanism to specify the location of the credential cache. The variable can be set to the following value:

[[<*cc type*>:]<*file name*>]

where <*cc type*> can be FILE or MEMORY. <*file name*> is the location of the principal's credential cache.

If KRB5CCNAME is not defined, the default value is:

FILE:/tmp/krb5cc_<*uid*>

where <*uid*> is the user id of the process that created the cache file.

The credential cache file is used to store tickets that have been granted to the principal.

Specifying the FILE types assumes that subsequent operations on the associated file are readable and writable by the invoking process. Care must be taken to ensure that the file is

accessible only by the set of principals that need to access their credentials. If the credential file is in a directory to which other users have write access, you need to set that directory's sticky bit (see chmod(1)).

The MEMORY credential cache type is used only in special cases, such as when making a temporary cache for the life of the invoking process.

KRB5RCNAME

Used by the mechanism to specify the type and location of the replay cache. The variable can be set to the following value:

[[<*rc type*>:]<*file name*>]

where <*rc type*> can be either FILE, MEMORY, or NONE. <*file name*> is relevant only when specifying the replay cache file type.

If not defined, the default value is:

FILE:/var/krb5/rcache/root/rc_<*service*>

...if the process is owned by root, or:

FILE:/var/krb5/rcache/rc_<*service*>

...if the process is owned by a user other than root. <*service*> is the service process name associated with the replay cache file.

The replay cache is used by Kerberos to detect the replay of authentication data. This prevents people who capture authentication messages on the network from authenticating to the server by resending these messages.

When specifying the FILE replay cache type, care must be taken to prevent the replay cache file from being deleted by another user. Make sure that every directory in the replay cache path is either writable only by the owner of the replay cache or that the sticky bit ("t") is set on every directory in the replay cache path to which others have write permission.

When specifying the MEMORY replay cache type you need to weigh the trade-off of performance against the slight security risk created by using a non-persistent cache. The risk occurs during system reboots when the following condition obtains:

- The duration from the last write to the replay cache before reboot to the point when the Kerberized server applications are running is less than the Kerberos clockskew (see krb5.conf(4)).

When specifying the NONE replay cache time you need to understand that this disables the replay cache, and all security risks that this presents. This includes all the risks outlined in this section of the man page.

Under this condition, the server applications can accept a replay of Kerberos authentication data (up to the difference between the time of the last write and the clockskew). Typically, this is a small window of time. If the server applications take longer than the clockskew to start accepting connections there is no replay risk.

The risk described above is the same when using FILE replay cache types when the replay cache resides on swap file systems, such as /tmp and /var/run.

The performance improvement in MEMORY replay cache types over FILE types is derived from the absence of disk I/O. This is true even if the FILE replay cache is on a memory-backed file system, such as swap (/tmp and /var/run).

Note that MEMORY-type caches are per-process caches, therefore use of these types of caches must be carefully considered. One example of where MEMORY-type caches can be problematic is when an application uses more than one process for establishing security contexts. In such a case, memory replay caches are not shared across the processes, thus allowing potential for replay attacks.

KRB5_CONFIG

Allows you to change the default location of the /etc/krb5/krb5.conf file to enable the Kerberos library code to read configuration parameters from another file specified by KRB5_CONFIG. For example (using kinit from ksh(1)):

```
KRB5_CONFIG=/var/tmp/krb5.conf kinit
```

属性

See attributes(5) for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	system/security/kerberos-5
Interface Stability	Uncommitted

関連項目

chmod(1), kinit(1), klist(1), ksh(1), kadmin(1M), kadmind(1M), krb5.conf(4), attributes(5), kerberos(5)

名前

kssl, KSSL – kernel SSL proxy

機能説明

The KSSL is a transparent server side proxy for SSL/TLS protocol. It provides processing of SSL traffic in the kernel and thus improving performance by avoiding context switches and directly accessing kernel providers of Oracle Solaris Crypto Framework. With KSSL it is possible to provide SSL protection even for applications which are only able to communicate in clear text over TCP.

KSSL is configured in the kernel and passes/accepts clear text data from an application. Together they are visible to the clients as single SSL server.

The server side application for which KSSL is configured is unaware that it is receiving data previously protected by SSL. KSSL receives SSL traffic on one port, for example, 443, performs processing and passes clear text data to the application listening on another port, for example, 8080. Similarly, for the outgress direction, application sends clear text data and KSSL produces SSL records and sends them to the client. Therefore, the application does not have to be setup for SSL.

Multiple KSSL instances can be configured on the system, each with separate set of properties such as port, certificate, key or cipher suites. See `ksslcfg(1M)`. Each KSSL instance in the kernel is tracked as SMF service. See `smf(5)`.

KSSL provides SSL processing for records passed with TCP over both IPv4 and IPv6.

KSSL supports the following protocols: SSLv3, TLSv1.0

関連項目

`ksslcfg(1M)`, `smf(5)`

T. Dierks, C. Allen, RFC 2246, The TLS Protocol Version 1.0, The Internet Society, 1999.

名前

labels – Solaris Trusted Extensions ラベル属性

機能説明

ラベルは必須ポリシーの決定に使用される属性です。ラベルは、すべてのサブジェクト (通常はプロセス) およびサブジェクトへとアクセス可能なオブジェクト (通常はファイルのようにデータを保持するもの) に、明示的または暗黙的に関連付けられます。デフォルトの Trusted Extensions 必須ポリシーラベルは、サイトのセキュリティー管理者により、label_encodings(4) 内で定義されます。

必須ポリシー

Solaris Trusted Extensions の有効期間中に、さまざまな必須ポリシーを提供できます。

Trusted Extensions のデフォルト必須ポリシーは必須アクセス制御 (MAC) ポリシー (Lattice の Bell-LaPadula Model の必須ポリシー、Simple Security Property、および *-Property (Star Property) と同等) で、制限された上位書き込みを持ちます。デフォルト必須ポリシーは、Non-Inteference の Goguen and Mesegeur モデルとも同等です。

この MAC ポリシーの場合、2 つのラベル admin_low および admin_high が常に定義されます。サイトのセキュリティー管理者は、label_encodings(4) 内でその他のラベルすべてを定義します。admin_low は、ユーザーが読み取り (表示) 可能な通常の Trusted Extensions オブジェクトすべてと関連付けられます。admin_high は、その他の Trusted Extensions オブジェクトすべてと関連付けられます。admin_high オブジェクトへの MAC 読み取り (表示) アクセス権を保持するのは、管理ユーザーだけです。また、admin_low オブジェクトや admin_high オブジェクトへの MAC 書き込み (変更) アクセス権を保持するのも管理ユーザーだけです。

人間が読み取り可能なラベル

ユーザーは、ラベルを文字列として対話的に処理します。グラフィカルユーザーインタフェースおよびコマンド行インタフェースには、label_encodings(4) の定義に従って文字列が表示されます。人間が読み取り可能なラベルは、それが表現するラベルで格付けされます。このため、ラベル A の文字列を読み取り可能 (表示可能、人間が読み取り可能な文字列と不透明な m_label_t 間の相互変換が可能) なのは、そのラベルへの読み取り (表示) アクセスを許可するラベルを持つサブジェクトだけです。

内部テキストラベル

公開アクセス可能な (admin_low) ネームサービスデータベースにラベルを格納する場合には、格付けされていない内部テキスト形式が使用されます。このテキスト形式は、この形式のラベルを作成した Trusted Extensions ソフトウェアリリースで提供されるインタフェース以外のインタフェースでの使用は意図されていません。

ラベルとアプリケーション

アプリケーションは、ラベルとの対話処理を行う際に、ラベルが不透明な (m_label_t) 構造体であると見なします。これら不透明な構造体のセマンティクスは、文字列から m_label_t への変換で定義されます。変換は、label_encodings(4) 内で定義されます。さまざまなアプリケーションプログラミングインタフェース (API) が、文字列と m_label_t 構造体間の変換を行います。さまざま API が、サブジェクト関連のラベルからオブジェクト関連のラベルへのアクセスをテストします。

属性

次の属性については、 attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
インタフェースの安定性	下記を参照。

ラベル実装は、label_encodings(4) の米国国防情報局 (DIA) MAC ポリシーを実装するシステムでは「確実」です。Trusted Extensions の将来のリリースにその他のポリシーが存在する可能性はありますが、それらは将来のリリースでは廃止されるか、label_encodings の補完的役割になる可能性があります。

内部テキストラベルはインタフェースではないため、Trusted Extensions のいずれかのリリースで変更される可能性があります。これらは、同一の Trusted Extensions ソフトウェアリリース上で入力および生成を行う場合だけを想定しています。

Trusted Solaris 8 アプリケーションでの移植性を高めるために、不透明な構造体名 bslabel_t、blevel_t、および bclear_t が、m_label_t と等価なものとして定義されています。これらのタイプは、m_label_t と同様に、不透明なポインタとして移植する必要があります。さまざまな Trusted Solaris 8 ラベルインタフェースに対して、同じ作業を行う必要があります。これらの Trusted Solaris 8 構造体およびインタフェースは廃止済みであり、Trusted Extensions の将来のリリースでは削除される可能性があります。

関連項目

chk_encodings(1M), blcompare(3TSOL), label_to_str(3TSOL), m_label_alloc(3TSOL), m_label_dup(3TSOL), m_label_free(3TSOL), str_to_label(3TSOL), label_encodings(4), attributes(5)

『Secure Computer Systems: Unified Exposition and Multics Interpretation』、Bell, D. E. および LaPadula, L. J. 共著、MTR-2997 第 2 版、MITRE Corp 発行、Bedford Mass.、1976 年 3 月。NTIS AD-A023 588/7。

『Security Policies and Security Models』、Goguen, J. A. および Mesegeur, J. 共著、1982 Symposium on Security and Privacy 紀要、IEEE Computer Society Press 発行、1982 年、11-20 ページ。

『Unwinding and Interference Control』、Goguen, J. A. および Mesegeur, J. 共著、1984 Symposium on Security and Privacy 紀要、IEEE Computer Society Press 発行、1984 年、75-86 ページ。

『Compartmented Mode Workstation Labeling: Encodings Format』

注意事項

このマニュアルページに記載されている機能を利用できるのは、システムが Trusted Extensions を使用して構成されている場合だけです。

名前

largefile – large file status of utilities

機能説明

A *large file* is a regular file whose size is greater than or equal to 2 Gbyte (2^{31} bytes). A *small file* is a regular file whose size is less than 2 Gbyte.

Large file aware utilities

A utility is called *large file aware* if it can process large files in the same manner as it does small files. A utility that is large file aware is able to handle large files as input and generate as output large files that are being processed. The exception is where additional files are used as system configuration files or support files that can augment the processing. For example, the `file` utility supports the `-m` option for an alternative "magic" file and the `-f` option for a support file that can contain a list of file names. It is unspecified whether a utility that is large file aware will accept configuration or support files that are large files. If a large file aware utility does not accept configuration or support files that are large files, it will cause no data loss or corruption upon encountering such files and will return an appropriate error.

The following `/usr/bin` utilities are large file aware:

`adb`	`aliasadm`	`awk`	`bdiff`	`cat`
`chgrp`	`chmod`	`chown`	`cksum`	`cmp`
`compress`	`cp`	`csh`	`csplit`	`cut`
`dd`	`dircmp`	`du`	`egrep`	`fgrep`
`file`	`find`	`ftp`	`getconf`	`grep`
`gzip`	`head`	`join`	`jsh`	`ksh88`
`ksh`	`ln`	`ls`	`mailcompat`	`mailstats`
`mdb`	`mkdir`	`mkfifo`	`more`	`mv`
`nawk`	`page`	`paste`	`pathchck`	`pg`
`praliases`	`rcp`	`remsh`	`rksh88`	`rksh`
`rm`	`rmdir`	`rsh`	`sed`	`sh`
`sort`	`split`	`sum`	`tail`	`tar`
`tee`	`test`	`touch`	`tr`	`uncompress`
`uudcode`	`uuencode`	`vacation`	`wc`	`zcat`

The following `/usr/xpg4/bin` utilities are large file aware:

`awk`	`cp`	`chgrp`	`chown`	`du`
`egrep`	`fgrep`	`file`	`grep`	`ln`

```
ls              more            mv              rm              sed
sh              sort            tail            tr
```

The following /usr/xpg6/bin utilities are large file aware:

```
getconf         ls              tr
```

The following /usr/sbin utilities are large file aware:

```
editmap         install         makemap         mkfile          mknod
mvdir           swap
```

The following /usr/lib utilities are large file aware:

```
mail.local      sendmail        smrsh
```

See the USAGE section of the swap(1M) manual page for limitations of swap on block devices greater than 2 Gbyte on a 32–bit operating system.

The following /usr/ucb utilities are large file aware:

```
chown           from            ln              ls              sed
sum             touch
```

The /usr/bin/cpio and /usr/bin/pax utilities are large file aware, but cannot archive a file whose size exceeds 8 Gbyte – 1 byte.

The /usr/bin/truss utilities has been modified to read a dump file and display information relevant to large files, such as offsets.

nfs file systems

The following utilities are large file aware for nfs file systems:

```
/usr/lib/autofs/automountd          /usr/sbin/mount
/usr/lib/nfs/rquotad
```

ufs file systems

The following /usr/bin utility is large file aware for ufs file systems:

df

The following /usr/lib/nfs utility is large file aware for ufs file systems:

rquotad

The following /usr/xpg4/bin utility is large file aware for ufs file systems:

df

The following /usr/sbin utilities are large file aware for ufs file systems:

clri	dcopy	edquota	ff	fsck
fsdb	fsirand	fstyp	labelit	lockfs
mkfs	mount	ncheck	newfs	quot
quota	quotacheck	quotaoff	quotaon	repquota
tunefs	ufsdump	ufsrestore	umount	

Large file safe utilities

A utility is called *large file safe* if it causes no data loss or corruption when it encounters a large file. A utility that is large file safe is unable to process properly a large file, but returns an appropriate error.

The following /usr/bin utilities are large file safe:

audioconvert	audioplay	audiorecord	comm	diff
diff3	diffmk	ed	lp	mail
mailcompat	mailstats	mailx	pack	pcat
red	rmail	sdiff	unpack	vi
view				

The following /usr/xpg4/bin utilities are large file safe:

ed	vi	view

The following /usr/xpg6/bin utility is large file safe:

ed

The following /usr/sbin utilities are large file safe:

lpfilter lpforms

The following /usr/ucb utilities are large file safe:

Mail lpr

関連項目 lf64(5), lfcompile(5), lfcompile64(5)

名前

ldap – LDAP as a naming repository

機能説明

LDAP refers to Lightweight Directory Access Protocol, which is an industry standard for accessing directory servers. By initializing the client using `ldapclient(1M)` and using the keyword `ldap` in the name service switch file, `/etc/nsswitch.conf`, Oracle Solaris clients can obtain naming information from an LDAP server. Information such as usernames, hostnames, and passwords are stored on the LDAP server in a Directory Information Tree or DIT. The DIT consists of entries which in turn are composed of attributes. Each attribute has a type and one or more values.

Oracle Solaris LDAP clients use the LDAP v3 protocol to access naming information from LDAP servers. The LDAP server must support the object classes and attributes defined in RFC2307bis (draft), which maps the naming service model on to LDAP. As an alternate to using the schema defined in RFC2307bis (draft), the system can be configured to use other schema sets and the schema mapping feature is configured to map between the two. Refer to the 『Oracle Solaris Administration: Naming and Directory Services』 for more details.

The `ldapclient(1M)` utility can make an Oracle Solaris machine an LDAP client by setting up the appropriate directories, files, and configuration information. The LDAP client caches this configuration information in local cache files. This configuration information is accessed through the `ldap_cachemgr(1M)` daemon. This daemon also refreshes the information in the configuration files from the LDAP server, providing better performance and security. The `ldap_cachemgr` must run at all times for the proper operation of the naming services.

There are two types of configuration information, the information available through a profile, and the information configured per client. The profile contains all the information as to how the client accesses the directory. The credential information for proxy user is configured on a per client basis and is not downloaded through the profile.

The profile contains server-specific parameters that are required by all clients to locate the servers for the desired LDAP domain. This information could be the server's IP address and the search base Distinguished Name (DN), for instance. It is configured on the client from the default profile during client initialization and is periodically updated by the `ldap_cachemgr` daemon when the expiration time has elapsed.

Client profiles can be stored on the LDAP server and can be used by the `ldapclient` utility to initialize an LDAP client. Using the client profile is the easiest way to configure a client machine. See `ldapclient(1M)`.

Credential information includes client-specific parameters that are used by a client. This information could be the Bind DN (LDAP “login” name) of the client and the password. If these parameters are required, they are manually defined during the initialization through `ldapclient(1M)`.

The naming information is stored in containers on the LDAP server. A container is a non-leaf entry in the DIT that contains naming service information. Containers are similar to maps in

NIS. A default mapping between the NIS databases and the containers in LDAP is presented below. The location of these containers as well as their names can be overridden through the use of `serviceSearchDescriptors`. For more information, see `ldapclient(1M)`.

Database	Object Class	Container
passwd	posixAccount shadowAccount	ou=people,dc=...
group	posixGroup	ou=Group,dc=...
services	ipService	ou=Services,dc=...
protocols	ipProtocol	ou=Protocols,dc=...
rpc	oncRpc	ou=Rpc,dc=...
hosts ipnodes	ipHost ipHost	ou=Hosts,dc=... ou=Hosts,dc=...
ethers	ieee802Device	ou=Ethers,dc=...
bootparams	bootableDevice	ou=Ethers,dc=...
networks netmasks	ipNetwork ipNetwork	ou=Networks,dc=... ou=Networks,dc=...
netgroup	nisNetgroup	ou=Netgroup,dc=...
aliases	mailGroup	ou=Aliases,dc=...
publickey	nisKeyObject	
generic	nisObject	nisMapName=...,dc=...
printers	printerService	ou=Printers,dc=...
auth_attr	SolarisAuthAttr	ou=SolarisAuthAttr,dc=...
prof_attr	SolarisProfAttr	ou=SolarisProfAttr,dc=...
exec_attr	SolarisExecAttr	ou=SolarisProfAttr,dc=...
user_attr	SolarisUserAttr	ou=people,dc=...

The security model for clients is defined by a combination of the credential level to be used, the authentication method, and the PAM modules to be used. The credential level defines what credentials the client should use to authenticate to the directory server, and the authentication method defines the method of choice. Both these can be set with multiple values. The Oracle Solaris LDAP supports the following values for credential level :

```
anonymous
proxy
self
```

The Oracle Solaris LDAP supports the following values for authentication method:

```
none
simple
sasl/CRAM-MD5
sasl/DIGEST-MD5
sasl/GSSAPI
tls:simple
tls:sasl/CRAM-MD5
tls:sasl/DIGEST-MD5
```

When the credential level is configured as `self`, DNS must be configured and the authentication method must be `sasl/GSSAPI`. The `hosts` and `ipnodes` in `/etc/nsswitch.conf` must be configured to use DNS, for example `hosts: dns files` and `ipnodes: dns files`.

`sasl/GSSAPI` automatically uses `GSSAPI` confidentiality and integrity options, if they are configured on the directory server.

The credential level of `self` enables per-user naming service lookups, or lookups that use the `GSSAPI` credentials of the user when connecting to the directory server. Currently the only `GSSAPI` mechanism supported in this model is Kerberos V5. Kerberos must be configured before you can use this credential level. See `kerberos(5)` for details.

More protection can be provided by means of access control, allowing the server to grant access for certain containers or entries. Access control is specified by Access Control Lists (ACLs) that are defined and stored in the LDAP server. The Access Control Lists on the LDAP server are called Access Control Instructions (ACIs) by the the SunOne Directory Server. Each ACL or ACI specifies one or more directory objects, for example, the `cn` attribute in a specific container, one or more clients to whom you grant or deny access, and one or more access rights that determine what the clients can do to or with the objects. Clients can be users or applications. Access rights can be specified as read and write, for example. Refer to the 『Oracle Solaris Administration: Naming and Directory Services』 regarding the restrictions on ACLs and ACIs when using LDAP as a naming repository.

A sample `nsswitch.conf(4)` file called `nsswitch.ldap` is provided in the `/etc` directory. This is copied to `/etc/nsswitch.conf` by the `ldapclient(1M)` utility. This file uses LDAP as a repository for the different databases in the `nsswitch.conf` file.

The following is a list of the user commands related to LDAP:

`idsconfig(1M)` Prepares a SunOne Directory Server to be ready to support Solaris LDAP clients.

ldapaddent(1M)	Creates LDAP entries from corresponding /etc files.
ldapclient(1M)	Initializes LDAP clients, or generates a configuration profile to be stored in the directory.
ldaplist(1)	Lists the contents of the LDAP naming space.

ファイル

/var/ldap/ldap_client_cred /var/ldap/ldap_client_file	Files that contain the LDAP configuration of the client. Do not manually modify these files. Their content is not guaranteed to be human readable. Use ldapclient(1M) to update them.
/etc/nsswitch.conf	Configuration file for the name-service switch.
/etc/nsswitch.ldap	Sample configuration file for the name-service switch configured with LDAP and files.
/etc/pam.conf	PAM framework configuration file.

関連項目

ldaplist(1), idsconfig(1M), ldap_cachemgr(1M), ldapaddent(1M), ldapclient(1M), nsswitch.conf(4), pam.conf(4), kerberos(5)pam_authtok_check(5), pam_authtok_get(5), pam_authtok_store(5), pam_dhkeys(5), pam_ldap(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), pam_unix_auth(5), pam_unix_session(5)

『Oracle Solaris Administration: Naming and Directory Services』

名前

lf64 – transitional interfaces for 64-bit file offsets

機能説明

The data types, interfaces, and macros described on this page provide explicit access to 64-bit file offsets. They are accessible through the transitional compilation environment described on the `lfcompile64(5)` manual page. The function prototype and semantics of a transitional interface are equivalent to those of the standard version of the call, except that relevant data types are 64-bit entities.

Data Types

The following tables list the standard data or struct types in the left-hand column and their corresponding explicit 64-bit file offset types in the right-hand column, grouped by header. The absence of an entry in the left-hand column indicates that there is no existing explicit 32-bit type that corresponds to the 64–bit type listed in the right—hand column. Note that in a 64-bit application, the standard definition is equivalent to the 64-bit file offset definition.

<aio.h>

struct `aiocb`	struct `aiocb64`
`off_t` aio_offset;	`off64_t` aio_offset;

<sys/dirent.h>

struct `dirent`	struct `dirent64`
`ino_t` d_ino;	`ino64_t` d_ino;
`off_t` d_off;	`off64_t` d_off;

<sys/fcntl.h>

struct `flock`	struct `flock64`
`off_t` l_start;	`off64_t` l_start;
`off_t` l_len;	`off64_t` l_len;
`F_SETLK`	`F_SETLK64`
`F_SETLKW`	`F_SETLKW64`
`F_GETLK`	`F_GETLK64`
`F_FREESP`	`F_FREESP64`
`F_ALLOCSP`	`F_ALLOCSP64`
	`O_LARGEFILE`

<sys/stdio.h>

fpos_t	fpos64_t

<sys/resource.h>

rlim_t	rlim64_t
struct rlimit	struct rlimit64
rlim_t rlim_cur;	rlim64_t rlim_cur;
rlim_t rlim_max;	rlim64_t rlim_max;
RLIM_INFINITY	RLIM64_INFINITY
RLIM_SAVED_MAX	RLIM64_SAVED_MAX
RLIM_SAVED_CUR	RLIM64_SAVED_CUR

<sys/stat.h>

struct stat	struct stat64
ino_t st_ino;	ino64_t st_ino;
off_t st_size;	off64_t st_size;
blkcnt_t st_blocks;	blkcnt64_t st_blocks;

<sys/statvfs.h>

struct statvfs	struct statvfs64
fsblkcnt_t f_blocks;	fsblkcnt64_t f_blocks;
fsblkcnt_t f_bfree;	fsblkcnt64_t f_bfree;
fsblkcnt_t f_bavial;	fsblkcnt64_t f_bavial;
fsfilcnt_t f_files;	fsfilcnt64_t f_files;
fsfilcnt_t f_ffree;	fsfilcnt64_t f_ffree;
fsfilcnt_t f_favail;	fsfilcnt64_t f_favail;

<sys/types.h>

off_t;	off64_t;
ino_t;	ino64_t;
blkcnt_t;	blkcnt64_t;
fsblkcnt_t;	fsblkcnt64_t;
fsfilcnt_t;	fsfilcnt64_t;

<unistd.h>

	_LFS64_LARGEFILE
	_LFS64_STDIO

<sys/unistd.h>

	_CS_LFS64_CFLAGS
	_CS_LFS64_LDFLAGS
	_CS_LFS64_LIBS
	_CS_LFS64_LINTFLAGS

System Interfaces

The following tables display the standard API and the corresponding transitional interfaces for 64-bit file offsets. The interfaces are grouped by header. The interface name and the affected data types are displayed in courier font.

<aio.h>

int aio_cancel(...,	int aio_cancel64(...,
struct aiocb *);	struct aiocb64 *);
int aio_error(	int aio_error64(
const struct aiocb *);	const struct aiocb64 *);
int aio_fsync(...,	int aio_fsync64(...,
struct aiocb *);	struct aiocb64 *);
int aio_read(struct aiocb *);	int aio_read64(struct aiocb64 *);
int aio_return(struct aiocb *);	int aio_return64(struct aiocb64 *);
int aio_suspend(	int aio_suspend64(

const struct aiocb *, ...);	const struct aiocb64 *, ...);
int aio_waitn(aiocb_t *[],	int aio_waitn64(aiocb64_t *[],
...);	...);
int aio_write(struct aiocb *);	int aio_write64(struct aiocb64 *);
int lio_listio(...,	int lio_listio64(...,
const struct aiocb *, ...);	const struct aiocb64 *, ...);

<dirent.h>

int alphasort(	int alphasort64(
const struct dirent **,	const struct dirent64 **,
const struct dirent **)	const struct dirent64 **)
struct dirent *readdir();	struct dirent64 *readdir64();
struct dirent *readdir_r();	struct dirent64 *readdir64_r();
int scandir(...,	int scandir64(...,
struct dirent *(*[]),	struct dirent64 *(*[]),
int (*)(const struct dirent *),	int (*)(const struct dirent64 *),
int (*)(const struct dirent **,	int (*)(const struct dirent64 **,
const struct dirent **))	const struct dirent64 **))

<fcntl.h>

int attropen();	int attropen64();
int creat();	int creat64();
int open();	int open64();
int openat();	int openat64();
int posix_fadvise()	int posix_fadvise64()
int posix_fallocate()	int posix_fallocate64()

<ftw.h>

int ftw(...,	int ftw64(...,
const struct stat *, ...);	const struct stat64 *, ...);
int nftw(..	int nftw64(...,
const struct stat *, ...);	const struct stat64 *, ...);

<libgen.h>

char *copylist(..., off_t);	char *copylist64(..., off64_t);

<stdio.h>

int fgetpos();	int fgetpos64();
FILE *fopen();	FILE *fopen64();
FILE *freopen();	FILE *freopen64();
int fseeko(..., off_t, ...);	int fseeko64(..., off64_t, ...);
int fsetpos(...,	int fsetpos64(...,
const fpos_t *);	const fpos64_t *);
off_t ftello();	off64_t ftello64()();
FILE *tmpfile();	FILE *tmpfile64();

<stdlib.h>

int mkstemp();	int mkstemp64();

<sys/async.h>

int aioread(..., off_t, ...);	int aioread64(..., off64_t, ...);
int aiowrite(..., off_t, ...);	int aiowrite64(..., off64_t, ...);

<sys/dirent.h>

int `getdents`(..., `dirent`);	int `getdents64`(..., `dirent64`);

<sys/mman.h>

void `mmap`(..., `off_t`);	void `mmap64`(..., `off64_t`);

<sys/resource.h>

int `getrlimit`(...,	int `getrlimit64`(...,
struct `rlimit` *);	struct `rlimit64` *);
int `setrlimit`(...,	int `setrlimit64`(...,
const struct `rlimit` *);	const struct `rlimit64` *);

<sys/sendfile.h>

ssize_t `sendfile`(...,	ssize_t `sendfile64`(...,
`off_t` *, ...);	`off64_t` *, ...);
ssize_t `sendfilev`(..., const	ssize_t `sendfilev64`(..., const
struct `sendfilevec` *, ...);	struct `sendfilevec64` *, ...);

<sys/stat.h>

int `fstat`(..., struct `stat` *);	int `fstat64`(..., struct `stat64` *);
int `fstatat`(...,	int `fstatat64`(...,
struct `stat` *, int);	struct `stat64` *, int);
int `lstat`(..., struct `stat` *);	int `lstat64`(..., struct `stat64` *);
int `stat`(..., struct `stat` *);	int `stat64`(..., struct `stat64` *);

<sys/statvfs.h>

int statvfs(...,	int statvfs64(...,
struct statvfs *);	struct statvfs64 *);
int fstatvfs(...,	int fstatvfs64(...,
struct statvfs *);	struct statvfs64 *);

<ucbinclude/stdio.h>

FILE *fopen()	FILE *fopen64()
FILE *freopen()	FILE *freopen64()

<ucbinclude/sys/dir.h>

int alphasort(	int alphasort64(
struct direct **,	struct direct64 **,
struct direct **);	struct direct64 **);
struct direct *readdir();	struct direct64 *readdir64();
int scandir(...,	int scandir64(...,
struct direct *(*[]);, ...);	struct direct64 *(*[]);, ...);

<unistd.h>

int lockf(..., off_t);	int lockf64(..., off64_t);
off_t lseek(..., off_t, ...);	off64_t lseek64(..., off64_t, ...);
int ftruncate(..., off_t);	int ftruncate64..., off64_t);
ssize_t pread(..., off_t);	ssize_t pread64..., off64_t);
ssize_t pwrite(..., off_t);	ssize_t pwrite64(..., off64_t);
int truncate(..., off_t);	int truncate64(..., off64_t);

関連項目

lfcompile(5), lfcompile64(5)

名前

lfcompile – large file compilation environment for 32-bit applications

機能説明

All 64-bit applications can manipulate large files by default. The methods described on this page allow 32-bit applications to manipulate large files.

In the large file compilation environment, source interfaces are bound to appropriate 64-bit functions, structures, and types. Compiling in this environment allows 32-bit applications to access files whose size is greater than or equal to 2 Gbyte (2^{31} bytes).

Each interface named *xxx*`()` that needs to access 64-bit entities to access large files maps to a *xxx*`64()` call in the resulting binary. All relevant data types are defined to be of correct size (for example, `off_t` has a typedef definition for a 64-bit entity).

An application compiled in this environment is able to use the *xxx*`()` source interfaces to access both large and small files, rather than having to explicitly utilize the transitional *xxx*`64()` interface calls to access large files. See the `lfcompile64(5)` manual page for information regarding the transitional compilation environment.

Applications can be compiled in the large file compilation environment by using the following methods:

- Use the `getconf(1)` utility with one or more of the arguments listed in the table below. This method is recommended for portable applications.

argument	purpose
`LFS_CFLAGS`	obtain compilation flags necessary to enable the large file compilation environment
`LFS_LDFLAGS`	obtain link editor options
`LFS_LIBS`	obtain link library names
`LFS_LINTFLAGS`	obtain lint options

- Set the compile-time flag `_FILE_OFFSET_BITS` to 64 before including any headers. Applications may combine objects produced in the large file compilation environment with objects produced in the transitional compilation environment, but must be careful with respect to interoperability between those objects. Applications should not declare global variables of types whose sizes change between compilation environments.

Access to Additional Large File Interfaces

The `fseek()` and `ftell()` functions *do not* map to functions named `fseek64()` and `ftell64()`; rather, the large file additions `fseeko()` and `ftello()`, have functionality identical to `fseek()` and `ftell()` and *do* map to the 64-bit functions `fseeko64()` and `ftello64()`. Applications wishing to access large files should use `fseeko()` and `ftello()` in place of `fseek()` and `ftell()`. See the `fseek(3C)` and `ftell(3C)` manual pages for information about `fseeko()` and `ftello()`.

Applications wishing to access `fseeko()` and `ftello()` as well as the POSIX and X/Open specification-conforming interfaces should define the macro `_LARGEFILE_SOURCE` to be 1 and set whichever feature test macros are appropriate to obtain the desired environment (see `standards(5)`).

使用例

In the following examples, the large file compilation environment is accessed by invoking the `getconf` utility with one of the arguments listed in the table above. The additional large file interfaces are accessed by specifying `–D_LARGEFILE_SOURCE`.

The examples that use the form of command substitution specifying the command within parentheses preceded by a dollar sign can be executed only in a POSIX-conforming shell such as the Korn Shell (see `ksh(1)`). In a shell that is not POSIX-conforming, such as the Bourne Shell (see `sh(1)`) and the C Shell (see `csh(1)`), the `getconf` calls must be enclosed within grave accent marks, as shown in the second example.

例 1 Compile a program with a “large” off_t that uses fseeko(), ftello(), and yacc.

The following example compiles a program with a “large” `off_t` and uses `fseeko()`, `ftello()`, and `yacc(1)`.

```
$ c89 -D_LARGEFILE_SOURCE                \
      -D_FILE_OFFSET_BITS=64 -o foo      \
      $(getconf LFS_CFLAGS) y.tab.c b.o  \
      $(getconf LFS_LDFLAGS)             \
      -ly $(getconf LFS_LIBS)
```

例 2 Compile a program with a “large” off_t that does not use fseeko() and ftello() and has no application specific libraries.

```
% c89 -D_FILE_OFFSET_BITS=64     \
     ` getconf LFS_CFLAG`S a.c   \
     ` getconf LFS_LDFLAG`S      \
     ` getconf LFS_LIB`S         \
```

例 3 Compile a program with a “default” off_t that uses fseeko() and ftello().

```
$ c89 –D_LARGEFILE_SOURCE  a.c
```

関連項目

`csh(1)`, `getconf(1)`, `ksh(1)`, `yacc(1)`, `sh(1)`, `fseek(3C)`, `ftell(3C)`, `lf64(5)`, `lfcompile64(5)`, `standards(5)`

注意事項

Certain system-specific or non-portable interfaces are not usable in the large file compilation environment. Known cases are:

- Kernel data structures read from `/dev/kmem`.
- Interfaces in the kernel virtual memory library, `–lkvm`.
- Interfaces in the ELF access library, `–lelf`.
- Interfaces to `/proc` defined in `<procfs.h>`.
- The `ustat(2)` system call.

Programs that use these interfaces should not be compiled in the large file compilation environment. As a partial safeguard against making this mistake, including either of the <libelf.h> or <sys/procfs.h> header files will induce a compilation error when the large file compilation environment is enabled.

In general, caution should be exercised when using any separately-compiled library whose interfaces include data items of type off_t or the other redefined types either directly or indirectly, such as with 'struct stat'. (The redefined types are off_t, rlim_t, ino_t, blkcnt_t, fsblkcnt_t, and fsfilcnt_t.) For the large file compilation environment to work correctly with such a library, the library interfaces must include the appropriate *xxx*64() binary entry points and must have them mapped to the corresponding primary functions when _FILE_OFFSET_BITS is set to 64.

Care should be exercised using any of the printf() or scanf() routines on variables of the types mentioned above. In the large file compilation environment, these variables should be printed or scanned using long long formats.

使用上の留意点

Symbolic formats analogous to those found in <sys/int_fmtio.h> do not exist for printing or scanning variables of the types that are redefined in the large file compilation environment.

名前

lfcompile64 – transitional compilation environment

機能説明

All 64-bit applications can manipulate large files by default. The transitional interfaces described on this page can be used by 32-bit and 64-bit applications to manipulate large files.

In the transitional compilation environment, explicit 64-bit functions, structures, and types are added to the API. Compiling in this environment allows both 32-bit and 64-bit applications to access files whose size is greater than or equal to 2 Gbyte (2^{31} bytes).

The transitional compilation environment exports all the explicit 64-bit functions (*xxx*`64()`) and types in addition to all the regular functions (*xxx*`()`) and types. Both *xxx*`()` and *xxx*`64()` functions are available to the program source. A 32-bit application must use the *xxx*`64()` functions in order to access large files. See the `lf64(5)` manual page for a complete listing of the 64-bit transitional interfaces.

The transitional compilation environment differs from the large file compilation environment, wherein the underlying interfaces are bound to 64-bit functions, structures, and types. An application compiled in the large file compilation environment is able to use the *xxx*`()` source interfaces to access both large and small files, rather than having to explicitly utilize the transitional *xxx*`64()` interface calls to access large files. See the `lfcompile(5)` manual page for more information regarding the large file compilation environment.

Applications may combine objects produced in the large file compilation environment with objects produced in the transitional compilation environment, but must be careful with respect to interoperability between those objects. Applications should not declare global variables of types whose sizes change between compilation environments.

For applications that do not wish to conform to the POSIX or X/Open specifications, the 64-bit transitional interfaces are available by default. No compile-time flags need to be set.

Access to Additional Large File Interfaces

Applications that wish to access the transitional interfaces as well as the POSIX or X/Open specification-conforming interfaces should use the following compilation methods and set whichever feature test macros are appropriate to obtain the desired environment (see `standards(5)`).

- Set the compile-time flag `_LARGEFILE64_SOURCE` to 1 before including any headers.
- Use the `getconf(1)` command with one or more of the following arguments:

argument	purpose
`LFS64_CFLAGS`	obtain compilation flags necessary to enable the transitional compilation environment
`LFS64_LDFLAGS`	obtain link editor options
`LFS64_LIBS`	obtain link library names
`LFS64_LINTFLAGS`	obtain lint options

使用例

In the following examples, the transitional compilation environment is accessed by invoking the `getconf` utility with one of the arguments listed in the table above. The additional large file interfaces are accessed either by specifying `–D_LARGEFILE64_SOURCE` or by invoking the `getconf` utility with the arguments listed above.

The example that uses the form of command substitution specifying the command within parentheses preceded by a dollar sign can be executed only in a POSIX-conforming shell such as the Korn Shell (see ksh(1)). In a shell that is not POSIX-conforming, such as the Bourne Shell (see sh(1)) and the C Shell (see csh(1)), the command must be enclosed within grave accent marks.

例 1 An example of compiling a program using transitional interfaces such as lseek64() and fopen64():

```
$ c89 -D_LARGEFILE64_SOURCE        \
      $(getconf LFS64_CFLAGS) a.c  \
      $(getconf LFS64_LDFLAGS)     \
      $(getconf LFS64_LIBS)
```

例 2 An example of running lint on a program using transitional interfaces:

```
% lint -D_LARGEFILE64_SOURCE        \
     ` getconf LFS64_LINTFLAG`S ... \
     ` getconf LFS64_LIB`S
```

関連項目

getconf(1), lseek(2), fopen(3C), lf64(5), standards(5)

名前

locale – subset of a user's environment that depends on language and cultural conventions

機能説明

A `locale` is the definition of the subset of a user's environment that depends on language and cultural conventions. It is made up from one or more categories. Each category is identified by its name and controls specific aspects of the behavior of components of the system. Category names correspond to the following environment variable names:

`LC_CTYPE`	Character classification and case conversion.
`LC_COLLATE`	Collation order.
`LC_TIME`	Date and time formats.
`LC_NUMERIC`	Numeric formatting.
`LC_MONETARY`	Monetary formatting.
`LC_MESSAGES`	Formats of informative and diagnostic messages and interactive responses.

The standard utilities base their behavior on the current locale, as defined in the ENVIRONMENT VARIABLES section for each utility. The behavior of some of the C-language functions will also be modified based on the current locale, as defined by the last call to `setlocale(3C)`.

Locales other than those supplied by the implementation can be created by the application via the `localedef(1)` utility. The value that is used to specify a locale when using environment variables will be the string specified as the *name* operand to `localedef` when the locale was created. The strings “C” and “POSIX” are reserved as identifiers for the POSIX locale.

Applications can select the desired locale by invoking the `setlocale()` function with the appropriate value. If the function is invoked with an empty string, such as:

```
setlocale(LC_ALL, "");
```

the value of the corresponding environment variable is used. If the environment variable is unset or is set to the empty string, the `setlocale()` function sets the appropriate environment.

Locale Definition

Locales can be described with the file format accepted by the `localedef` utility.

The locale definition file must contain one or more locale category source definitions, and must not contain more than one definition for the same locale category.

A category source definition consists of a category header, a category body and a category trailer. A category header consists of the character string naming of the category, beginning with the characters `LC_`. The category trailer consists of the string `END`, followed by one or more blank characters and the string used in the corresponding category header.

The category body consists of one or more lines of text. Each line contains an identifier, optionally followed by one or more operands. Identifiers are either keywords, identifying a particular locale element, or collating elements. Each keyword within a locale must have a unique name (that is, two categories cannot have a commonly-named keyword). No keyword can start with the characters `LC_`. Identifiers must be separated from the operands by one or more blank characters.

Operands must be characters, collating elements, or strings of characters. Strings must be enclosed in double-quotes (**"**). Literal double-quotes within strings must be preceded by the <*escape character*>, as described below. When a keyword is followed by more than one operand, the operands must be separated by semicolons (**;**). Blank characters are allowed both before and after a semicolon.

The first category header in the file can be preceded by a line modifying the comment character. It has the following format, starting in column 1:

`"comment_char %c\n",`<*comment character*>

The comment character defaults to the number sign (**#**). Blank lines and lines containing the <*comment character*> in the first position are ignored.

The first category header in the file can be preceded by a line modifying the escape character to be used in the file. It has the following format, starting in column 1:

`"escape_char %c\n",`<*escape character*>

The escape character defaults to backslash.

A line can be continued by placing an escape character as the last character on the line; this continuation character will be discarded from the input. Although the implementation need not accept any one portion of a continued line with a length exceeding `{LINE_MAX}` bytes, it places no limits on the accumulated length of the continued line. Comment lines cannot be continued on a subsequent line using an escaped newline character.

Individual characters, characters in strings, and collating elements must be represented using symbolic names, as defined below. In addition, characters can be represented using the characters themselves or as octal, hexadecimal or decimal constants. When non-symbolic notation is used, the resultant locale definitions will in many cases not be portable between systems. The left angle bracket (**<**) is a reserved symbol, denoting the start of a symbolic name; when used to represent itself it must be preceded by the escape character. The following rules apply to character representation:

1. A character can be represented via a symbolic name, enclosed within angle brackets **<** and **>**. The symbolic name, including the angle brackets, must exactly match a symbolic name defined in the charmap file specified via the `localedef -f` option, and will be replaced by a character value determined from the value associated with the symbolic name in the charmap file. The use of a symbolic name not found in the charmap file constitutes an

error, unless the category is LC_CTYPE or LC_COLLATE, in which case it constitutes a warning condition (see localedef(1) for a description of action resulting from errors and warnings). The specification of a symbolic name in a collating-element or collating-symbol section that duplicates a symbolic name in the charmap file (if present) is an error. Use of the escape character or a right angle bracket within a symbolic name is invalid unless the character is preceded by the escape character.

Example:

```
<C>;<c-cedilla> "<M><a><y>"
```

2. A character can be represented by the character itself, in which case the value of the character is implementation-dependent. Within a string, the double-quote character, the escape character and the right angle bracket character must be escaped (preceded by the escape character) to be interpreted as the character itself. Outside strings, the characters

   , ; < > *escape_char*

   must be escaped to be interpreted as the character itself.

   Example:

   ```
   c "May"
   ```

3. A character can be represented as an octal constant. An octal constant is specified as the escape character followed by two or more octal digits. Each constant represents a byte value. Multi-byte values can be represented by concatenated constants specified in byte order with the last constant specifying the least significant byte of the character.

   Example:

   ```
   \143;\347;\143\150 "\115\141\171"
   ```

4. A character can be represented as a hexadecimal constant. A hexadecimal constant is specified as the escape character followed by an x followed by two or more hexadecimal digits. Each constant represents a byte value. Multi-byte values can be represented by concatenated constants specified in byte order with the last constant specifying the least significant byte of the character.

   Example:

   ```
   \x63;\xe7;\x63\x68 "\x4d\x61\x79"
   ```

5. A character can be represented as a decimal constant. A decimal constant is specified as the escape character followed by a d followed by two or more decimal digits. Each constant represents a byte value. Multi-byte values can be represented by concatenated constants specified in byte order with the last constant specifying the least significant byte of the character.

   Example:

   ```
   \d99;\d231;\d99\d104 "\d77\d97\d121"
   ```

Only characters existing in the character set for which the locale definition is created can be specified, whether using symbolic names, the characters themselves, or octal, decimal or hexadecimal constants. If a charmap file is present, only characters defined in the charmap can be specified using octal, decimal or hexadecimal constants. Symbolic names not present in the charmap file can be specified and will be ignored, as specified under item 1 above.

LC_CTYPE

The LC_CTYPE category defines character classification, case conversion and other character attributes. In addition, a series of characters can be represented by three adjacent periods representing an ellipsis symbol (...). The ellipsis specification is interpreted as meaning that all values between the values preceding and following it represent valid characters. The ellipsis specification is valid only within a single encoded character set, that is, within a group of characters of the same size. An ellipsis is interpreted as including in the list all characters with an encoded value higher than the encoded value of the character preceding the ellipsis and lower than the encoded value of the character following the ellipsis.

Example:

```
\x30;...;\x39;
```

includes in the character class all characters with encoded values between the endpoints.

The following keywords are recognized. In the descriptions, the term ‘‘automatically included' ' means that it is not an error either to include or omit any of the referenced characters.

The character classes digit, xdigit, lower, upper, and space have a set of automatically included characters. These only need to be specified if the character values (that is, encoding) differ from the implementation default values.

upper

Define characters to be classified as upper-case letters.

In the POSIX locale, the 26 upper-case letters are included:

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

In a locale definition file, no character specified for the keywords cntrl, digit, punct, or space can be specified. The upper-case letters A to Z are automatically included in this class.

lower

Define characters to be classified as lower-case letters. In the POSIX locale, the 26 lower-case letters are included:

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z

In a locale definition file, no character specified for the keywords cntrl, digit, punct, or space can be specified. The lower-case letters a to z of the portable character set are automatically included in this class.

alpha

Define characters to be classified as letters.

In the POSIX locale, all characters in the classes `upper` and `lower` are included.

In a locale definition file, no character specified for the keywords `cntrl`, `digit`, `punct`, or `space` can be specified. Characters classified as either `upper` or `lower` are automatically included in this class.

`digit` Define the characters to be classified as numeric digits.

In the POSIX locale, only

```
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
```

are included.

In a locale definition file, only the digits `0`, `1`, `2`, `3`, `4`, `5`, `6`, `7`, `8`, and `9` can be specified, and in contiguous ascending sequence by numerical value. The digits `0` to `9` of the portable character set are automatically included in this class.

The definition of character class `digit` requires that only ten characters; the ones defining digits can be specified; alternative digits (for example, Hindi or Kanji) cannot be specified here.

`alnum` Define characters to be classified as letters and numeric digits. Only the characters specified for the `alpha` and `digit` keywords are specified. Characters specified for the keywords `alpha` and `digit` are automatically included in this class.

`space` Define characters to be classified as white-space characters.

In the POSIX locale, at a minimum, the characters `SPACE`, `FORMFEED`, `NEWLINE`, `CARRIAGE RETURN`, `TAB`, and `VERTICAL TAB` are included.

In a locale definition file, no character specified for the keywords `upper`, `lower`, `alpha`, `digit`, `graph`, or `xdigit` can be specified. The characters `SPACE`, `FORMFEED`, `NEWLINE`, `CARRIAGE RETURN`, `TAB`, and `VERTICAL TAB` of the portable character set, and any characters included in the class `blank` are automatically included in this class.

`cntrl` Define characters to be classified as control characters.

In the POSIX locale, no characters in classes `alpha` or `print` are included.

In a locale definition file, no character specified for the keywords `upper`, `lower`, `alpha`, `digit`, `punct`, `graph`, `print`, or `xdigit` can be specified.

`punct` Define characters to be classified as punctuation characters.

In the POSIX locale, neither the space character nor any characters in classes `alpha`, `digit`, or `cntrl` are included.

In a locale definition file, no character specified for the keywords `upper`, `lower`, `alpha`, `digit`, `cntrl`, `xdigit` or as the space character can be specified.

`graph` Define characters to be classified as printable characters, not including the space character.

In the POSIX locale, all characters in classes `alpha`, `digit`, and `punct` are included; no characters in class `cntrl` are included.

In a locale definition file, characters specified for the keywords `upper`, `lower`, `alpha`, `digit`, `xdigit`, and `punct` are automatically included in this class. No character specified for the keyword `cntrl` can be specified.

`print` Define characters to be classified as printable characters, including the space character.

In the POSIX locale, all characters in class `graph` are included; no characters in class `cntrl` are included.

In a locale definition file, characters specified for the keywords `upper`, `lower`, `alpha`, `digit`, `xdigit`, `punct`, and the space character are automatically included in this class. No character specified for the keyword `cntrl` can be specified.

`xdigit` Define the characters to be classified as hexadecimal digits.

In the POSIX locale, only:

`0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 A B C D E F a b c d e f`

are included.

In a locale definition file, only the characters defined for the class `digit` can be specified, in contiguous ascending sequence by numerical value, followed by one or more sets of six characters representing the hexadecimal digits 10 to 15 inclusive, with each set in ascending order (for example `A`, `B`, `C`, `D`, `E`, `F`, `a`, `b`, `c`, `d`, `e`, `f`). The digits `0` to `9`, the upper-case letters `A` to `F` and the lower-case letters `a` to `f` of the portable character set are automatically included in this class.

The definition of character class `xdigit` requires that the characters included in character class `digit` be included here also.

`blank` Define characters to be classified as blank characters.

In the POSIX locale, only the space and tab characters are included.

In a locale definition file, the characters space and tab are automatically included in this class.

`charclass` Define one or more locale-specific character class names as strings separated by semicolons. Each named character class can then be defined subsequently in the `LC_CTYPE` definition. A character class name consists of at least one and at most `{CHARCLASS_NAME_MAX}` bytes of alphanumeric characters from the portable filename character set. The first character of a character class name cannot be a digit. The name cannot match any of the `LC_CTYPE` keywords defined in this document.

`charclass-name` Define characters to be classified as belonging to the named locale-specific character class. In the POSIX locale, the locale-specific named character classes need not exist. If a class name is defined by a `charclass` keyword, but no characters are subsequently assigned to it, this is not an error; it represents a class without any characters belonging to it. The `charclass-name` can be used as the *property* argument to the `wctype(3C)` function, in regular expression and shell pattern-matching bracket expressions, and by the `tr(1)` command.

`toupper` Define the mapping of lower-case letters to upper-case letters.

In the POSIX locale, at a minimum, the 26 lower-case characters:

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
```

are mapped to the corresponding 26 upper-case characters:

```
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
```

In a locale definition file, the operand consists of character pairs, separated by semicolons. The characters in each character pair are separated by a comma and the pair enclosed by parentheses. The first character in each pair is the lower-case letter, the second the corresponding upper-case letter. Only characters specified for the keywords `lower` and `upper` can be specified. The lower-case letters `a` to `z`, and their corresponding upper-case letters `A` to `Z`, of the portable character set are automatically included in this mapping, but only when the `toupper` keyword is omitted from the locale definition.

`tolower` Define the mapping of upper-case letters to lower-case letters.

In the POSIX locale, at a minimum, the 26 upper-case characters:

```
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
```

are mapped to the corresponding 26 lower-case characters:

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
```

In a locale definition file, the operand consists of character pairs, separated by semicolons. The characters in each character pair are separated by a comma and the pair enclosed by parentheses. The first character in each pair is the upper-case letter, the second the corresponding lower-case letter. Only characters specified for the keywords `lower` and `upper` can be specified. If the `tolower` keyword is omitted from the locale definition, the mapping will be the reverse mapping of the one specified for `toupper`.

LC_COLLATE

The `LC_COLLATE` category provides a collation sequence definition for numerous utilities (such as `sort(1)`, `uniq(1)`, and so forth), regular expression matching (see `regex(5)`), and the `strcoll(3C)`, `strxfrm(3C)`, `wcscoll(3C)`, and `wcsxfrm(3C)` functions.

A collation sequence definition defines the relative order between collating elements (characters and multi-character collating elements) in the locale. This order is expressed in terms of collation values, that is, by assigning each element one or more collation values (also known as collation weights). The following capabilities are provided:

1. `Multi-character collating elements`. Specification of multi-character collating elements (that is, sequences of two or more characters to be collated as an entity).
2. `User-defined ordering of collating elements`. Each collating element is assigned a collation value defining its order in the character (or basic) collation sequence. This ordering is used by regular expressions and pattern matching and, unless collation weights are explicity specified, also as the collation weight to be used in sorting.
3. `Multiple weights and equivalence classes`. Collating elements can be assigned one or more (up to the limit `{COLL_WEIGHTS_MAX}`) collating weights for use in sorting. The first weight is hereafter referred to as the primary weight.
4. `One-to-Many mapping`. A single character is mapped into a string of collating elements.
5. `Equivalence class definition`. Two or more collating elements have the same collation value (primary weight).
6. `Ordering by weights`. When two strings are compared to determine their relative order, the two strings are first broken up into a series of collating elements. The elements in each successive pair of elements are then compared according to the relative primary weights for the elements. If equal, and more than one weight has been assigned, the pairs of collating elements are recompared according to the relative subsequent weights, until either a pair of collating elements compare unequal or the weights are exhausted.

The following keywords are recognized in a collation sequence definition. They are described in detail in the following sections.

`copy`	Specify the name of an existing locale which is used as the definition of this category. If this keyword is specified, no other keyword is specified.
`collating-element`	Define a collating-element symbol representing a multi-character collating element. This keyword is optional.
`collating-symbol`	Define a collating symbol for use in collation order statements. This keyword is optional.
`order_start`	Define collation rules. This statement is followed by one or more collation order statements, assigning character collation values and collation weights to collating elements.
`order_end`	Specify the end of the collation-order statements.

collating-element keyword

In addition to the collating elements in the character set, the `collating-element` keyword is used to define multi-character collating elements. The syntax is:

`"collating-element %s from \"%s\"\n",<`*collating-symbol*`>,<`*string*`>`

The <*collating-symbol*> operand is a symbolic name, enclosed between angle brackets (< and >), and must not duplicate any symbolic name in the current charmap file (if any), or any other symbolic name defined in this collation definition. The string operand is a string of two or more characters that collates as an entity. A <*collating-element*> defined via this keyword is only recognized with the `LC_COLLATE` category.

Example:

`collating-element` <ch> from "<c><h>"
`collating-element` <e-acute> from "<acute><e>"
`collating-element` <ll> from "ll"

collating-symbol keyword

This keyword will be used to define symbols for use in collation sequence statements; that is, between the `order_start` and the `order_end` keywords. The syntax is:

`"collating-symbol %s\n",<`*collating-symbol*`>`

The <*collating-symbol*> is a symbolic name, enclosed between angle brackets (< and >), and must not duplicate any symbolic name in the current charmap file (if any), or any other symbolic name defined in this collation definition.

A `collating-symbol` defined via this keyword is only recognized with the `LC_COLLATE` category.

Example:

```
collating-symbol <UPPER_CASE>
collating-symbol <HIGH>
```

The `collating-symbol` keyword defines a symbolic name that can be associated with a relative position in the character order sequence. While such a symbolic name does not represent any collating element, it can be used as a weight.

order_start keyword

The `order_start` keyword must precede collation order entries and also defines the number of weights for this collation sequence definition and other collation rules.

The syntax of the `order_start` keyword is:

`"order_start %s;%s;...;%s\n",<`*sort-rules*`>,<`*sort-rules*`>`

The operands to the `order_start` keyword are optional. If present, the operands define rules to be applied when strings are compared. The number of operands define how many weights each element is assigned. If no operands are present, one `forward` operand is assumed. If present, the first operand defines rules to be applied when comparing strings using the first (primary) weight; the second when comparing strings using the second weight, and so on. Operands are separated by semicolons (`;`). Each operand consists of one or more collation directives, separated by commas (`,`). If the number of operands exceeds the `{COLL_WEIGHTS_MAX}` limit, the utility will issue a warning message. The following directives will be supported:

`forward` Specifies that comparison operations for the weight level proceed from start of string towards the end of string.

`backward` Specifies that comparison operations for the weight level proceed from end of string towards the beginning of string.

`position` Specifies that comparison operations for the weight level will consider the relative position of elements in the strings not subject to `IGNORE`. The string containing an element not subject to `IGNORE` after the fewest collating elements subject to `IGNORE` from the start of the compare will collate first. If both strings contain a character not subject to `IGNORE` in the same relative position, the collating values assigned to the elements will determine the ordering. In case of equality, subsequent characters not subject to `IGNORE` are considered in the same manner.

The directives `forward` and `backward` are mutually exclusive.

Example:

```
order_start    forward;backward
```

If no operands are specified, a single `forward` operand is assumed.

Collation Order

The `order_start` keyword is followed by collating identifier entries. The syntax for the collating element entries is:

"`%s %s;%s;...;%s\n`"<*collating-identifier*>,<*weight*>,<*weight*>,...

Each *collating-identifier* consists of either a character described in `Locale Definition` above, a <*collating-element*>, a <*collating-symbol*>, an ellipsis, or the special symbol `UNDEFINED`. The order in which collating elements are specified determines the character order sequence, such that each collating element compares less than the elements following it. The NUL character compares lower than any other character.

A <*collating-element*> is used to specify multi-character collating elements, and indicates that the character sequence specified via the <*collating-element*> is to be collated as a unit and in the relative order specified by its place.

A <*collating-symbol*> is used to define a position in the relative order for use in weights. No weights are specified with a <*collating-symbol*>.

The ellipsis symbol specifies that a sequence of characters will collate according to their encoded character values. It is interpreted as indicating that all characters with a coded character set value higher than the value of the character in the preceding line, and lower than the coded character set value for the character in the following line, in the current coded character set, will be placed in the character collation order between the previous and the following character in ascending order according to their coded character set values. An initial ellipsis is interpreted as if the preceding line specified the NUL character, and a trailing ellipsis as if the following line specified the highest coded character set value in the current coded character set. An ellipsis is treated as invalid if the preceding or following lines do not specify characters in the current coded character set. The use of the ellipsis symbol ties the definition to a specific coded character set and may preclude the definition from being portable beween implementations.

The symbol `UNDEFINED` is interpreted as including all coded character set values not specified explicitly or via the ellipsis symbol. Such characters are inserted in the character collation order at the point indicated by the symbol, and in ascending order according to their coded character set values. If no `UNDEFINED` symbol is specified, and the current coded character set contains characters not specified in this section, the utility will issue a warning message and place such characters at the end of the character collation order.

The optional operands for each collation-element are used to define the primary, secondary, or subsequent weights for the collating element. The first operand specifies the relative primary weight, the second the relative secondary weight, and so on. Two or more collation-elements can be assigned the same weight; they belong to the same *equivalence class* if they have the same primary weight. Collation behaves as if, for each weight level, elements subject to `IGNORE` are removed, unless the `position` collation directive is specified for the corresponding level with the `order_start` keyword. Then each successive pair of elements is

compared according to the relative weights for the elements. If the two strings compare equal, the process is repeated for the next weight level, up to the limit {COLL_WEIGHTS_MAX}.

Weights are expressed as characters described in Locale Definition above, <*collating-symbol*>s, <*collating-element*>s, an ellipsis, or the special symbol IGNORE. A single character, a <*collating–symbol*> or a <*collating–element*> represent the relative position in the character collating sequence of the character or symbol, rather than the character or characters themselves. Thus, rather than assigning absolute values to weights, a particular weight is expressed using the relative order value assigned to a collating element based on its order in the character collation sequence.

One-to-many mapping is indicated by specifying two or more concatenated characters or symbolic names. For example, if the character <eszet> is given the string "<s><s>" as a weight, comparisons are performed as if all occurrences of the character <eszet> are replaced by <s><s> (assuming that <s> has the collating weight <s>). If it is necessary to define <eszet> and <s><s> as an equivalence class, then a collating element must be defined for the string ss.

All characters specified via an ellipsis will by default be assigned unique weights, equal to the relative order of characters. Characters specified via an explicit or implicit UNDEFINED special symbol will by default be assigned the same primary weight (that is, belong to the same equivalence class). An ellipsis symbol as a weight is interpreted to mean that each character in the sequence has unique weights, equal to the relative order of their character in the character collation sequence. The use of the ellipsis as a weight is treated as an error if the collating element is neither an ellipsis nor the special symbol UNDEFINED.

The special keyword IGNORE as a weight indicates that when strings are compared using the weights at the level where IGNORE is specified, the collating element is ignored; that is, as if the string did not contain the collating element. In regular expressions and pattern matching, all characters that are subject to IGNORE in their primary weight form an equivalence class.

An empty operand is interpreted as the collating element itself.

For example, the order statement:

```
<a>     <a>;<a>
```

is equal to:

```
<a>
```

An ellipsis can be used as an operand if the collating element was an ellipsis, and is interpreted as the value of each character defined by the ellipsis.

The collation order as defined in this section defines the interpretation of bracket expressions in regular expressions.

Example:

```
order_start                             forward;backward
UNDEFINED                               IGNORE;IGNORE
<LOW>
<space>                                 <LOW>;<space>
. . .                                   <LOW>;. . .
<a>                                     <a>;<a>
<a-acute>                               <a>;<a-acute>
<a-grave>                               <a>;<a-grave>
<A>                                     <a>;<A>
<A-acute>                               <a>;<A-acute>
<A-grave>                               <a>;<A-grave>
<ch>                                    <ch>;<ch>
<Ch>                                    <ch>;<Ch>
<s>                                     <s>;<s>
<eszet>                                 "<s><s>";"<eszet><eszet>"
order_end
```

This example is interpreted as follows:

1. The `UNDEFINED` means that all characters not specified in this definition (explicitly or via the ellipsis) are ignored for collation purposes; for regular expression purposes they are ordered first.
2. All characters between <space> and <a> have the same primary equivalence class and individual secondary weights based on their ordinal encoded values.
3. All characters based on the upper– or lower–case character a belong to the same primary equivalence class.
4. The multi-character collating element <ch> is represented by the collating symbol <ch> and belongs to the same primary equivalence class as the multi-character collating element <Ch>.

order_end keyword

The collating order entries must be terminated with an `order_end` keyword.

LC_MONETARY

The LC_MONETARY category defines the rules and symbols that are used to format monetary numeric information. This information is available through the localeconv(3C) function

The following items are defined in this category of the locale. The item names are the keywords recognized by the localedef(1) utility when defining a locale. They are also similar to the member names of the lconv structure defined in <locale.h>. The localeconv function returns {CHAR_MAX} for unspecified integer items and the empty string ("") for unspecified or size zero string items.

In a locale definition file the operands are strings. For some keywords, the strings can contain only integers. Keywords that are not provided, string values set to the empty string (""), or integer keywords set to –1, are used to indicate that the value is not available in the locale.

int_curr_symbol
: The international currency symbol. The operand is a four-character string, with the first three characters containing the alphabetic international currency symbol in accordance with those specified in the ISO 4217 standard. The fourth character is the character used to separate the international currency symbol from the monetary quantity.

currency_symbol
: The string used as the local currency symbol.

mon_decimal_point
: The operand is a string containing the symbol that is used as the decimal delimiter (radix character) in monetary formatted quantities.

mon_thousands_sep
: The operand is a string containing the symbol that is used as a separator for groups of digits to the left of the decimal delimiter in formatted monetary quantities.

mon_grouping
: Define the size of each group of digits in formatted monetary quantities. The operand is a sequence of integers separated by semicolons. Each integer specifies the number of digits in each group, with the initial integer defining the size of the group immediately preceding the decimal delimiter, and the following integers defining the preceding groups. If the last integer is not –1, then the size of the previous group (if any) will be repeatedly used for the remainder of the digits. If the last integer is –1, then no further grouping will be performed.

  The following is an example of the interpretation of the mon_grouping keyword. Assuming that the value to be formatted is 123456789 and the mon_thousands_sep is ', then the following table shows the result. The third column shows the equivalent string in the ISO C standard that would be used by the localeconv function to accommodate this grouping.

```
mon_grouping   Formatted Value  ISO C String

3;-1           123456’789       "\3\177"
3              123’456’789      "\3"
3;2;-1         1234’56’789      "\3\2\177"
3;2            12’34’56’789     "\3\2"
-1             1234567898       "\177"
```

In these examples, the octal value of {CHAR_MAX} is 177.

`positive_sign` A string used to indicate a non-negative-valued formatted monetary quantity.

`negative_sign` A string used to indicate a negative-valued formatted monetary quantity.

`int_frac_digits` An integer representing the number of fractional digits (those to the right of the decimal delimiter) to be written in a formatted monetary quantity using `int_curr_symbol`.

`frac_digits` An integer representing the number of fractional digits (those to the right of the decimal delimiter) to be written in a formatted monetary quantity using `currency_symbol`.

`p_cs_precedes` In an application conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `1` if the `currency_symbol` precedes the value for a monetary quantity with a non-negative value, and set to `0` if the symbol succeeds the value.

In an application *not* conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `1` if the `currency_symbol` or `int_currency_symbol` precedes the value for a monetary quantity with a non-negative value, and set to `0` if the symbol succeeds the value.

`p_sep_by_space` In an application conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `0` if no space separates the `currency_symbol` from the value for a monetary quantity with a non-negative value, set to `1` if a space separates the symbol from the value, and set to `2` if a space separates the symbol and the sign string, if adjacent.

In an application *not* conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `0` if no space separates the `currency_symbol` or `int_curr_symbol` from the value for a monetary quantity with a non-negative value, set to `1` if a space separates the symbol from the value, and set to `2` if a space separates the symbol and the sign string, if adjacent.

`n_cs_precedes`

In an application conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `1` if the `currency_symbol` precedes the value for a monetary quantity with a negative value, and set to `0` if the symbol succeeds the value.

In an application *not* conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `1` if the `currency_symbol` or `int_currency_symbol` precedes the value for a monetary quantity with a negative value, and set to `0` if the symbol succeeds the value.

`n_sep_by_space`

In an application conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `0` if no space separates the `currency_symbol` from the value for a monetary quantity with a negative value, set to `1` if a space separates the symbol from the value, and set to `2` if a space separates the symbol and the sign string, if adjacent.

In an application *not* conforming to the SUSv3 standard, an integer set to `0` if no space separates the `currency_symbol` or `int_curr_symbol` from the value for a monetary quantity with a negative value, set to `1` if a space separates the symbol from the value, and set to `2` if a space separates the symbol and the sign string, if adjacent.

`p_sign_posn`

An integer set to a value indicating the positioning of the `positive_sign` for a monetary quantity with a non-negative value. The following integer values are recognized for both `p_sign_posn` and `n_sign_posn`:

In an application conforming to the SUSv3 standard:

`0` Parentheses enclose the quantity and the `currency_symbol`.

`1` The sign string precedes the quantity and the `currency_symbol`.

`2` The sign string succeeds the quantity and the `currency_symbol`.

`3` The sign string precedes the `currency_symbol`.

`4` The sign string succeeds the `currency_symbol`.

In an application *not* conforming to the SUSv3 standard:

`0` Parentheses enclose the quantity and the `currency_symbol` or `int_curr_symbol`.

`1` The sign string precedes the quantity and the `currency_symbol` or `int_curr_symbol`.

2 The sign string succeeds the quantity and the `currency_symbol` or `int_curr_symbol`.

3 The sign string precedes the `currency_symbol` or `int_curr_symbol`.

4 The sign string succeeds the `currency_symbol` or `int_curr_symbol`.

`n_sign_posn` An integer set to a value indicating the positioning of the `negative_sign` for a negative formatted monetary quantity.

`int_p_cs_precedes` An integer set to `1` if the `int_curr_symbol` precedes the value for a monetary quantity with a non-negative value, and set to `0` if the symbol succeeds the value.

`int_n_cs_precedes` An integer set to `1` if the `int_curr_symbol` precedes the value for a monetary quantity with a negative value, and set to `0` if the symbol succeeds the value.

`int_p_sep_by_space` An integer set to `0` if no space separates the `int_curr_symbol` from the value for a monetary quantity with a non-negative value, set to `1` if a space separates the symbol from the value, and set to `2` if a space separates the symbol and the sign string, if adjacent.

`int_n_sep_by_space` An integer set to `0` if no space separates the `int_curr_symbol` from the value for a monetary quantity with a negative value, set to `1` if a space separates the symbol from the value, and set to `2` if a space separates the symbol and the sign string, if adjacent.

`int_p_sign_posn` An integer set to a value indicating the positioning of the `positive_sign` for a positive monetary quantity formatted with the international format. The following integer values are recognized for `int_p_sign_posn` and `int_n_sign_posn`:

0 Parentheses enclose the quantity and the `int_curr_symbol`.

1 The sign string precedes the quantity and the `int_curr_symbol`.

2 The sign string precedes the quantity and the `int_curr_symbol`.

3 The sign string precedes the `int_curr_symbol`.

4 The sign string succeeds the `int_curr_symbol`.

`int_n_sign_posn` An integer set to a value indicating the positioning of the `negative_sign` for a negative monetary quantity formatted with the international format.

The following table shows the result of various combinations:

		p_sep_by_space		
		2	1	0
p_cs_precedes= 1	p_sign_posn= 0	($1.25)	($1.25)	($1.25)
	p_sign_posn= 1	+$1.25	+$1.25	+$1.25
	p_sign_posn= 2	$1.25+	$1.25+	$1.25+
	p_sign_posn= 3	+$1.25	+$1.25	+$1.25
	p_sign_posn= 4	$+1.25	$+1.25	$+1.25
p_cs_precedes= 0	p_sign_posn= 0	(1.25 $)	(1.25 $)	(1.25$)
	p_sign_posn= 1	+1.25 $	+1.25 $	+1.25$
	p_sign_posn= 2	1.25$ +	1.25 $+	1.25$+
	p_sign_posn= 3	1.25+ $	1.25 +$	1.25+$
	p_sign_posn= 4	1.25$ +	1.25 $+	1.25$+

The monetary formatting definitions for the POSIX locale follow. The code listing depicts the `localedef(1)` input, the table representing the same information with the addition of `localeconv(3C)` and `nl_langinfo(3C)` formats. All values are unspecified in the POSIX locale.

```
LC_MONETARY
# This is the POSIX locale definition for
# the LC_MONETARY category.
#
int_curr_symbol       ""
currency_symbol       ""
mon_decimal_point     ""
mon_thousands_sep     ""
mon_grouping          -1
positive_sign         ""
negative_sign         ""
int_frac_digits       -1
frac_digits           -1
p_cs_precedes         -1
p_sep_by_space        -1
n_cs_precedes         -1
n_sep_by_space        -1
p_sign_posn           -1
n_sign_posn           -1
int_p_cs_precedes     -1
```

```
int_p_sep_by_space    -1
int_n_cs_precedes     -1
int_n_sep_by_space    -1
int_p_sign_posn       -1
int_n_sign_posn       -1
#
END LC_MONETARY
```

The entry `n/a` indicates that the value is not available in the POSIX locale.

LC_NUMERIC

The `LC_NUMERIC` category defines the rules and symbols that will be used to format non-monetary numeric information. This information is available through the `localeconv(3C)` function.

The following items are defined in this category of the locale. The item names are the keywords recognized by the `localedef` utility when defining a locale. They are also similar to the member names of the *lconv* structure defined in <`locale.h`>. The `localeconv()` function returns `{CHAR_MAX}` for unspecified integer items and the empty string (“”) for unspecified or size zero string items.

In a locale definition file the operands are strings. For some keywords, the strings only can contain integers. Keywords that are not provided, string values set to the empty string (“”), or integer keywords set to –1, will be used to indicate that the value is not available in the locale. The following keywords are recognized:

`decimal_point` The operand is a string containing the symbol that is used as the decimal delimiter (radix character) in numeric, non-monetary formatted quantities. This keyword cannot be omitted and cannot be set to the empty string. In contexts where standards limit the `decimal_point` to a single byte, the result of specifying a multi-byte operand is unspecified.

`thousands_sep` The operand is a string containing the symbol that is used as a separator for groups of digits to the left of the decimal delimiter in numeric, non-monetary formatted monetary quantities. In contexts where standards limit the `thousands_sep` to a single byte, the result of specifying a multi-byte operand is unspecified.

`grouping` Define the size of each group of digits in formatted non-monetary quantities. The operand is a sequence of integers separated by semicolons. Each integer specifies the number of digits in each group, with the initial integer defining the size of the group immediately preceding the decimal delimiter, and the following integers defining the preceding groups. If the last integer is not –1, then the size of the previous group (if any) will be repeatedly used for the remainder of the digits. If the last integer is –1, then no further grouping will be performed. The non-monetary numeric formatting definitions for the POSIX locale follow. The code listing depicts the `localedef` input, the table representing the same information with the addition of `localeconv` values, and `nl_langinfo` constants.

```
LC_NUMERIC
# This is the POSIX locale definition for
# the LC_NUMERIC category.
#
decimal_point    "<period>"
thousands_sep    ""
grouping    -1
#
END LC_NUMERIC
```

Item	POSIX locale Value	langinfo Constant	localeconv() Value	localedef Value
decimal_point	"."	RADIXCHAR	"."	.
thousands_sep	n/a	THOUSEP	""	""
grouping	n/a	-	""	–1

The entry n/a indicates that the value is not available in the POSIX locale.

LC_TIME

The LC_TIME category defines the interpretation of the field descriptors supported by date(1) and affects the behavior of the strftime(3C), wcsftime(3C), strptime(3C), and nl_langinfo(3C) functions. Because the interfaces for C-language access and locale definition differ significantly, they are described separately. For locale definition, the following mandatory keywords are recognized:

abday
: Define the abbreviated weekday names, corresponding to the %a field descriptor (conversion specification in the strftime(), wcsftime(), and strptime() functions). The operand consists of seven semicolon-separated strings, each surrounded by double-quotes. The first string is the abbreviated name of the day corresponding to Sunday, the second the abbreviated name of the day corresponding to Monday, and so on.

day
: Define the full weekday names, corresponding to the %A field descriptor. The operand consists of seven semicolon-separated strings, each surrounded by double-quotes. The first string is the full name of the day corresponding to Sunday, the second the full name of the day corresponding to Monday, and so on.

abmon
: Define the abbreviated month names, corresponding to the %b field descriptor. The operand consists of twelve semicolon-separated strings, each surrounded by double-quotes. The first string is the abbreviated name of the first month of the year (January), the second the abbreviated name of the second month, and so on.

`mon` Define the full month names, corresponding to the `%B` field descriptor. The operand consists of twelve semicolon-separated strings, each surrounded by double-quotes. The first string is the full name of the first month of the year (January), the second the full name of the second month, and so on.

`d_t_fmt` Define the appropriate date and time representation, corresponding to the `%c` field descriptor. The operand consists of a string, and can contain any combination of characters and field descriptors. In addition, the string can contain the escape sequences \\, `\a`, `\b`, `\f`, `\n`, `\r`, `\t`, `\v`.

`date_fmt` Define the appropriate date and time representation, corresponding to the `%C` field descriptor. The operand consists of a string, and can contain any combination of characters and field descriptors. In addition, the string can contain the escape sequences `\\`, `\a`, `\b`, `\f`, `\n`, `\r`, `\t`, `\v`.

`d_fmt` Define the appropriate date representation, corresponding to the `%x` field descriptor. The operand consists of a string, and can contain any combination of characters and field descriptors. In addition, the string can contain the escape sequences `\\`, `\a`, `\b`, `\f`, `\n`, `\r`, `\t`, `\v`.

`t_fmt` Define the appropriate time representation, corresponding to the `%X` field descriptor. The operand consists of a string, and can contain any combination of characters and field descriptors. In addition, the string can contain the escape sequences `\\`, `\a`, `\b`, `\f`, `\n`, `\r`, `\t`, `\v`.

`am_pm` Define the appropriate representation of the *ante meridiem* and *post meridiem* strings, corresponding to the `%p` field descriptor. The operand consists of two strings, separated by a semicolon, each surrounded by double-quotes. The first string represents the *ante meridiem* designation, the last string the *post meridiem* designation.

`t_fmt_ampm` Define the appropriate time representation in the 12-hour clock format with `am_pm`, corresponding to the `%r` field descriptor. The operand consists of a string and can contain any combination of characters and field descriptors. If the string is empty, the 12-hour format is not supported in the locale.

`era` Define how years are counted and displayed for each era in a locale. The operand consists of semicolon-separated strings. Each string is an era description segment with the format:

direction:*offset*:*start_date*:*end_date*:*era_name*:*era_format*

according to the definitions below. There can be as many era description segments as are necessary to describe the different eras.

The start of an era might not be the earliest point For example, the Christian era B.C. starts on the day before January 1, A.D. 1, and increases with earlier time.

direction Either a + or a – character. The + character indicates that years closer to the *start_date* have lower numbers than those closer to the *end_date*. The – character indicates that years closer to the *start_date* have higher numbers than those closer to the *end_date*.

offset The number of the year closest to the *start_date* in the era, corresponding to the `%Eg` and `%Ey` field descriptors.

start_date A date in the form *yyyy*/*mm*/`dd`, where *yyyy*, *mm*, and `dd` are the year, month and day numbers respectively of the start of the era. Years prior to A.D. 1 are represented as negative numbers.

end_date The ending date of the era, in the same format as the *start_date*, or one of the two special values –* or +*. The value –* indicates that the ending date is the beginning of time. The value +* indicates that the ending date is the end of time.

era_name A string representing the name of the era, corresponding to the `%EC` field descriptor.

era_format A string for formatting the year in the era, corresponding to the `%EG` and `%EY` field descriptors.

`era_d_fmt` Define the format of the date in alternative era notation, corresponding to the `%Ex` field descriptor.

`era_t_fmt` Define the locale's appropriate alternative time format, corresponding to the `%EX` field descriptor.

`era_d_t_fmt` Define the locale's appropriate alternative date and time format, corresponding to the `%Ec` field descriptor.

`alt_digits` Define alternative symbols for digits, corresponding to the `%O` field descriptor modifier. The operand consists of semicolon-separated strings, each surrounded by double-quotes. The first string is the alternative symbol corresponding with zero, the second string the symbol corresponding with one, and so on. Up to 100 alternative symbol strings can be specified. The `%O` modifier indicates that the string corresponding to the value specified via the field descriptor will be used instead of the value.

LC_TIME C-language Access

The following information can be accessed. These correspond to constants defined in `<langinfo.h>` and used as arguments to the `nl_langinfo(3C)` function.

`ABDAY_`*x* The abbreviated weekday names (for example Sun), where *x* is a number from 1 to 7.

`DAY_`*x* The full weekday names (for example Sunday), where *x* is a number from 1 to 7.

`ABMON_`*x* The abbreviated month names (for example Jan), where *x* is a number from 1 to 12.

`MON_`*x* The full month names (for example January), where *x* is a number from 1 to 12.

`D_T_FMT` The appropriate date and time representation.

`D_FMT` The appropriate date representation.

`T_FMT` The appropriate time representation.

`AM_STR` The appropriate ante-meridiem affix.

`PM_STR` The appropriate post-meridiem affix.

`T_FMT_AMPM` The appropriate time representation in the 12-hour clock format with `AM_STR` and `PM_STR`.

`ERA` The era description segments, which describe how years are counted and displayed for each era in a locale. Each era description segment has the format:

direction:*offset*:*start_date*:*end_date*:*era_name*:*era_format*

according to the definitions below. There will be as many era description segments as are necessary to describe the different eras. Era description segments are separated by semicolons.

The start of an era might not be the earliest point For example, the Christian era B.C. starts on the day before January 1, A.D. 1, and increases with earlier time.

direction Either a + or a – character. The + character indicates that years closer to the *start_date* have lower numbers than those closer to the *end_date*. The – character indicates that years closer to the *start_date* have higher numbers than those closer to the *end_date*.

offset The number of the year closest to the start_date in the era.

start_date A date in the form *yyyy*/*mm*/*dd*, where *yyyy*, *mm*, and `dd` are the year, month and day numbers respectively of the start of the era. Years prior to AD 1 are represented as negative numbers.

end_date The ending date of the era, in the same format as the *start_date*, or one of the two special values, –* or +*. The

value –* indicates that the ending date is the beginning of time. The value +* indicates that the ending date is the end of time.

era_name The era, corresponding to the `%EC` conversion specification.

era_format The format of the year in the era, corresponding to the `%EY` and `%EY` conversion specifications.

`ERA_D_FMT` The era date format.

`ERA_T_FMT` The locale's appropriate alternative time format, corresponding to the `%EX` field descriptor.

`ERA_D_T_FMT` The locale's appropriate alternative date and time format, corresponding to the `%Ec` field descriptor.

`ALT_DIGITS` The alternative symbols for digits, corresponding to the `%O` conversion specification modifier. The value consists of semicolon-separated symbols. The first is the alternative symbol corresponding to zero, the second is the symbol corresponding to one, and so on. Up to 100 alternative symbols may be specified. The following table displays the correspondence between the items described above and the conversion specifiers used by `date(1)` and the `strftime(3C)`, `wcsftime(3C)`, and `strptime(3C)` functions.

localedef Keyword	**langinfo Constant**	**Conversion Specifier**
abday	ABDAY_*x*	%a
day	DAY_*x*	%A
abmon	ABMON_*x*	%b
mon	MON	%B
d_t_fmt	D_T_FMT	%c
date_fmt	DATE_FMT	%C
d_fmt	D_FMT	%x
t_fmt	T_FMT	%X
am_pm	AM_STR	%p
am_pm	PM_STR	%p
t_fmt_ampm	T_FMT_AMPM	%r
era	ERA	%EC, %Eg,

localedef Keyword	langinfo Constant	Conversion Specifier
		%EG, %Ey, %EY
era_d_fmt	ERA_D_FMT	%Ex
era_t_fmt	ERA_T_FMT	%EX
era_d_t_fmt	ERA_D_T_FMT	%Ec
alt_digits	ALT_DIGITS	%O

LC_TIME General Information

Although certain of the field descriptors in the POSIX locale (such as the name of the month) are shown with initial capital letters, this need not be the case in other locales. Programs using these fields may need to adjust the capitalization if the output is going to be used at the beginning of a sentence.

The LC_TIME descriptions of abday, day, mon, and abmon imply a Gregorian style calendar (7-day weeks, 12-month years, leap years, and so forth). Formatting time strings for other types of calendars is outside the scope of this document set.

As specified under date in Locale Definition and strftime(3C), the field descriptors corresponding to the optional keywords consist of a modifier followed by a traditional field descriptor (for instance %Ex). If the optional keywords are not supported by the implementation or are unspecified for the current locale, these field descriptors are treated as the traditional field descriptor. For instance, assume the following keywords:

```
alt_digits    "0th" ; "1st" ; "2nd" ; "3rd" ; "4th" ; "5th" ; \
"6th" ; "7th" ; "8th" ; "9th" ; "10th">
d_fmt    "The %Od day of %B in %Y"
```

On 7/4/1776, the %x field descriptor would result in “The 4th day of July in 1776” while 7/14/1789 would come out as “The 14 day of July in 1789” The above example is for illustrative purposes only. The %O modifier is primarily intended to provide for Kanji or Hindi digits in date formats.

LC_MESSAGES

The LC_MESSAGES category defines the format and values for affirmative and negative responses.

The following keywords are recognized as part of the locale definition file. The nl_langinfo(3C) function accepts upper-case versions of the first four keywords.

yesexpr — The operand consists of an extended regular expression (see regex(5)) that describes the acceptable affirmative response to a question expecting an affirmative or negative response.

noexpr — The operand consists of an extended regular expression that describes the acceptable negative response to a question expecting an affirmative or negative response.

yesstr The operand consists of a fixed string (not a regular expression) that can be used by an application for composition of a message that lists an acceptable affirmative response, such as in a prompt.

nostr The operand consists of a fixed string that can be used by an application for composition of a message that lists an acceptable negative response. The format and values for affirmative and negative responses of the POSIX locale follow; the code listing depicting the `localedef` input, the table representing the same information with the addition of `nl_langinfo()` constants.

```
LC_MESSAGES
# This is the POSIX locale definition for
# the LC_MESSAGES category.
#
yesexpr "<circumflex><left-square-bracket><y><Y>\
        <right-square-bracket>"
#
noexpr  "<circumflex><left-square-bracket><n><N>\
        <right-square-bracket>"
#
yesstr    "yes"
nostr    "no"
END LC_MESSAGES
```

localedef Keyword	langinfo Constant	POSIX Locale Value
yesexpr	YESEXPR	"^[yY]"
noexpr	NOEXPR	"^[nN]"
yesstr	YESSTR	"yes"
nostr	NOSTR	"no"

In an application conforming to the SUSv3 standard, the information on `yesstr` and `nostr` is not available.

関連項目

date(1), locale(1), localedef(1), sort(1), tr(1), uniq(1), localeconv(3C), nl_langinfo(3C), setlocale(3C), strcoll(3C), strftime(3C), strptime(3C), strxfrm(3C), wcscoll(3C), wcsftime(3C), wcsxfrm(3C), wctype(3C), attributes(5), charmap(5), extensions(5), regex(5)

名前

locale_alias – locale name aliases and their corresponding canonical locale names

機能説明

There are two sets of locale name aliases that are accepted and supported in the system:

1. Locale name aliases that are accepted and mapped to corresponding canonical locale names, if any, during locale selection process as specified in setlocale(3C) and message object or message catalog processing as specified in gettext(1), catopen(3C), and gettext(3C).

   During the mapping process, the codeset name portion of the locale name aliases are normalized by extracting only alphanumeric characters with to-lower case conversions to have a better success ratio of possible mappings. As an example, with this normalization, a locale name alias such as AR_AA.UTF-8 is normalized into AR_AA.utf8 as a search domain value prior to actual comparisons to a set of pre-normalized locale alias names in internal mapping table to find the canonical locale name.

   The supported locale name aliases in machine order are shown at below:

Locale Name Alias	Canonical Locale Name
AR_AA	ar_AA.UTF-8
AR_AA.UTF-8	ar_AA.UTF-8
AR_AE	ar_AE.UTF-8
AR_AE.UTF-8	ar_AE.UTF-8
AR_BH	ar_BH.UTF-8
AR_BH.UTF-8	ar_BH.UTF-8
AR_DZ	ar_DZ.UTF-8
AR_DZ.UTF-8	ar_DZ.UTF-8
AR_EG	ar_EG.UTF-8
AR_EG.UTF-8	ar_EG.UTF-8
AR_JO	ar_JO.UTF-8
AR_JO.UTF-8	ar_JO.UTF-8
AR_KW	ar_KW.UTF-8
AR_KW.UTF-8	ar_KW.UTF-8
AR_LB	ar_LB.UTF-8
AR_LB.UTF-8	ar_LB.UTF-8
AR_MA	ar_MA.UTF-8
AR_MA.UTF-8	ar_MA.UTF-8
AR_OM	ar_OM.UTF-8
AR_OM.UTF-8	ar_OM.UTF-8
AR_QA	ar_QA.UTF-8
AR_QA.UTF-8	ar_QA.UTF-8
AR_SA	ar_SA.UTF-8
AR_SA.UTF-8	ar_SA.UTF-8
AR_SY	ar_SY.UTF-8
AR_SY.UTF-8	ar_SY.UTF-8
AR_TN	ar_TN.UTF-8
AR_TN.UTF-8	ar_TN.UTF-8
AR_YE	ar_YE.UTF-8
AR_YE.UTF-8	ar_YE.UTF-8

```
AS_IN                   as_IN.UTF-8
AS_IN.UTF-8             as_IN.UTF-8
AZ_AZ                   az_AZ.UTF-8
AZ_AZ.UTF-8             az_AZ.UTF-8
BE_BY                   be_BY.UTF-8
BE_BY.UTF-8             be_BY.UTF-8
BG_BG                   bg_BG.UTF-8
BG_BG.UTF-8             bg_BG.UTF-8
BN_IN                   bn_IN.UTF-8
BN_IN.UTF-8             bn_IN.UTF-8
CA_ES                   ca_ES.UTF-8
CA_ES.UTF-8             ca_ES.UTF-8
CA_ES.UTF-8@euro        ca_ES.UTF-8
CA_ES@euro              ca_ES.UTF-8
CS_CZ                   cs_CZ.UTF-8
CS_CZ.UTF-8             cs_CZ.UTF-8
CY_GB                   cy_GB.UTF-8
CY_GB.UTF-8             cy_GB.UTF-8
DA_DK                   da_DK.UTF-8
DA_DK.UTF-8             da_DK.UTF-8
DE_AT                   de_AT.UTF-8
DE_AT.UTF-8             de_AT.UTF-8
DE_AT.UTF-8@euro        de_AT.UTF-8
DE_AT@euro              de_AT.UTF-8
DE_CH                   de_CH.UTF-8
DE_CH.UTF-8             de_CH.UTF-8
DE_DE                   de_DE.UTF-8
DE_DE.UTF-8             de_DE.UTF-8
DE_DE.UTF-8@euro        de_DE.UTF-8
DE_DE@euro              de_DE.UTF-8
DE_LU                   de_LU.UTF-8
DE_LU.UTF-8             de_LU.UTF-8
DE_LU.UTF-8@euro        de_LU.UTF-8
DE_LU@euro              de_LU.UTF-8
EL_GR                   el_GR.UTF-8
EL_GR.UTF-8             el_GR.UTF-8
EN_AU                   en_AU.UTF-8
EN_AU.UTF-8             en_AU.UTF-8
EN_BE                   en_BE.UTF-8
EN_BE.UTF-8             en_BE.UTF-8
EN_BE.UTF-8@euro        en_BE.UTF-8
EN_BE@euro              en_BE.UTF-8
EN_CA                   en_CA.UTF-8
EN_CA.UTF-8             en_CA.UTF-8
EN_GB                   en_GB.UTF-8
EN_GB.UTF-8             en_GB.UTF-8
EN_GB.UTF-8@euro        en_GB.UTF-8
EN_GB@euro              en_GB.UTF-8
```

```
EN_HK                   en_HK.UTF-8
EN_HK.UTF-8             en_HK.UTF-8
EN_IE                   en_IE.UTF-8
EN_IE.UTF-8             en_IE.UTF-8
EN_IE.UTF-8@euro        en_IE.UTF-8
EN_IE@euro              en_IE.UTF-8
EN_IN                   en_IN.UTF-8
EN_IN.UTF-8             en_IN.UTF-8
EN_NZ                   en_NZ.UTF-8
EN_NZ.UTF-8             en_NZ.UTF-8
EN_PH                   en_PH.UTF-8
EN_PH.UTF-8             en_PH.UTF-8
EN_SG                   en_SG.UTF-8
EN_SG.UTF-8             en_SG.UTF-8
EN_US                   en_US.UTF-8
EN_US.UTF-8             en_US.UTF-8
EN_ZA                   en_ZA.UTF-8
EN_ZA.UTF-8             en_ZA.UTF-8
ES_AR                   es_AR.UTF-8
ES_AR.UTF-8             es_AR.UTF-8
ES_BO                   es_BO.UTF-8
ES_BO.UTF-8             es_BO.UTF-8
ES_CL                   es_CL.UTF-8
ES_CL.UTF-8             es_CL.UTF-8
ES_CO                   es_CO.UTF-8
ES_CO.UTF-8             es_CO.UTF-8
ES_CR                   es_CR.UTF-8
ES_CR.UTF-8             es_CR.UTF-8
ES_DO                   es_DO.UTF-8
ES_DO.UTF-8             es_DO.UTF-8
ES_EC                   es_EC.UTF-8
ES_EC.UTF-8             es_EC.UTF-8
ES_ES                   es_ES.UTF-8
ES_ES.UTF-8             es_ES.UTF-8
ES_ES.UTF-8@euro        es_ES.UTF-8
ES_ES@euro              es_ES.UTF-8
ES_GT                   es_GT.UTF-8
ES_GT.UTF-8             es_GT.UTF-8
ES_HN                   es_HN.UTF-8
ES_HN.UTF-8             es_HN.UTF-8
ES_MX                   es_MX.UTF-8
ES_MX.UTF-8             es_MX.UTF-8
ES_NI                   es_NI.UTF-8
ES_NI.UTF-8             es_NI.UTF-8
ES_PA                   es_PA.UTF-8
ES_PA.UTF-8             es_PA.UTF-8
ES_PE                   es_PE.UTF-8
ES_PE.UTF-8             es_PE.UTF-8
```

```
ES_PR                   es_PR.UTF-8
ES_PR.UTF-8             es_PR.UTF-8
ES_PY                   es_PY.UTF-8
ES_PY.UTF-8             es_PY.UTF-8
ES_SV                   es_SV.UTF-8
ES_SV.UTF-8             es_SV.UTF-8
ES_US                   es_US.UTF-8
ES_US.UTF-8             es_US.UTF-8
ES_UY                   es_UY.UTF-8
ES_UY.UTF-8             es_UY.UTF-8
ES_VE                   es_VE.UTF-8
ES_VE.UTF-8             es_VE.UTF-8
ET_EE                   et_EE.UTF-8
ET_EE.UTF-8             et_EE.UTF-8
FI_FI                   fi_FI.UTF-8
FI_FI.UTF-8             fi_FI.UTF-8
FI_FI.UTF-8@euro        fi_FI.UTF-8
FI_FI@euro              fi_FI.UTF-8
FR_BE                   fr_BE.UTF-8
FR_BE.UTF-8             fr_BE.UTF-8
FR_BE.UTF-8@euro        fr_BE.UTF-8
FR_BE@euro              fr_BE.UTF-8
FR_CA                   fr_CA.UTF-8
FR_CA.UTF-8             fr_CA.UTF-8
FR_CH                   fr_CH.UTF-8
FR_CH.UTF-8             fr_CH.UTF-8
FR_FR                   fr_FR.UTF-8
FR_FR.UTF-8             fr_FR.UTF-8
FR_FR.UTF-8@euro        fr_FR.UTF-8
FR_FR@euro              fr_FR.UTF-8
FR_LU                   fr_LU.UTF-8
FR_LU.UTF-8             fr_LU.UTF-8
FR_LU.UTF-8@euro        fr_LU.UTF-8
FR_LU@euro              fr_LU.UTF-8
GU_IN                   gu_IN.UTF-8
GU_IN.UTF-8             gu_IN.UTF-8
HE_IL                   he_IL.UTF-8
HE_IL.UTF-8             he_IL.UTF-8
HI_IN                   hi_IN.UTF-8
HI_IN.UTF-8             hi_IN.UTF-8
HR_HR                   hr_HR.UTF-8
HR_HR.UTF-8             hr_HR.UTF-8
HU_HU                   hu_HU.UTF-8
HU_HU.UTF-8             hu_HU.UTF-8
ID_ID                   id_ID.UTF-8
ID_ID.UTF-8             id_ID.UTF-8
IS_IS                   is_IS.UTF-8
IS_IS.UTF-8             is_IS.UTF-8
```

```
IT_CH                   it_CH.UTF-8
IT_CH.UTF-8             it_CH.UTF-8
IT_IT                   it_IT.UTF-8
IT_IT.UTF-8             it_IT.UTF-8
IT_IT.UTF-8@euro        it_IT.UTF-8
IT_IT@euro              it_IT.UTF-8
JA_JP                   ja_JP.UTF-8
JA_JP.UTF-8             ja_JP.UTF-8
KK_KZ                   kk_KZ.UTF-8
KK_KZ.UTF-8             kk_KZ.UTF-8
KN_IN                   kn_IN.UTF-8
KN_IN.UTF-8             kn_IN.UTF-8
KO_KR                   ko_KR.UTF-8
KO_KR.UTF-8             ko_KR.UTF-8
LT_LT                   lt_LT.UTF-8
LT_LT.UTF-8             lt_LT.UTF-8
LV_LV                   lv_LV.UTF-8
LV_LV.UTF-8             lv_LV.UTF-8
MK_MK                   mk_MK.UTF-8
MK_MK.UTF-8             mk_MK.UTF-8
ML_IN                   ml_IN.UTF-8
ML_IN.UTF-8             ml_IN.UTF-8
MR_IN                   mr_IN.UTF-8
MR_IN.UTF-8             mr_IN.UTF-8
MS_MY                   ms_MY.UTF-8
MS_MY.UTF-8             ms_MY.UTF-8
MT_MT                   mt_MT.UTF-8
MT_MT.UTF-8             mt_MT.UTF-8
NL_BE                   nl_BE.UTF-8
NL_BE.UTF-8             nl_BE.UTF-8
NL_BE.UTF-8@euro        nl_BE.UTF-8
NL_BE@euro              nl_BE.UTF-8
NL_NL                   nl_NL.UTF-8
NL_NL.UTF-8             nl_NL.UTF-8
NL_NL.UTF-8@euro        nl_NL.UTF-8
NL_NL@euro              nl_NL.UTF-8
NO_NO                   no_NO.UTF-8
NO_NO.UTF-8             no_NO.UTF-8
OR_IN                   or_IN.UTF-8
OR_IN.UTF-8             or_IN.UTF-8
PA_IN                   pa_IN.UTF-8
PA_IN.UTF-8             pa_IN.UTF-8
PL_PL                   pl_PL.UTF-8
PL_PL.UTF-8             pl_PL.UTF-8
PT_BR                   pt_BR.UTF-8
PT_BR.UTF-8             pt_BR.UTF-8
PT_PT                   pt_PT.UTF-8
PT_PT.UTF-8             pt_PT.UTF-8
```

```
PT_PT.UTF-8@euro        pt_PT.UTF-8
PT_PT@euro              pt_PT.UTF-8
RO_RO                   ro_RO.UTF-8
RO_RO.UTF-8             ro_RO.UTF-8
RU_RU                   ru_RU.UTF-8
RU_RU.UTF-8             ru_RU.UTF-8
SH_SP                   sh_SP.UTF-8
SH_SP.UTF-8             sh_SP.UTF-8
SH_YU                   sh_YU.UTF-8
SH_YU.UTF-8             sh_YU.UTF-8
SK_SK                   sk_SK.UTF-8
SK_SK.UTF-8             sk_SK.UTF-8
SL_SI                   sl_SI.UTF-8
SL_SI.UTF-8             sl_SI.UTF-8
SQ_AL                   sq_AL.UTF-8
SQ_AL.UTF-8             sq_AL.UTF-8
SR_SP                   sr_SP.UTF-8
SR_SP.UTF-8             sr_SP.UTF-8
SR_YU                   sr_YU.UTF-8
SR_YU.UTF-8             sr_YU.UTF-8
SV_SE                   sv_SE.UTF-8
SV_SE.UTF-8             sv_SE.UTF-8
TA_IN                   ta_IN.UTF-8
TA_IN.UTF-8             ta_IN.UTF-8
TE_IN                   te_IN.UTF-8
TE_IN.UTF-8             te_IN.UTF-8
TH_TH                   th_TH.UTF-8
TH_TH.UTF-8             th_TH.UTF-8
TR_TR                   tr_TR.UTF-8
TR_TR.UTF-8             tr_TR.UTF-8
UK_UA                   uk_UA.UTF-8
UK_UA.UTF-8             uk_UA.UTF-8
UR_IN                   ur_IN.UTF-8
UR_IN.UTF-8             ur_IN.UTF-8
UR_PK                   ur_PK.UTF-8
UR_PK.UTF-8             ur_PK.UTF-8
VI_VN                   vi_VN.UTF-8
VI_VN.UTF-8             vi_VN.UTF-8
ZH_CN                   zh_CN.UTF-8
ZH_CN.UTF-8             zh_CN.UTF-8
ZH_HK                   zh_HK.UTF-8
ZH_HK.UTF-8             zh_HK.UTF-8
ZH_SG                   zh_SG.UTF-8
ZH_SG.UTF-8             zh_SG.UTF-8
ZH_TW                   zh_TW.UTF-8
ZH_TW.UTF-8             zh_TW.UTF-8
Zh_CN                   zh_CN.GB18030
Zh_CN.GB18030           zh_CN.GB18030
```

```
Zh_TW                   zh_TW.BIG5
Zh_TW.big5              zh_TW.BIG5
aa_DJ                   aa_DJ.ISO8859-1
aa_DJ.iso88591          aa_DJ.ISO8859-1
aa_DJ.utf8              aa_DJ.UTF-8
aa_ER                   aa_ER.UTF-8
aa_ER.utf8              aa_ER.UTF-8
aa_ET                   aa_ET.UTF-8
aa_ET.utf8              aa_ET.UTF-8
af_ZA                   af_ZA.ISO8859-1
af_ZA.iso88591          af_ZA.ISO8859-1
af_ZA.utf8              af_ZA.UTF-8
am_ET                   am_ET.UTF-8
am_ET.utf8              am_ET.UTF-8
an_ES                   an_ES.ISO8859-15
an_ES.iso885915         an_ES.ISO8859-15
an_ES.utf8              an_ES.UTF-8
ar                      ar_EG.ISO8859-6
ar_AA                   ar_AA.ISO8859-6
ar_AE                   ar_AE.ISO8859-6
ar_AE.iso88596          ar_AE.ISO8859-6
ar_AE.utf8              ar_AE.UTF-8
ar_BH                   ar_BH.ISO8859-6
ar_BH.iso88596          ar_BH.ISO8859-6
ar_BH.utf8              ar_BH.UTF-8
ar_DZ                   ar_DZ.ISO8859-6
ar_DZ.iso88596          ar_DZ.ISO8859-6
ar_DZ.utf8              ar_DZ.UTF-8
ar_EG                   ar_EG.ISO8859-6
ar_EG.iso88596          ar_EG.ISO8859-6
ar_EG.utf8              ar_EG.UTF-8
ar_IN                   ar_IN.UTF-8
ar_IN.utf8              ar_IN.UTF-8
ar_IQ                   ar_IQ.ISO8859-6
ar_IQ.iso88596          ar_IQ.ISO8859-6
ar_IQ.utf8              ar_IQ.UTF-8
ar_JO                   ar_JO.ISO8859-6
ar_JO.iso88596          ar_JO.ISO8859-6
ar_JO.utf8              ar_JO.UTF-8
ar_KW                   ar_KW.ISO8859-6
ar_KW.iso88596          ar_KW.ISO8859-6
ar_KW.utf8              ar_KW.UTF-8
ar_LB                   ar_LB.ISO8859-6
ar_LB.iso88596          ar_LB.ISO8859-6
ar_LB.utf8              ar_LB.UTF-8
ar_LY                   ar_LY.ISO8859-6
ar_LY.iso88596          ar_LY.ISO8859-6
ar_LY.utf8              ar_LY.UTF-8
```

```
ar_MA                   ar_MA.ISO8859-6
ar_MA.iso88596          ar_MA.ISO8859-6
ar_MA.utf8              ar_MA.UTF-8
ar_OM                   ar_OM.ISO8859-6
ar_OM.iso88596          ar_OM.ISO8859-6
ar_OM.utf8              ar_OM.UTF-8
ar_QA                   ar_QA.ISO8859-6
ar_QA.iso88596          ar_QA.ISO8859-6
ar_QA.utf8              ar_QA.UTF-8
ar_SA                   ar_SA.ISO8859-6
ar_SA.iso88596          ar_SA.ISO8859-6
ar_SA.utf8              ar_SA.UTF-8
ar_SD                   ar_SD.ISO8859-6
ar_SD.iso88596          ar_SD.ISO8859-6
ar_SD.utf8              ar_SD.UTF-8
ar_SY                   ar_SY.ISO8859-6
ar_SY.iso88596          ar_SY.ISO8859-6
ar_SY.utf8              ar_SY.UTF-8
ar_TN                   ar_TN.ISO8859-6
ar_TN.iso88596          ar_TN.ISO8859-6
ar_TN.utf8              ar_TN.UTF-8
ar_YE                   ar_YE.ISO8859-6
ar_YE.iso88596          ar_YE.ISO8859-6
ar_YE.utf8              ar_YE.UTF-8
as_IN.utf8              as_IN.UTF-8
az_AZ.utf8              az_AZ.UTF-8
be_BY                   be_BY.ISO8859-5
be_BY.cp1251            be_BY.ANSI1251
be_BY.utf8              be_BY.UTF-8
bg_BG                   bg_BG.ISO8859-5
bg_BG.cp1251            bg_BG.ANSI1251
bg_BG.utf8              bg_BG.UTF-8
bn_BD                   bn_BD.UTF-8
bn_BD.utf8              bn_BD.UTF-8
bn_IN                   bn_IN.UTF-8
bn_IN.utf8              bn_IN.UTF-8
br_FR                   br_FR.ISO8859-1
br_FR.iso88591          br_FR.ISO8859-1
br_FR.iso885915@euro    br_FR.ISO8859-15
br_FR.utf8              br_FR.UTF-8
br_FR@euro              br_FR.ISO8859-15
bs_BA                   bs_BA.ISO8859-2
bs_BA.iso88592          bs_BA.ISO8859-2
bs_BA.utf8              bs_BA.UTF-8
ca                      ca_ES.ISO8859-1
ca_AD                   ca_AD.ISO8859-15
ca_AD.iso885915         ca_AD.ISO8859-15
ca_AD.utf8              ca_AD.UTF-8
```

ca_ES	ca_ES.ISO8859-1
ca_ES.8859-15	ca_ES.ISO8859-15
ca_ES.8859-15@euro	ca_ES.ISO8859-15
ca_ES.IBM-1252	ca_ES.ANSI1252
ca_ES.ISO8859-15@euro	ca_ES.ISO8859-15
ca_ES.iso88591	ca_ES.ISO8859-1
ca_ES.utf8	ca_ES.UTF-8
ca_ES@euro	ca_ES.ISO8859-15
ca_FR	ca_FR.ISO8859-15
ca_FR.iso885915	ca_FR.ISO8859-15
ca_FR.utf8	ca_FR.UTF-8
ca_IT	ca_IT.ISO8859-15
ca_IT.iso885915	ca_IT.ISO8859-15
ca_IT.utf8	ca_IT.UTF-8
cs	cs_CZ.ISO8859-2
cs_CZ	cs_CZ.ISO8859-2
cs_CZ.iso88592	cs_CZ.ISO8859-2
cs_CZ.utf8	cs_CZ.UTF-8
cy_GB	cy_GB.ISO8859-14
cy_GB.iso885914	cy_GB.ISO8859-14
cy_GB.utf8	cy_GB.UTF-8
da	da_DK.ISO8859-1
da.ISO8859-15	da_DK.ISO8859-15
da_DK	da_DK.ISO8859-1
da_DK.8859-15	da_DK.ISO8859-15
da_DK.iso88591	da_DK.ISO8859-1
da_DK.iso885915	da_DK.ISO8859-15
da_DK.iso885915@euro	da_DK.ISO8859-15
da_DK.utf8	da_DK.UTF-8
de	de_DE.ISO8859-1
de.ISO8859-15	de_DE.ISO8859-15
de.UTF-8	de_DE.UTF-8
de_AT	de_AT.ISO8859-1
de_AT.8859-15	de_AT.ISO8859-15
de_AT.8859-15@euro	de_AT.ISO8859-15
de_AT.ISO8859-15@euro	de_AT.ISO8859-15
de_AT.iso88591	de_AT.ISO8859-1
de_AT.utf8	de_AT.UTF-8
de_AT@euro	de_AT.ISO8859-15
de_BE	de_BE.ISO8859-1
de_BE.iso88591	de_BE.ISO8859-1
de_BE.iso885915@euro	de_BE.ISO8859-15
de_BE.utf8	de_BE.UTF-8
de_BE@euro	de_BE.ISO8859-15
de_CH	de_CH.ISO8859-1
de_CH.8859-15	de_CH.ISO8859-15
de_CH.iso88591	de_CH.ISO8859-1
de_CH.utf8	de_CH.UTF-8

```
de_DE                   de_DE.ISO8859-1
de_DE.8859-15           de_DE.ISO8859-15
de_DE.8859-15@euro      de_DE.ISO8859-15
de_DE.IBM-1252          de_DE.ANSI1252
de_DE.ISO8859-15@euro   de_DE.ISO8859-15
de_DE.UTF-8@euro        de_DE.UTF-8
de_DE.iso88591          de_DE.ISO8859-1
de_DE.utf8              de_DE.UTF-8
de_DE@euro              de_DE.ISO8859-15
de_LU                   de_LU.ISO8859-15
de_LU.8859-15           de_LU.ISO8859-15
de_LU.8859-15@euro      de_LU.ISO8859-15
de_LU.iso88591          de_LU.ISO8859-1
de_LU.iso885915@euro    de_LU.ISO8859-15
de_LU.utf8              de_LU.UTF-8
de_LU@euro              de_LU.ISO8859-15
dz_BT                   dz_BT.UTF-8
dz_BT.utf8              dz_BT.UTF-8
el                      el_GR.ISO8859-7
el.UTF-8                el_CY.UTF-8
el.sun_eu_greek         el_GR.ISO8859-7
el_CY                   el_CY.ISO8859-7
el_CY.iso88597          el_CY.ISO8859-7
el_CY.utf8              el_CY.UTF-8
el_GR                   el_GR.ISO8859-7
el_GR.ISO8859-7@euro    el_GR.ISO8859-7
el_GR.iso88597          el_GR.ISO8859-7
el_GR.utf8              el_GR.UTF-8
en_AU                   en_AU.ISO8859-1
en_AU.8859-15           en_AU.ISO8859-15
en_AU.iso88591          en_AU.ISO8859-1
en_AU.utf8              en_AU.UTF-8
en_BE                   en_BE.ISO8859-15
en_BE.8859-15           en_BE.ISO8859-15
en_BE.8859-15@euro      en_BE.ISO8859-15
en_BE@euro              en_BE.ISO8859-15
en_BW                   en_BW.ISO8859-1
en_BW.iso88591          en_BW.ISO8859-1
en_BW.utf8              en_BW.UTF-8
en_CA                   en_CA.ISO8859-1
en_CA.8859-15           en_CA.ISO8859-15
en_CA.iso88591          en_CA.ISO8859-1
en_CA.utf8              en_CA.UTF-8
en_DK                   en_DK.ISO8859-1
en_DK.iso88591          en_DK.ISO8859-1
en_DK.utf8              en_DK.UTF-8
en_GB                   en_GB.ISO8859-1
en_GB.8859-15           en_GB.ISO8859-15
```

en_GB.8859-15@euro	en_GB.ISO8859-15
en_GB.IBM-1252	en_GB.ANSI1252
en_GB.iso88591	en_GB.ISO8859-1
en_GB.iso885915	en_GB.ISO8859-15
en_GB.iso885915@euro	en_GB.ISO8859-15
en_GB.utf8	en_GB.UTF-8
en_HK	en_HK.ISO8859-15
en_HK.8859-15	en_HK.ISO8859-15
en_HK.iso88591	en_HK.ISO8859-1
en_HK.utf8	en_HK.UTF-8
en_IE	en_IE.ISO8859-1
en_IE.8859-15	en_IE.ISO8859-15
en_IE.8859-15@euro	en_IE.ISO8859-15
en_IE.ISO8859-15@euro	en_IE.ISO8859-15
en_IE.iso88591	en_IE.ISO8859-1
en_IE.utf8	en_IE.UTF-8
en_IE@euro	en_IE.ISO8859-15
en_IN	en_IN.ISO8859-15
en_IN.8859-15	en_IN.ISO8859-15
en_IN.utf8	en_IN.UTF-8
en_NZ	en_NZ.ISO8859-1
en_NZ.8859-15	en_NZ.ISO8859-15
en_NZ.iso88591	en_NZ.ISO8859-1
en_NZ.utf8	en_NZ.UTF-8
en_PH	en_PH.ISO8859-15
en_PH.8859-15	en_PH.ISO8859-15
en_PH.iso88591	en_PH.ISO8859-1
en_PH.utf8	en_PH.UTF-8
en_SG	en_SG.ISO8859-15
en_SG.8859-15	en_SG.ISO8859-15
en_SG.iso88591	en_SG.ISO8859-1
en_SG.utf8	en_SG.UTF-8
en_US	en_US.ISO8859-1
en_US.8859-15	en_US.ISO8859-15
en_US.iso88591	en_US.ISO8859-1
en_US.iso885915	en_US.ISO8859-15
en_US.utf8	en_US.UTF-8
en_ZA	en_ZA.ISO8859-15
en_ZA.8859-15	en_ZA.ISO8859-15
en_ZA.iso88591	en_ZA.ISO8859-1
en_ZA.utf8	en_ZA.UTF-8
en_ZW	en_ZW.ISO8859-1
en_ZW.iso88591	en_ZW.ISO8859-1
en_ZW.utf8	en_ZW.UTF-8
es	es_ES.ISO8859-1
es.ISO8859-15	es_ES.ISO8859-15
es.UTF-8	es_ES.UTF-8
es_AR	es_AR.ISO8859-1

```
es_AR.8859-15            es_AR.ISO8859-15
es_AR.iso88591           es_AR.ISO8859-1
es_AR.utf8               es_AR.UTF-8
es_BO                    es_BO.ISO8859-1
es_BO.8859-15            es_BO.ISO8859-15
es_BO.iso88591           es_BO.ISO8859-1
es_BO.utf8               es_BO.UTF-8
es_CL                    es_CL.ISO8859-1
es_CL.8859-15            es_CL.ISO8859-15
es_CL.iso88591           es_CL.ISO8859-1
es_CL.utf8               es_CL.UTF-8
es_CO                    es_CO.ISO8859-1
es_CO.8859-15            es_CO.ISO8859-15
es_CO.iso88591           es_CO.ISO8859-1
es_CO.utf8               es_CO.UTF-8
es_CR                    es_CR.ISO8859-1
es_CR.8859-15            es_CR.ISO8859-15
es_CR.iso88591           es_CR.ISO8859-1
es_CR.utf8               es_CR.UTF-8
es_DO                    es_DO.ISO8859-15
es_DO.8859-15            es_DO.ISO8859-15
es_DO.iso88591           es_DO.ISO8859-1
es_DO.utf8               es_DO.UTF-8
es_EC                    es_EC.ISO8859-1
es_EC.8859-15            es_EC.ISO8859-15
es_EC.iso88591           es_EC.ISO8859-1
es_EC.utf8               es_EC.UTF-8
es_ES                    es_ES.ISO8859-1
es_ES.8859-15            es_ES.ISO8859-15
es_ES.8859-15@euro       es_ES.ISO8859-15
es_ES.IBM-1252           es_ES.ANSI1252
es_ES.ISO8859-15@euro    es_ES.ISO8859-15
es_ES.UTF-8@euro         es_ES.UTF-8
es_ES.iso88591           es_ES.ISO8859-1
es_ES.utf8               es_ES.UTF-8
es_ES@euro               es_ES.ISO8859-15
es_GT                    es_GT.ISO8859-1
es_GT.8859-15            es_GT.ISO8859-15
es_GT.iso88591           es_GT.ISO8859-1
es_GT.utf8               es_GT.UTF-8
es_HN                    es_HN.ISO8859-15
es_HN.8859-15            es_HN.ISO8859-15
es_HN.iso88591           es_HN.ISO8859-1
es_HN.utf8               es_HN.UTF-8
es_MX                    es_MX.ISO8859-1
es_MX.8859-15            es_MX.ISO8859-15
es_MX.iso88591           es_MX.ISO8859-1
es_NI.utf8               es_NI.UTF-8
```

```
es_PA                   es_PA.ISO8859-1
es_PA.8859-15           es_PA.ISO8859-15
es_PA.iso88591          es_PA.ISO8859-1
es_PA.utf8              es_PA.UTF-8
es_PE                   es_PE.ISO8859-1
es_PE.8859-15           es_PE.ISO8859-15
es_PE.iso88591          es_PE.ISO8859-1
es_PE.utf8              es_PE.UTF-8
es_PR                   es_PR.ISO8859-15
es_PR.8859-15           es_PR.ISO8859-15
es_PR.iso88591          es_PR.ISO8859-1
es_PR.utf8              es_PR.UTF-8
es_PY                   es_PY.ISO8859-1
es_PY.8859-15           es_PY.ISO8859-15
es_PY.iso88591          es_PY.ISO8859-1
es_PY.utf8              es_PY.UTF-8
es_SV                   es_SV.ISO8859-1
es_SV.8859-15           es_SV.ISO8859-15
es_SV.iso88591          es_SV.ISO8859-1
es_SV.utf8              es_SV.UTF-8
es_US                   es_US.ISO8859-15
es_US.8859-15           es_US.ISO8859-15
es_US.iso88591          es_US.ISO8859-1
es_US.utf8              es_US.UTF-8
es_UY                   es_UY.ISO8859-1
es_UY.8859-15           es_UY.ISO8859-15
es_UY.iso88591          es_UY.ISO8859-1
es_UY.utf8              es_UY.UTF-8
es_VE                   es_VE.ISO8859-1
es_VE.8859-15           es_VE.ISO8859-15
es_VE.iso88591          es_VE.ISO8859-1
es_VE.utf8              es_VE.UTF-8
et                      et_EE.ISO8859-15
et_EE                   et_EE.ISO8859-15
et_EE.iso88591          et_EE.ISO8859-1
et_EE.iso885915         et_EE.ISO8859-15
et_EE.utf8              et_EE.UTF-8
eu_ES                   eu_ES.ISO8859-1
eu_ES.iso88591          eu_ES.ISO8859-1
eu_ES.iso885915@euro    eu_ES.ISO8859-15
eu_ES.utf8              eu_ES.UTF-8
eu_ES@euro              eu_ES.ISO8859-15
fa_IR                   fa_IR.UTF-8
fa_IR.utf8              fa_IR.UTF-8
fi                      fi_FI.ISO8859-1
fi.ISO8859-15           fi_FI.ISO8859-15
fi_FI                   fi_FI.ISO8859-1
fi_FI.8859-15           fi_FI.ISO8859-15
```

```
fi_FI.8859-15@euro      fi_FI.ISO8859-15
fi_FI.IBM-1252          fi_FI.ANSI1252
fi_FI.ISO8859-15@euro   fi_FI.ISO8859-15
fi_FI.iso88591          fi_FI.ISO8859-1
fi_FI.utf8              fi_FI.UTF-8
fi_FI@euro              fi_FI.ISO8859-15
fo_FO                   fo_FO.ISO8859-1
fo_FO.iso88591          fo_FO.ISO8859-1
fo_FO.utf8              fo_FO.UTF-8
fr                      fr_FR.ISO8859-1
fr.ISO8859-15           fr_FR.ISO8859-15
fr.UTF-8                fr_FR.UTF-8
fr_BE                   fr_BE.ISO8859-1
fr_BE.8859-15           fr_BE.ISO8859-15
fr_BE.8859-15@euro      fr_BE.ISO8859-15
fr_BE.IBM-1252          fr_BE.ANSI1252
fr_BE.ISO8859-15@euro   fr_BE.ISO8859-15
fr_BE.UTF-8@euro        fr_BE.UTF-8
fr_BE.iso88591          fr_BE.ISO8859-1
fr_BE.utf8              fr_BE.UTF-8
fr_BE@euro              fr_BE.ISO8859-15
fr_CA                   fr_CA.ISO8859-1
fr_CA.8859-15           fr_CA.ISO8859-15
fr_CA.iso88591          fr_CA.ISO8859-1
fr_CA.utf8              fr_CA.UTF-8
fr_CH                   fr_CH.ISO8859-1
fr_CH.8859-15           fr_CH.ISO8859-15
fr_CH.iso88591          fr_CH.ISO8859-1
fr_CH.utf8              fr_CH.UTF-8
fr_FR                   fr_FR.ISO8859-1
fr_FR.8859-15           fr_FR.ISO8859-15
fr_FR.8859-15@euro      fr_FR.ISO8859-15
fr_FR.IBM-1252          fr_FR.ANSI1252
fr_FR.ISO8859-15@euro   fr_FR.ISO8859-15
fr_FR.UTF-8@euro        fr_FR.UTF-8
fr_FR.iso88591          fr_FR.ISO8859-1
fr_FR.utf8              fr_FR.UTF-8
fr_FR@euro              fr_FR.ISO8859-15
fr_LU                   fr_LU.ISO8859-15
fr_LU.8859-15           fr_LU.ISO8859-15
fr_LU.8859-15@euro      fr_LU.ISO8859-15
fr_LU.iso88591          fr_LU.ISO8859-1
fr_LU.iso885915@euro    fr_LU.ISO8859-15
fr_LU.utf8              fr_LU.UTF-8
fr_LU@euro              fr_LU.ISO8859-15
fy_NL                   fy_NL.UTF-8
fy_NL.utf8              fy_NL.UTF-8
ga_IE                   ga_IE.ISO8859-1
```

```
ga_IE.iso88591          ga_IE.ISO8859-1
ga_IE.iso885915@euro    ga_IE.ISO8859-15
ga_IE.utf8              ga_IE.UTF-8
ga_IE@euro              ga_IE.ISO8859-15
gd_GB                   gd_GB.ISO8859-15
gd_GB.iso885915         gd_GB.ISO8859-15
gd_GB.utf8              gd_GB.UTF-8
gl_ES                   gl_ES.ISO8859-1
gl_ES.iso88591          gl_ES.ISO8859-1
gl_ES.iso885915@euro    gl_ES.ISO8859-15
gl_ES.utf8              gl_ES.UTF-8
gl_ES@euro              gl_ES.ISO8859-15
gu_IN                   gu_IN.UTF-8
gu_IN.utf8              gu_IN.UTF-8
gv_GB                   gv_GB.ISO8859-1
gv_GB.iso88591          gv_GB.ISO8859-1
gv_GB.utf8              gv_GB.UTF-8
he                      he_IL.ISO8859-8
he_IL                   he_IL.ISO8859-8
he_IL.iso88598          he_IL.ISO8859-8
he_IL.utf8              he_IL.UTF-8
hi_IN                   hi_IN.UTF-8
hi_IN.utf8              hi_IN.UTF-8
hr_HR                   hr_HR.ISO8859-2
hr_HR.iso88592          hr_HR.ISO8859-2
hr_HR.utf8              hr_HR.UTF-8
hu                      hu_HU.ISO8859-2
hu_HU                   hu_HU.ISO8859-2
hu_HU.iso88592          hu_HU.ISO8859-2
hu_HU.utf8              hu_HU.UTF-8
hy_AM                   hy_AM.UTF-8
hy_AM.utf8              hy_AM.UTF-8
id_ID                   id_ID.ISO8859-15
id_ID.8859-15           id_ID.ISO8859-15
id_ID.iso88591          id_ID.ISO8859-1
id_ID.utf8              id_ID.UTF-8
is_IS                   is_IS.ISO8859-1
is_IS.8859-15           is_IS.ISO8859-15
is_IS.iso88591          is_IS.ISO8859-1
is_IS.utf8              is_IS.UTF-8
it                      it_IT.ISO8859-1
it.ISO8859-15           it_IT.ISO8859-15
it.UTF-8                it_IT.UTF-8
it_CH                   it_CH.ISO8859-15
it_CH.8859-15           it_CH.ISO8859-15
it_CH.iso88591          it_CH.ISO8859-1
it_CH.utf8              it_CH.UTF-8
it_IT                   it_IT.ISO8859-1
```

```
it_IT.8859-15            it_IT.ISO8859-15
it_IT.8859-15@euro       it_IT.ISO8859-15
it_IT.IBM-1252           it_IT.ANSI1252
it_IT.ISO8859-15@euro    it_IT.ISO8859-15
it_IT.UTF-8@euro         it_IT.UTF-8
it_IT.iso88591           it_IT.ISO8859-1
it_IT.utf8               it_IT.UTF-8
it_IT@euro               it_IT.ISO8859-15
iw_IL                    iw_IL.ISO8859-8
iw_IL.iso88598           iw_IL.ISO8859-8
iw_IL.utf8               iw_IL.UTF-8
ja                       ja_JP.eucJP
ja_JP                    ja_JP.eucJP
ja_JP.IBM-eucJP          ja_JP.eucJP
ja_JP.eucjp              ja_JP.eucJP
ja_JP.utf8               ja_JP.UTF-8
ka_GE.utf8               ka_GE.UTF-8
kk_KZ.utf8               kk_KZ.UTF-8
kl_GL                    kl_GL.ISO8859-1
kl_GL.iso88591           kl_GL.ISO8859-1
kl_GL.utf8               kl_GL.UTF-8
km_KH                    km_KH.UTF-8
km_KH.utf8               km_KH.UTF-8
kn_IN                    kn_IN.UTF-8
kn_IN.utf8               kn_IN.UTF-8
ko                       ko_KR.EUC
ko.UTF-8                 ko_KR.UTF-8
ko_KR                    ko_KR.EUC
ko_KR.IBM-eucKR          ko_KR.EUC
ko_KR.euckr              ko_KR.EUC
ko_KR.utf8               ko_KR.UTF-8
ku_TR                    ku_TR.ISO8859-9
ku_TR.iso88599           ku_TR.ISO8859-9
ku_TR.utf8               ku_TR.UTF-8
kw_GB                    kw_GB.ISO8859-1
kw_GB.iso88591           kw_GB.ISO8859-1
kw_GB.utf8               kw_GB.UTF-8
ky_KG                    ky_KG.UTF-8
ky_KG.utf8               ky_KG.UTF-8
lg_UG.utf8               lg_UG.UTF-8
lo_LA                    lo_LA.UTF-8
lo_LA.utf8               lo_LA.UTF-8
lt                       lt_LT.ISO8859-13
lt_LT                    lt_LT.ISO8859-13
lt_LT.iso885913          lt_LT.ISO8859-13
lt_LT.utf8               lt_LT.UTF-8
lv                       lv_LV.ISO8859-13
lv_LV                    lv_LV.ISO8859-13
```

```
lv_LV.iso885913          lv_LV.ISO8859-13
lv_LV.utf8               lv_LV.UTF-8
mg_MG                    mg_MG.ISO8859-15
mg_MG.iso885915          mg_MG.ISO8859-15
mg_MG.utf8               mg_MG.UTF-8
mi_NZ                    mi_NZ.ISO8859-13
mi_NZ.iso885913          mi_NZ.ISO8859-13
mi_NZ.utf8               mi_NZ.UTF-8
mk_MK                    mk_MK.ISO8859-5
mk_MK.iso88595           mk_MK.ISO8859-5
mk_MK.utf8               mk_MK.UTF-8
ml_IN                    ml_IN.UTF-8
ml_IN.utf8               ml_IN.UTF-8
mn_MN                    mn_MN.UTF-8
mn_MN.utf8               mn_MN.UTF-8
mr_IN                    mr_IN.UTF-8
mr_IN.utf8               mr_IN.UTF-8
ms_MY                    ms_MY.ISO8859-15
ms_MY.8859-15            ms_MY.ISO8859-15
ms_MY.iso88591           ms_MY.ISO8859-1
ms_MY.utf8               ms_MY.UTF-8
mt_MT                    mt_MT.ISO8859-3
mt_MT.iso88593           mt_MT.ISO8859-3
mt_MT.utf8               mt_MT.UTF-8
nb_NO                    nb_NO.ISO8859-1
nb_NO.iso88591           nb_NO.ISO8859-1
nb_NO.utf8               nb_NO.UTF-8
ne_NP                    ne_NP.UTF-8
ne_NP.utf8               ne_NP.UTF-8
nl                       nl_NL.ISO8859-1
nl.ISO8859-15            nl_NL.ISO8859-15
nl_BE                    nl_BE.ISO8859-1
nl_BE.8859-15            nl_BE.ISO8859-15
nl_BE.8859-15@euro       nl_BE.ISO8859-15
nl_BE.IBM-1252           nl_BE.ANSI1252
nl_BE.ISO8859-15@euro    nl_BE.ISO8859-15
nl_BE.iso88591           nl_BE.ISO8859-1
nl_BE.utf8               nl_BE.UTF-8
nl_BE@euro               nl_BE.ISO8859-15
nl_NL                    nl_NL.ISO8859-1
nl_NL.8859-15            nl_NL.ISO8859-15
nl_NL.8859-15@euro       nl_NL.ISO8859-15
nl_NL.IBM-1252           nl_NL.ANSI1252
nl_NL.ISO8859-15@euro    nl_NL.ISO8859-15
nl_NL.iso88591           nl_NL.ISO8859-1
nl_NL.utf8               nl_NL.UTF-8
nl_NL@euro               nl_NL.ISO8859-15
nn_NO                    nn_NO.ISO8859-1
```

```
nn_NO.iso88591           nn_NO.ISO8859-1
nn_NO.utf8               nn_NO.UTF-8
no                       nb_NO.ISO8859-1
no_NO                    nb_NO.ISO8859-1
no_NO.8859-15            no_NO.ISO8859-15
no_NO.ISO8859-1@bokmal   nb_NO.ISO8859-1
no_NO.ISO8859-1@nynorsk  nn_NO.ISO8859-1
no_NO.iso88591           no_NO.ISO8859-1
no_NO.utf8               no_NO.UTF-8
no_NY                    nn_NO.ISO8859-1
nr_ZA                    nr_ZA.UTF-8
nr_ZA.utf8               nr_ZA.UTF-8
oc_FR                    oc_FR.ISO8859-1
oc_FR.iso88591           oc_FR.ISO8859-1
oc_FR.utf8               oc_FR.UTF-8
om_ET                    om_ET.UTF-8
om_ET.utf8               om_ET.UTF-8
om_KE                    om_KE.ISO8859-1
om_KE.iso88591           om_KE.ISO8859-1
om_KE.utf8               om_KE.UTF-8
or_IN                    or_IN.UTF-8
or_IN.utf8               or_IN.UTF-8
pa_IN                    pa_IN.UTF-8
pa_IN.utf8               pa_IN.UTF-8
pa_PK                    pa_PK.UTF-8
pa_PK.utf8               pa_PK.UTF-8
pl                       pl_PL.ISO8859-2
pl.UTF-8                 pl_PL.UTF-8
pl_PL                    pl_PL.ISO8859-2
pl_PL.iso88592           pl_PL.ISO8859-2
pl_PL.utf8               pl_PL.UTF-8
pt                       pt_PT.ISO8859-1
pt.ISO8859-15            pt_PT.ISO8859-15
pt_BR                    pt_BR.ISO8859-1
pt_BR.8859-15            pt_BR.ISO8859-15
pt_BR.iso88591           pt_BR.ISO8859-1
pt_BR.utf8               pt_BR.UTF-8
pt_PT                    pt_PT.ISO8859-1
pt_PT.8859-15            pt_PT.ISO8859-15
pt_PT.8859-15@euro       pt_PT.ISO8859-15
pt_PT.IBM-1252           pt_PT.ANSI1252
pt_PT.ISO8859-15@euro    pt_PT.ISO8859-15
pt_PT.iso88591           pt_PT.ISO8859-1
pt_PT.utf8               pt_PT.UTF-8
pt_PT@euro               pt_PT.ISO8859-15
ro_RO                    ro_RO.ISO8859-2
ro_RO.iso88592           ro_RO.ISO8859-2
ro_RO.utf8               ro_RO.UTF-8
```

```
ru                      ru_RU.ISO8859-5
ru.UTF-8                ru_RU.UTF-8
ru.koi8-r               ru_RU.KOI8-R
ru_RU                   ru_RU.ISO8859-5
ru_RU.iso88595          ru_RU.ISO8859-5
ru_RU.koi8r             ru_RU.KOI8-R
ru_RU.utf8              ru_RU.UTF-8
ru_UA                   ru_UA.KOI8-U
ru_UA.koi8u             ru_UA.KOI8-U
ru_UA.utf8              ru_UA.UTF-8
rw_RW                   rw_RW.UTF-8
rw_RW.utf8              rw_RW.UTF-8
se_NO                   se_NO.UTF-8
se_NO.utf8              se_NO.UTF-8
sh                      bs_BA.ISO8859-2
sh_BA                   bs_BA.ISO8859-2
sh_BA.ISO8859-2@bosnia  bs_BA.ISO8859-2
sh_BA.UTF-8             bs_BA.UTF-8
sh_SP                   sh_SP.ISO8859-2
sh_YU                   sh_YU.ISO8859-2
si_LK                   si_LK.UTF-8
si_LK.utf8              si_LK.UTF-8
sk_SK                   sk_SK.ISO8859-2
sk_SK.iso88592          sk_SK.ISO8859-2
sk_SK.utf8              sk_SK.UTF-8
sl_SI                   sl_SI.ISO8859-2
sl_SI.iso88592          sl_SI.ISO8859-2
sl_SI.utf8              sl_SI.UTF-8
so_DJ                   so_DJ.ISO8859-1
so_DJ.iso88591          so_DJ.ISO8859-1
so_DJ.utf8              so_DJ.UTF-8
so_ET                   so_ET.UTF-8
so_ET.utf8              so_ET.UTF-8
so_KE                   so_KE.ISO8859-1
so_KE.iso88591          so_KE.ISO8859-1
so_KE.utf8              so_KE.UTF-8
so_SO                   so_SO.ISO8859-1
so_SO.iso88591          so_SO.ISO8859-1
so_SO.utf8              so_SO.UTF-8
sq_AL                   sq_AL.ISO8859-2
sq_AL.8859-15           sq_AL.ISO8859-15
sq_AL.iso88591          sq_AL.ISO8859-1
sq_AL.utf8              sq_AL.UTF-8
sr_CS                   sr_RS.UTF-8
sr_CS.UTF-8             sr_RS.UTF-8
sr_CS.iso88595          sr_CS.ISO8859-5
sr_ME                   sr_ME.UTF-8
sr_ME.utf8              sr_ME.UTF-8
```

```
sr_RS                   sr_RS.UTF-8
sr_RS.utf8              sr_RS.UTF-8
sr_SP                   sr_RS.ISO8859-5
sr_YU                   sr_RS.ISO8859-5
sr_YU.ISO8859-5         sr_RS.ISO8859-5
ss_ZA                   ss_ZA.UTF-8
ss_ZA.utf8              ss_ZA.UTF-8
st_ZA                   st_ZA.ISO8859-1
st_ZA.iso88591          st_ZA.ISO8859-1
st_ZA.utf8              st_ZA.UTF-8
sv                      sv_SE.ISO8859-1
sv.ISO8859-15           sv_SE.ISO8859-15
sv.UTF-8                sv_SE.UTF-8
sv_FI                   sv_FI.ISO8859-1
sv_FI.iso88591          sv_FI.ISO8859-1
sv_FI.iso885915@euro    sv_FI.ISO8859-15
sv_FI.utf8              sv_FI.UTF-8
sv_FI@euro              sv_FI.ISO8859-15
sv_SE                   sv_SE.ISO8859-1
sv_SE.8859-15           sv_SE.ISO8859-15
sv_SE.iso88591          sv_SE.ISO8859-1
sv_SE.iso885915         sv_SE.ISO8859-15
sv_SE.iso885915@euro    sv_SE.ISO8859-15
sv_SE.utf8              sv_SE.UTF-8
ta_IN                   ta_IN.UTF-8
ta_IN.utf8              ta_IN.UTF-8
te_IN                   te_IN.UTF-8
te_IN.utf8              te_IN.UTF-8
tg_TJ                   tg_TJ.KOI8-T
tg_TJ.koi8t             tg_TJ.KOI8-T
tg_TJ.utf8              tg_TJ.UTF-8
th                      th_TH.TIS620
th_TH                   th_TH.TIS620
th_TH.ISO8859-11        th_TH.TIS620
th_TH.TIS-620           th_TH.TIS620
th_TH.utf8              th_TH.UTF-8
ti_ER                   ti_ER.UTF-8
ti_ER.utf8              ti_ER.UTF-8
ti_ET                   ti_ET.UTF-8
ti_ET.utf8              ti_ET.UTF-8
tl_PH                   tl_PH.ISO8859-1
tl_PH.iso88591          tl_PH.ISO8859-1
tl_PH.utf8              tl_PH.UTF-8
tn_ZA                   tn_ZA.UTF-8
tn_ZA.utf8              tn_ZA.UTF-8
tr                      tr_TR.ISO8859-9
tr_CY                   tr_CY.ISO8859-9
tr_CY.iso88599          tr_CY.ISO8859-9
```

```
tr_CY.utf8              tr_CY.UTF-8
tr_TR                   tr_TR.ISO8859-9
tr_TR.iso88599          tr_TR.ISO8859-9
tr_TR.utf8              tr_TR.UTF-8
ts_ZA                   ts_ZA.UTF-8
ts_ZA.utf8              ts_ZA.UTF-8
tt_RU.utf8              tt_RU.UTF-8
uk_UA                   uk_UA.KOI8-U
uk_UA.koi8u             uk_UA.KOI8-U
uk_UA.utf8              uk_UA.UTF-8
ur_PK                   ur_PK.UTF-8
ur_PK.utf8              ur_PK.UTF-8
uz_UZ                   uz_UZ.ISO8859-1
uz_UZ.iso88591          uz_UZ.ISO8859-1
ve_ZA                   ve_ZA.UTF-8
ve_ZA.utf8              ve_ZA.UTF-8
vi_VN                   vi_VN.UTF-8
vi_VN.tcvn              vi_VN.TCVN5712-1
vi_VN.utf8              vi_VN.UTF-8
wa_BE                   wa_BE.ISO8859-1
wa_BE.iso88591          wa_BE.ISO8859-1
wa_BE.iso885915@euro    wa_BE.ISO8859-15
wa_BE.utf8              wa_BE.UTF-8
wa_BE@euro              wa_BE.ISO8859-15
xh_ZA                   xh_ZA.ISO8859-1
xh_ZA.iso88591          xh_ZA.ISO8859-1
xh_ZA.utf8              xh_ZA.UTF-8
yi_US                   yi_US.ANSI1255
yi_US.cp1255            yi_US.ANSI1255
yi_US.utf8              yi_US.UTF-8
zh                      zh_CN.EUC
zh.GBK                  zh_CN.GBK
zh.UTF-8                zh_CN.UTF-8
zh_CN                   zh_CN.EUC
zh_CN.IBM-eucCN         zh_CN.EUC
zh_CN.gb18030           zh_CN.GB18030
zh_CN.gb2312            zh_CN.EUC
zh_CN.gbk               zh_CN.GBK
zh_CN.utf8              zh_CN.UTF-8
zh_HK                   zh_HK.BIG5HK
zh_HK.big5hkscs         zh_HK.BIG5HK
zh_HK.utf8              zh_HK.UTF-8
zh_SG                   zh_SG.EUC
zh_SG.gb2312            zh_SG.EUC
zh_SG.gbk               zh_SG.GBK
zh_SG.utf8              zh_SG.UTF-8
zh_TW                   zh_TW.EUC
zh_TW.IBM-eucTW         zh_TW.EUC
```

```
zh_TW.big5              zh_TW.BIG5
zh_TW.euctw             zh_TW.EUC
zh_TW.utf8              zh_TW.UTF-8
zu_ZA                   zu_ZA.ISO8859-1
zu_ZA.iso88591          zu_ZA.ISO8859-1
zu_ZA.utf8              zu_ZA.UTF-8
```

2. Obsoleted Solaris locale names that are additionally checked against to find message object or message catalog files asspecified in gettext(1), catopen(3C), and gettext(3C)

   When the current locale is one of the listed canonical locales and there is no matching message object or message catalog file for the current running program to open with using the current locale name, the messaging functions additionally check on the existence of the message object or the message catalog file to open by utilizing the additional locale names shown at below as aliases:

```
Canonical Locale Name    Additional Locale Names Checked
---------------------    -------------------------------
ar_EG.ISO8859-6          ar
bg_BG.ISO8859-5          bg_BG
bs_BA.ISO8859-2          sh, sh_BA, sh_BA.ISO8859-2@bosnia
bs_BA.UTF-8              sh_BA.UTF-8
ca_ES.ISO8859-1          ca, ca_ES
ca_ES.ISO8859-15         ca_ES.ISO8859-15@euro
cs_CZ.ISO8859-2          cs, cs_CZ
da_DK.ISO8859-1          da, da_DK
da_DK.ISO8859-15         da.ISO8859-15
de_AT.ISO8859-1          de_AT
de_AT.ISO8859-15         de_AT.ISO8859-15@euro
de_CH.ISO8859-1          de_CH
de_DE.ISO8859-1          de, de_DE
de_DE.ISO8859-15         de.ISO8859-15, de_DE.ISO8859-15@euro
de_DE.UTF-8              de.UTF-8, de_DE.UTF-8@euro
el_CY.UTF-8              el.UTF-8
el_GR.ISO8859-7          el, el.sun_eu_greek, el_GR,
                         el_GR.ISO8859-7@euro
en_AU.ISO8859-1          en_AU
en_CA.ISO8859-1          en_CA
en_GB.ISO8859-1          en_GB
en_IE.ISO8859-1          en_IE
en_IE.ISO8859-15         en_IE.ISO8859-15@euro
en_NZ.ISO8859-1          en_NZ
en_US.ISO8859-1          en_US
es_AR.ISO8859-1          es_AR
es_BO.ISO8859-1          es_BO
es_CL.ISO8859-1          es_CL
es_CO.ISO8859-1          es_CO
es_CR.ISO8859-1          es_CR
```

```
es_EC.ISO8859-1          es_EC
es_ES.ISO8859-1          es, es_ES
es_ES.ISO8859-15         es.ISO8859-15, es_ES.ISO8859-15@euro
es_ES.UTF-8              es.UTF-8, es_ES.UTF-8@euro
es_GT.ISO8859-1          es_GT
es_MX.ISO8859-1          es_MX
es_NI.ISO8859-1          es_NI
es_PA.ISO8859-1          es_PA
es_PE.ISO8859-1          es_PE
es_PY.ISO8859-1          es_PY
es_SV.ISO8859-1          es_SV
es_UY.ISO8859-1          es_UY
es_VE.ISO8859-1          es_VE
et_EE.ISO8859-15         et, et_EE
fi_FI.ISO8859-1          fi, fi_FI
fi_FI.ISO8859-15         fi.ISO8859-15, fi_FI.ISO8859-15@euro
fr_BE.ISO8859-1          fr_BE
fr_BE.ISO8859-15         fr_BE.ISO8859-15@euro
fr_BE.UTF-8              fr_BE.UTF-8@euro
fr_CA.ISO8859-1          fr_CA
fr_CH.ISO8859-1          fr_CH
fr_FR.ISO8859-1          fr, fr_FR
fr_FR.ISO8859-15         fr.ISO8859-15, fr_FR.ISO8859-15@euro
fr_FR.UTF-8              fr.UTF-8, fr_FR.UTF-8@euro
he_IL.ISO8859-8          he, he_IL
hr_HR.ISO8859-2          hr_HR
hu_HU.ISO8859-2          hu, hu_HU
is_IS.ISO8859-1          is_IS
it_IT.ISO8859-1          it, it_IT
it_IT.ISO8859-15         it.ISO8859-15, it_IT.ISO8859-15@euro
it_IT.UTF-8              it.UTF-8, it_IT.UTF-8@euro
ja_JP.eucJP              ja
ko_KR.EUC                ko
ko_KR.UTF-8              ko.UTF-8
lt_LT.ISO8859-13         lt, lt_LT
lv_LV.ISO8859-13         lv, lv_LV
mk_MK.ISO8859-5          mk_MK
nb_NO.ISO8859-1          no, no_NO, no_NO.ISO8859-1@bokmal
nl_BE.ISO8859-1          nl_BE
nl_BE.ISO8859-15         nl_BE.ISO8859-15@euro
nl_NL.ISO8859-1          nl, nl_NL
nl_NL.ISO8859-15         nl.ISO8859-15, nl_NL.ISO8859-15@euro
nn_NO.ISO8859-1          no_NO.ISO8859-1@nynorsk, no_NY
pl_PL.ISO8859-2          pl, pl_PL
pl_PL.UTF-8              pl.UTF-8
pt_BR.ISO8859-1          pt_BR
pt_PT.ISO8859-1          pt, pt_PT
pt_PT.ISO8859-15         pt.ISO8859-15, pt_PT.ISO8859-15@euro
```

```
ro_RO.ISO8859-2          ro_RO
ru_RU.ISO8859-5          ru, ru_RU
ru_RU.KOI8-R             ru.koi8-r
ru_RU.UTF-8              ru.UTF-8
sk_SK.ISO8859-2          sk_SK
sl_SI.ISO8859-2          sl_SI
sq_AL.ISO8859-2          sq_AL
sr_ME.ISO8859-5          sr_SP, sr_YU, sr_YU.ISO8859-5
sr_ME.UTF-8              sr_CS, sr_CS.UTF-8
sr_RS.ISO8859-5          sr_SP, sr_YU, sr_YU.ISO8859-5
sr_RS.UTF-8              sr_CS, sr_CS.UTF-8
sv_SE.ISO8859-1          sv, sv_SE
sv_SE.ISO8859-15         sv.ISO8859-15
sv_SE.UTF-8              sv.UTF-8
th_TH.TIS620             th, th_TH, th_TH.ISO8859-11
tr_TR.ISO8859-9          tr, tr_TR
zh_CN.EUC                zh
zh_CN.GBK                zh.GBK
zh_CN.UTF-8              zh.UTF-8
zh_TW.EUC                zh_TW
```

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed

関連項目

gettext(1), catopen(3C), gettext(3C), setlocale(3C), attributes(5), environ(5)

名前

man – macros to format Reference Manual pages

形式

`nroff -man` *filename*`...`

`troff -man` *filename*`...`

機能説明

These macros are used to lay out the reference pages in this manual. If *filename* contains format input for a preprocessor, the commands shown above must be piped through the appropriate preprocessor. This is handled automatically by the `man(1)` command. See the `Conventions` section.

Any text argument *t* may be zero to six words. Quotes may be used to include SPACE characters in a "word". If *text* is empty, the special treatment is applied to the next input line with text to be printed. In this way `.I` may be used to italicize a whole line, or `.SB` may be used to make small bold letters.

A prevailing indent distance is remembered between successive indented paragraphs, and is reset to default value upon reaching a non-indented paragraph. Default units for indents *i* are ens.

Type font and size are reset to default values before each paragraph, and after processing font and size setting macros.

These strings are predefined by `-man`:

`\*R` '®', '(Reg)' in `nroff`.

`\*S` Change to default type size.

Requests

* n.t.l. = next text line; p.i. = prevailing indent

Request	*Cause Break*	*If no Argument*	*Explanation*
`.B`*t*	no	*t*=n.t.l.*	Text is in bold font.
`.BI`*t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating bold and italic.
`.BR`*t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating bold and roman.
`.DT`	no	.5i 1i...	Restore default tabs.
`.HP`*i*	yes	*i*=p.i.*	Begin paragraph with hanging indent. Set prevailing indent to *i*.
`.I`*t*	no	*t*=n.t.l.	Text is italic.
`.IB`*t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating italic and bold.
`.IP`*x i*	yes	*x*=""	Same as `.TP` with tag *x*.
`.IR`*t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating italic and roman.

Request	*Cause Break*	*If no Argument*	*Explanation*
.IX*t*	no	-	Index macro, for SunSoft internal use.
.LP	yes	-	Begin left-aligned paragraph. Set prevailing indent to .5i.
.P	yes	-	Same as .LP.
.PD*d*	no	*d*=.4v	Set vertical distance between paragraphs.
.PP	yes	-	Same as .LP.
.RE	yes	-	End of relative indent. Restores prevailing indent.
.RB*t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating roman and bold.
.RI*t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating roman and italic.
.RS*i*	yes	*i*=p.i.	Start relative indent, increase indent by *i*. Sets prevailing indent to .5i for nested indents.
.SB*t*	no	-	Reduce size of text by 1 point, make text bold.
.SH*t*	yes	-	Section Heading.
.SM*t*	no	*t*=n.t.l.	Reduce size of text by 1 point.
.SS*t*	yes	*t*=n.t.l.	Section Subheading.
.TH*n s d f m*	yes	-	Begin reference page *n*, of of section *s*; *d* is the date of the most recent change. If present, *f* is the left page footer; *m* is the main page (center) header. Sets prevailing indent and tabs to .5i.
.TP*i*	yes	*i*=p.i.	Begin indented paragraph, with the tag given on the next text line. Set prevailing indent to *i*.
.TX*t p*	no	-	Resolve the title abbreviation *t*; join to punctuation mark (or text) *p*.

Conventions

When formatting a manual page, man examines the first line to determine whether it requires special processing. For example a first line consisting of:

```
'\" t
```

indicates that the manual page must be run through the tbl(1) preprocessor.

A typical manual page for a command or function is laid out as follows:

.TH *title*[1-9]
The name of the command or function, which serves as the title of the manual page. This is followed by the number of the section in which it appears.

.SH NAME
The name, or list of names, by which the command is called, followed by a dash and then a one-line summary of the action performed. All in roman font, this section contains no `troff(1)` commands or escapes, and no macro requests.

.SH SYNOPSIS

Commands:
The syntax of the command and its arguments, as typed on the command line. When in boldface, a word must be typed exactly as printed. When in italics, a word can be replaced with an argument that you supply. References to bold or italicized items are not capitalized in other sections, even when they begin a sentence.

Syntactic symbols appear in roman face:

[ ]
An argument, when surrounded by brackets is optional.

|
Arguments separated by a vertical bar are exclusive. You can supply only one item from such a list.

. . .
Arguments followed by an ellipsis can be repeated. When an ellipsis follows a bracketed set, the expression within the brackets can be repeated.

Functions:
If required, the data declaration, or `#include` directive, is shown first, followed by the function declaration. Otherwise, the function declaration is shown.

.SH DESCRIPTION
A narrative overview of the command or function's external behavior. This includes how it interacts with files or data, and how it handles the standard input, standard output and standard error. Internals and implementation details are normally omitted. This section attempts to provide a succinct overview in answer to the question, *what does it do?*

Literal text from the synopsis appears in constant width, as do literal filenames and references to items that appear elsewhere in the reference manuals. Arguments are italicized.

If a command interprets either subcommands or an input grammar, its command interface or input grammar is normally described in a `USAGE` section, which follows the `OPTIONS` section. The `DESCRIPTION` section only describes the behavior of the command itself, not that of subcommands.

.SH OPTIONS
The list of options along with a description of how each affects the command's operation.

.SH RETURN VALUES
A list of the values the library routine returns to the calling program and the conditions that cause these values to be returned.

.SH EXIT STATUS
A list of the values the utility returns to the calling program or shell, and the conditions that cause these values to be returned.

.SH FILES
A list of files associated with the command or function.

.SH SEE ALSO
A comma-separated list of related manual pages, followed by references to other published materials.

.SH DIAGNOSTICS
A list of diagnostic messages and an explanation of each.

.SH BUGS
A description of limitations, known defects, and possible problems associated with the command or function.

SMF service `svc:/application/man-index` is used to generate the index files for `-f`, `-k`, and `-K` options of man(1). The SMF service is online by default. The index files for the options are generated during package/system installation if the FMRI is specified as an `restart_fmri` actuator. Any man page delivering packages that use the FMRI as `restart_fmri` actuator for its file actions must deliver a unique symbolic link to their man page directory at the following directory:

```
/usr/share/man/index.d/
```

The unique symbolic link names should be of package FMRI without scheme, slash character (`/`) replaced with "`%2F`", and optionally have some or all sequences of numbers of version. For instance, for the following package FMRI:

```
pkg://opensolaris.org/library/libc@5.11,5.11-0.75:20071001T163427
```

could supply one of the symbolic link names such as:

```
opensolaris.org%2Flibrary%2Flibc
opensolaris.org%2Flibrary%2Flibc@5.11
```

The method of the SMF service, upon requested to generate index files using `restart_fmri` during package install, checks the symbolic links. Based on the newness of the installed files, index files are generated only as necessary.

Unless used in an IPS package as `restart_fmri`, by default, it generates index files in `/usr/share/man/` and `/usr/gnu/share/man/`. When used in and IPS package as `restart_fmri`, it generates and places index files in the same directory as the man page source directory of the package.

ファイル

`/usr/share/man/index.d/`	Directory to save symbolic links to man page directories needing index files for `-f`, `-k`, and `-K` queries.
`/usr/share/man/man_index/*`	Table of Contents and keyword database. Generated files include: ■ `/usr/share/man/man_index/man.idx` ■ `/usr/share/man/man_index/man.dic` ■ `/usr/share/man/man_index/man.frq` ■ `/usr/share/man/man_index/man.pos`
`/usr/share/lib/tmac/an`	

関連項目

`man(1)`, `nroff(1)`, `troff(1)`, `whatis(1)`

Dale Dougherty and Tim O'Reilly, Unix Text Processing

名前

mansun – macros to format Reference Manual pages

形式

`nroff -mansun` *filename*`...`

`troff -mansun` *filename*`...`

機能説明

These macros are used to lay out the reference pages in this manual. Note: if *filename* contains format input for a preprocessor, the commands shown above must be piped through the appropriate preprocessor. This is handled automatically by `man(1)`. See the "Conventions" section.

Any text argument *t* may be zero to six words. Quotes may be used to include SPACE characters in a "word". If *text* is empty, the special treatment is applied to the next input line with text to be printed. In this way `.I` may be used to italicize a whole line, or `.SB` may be used to make small bold letters.

A prevailing indent distance is remembered between successive indented paragraphs, and is reset to default value upon reaching a non-indented paragraph. Default units for indents *i* are ens.

Type font and size are reset to default values before each paragraph, and after processing font and size setting macros.

These strings are predefined by `-mansun`:

`\*R` '®', '(Reg)' in `nroff`.

`\*S` Change to default type size.

Requests

* n.t.l. = next text line; p.i. = prevailing indent

Request	*Cause Break*	*If no Argument*	*Explanation*
`.B` *t*	no	*t*=n.t.l.*	Text is in bold font.
`.BI` *t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating bold and italic.
`.BR` *t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating bold and Roman.
`.DT`	no	.5i 1i...	Restore default tabs.
`.HP` *i*	yes	*i*=p.i.*	Begin paragraph with hanging indent. Set prevailing indent to *i*.
`.I` *t*	no	*t*=n.t.l.	Text is italic.
`.IB` *t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating italic and bold.
`.IP` *x i*	yes	*x*=""	Same as `.TP` with tag *x*.

Request	*Cause*	*If no*	*Explanation*
	Break	*Argument*	
`.IR` *t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating italic and Roman.
`.IX` *t*	no	-	Index macro, for SunSoft internal use.
`.LP`	yes	-	Begin left-aligned paragraph. Set prevailing indent to .5i.
`.P`	yes	-	Same as `.LP`.
`.PD` *d*	no	*d*=.4v	Set vertical distance between paragraphs.
`.PP`	yes	-	Same as `.LP`.
`.RE`	yes	-	End of relative indent. Restores prevailing indent.
`.RB` *t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating Roman and bold.
`.RI` *t*	no	*t*=n.t.l.	Join words, alternating Roman and italic.
`.RS` *i*	yes	*i*=p.i.	Start relative indent, increase indent by *i*. Sets prevailing indent to .5i for nested indents.
`.SB` *t*	no	-	Reduce size of text by 1 point, make text bold.
`.SH` *t*	yes	-	Section Heading.
`.SM` *t*	no	*t*=n.t.l.	Reduce size of text by 1 point.
`.SS` *t*	yes	*t*=n.t.l.	Section Subheading.
`.TH` *n s d f m*	yes	-	Begin reference page *n*, of of section *s*; *d* is the date of the most recent change. If present, *f* is the left page footer; *m* is the main page (center) header. Sets prevailing indent and tabs to .5i.
`.TP` *i*	yes	*i*=p.i.	Begin indented paragraph, with the tag given on the next text line. Set prevailing indent to *i*.
`.TX` *t p*	no	-	Resolve the title abbreviation *t*; join to punctuation mark (or text) *p*.

Conventions

When formatting a manual page, `mansun` examines the first line to determine whether it requires special processing. For example a first line consisting of:

```
'\" t
```

indicates that the manual page must be run through the `tbl(1)` preprocessor.

A typical manual page for a command or function is laid out as follows:

.TH *title* [1-8] The name of the command or function, which serves as the title of the manual page. This is followed by the number of the section in which it appears.

.SH NAME The name, or list of names, by which the command is called, followed by a dash and then a one-line summary of the action performed. All in Roman font, this section contains no `troff(1)` commands or escapes, and no macro requests. It is used to generate the `windex` database, which is used by the `whatis(1)` command.

.SH SYNOPSIS

Commands: The syntax of the command and its arguments, as typed on the command line. When in boldface, a word must be typed exactly as printed. When in italics, a word can be replaced with an argument that you supply. References to bold or italicized items are not capitalized in other sections, even when they begin a sentence.

Syntactic symbols appear in Roman face:

[ ] An argument, when surrounded by brackets is optional.

| Arguments separated by a vertical bar are exclusive. You can supply only one item from such a list.

. . . Arguments followed by an ellipsis can be repeated. When an ellipsis follows a bracketed set, the expression within the brackets can be repeated.

Functions: If required, the data declaration, or `#include` directive, is shown first, followed by the function declaration. Otherwise, the function declaration is shown.

.SH DESCRIPTION A narrative overview of the command or function's external behavior. This includes how it interacts with files or data, and how it handles the standard input, standard output and standard error. Internals and implementation details are normally omitted. This section attempts to provide a succinct overview in answer to the question, "what does it do?"

Literal text from the synopsis appears in constant width, as do literal filenames and references to items that appear elsewhere in the reference manuals. Arguments are italicized.

If a command interprets either subcommands or an input grammar, its command interface or input grammar is normally described in a `USAGE`

	section, which follows the OPTIONS section. The DESCRIPTION section only describes the behavior of the command itself, not that of subcommands.
.SH OPTIONS	The list of options along with a description of how each affects the command's operation.
.SH FILES	A list of files associated with the command or function.
.SH SEE ALSO	A comma-separated list of related manual pages, followed by references to other published materials.
.SH DIAGNOSTICS	A list of diagnostic messages and an explanation of each.
.SH BUGS	A description of limitations, known defects, and possible problems associated with the command or function.

ファイル

/usr/share/lib/tmac/ansun

/usr/share/man/windex

関連項目

man(1), nroff(1), troff(1), whatis(1)

Dale Dougherty and Tim O'Reilly, Unix Text Processing

名前

me – macros for formatting papers

形式

`nroff -me [`*options*`] `*filename*`...`

`troff -me [`*options*`] `*filename*`...`

機能説明

This package of `nroff` and `troff` macro definitions provides a canned formatting facility for technical papers in various formats. When producing 2-column output on a terminal, filter the output through `col(1)`.

The macro requests are defined below. Many `nroff` and `troff` requests are unsafe in conjunction with this package, however, these requests may be used with impunity after the first `.pp`:

.bp	begin new page
.br	break output line here
.sp *n*	insert *n* spacing lines
.ls *n*	(line spacing) *n*=1 single, *n*=2 double space
.na	no alignment of right margin
.ce *n*	center next *n* lines
.ul *n*	underline next *n* lines
.sz +*n*	add *n* to point size

Output of the `eqn(1)`, `neqn(1)`, `refer(1)`, and `tbl(1)` preprocessors for equations and tables is acceptable as input.

Requests

In the following list, “initialization” refers to the first `.pp`, `.lp`, `.ip`, `.np`, `.sh`, or `.uh` macro. This list is incomplete.

Request	*Initial Value*	*Cause Break*	*Explanation*
`.(c`	-	yes	Begin centered block.
`.(d`	-	no	Begin delayed text.
`.(f`	-	no	Begin footnote.
`.(l`	-	yes	Begin list.
`.(q`	-	yes	Begin major quote.
`.(x`*x*	-	no	Begin indexed item in index *x*.
`.(z`	-	no	Begin floating keep.

Request	*Initial Value*	*Cause Break*	*Explanation*
.)c	-	yes	End centered block.
.)d	-	yes	End delayed text.
.)f	-	yes	End footnote.
.)l	-	yes	End list.
.)q	-	yes	End major quote.
.)x	-	yes	End index item.
.)z	-	yes	End floating keep.
.++ *m H*	-	no	Define paper section. *m* defines the part of the paper, and can be C (chapter), A (appendix), P (preliminary, for instance, abstract, table of contents, etc.), B (bibliography), RC (chapters renumbered from page one each chapter), or RA (appendix renumbered from page one).
.+c *T*	-	yes	Begin chapter (or appendix, etc., as set by .++). *T* is the chapter title.
.1c	1	yes	One column format on a new page.
.2c	1	yes	Two column format.
.EN	-	yes	Space after equation produced by eqn or neqn.
.EQ *x y*	-	yes	Precede equation; break out and add space. Equation number is *y*. The optional argument *x* may be *I* to indent equation (default), *L* to left-adjust the equation, or

Request	*Initial Value*	*Cause Break*	*Explanation*
			C to center the equation.
.GE	-	yes	End *gremlin* picture.
.GS	-	yes	Begin *gremlin* picture.
.PE	-	yes	End `pic` picture.
.PS	-	yes	Begin `pic` picture.
.TE	-	yes	End table.
.TH	-	yes	End heading section of table.
.TS *x*	-	yes	Begin table; if *x* is *H* table has repeated heading.
.ac *A N*	-	no	Set up for ACM style output. *A* is the Author's name(s), *N* is the total number of pages. Must be given before the first initialization.
.b *x*	no	no	Print *x* in boldface; if no argument switch to boldface.
.ba +*n*	0	yes	Augments the base indent by *n*. This indent is used to set the indent on regular text (like paragraphs).
.bc	no	yes	Begin new column.
.bi *x*	no	no	Print *x* in bold italics (nofill only).
.bu	-	yes	Begin bulleted paragraph.
.bx *x*	no	no	Print *x* in a box (nofill only).
.ef *'x'y'z*	"""	no	Set even footer to *x y z*.
.eh *'x'y'z*	"""	no	Set even header to *x y z*.
.fo *'x'y'z*	"""	no	Set footer to *x y z*.
.hx	-	no	Suppress headers and footers on

Request	*Initial Value*	*Cause Break*	*Explanation*
			next page.
`.he` *'x'y'z*	""""	no	Set header to *x y z*.
`.hl`	-	yes	Draw a horizontal line.
`.i` *x*	no	no	Italicize *x*; if *x* missing, italic text follows.
`.ip` *x y*	no	yes	Start indented paragraph, with hanging tag *x*. Indentation is *y* ens (default 5).
`.lp`	yes	yes	Start left-blocked paragraph.
`.lo`	-	no	Read in a file of local macros of the form .**x*. Must be given before initialization.
`.np`	1	yes	Start numbered paragraph.
`.of` *'x'y'z*	""""	no	Set odd footer to x y z.
`.oh` *'x'y'z*	""""	no	Set odd header to x y z.
`.pd`	-	yes	Print delayed text.
`.pp`	no	yes	Begin paragraph. First line indented.
`.r`	yes	no	Roman text follows.
`.re`	-	no	Reset tabs to default values.
`.sc`	no	no	Read in a file of special characters and diacritical marks. Must be given before initialization.
`.sh` *n x*	-	yes	Section head follows, font automatically bold. *n* is level of section, *x* is title of section.
`.sk`	no	no	Leave the next page blank. Only one page is remembered ahead.

Request	*Initial Value*	*Cause Break*	*Explanation*
`.sm` *x*	-	no	Set *x* in a smaller pointsize.
`.sz` +*n*	10p	no	Augment the point size by *n* points.
`.th`	no	no	Produce the paper in thesis format. Must be given before initialization.
`.tp`	no	yes	Begin title page.
`.u` *x*	-	no	Underline argument (even in `troff`). (Nofill only).
`.uh`	-	yes	Like `.sh` but unnumbered.
`.xp` *x*	-	no	Print index *x*.

ファイル

`/usr/share/lib/tmac/e`

`/usr/share/lib/tmac/*.me`

関連項目

`col`(1), `eqn`(1), `nroff`(1), `refer`(1), `tbl`(1), `troff`(1)

名前

mech_spnego – Simple and Protected GSS-API Negotiation Mechanism

形式

`/usr/lib/gss/mech_spnego.so.1`

機能説明

The SPNEGO security mechanism for GSS-API allows GSS-API applications to negotiate the actual security mechanism to be used in the GSS-API session. `mech_spnego.so.1` is a shared object module that is dynamically opened by applications that specify the SPNEGO Object Identifier (OID) in calls to the GSS-API functions (see `libgss(3LIB)`).

SPNEGO is described by IETF RFC 2478 and is intended to be used in environments where multiple GSS-API mechanisms are available to the client or server and neither side knows what mechanisms are supported by the other.

When SPNEGO is used, it selects the list of mechanisms to advertise by reading the GSS mechanism configuration file, `/etc/gss/mech` (see `mech(4)`), and by listing all active mechanisms except for itself.

オプション

SPNEGO may be configured to function in two ways. The first way is to interoperate with Microsoft SSPI clients and servers that use the Microsoft "`Negotiate`" method, which is also based on SPNEGO. The Microsoft "`Negotiate`" mechanism does not strictly follow the IETF RFC. Therefore, use special handling in order to enable full interoperability. In order to interoperate, place option "`[ msinterop ]`" at the end of the SPNEGO line in `/etc/gss/mech`.

This is an example (from `/etc/gss/mech`):

```
spnego    1.3.6.1.5.5.2    mech_spnego.so    [ msinterop ]
```

Without the "`[ msinterop ]`" option, `mech_spnego` will follow the strict IETF RFC 2478 specification and will not be able to negotiate with Microsoft applications that try to use the SSPI "`Negotiate`" mechanism.

Interfaces

`mech_spnego.so.1` has no public interfaces. It is only activated and used through the GSS-API interface provided by `libgss.so.1` (see `libgss(3LIB)`).

ファイル

`/usr/lib/gss/mech_spnego.so.1`	shared object file
`/usr/lib/sparcv9/gss/mech_spnego.so.1`	SPARC 64-bit shared object file
`/usr/lib/amd64/gss/mech_spnego.so.1`	x86 64-bit shared object file

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	SUWNspnego
MT Level	Safe

関連項目 Intro(3), libgss(3LIB), mech(4), attributes(5)

『Oracle Solaris 11 セキュリティーサービス開発ガイド』

名前

mm – text formatting (memorandum) macros

形式

```
nroff -mm [options] filename...
troff -mm [options] filename...
```

機能説明

This package of nroff(1) and troff(1) macro definitions provides a formatting facility for various styles of articles, theses, and books. When producing 2-column output on a terminal or lineprinter, or when reverse line motions are needed, filter the output through col(1). All external -mm macros are defined below.

Note: this -mm macro package is an extended version written at Berkeley and is a superset of the standard -mm macro packages as supplied by Bell Labs. Some of the Bell Labs macros have been removed; for instance, it is assumed that the user has little interest in producing headers stating that the memo was generated at Whippany Labs.

Many nroff and troff requests are unsafe in conjunction with this package. However, the first four requests below may be used with impunity after initialization, and the last two may be used even before initialization:

.bp	begin new page
.br	break output line
.sp*n*	insert n spacing lines
.ce*n*	center next n lines
.ls*n*	line spacing: *n*=1 single, *n*=2 double space
.na	no alignment of right margin

Font and point size changes with \f and \s are also allowed; for example, \fIword\fR will italicize *word*. Output of the tbl(1), eqn(1) and refer(1) preprocessors for equations, tables, and references is acceptable as input.

Requests

Here is a table of macros.

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.1C	on	y,y	one column format on a new page
.2C [*l*]	–	y,y	two column format *l*=line length
.AE	–	y	end abstract
.AL [*t*] [*i*] [*s*]	*t*=1;*i*=.Li;*s*=0	y	Start automatic list type *t*=[1,A,a,I,i] 1=arabic numbers; A=uppercase letters a=lowercase letters; I=uppercase Roman numerals; i=lowercase Roman numerals indentation *i*; separation *s*

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.AS *m* [*n*]	*n*=0	y	begin abstract
.AU	–	y	author's name
.AV *x*	–	y	signature and date line of verifier *x*
.B *x*	–	n	embolden *x*; if no *x*, switch to boldface
.BE	–	y	end block text
.BI *x y*	–	n	embolden *x* and underline *y*
.BL	–	y	bullet list
.BR *x y*	–	n	embolden *x* and use Roman font for *y*
.BS	–	n	start block text
.CN	–	y	same as .DE (nroff)
.CS	–	y	cover sheet
.CW	–	n	same as .DS I (nroff)
.DE	–	y	end display
.DF [*p*] [*f*] [*rp*]	*p*=L;*f*=N	y	start floating display; position *p*=[L,C,CB] L=left; I=indent; C=center; CB=center block fill *f*=[N,Y]; right position *rp* (fill only)
.DL [*i*] [*s*]	–	y	start dash list
.DS [*p*] [*f*] [*rp*]	*p*=L;*f*=N	y	begin static display (see .DF for argument descriptions)
.EC *x* [*n*]	*n*=1	y	equation title; equation *x*; number *n*
.EF *x*	–	n	even footer appears at the bottom of even-numbered pages; *x*="*l'c'r*" *l*=left; *c*=center; *r*=right
.EH *x*	–	n	even header appears at the top of even-numbered pages; *x*="*l'c'r*" *l*=left; *c*=center; *r*=right
.EN	–	y	end displayed equation produced by eqn
.EQ	–	y	break out equation produced by eqn
.EX *x* [*n*]	*n*=1	y	exhibit title; exhibit *x*
			number *n*

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.FD [*f*] [*r*]	*f*=0;*r*=1	n	set footnote style format *f*=[0-11]; renumber *r*=[0,1]
.FE	–	y	end footnote
.FG *x* [*n*]	*n*=1	y	figure title; figure *x*; number *n*
.FS	–	n	start footnote
.H *l* [*t*]	–	y	produce numbered heading level *l*=[1-7]; title *t*
.HU *t*	–	y	produce unnumbered heading; title *t*
.I *x*	–	n	underline *x*
.IB *x y*	–	n	underline *x* and embolden *y*
.IR *x y*	–	n	underline *x* and use Roman font on *y*
.LE [*s*]	*s*=0	y	end list; separation *s*
.LI [*m*] [*p*]	–	y	start new list item; mark *m*
			prefix *p* (mark only)
.ML *m* [*i*] [*s*]	*s*=0	y	start marked list; mark *m* indentation *i*; separation *s*=[0,1]
.MT *x*		y	memo title; title *x*
.ND *x*		n	no date in page footer; *x* is date on cover
.NE	–	y	end block text
.NS	–	y	start block text
.OF *x*	–	n	odd footer appears at the bottom of odd-numbered pages; *x*="*l*'*c*'*r*" *l*=left; *c*=center; *r*=right
.OF *x*	–	n	odd header appears at the top of odd-numbered pages; *x*="*l*'*c*'*r*" *l*=left; *c*=center; *r*=right
.OP	–	y	skip to the top of an odd-number page
.P [*t*]	*t*=0	y,y	begin paragraph; *t*=[0,1] 0=justified; 1=indented
.PF *x*	–	n	page footer appears at the bottom of every page; *x*="*l*'*c*'*r*" *l*=left; *c*=center; *r*=right

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.PH *x*	–	n	page header appears at the top of every page; *x*="*l*' *c*' *r*" *l*=left; *c*=center; *r*=right
.R	on	n	return to Roman font
.RB *x y*	–	n	use Roman on *x* and embolden *y*
.RI *x y*	–	n	use Roman on *x* and underline *y*
.RP *x*	-	y,y	released paper format ? *x*=no stops title on first
.RS	5n	y,y	right shift: start level of relative indentation
.S *m n*	–	n	set character point size & vertical space character point size *m*; vertical space *n*
.SA *x*	*x*=1	n	justification; *x*=[0,1]
.SK *x*	–	y	skip *x* pages
.SM	–	n	smaller; decrease point size by 2
.SP [*x*]	–	y	leave *x* blank lines
.TB *x* [*n*]	*n*=1	y	table title; table *x*; number *n*
.TC	–	y	print table of contents (put at end of input file)
.TE	–	y	end of table processed by tbl
.TH	–	y	end multi-page header of table
.TL	–	n	title in boldface and two points larger
.TM	–	n	UC Berkeley thesis mode
.TP *i*	y	y	*i*=p.i. Begin indented paragraph, with the tag given on the next text line. Set prevailing indent to *i*.
.TS *x*	–	y,y	begin table; if *x*=H table has multi-page header
.TY	–	y	display centered title CONTENTS
.VL *i* [*m*] [*s*]	*m*=0;*s*=0	y	start variable-item list; indentation *i* mark-indentation *m*; separation *s*

Registers

Formatting distances can be controlled in -mm by means of built-in number registers. For example, this sets the line length to 6.5 inches:

```
.nr  LL  6.5i
```

Here is a table of number registers and their default values:

Name	Register Controls	Takes Effect	Default
Cl	contents level	table of contents	2
De	display eject	display	0
Df	display floating	display	5
Ds	display spacing	display	1v
Hb	heading break	heading	2
Hc	heading centering	heading	0
Hi	heading indent	heading	1
Hi	heading spacing	heading	1
Hu	heading unnumbered	heading	2
Li	list indentation	list	6 (nroff) 5 (troff)
Ls	list spacing	list	6
Pi	paragraph indent	paragraph	5
Pt	paragraph type	paragraph	1
Si	static indent	display	5 (nroff) 3 (troff)

When resetting these values, make sure to specify the appropriate units. Setting the line length to 7, for example, will result in output with one character per line. Setting Pi to 0 suppresses paragraph indentation

Here is a list of string registers available in -mm; they may be used anywhere in the text:

Name	String's Function
*Q	quote (" in nroff, “ in troff)
*U	unquote (" in nroff, ’’ in troff)
*–	dash (-- in nroff, — in troff)
*(MO	month (month of the year)

Name	String's Function
*(DY	day (current date)
**	automatically numbered footnote
*'	acute accent (before letter)
*`	grave accent (before letter)
*^	circumflex (before letter)
*,	cedilla (before letter)
*:	umlaut (before letter)
*~	tilde (before letter)
\(BU	bullet item
\(DT	date (*month day*, *yr*)
\(EM	em dash
\(Lf	LIST OF FIGURES title
\(Lt	LIST OF TABLES title
\(Lx	LIST OF EXHIBITS title
\(Le	LIST OF EQUATIONS title
\(Rp	REFERENCES title
\(Tm	trademark character (TM)

When using the extended accent mark definitions available with .AM, these strings should come after, rather than before, the letter to be accented.

ファイル

/usr/share/lib/tmac/m

/usr/share/lib/tmac/mm.[nt] nroff and troff definitions of mm.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	text/doctools

関連項目

col(1), eqn(1), nroff(1), refer(1), tbl(1), troff(1), attributes(5)

使用上の留意点 Floating keeps and regular keeps are diverted to the same space, so they cannot be mixed together with predictable results.

名前

ms – text formatting macros

形式

`nroff -ms [`*options*`] `*filename*`...`

`troff -ms [`*options*`] `*filename*`...`

機能説明

This package of `nroff(1)` and `troff(1)` macro definitions provides a formatting facility for various styles of articles, theses, and books. When producing 2-column output on a terminal or lineprinter, or when reverse line motions are needed, filter the output through `col(1)`. All external `-ms` macros are defined below.

Note: this `-ms` macro package is an extended version written at Berkeley and is a superset of the standard `-ms` macro packages as supplied by Bell Labs. Some of the Bell Labs macros have been removed; for instance, it is assumed that the user has little interest in producing headers stating that the memo was generated at Whippany Labs.

Many `nroff` and `troff` requests are unsafe in conjunction with this package. However, the first four requests below may be used with impunity after initialization, and the last two may be used even before initialization:

`.bp` begin new page

`.br` break output line

`.sp` *n* insert n spacing lines

`.ce` *n* center next n lines

`.ls` *n* line spacing: *n*=1 single, *n*=2 double space

`.na` no alignment of right margin

Font and point size changes with `\f` and `\s` are also allowed; for example, `\fIword\fR` will italicize *word*. Output of the `tbl(1)`, `eqn(1)` and `refer(1)` preprocessors for equations, tables, and references is acceptable as input.

Requests

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
`.AB` *x*	–	y	begin abstract; if *x*=no do not label abstract
`.AE`	–	y	end abstract
`.AI`	–	y	author's institution
`.AM`	–	n	better accent mark definitions
`.AU`	–	y	author's name
`.B` *x*	–	n	embolden *x*; if no *x*, switch to boldface
`.B1`	–	y	begin text to be enclosed in a box

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.B2	–	y	end boxed text and print it
.BT	date	n	bottom title, printed at foot of page
.BX *x*	–	n	print word *x* in a box
.CM	if t	n	cut mark between pages
.CT	–	y,y	chapter title: page number moved to CF (TM only)
.DA *x*	if n	n	force date *x* at bottom of page; today if no *x*
.DE	–	y	end display (unfilled text) of any kind
.DS *x y*	I	y	begin display with keep; *x*=I, L, C, B; *y*=indent
.ID *y*	8n,.5i	y	indented display with no keep; *y*=indent
.LD	–	y	left display with no keep
.CD	–	y	centered display with no keep
.BD	–	y	block display; center entire block
.EF *x*	–	n	even page footer *x* (3 part as for .tl)
.EH *x*	–	n	even page header *x* (3 part as for .tl)
.EN	–	y	end displayed equation produced by eqn
.EQ *x y*	–	y	break out equation; *x*=L,I,C; *y*=equation number
.FE	–	n	end footnote to be placed at bottom of page
.FP	–	n	numbered footnote paragraph; may be redefined
.FS *x*	–	n	start footnote; *x* is optional footnote label
.HD	undef	n	optional page header below header margin
.I *x*	–	n	italicize *x*; if no *x*, switch to italics
.IP *x y*	–	y,y	indented paragraph, with hanging tag *x*; *y*=indent
.IX *x y*	–	y	index words *x y* and so on (up to 5 levels)
.KE	–	n	end keep of any kind
.KF	–	n	begin floating keep; text fills remainder of page
.KS	–	y	begin keep; unit kept together on a single page
.LG	–	n	larger; increase point size by 2
.LP	–	y,y	left (block) paragraph.

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.MC *x*	–	y,y	multiple columns; *x*=column width
.ND *x*	if t	n	no date in page footer; *x* is date on cover
.NH *x y*	–	y,y	numbered header; *x*=level, *x*=0 resets, *x*=S sets to *y*
.NL	10p	n	set point size back to normal
.OF *x*	–	n	odd page footer *x* (3 part as for .tl)
.OH *x*	–	n	odd page header *x* (3 part as for .tl)
.P1	if TM	n	print header on first page
.PP	–	y,y	paragraph with first line indented
.PT	- % -	n	page title, printed at head of page
.PX *x*	–	y	print index (table of contents); *x*=no suppresses title
.QP	–	y,y	quote paragraph (indented and shorter)
.R	on	n	return to Roman font
.RE	5n	y,y	retreat: end level of relative indentation
.RP *x*	–	n	released paper format; *x*=no stops title on first page
.RS	5n	y,y	right shift: start level of relative indentation
.SH	–	y,y	section header, in boldface
.SM	–	n	smaller; decrease point size by 2
.TA	8n,5n	n	set TAB characters to 8n 16n . . . (nroff) or 5n 10n . . . (troff)
.TC *x*	–	y	print table of contents at end; *x*=no suppresses title
.TE	–	y	end of table processed by tbl
.TH	–	y	end multi-page header of table
.TL	–	y	title in boldface and two points larger
.TM	off	n	UC Berkeley thesis mode
.TS *x*	–	y,y	begin table; if *x*=H table has multi-page header
.UL *x*	–	n	underline *x*, even in troff
.UX *x*	–	n	UNIX; trademark message first time; *x* appended
.XA *x y*	–	y	another index entry; *x*=page or no for none; y=indent

Macro Name	Initial Value	Break? Reset?	Explanation
.XE	–	y	end index entry (or series of .IX entries)
.XP	–	y,y	paragraph with first line indented, others indented
.XS *x y*	–	y	begin index entry; *x*=page or no for none; *y*=indent
.1C	on	y,y	one column format, on a new page
.2C	–	y,y	begin two column format
.] –	–	n	beginning of refer reference
.[0	–	n	end of unclassifiable type of reference
.[N	–	n	N= 1:journal-article, 2:book, 3:book-article, 4:report

Registers

Formatting distances can be controlled in -ms by means of built-in number registers. For example, this sets the line length to 6.5 inches:

```
.nr  LL  6.5i
```

Here is a table of number registers and their default values:

Name	Register Controls	Takes Effect	Default
PS	point size	paragraph	10
VS	vertical spacing	paragraph	12
LL	line length	paragraph	6i
LT	title length	next page	same as LL
FL	footnote length	next .FS	5.5i
PD	paragraph distance	paragraph	1v (if n), .3v (if t)
DD	display distance	displays	1v (if n), .5v (if t)
PI	paragraph indent	paragraph	5n
QI	quote indent	next .QP	5n
FI	footnote indent	next .FS	2n
PO	page offset	next page	0 (if n), ≈1i (if t)
HM	header margin	next page	1i
FM	footer margin	next page	1i
FF	footnote format	next .FS	0 (1, 2, 3 available)

When resetting these values, make sure to specify the appropriate units. Setting the line length to 7, for example, will result in output with one character per line. Setting FF to 1 suppresses footnote superscripting; setting it to 2 also suppresses indentation of the first line; and setting it to 3 produces an .IP-like footnote paragraph.

Here is a list of string registers available in -ms; they may be used anywhere in the text:

Name	String's Function
*Q	quote (" in nroff, “ in troff)
*U	unquote (" in nroff, ” in troff)
*–	dash (-- in nroff, – in troff)
*(MO	month (month of the year)
*(DY	day (current date)
**	automatically numbered footnote
*’	acute accent (before letter)
*‘	grave accent (before letter)
*^	circumflex (before letter)
*,	cedilla (before letter)
*:	umlaut (before letter)
*~	tilde (before letter)

When using the extended accent mark definitions available with .AM, these strings should come after, rather than before, the letter to be accented.

ファイル

/usr/share/lib/tmac/s

/usr/share/lib/tmac/ms.???

関連項目

col(1), eqn(1), nroff(1), refer(1), tbl(1), troff(1)

使用上の留意点

Floating keeps and regular keeps are diverted to the same space, so they cannot be mixed together with predictable results.

名前

mutex – concepts relating to mutual exclusion locks

機能説明

Mutual exclusion locks (mutexes) prevent multiple threads from simultaneously executing critical sections of code which access shared data (that is, mutexes are used to serialize the execution of threads). All mutexes must be global. A successful call to acquire a mutex will cause another thread that is also trying to lock the same mutex to block until the owner thread unlocks the mutex.

Mutexes can synchronize threads within the same process or in other processes. Mutexes can be used to synchronize threads between processes if the mutexes are allocated in writable memory and shared among the cooperating processes (see `mmap(2)`), and have been initialized for this task.

The following table lists mutex functions and the actions they perform.

FUNCTION	ACTION
`mutex_init`	Initialize a mutex.
`mutex_destroy`	Destroy a mutex.
`mutex_lock`	Lock a mutex.
`mutex_trylock`	Attempt to lock a mutex.
`mutex_unlock`	Unlock a mutex.
`pthread_mutex_init`	Initialize a mutex.
`pthread_mutex_destroy`	Destroy a mutex.
`pthread_mutex_lock`	Lock a mutex.
`pthread_mutex_trylock`	Attempt to lock a mutex.
`pthread_mutex_unlock`	Unlock a mutex.

Initialization

Mutexes are either intra-process or inter-process, depending upon the argument passed implicitly or explicitly to the initialization of that mutex. A statically allocated mutex does not need to be explicitly initialized; by default, a statically allocated mutex is initialized with all zeros and its scope is set to be within the calling process.

For inter-process synchronization, a mutex needs to be allocated in memory shared between these processes. Since the memory for such a mutex must be allocated dynamically, the mutex needs to be explicitly initialized with the appropriate attribute that indicates inter-process use.

Locking and Unlocking

A critical section of code is enclosed by a call to lock the mutex and the call to unlock the mutex to protect it from simultaneous access by multiple threads. Only one thread at a time may possess mutually exclusive access to the critical section of code that is enclosed by the mutex-locking call and the mutex-unlocking call, whether the mutex's scope is intra-process

or inter-process. A thread calling to lock the mutex either gets exclusive access to the code starting from the successful locking until its call to unlock the mutex, or it waits until the mutex is unlocked by the thread that locked it.

Mutexes have ownership, unlike semaphores. Only the thread that locked a mutex, (that is, the owner of the mutex), should unlock it.

If a thread waiting for a mutex receives a signal, upon return from the signal handler, the thread resumes waiting for the mutex as if there was no interrupt.

Caveats

Mutexes are almost like data – they can be embedded in data structures, files, dynamic or static memory, and so forth. Hence, they are easy to introduce into a program. However, too many mutexes can degrade performance and scalability of the application. Because too few mutexes can hinder the concurrency of the application, they should be introduced with care. Also, incorrect usage (such as recursive calls, or violation of locking order, and so forth) can lead to deadlocks, or worse, data inconsistencies.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	MT-Safe

関連項目

mmap(2), shmop(2), mutex_destroy(3C), mutex_init(3C), mutex_lock(3C), mutex_trylock(3C), mutex_unlock(3C), pthread_create(3C), pthread_mutex_destroy(3C), pthread_mutex_init(3C), pthread_mutex_lock(3C), pthread_mutex_trylock(3C), pthread_mutex_unlock(3C), pthread_mutexattr_init(3C), attributes(5), standards(5)

注意事項

In the current implementation of threads, pthread_mutex_lock(), pthread_mutex_unlock(), mutex_lock() mutex_unlock(), pthread_mutex_trylock(), and mutex_trylock() do not validate the mutex type. Therefore, an uninitialized mutex or a mutex with an invalid type does not return EINVAL. Interfaces for mutexes with an invalid type have unspecified behavior.

By default, if multiple threads are waiting for a mutex, the order of acquisition is undefined.

The system does not support multiple mappings to the same logical synch object if it is initialized as process-private (USYNC_THREAD for Solaris, PTHREAD_PROCESS_PRIVATE for POSIX). If you need to mmap(2)a synch object to different locations within the same address space, then the synch object should be initialized as a shared object (USYNC_PROCESS for Solaris, PTHREAD_PROCESS_SHARED for POSIX).

名前

mwac, MWAC – Mandatory Write Access Control

機能説明

Mandatory Write Access Control (MWAC) implements a new policy in the Oracle Solaris operating environment, that allows for fine- grained control over the writability of objects on otherwise read-only file systems.

In the current instance of the Oracle Solaris operating environment, MWAC is available only to non-global zones. The global zone implements the MWAC policy for non-global zones, preventing any overruling of the policy from within the non-global zone.

Zones marked as `read-only` have their root file system write-protected by MWAC. Only the file system objects that are write-listed by the read-only-profile are writable. See `zonecfg(1M)`. Other file system objects are read-only.

Creating links to objects that are read-only by virtue of the MWAC-policy is not allowed.

関連項目

`ln(1)`, `zoneadm(1M)`, `zonecfg(1M)`, `link(2)`, `pathconf(2)`

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

名前

nfssec – overview of NFS security modes

機能説明

The mount_nfs(1M) and share_nfs(1M) commands each provide a way to specify the security mode to be used on an NFS file system through the sec=*mode* option. *mode* can be sys, dh, krb5, krb5i, krb5p, or none. These security modes can also be added to the automount maps. mount_nfs(1M) allows you to specify a single security mode; share_nfs(1M) allows you to specify multiple modes (or none). With multiple modes, an NFS client can choose any of the modes in the list.

The sec=*mode* option on the share_nfs(1M) command line establishes the security mode ofNFS servers. If the NFS connection uses the NFS Version 3 protocol, the NFS clients must query the server for the appropriate *mode* to use. If the NFS connection uses the NFS Version 2 protocol, then the NFS client uses the default security mode, which is currently sys. NFS clients may force the use of a specific security mode by specifying the sec=*mode* option on the command line. However, if the file system on the server is not shared with that security mode, the client may be denied access.

If the NFS client wants to authenticate the NFS server using a particular (stronger) security mode, the client wants to specify the security mode to be used, even if the connection uses the NFS Version 3 protocol. This guarantees that an attacker masquerading as the server does not compromise the client.

The NFS security modes are described below. Of these, the krb5, krb5i, krb5p modes use the Kerberos V5 protocol for authenticating and protecting the shared filesystems. Before these can be used, the system must be configured to be part of a Kerberos realm. See kerberos(5).

sys	Use AUTH_SYS authentication. The user's UNIX user-id and group-ids are passed in the clear on the network, unauthenticated by the NFS server. This is the simplest security method and requires no additional administration. It is the default used by Solaris NFS Version 2 clients and Solaris NFS servers.
dh	Use a Diffie-Hellman public key system (AUTH_DES, which is referred to as AUTH_DH in RFC 2695: Authentication Mechanisms for ONC RPC.
krb5	Use Kerberos V5 protocol to authenticate users before granting access to the shared filesystem.
krb5i	Use Kerberos V5 authentication with integrity checking (checksums) to verify that the data has not been tampered with.
krb5p	User Kerberos V5 authentication, integrity checksums, and privacy protection (encryption) on the shared filesystem. This provides the most secure filesystem sharing, as all traffic is encrypted. It should be noted that performance might suffer on some systems when using krb5p, depending on the computational intensity of the encryption algorithm and the amount of data being transferred.

`none`	Use null authentication (`AUTH_NONE`). NFS clients using `AUTH_NONE` have no identity and are mapped to the anonymous user `nobody` by NFS servers. A client using a security mode other than the one with which a Solaris NFS server shares the file system has its security mode mapped to `AUTH_NONE`. In this case, if the file system is shared with `sec=`*`none`*, users from the client are mapped to the anonymous user. The NFS security mode `none` is supported by `share_nfs`(1M).
`sec=`*`mode`*`[:`*`mode`*`]...`	Sharing uses one or more of the specified security modes. The *`mode`* in the `sec=`*`mode`* option must be a node name supported on the client. If the `sec=` option is not specified, the default security mode used is `AUTH_SYS`. Multiple `sec=` options can be specified on the command line, although each mode can appear only once. Each `sec=` option specifies modes that apply to any subsequent `window=, rw, ro, rw=, ro=` and `root=` options that are provided before another `sec=`option. Each additional `sec=` resets the security mode context, so that more `window=, rw, ro, rw=, ro=` and `root=` options can be supplied for additional modes.

The NFSv4 server constructs a shared file system name space which is identical to the real file system name space on the server, including directories which are not actually shared, if they lead to shared directories. The constructed parts of the name space are known as the `pseudo-fs`. The `pseudo-fs` is always read-only.

As with NFSv3, the security mode of the shared directory is controlled using the `sec=`*`mode`* option of `share_nfs`(1M). However, the security mode of `pseudo-fs` objects is the union of the various security modes of the shared directories below.

When an NFSv4 client performs a mount, the client traverses the server's name space, from the root, down to the directory being mounted. Using the features of the NFSv4 protocol, the client may negotiate the security flavor of the directories as it proceeds down. If no `sec=`*`mode`* option is given to `mount_nfs` or an automounter map entry, then the client will do full negotiation for each directory down to the mount point, changing security flavors as needed. If `sec=`*`mode`* option is given, the client is constrained to use the requested security mode for all operations.

使用例

例 1　Sharing /var with Kerberos Authentication and Integrity Protection

The following example shares `/var` with Kerberos authentication and integrity protection:

```
share -F nfs -o sec=krb5i /var
```

例 2 Sharing /var with Kerberos Authentication and Privacy Protection

The following example shares/var with Kerberos authentication and privacy protection:

```
share -F nfs -o sec=krb5p /var
```

例 3 Sharing /var with Kerberos Authentication and Optionally Falling Back to AUTH_SYS Authentication

The following example shares /var with Kerberos authentication and optionally falls back to AUTH_SYS authentication:

```
share -F nfs -o sec=krb5:sys /var
```

例 4 Sharing /var with Kerberos Authentication Allowing read/write Operations for Kerberos Authenticated Users and Optionally Falling Back to AUTH_SYS Authentication Allowing only Read Operations

The following example shares /var with Kerberos authentication allowing read/write operations for Kerberos authenticated users and optionally falls back to AUTH_SYS authentication allowing only read operations:

```
share -F nfs -o sec=krb5,rw,sec=sys,ro /var
```

ファイル

/etc/nfssec.conf NFS security service configuration file

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	system/file-system/nfs

関連項目

automount(1M), kclient(1M), mount_nfs(1M), share_nfs(1M), rpc_clnt_auth(3NSL), secure_rpc(3NSL), nfssec.conf(4), attributes(5), kerberos(5)

RFC 2695: Authentication Mechanisms for ONC RPC

注意事項

/etc/nfssec.conf lists the NFS security services. Do not edit this file. It is not intended to be user-configurable. See kclient(1M).

名前

nis, NIS, NIS+ – network information name service

機能説明

NIS, formerly known as the Yellow Pages or YP, is the name of the network information name service in common use in networks on which Sun and other vendors' network nodes reside. The most recent version of NIS is version 2.

All commands and functions that use NIS version 2 are prefixed by the letters yp as in `ypmatch(1)`, `ypcat(1)`, `yp_match(3NSL)`, and `yp_first(3NSL)`.

The NIS+ name service is no longer shipped with the Solaris operating system. Tools to aid the migration from NIS+ to LDAP are available in the current Solaris release.

名前

nwam – network auto-magic 構成の管理

機能説明

ネットワーク構成は、システムによって定義されたデフォルトポリシー規則またはユーザー定義のポリシー規則に従って、自動的に管理できます。この管理は nwamd デーモンによって実行されます。

NWAM 機能は network/physical:default SMF サービスによって提供されます。netcfg/active_ncp プロパティーが NWAM NCP の名前に設定されている場合、NWAM 構成管理が有効になっています。一方、netcfg/active_ncp プロパティーが DefaultFixed に設定されている場合は従来のネットワーク構成が実行されます。

操作

自動 NCP で実装されているデフォルトの構成ポリシーでは、物理的に接続されている Ethernet リンクがすべてアクティブになり、使用可能な Ethernet リンクがない場合は 1 つの無線リンクがアクティブになります。アクティブなリンクの IP アドレスはすべて DHCP を使用して取得されます。このデフォルトポリシーは、代替のネットワーク構成プロファイル (NCP) を作成することによって変更できます。NCP を作成および変更するには、nwam-manager GUI ツールまたは nwamd(1M) コマンドを使用できます。

以前のバージョンの NWAM サービスを使用していた場合は、/etc/nwam/llp 構成ファイルが作成されています。現在のバージョンの NWAM サービスにアップグレードしたときに、そのファイル内にある構成が User NCP に自動的に組み込まれます。

NWAM 機能の自動動作を行うには、ネットワーク構成の管理を NWAM サービスに任せる必要があります。ネットワーク構成を手動で変更すると、新しいプロファイルがアクティブになったときや NWAM サービスが再起動されたときなど、条件が変化した場合に変更内容が失われる可能性があります。永続的に変更を加える場合は、外部ネットワーク修飾子 (ENM) を作成する方法をお勧めします。この修飾子は、必要に応じて NWAM サービスでアクティブ化または非アクティブ化することができます。

サービスのプロパティー

形式は次のようになります。

property_group/property_name property_type default_value
機能説明

nwamd/debug boolean false
daemon.debug を使用したデバッグログを有効にします。

nwamd/autoconf boolean false
より適切な (より優先順位の高い) 選択肢がない場合に、オープンな WLAN に自動的に接続するかどうかを示します。

nwamd/ncu_wait_time count 60
NCU (場合によっては、リンクとインタフェースの NCU ペア) が起動するのを待つ秒数。この時間が経過すると、次の使用可能な NCU を試します。起動操作は

取り消されないため、最終的に成功する場合があります。その時点で、指定されている構成の条件に応じて、より優先順位の高い NCU がアクティブになり、他方は無効になることがあります。

`nwamd/condition_check_interval` count `120`
条件に応じてアクティブになるオブジェクトの条件確認を定期的に行う間隔 (秒単位)。最小値は 30 秒です。

`nwamd/scan_interval` count `120`
無線スキャンを定期的に行う間隔 (秒単位)。

`nwamd/scan_level` astring `weak`
信号強度のしきい値。現在接続している AP がこの信号レベルより低下した場合、より信号の強い同等の AP (同じ ESSID を持つ) が使用可能であれば、現在の接続は切断され、より信号の強い AP に接続されます。

`nwamd/strict_bssid` boolean `false`
true の場合、以前接続した WLAN に接続するには、ESSID と BSSID が一致する必要があります。false の場合、一致する必要があるのは ESSID だけです。

`netcfg/active_ncp` astring `Automatic`
現在アクティブな NCP。ユーザーはこのプロパティーを設定しないようにしてください。再起動後も持続されるように NWAM サービスの内部で使用されます。現在アクティブな NCP を変更するための適切なユーザーインタフェースは、`nwam-manager` GUI または `netadm` コマンドの `enable` サブコマンドです。

予約されている NCP 名 `DefaultFixed` を有効化すると、NWAM 自動構成管理が無効化され、従来の固定ネットワーク構成が有効化されます。

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
使用条件	system/core-os
インタフェースの安定性	「流動的」

関連項目

svcs(1), netcfgd(1M), nwamd(1M), svadm(1M), attributes(5), smf(5)

JDS/GNOME マニュアルページコレクションで利用可能な `nwam-manager(1M)` も参照してください。

注意事項

ネットワークサービスは、サービス管理機能 smf(5) によって、次のサービス識別子として管理されます。

```
svc:/network/physical:default
```

有効化、無効化、または再起動要求など、このサービスに関する管理操作は、svadm(1M) を使用して実行できます。サービスステータスを照会するには、svcs(1) コマンドを使用します。

名前

openssl – OpenSSL cryptographic and Secure Sockets Layer toolkit

機能説明

OpenSSL is a cryptography toolkit that implements the Secure Sockets Layer (SSLv2/v3) and Transport Layer Security (TLS v1) network protocols.

The following features are omitted from the binaries for issues including but not limited to patents, trademark, and US export restrictions: ECC, IDEA, MDC2, RC3, RC5, 4758_CCA Engine, AEP Engine, Atalla Engine, CHIL Engine, CSWIFT Engine, GMP Engine, NURON Engine, PadLock Engine, Sureware Engine, and UBSEC Engine.

The PKCS#11 Engine

A new PKCS#11 engine has been included with ENGINE name `pkcs11`. The engine was developed in Sun and is not integrated in the OpenSSL project.

The PKCS#11 engine is configured to use the Oracle Solaris Cryptographic Framework. See `cryptoadm(1M)` for configuration information.

The PKCS#11 engine can support the following set of mechanisms: `CKM_AES_CBC`, `CKM_AES_ECB`, `CKM_BLOWFISH_CBC`, `CKM_DES_CBC`, `CKM_DES_ECB`, `CKM_DES3_CBC`, `CKM_DES3_ECB`, `CKM_DSA`, `CKM_MD5`, `CKM_RC4`, `CKM_RSA_PKCS`, `CKM_RSA_X_509`, `CKM_SHA_1`, `CKM_SHA224`, `CKM_SHA256`, `CKM_SHA384`, and `CKM_SHA512`.

The set of mechanisms available depends on installed Crypto Framework providers. To see what mechanisms can be offloaded to the Cryptographic Framework through the PKCS#11 engine on a given machine, run the following command:

```
/usr/sfw/bin/openssl engine pkcs11 -vvv -t -c
```

Due to requirements of the PKCS#11 standard regarding `fork(2)` behavior, some applications that use the OpenSSL EVP interfaces and `fork()` with active `crypto` contexts might experience unexpected behavior.

The Dynamic Engine Support

The dynamic engine support has been enabled, which allows an external engine, in the form of a shared library, to be dynamically bound and used by an OpenSSL-based application.

Run the following command to see if the dynamic engine is supported:

```
$openssl engine dynamic
(dynamic) Dynamic engine loading support
```

The devcrypto Engine

This engine is implemented as a separate shared library, and it can be used by an OpenSSL application through the OpenSSL dynamic engine support. This engine was developed in Sun and is not integrated in the OpenSSL project.

Files for the `devcrypto` engine library are:

```
/lib/openssl/engines/libdevcrypto.so
/lib/openssl/engines/64/libdevcrypto.so
```

The `devcrypto` engine accesses only the kernel hardware providers from the Oracle Solaris Cryptographic Framework. To see the hardware provider information on a system, use the `cryptoadm(1M)` command.

The devcrypto engine supports the following set of mechanisms: CKM_AES_CBC, CKM_AES_CTR, CKM_AES_ECB, CKM_BLOWFISH_CBC, CKM_DES_CBC, CKM_DES_ECB, CKM_DES3_CBC, CKM_DES3_ECB, and CKM_RC4.

The set of mechanisms available depends on hardware providers installed and enabled in the Cryptographic Framework. To see what mechanisms are supported by the devcrypto engine on a particular machine, run the following command:

```
$openssl engine dynamic -pre SO_PATH:/lib/openssl/engines/libdevcrypto.so\
-pre LOAD -t -c
```

Using FIPS Mode

Currently a FIPS-140 certified mode is not available in Oracle Solaris.

Building an OpenSSL Application

To build an OpenSSL application, use the following cc command line options:

```
cc [ flag... ] file... -lcrypto -lssl [ library... ]
```

Accessing RSA Keys in PKCS#11 Keystores

OpenSSL can access RSA keys in PKCS#11 keystores using the following functions of the ENGINE API:

```
EVP_PKEY *ENGINE_load_private_key(ENGINE *e,
 const char *key_id, UI_METHOD *ui_method,
 void *callback_data)

EVP_PKEY *ENGINE_load_public_key(ENGINE *e,
 const char *key_id, UI_METHOD *ui_method,
 void *callback_data)
```

key_id, formerly for filenames only, can be now also set to a PKCS#11 URI. The EVP_PKEY structure is newly allocated and caller is responsible to free the structure later. To avoid clashes with existing filenames, file:// prefix for filenames is now also accepted but only when the PKCS#11 engine is in use. The PKCS#11 URI specification follows:

```
pkcs11:[token=<label>][:manuf=<label>][;serial=<label>]
   [;model=<label>][;object=<label>]
   [;objecttype=(public|private|cert)]
   [;passphrasedialog=(builtin|exec:<file>)]
```

The ordering of keywords is not significant. The PKCS#11 engine uses the keystore for the slot chosen for public key operations, which is metaslot on a standard configured machine. Currently, the PKCS#11 engine ignores the objecttype keyword. The only mandatory keyword is object which is the key object label. For information on how to use a different, possibly hardware, keystore with metaslot, see libpkcs11(3LIB).

The token PIN is provided by way of the passphrasedialog keyword and is either read from the terminal (builtin) or from the output of an external command (exec:<file>). The PIN is used to log into the token and by default is deleted from the memory then. The keyword pin is intentionally not provided due to inherent security problems of possible use of a password in the process arguments.

Due to fork safety issues the application must re-login if the child continues to use the PKCS#11 engine. It is done inside of the engine automatically if fork is detected and in that case, `exec:<file>` option of the `passphrasedialog` keyword can be used. Alternatively, an environment variable `OPENSSL_PKCS11_PIN_CACHING_POLICY` can be used to allow the PIN to be cached in memory and reused in the child. It can be set to `none` which is the default, `memory` to store the PIN in memory, and `mlocked-memory` to keep the PIN in a locked page using `mlock(3C)`. `PRIV_PROC_LOCK_MEMORY` privilege is required in that case.

Sensitive parts of private keys are never read from the token to the process memory no matter whether the key is tagged with sensitive flag or not. The PKCS#11 engine uses the public components as a search key to get a PKCS#11 object handle to the private key.

To use the RSA keys by reference, high level API functions such as `RSA_public_decrypt()`, `EVP_PKEY_set1_RSA()`, or `EVP_SignInit()` must be used. Low level functions might go around the engine and fail to make use of the feature.

Additional Documentation

Extensive additional documentation for OpenSSL modules is available in the `/usr/share/man/man1openssl`, `/usr/share/man/man3openssl`, `/usr/share/man/man5openssl`, and `/usr/share/man/man7openssl` directories.

To view the license terms, attribution, and copyright for OpenSSL, run `pkg info --license library/security/openssl`.

使用例

例 1 Generating and Printing a Public Key

The following example generates and prints a public key stored in an already initilized PKCS#11 keystore. Notice the use of `-engine pkcs11` and `-inform e`.

```
$ pktool gencert keystore=pkcs11 label=mykey \
   subject="CN=test" keytype=rsa keylen=1024 serial=01
$ openssl rsa -in "pkcs11:object=mykey;passphrasedialog=builtin"\
   -pubout -text -engine pkcs11 -inform e
```

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	library/security/openssl, library/security/openssl
Interface Stability	Volatile

関連項目

`crle(1)`, `cryptoadm(1M)`, `libpkcs11(3LIB)`, `attributes(5)`, `privileges(5)`

`/usr/share/man/man1openssl/openssl.1openssl`, `/usr/share/man/man1openssl/CRYPTO_num_locks.3openssl`, `/usr/share/man/man3openssl/engine.3`, `/usr/share/man/man3openssl/evp.3`

名前

pam_allow – PAM authentication, account, session and password management PAM module to allow operations

形式

`pam_allow.so.1`

機能説明

The `pam_allow` module implements all the PAM service module functions and returns `PAM_SUCCESS` for all calls. Opposite functionality is available in the `pam_deny(5)` module.

Proper Solaris authentication operation requires `pam_unix_cred(5)` be stacked above `pam_allow`.

The following options are interpreted:

debug Provides `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_AUTH | LOG_DEBUG` level.

エラー

`PAM_SUCCESS` is always returned.

使用例

例 1 Allowing ssh none

The following example is a `pam.conf` fragment that illustrates a sample for allowing `ssh none` authentication:

```
sshd-none  auth    required      pam_unix_cred.so.1
sshd-none  auth    sufficient    pam_allow.so.1
sshd-none  account sufficient    pam_allow.so.1
sshd-none  session sufficient    pam_allow.so.1
sshd-none  password sufficient   pam_allow.so.1
```

例 2 Allowing Kiosk Automatic Login Service

The following is example is a `pam.conf` fragment that illustrates a sample for allowing `gdm` kiosk auto login:

```
gdm-autologin auth  required    pam_unix_cred.so.1
gdm-autologin auth  sufficient  pam_allow.so.1
```

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`libpam(3LIB)`, `pam(3PAM)`, `pam_sm(3PAM)`, `syslog(3C)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`, `pam_deny(5)`, `pam_unix_cred(5)`

注意事項

The interfaces in `libpam(3LIB)` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

This module is intended to be used to either allow access to specific services names, or to all service names not specified (by specifying it as the default service stack).

名前 pam_authtok_check – authentication and password management module

形式 `pam_authtok_check.so.1`

機能説明 `pam_authtok_check` provides functionality to the Password Management stack. The implementation of `pam_sm_chauthtok()` performs a number of checks on the construction of the newly entered password. `pam_sm_chauthtok()` is invoked twice by the PAM framework, once with flags set to `PAM_PRELIM_CHECK`, and once with flags set to `PAM_UPDATE_AUTHTOK`. This module only performs its checks during the first invocation. This module expects the current authentication token in the `PAM_OLDAUTHTOK` item, the new (to be checked) password in the `PAM_AUTHTOK` item, and the login name in the `PAM_USER` item. The checks performed by this module are:

length	The password length should not be less that the minimum specified in `/etc/default/passwd`.
circular shift	The password should not be a circular shift of the login name. This check may be disabled in `/etc/default/passwd`.
complexity	The password should contain at least the minimum number of characters described by the parameters `MINALPHA`, `MINNONALPHA`, `MINDIGIT`, and `MINSPECIAL`. Note that `MINNONALPHA` describes the same character classes as `MINDIGIT` and `MINSPECIAL` combined; therefore the user cannot specify both `MINNONALPHA` and `MINSPECIAL` (or `MINDIGIT`). The user must choose which of the two options to use. Furthermore, the `WHITESPACE` parameter determines whether whitespace characters are allowed. If unspecified `MINALPHA` is 2, `MINNONALPHA` is 1 and `WHITESPACE` is yes
variation	The old and new passwords must differ by at least the `MINDIFF` value specified in `/etc/default/passwd`. If unspecified, the default is 3. For accounts in name services which support password history checking, if prior history is defined, the new password must not match the prior passwords.
dictionary check	The password must not be based on a dictionary word. The list of words to be used for the site's dictionary can be specified with `DICTIONLIST`. It should contain a comma-separated list of filenames, one word per line. The database that is created from these files is stored in the directory named by `DICTIONDBDIR` (defaults to `/var/passwd`). See `mkpwdict(1M)` for information on pre-generating the database. If neither `DICTIONLIST` nor `DICTIONDBDIR` is specified, no dictionary check is made.
upper/lower case	The password must contain at least the minimum of upper- and lower-case letters specified by the `MINUPPER` and `MINLOWER` values in `/etc/default/passwd`. If unspecified, the defaults are 0.

maximum repeats — The password must not contain more consecutively repeating characters than specified by the MAXREPEATS value in /etc/default/passwd. If unspecified, no repeat character check is made.

The following option may be passed to the module:

force_check — If the PAM_NO_AUTHTOK_CHECK flag set, force_check ignores this flag. The PAM_NO_AUTHTOK_CHECK flag can be set to bypass password checks (see pam_chauthtok(3PAM)).

server_policy — If the account authority for the user, as specified by PAM_USER, is not files or NIS, and if server_policy is specified, this module does not perform any password-strength checks. Instead, it leaves it to the account authority to validate the new password against its own set of rules.

debug — syslog(3C) debugging information at the LOG_DEBUG level

戻り値

If the password in PAM_AUTHTOK passes all tests, PAM_SUCCESS is returned. If any of the tests fail, PAM_AUTHTOK_ERR is returned.

ファイル

/etc/default/passwd — See passwd(1) for a description of the contents.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

passwd(1), pam(3PAM), mkpwdict(1M), pam_chauthtok(3PAM), syslog(3C), libpam(3LIB), pam.conf(4), passwd(4), shadow(4), attributes(5), pam_authtok_get(5), pam_authtok_store(5), pam_dhkeys(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), pam_unix_auth(5), pam_unix_session(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前 pam_authtok_get – authentication and password management module

形式 `pam_authtok_get.so.1`

機能説明 The `pam_authtok_get` service module provides password prompting funtionality to the PAM stack. It implements `pam_sm_authenticate()` and `pam_sm_chauthtok()`, providing functionality to both the Authentication Stack and the Password Management Stack.

Authentication Service The implementation of `pam_sm_authenticate(3PAM)` prompts the user name if not set and then tries to get the authentication token from the pam handle. If the token is not set, it then prompts the user for a password and stores it in the `PAM` item `PAM_AUTHTOK`. This module is meant to be the first module on an authentication stack where users are to authenticate using a keyboard.

Password Management Service Due to the nature of the PAM Password Management stack traversal mechanism, the `pam_sm_chauthtok(3PAM)` function is called twice. Once with the `PAM_PRELIM_CHECK` flag, and one with the `PAM_UPDATE_AUTHTOK` flag.

In the first (`PRELIM`) invocation, the implementation of `pam_sm_chauthtok(3PAM)` moves the contents of the `PAM_AUTHTOK` (current authentication token) to `PAM_OLDAUTHTOK`, and subsequentially prompts the user for a new password. This new password is stored in `PAM_AUTHTOK`.

If a previous module has set `PAM_OLDAUTHTOK` prior to the invocation of pam_authtok_get, this module turns into a `NO-OP` and immediately returns `PAM_SUCCESS`.

In the second (`UPDATE`) invocation, the user is prompted to Re-enter his password. The pam_sm_chauthtok implementation verifies this reentered password with the password stored in `PAM_AUTHTOK`. If the passwords match, the module returns `PAM_SUCCESS`.

The following option can be passed to the module:

debug `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_DEBUG` level

エラー The authentication service returns the following error codes:

`PAM_SUCCESS` Successfully obtains authentication token

`PAM_SYSTEM_ERR` Fails to retrieve username, username is `NULL` or empty

The password management service returns the following error codes:

`PAM_SUCCESS` Successfully obtains authentication token

`PAM_AUTHTOK_ERR` Authentication token manipulation error

属性 See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

pam(3PAM), pam_authenticate(3PAM), syslog(3C), libpam(3LIB), pam.conf(4), attributes(5), pam_authtok_check(5), pam_authtok_store(5), pam_dhkeys(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), pam_unix_auth(5), pam_unix_session(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前

pam_authtok_store – password management module

形式

`pam_authtok_store.so.1`

機能説明

`pam_authtok_store` provides functionality to the PAM password management stack. It provides one function: `pam_sm_chauthtok()`.

When invoked with flags set to `PAM_UPDATE_AUTHTOK`, this module updates the authentication token for the user specified by `PAM_USER`.

The authentication token `PAM_OLDAUTHTOK` can be used to authenticate the user against repositories that need updating (NIS, LDAP). After successful updates, the new authentication token stored in `PAM_AUTHTOK` is the user's valid password.

This module honors the `PAM_REPOSITORY` item, which, if set, specifies which repository is to be updated. If `PAM_REPOSITORY` is unset, it follows the `nsswitch.conf(4)`.

The following option can be passed to the module:

`debug` — `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_DEBUG` level

`server_policy` — If the account authority for the user, as specified by `PAM_USER`, is a server, do not encrypt the authentication token before updating.

エラー

`PAM_SUCCESS` — Successfully obtains authentication token

`PAM_SYSTEM_ERR` — Fails to get username, service name, old password or new password, user name null or empty, or password null.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`pam(3PAM)`, `pam_authenticate(3PAM)`, `pam_chauthtok(3PAM)`, `syslog(3C)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_dhkeys(5)`, `pam_passwd_auth(5)`, `pam_unix_account(5)`, `pam_unix_auth(5)`, `pam_unix_session(5)`

注意事項

The interfaces in `libpam(3LIB)` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

If the `PAM_REPOSITORY` *item_type* is set and a service module does not recognize the type, the service module does not process any information, and returns `PAM_IGNORE`. If the `PAM_REPOSITORY` *item_type* is not set, a service module performs its default action.

名前

pam_deny – PAM authentication, account, session and password management PAM module to deny operations

形式

`pam_deny.so.1`

機能説明

The `pam_deny` module implements all the PAM service module functions and returns the module type default failure return code for all calls.

The following options are interpreted:

debug `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_AUTH|LOG_DEBUG` levels

エラー

The following error codes are returned:

`PAM_ACCT_EXPIRED` If `pam_sm_acct_mgmt` is called.

`PAM_AUTH_ERR` If `pam_sm_authenticate` is called.

`PAM_AUTHOK_ERR` If `pam_sm_chauthtok` is called.

`PAM_CRED_ERR` If `pam_sm_setcred` is called.

`PAM_SESSION_ERR` If `pam_sm_open_session` or `pam_sm_close_session` is called.

使用例

例 1 Disallowing ssh none authentication

```
sshd-none       auth       requisite    pam_deny.so.1
sshd-none       account    requisite    pam_deny.so.1
sshd-none       session    requisite    pam_deny.so.1
sshd-none       password   requisite    pam_deny.so.1
```

例 2 Disallowing any service not explicitly defined

```
other           auth       requisite    pam_deny.so.1
other           account    requisite    pam_deny.so.1
other           session    requisite    pam_deny.so.1
other           password   requisite    pam_deny.so.1
```

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT-Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`su(1M)`, `libpam(3LIB)`, `pam(3PAM)`, `pam_sm_authenticate(3PAM)`, `syslog(3C)`, `pam.conf(4)`, `nsswitch.conf(4)`, `attributes(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_authtok_store(5)`, `pam_dhkeys(5)`, `pam_passwd_auth(5)`, `pam_unix_account(5)`, `pam_unix_auth(5)`, `pam_unix_session(5)`, `privileges(5)`

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

The pam_deny module is intended to deny access to a specified service. The other service name may be used to deny access to services not explicitly specified.

名前 pam_dhkeys – authentication Diffie-Hellman keys management module

形式 `pam_dhkeys.so.1`

機能説明 The `pam_dhkeys.so.1` service module provides functionality to two PAM services: Secure RPC authentication and Secure RPC authentication token management.

Secure RPC authentication differs from regular Unix authentication because ONC RPCs use Secure RPC as the underlying security mechanism.

The following options may be passed to the module:

debug `syslog(3C)` debugging information at `LOG_DEBUG` level

nowarn Turn off warning messages

Authentication Services

If the user has Diffie-Hellman keys, `pam_sm_authenticate()` establishes secret keys for the user specified by the `PAM_USER` (equivalent to running `keylogin(1)`), using the authentication token found in the `PAM_AUTHTOK` item. If `pam_sm_setcred()` is called with `PAM_ESTABLISH_CRED` and the user's secure `RPC` credentials need to be established, these credentials are set. This is equivalent to running `keylogin`(1).

If the credentials could not be set and `PAM_SILENT` is not specified, a diagnostic message is displayed. If `pam_setcred()` is called with `PAM_DELETE_CRED`, the user's secure RPC credentials are unset. This is equivalent to running `keylogout(1)`.

`PAM_REINITIALIZE_CRED` and `PAM_REFRESH_CRED` are not supported and return `PAM_IGNORE`.

Authentication Token Management

The `pam_sm_chauthtok()` implementation checks whether the old login password decrypts the users secret keys. If it doesn't this module prompts the user for an old Secure RPC password and stores it in a pam data item called `SUNW_OLDRPCPASS`. This data item can be used by the store module to effectively update the users secret keys.

エラー The authentication service returns the following error codes:

`PAM_SUCCESS`	Credentials set successfully.
`PAM_IGNORE`	Credentials not needed to access the password repository.
`PAM_USER_UNKNOWN`	`PAM_USER` is not set, or the user is unknown.
`PAM_AUTH_ERR`	No secret keys were set. `PAM_AUTHTOK` is not set, no credentials are present or there is a wrong password.
`PAM_BUF_ERR`	Module ran out of memory.

The authentication token management returns the following error codes:

`PAM_SUCCESS`	Old `rpc` password is set in `SUNW_OLDRPCPASS`
`PAM_USER_UNKNOWN`	User in `PAM_USER` is unknown.

PAM_AUTHTOK_ERR	User did not provide a password that decrypts the secret keys.
PAM_BUF_ERR	Module ran out of memory.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

keylogin(1), keylogout(1), pam(3PAM), pam_authenticate(3PAM), pam_chauthtok(3PAM), pam_setcred(3PAM), pam_get_item(3PAM), pam_set_data(3PAM), pam_get_data(3PAM), syslog(3C), libpam(3LIB), pam.conf(4), attributes(5), pam_authtok_check(5), pam_authtok_get(5), pam_authtok_store(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), pam_unix_auth(5), pam_unix_session(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前

pam_dial_auth – authentication management PAM module for dialups

形式

`pam_dial_auth.so.1`

機能説明

The `pam_dial_auth` module implements `pam_sm_authenticate(3PAM)` which authenticates the user according to the `dialups(4)` and `d_passwd(4)` files configuration.

Authentication service modules must implement both `pam_sm_authenticate()` and `pam_sm_setcred()`. `pam_sm_setcred()` in this module always returns `PAM_IGNORE`.

The value of the `PAM_TTY` item is checked against entries in `dialups(4)`. If there is a match, the user's shell is compared against entries in `d_passwd(4)`. If there is a matching entry, the user is prompted for a password which is validated against the entry found.

The following option may be passed in to this service module:

`debug` `syslog(3C)` debugging information at `LOG_DEBUG` level.

エラー

If `dialups(4)` is not present, `PAM_IGNORE` is returned. Upon successful completion of `pam_sm_authenticate()`, `PAM_SUCCESS` is returned. The following error codes are returned upon error:

`PAM_AUTH_ERR`	Authentication failure.
`PAM_SERVICE_ERR`	Error in the calling service, `PAM_TTY` is not set.
`PAM_SYSTEM_ERR`	System error (`d_passwd(4)` is not present).
`PAM_USER_UNKNOWN`	No account is present for *user*.

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`pam(3PAM)`, `pam_authenticate(3PAM)`, `pam_sm_authenticate(3PAM)`, `d_passwd(4)`, `dialups(4)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_authtok_store(5)`, `pam_dhkeys(5)`, `pam_passwd_auth(5)`, `pam_unix_account(5)`, `pam_unix_auth(5)`, `pam_unix_session(5)`

注意事項

The interfaces in `libpam(3LIB)` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own `PAM` handle.

名前

pam_krb5 – authentication, account, session, and password management PAM modules for Kerberos V5

形式

`/usr/lib/security/pam_krb5.so.1`

機能説明

The Kerberos V5 service module for PAM provides functionality for all four PAM modules: authentication, account management, session management, and password management. The service module is a shared object that can be dynamically loaded to provide the necessary functionality upon demand. Its path is specified in the PAM configuration file.

Kerberos Authentication Module

The Kerberos V5 authentication component provides functions to verify the identity of a user, `pam_sm_authenticate()`, and to manage the Kerberos credentials cache, `pam_sm_setcred()`.

`pam_sm_authenticate()` authenticates a user principal through the Kerberos authentication service. If the authentication request is successful, the authentication service sends a ticket-granting ticket (TGT) back to the service module, which then verifies that the TGT came from a valid Key Distribution Center (KDC) by attempting to get a service ticket for the local host service. For this to succeed, the local host's `keytab` file (`/etc/krb5/krb5.keytab`) must contain the entry for the local host service. For example, in the file `host/`*hostname.com*`@`*REALM*, *hostname.com* is the fully qualified local hostname and *REALM* is the default realm of the local host as defined in `/etc/krb5/krb5.conf`. If the host entry is not found in the keytab file, the authentication fails. Administrators can optionally disable this "strict" verification by setting "`verify_ap_req_nofail = false`" in `/etc/krb5/krb5.conf`. See `krb5.conf(4)` for more details on this option. This allows TGT verification to succeed in the absence of a `keytab` host principal entry.

If `pam_sm_authenticate()` is called and the `pkinit` module option is set, the Kerberos V5 authentication module tries to do `PKINIT` authentication, assuming that both the system and the `KDC` are configured to support this type of authentication. This form of authentication uses a user's certificate and private key to acquire the user's initial Kerberos credential (`TGT`). One of the keystore formats supported is `PKCS11` which supports use of any `PKCS11` compatible keystore capable of storing the required credential and private key needed for `PKINIT` authentication (`PKCS11` compatible smartcards are an example). See `krb5.conf(4)` for more details on `PKINIT` configuration. This form of authentication is typically useful for services where the system on which the `auth` stack is being processed has access to the user's certificate and private key.

If `pam_sm_authenticate()` is called and the `pkinit` module option is not set then the Kerberos V5 authentication module does password based authentication.

In either case, if the `PAM_AUTHTOK` password item has been set when `pam_sm_authenticate()` is called, which is the case when `pam_krb5` is stacked after `pam_authtok_get` in the `auth` stack, the Kerberos V5 authentication module uses that `PAM_AUTHTOK` password for either `PKINIT` or password based Kerberos authentication.

If the `PAM_USER` item is not set `pam_krb5` with the `pkinit` option prompts for and set that item.

If the PAM_AUTHTOK password item has not been set when pam_sm_authenticate() is called, which is the case when pam_krb5 is stacked before pam_authtok_get in the auth stack, and the pkinit option is present the Kerberos V5 authentication module allows the Kerberos pkinit preauth plugin to prompt for whatever information is needed to perform PKINIT (typically this is for the user's PIN). No PAM items are set by way of this prompting. See krb5.conf(4) for more information on PKINIT configuration options.

If it is desirable to initially have the Kerberos V5 authentication module try PKINIT Kerberos authentication and fall back to password based Kerberos authentication then either the sufficient or optional control flags must be provided for the instance of pam_krb5 with the pkinit module option set and another instance of pam_krb5 without the pkinit module option must be stacked below pam_authtok_get. If there are PAM modules other than pam_krb5 that must be evaluated below pam_authtok_get then the control flag should be set to optional for the instance of pam_krb5 with the pkinit module option set otherwise the control flag should be set to sufficient.

Only two instances of pam_krb5 are supported in a auth stack.

pam_sm_authenticate(3PAM) can be passed the following flag:

PAM_DISALLOW_NULL_AUTHTOK
: This flag is ignored. The Kerberos authentication mechanism does not allow an empty password string by default.

pam_sm_setcred() creates and modifies the user's credential cache. This function initializes the user's credential cache, if it does not already exist, and stores the initial credentials for later use by Kerberos network applications. The following flags can be set in the flags field. They are best described by their effect on the user's credential cache.

PAM_ESTABLISH_CRED
: Stores the initial credentials in the user's credential cache so that the user can access Kerberos network services. If a successful authentication pass was made, the new credentials are stored in the credential cache, overwriting any existing credentials that were previously stored. If an unsuccessful authentication pass was made, PAM_CRED_UNAVAIL is returned.

PAM_DELETE_CRED
: This flag has no effect on the credential cache and always returns PAM_SUCCESS. The credential cache is not deleted because there is no accurate method to determine if the credentials are needed by another process. The credential cache can be deleted with the kdestroy(1) command.

PAM_REINITIALIZE_CRED
: Deletes the user's existing credential cache, if it exists, and creates a new credential cache. The new credentials are stored in the new cache and the user's ticket lifetime and renewable life time values are reset.

PAM_REFRESH_CRED
: Does not require a previous authentication pass, but if a successful one is made, the new credentials are stored in the credential cache. If a previous authentication pass was not made or was unsuccessful, an attempt to renew the existing credentials is made. This function fails if the user's renewable ticket lifetime is expired.

The following options can be passed to the Kerberos V5 authentication module:

debug
: Provides syslog(3C) debugging information at LOG_DEBUG level.

nowarn
: Turns off warning messages.

pkinit
: Indicates that the Kerberos V5 authentication module should try Kerberos PKINIT authentication instead of the default password based Kerberos authentication.

Kerberos V5 Account Management Module

The Kerberos account management component provides a function to perform account management, pam_sm_acct_mgmt(). This function checks to see if the pam_krb5 authentication module has noted that the user's password has not expired. The following options can be passed in to the Kerberos V5 account management module:

debug
: Provides syslog(3C) debugging information at LOG_DEBUG level

nowarn
: Turns off warning messages. Also, does not query KDC for impending password expiration information used to warn the user.

Kerberos V5 Session Management Module

The Kerberos V5 session management component provides functions to initiate pam_sm_open_session() and terminate pam_sm_close_session() Kerberos sessions. For Kerberos V5, both pam_sm_open_session and pam_sm_close_session() are null functions, returning PAM_IGNORE.

Kerberos V5 Password Management Module

The Kerberos V5 password management component provides a function to change passwords, pam_sm_chauthtok(), in the Key Distribution Center (KDC) database.

If the Kerberos V5 authentication module used PKINIT authentication in the auth stack then the Kerberos V5 password management module returns PAM_IGNORE in the following cases:

- The new password is NULL.
- The old password is NULL.
- Verification of the old password fails.

The rationale behind this is that the KDC can not allow a PKINIT user to change/set a password since the user can be expected to use PKINIT only. If all of the cases above are false the Kerberos V5 password management module tries to change the user's password in the KDC database.

If the KDC only supports PKINIT authentication then the Kerberos V5 password management module should not be present in any password stacks.

Related to PKINIT the Kerberos V5 password management module does not support changing the key store PIN used to access a user's private key and certificate.

The following flags can be passed to pam_sm_chauthtok(3PAM):

PAM_CHANGE_EXPIRED_AUTHTOK
: The password service should only update the user's Kerberos password if it is expired. Otherwise, this function returns PAM_IGNORE. The default behaviour is to always change the user's Kerberos password.

PAM_PRELIM_CHECK
: This is a null function that always returns PAM_IGNORE.

PAM_UPDATE_AUTHTOK
: This flag is necessary to change the user's Kerberos password. If this flag is not set, pam_krb5 returns PAM_SYSTEM_ERR.

The following option can be passed to the Kerberos V5 password module:

debug Provides syslog(3C) debugging information at LOG_DEBUG level.

エラー

The following error codes are returned for pam_sm_authenticate():

PAM_AUTH_ERR	Authentication failure
PAM_BUF_ERR	Memory buffer error.
PAM_IGNORE	The user is "root" and the root key exists in the default keytab.
PAM_SUCCESS	Successfully obtained Kerberos credentials .
PAM_SYSTEM_ERR	System error.
PAM_USER_UNKNOWN	An unknown Kerberos principal was requested.

The following error codes are returned for pam_sm_setcred():

PAM_AUTH_ERR	Authentication failure.
PAM_BUF_ERR	Memory buffer error.
PAM_IGNORE	The user is "root" and the root key exists in the default keytab.
PAM_SYSTEM_ERR	System error.
PAM_SUCCESS	Successfully modified the Kerberos credential cache.

The following error codes are returned for pam_sm_acct_mgmt():

PAM_AUTH_ERR	Authentication failure.
PAM_IGNORE	Kerberos service module pam_sm_authenticate() was never called, or the user is "root" and the root key exists in the default keytab.

PAM_NEW_AUTHTOK_REQD	Obtain new authentication token from the user.
PAM_SERVICE_ERR	Error in underlying service module.
PAM_SUCCESS	Kerberos principal account is valid.
PAM_SYSTEM_ERR	System error.
PAM_USER_UNKNOWN	An unknown Kerberos principal was requested.

The following error code is returned for pam_sm_open_session() and pam_sm_close_session():

PAM_IGNORE These two functions are null functions in pam_krb5:

The following error codes are returned for pam_sm_chauthtok():

PAM_AUTH_ERR	Authentication failure.
PAM_IGNORE	The user has not been authenticated by Kerberos service module pam_sm_authenticate(), or the user is "root" and the root key exists in the default keytab.
PAM_NEW_AUTHTOK_REQD	User's Kerberos password has expired.
PAM_SERVICE_ERR	Error in module. At least one input parameter is missing.
PAM_SYSTEM_ERR	System error.
PAM_USER_UNKNOWN	An unknown Kerberos principal was requested.
PAM_SUCCESS	Successfully changed the user's Kerberos password.

使用例

例 1 Authenticating Users Through Kerberos as First Choice Using Password-based Authentication

The following is an excerpt of a sample pam.conf configuration file that authenticates users through the Kerberos authentication service and authenticates through the Unix login only if the Kerberos authentication fails. This arrangement is helpful when a majority of the users are networked by means of Kerberos and when there are only a few non-Kerberos type user accounts, such as root. The service illustrated below is for gdm.

```
gdm auth requisite          pam_authtok_get.so.1
gdm auth required           pam_dhkeys.so.1
gdm auth required           pam_unix_cred.so.1
gdm auth sufficient         pam_krb5.so.1
gdm auth required           pam_unix_auth.so.1
```

These changes should not be made to the existing krlogin, krsh, and ktelnet service entries. Those services require Kerberos authentication, so using a seemingly sufficient control flag would not provide the necessary functionality for privacy and integrity. There should be no need to change those entries.

例 1 Authenticating Users Through Kerberos as First Choice Using Password-based Authentication *(続き)*

The following entries check for password expiration when dealing with Kerberos and Unix password aging policies:

```
other   account requisite       pam_roles.so.1
other   account required        pam_unix_account.so.1
other   account required        pam_krb5.so.1
```

The following entries would change the Kerberos password of the user and continue to change the Unix login password only if the Kerberos password change had failed:

```
other   password required       pam_dhkeys.so.1
other   password requisite      pam_authtok_get.so.1
other   password requisite      pam_authtok_check.so.1
other   password sufficient     pam_krb5.so.1
other   password required       pam_authtok_store.so.1
```

When changing Kerberos based user's password, use `kpasswd(1)`. When changing a non-Kerberos user's password, it is recommended that the repository is specified (`-r`) with the `passwd(1)` command.

例 2 Authenticating Users Through Kerberos Only Using Password-based Authentication

The following example allows authentication only to users that have Kerberos-based accounts.

```
gdm auth requisite          pam_authtok_get.so.1
gdm auth required           pam_dhkeys.so.1
gdm auth required           pam_unix_cred.so.1
gdm auth binding            pam_krb5.so.1
gdm auth required           pam_unix_auth.so.1
```

Typically, you would have another service specified in the `pam.conf` file that would allow local users, such as database, web server, system administrator accounts, to log in to the host machine. For example, the service name “login” could be used for these users. These users should not belong to any roles.

The rest of the module types look similar to that shown in the previous example:

```
other   account requisite       pam_roles.so.1
other   account required        pam_unix_account.so.1
other   account required        pam_krb5.so.1
```

With binding specified in the following, it is important that non-Kerberos users specify the repository in which they reside using the `-r` option with the `passwd(1)` command. This configuration is also based on the assumptions that:

- Kerberos users maintain only their Kerberos passwords;

例 2 Authenticating Users Through Kerberos Only Using Password-based Authentication *(続き)*

- changing their Unix password is not necessary, given that they are authenticated only through their Kerberos passwords when logging in.

```
other   password required       pam_dhkeys.so.1
other   password requisite      pam_authtok_get.so.1
other   password requisite      pam_authtok_check.so.1
other   password binding        pam_krb5.so.1
other   password required       pam_authtok_store.so.1
```

例 3 Authenticating Through Kerberos Optionally Using Password-based Authentication

This configuration is helpful when the majority of users are non-Kerberos users and would like to authenticate through Kerberos if they happened to exist in the Kerberos database. The effect of this is similar to users voluntarily executing `kinit(1)` after they have successfully logged in:

```
gdm auth requisite          pam_authtok_get.so.1
gdm auth required           pam_dhkeys.so.1
gdm auth required           pam_unix_cred.so.1
gdm auth required           pam_unix_auth.so.1
gdm auth optional           pam_krb5.so.1
```

The rest of the configuration is as follows:

```
other   account requisite       pam_roles.so.1
other   account required        pam_unix_account.so.1
other   account required        pam_krb5.so.1

other   password required       pam_dhkeys.so.1
other   password requisite      pam_authtok_get.so.1
other   password requisite      pam_authtok_check.so.1
other   password required       pam_authtok_store.so.1
other   password optional       pam_krb5.so.1
```

Non-Kerberos users should specify their respective repositories by using the `-r` option when changing their password with the `passwd(1)` command.

例 4 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT as First Choice

The following is an excerpt of a sample `pam.conf` configuration file that authenticates users through the Kerberos authentication service and authenticates through the Unix login only if the Kerberos authentication (using `PKINIT`) fails. This arrangement is helpful when a majority of the users are networked by means of Kerberos and when there are only a few non-Kerberos type user accounts, such as root. The service illustrated below is for login. The user is prompted once for the PIN by `pam_krb5`.

例 4 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT as First Choice *(続き)*

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth sufficient         pam_krb5.so.1 pkinit
login auth requisite          pam_authtok_get.so.1
login auth required           pam_dhkeys.so.1
login auth required           pam_unix_auth.so.1
```

例 5 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT Only

The following example allows authentication only to users that have kerberos-based accounts requiring `PKINIT` authentication.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth required           pam_krb5.so.1 pkinit
```

例 6 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT Optionally

The following example allows users to acquire a Kerberos credential using `PKINIT` authentication if they have a Kerberos account. Whether `pam_krb5` succeeds or fails the user must provide their Unix password to login.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth optional           pam_krb5.so.1 pkinit
login auth requisite          pam_authtok_get.so.1
login auth required           pam_unix_auth.so.1
```

例 7 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT as a Requirement

The following example allows users to login if `pam_krb5` is able to acquire a Kerberos credential using `PKINT` authentication and in addition must provide their Unix password to `pam_unix_auth`.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth required           pam_krb5.so.1 pkinit
login auth requisite          pam_authtok_get.so.1
login auth required           pam_unix_auth.so.1
```

例 8 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT as a Requirement

The following example allows users to login using their `PAM_AUTHTOK` password acquired by `pam_authtok_get`. This password is used by `pam_krb5` to try `PKINIT` authentication and is also used by `pam_unix_auth` to authenticate the user using the user's Unix account. If `PKINIT` requires a password/PIN that differs from the user's Unix password then `pam_krb5` must be stacked above `pam_authtok_get`.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth requisite          pam_authtok_get.so.1
```

例 8 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT as a Requirement (続き)

```
login auth required           pam_krb5.so.1 pkinit
login auth required           pam_unix_auth.so.1
```

例 9 Authenticating Users Through Kerberos PKINIT with a Fall Back to Password-based krb auth

The following example allows users to acquire a Kerberos credential using `PKINIT` authentication or using password based authentication if `PKINIT` fails. If `PKINIT` succeeds the user is not prompted for their password. If `pam_krb5` `PKINIT` succeeds, the second instance of `pam_krb5` does not try password authentication and returns success. If `PKINIT` fails the user is prompted for their Kerberos password.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth sufficient         pam_krb5.so.1 pkinit
login auth requisite          pam_authtok_get.so.1
login auth required           pam_krb5.so.1
```

例 10 Authenticating Users Through Kerberos Requiring Users to Authenticate Either through Kerberos PKINIT or Fall Back to Password-based krb auth

The following example allows users to acquire a Kerberos credential using `PKINIT` authentication or using password based authentication if `PKINIT` fails. If `pam_krb5` `PKINIT` succeeds, the second instance of `pam_krb5` does not try password authentication and returns ignore. If `pam_krb5` `PKINIT` fails the second instance of `pam_krb5` tries password based authentication and return success or failure.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth optional           pam_krb5.so.1 pkinit
login auth requisite          pam_authtok_get.so.1
login auth required           pam_krb5.so.1
login auth required           pam_dhkeys.so.1
login auth required           pam_unix_auth.so.1
```

例 11 Authenticating Users Through Kerberos Requiring Users to Authenticate Either through Kerberos PKINIT or Fall Back to pam_pkcs11

The following example allows users to acquire a Kerberos credential using `PKINIT` authentication or if that fails use `pam_pkcs11` to validate the user's PIN using their certificate and private key.

```
login auth required           pam_unix_cred.so.1
login auth sufficient         pam_krb5.so.1 pkinit
login auth sufficient         pam_pkcs11.so
```

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed

関連項目

kdestroy(1), kinit(1), kpasswd(1), passwd(1), ktkt_warnd(1M), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_sm(3PAM), pam_sm_acct_mgmt(3PAM), pam_sm_authenticate(3PAM), pam_sm_chauthtok(3PAM), pam_sm_close_session(3PAM), pam_sm_open_session(3PAM), pam_sm_setcred(3PAM), syslog(3C), krb5.conf(4), pam.conf(4), attributes(5), kerberos(5), krb5envvar(5), pam_krb5_migrate(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

On successful acquisition of initial credentials (ticket-granting ticket), ktkt_warnd(1M) is notified, to alert the user when the initial credentials are about to expire.

名前

pam_krb5_migrate – authentication PAM module for the KerberosV5 auto-migration of users feature

形式

`/usr/lib/security/pam_krb5_migrate.so.1`

機能説明

The KerberosV5 auto-migrate service module for PAM provides functionality for the PAM authentication component. The service module helps in the automatic migration of `PAM_USER` to the client's local Kerberos realm, using `PAM_AUTHTOK` (the PAM authentication token associated with `PAM_USER`) as the new Kerberos principal's password.

KerberosV5 Auto-migrate Authentication Module

The KerberosV5 auto-migrate authentication component provides the `pam_sm_authenticate(3PAM)` function to migrate a user who does not have a corresponding `krb5` principal account to the default Kerberos realm of the client.

`pam_sm_authenticate(3PAM)` uses a host-based client service principal, present in the local `keytab` (`/etc/krb5/krb5.keytab`) to authenticate to `kadmind(1M)` (defaults to the `host/nodename.fqdn` service principal), for the principal creation operation. Also, for successful creation of the `krb5` user principal account, the host-based client service principal being used needs to be assigned the appropriate privilege on the master KDC's `kadm5.acl(4)` file. `kadmind(1M)` checks for the appropriate privilege and validates the user password using PAM by calling `pam_authenticate(3PAM)` and `pam_acct_mgmt(3PAM)` for the `k5migrate` service.

If migration of the user to the KerberosV5 infrastructure is successful, the module will inform users about it by means of a `PAM_TEXT_INFO` message, unless instructed otherwise by the presence of the `quiet` option.

The authentication component always returns `PAM_IGNORE` and is meant to be stacked in `pam.conf` with a requirement that it be listed below pam_authtok_get(5) in the authentication stack. Also, if `pam_krb5_migrate` is used in the authentication stack of a particular service, it is mandatory that `pam_krb5(5)` be listed in the PAM account stack of that service for proper operation (see EXAMPLES).

オプション

The following options can be passed to the KerberosV5 auto-migrate authentication module:

`debug`	Provides `syslog(3C)` debugging information at `LOG_DEBUG` level.
`client_service=`<*service name*>	Name of the service used to authenticate to `kadmind(1M)` defaults to `host`. This means that the module uses `host/`<*nodename.fqdn*> as its client service principal name, KerberosV5 user principal creation operation or <*service*>/<*nodename.fqdn*> if this option is provided.
`quiet`	Do not explain KerberosV5 migration to the user.

This has the same effect as passing the PAM_SILENT flag to pam_sm_authenticate(3PAM) and is useful where applications cannot handle PAM_TEXT_INFO messages.

If not set, the authentication component will issue a PAM_TEXT_INFO message after creation of the Kerberos V5 principal, indicating that it has done so.

expire_pw

Causes the creation of KerberosV5 user principals with password expiration set to now (current time).

使用例

例 1 Sample Entries from pam.conf

The following entries from pam.conf(4) demonstrate the use of the pam_krb5_migrate.so.1 module:

```
login       auth requisite          pam_authtok_get.so.1
login       auth required           pam_dhkeys.so.1
login       auth required           pam_unix_cred.so.1
login       auth sufficient         pam_krb5.so.1
login       auth requisite          pam_unix_auth.so.1
login       auth optional           pam_krb5_migrate.so.1 expire_pw
login       auth required           pam_dial_auth.so.1

other   account requisite       pam_roles.so.1
other   account required        pam_krb5.so.1
other   account required        pam_unix_account.so.1
```

The pam_krb5_migrate module can generally be present on the authentication stack of any service where the application calls pam_sm_authenticate(3PAM) and an authentication token (in the preceding example, the authentication token would be the user's Unix password) is available for use as a Kerberos V5 password.

例 2 Sample Entries from kadm5.acl

The following entries from kadm5.acl(4) permit or deny privileges to the host client service principal:

```
host/*@ACME.COM U root
host/*@ACME.COM ui *
```

The preceding entries permit the pam_krb5_migrate add privilege to the host client service principal of any machine in the ACME.COM KerberosV5 realm, but denies the add privilege to all host service principals for addition of the root user account.

例 3 Sample Entries in pam.conf of the Master KDC

The entries below enable kadmind(1M) on the master KDC to use the k5migrate PAM service in order to validate Unix user passwords for accounts that require migration to the Kerberos realm.

```
k5migrate       auth    required        pam_unix_auth.so.1
k5migrate       account required        pam_unix_account.so.1
```

属性

See attributes(5) for a description of the following attribute:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed

関連項目

kadmind(1M), syslog(3C), pam_authenticate(3PAM), pam_acct_mgmt(3PAM), pam_sm_authenticate(3PAM), kadm5.acl(4), pam.conf(4), attributes(5), pam_authtok_get(5), pam_krb5(5)

名前 pam_ldap – authentication and account management PAM module for LDAP

形式 /usr/lib/security/pam_ldap.so.1

機能説明 The pam_ldap module implements pam_sm_authenticate(3PAM) and pam_sm_acct_mgmt(3PAM), the functions that provide functionality for the PAM authentication and account management stacks. The pam_ldap module ties the authentication and account management functionality to the functionality of the supporting LDAP server. For authentication, pam_ldap can authenticate the user directly to any LDAP directory server by using any supported authentication mechanism, such as DIGEST-MD5. However, the account management component of pam_ldap will work only with the Sun Java System Directory Server. The server's user account management must be properly configured before it can be used by pam_ldap. Refer to the Sun Java System Directory Server Administration Guide for information on how to configure user account management, including password and account lockout policy.

pam_ldap must be used in conjunction with the modules that support the UNIX authentication, password, and account management, which are pam_authtok_get(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), and pam_unix_auth(5). pam_ldap is designed to be stacked directly below these modules. If other modules are designed to be stacked in this manner, the modules can be stacked below the pam_ldap module. The 使用例 section shows how the UNIX modules are stacked with pam_ldap. When stacked together, the UNIX modules are used to control local accounts, such as root. pam_ldap is used to control network accounts, that is, LDAP users. For the stacks to work, pam_unix_auth, pam_unix_account, and pam_passwd_auth must be configured with the binding control flag and the server_policy option. This configuration allows local account override of a network account.

LDAP Authentication Module

The LDAP authentication module verifies the identity of a user. The pam_sm_authenticate(3PAM) function uses the password entered by the user to attempt to authenticate to the LDAP server. If successful, the user is authenticated. See NOTES for information on password prompting.

The authentication method used is either defined in the client profile , or the authentication method is configured by using the ldapclient(1M) command. To determine the authentication method to use, this module first attempts to use the authentication method that is defined, for service pam_ldap, for example, serviceAuthenticationMethod:pam_ldap:sasl/DIGEST-MD5. If no authentication method is defined, pam_ldap uses the default authentication method. If neither are set, the authentication fails. This module skips the configured authentication method if the authentication method is set to none.

The following options can be passed to the LDAP service module:

debug syslog(3C) debugging information at LOG_DEBUG level.

nowarn Turn off warning messages.

These options are case sensitive and must be used exactly as presented here.

LDAP Account Management Module

The LDAP account management module validates the user's account. The pam_sm_acct_mgmt(3PAM) function authenticates to the LDAP server to verify that the user's password has not expired, or that the user's account has not been locked. In the event that there is no user authentication token (PAM_AUTHTOK) available, the pam_sm_acct_mgmt(3PAM) function attempts to retrieve the user's account status without authenticating to the LDAP server as the user logging in. This procedure will succeed only if the LDAP server is Sun Java System Directory server 5.2 patch 4 or newer. The following options can be passed to the LDAP service module:

debug syslog(3C) debugging information at LOG_DEBUG level.

nowarn Turn off warning messages.

These options are case sensitive, and the options must be used exactly as presented here.

LDAP Password Management Module

LDAP password management is no longer supported by pam_ldap. Use pam_authtok_store(5) instead of pam_ldap for password change. pam_authtok_store(5) handles both the local and LDAP accounts and updates the passwords in all the repositories configured by nsswitch.conf(4).

エラー

The authentication service returns the following error codes:

PAM_SUCCESS	The uthentication was successful.
PAM_MAXTRIES	The maximum number of authentication attempts was exceeded.
PAM_AUTH_ERR	The authentication failed.
PAM_USER_UNKNOWN	No account is present for the user.
PAM_BUF_ERR	A memory buffer error occurred.
PAM_SYSTEM_ERR	A system error occurred.
PAM_IGNORE	The user's account was inactivated.

The account management service returns the following error codes:

PAM_SUCCESS	The user was allowed access to the account.
PAM_NEW_AUTHTOK_REQD	A new authentication token is required.
PAM_ACCT_EXPIRED	The user account has expired.
PAM_PERM_DENIED	The user was denied access to the account at this time.
PAM_USER_UNKNOWN	No account is present for the user.
PAM_BUF_ERROR	A memory buffer error occurred.
PAM_SYSTEM_ERR	A system error occurred.

使用例

例 1 Using pam_ldap With Authentication

The following is a configuration for the login service when using `pam_ldap`. The service name `login` can be substituted for any other authentication service such as `dtlogin` or `su`. Lines that begin with the # symbol are comments and are ignored.

```
# Authentication management for login service is stacked.
# If pam_unix_auth succeeds, pam_ldap is not invoked.
# The control flag "binding" provides a local overriding
# remote (LDAP) control. The "server_policy" option is used
# to tell pam_unix_auth.so.1 to ignore the LDAP users.

login   auth requisite  pam_authtok_get.so.1
login   auth required   pam_dhkeys.so.1
login   auth required   pam_unix_cred.so.1
login   auth binding    pam_unix_auth.so.1 server_policy
login   auth required   pam_ldap.so.1
```

例 2 Using pam_ldap With Account Management

The following is a configuration for account management when using `pam_ldap`. Lines that begin with the # symbol are comments and are ignored.

```
# Account management for all services is stacked
# If pam_unix_account succeeds, pam_ldap is not invoked.
# The control flag "binding" provides a local overriding
# remote (LDAP) control. The "server_policy" option is used
# to tell pam_unix_account.so.1 to ignore the LDAP users.

other   account  requisite      pam_roles.so.1
other   account  binding        pam_unix_account.so.1 server_policy
other   account  required       pam_ldap.so.1
```

例 3 Using pam_authtok_store With Password Management For Both Local and LDAP Accounts

The following is a configuration for password management when using `pam_authtok_store`. Lines that begin with the # symbol are comments and are ignored.

```
# Password management (authentication)
# The control flag "binding" provides a local overriding
# remote (LDAP) control. The server_policy option is used
# to tell pam_passwd_auth.so.1 to ignore the LDAP users.

passwd  auth binding  pam_passwd_auth.so.1 server_policy
passwd  auth required pam_ldap.so.1

# Password management (updates)
# This updates passwords stored both in the local /etc
# files and in the LDAP directory. The "server_policy"
# option is used to tell pam_authtok_store to
```

例 3 Using pam_authtok_store With Password Management For Both Local and LDAP Accounts (続き)

```
# follow the LDAP server's policy when updating
# passwords stored in the LDAP directory

other password required   pam_dhkeys.so.1
other password requisite  pam_authtok_get.so.1
other password requisite  pam_authtok_check.so.1
other password required   pam_authtok_store.so.1 server_policy
```

ファイル

`/var/ldap/ldap_client_file`	
`/var/ldap/ldap_client_cred`	The LDAP configuration files of the client. Do not manually modify these files, as these files might not be human readable. Use `ldapclient(1M)` to update these files.
`/etc/pam.conf`	PAM configuration file.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT-Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`idsconfig(1M)`, `ldap_cachemgr(1M)`, `ldapclient(1M)`, `libpam(3LIB)`, `pam(3PAM)`, `pam_sm_acct_mgmt(3PAM)`, `pam_sm_authenticate(3PAM)`, `pam_sm_chauthtok(3PAM)`, `pam_sm_close_session(3PAM)`, `pam_sm_open_session(3PAM)`, `pam_sm_setcred(3PAM)`, `syslog(3C)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`, `ldap(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_authtok_store(5)`, `pam_passwd_auth(5)`, `pam_unix_account(5)`, `pam_unix_auth(5)`

注意事項

The interfaces in `libpam(3LIB)` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own `PAM` handle.

The previously supported `use_first_pass` and `try_first_pass` options are obsolete in this version, are no longer needed, can safely be removed from `pam.conf(4)`, and are silently ignored. They might be removed in a future release. Password prompting must be provided for by stacking `pam_authtok_get(5)` before `pam_ldap` in the `auth` and `password` module stacks and `pam_passwd_auth(5)` in the `passwd` service `auth` stack (as described in the EXAMPLES section). The previously supported password update function is replaced in this release by the previously recommended use of `pam_authtok_store` with the `server_policy` option (as described in the EXAMPLES section).

The functions: pam_sm_setcred(3PAM), pam_sm_chauthtok(3PAM), pam_sm_open_session(3PAM), and pam_sm_close_session(3PAM) do nothing and return PAM_IGNORE in pam_ldap.

名前

pam_list – PAM account management module for UNIX

形式

```
pam_list.so.1
```

機能説明

The pam_list module implements pam_sm_acct_mgmt(3PAM), which provides functionality to the PAM account management stack. The module provides functions to validate that the user's account is valid on this host based on a list of users and/or netgroups in the given file. The users and netgroups are separated by newline character. Netgroups are specified with character '@' as prefix before name of netgroup in the list. The maximum line length is 1023 characters.

The username is the value of PAM_USER. The host is the value of PAM_RHOST or, if PAM_RHOST is not set, the value of the localhost as returned by gethostname(3C) is used.

If neither of the allow, deny, or compat options are specified, the module will look for +/- entries in the local /etc/passwd file. If this style is used, nsswitch.conf(4) must not be configured with compat for the passwd database. If no relevant +/- entry exists for the user, pam_list is not participating in result.

If compat option is specified then the module will look for +/- entries in the local /etc/passwd file. Other entries in this file will be counted as + entries. If no relevant entry exits for the user, pam_list will deny the access.

The following options can be passed to the module:

allow=	The full pathname to a file of allowed users and/or netgroups. Only one of allow= or deny= can be specified.
compat	Activate compat mode.
deny=	The full pathname to a file of denied users and/or netgroups. Only one of deny= or allow= can be specified.
debug	Provide syslog(3C) debugging information at the LOG_AUTH | LOG_DEBUG level.
user	The module should only perform netgroup matches on the username. This is the default option.
nouser	The username should not be used in the netgroup match.
host	Only the host should be used in netgroup matches.
nohost	The hostname should not be used in netgroup matches.
norole	Return PAM_IGNORE if the account (PAM_USER) is a role. This is the default.
role	Evaluate the rules even if PAM_USER is a role account.
user_host_exact	The user and hostname must be in the same netgroup.

エラー

The following error values are returned:

PAM_SERVICE_ERR	An invalid set of module options was given in the pam.conf(4) for this module, or the user/netgroup file could not be opened.
PAM_BUF_ERR	A memory buffer error occurred.
PAM_IGNORE	The module is ignored, as it is not participating in the result.
PAM_PERM_DENIED	The user is not on the allow list or is on the deny list.
PAM_SUCCESS	The account is valid for use at this time.
PAM_USER_UNKNOWN	No account is present for the user

使用例

例 1 Using pam_list in default mode

/etc/pam.conf modification looks like:

```
other   account requisite       pam_roles.so.1
other   account required        pam_unix_account.so.1
other   account required        pam_list.so.1
```

In the case of default mode or compat mode, the important lines in /etc/passwd appear as follows:

```
+loginname    - user is approved
-loginname    - user is disapproved
+@netgroup    - netgroup members are approved
-@netgroup    - netgroup members are disapproved
```

例 2 Using pam_list with allow file

/etc/pam.conf modification looks like:

```
other   account requisite       pam_roles.so.1
other   account required        pam_unix_account.so.1
other   account required        pam_list.so.1 allow=/etc/user.allow
```

/etc/users.allow contains:

```
root
localloginname
remoteloginname
@netgroup
```

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT-Level	MT-Safe with exceptions

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multithreaded application uses its own PAM handle.

関連項目

pam(3PAM), pam_authenticate(3PAM), pam_sm_acct_mgmt(3PAM), syslog(3C), libpam(3LIB), nsswitch.conf(4), pam.conf(4), attributes(5)

名前

pam_passwd_auth – authentication module for password

形式

`pam_passwd_auth.so.1`

機能説明

`pam_passwd_auth` provides authentication functionality to the password service as implemented by `passwd(1)`. It differs from the standard PAM authentication modules in its prompting behavior. It should be the first module on the password service authentication stack.

The name of the user whose password attributes are to be updated must be present in the `PAM_USER` item. This can be accomplished due to a previous call to `pam_start(3PAM)`, or explicitly set by `pam_set_item(3PAM)`. Based on the current user-id and the repository that is to by updated, the module determines whether a password is necessary for a successful update of the password repository, and if so, which password is required.

The following options can be passed to the module:

`debug`	`syslog(3C)` debugging information at the `LOG_DEBUG` level
`nowarn`	Turn off warning messages
`server_policy`	If the account authority for the user, as specified by `PAM_USER`, is a server, do not apply the Unix policy from the passwd entry in the name service switch.

エラー

The following error codes are returned:

`PAM_BUF_ERR`	Memory buffer error
`PAM_IGNORE`	Ignore module, not participating in result
`PAM_SUCCESS`	Successfully obtains authentication token
`PAM_SYSTEM_ERR`	System error

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`passwd(1)`, `pam(3PAM)`, `pam_authenticate(3PAM)`, `pam_start(3PAM)`, `pam_set_item(3PAM)`, `syslog(3C)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_authtok_store(5)`, `pam_dhkeys(5)`, `pam_unix_account(5)`, `pam_unix_auth(5)`, `pam_unix_session(5)`

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

This module relies on the value of the current real UID, this module is only safe for MT-applications that don't change UIDs during the call to pam_authenticate(3PAM).

名前

pam_pkcs11 – PAM Authentication Module for the PKCS#11 token libraries

形式

`pam_pkcs11.so [debug] [config_file=`*filename*`]`

機能説明

The `pam_pkcs11` module implements `pam_sm_authenticate(3PAM)`, which provides functionality to the PAM authentication stack. This module allows a user to login a system, using a X.509 certificate and its dedicated private key stored in a PKCS#11 token. This module currently supports the RSA algorithm only.

To verify the dedicated private key is truly associated with the X.509 certificate, the following verification procedure is performed in this module by default:

- Generate 128 random byte data
- Sign the random data with the private key and get a signature. This step is done in the PKCS#11 token.
- Verify the signature using the public key extracted from the certificate.

For the verification of the users' certificates, locally stored CA certificates as well as either online or locally accessible CRLs are used.

PAM CONFIGURATION

The `pam_pkcs11.so` service module can be used in the `<auth>` PAM chain. The program that needs a PAM service should be configured in the `/etc/pam.conf` file. For details on how to configure PAM services, see `pam.conf(4)`.

The following example uses only `pam_pkcs11` for authentication:

```
login auth requisite pam_pkcs11.so.1
login autho required pam_unix_cred.so.1
```

The following example uses `pam_pkcs11` for authentication with fallback to standard UNIX authentication:

```
login auth sufficient pam_pkcs11.so.1
login auth requisite  pam_authtok_get.so.1
login auth required   pam_dhkeys.so.1
login auth required   pam_unix_cred.so.1
login auth required   pam_unix_auth.so.1
```

PAM_PKCS11 CONFIGURATION

To configure the `pam_pkcs11` module, you must have the following information:

- Which PKCS #11 token you are going to use
- Which mapper(s) you need, and if needed, how to create and edit the related mapping files
- The root Certificate Authority files, and if required, the Certificate Revocation Lists files
- The list of authorized users to login, and their corresponding certificates

To configure the `pam_pkcs11` module, you need to modify the `pam_pkcs11.conf` configuration file which is in the `/etc/security/pam_pkcs11` directory by default. For

detailed information on how to configure the pam_pkcs11 module, see the PAM-PKCS11 User Manual, available at the http://www.opensc-project.org/ web site, under the PAM PKCS#11 link.

The following example illustrates how to configure the pam_pkcs11 module for a user whose certificate and private key are stored in the Solaris pkcs11_softtoken keystore. This example uses the default certificate verification policy.

- Set up the PKCS#11 module.

  On Solaris, the PKCS#11 module should be set to /usr/lib/libpkcs11.so.1, the PKCS#11 Cryptographic Framework library.

- Set up the slot_description entry.

  Specifies the slot to be used. For example, slot_description = "Sun Crypto Softtoken". The default value for this entry is none which means to use the first slot with an available token.

  An administrator can use the cryptoadm list -vcommand to find all the available slots and their slot descriptions. For more information, see libpkcs11(3LIB) and cryptoadm(1M).

- Install or create user certificates and its dedicated private keys in the specific PKCS#11 token.

- Set up the certificate verification policy (cert_policy). If needed, set up CA certificate and CRL files.

  The certificate verification policy includes:

none	Perform no verification
ca	Perform CA check
signature	Perform a signature check to ensure that private and public key matches
crl_*xxx*	Perform various certificate revocation checking

  As this example uses the default policy, cert_policy = ca,signature, an administer needs to set up the CA certificates.

  – Copy the CA certificate to the /etc/security/pam_pkcs11/cacerts directory.

    A certificate that is self-signed is its own CA certificate. Therefore, in this example, the certificate is placed both in the Softtoken keystore and in the CA certificate directory.

  – Make hash links for CA certificates

    ```
    $ /etc/security/pam_pkcs11/make_hash_link.sh \
          /etc/security/pam_pkcs11/cacerts
    ```

- Set up the mappers and mapfiles.

When a X509 certificate is provided, there are no direct ways to map a certificate to a login. The `pam_pkcs11` module provides a configurable way with mappers to specify `cert-to-user` mapping.

Many mappers are provided by the `pam_pkcs11` module, for example, the common name (CN) mapper, the digest mapper, the Email mapper, or the LDAP mapper.

A user can configure a mapper list in the `pam_pkcs11.conf` file. The mappers in the list are used sequentially until the certificate is successfully matched with the user.

The default mapper list is as follows:

```
use_mappers = digest, cn, pwent, uid, mail, subject, null;
```

Some mappers do not require the specification of a mapfile, for example, the common name mapper. Other mappers require mapfiles, for example, the digest mapper. Some sample mapping files can be found in the `/etc/security/pam_pkcs11` directory.

オプション

The following options are supported:

`config_file=`*filename*
: Specify the configuration file. The default value is `/etc/security/pam_pkcs11/pam_pkcs11.conf`.

`debug`
: Enable debugging output.

ファイル

`/usr/lib/security/pam_pkcs11.so`
: `pam_pkcs11` module

`/usr/lib/pam_pkcs11/ldap_mapper.so`
: Mapper module.

`/usr/lib/pam_pkcs11/opensc_mapper.so`
: Mapper module.

`/usr/lib/pam_pkcs11/openssh_mapper.so`
: Mapper module.

`/etc/security/pam_pkcs11/pam_pkcs11.conf`
: Configuration file.

`/etc/security/pam_pkcs11/cacerts`
: Configuration directory. Stores the CA certificates.

`/etc/security/pam_pkcs11/crls`
: Configuration directory. Stores the CRL files.

`/etc/security/pam_pkcs11/digest_mapping.example`
: Sample mapfile.

`/etc/security/pam_pkcs11/subject_mapping.example`
: Sample mapfile.

`/etc/security/pam_pkcs11/mail_mapping.example`
Sample mapfile.

`/etc/security/pam_pkcs11/make_hash_link.sh`
Sample script.

Authors

`PAM-pkcs11` was originally written by MarioStrasser , `mast@gmx.net`.

Newer versions are from Juan Antonio Martinez, `jonsito@teleline.es`

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	library/security/pam/module/pam-pkcs11, SUNWpampkcs11r, SUNWpampkcs11-docs
Interface Stability	Uncommitted

関連項目

`pkcs11_inspect(1)`, `pklogin_finder(1)`, `cryptoadm(1M)`, `libpkcs11(3LIB)libpkcs11(3LIB)pam_sm_authenticate(3PAM)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`, `pkcs11_softtoken(5)`

PAM-PKCS11 User Manual, available at the `http://www.opensc-project.org/` web site, under the `PAM PKCS#11` link.

名前

pam_rhosts_auth – authentication management PAM module using ruserok()

形式

`/usr/lib/security/pam_rhosts_auth.so.1`

機能説明

The rhosts PAM module, `/usr/lib/security/pam_rhosts_auth.so.1`, authenticates a user via the `rlogin` authentication protocol. Only `pam_sm_authenticate()` is implemented within this module. `pam_sm_authenticate()` uses the `ruserok(3SOCKET)` library function to authenticate the `rlogin` or `rsh` user. `pam_sm_setcred()` is a null function.

`/usr/lib/security/pam_rhosts_auth.so.1` is designed to be stacked on top of the `/usr/lib/security/pam_unix.so.1` module for both the `rlogin` and `rsh` services. This module is normally configured as *sufficient* so that subsequent authentication is performed only on failure of `pam_sm_authenticate()`. The following option may be passed in to this service module:

`debug` `syslog(3C)` debugging information at LOG_DEBUG level.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`pam(3PAM)`, `pam_authenticate(3PAM)`, `ruserok(3SOCKET)`, `syslog(3C)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`

注意事項

The interfaces in `libpam()` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前

pam_roles – Solaris Roles account management module

形式

`pam_roles.so.1`

機能説明

The `pam_roles` module implements `pam_sm_acct_mgmt(3PAM)`. It provides functionality to verify that a user is authorized to assume a role. It also prevents direct logins to a role. The `user_attr(4)` database is used to determine which users can assume which roles.

The PAM items `PAM_USER` and `PAM_AUSER`, and `PAM_RHOST` are used to determine the outcome of this module. `PAM_USER` represents the new identity being verified. `PAM_AUSER`, if set, represents the user asserting a new identity. If `PAM_AUSER` is not set, the real user ID of the calling service implies that the user is asserting a new identity. Notice that root can never have roles.

This module is generally stacked above the `pam_unix_account(5)` module.

The following options are interpreted:

`allow_remote` Allows a remote service to specify the user to enter as a role.

`debug` Provides `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_DEBUG` level.

エラー

The following values are returned:

`PAM_IGNORE` If the type of the new user identity (`PAM_USER`) is "`normal`". Or, if the type of the new user identity is "`role`" and the user asserting the new identity (`PAM_AUSER`) has the new identity name in its list of roles.

`PAM_USER_UNKNOWN` No account is present for user.

`PAM_PERM_DENIED` If the type of the new user identity (`PAM_USER`) is "`role`" and the user asserting the new identity (`PAM_AUSER`) does not have the new identity name in its list of roles.

使用例

例 1 Using the pam_roles.so.1 Module

The following are sample entries from `pam.conf(4)`. These entries demonstrate the use of the `pam_roles.so.1` module:

```
cron account required pam_unix_account.so.1
#
other account requisite pam_roles.so.1
other account required pam_unix_account.so.1
#
```

The `cron` service does not invoke `pam_roles.so.1`. Delayed jobs are independent of role assumption. All other services verify that roles cannot directly login. The "`su`" service (covered by the "`other`" service entry) verifies that if the new user is a role, the calling user is authorized for that role.

例 2 Allowing Remote Roles

Remote roles should only be allowed from remote services that can be trusted to provide an accurate PAM_AUSERname. This trust is a function of the protocol (such as sshd-hostbased).

The following is a sample entry for a pam.conf(4) file. It demonstrates the use of pam_roles configuration for remote roles for the sshd-hostbased service.

```
sshd-hostbased account requisite pam_roles.so.1 allow_remote
sshd-hostbased account required pam_unix_account
```

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

roles(1), sshd(1M), su(1M), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_acct_mgmt(3PAM), pam_setcred(3PAM), pam_set_item(3PAM), pam_sm_acct_mgmt(3PAM), syslog(3C), pam.conf(4), user_attr(4), attributes(5), pam_authtok_check(5), pam_authtok_get(5), pam_authtok_store(5), pam_dhkeys(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), pam_unix_auth(5), pam_unix_session(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

This module should never be stacked alone. It never returns PAM_SUCCESS, as it never makes a positive decision.

The allow_remote option should only be specified for services that are trusted to correctly identify the remote user (that is, sshd-hostbased).

PAM_AUSER has replaced PAM_RUSER whose definition is limited to the rlogin/rsh untrusted remote user name. See pam_set_item(3PAM).

名前

pam_sample – a sample PAM module

形式

`/usr/lib/security/pam_sample.so.1`

機能説明

The SAMPLE service module for PAM is divided into four components: authentication, account management, password management, and session management. The sample module is a shared object that is dynamically loaded to provide the necessary functionality.

Sample Authentication Component

The SAMPLE authentication module provides functions to test the PAM framework functionality using the `pam_sm_authenticate(3PAM)` call. The SAMPLE module implementation of the `pam_sm_authenticate(3PAM)` function compares the user entered password with the password set in the `pam.conf(4)` file, or the string `test` if a default test password has not been set. The following options can be passed in to the SAMPLE Authentication module:

`debug`	Syslog debugging information at the `LOG_DEBUG` level.
`pass=newone`	Sets the password to be `newone`.
`first_pass_good`	The first password is always good when used with the use_first_pass or try_first_pass option.
`first_pass_bad`	The first password is always bad when used with the use_first_pass or try_first_pass option.
`always_fail`	Always returns `PAM_AUTH_ERR`.
`always_succeed`	Always returns `PAM_SUCCESS`.
`always_ignore`	Always returns `PAM_IGNORE`.
`use_first_pass`	Use the user's initial password (entered when the user is authenticated to the first authentication module in the stack) to authenticate with the SAMPLE module. If the passwords do not match, or if this is the first authentication module in the stack, quit and do not prompt the user for a password. It is recommended that this option only be used if the SAMPLE authentication module is designated as *optional* in the `pam.conf` configuration file.
`try_first_pass`	Use the user's initial password (entered when the user is authenticated to the first authentication module in the stack) to authenticate with the SAMPLE module. If the passwords do not match, or if this is the first authentication module in the stack, prompt the user for a password. The SAMPLE module `pam_sm_setcred(3PAM)` function always returns `PAM_SUCCESS`.

Sample Account Management Component

The SAMPLE Account Management Component implements a simple access control scheme that limits machine access to a list of authorized users. The list of authorized users is supplied

as option arguments to the entry for the SAMPLE account management PAM module in the `pam.conf` file. Note that the module always permits access to the root super user.

The option field syntax to limit access is shown below: allow= *name[,name]* allow= *name [allow=name]*

The example `pam.conf` show below permits only larry to `login` directly. `rlogin` is allowed only for don and larry. Once a user is logged in, the user can use `su` if the user are sam or eric.

login	account	require	pam_sample.so.1	allow=larry
gdm	account	require	pam_sample.so.1	allow=larry
rlogin	account	require	pam_sample.so.1	allow=don allow=larry
su	account	require	pam_sample.so.1	allow=sam,eric

The debug and nowarn options are also supported.

Sample Password Management Component

The SAMPLE Password Management Component function (`pam_sm_chauthtok(3PAM)`), always returns `PAM_SUCCESS`.

Sample Session Management Component

The SAMPLE Session Management Component functions (`pam_sm_open_session(3PAM)`, `pam_sm_close_session(3PAM)`) always return `PAM_SUCCESS`.

属性

See `attributes(5)` for description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`pam(3PAM)`, `pam_sm_authenticate(3PAM)`, `pam_sm_chauthtok(3PAM)`, `pam_sm_close_session(3PAM)`, `pam_sm_open_session(3PAM)`, `pam_sm_setcred(3PAM)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `attributes(5)`

警告

This module should never be used outside of a closed debug environment. The examples of the `use_first_pass` and `try_first_pass` options are obsolete for all other Solaris delivered PAM service modules

注意事項

The interfaces in `libpam()` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前

pam_smbfs_login – PAM user credential authentication module for SMB/CIFS client login

形式

`pam_smb_cred.so.1`

機能説明

The `pam_smbfs_login` module implements `pam_sm_setcred(3PAM)` to provide functions that act equivalently to the `smbadm(1M)` `add-key` command.

This optional functionality is meant to be used only in environments that do not run Active Directory or Kerberos, but which synchronize passwords between Solaris clients and their CIFS/SMB servers.

This module permits the login password to be stored as if the `smbadm(1M)` `add-key` command was used to store a password for `PAM_USER` in the user or system default domain.

To use this functionality, add the following line to the `/etc/pam.conf` file:

```
login  auth optional    pam_smbfs_login.so.1
```

Authentication service modules must implement both `pam_sm_authenticate(3PAM)` and `pam_sm_setcred(3PAM)`. In this module, `pam_sm_authenticate(3PAM)` always returns `PAM_IGNORE`.

The `pam_sm_setcred(3PAM)` function accepts the following flags:

`PAM_REFRESH_CRED`
Returns PAM_IGNORE.

`PAM_SILENT`
Suppresses messages.

`PAM_ESTABLISH_CRED`
`PAM_REINITIALIZE_CRED`
Stores the authentication token for PAM_USER in the same manner as the `smbadm(1M)` `add-key` command.

`PAM_DELETE_CRED`
Deletes the stored password for PAM_USER in the same manner as the `smbadm(1M)` `remove-key` command.

The following options can be passed to the `pam_smbfs_login` module:

`debug`
Produces `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_AUTH` or `LOG_DEBUG` level.

`nowarn`
Suppresses warning messages.

エラー

Upon successful completion of `pam_sm_setcred(3PAM)`, `PAM_SUCCESS` is returned. The following error codes are returned upon error:

`PAM_USER_UNKNOWN`
User is unknown.

PAM_AUTHTOK_ERR
Password is bad.

PAM_AUTH_ERR
Domain is bad.

PAM_SYSTEM_ERR
System error.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attribute:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

smbadm(1M), syslog(3C), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_setcred(3PAM), pam_sm(3PAM), pam_sm_authenticate(3PAM), pam_sm_chauthtok(3PAM), pam_sm_setcred(3PAM), pam.conf(4), attributes(5), smbfs(7FS)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前

pam_smb_passwd – SMB password management module

形式

`pam_smb_passwd.so.1`

機能説明

The `pam_smb_passwd` module enhances the PAM password management stack. This functionality supports the changing or adding of SMB passwords for local Solaris users. The Solaris SMB server uses SMB passwords to authenticate connected Solaris users. This module includes the `pam_sm_chauthtok(3PAM)` function.

The `pam_sm_chauthtok()` function accepts the following flags:

`PAM_PRELIM_CHECK`
Always returns `PAM_IGNORE`.

`PAM_SILENT`
Suppresses messages.

`PAM_UPDATE_AUTHTOK`
Updates or creates a new SMB local LM/NTLM hash for the user that is specified in `PAM_USER` by using the authentication information found in `PAM_AUTHTOK`. The LM hash is only created if the `smbd/lmauth_level` property value of the `smb/server` service is set to 3 or less. `PAM_IGNORE` is returned if the user is not in the local `/etc/passwd` repository.

The following options can be passed to the `pam_smb_passwd` module:

`debug`
Produces `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_AUTH` or `LOG_DEBUG` level.

`nowarn`
Suppresses warning messages.

ファイル

`/var/smb/smbpasswd`
Stores SMB passwords for Solaris users.

エラー

Upon successful completion of `pam_sm_chauthtok()`, `PAM_SUCCESS` is returned. The following error codes are returned upon error:

`PAM_AUTHTOK_ERR`
Authentication token manipulation error

`PAM_AUTHTOK_LOCK_BUSY`
SMB password file is locked

`PAM_PERM_DENIED`
Permissions are insufficient for accessing the SMB password file

`PAM_SYSTEM_ERR`
System error

`PAM_USER_UNKNOWN`
User is unknown

属性

See the attributes(5) man page for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

smbd(1M), syslog(3C), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_chauthtok(3PAM), pam_sm(3PAM), pam_sm_chauthtok(3PAM), pam.conf(4), attributes(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe *only* if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

The pam_smb_passwd.so.1 module should be stacked following all password qualification modules in the PAM password stack.

名前

pam_tsol_account – Trusted Extensions 用 PAM アカウント管理モジュール

形式

`/usr/lib/security/pam_tsol_account.so.1`

機能説明

PAM 用の Solaris Trusted Extensions サービスモジュール `/usr/lib/security/pam_tsol_account.so.1` は、ラベルに関連したアカウント制限を検査します。`pam_tsol_account.so.1` モジュールは、必要な機能をオンデマンドで提供する、動的にロード可能な共有オブジェクトです。パスは、PAM 構成ファイルで指定されます。

`pam_tsol_account.so.1` には、アカウント管理を実行するための関数 `pam_sm_acct_mgmt()` が含まれます。この関数は、ユーザーに許可されるラベル範囲を検査します。許可されるラベル範囲のデフォルトは、`label_encodings(4)` ファイル内に設定されています。これらのデフォルトは、`user_attr(4)` データベース内のエントリで上書きできます。

デフォルトでは、このモジュールは、大域ゾーンに接続する遠隔ホストが CIPSO ホストタイプであることが必要です。このポリシーを無効にするには、次に示すように、`pam.conf(4)` のエントリのオプションとして `allow_unlabeled` キーワードを追加します。

```
other  account required     pam_tsol_account allow_unlabeled
```

オプション

このモジュールに渡すことができるオプションを、次に示します。

`allow_unlabeled` ラベル付けされていないテンプレートタイプのホストからのリモート接続を許可します。

`debug` デバッグ情報を `LOG_DEBUG` レベルで提供します。`syslog(3C)` を参照してください。

戻り値

次の値が返されます。

`PAM_SUCCESS` アカウントは、今回およびこのラベルでの使用で有効です。

`PAM_PERM_DENIED` 現在のプロセスラベルがユーザーのラベル範囲外にある、プロセスのラベル情報を使用できない、遠隔ホストタイプが無効である、のいずれかです。

Other values 通常の PAM 操作と一致するエラーコードを返します。エラー関連の戻り値の詳細は、`pam(3PAM)` のマニュアルページを参照してください。

属性

次の属性については、 `attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
インタフェースの安定性	確実

属性タイプ	属性値
MT レベル	例外付きで MT-安全

libpam(3LIB) のインタフェースは、マルチスレッドアプリケーション内部の各スレッドが独自の PAM ハンドルを使用する場合にのみ、「MT- 安全」です。

関連項目

keylogin(1), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_sm_acct_mgmt(3PAM), pam_start(3PAM), syslog(3C), label_encodings(4), pam.conf(4), user_attr(4), attributes(5)

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』の第 15 章「PAM の使用」

注意事項

このマニュアルページに記載されている機能を利用できるのは、システムが Trusted Extensions を使用して構成されている場合だけです。

名前

pam_unix_account – PAM account management module for UNIX

形式

`pam_unix_account.so.1`

機能説明

`pam_unix_account` module implements `pam_sm_acct_mgmt()`, which provides functionality to the PAM account management stack. The module provides functions to validate that the user's account is not locked or expired and that the user's password does not need to be changed. The module retrieves account information from the configured databases in `nsswitch.conf(4)`.

The following options can be passed to the module:

`debug`	`syslog(3C)` debugging information at the `LOG_DEBUG` level
`nowarn`	Turn off warning messages
`server_policy`	If the account authority for the user, as specified by `PAM_USER`, is a server, do not apply the Unix policy from the passwd entry in the name service switch.

エラー

The following values are returned:

`PAM_UNIX_ACCOUNT`	User account has expired
`PAM_AUTHTOK_EXPIRED`	Password expired and no longer usable
`PAM_BUF_ERR`	Memory buffer error
`PAM_IGNORE`	Ignore module, not participating in result
`PAM_NEW_AUTHTOK_REQD`	Obtain new authentication token from the user
`PAM_PERM_DENIED`	The account is locked or has been inactive for too long
`PAM_SERVICE_ERR`	Error in underlying service module
`PAM_SUCCESS`	The account is valid for use at this time
`PAM_USER_UNKNOWN`	No account is present for the user

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`pam(3PAM)`, `pam_authenticate(3PAM)`, `syslog(3C)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `nsswitch.conf(4)`, `attributes(5)`

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

Attempts to validate locked accounts are logged via syslog(3C) to the LOG_AUTH facility with a LOG_NOTICE severity.

名前

pam_unix_auth – PAM authentication module for UNIX

形式

pam_unix_auth.so.1

機能説明

The pam_unix_auth module implements pam_sm_authenticate(), which provides functionality to the PAM authentication stack. It provides functions that use crypt(3C) to verify that the password contained in the PAM item PAM_AUTHTOK is the correct password for the user specified in the item PAM_USER.

If PAM_AUSER and PAM_USER are both specified and PAM_USER is a role, the user_attr(4) keyword roleauth is checked to determine if the password that is checked is for the role (PAM_USER) or the assuming user (PAM_AUSER). If PAM_REPOSITORY is specified, the user's pass word is fetched from that repository. Otherwise, the default nsswitch.conf(4) repository is searched for that user.

For accounts in the name services which support automatic account locking, the account can be configured to be automatically locked (see user_attr(4) and policy.conf(4)) after multiple failed login attempts. For accounts that are configured for automatic locking, if authentication failure is to be returned, the failed login counter is incremented upon each failure. If the number of successive failures equals or exceeds RETRIES as defined in login(1), the account is locked and PAM_MAXTRIES is returned. Currently, only the “files” repository (see passwd(4) and shadow(4)) supports automatic account locking. A successful authentication by this module clears the failed login counter and reports the number of failed attempts since the last successful authentication.

Authentication service modules must implement both pam_sm_authenticate() and pam_sm_setcred(). To allow the authentication portion of UNIX authentication to be replaced, pam_sm_setcred() in this module always returns PAM_IGNORE. This module should be stacked with pam_unix_cred(5) to ensure a successful return from pam_setcred(3PAM).

The following options can be passed to the module:

nowarn
: Turn off warning messages.

server_policy
: If the account authority for the user, as specified by PAM_USER, is a server, do not apply the UNIX policy from the passwd entry in the name service switch.

nolock
: Regardless of the automatic account locking setting for the account, do not lock the account, increment or clear the failed login count. The nolock option allows for exempting account locking on a per service basis.

エラー

The following error codes are returned from pam_sm_authenticate():

PAM_AUTH_ERR
: Authentication failure.

PAM_BUF_ERR
Memory buffer error.

PAM_IGNORE
Ignores module, not participating in result.

PAM_MAXTRIES
Maximum number of retries exceeded.

PAM_PERM_DENIED
Permission denied.

PAM_SUCCESS
Successfully obtains authentication token.

PAM_SYSTEM_ERR
System error.

PAM_USER_UNKNOWN
No account present for user.

The following error codes are returned from pam_sm_setcred():

PAM_IGNORE
Ignores this module regardless of the control flag.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

login(1), passwd(1), useradd(1M), usermod(1M), roleadd(1M), rolemod(1M), crypt(3C), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_authenticate(3PAM), pam_setcred(3PAM), syslog(3C), pam.conf(4), passwd(4), policy.conf(4), nsswitch.conf(4), shadow(4), user_attr(4), attributes(5), pam_authtok_check(5), pam_authtok_get(5), pam_authtok_store(5), pam_dhkeys(5), pam_passwd_auth(5), pam_unix_account(5), pam_unix_session(5)

注意事項

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

If the PAM_REPOSITORY *item_type* is set and a service module does not recognize the type, the service module does not process any information, and returns PAM_IGNORE. If the PAM_REPOSITORY *item_type* is not set, a service module performs its default action.

名前

pam_unix_cred – PAM user credential authentication module for UNIX

形式

pam_unix_cred.so.1

機能説明

The pam_unix_cred module implements pam_sm_setcred(3PAM). It provides functions that establish user credential information. It is a module separate from the pam_unix_auth(5) module to allow replacement of the authentication functionality independently from the credential functionality.

The pam_unix_cred module must always be stacked along with whatever authentication module is used to ensure correct credential setting.

Authentication service modules must implement both pam_sm_authenticate() and pam_sm_setcred().

pam_sm_authenticate() in this module always returns PAM_IGNORE.

pam_sm_setcred() initializes the user's project, privilege sets and initializes or updates the user's audit context if it hasn't already been initialized. The following flags may be set in the flags field:

PAM_ESTABLISH_CRED
PAM_REFRESH_CRED
PAM_REINITIALIZE_CRED
: Initializes the user's project to the project specified in PAM_RESOURCE, or if PAM_RESOURCE is not specified, to the user's default project. Establishes the user's privilege sets.

  If the audit context is not already initialized and auditing is configured, these flags cause the context to be initialized to that of the user specified in PAM_AUSER (if any) merged with the user specified in PAM_USER and host specified in PAM_RHOST. If PAM_RHOST is not specified, PAM_TTY specifies the local terminal name. Attributing audit to PAM_AUSER and merging PAM_USER is required for correctly attributing auditing when the system entry is performed by another user that can be identified as trustworthy.

  If the audit context is already initialized, the PAM_REINITIALIZE_CRED flag merges the current audit context with that of the user specified in PAM_USER. PAM_REINITIALIZE_CRED is useful when a user is assuming a new identity, as with su(1M).

PAM_DELETE_CRED
: This flag has no effect and always returns PAM_SUCCESS.

The following options are interpreted:

debug
: Provides syslog(3C) debugging information at the LOG_DEBUG level.

nowarn
: Disables any warning messages.

エラー

Upon successful completion of `pam_sm_setcred()`, `PAM_SUCCESS` is returned. The following error codes are returned upon error:

`PAM_CRED_UNAVAIL`	Underlying authentication service cannot retrieve user credentials
`PAM_CRED_EXPIRED`	User credentials have expired
`PAM_USER_UNKNOWN`	User is unknown to the authentication service
`PAM_CRED_ERR`	Failure in setting user credentials
`PAM_BUF_ERR`	Memory buffer error
`PAM_SYSTEM_ERR`	System error

The following values are returned from `pam_sm_authenticate()`:

`PAM_IGNORE`	Ignores this module regardless of the control flag

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`ssh(1)`, `su(1M)`, `settaskid(2)`, `libpam(3LIB)`, `getprojent(3PROJECT)`, `pam(3PAM)`, `pam_set_item(3PAM)`, `pam_sm_authenticate(3PAM)`, `syslog(3C)`, `setproject(3PROJECT)`,`pam.conf(4)`, `nsswitch.conf(4)`, `project(4)`, `attributes(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_authtok_store(5)`, `pam_dhkeys(5)`, `pam_passwd_auth(5)`, `pam_unix_auth(5)`, `pam_unix_account(5)`, `pam_unix_session(5)`, `privileges(5)`

注意事項

The interfaces in `libpam(3LIB)` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

If this module is replaced, the audit context and credential may not be correctly configured.

名前

pam_unix_session – session management PAM module for UNIX

形式

`pam_unix_session.so.1`

機能説明

The `pam_unix_session` module implements `pam_sm_open_session(3PAM)` and `pam_sm_close_session(3PAM)`.

`pam_sm_open_session()` updates the `/var/adm/lastlog` file with the information contained in the `PAM_USER`, `PAM_TTY`, and `PAM_RHOST` items. `pam_unix_account(5)` uses this account to determine the previous time the user logged in.

`pam_sm_close_session()` is a null function.

The following options can be passed to the module:

debug `syslog(3C)` debugging information at the `LOG_DEBUG` level

エラー

Upon successful completion, `PAM_SUCCESS` is returned. The following error codes are returned upon error:

`PAM_SESSION_ERR` Cannot make or remove the entry for the specified session (PAM_TTY is not present).

`PAM_USER_UNKNOWN` No account is present for *user*.

属性

See `attributes(5)` for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT Level	MT-Safe with exceptions

関連項目

`pam(3PAM)`, `pam_authenticate(3PAM)`, `syslog(3C)`, `libpam(3LIB)`, `pam.conf(4)`, `nsswitch.conf(4)`, `attributes(5)`, `pam_authtok_check(5)`, `pam_authtok_get(5)`, `pam_authtok_store(5)`, `pam_dhkeys(5)`, `pam_passwd_auth(5)`, `pam_unix_account(5)`,`pam_unix_auth(5)`,

注意事項

The interfaces in `libpam(3LIB)` are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

名前

pam_zfs_key – PAM user credential module for ZFS

形式

```
pam_zfs_key.so.1 [create] [homes=]
```

機能説明

The pam_zfs_key module implements pam_sm_setcred(3PAM) and pam_sm_chauthtok(3PAM).

The pam_zfs_key module provides functions that allow loading and changing of the ZFS encryption passphrase for encrypted file systems that are mounted at the users home directory location. Authentication service modules must implement both pam_sm_authenticate() and pam_sm_setcred().

pam_sm_authenticate() in this module always returns PAM_IGNORE. If they are located at a different location then the module option, homes= can be used to specify that. It is the ZFS dataset name, not the mountpoint, which would usually be /export/home/.

The last component of the ZFS dataset name must match the value of PAM_USER, that is, the users login name. If the users home directory is a local ZFS filesystem with encryption enabled and the ZFS keysource property is set to passphrase,prompt, on pam_sm_setcred() this module manages the keys as follows:

PAM_DELETE_CRED
: Attempts to umount the filesystem and unload the key. This often fails because there are still processes with the user's home directory as the current working directory. A force module option is provided to attempt a forced unmount first.

PAM_ESTABLISH_CRED
: Attempts to use the value of PAM_AUTHTOK to load the key for the ZFS dataset and mount it.

  If PAM_AUTHTOK is not the correct passphrase, the user is prompted once for an alternate. This value is never stored in PAM_AUTHTOK, even if it is the correct passphrase for the ZFS dataset that is the users home directory. This is equivalent to:

  ```
  zfs key -l rpool/export/home/$USER
  ```

If no ZFS file system exists for the user and the create module option is provided, a new one is created. The ZFS encryption property defaults to on in this case unless the encryption= property is set for the module to override it.

If the create module option is not provided and no ZFS file system exists for the user, the module returns PAM_IGNORE.

The newly created ZFS file system has the following ZFS delegations specified for the user for which it is created: key,keychange,mount. In these cases keysource is always set to passphrase,prompt.

When pam_sm_chauthtok(3PAM) is called, for example, on password change, this module attempts to change the passphrase for the ZFS dataset to match the value in PAM_AUTHTOK. This is equivalent to running:

```
zfs key -c rpool/export/home/$USER
```

This requires that the user have the keychange delegation, as password change usually runs as the user.

The following mount options are supported:

create	Create new ZFS datasets
encryption	Set the ZFS encryption property for create
force	Attempt a umount2(2) with a MS_FORCE of the dataset when doing PAM_DELETE_CRED.
homes=	Alternate location of ZFS datasets for user home directories. The default is rpool/export/home.
nowarn	Do not provide any error messages or warnings.

使用例

例 1 Using pam_zfs_key in Default Mode

The following example uses pam_zfs_key in default mode.

```
gdm     auth requisite          pam_authtok_get.so.1
gdm     auth required           pam_dhkeys.so.1
gdm     auth required           pam_unix_cred.so.1
gdm     auth required           pam_unix_auth.so.1
gdm     auth optional           pam_zfs_key.so.1

other   password required       pam_dhkeys.so.1
other   password requisite      pam_authtok_get.so.1
other   password requisite      pam_authtok_check.so.1
other   password required       pam_authtok_store.so.1
other   password optional       pam_zfs_key.so.1
```

例 2 Specifying an Alternate ZFS Dataset

The following example specifies an alternate ZFS dataset location for the home directory file systems. New entries should be created if they are not present using aes-256-gcm as the ZFS encryption property setting.

```
gdm auth requisite  pam_authtok_get.so.1
gdm auth required   pam_dhkeys.so.1
gdm auth required   pam_unix_cred.so.1
gdm auth required   pam_unix_auth.so.1
gdm auth optional   pam_zfs_key.so.1 homes=tank/users \
create encryption=aes-256-gcm
```

例 3 Making it Mandatory for the ZFS Dataset to Mount

The following example makes it mandatory for the ZFS dataset to mount and ensures the passphrase always stays in sync with the login password.

```
gdm     auth requisite          pam_authtok_get.so.1
gdm     auth required           pam_dhkeys.so.1
gdm     auth required           pam_unix_cred.so.1
gdm     auth required           pam_unix_auth.so.1
gdm     auth required           pam_zfs_key.so.1

other   password required       pam_dhkeys.so.1
other   password requisite      pam_authtok_get.so.1
other   password requisite      pam_authtok_check.so.1
other   password requisite      pam_zfs_key.so.1
other   password required       pam_authtok_store.so.1
```

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed
MT-Level	MT-Safe with exceptions. See below.

The interfaces in libpam(3LIB) are MT-Safe only if each thread within the multi-threaded application uses its own PAM handle.

関連項目

zfs(1M), umount2(2), pam.conf(4), libpam(3LIB), pam(3PAM), pam_sm_chauthtok(3PAM), pam_sm_setcred(3PAM), attributes(5)

名前

pkcs11_kernel – カーネル暗号化フレームワークへの PKCS#11 インタフェース

形式

```
/usr/lib/security/pkcs11_kernel.so
/usr/lib/security/64/pkcs11_kernel.so
```

機能説明

pkcs11_kernel.so オブジェクトは、非公開インタフェースを使用してカーネル暗号化フレームワークと通信することで、RSA Security Inc. の PKCS#11 暗号化トークンインタフェース (Cryptoki) v2.20 仕様を実装します。

一意のハードウェアプロバイダはそれぞれ 1 つの PKCS#11 スロットで表されます。カーネル暗号化フレームワークのハードウェアプロバイダを備えていないシステムでは、この PKCS#11 ライブラリにスロットは存在しません。

このライブラリによって提供される PKCS#11 メカニズムは、使用可能なハードウェアプロバイダによって決まります。

アプリケーション開発者は、pkcs11_kernel.so に直接リンクするのではなく、libpkcs11.so にリンクするようにしてください。libpkcs11(3LIB) を参照してください。

libpkcs11(3LIB) のリストに示されている標準の PKCS#11 関数は、次のものを除きすべて実装されています。

```
C_DecryptDigestUpdate
C_DecryptVerifyUpdate
C_DigestEncryptUpdate
C_GetOperationState
C_InitToken
C_InitPIN
C_SetOperationState
C_SignEncryptUpdate
C_WaitForSlotEvent
```

これらの関数を呼び出すと、CKR_FUNCTION_NOT_SUPPORTED が返されます。

バッファーは 2M バイトを超えることはできません。たとえば、C_Encrypt() は、平文用の 2M バイトのバッファーと暗号化テキスト用の 2M バイトのバッファーを使用すると呼び出すことができます。

C_FindObjects() の呼び出しで取得できるオブジェクトハンドルの最大数は 512 です。

暗号化処理に使用できるカーネルメモリーの最大量は、project.max-crypto-memory リソース制御によって制限されます。カーネル内のバッファーおよびセッション関連の構造体の割り当ては、このリソース制御に対してチャージされます。

戻り値

実装されている各関数の戻り値は、RSA PKCS#11 v2.20 仕様で定義されています。http://www.rsasecurity.com を参照してください。

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
インタフェースの安定性	確実
MT レベル	例外付きで MT-安全。RSA PKCS#11 v2.20 のセクション 6.6.2 を参照してください。
標準	PKCS#11 v2.20

関連項目

cryptoadm(1M), rctladm(1M), libpkcs11(3LIB), attributes(5), pkcs11_softtoken(5)

RSA PKCS#11 v2.20 http://www.rsasecurity.com

注意事項

アプリケーションが PKCS#11 スロットに対してセッションを開いていると、対応するハードウェアプロバイダのドライバは読み込み解除できなくなります。ハードウェアプロバイダのドライバを読み込み解除できるようにするには、そのプロバイダに対して PKCS#11 セッションを開いているアプリケーションを管理者が閉じる必要があります。

名前

pkcs11_kms – Oracle Key Manager の RSA PKCS#11 プロバイダ

形式

```
/usr/lib/security/pkcs11_kms.so

/usr/lib/security/64/pkcs11_kms.so
```

機能説明

pkcs11_kms.so オブジェクトは、Oracle Key Manager (OKM) KMS エージェントプロトコルを使用して Oracle Key Manager アプライアンス (KMA) と対話するために、RSA Security Inc. PKCS#11 Cryptographic Token Interface (Cryptoki)、v2.20 仕様を実装します。このプロバイダは PKCS#11 仕様を実装し、(非公開) KMS クライアントプロトコルを使用してリモート OKM と通信します。

このプロバイダでサポートされている PKCS#11 メカニズムは、CKM_AES_KEY_GEN、CKM_AES_CBC_PAD、および CKM_AES_CBC です。

このプロバイダでサポートされている PKCS#11 インタフェースは次のとおりです。

```
C_Initialize
C_Finalize
C_GetInfo
C_GetAttributeValue
C_SetAttributeValue
C_GetFunctionList
C_GetSlotList
C_GetSlotInfo
C_GetTokenInfo
C_GetMechanismList
C_GetMechanismInfo
C_InitToken
C_SetPIN
C_Login
C_Logout
C_FindObjectsInit/C_FindObjects/C_FindObjectsFinal
C_GenerateKey
C_EncryptInit/C_Encrypt/C_EncryptFinal
C_DecryptInit/C_Decrypt/C_DecryptFinal
C_DestroyObject
C_OpenSession
C_CloseSession
C_CloseAllSessions
C_GetSessionInfo
C_CreateObject
C_CopyObject
C_GetObjectSize
C_EncryptUpdate
C_DecryptUpdate
```

その他の関数を呼び出すと、すべて CKR_FUNCTION_NOT_SUPPORTED が返されます。

前提条件

pkcs11_kms プロバイダは、OKM にアクセスできるシステムでのみ使用できます。OKM 管理者は、OKM にアクセスする各ユーザー (またはアプリケーション) について、エージェント ID を構成する必要があります。これには OKM 管理ツールに含まれている OKM ユーティリティーを使用します。これらのユーティリティーは Oracle Solaris には含まれていません。

OKM 管理者が KMA を使用できるように構成し、パラメータをクライアント (Oracle Solaris のユーザーまたはアプリケーション) に通知したあと、Oracle Solaris PKCS#11 KMS プロバイダを初期化して使用できるようにします。

KMS プロバイダの初期化には、kmscfg(1M) ユーティリティーを使用します。ローカルプロバイダの構成ファイルを使用できるように初期化するには、ユーザーは kmscfg に少なくともプロファイルの名前、OKM エージェント ID、プロファイルのセキュリティー保護に使用されている初期パスワード、および KMA の IP アドレスを入力する必要があります。詳細については、kmscfg(1M) のマニュアルページを参照してください。

kmscfg を実行し、ローカルのトークン名前空間を構成したあと、ユーザーはトークンを使用するために初期化できます。トークンを初期化するには、pktool(1) コマンドを次のように使用します。

```
$ pktool inittoken currlabel=KMS
```

ユーザーは KMS プロバイダを使用するために初期化する前に、SO (セキュリティー責任者) のデフォルトの PIN を入力する必要があります。デフォルトの SO PIN は、OKM 管理者が最初に OKM エージェントを設定したときに使用したものです。トークンの初期化を行うユーザーは、このパスフレーズを知らなければプロバイダを初期化できません。

プロバイダを初期化したあとは、ユーザー PIN をデフォルト値から変更できます。PIN の値を変更するには、再度 pktool(1) を使用します。

ローカル PIN を変更するには、次のコマンドを使用します。

```
$ pktool setpin token=KMS
```

pktool setpin 操作または C_Login() 関数と C_SetPIN() 関数に設定する PIN には、長さが 1 から 256 までで、空文字を含まない、任意の文字列を使用できます。

トークンへのアクセス

ユーザーは自分のトークンを初期化したあと、pktool(1)、decrypt(1)、encrypt(1) で、または PKCS11 アプリケーションを作成することにより、KMS トークンを指定してトークンの使用を開始できます。

使用例

例 1　Oracle Key Manager に鍵を作成する

次のコマンドは、Oracle Key Manager に鍵を作成します。

```
$ pktool genkey token=KMS label=mykey1 keytype=aes keylen=256
```

例 2　Oracle Key Manager の鍵を使用してファイルを暗号化する

次のコマンドは、Oracle Key Manager の鍵を使用してファイルを暗号化します。

```
$ encrypt -a aes -K mykey1 -T KMS -i input.txt -o output.enc
```

例 3　Oracle Key Manager の鍵を使用してファイルを復号化する

次のコマンドは、Oracle Key Manager の鍵を使用してファイルを復号化します。

```
$ decrypt -a aes -K mykey1 -T KMS -i output.enc -o output.txt
```

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
使用条件	/system/library/security/crypto/pkcs11_kms
インタフェースの安定性	確実
MT レベル	例外付きで MT-安全。下記を参照。
標準	PKCS#11 v2.20

「MT-安全」属性の例外については、RSA PKCS#11 v2.20 のセクション 6.6.2 を参照してください。

関連項目

decrypt(1), encrypt(1), pktool(1), cryptoadm(1M), kmscfg(1M), libpkcs11(3LIB), attributes(5)

『KMS 2.2: Administration Guide』

『Oracle Key Manager (OKM) Administration Guide』

注意事項

pkcs11_kms.so は、専用のディレクトリを使用して、構成ファイルおよび KMA への接続を初期化するために必要なほかのデータを保持します。この専用ディレクトリは、それが最初に作成されたホストに対してローカルなディレクトリです。デフォルトでは、KMS トークンのディレクトリ領域は /var/user/kms/$USERNAME です。デフォルトの KMS ディレクトリは、kmscfg(1M)、decrypt(1)、encrypt(1)、および pktool(1) コマンドを使用する前に KMSTOKEN_DIR 環境変数を設定することによって上書きできます。

PKCS#11 クライアントでは、Oracle Key Manager のソフトウェアバージョン 2.4 がインストールされていることが必要です。

PKCS#11 クライアントが、複数システムから同じエージェント ID を使用している場合、このエージェントはワンタイムパスフレーズフラグを設定しないで作成する必要があります。このオプションは、OKM クラスタの一部のメンバーが 2.4 より前の OKM ソフトウェアバージョンを実行している場合は使用できません。エージェントの作成の詳細については、『Oracle Key Manager (OKM) Administration Guide』を参照してください。

OKM エージェントは、PKCS#11 クライアントの鍵の作成に使用される前に、デフォルト鍵グループが割り当てられる必要があります。デフォルト鍵グループがエージェントに割り当てられない場合、操作は `CKR_PIN_INCORRECT` エラーで失敗します。エージェントへの鍵グループ割り当ての詳細については、『Oracle Key Manager (OKM) Administration Guide』を参照してください。

名前

pkcs11_softtoken – ソフトウェアの RSA PKCS#11 ソフトトークン

形式

```
/usr/lib/security/pkcs11_softtoken.so
/usr/lib/security/64/pkcs11_softtoken.so
```

機能説明

pkcs11_softtoken.so オブジェクトは、RSA Security Inc. の PKCS#11 暗号化トークンインタフェース (Cryptoki) v2.20 仕様をソフトウェアに実装します。この PKCS#11 の実装により、トークンオブジェクトの永続的ストレージが提供されます。

アプリケーション開発者は、pkcs11_softtoken.so に直接リンクするのではなく、libpkcs11.so にリンクするようにしてください。libpkcs11(3LIB) を参照してください。

実装されている暗号化アルゴリズムは、DES、3DES、AES、Blowfish、RC4、MD5、SHA1、SHA256、SHA384、SHA512、RSA、DSA、および ECC です。

libpkcs11(3LIB) のリストに示されている標準の PKCS#11 関数は、次のものを除きすべて実装されています。

```
C_GetObjectSize
C_InitPIN
C_InitToken
C_WaitForSlotEvent
```

これらの関数を呼び出すと、CKR_FUNCTION_NOT_SUPPORTED が返されます。

サポートされている RSA PKCS#11 v2.20 メカニズムは次のとおりです。

```
CKM_RSA_PKCS_KEY_PAIR_GEN
CKM_RSA_PKCS
CKM_RSA_X_509

CKM_DSA_KEY_PAIR_GEN
CKM_DSA
CKM_DSA_SHA1

CKM_DH_PKCS_KEY_PAIR_GEN
CKM_DH_PKCS_DERIVE

CKM_EC_KEY_PAIR_GEN
CKM_ECDSA
CKM_ECDSA_SHA1
CKM_ECDH1_DERIVE

CKM_DES_KEY_GEN
CKM_DES_ECB
CKM_DES_CBC
CKM_DES_CBC_PAD
```

```
CKM_DES3_KEY_GEN
CKM_DES3_ECB
CKM_DES3_CBC
CKM_DES3_CBC_PAD

CKM_AES_KEY_GEN
CKM_AES_ECB
CKM_AES_CBC
CKM_AES_CBC_PAD
CKM_AES_CTR

CKM_BLOWFISH_KEY_GEN
CKM_BLOWFISH_CBC

CKM_RC4_KEY_GEN
CKM_RC4

CKM_MD5_RSA_PKCS
CKM_SHA1_RSA_PKCS
CKM_SHA256_RSA_PKCS
CKM_SHA384_RSA_PKCS
CKM_SHA512_RSA_PKCS

CKM_MD5
CKM_SHA_1
CKM_SHA256
CKM_SHA384
CKM_SHA512

CKM_MD5_HMAC
CKM_MD5_HMAC_GENERAL
CKM_SHA_1_HMAC
CKM_SHA_1_HMAC_GENERAL
CKM_SHA256_HMAC
CKM_SHA256_HMAC_GENERAL
CKM_SHA384_HMAC
CKM_SHA384_HMAC_GENERAL

CKM_MD5_KEY_DERIVATION
CKM_SHA1_KEY_DERIVATION
CKM_SHA256_KEY_DERIVATION
CKM_SHA384_KEY_DERIVATION
CKM_SHA512_KEY_DERIVATION

CKM_SSL3_PRE_MASTER_KEY_GEN
CKM_SSL3_MASTER_KEY_DERIVE
CKM_SSL3_KEY_AND_MAC_DERIVE
CKM_SSL3_MASTER_KEY_DERIVE_DH
```

CKM_TLS_PRE_MASTER_KEY_GEN
CKM_TLS_MASTER_KEY_DERIVE
CKM_TLS_KEY_AND_MAC_DERIVE
CKM_TLS_MASTER_KEY_DERIVE_DH

次に示す各タイプの鍵オブジェクトには、トークン固有の属性がいくつかあります。これらは、オブジェクトの作成、鍵/鍵ペアの生成、および鍵の派生の結果として、デフォルトで true に設定されます。

公開鍵オブジェクト	CKA_ENCRYPT、CKA_VERIFY、 CKA_VERIFY_RECOVER
秘密鍵オブジェクト	CKA_DECRYPT、CKA_SIGN、 CKA_SIGN_RECOVER、CKA_EXTRACTABLE
秘密鍵オブジェクト	CKA_ENCRYPT、CKA_DECRYPT、 CKA_SIGN、CKA_VERIFY、CKA_EXTRACTABLE

サポートされている証明書オブジェクトは次のとおりです。

CKC_X_509	CKC_X_509 証明書オブジェクトでサポートされている属性は、CKA_SUBJECT、CKA_VALUE 、CKA_LABEL、CKA_ID、CKA_ISSUER 、CKA_SERIAL_NUMBER、および CKA_CERTIFICATE_TYPE です。
CKC_X_509_ATTR_CERT	CKC_X_509_ATTR_CERT 証明書オブジェクトでサポートされている属性 は、CKA_OWNER、CKA_VALUE、CKA_LABEL、CKA_SERIAL_NUMBER、CKA_AC_ISS 、CKA_ATTR_TYPES、および CKA_CERTIFICATE_TYPE です。

テンプレートに一致するオブジェクトの検索操作は C_FindObjectsInit で実行されます。一致したオブジェクトは、以降の C_FindObjects 操作のためにキャッシュされます。

pkcs11_softtoken.so オブジェクトにより、トークンオブジェクトを保存するためのファイルシステムベースの永続的なトークンオブジェクトストアが提供されます。トークンオブジェクトストアのデフォルトの場所は、getpwuid_r () から返されるユーザーのホームディレクトリです。ユーザーは ${SOFTTOKEN_DIR} 環境変数を使用すると、デフォルトの場所を変更できます。

トークンオブジェクトストアが一度も初期化されていない場合、C_Login () 関数は CKR_OK を返すことがありますが、ユーザーは非公開のトークンオブジェクトの作成、生成、派生、または検索を行うことはできず、CKR_PIN_EXPIRED が返されます。

ユーザーは pktool(1) setpin コマンドを使用し、古いパスフレーズとしてデフォルトのパスフレーズ「changeme」を設定して、オブジェクトストアのパスフレーズを

変更する必要があります。この操作は、パスフレーズを初期化して、新しく作成したトークンオブジェクトストアに設定するために必要です。

ユーザーは pktool setpin コマンドで設定した新しいパスフレーズを使用してオブジェクトストアにログインしたあと、この新しく作成されたオブジェクトストアに非公開のトークンオブジェクトを作成して保存できます。setpin でトークンオブジェクトストアを初期化するまでは、C_Login() 関数を使用することはできますが、ユーザーが非公開のトークンオブジェクトの作成、生成、派生、または検索を試みるとすべて失敗し、CKR_PIN_EXPIRED エラーが返されます。

C_Login() 関数と C_SetPIN() 関数に指定する PIN には、長さが 1 から 256 までで、空文字を含まない、任意の文字列を使用できます。

トークンオブジェクトストアのデフォルトの場所は、gerpwuid_r() から返されるユーザーのホームディレクトリ内にあります。そのあとに、/.sunw/pkcs11_softtoken/ が続き、デフォルトの場所は ~/.sunw/pkcs11_softtoken() です。

ユーザーは ${SOFTTOKEN_DIR} 環境変数を使用すると、デフォルトの場所を変更できます。代替のトークンオブジェクトストアの場所は ${SOFTTOKEN_DIR}/pkcs11_softtoken/ です。

戻り値

実装されている各関数の戻り値は、RSA PKCS#11 v2.20 仕様で定義されています。http://www.rsasecurity.com を参照してください。

ファイル

user_home_directory/.sunw/pkcs11_softtoken	ユーザーのデフォルトのトークンオブジェクトストア
${SOFTTOKEN_DIR}/pkcs11_softtoken	代替のトークンオブジェクトストア

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
インタフェースの安定性	確実
MT レベル	例外付きで MT-安全。RSA PKCS#11 v2.20 のセクション 6.6.2 を参照してください。
標準	PKCS#11 v2.20

関連項目

pktool(1), cryptoadm(1M), libpkcs11(3LIB), attributes(5), pkcs11_kernel(5)

RSA PKCS#11 v2.20 http://www.rsasecurity.com

名前

pkcs11_tpm – トラステッドプラットフォームモジュール (TPM) 用 RSA PKCS#11 トークン

形式

/usr/lib/security/pkcs11_tpm.so

/usr/lib/security/64/pkcs11_tpm.so

機能説明

pkcs11_tpm.so オブジェクトは、Trusted Computing Group のプロトコルを使用して TPM セキュリティーデバイスと通信することで、RSA Security Inc. の PKCS#11 暗号化トークンインタフェース (Cryptoki) v2.20 仕様を実装します。このプロバイダは PKCS#11 仕様を実装し、SUNWtss パッケージの TCG ソフトウェアスタック (TSS) API を使用します。

アプリケーション開発者は、pkcs11_tpm.so に直接リンクするのではなく、libpkcs11.so.1 にリンクするようにしてください。libpkcs11(3LIB) を参照してください。

実装されている暗号化アルゴリズムは、RSA、 SHA1、および MD5 です。

libpkcs11(3LIB) のリストに示されている標準の PKCS#11 関数は、次のものを除きすべて実装されています。

```
C_EncryptUpdate
C_EncryptFinal
C_DecryptUpdate
C_DecryptFinal
C_DigestEncryptUpdate
C_DecryptDigestUpdate
C_SignEncryptUpdate
C_DecryptVerifyUpdate
C_GetFunctionStatus
C_CancelFunction
C_WaitForSlotEvent
C_GenerateKey
C_DeriveKey
```

サポートされている RSA PKCS#11 v2.20 メカニズムは次のとおりです。

```
CKM_RSA_PKCS_KEY_PAIR_GEN
CKM_RSA_PKCS
CKM_RSA_PKCS_OAEP
CKM_RSA_X_509
CKM_MD5_RSA_PKCS
CKM_SHA1_RSA_PKCS
CKM_SHA_1
CKM_SHA_1_HMAC
CKM_SHA_1_HMAC_GENERAL
CKM_MD5
CKM_MD5_HMAC
CKM_MD5_HMAC_GENERAL
```

ユーザーごとの初期化

pkcs11_tpm プロバイダを使用できるのは、システムに TPM デバイスが存在し、かつ SUNWtss パッケージがインストールされている場合だけです。これらの前提条件が満たされている場合、ユーザーは pktool(1) を使用すると自分専用のプライベートトークンを作成できます。このトークンにより、TPM デバイスを使用した操作を実行でき、TPM によって保護された鍵で自分の非公開データを保護できます。

ユーザーの TPM トークンを準備して初期化するには、次の手順を実行する必要があります。

1. トークンを初期化します。
2. SO (セキュリティー責任者) の PIN を設定します。
3. ユーザーの一意の PIN を設定します。

トークンを初期化するには、pktool(1) コマンドを次のように使用します。

```
$ pktool inittoken currlabel=TPM newlabel=tpm/myname
```

- デフォルトでは、初期化されていない TPM は TPM という名前で認識されます。ユーザーが自分専用のプライベートトークンを初期化するときに、別の名前 (tpm/joeuser など) に変更することも、TPM のままにする (この場合は newlabel 引数を省略する) こともできます。
- ユーザーは自分のトークンを初期化する前に、デフォルトの SO PIN を入力する必要があります。デフォルトの SO PIN は 87654321 です。これは上記の手順 2 で変更されています。

トークンを初期化したあとは、SO PIN とユーザー PIN をデフォルト値から変更する必要があります。これらの PIN の値を変更するには、再度 pktool(1) を使用します。

SO PIN の変更は次のように行います。

```
$ pktool setpin token=tpm/joeuser so
```

so オプションは、この「setpin」操作が SO PIN の変更であることを示すもので、省略できません。ユーザーはデフォルトの SO PIN (87654321) を入力してから、新しい PIN を入力 (および確認) する必要があります。

SO PIN をデフォルトから変更したあと、ユーザーの一意の PIN もリセットする必要があります。

ユーザーの PIN の変更は次のように行います。

```
$ pktool setpin token=tmp/joeuser
```

SO 以外のユーザーのデフォルト PIN は 12345678 です。ユーザーはデフォルトの PIN を入力してから、新しい一意の PIN を入力 (および確認) する必要があります。

pktool setpin 操作または C_Login() 関数と C_SetPIN() 関数に設定する PIN には、長さが 1 から 256 までで、空文字を含まない、任意の文字列を使用できます。

トークンへのアクセス

ユーザーは自分のトークンを初期化したあと、pktool(1) で、あるいは PKCS11 アプリケーションを作成することにより、トークンの使用を開始できます。その際、前述の手順で作成した名前 (前述の例では tpm/joeuser) を使用してトークンを特定します。

たとえば、

```
$ pktool gencert token=tpm/joeuser -i
$ pktool list token=tpm/joeuser
```

注意事項

pkcs11_tpm.so により、ファイルシステム固有のトークンオブジェクトの記憶領域にオブジェクトストレージが提供されます。プライベートオブジェクトは秘密鍵による暗号化で保護されています。復号化するには、トークンの秘密鍵を TPM に読み込み、復号化をすべて TPM 内で実行する必要があります。ユーザーの秘密鍵は、ユーザーが個人用の PIN を設定したときに (前述の説明を参照)、TPM によって生成されます。SO の鍵もユーザーの鍵も、TSS 永続的ストレージデータベースに保存され、一意の UUID 値で参照されます。どのユーザートークンにも一意の SO 鍵と一意のユーザー鍵があるため、あるユーザーのトークンの PIN で、同じマシンの別のユーザーのトークンに保存されている非公開データがロック解除されることはありません。

TPM はそれぞれ一意なので、ある TPM で作成されたトークンキーを別の TPM で使用することはできません。pkcs11_tpm.so トークンのデータは、TPM が存在しているシステムですべて管理されます。ほかのシステムに移動することはできません。TPM がリセットされ SRK (ストレージルートキー) が変更された場合、その TPM でそれまでに生成された鍵はすべて無効になります。

pkcs11_tpm.so は、作成されたトークンごとに専用のワークスペースを作成して、管理ファイルを管理します。デフォルトでは、この領域は /var/tpm/pkcs11/$USERNAME として作成されます。ただし、ユーザーはトークンの初期化や使用を開始する前に PKCS11_TPM_DIR 環境変数を設定することにより、この設定を上書きできます。

戻り値

実装されている各関数の戻り値は、RSA PKCS#11 v2.20 仕様で定義されています。http://www.rsasecurity.com を参照してください。

ファイル

/var/tpm/pkcs11/USERNAME
　ユーザーのデフォルトのトークンオブジェクトストア。

${PKCS11_TPM_DIR}
　代替のトークンオブジェクトストア。

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
インタフェースの安定性	確実

属性タイプ	属性値
MT レベル	例外付きで MT-安全 (後述の説明を参照)
標準	PKCS#11 v2.20

「MT-安全」属性の例外については、RSA PKCS#11 v2.20 のセクション 6.6.2 を参照してください。

関連項目

pktool(1), cryptoadm(1M), libpkcs11(3LIB), attributes(5)

TCG ソフトウェアスタック (TSS) 仕様 https://www.trustedcomputinggroup.org/specs/TSS (公開時点のアドレス)

RSA PKCS#11 v2.20 http://www.rsasecurity.com

名前

privileges – process privilege model

機能説明

Solaris software implements a set of privileges that provide fine-grained control over the actions of processes. The possession of a certain privilege allows a process to perform a specific set of restricted operations.

The change to a primarily privilege-based security model in the Solaris operating system gives developers an opportunity to restrict processes to those privileged operations actually needed instead of all (super-user) or no privileges (non-zero UIDs). Additionally, a set of previously unrestricted operations now requires a privilege; these privileges are dubbed the “basic” privileges and are by default given to all processes.

Taken together, all defined privileges with the exception of the “basic” privileges compose the set of privileges that are traditionally associated with the root user. The “basic” privileges are “privileges” unprivileged processes were accustomed to having.

The defined privileges are:

`PRIV_CONTRACT_EVENT`
Allow a process to request reliable delivery of events to an event endpoint.

Allow a process to include events in the critical event set term of a template which could be generated in volume by the user.

`PRIV_CONTRACT_IDENTITY`
Allows a process to set the service FMRI value of a process contract template.

`PRIV_CONTRACT_OBSERVER`
Allow a process to observe contract events generated by contracts created and owned by users other than the process's effective user ID.

Allow a process to open contract event endpoints belonging to contracts created and owned by users other than the process's effective user ID.

`PRIV_CPC_CPU`
Allow a process to access per-CPU hardware performance counters.

`PRIV_DTRACE_KERNEL`
Allow DTrace kernel-level tracing.

`PRIV_DTRACE_PROC`
Allow DTrace process-level tracing. Allow process-level tracing probes to be placed and enabled in processes to which the user has permissions.

`PRIV_DTRACE_USER`
Allow DTrace user-level tracing. Allow use of the syscall and profile DTrace providers to examine processes to which the user has permissions.

PRIV_FILE_CHOWN
Allow a process to change a file's owner user ID. Allow a process to change a file's group ID to one other than the process's effective group ID or one of the process's supplemental group IDs.

PRIV_FILE_CHOWN_SELF
Allow a process to give away its files. A process with this privilege runs as if {_POSIX_CHOWN_RESTRICTED} is not in effect.

PRIV_FILE_DAC_EXECUTE
Allow a process to execute an executable file whose permission bits or ACL would otherwise disallow the process execute permission.

PRIV_FILE_DAC_READ
Allow a process to read a file or directory whose permission bits or ACL would otherwise disallow the process read permission.

PRIV_FILE_DAC_SEARCH
Allow a process to search a directory whose permission bits or ACL would not otherwise allow the process search permission.

PRIV_FILE_DAC_WRITE
Allow a process to write a file or directory whose permission bits or ACL do not allow the process write permission. All privileges are required to write files owned by UID 0 in the absence of an effective UID of 0.

PRIV_FILE_DOWNGRADE_SL
Allow a process to set the sensitivity label of a file or directory to a sensitivity label that does not dominate the existing sensitivity label.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_FILE_FLAG_SET
Allows a process to set `immutable`, `nounlink` or `appendonly` file attributes.

PRIV_FILE_LINK_ANY
Allow a process to create hardlinks to files owned by a UID different from the process's effective UID.

PRIV_FILE_OWNER
Allow a process that is not the owner of a file to modify that file's access and modification times. Allow a process that is not the owner of a directory to modify that directory's access and modification times. Allow a process that is not the owner of a file or directory to remove or rename a file or directory whose parent directory has the “save text image after execution” (sticky) bit set. Allow a process that is not the owner of a file to mount a `namefs` upon that file. Allow a process that is not the owner of a file or directory to modify that file's or directory's permission bits or ACL.

PRIV_FILE_READ
Allow a process to read a file or directory whose permission or ACL allow the process read permission.

PRIV_FILE_SETID
Allow a process to change the ownership of a file or write to a file without the set-user-ID and set-group-ID bits being cleared. Allow a process to set the set-group-ID bit on a file or directory whose group is not the process's effective group or one of the process's supplemental groups. Allow a process to set the set-user-ID bit on a file with different ownership in the presence of PRIV_FILE_OWNER. Additional restrictions apply when creating or modifying a setuid 0 file.

PRIV_FILE_UPGRADE_SL
Allow a process to set the sensitivity label of a file or directory to a sensitivity label that dominates the existing sensitivity label.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_FILE_WRITE
Allow a process to write a file or directory whose permission or ACL allow the process write permission. +

PRIV_GRAPHICS_ACCESS
Allow a process to make privileged ioctls to graphics devices. Typically only an xserver process needs to have this privilege. A process with this privilege is also allowed to perform privileged graphics device mappings.

PRIV_GRAPHICS_MAP
Allow a process to perform privileged mappings through a graphics device.

PRIV_IPC_DAC_READ
Allow a process to read a System V IPC Message Queue, Semaphore Set, or Shared Memory Segment whose permission bits would not otherwise allow the process read permission.

PRIV_IPC_DAC_WRITE
Allow a process to write a System V IPC Message Queue, Semaphore Set, or Shared Memory Segment whose permission bits would not otherwise allow the process write permission.

PRIV_IPC_OWNER
Allow a process that is not the owner of a System V IPC Message Queue, Semaphore Set, or Shared Memory Segment to remove, change ownership of, or change permission bits of the Message Queue, Semaphore Set, or Shared Memory Segment.

PRIV_NET_ACCESS
Allow a process to open a TCP, UDP, SDP or SCTP network endpoint.

PRIV_NET_BINDMLP
Allow a process to bind to a port that is configured as a multi-level port (MLP) for the process's zone. This privilege applies to both shared address and zone-specific address MLPs. See tnzonecfg(4) from the Trusted Extensions manual pages for information on configuring MLP ports.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_NET_ICMPACCESS
Allow a process to send and receive ICMP packets.

PRIV_NET_MAC_AWARE
Allow a process to set the NET_MAC_AWARE process flag by using setpflags(2). This privilege also allows a process to set the SO_MAC_EXEMPT socket option by using setsockopt(3SOCKET). The NET_MAC_AWARE process flag and the SO_MAC_EXEMPT socket option both allow a local process to communicate with an unlabeled peer if the local process's label dominates the peer's default label, or if the local process runs in the global zone.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_NET_OBSERVABILITY
Allow a process to open a device for just receiving network traffic, sending traffic is disallowed.

PRIV_NET_PRIVADDR
Allow a process to bind to a privileged port number. The privilege port numbers are 1-1023 (the traditional UNIX privileged ports) as well as those ports marked as "udp/tcp_extra_priv_ports" with the exception of the ports reserved for use by NFS and SMB.

PRIV_NET_RAWACCESS
Allow a process to have direct access to the network layer.

PRIV_PROC_AUDIT
Allow a process to generate audit records. Allow a process to get its own audit pre-selection information.

PRIV_PROC_CHROOT
Allow a process to change its root directory.

PRIV_PROC_CLOCK_HIGHRES
Allow a process to use high resolution timers.

PRIV_PROC_EXEC
Allow a process to call exec(2).

PRIV_PROC_FORK
Allow a process to call fork(2), fork1(2), or vfork(2).

PRIV_PROC_INFO
Allow a process to examine the status of processes other than those to which it can send signals. Processes that cannot be examined cannot be seen in /proc and appear not to exist.

PRIV_PROC_LOCK_MEMORY
Allow a process to lock pages in physical memory.

PRIV_PROC_OWNER
Allow a process to send signals to other processes and inspect and modify the process state in other processes, regardless of ownership. When modifying another process, additional restrictions apply: the effective privilege set of the attaching process must be a superset of the target process's effective, permitted, and inheritable sets; the limit set must be a superset of the target's limit set; if the target process has any UID set to 0 all privilege must be asserted unless the effective UID is 0. Allow a process to bind arbitrary processes to CPUs.

PRIV_PROC_PRIOCNTL
Allow a process to elevate its priority above its current level. Allow a process to change its scheduling class to any scheduling class, including the RT class.

PRIV_PROC_SESSION
Allow a process to send signals or trace processes outside its session.

PRIV_PROC_SETID
Allow a process to set its UIDs at will, assuming UID 0 requires all privileges to be asserted.

PRIV_PROC_TASKID
Allow a process to assign a new task ID to the calling process.

PRIV_PROC_ZONE
Allow a process to trace or send signals to processes in other zones. See zones(5).

PRIV_STORAGE_CONFIG
Allows a process to perform storage configuration, such as disk labelling.

PRIV_STORAGE_RAW
Allows a process to perform raw storage management, such as USCSICMD.

PRIV_SYS_ACCT
Allow a process to enable and disable and manage accounting through acct(2).

PRIV_SYS_ADMIN
Allow a process to perform system administration tasks such as setting node and domain name and specifying coreadm(1M) and nscd(1M) settings

PRIV_SYS_AUDIT
Allow a process to start the (kernel) audit daemon. Allow a process to view and set audit state (audit user ID, audit terminal ID, audit sessions ID, audit pre-selection mask). Allow a process to turn off and on auditing. Allow a process to configure the audit parameters (cache and queue sizes, event to class mappings, and policy options).

PRIV_SYS_CONFIG
Allow a process to perform various system configuration tasks. Allow filesystem-specific administrative procedures, such as filesystem configuration ioctls, quota calls, creation and deletion of snapshots, and manipulating the PCFS bootsector.

PRIV_SYS_DEVICES
Allow a process to create device special files. Allow a process to successfully call a kernel module that calls the kernel drv_priv(9F) function to check for allowed access. Allow a process to open the real console device directly. Allow a process to open devices that have been exclusively opened.

PRIV_SYS_DL_CONFIG
Allow a process to configure a system's datalink interfaces.

PRIV_SYS_IP_CONFIG
Allow a process to configure a system's IP interfaces and routes. Allow a process to configure TCP/IP parameters. Allow a process to pop anchored STREAMs modules with matching zoneid.

PRIV_SYS_IPC_CONFIG
Allow a process to increase the size of a System V IPC Message Queue buffer.

PRIV_SYS_LINKDIR
Allow a process to unlink and link directories.

PRIV_SYS_MOUNT
Allow a process to mount and unmount filesystems that would otherwise be restricted (that is, most filesystems except namefs). Allow a process to add and remove swap devices.

PRIV_SYS_NET_CONFIG
Allow a process to do all that PRIV_SYS_IP_CONFIG, PRIV_SYS_DL_CONFIG, and PRIV_SYS_PPP_CONFIG allow, plus the following: use the rpcmod STREAMS module and insert/remove STREAMS modules on locations other than the top of the module stack.

PRIV_SYS_NFS
Allow a process to provide NFS service: start NFS kernel threads, perform NFS locking operations, bind to NFS reserved ports: ports 2049 (nfs) and port 4045 (lockd).

PRIV_SYS_PPP_CONFIG
Allow a process to create, configure, and destroy PPP instances with pppd(1M) pppd(1M) and control PPPoE plumbing with sppptun(1M)sppptun(1M). This privilege is granted by default to exclusive IP stack instance zones.

PRIV_SYS_RES_BIND
Allow a process to bind processes to processor sets.

PRIV_SYS_RES_CONFIG
Allow a process to bind processes to processor sets, as PRIV_SYS_RES_BIND, in addition to the following outlined in this paragraph. Allow a process to create and delete processor sets, assign CPUs to processor sets and override the PSET_NOESCAPE property. Allow a

process to change the operational status of CPUs in the system using p_online(2). Allow a process to configure filesystem quotas. Allow a process to configure resource pools and bind processes to pools.

PRIV_SYS_RESOURCE
Allow a process to exceed the resource limits imposed on it by setrlimit(2) and setrctl(2).

PRIV_SYS_SHARE
Allow a process to share and unshare filesystems.

PRIV_SYS_SMB
Allow a process to provide NetBIOS or SMB services: start SMB kernel threads or bind to NetBIOS or SMB reserved ports: ports 137, 138, 139 (NetBIOS) and 445 (SMB).

PRIV_SYS_SUSER_COMPAT
Allow a process to successfully call a third party loadable module that calls the kernel suser() function to check for allowed access. This privilege exists only for third party loadable module compatibility and is not used by Solaris proper.

PRIV_SYS_TIME
Allow a process to manipulate system time using any of the appropriate system calls: stime(2), adjtime(2), and ntp_adjtime(2).

PRIV_SYS_TRANS_LABEL
Allow a process to translate labels that are not dominated by the process's sensitivity label to and from an external string form.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_VIRT_MANAGE
Allows a process to manage virtualized environments.

PRIV_WIN_COLORMAP
Allow a process to override colormap restrictions.

Allow a process to install or remove colormaps.

Allow a process to retrieve colormap cell entries allocated by other processes.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_WIN_CONFIG
Allow a process to configure or destroy resources that are permanently retained by the X server.

Allow a process to use SetScreenSaver to set the screen saver timeout value

Allow a process to use ChangeHosts to modify the display access control list.

Allow a process to use GrabServer.

Allow a process to use the SetCloseDownMode request that can retain window, pixmap, colormap, property, cursor, font, or graphic context resources.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_DAC_READ`
Allow a process to read from a window resource that it does not own (has a different user ID).

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_DAC_WRITE`
Allow a process to write to or create a window resource that it does not own (has a different user ID). A newly created window property is created with the window's user ID.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_DEVICES`
Allow a process to perform operations on window input devices.

Allow a process to get and set keyboard and pointer controls.

Allow a process to modify pointer button and key mappings.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_DGA`
Allow a process to use the direct graphics access (DGA) X protocol extensions. Direct process access to the frame buffer is still required. Thus the process must have MAC and DAC privileges that allow access to the frame buffer, or the frame buffer must be allocated to the process.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_DOWNGRADE_SL`
Allow a process to set the sensitivity label of a window resource to a sensitivity label that does not dominate the existing sensitivity label.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_FONTPATH`
Allow a process to set a font path.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

`PRIV_WIN_MAC_READ`
Allow a process to read from a window resource whose sensitivity label is not equal to the process sensitivity label.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_WIN_MAC_WRITE
Allow a process to create a window resource whose sensitivity label is not equal to the process sensitivity label. A newly created window property is created with the window's sensitivity label.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_WIN_SELECTION
Allow a process to request inter-window data moves without the intervention of the selection confirmer.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

PRIV_WIN_UPGRADE_SL
Allow a process to set the sensitivity label of a window resource to a sensitivity label that dominates the existing sensitivity label.

This privilege is interpreted only if the system is configured with Trusted Extensions.

Of the privileges listed above, the privileges PRIV_FILE_LINK_ANY, PRIV_FILE_READ, PRIV_FILE_WRITE, PRIV_PROC_INFO, PRIV_PROC_SESSION, PRIV_NET_ACCESS, PRIV_PROC_FORK, and PRIV_PROC_EXEC are considered "basic" privileges. These are privileges that used to be always available to unprivileged processes. By default, processes still have the basic privileges.

The privileges PRIV_PROC_SETID and PRIV_PROC_AUDIT must be present in the Limit set (see below) of a process in order for setuid root execs to be successful; that is, get an effective UID of 0 and additional privileges.

The privilege implementation in Solaris extends the process credential with four privilege sets:

I, the inheritable set	The privileges inherited on exec.
P, the permitted set	The maximum set of privileges for the process.
E, the effective set	The privileges currently in effect.
L, the limit set	The upper bound of the privileges a process and its offspring can obtain. Changes to L take effect on the next exec.

The sets I, P and E are typically identical to the basic set of privileges for unprivileged processes. The limit set is typically the full set of privileges.

Each process has a Privilege Awareness State (PAS) that can take the value PA (privilege-aware) and NPA (not-PA). PAS is a transitional mechanism that allows a choice between full compatibility with the old superuser model and completely ignoring the effective UID.

To facilitate the discussion, we introduce the notion of "observed effective set" (oE) and "observed permitted set" (oP) and the implementation sets iE and iP.

A process becomes privilege-aware either by manipulating the effective, permitted, or limit privilege sets through setppriv(2) or by using setpflags(2). In all cases, oE and oP are invariant in the process of becoming privilege-aware. In the process of becoming privilege-aware, the following assignments take place:

```
iE = oE
iP = oP
```

When a process is privilege-aware, oE and oP are invariant under UID changes. When a process is not privilege-aware, oE and oP are observed as follows:

```
oE = euid == 0 ? L : iE
oP = (euid == 0 || ruid == 0 || suid == 0) ? L : iP
```

When a non-privilege-aware process has an effective UID of 0, it can exercise the privileges contained in its limit set, the upper bound of its privileges. If a non-privilege-aware process has any of the UIDs 0, it appears to be capable of potentially exercising all privileges in L.

It is possible for a process to return to the non-privilege aware state using `setpflags()`. The kernel always attempts this on exec(2). This operation is permitted only if the following conditions are met:

- If any of the UIDs is equal to 0, P must be equal to L.
- If the effective UID is equal to 0, E must be equal to L.

When a process gives up privilege awareness, the following assignments take place:

```
if (euid == 0) iE = L & I
if (any uid == 0) iP = L & I
```

The privileges obtained when not having a UID of `0` are the inheritable set of the process restricted by the limit set.

Only privileges in the process's (observed) effective privilege set allow the process to perform restricted operations. A process can use any of the privilege manipulation functions to add or remove privileges from the privilege sets. Privileges can be removed always. Only privileges found in the permitted set can be added to the effective and inheritable set. The limit set cannot grow. The inheritable set can be larger than the permitted set.

When a process performs an exec(2), the kernel first tries to relinquish privilege awareness before making the following privilege set modifications:

```
E' = P' = I' = L & I
L is unchanged
```

If a process has not manipulated its privileges, the privilege sets effectively remain the same, as E, P and I are already identical.

The limit set is enforced at exec time.

To run a non-privilege-aware application in a backward-compatible manner, a privilege-aware application should start the non-privilege-aware application with I=basic.

For most privileges, absence of the privilege simply results in a failure. In some instances, the absense of a privilege can cause system calls to behave differently. In other instances, the removal of a privilege can force a set-uid application to seriously malfunction. Privileges of this type are considered “unsafe”. When a process is lacking any of the unsafe privileges from its limit set, the system does not honor the set-uid bit of set-uid root applications. The following unsafe privileges have been identified: `proc_setid`, `sys_resource` and `proc_audit`.

Privilege Escalation

In certain circumstances, a single privilege could lead to a process gaining one or more additional privileges that were not explicitly granted to that process. To prevent such an escalation of privileges, the security policy requires explicit permission for those additional privileges.

Common examples of escalation are those mechanisms that allow modification of system resources through “raw" interfaces; for example, changing kernel data structures through `/dev/kmem` or changing files through `/dev/dsk/*`. Escalation also occurs when a process controls processes with more privileges than the controlling process. A special case of this is manipulating or creating objects owned by UID 0 or trying to obtain UID 0 using `setuid(2)`. The special treatment of UID 0 is needed because the UID 0 owns all system configuration files and ordinary file protection mechanisms allow processes with UID 0 to modify the system configuration. With appropriate file modifications, a given process running with an effective UID of 0 can gain all privileges.

In situations where a process might obtain UID 0, the security policy requires additional privileges, up to the full set of privileges. Such restrictions could be relaxed or removed at such time as additional mechanisms for protection of system files became available. There are no such mechanisms in the current Solaris release.

The use of UID 0 processes should be limited as much as possible. They should be replaced with programs running under a different UID but with exactly the privileges they need.

Daemons that never need to `exec` subprocesses should remove the `PRIV_PROC_EXEC` privilege from their permitted and limit sets.

Assigned Privileges and Safeguards

When privileges are assigned to a user, the system administrator could give that user more powers than intended. The administrator should consider whether safeguards are needed. For example, if the `PRIV_PROC_LOCK_MEMORY` privilege is given to a user, the administrator should consider setting the `project.max-locked-memory` resource control as well, to prevent that user from locking all memory.

Privilege Debugging

When a system call fails with a permission error, it is not always immediately obvious what caused the problem. To debug such a problem, you can use a tool called *privilege debugging*. When privilege debugging is enabled for a process, the kernel reports missing privileges on the

controlling terminal of the process. (Enable debugging for a process with the `-D` option of `ppriv(1)`.) Additionally, the administrator can enable system-wide privilege debugging by setting the `system(4)` variable `priv_debug` using:

```
set priv_debug = 1
```

On a running system, you can use `mdb(1)` to change this variable.

Privilege Administration

Use `usermod(1M)` or `rolemod(1M)` to assign privileges to assign or modify privileges to, respectively, a user or a role. Use `ppriv(1)` to enumerate the privileges supported on a system and `truss(1)` to determine which privileges a program requires.

関連項目

`mdb(1)`, `ppriv(1)`, `add_drv(1M)`, `ifconfig(1M)`, `lockd(1M)`, `nfsd(1M)`, `pppd(1M)`, `rem_drv(1M)`, `smbd(1M)`, `sppptun(1M)`, `update_drv(1M)`, `Intro(2)`, `access(2)`, `acct(2)`, `acl(2)`, `adjtime(2)`, `chmod(2)`, `chown(2)`, `chroot(2)`, `creat(2)`, `exec(2)`, `fcntl(2)`, `fork(2)`, `fpathconf(2)`, `getacct(2)`, `getpflags(2)`, `getppriv(2)`, `getsid(2)`, `kill(2)`, `link(2)`, `memcntl(2)`, `mknod(2)`, `mount(2)`, `msgctl(2)`, `nice(2)`, `ntp_adjtime(2)`, `open(2)`, `p_online(2)`, `priocntl(2)`, `priocntlset(2)`, `processor_bind(2)`, `pset_bind(2)`, `pset_create(2)`, `readlink(2)`, `resolvepath(2)`, `rmdir(2)`, `semctl(2)`, `setegid(2)`, `seteuid(2)`, `setgid(2)`, `setgroups(2)`, `setpflags(2)`, `setppriv(2)`, `setrctl(2)`, `setregid(2)`, `setreuid(2)`, `setrlimit(2)`, `settaskid(2)`, `setuid(2)`, `shmctl(2)`, `shmget(2)`, `shmop(2)`, `sigsend(2)`, `stat(2)`, `statvfs(2)`, `stime(2)`, `swapctl(2)`, `sysinfo(2)`, `uadmin(2)`, `ulimit(2)`, `umount(2)`, `unlink(2)`, `utime(2)`, `utimes(2)`, `bind(3SOCKET)`, `door_ucred(3C)`, `priv_addset(3C)`, `priv_set(3C)`, `priv_getbyname(3C)`, `priv_getbynum(3C)`, `priv_set_to_str(3C)`, `priv_str_to_set(3C)`, `socket(3SOCKET)`, `t_bind(3NSL)`, `timer_create(3C)`, `ucred_get(3C)`, `exec_attr(4)`, `proc(4)`, `system(4)`, `user_attr(4)`, `ddi_cred(9F)`, `drv_priv(9F)`, `priv_getbyname(9F)`, `priv_policy(9F)`, `priv_policy_choice(9F)`, `priv_policy_only(9F)`

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

注意事項

Removal of any of the basic privileges from a process leaves it in a non-standards compliant state, may cause unexpected application failures, and should only be performed with full knowledge of the potential side effects.

名前

prof – profile within a function

形式

```
#define MARK
#include <prof.h>

void MARK(name);
```

機能説明

MARK introduces a mark called *name* that is treated the same as a function entry point. Execution of the mark adds to a counter for that mark, and program-counter time spent is accounted to the immediately preceding mark or to the function if there are no preceding marks within the active function.

name may be any combination of letters, numbers, or underscores. Each *name* in a single compilation must be unique, but may be the same as any ordinary program symbol.

For marks to be effective, the symbol MARK must be defined before the header prof.h is included, either by a preprocessor directive as in the synopsis, or by a command line argument:

```
cc –p –DMARK work.c
```

If MARK is not defined, the MARK(*name*) statements may be left in the source files containing them and are ignored. prof –g must be used to get information on all labels.

使用例

In this example, marks can be used to determine how much time is spent in each loop. Unless this example is compiled with MARK defined on the command line, the marks are ignored.

```
#include <prof.h>
work( )
{
        int i, j;
        . . .
        MARK(loop1);
        for (i = 0; i < 2000; i++) {
                . . .
        }
        MARK(loop2);
        for (j = 0; j < 2000; j++) {
                . . .
        }
}
```

関連項目

profil(2), monitor(3C)

名前

rbac, RBAC – role-based access control

機能説明

The addition of role-based access control (RBAC) to the Solaris operating environment gives developers the opportunity to deliver fine-grained security in new and modified applications. RBAC is an alternative to the all-or-nothing security model of traditional superuser-based systems. With RBAC, an administrator can assign privileged functions to specific user accounts (or special accounts called roles).

There are two ways to give applications privileges:

1. Administrators can assign special attributes such as setUID to application binaries (executable files).
2. Administrators can assign special attributes such as setUID to applications using execution profiles.

Special attribute assignment along with the theory behind RBAC is discussed in detail in “Role Based Access Control” chapter of the 『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』. This chapter describes what authorizations are and how to code for them.

Authorizations

An authorization is a unique string that represents a user's right to perform some operation or class of operations. Authorization definitions are stored in a database called `auth_attr(4)`. For programming authorization checks, only the authorization name is significant.

Some typical values in an `auth_attr` database are shown below.

```
solaris.jobs.:::Cron and At Jobs::help=JobHeader.html
solaris.jobs.grant:::Delegate Cron & At \
    Administration::help=JobsGrant.html
solaris.jobs.admin:::Manage All Jobs::help=AuthJobsAdmin.html
solaris.jobs.user:::Cron & At User::help=JobsUser.html
```

Authorization name strings ending with the `grant` suffix are special authorizations that give a user the ability to delegate authorizations with the same prefix and functional area to other users.

Creating Authorization Checks

To check authorizations, use the `chkauthattr(3C)` library function, which verifies whether or not a user has a given authorization. The synopsis is:

```
int chkauthattr(const char *authname, const char *username);
```

The `chkauthattr()` function checks the `policy.conf(4)`, `user_attr(4)`, and `prof_attr(4)` databases in order for a match to the given authorization.

If you are modifying existing code that tests for root UID, you should find the test in the code and replace it with the `chkauthattr()` function. A typical root UID check is shown in the first

code segment below. An authorization check replacing it is shown in the second code segment; it uses the `solaris.jobs.admin` authorization and a variable called `real_login` representing the user.

例 1 Standard root check

```
ruid = getuid();

if ((eflag || lflag || rflag) && argc == 1) {
        if ((pwp = getpwnam(*argv)) == NULL)
                crabort(INVALIDUSER);

        if (ruid != 0) {
                if (pwp->pw_uid != ruid)
                        crabort(NOTROOT);
                else
                        pp = getuser(ruid);
        } else
                pp = *argv++;
} else {
```

例 2 Authorization check

```
ruid = getuid();
if ((pwp = getpwuid(ruid)) == NULL)
        crabort(INVALIDUSER);

strcpy(real_login, pwp->pw_name);

if ((eflag || lflag || rflag) && argc == 1) {
        if ((pwp = getpwnam(*argv)) == NULL)
                crabort(INVALIDUSER);

        if (!chkauthattr("solaris.jobs.admin", real_login)) {
                if (pwp->pw_uid != ruid)
                        crabort(NOTROOT);
                else
                        pp = getuser(ruid);
        } else
                pp = *argv++;
} else {
```

For new applications, find an appropriate location for the test and use `chkauthattr()` as shown above. Typically the authorization check makes an access decision based on the identity of the calling user to determine if a privileged action (for example, a system call) should be taken on behalf of that user.

Applications that perform a test to restrict who can perform their security-relevant functionality are generally `setuid` to root. Programs that were written prior to RBAC and that are only available to the root user may not have such checks. In most cases, the kernel requires an effective user ID of root to override policy enforcement. Therefore, authorization checking is most useful in programs that are `setuid` to root.

For instance, if you want to write a program that allows authorized users to set the system date, the command must be run with an effective user ID of root. Typically, this means that the file modes for the file would be `-rwsr-xr-x` with root ownership.

Use caution, though, when making programs `setuid` to root. For example, the effective UID should be set to the real UID as early as possible in the program's initialization function. The effective UID can then be set back to root after the authorization check is performed and before the system call is made. On return from the system call, the effective UID should be set back to the real UID again to adhere to the principle of least privilege.

Another consideration is that `LD_LIBRARY` path is ignored for setuid programs (see SECURITY section in `ld.so.1(1)`) and that shell scripts must be modified to work properly when the effective and real UIDs are different. For example, the `-p` flag in Bourne shell is required to avoid resetting the effective UID back to the real UID.

Using an effective UID of root instead of the real UID requires extra care when writing shell scripts. For example, many shell scripts check to see if the user is root before executing their functionality. With RBAC, these shell scripts may be running with the effective UID of root and with a real UID of a user or role. Thus, the shell script should check `euid` instead of `uid`. For example,

```
WHO=‘id | cut -f1 -d" "‘
if [ ! "$WHO" = "uid=0(root)" ]
then
       echo "$PROG: ERROR: you must be super-user to run this script."
       exit 1
fi
```

should be changed to

```
WHO=‘/usr/xpg4/bin/id -n -u‘
if [ ! "$WHO" = "root" ]
then
       echo "$PROG: ERROR: you are not authorized to run this script."
       exit 1
fi
```

Authorizations can be explicitly checked in shell scripts by checking the output of the `auths(1)` utility. For example,

```
for auth in ‘auths | tr , " "‘ NOTFOUND
do
```

```
    [ "$auth" = "solaris.date" ] && break       # authorization found
done

if [ "$auth" != "solaris.date" ]
then
    echo >&2 "$PROG: ERROR: you are not authorized to set the date"
    exit 1
fi
```

関連項目 ld.so.1(1), chkauthattr(3C), auth_attr(4), policy.conf(4), prof_attr(4), user_attr(4)

『Oracle Solaris の管理: セキュリティーサービス』

名前

regex – internationalized basic and extended regular expression matching

機能説明

Regular Expressions (REs) provide a mechanism to select specific strings from a set of character strings. The Internationalized Regular Expressions described below differ from the Simple Regular Expressions described on the regexp(5) manual page in the following ways:

- both Basic and Extended Regular Expressions are supported
- the Internationalization features—character class, equivalence class, and multi-character collation—are supported.

The Basic Regular Expression (BRE) notation and construction rules described in the BASIC REGULAR EXPRESSIONS section apply to most utilities supporting regular expressions. Some utilities, instead, support the Extended Regular Expressions (ERE) described in the EXTENDED REGULAR EXPRESSIONS section; any exceptions for both cases are noted in the descriptions of the specific utilities using regular expressions. Both BREs and EREs are supported by the Regular Expression Matching interfaces regcomp(3C) and regexec(3C).

Basic Regular Expressions

BREs Matching a Single Character

A BRE ordinary character, a special character preceded by a backslash, or a period matches a single character. A bracket expression matches a single character or a single collating element. See RE Bracket Expression, below.

BRE Ordinary Characters

An ordinary character is a BRE that matches itself: any character in the supported character set, except for the BRE special characters listed in BRE Special Characters, below.

The interpretation of an ordinary character preceded by a backslash (\) is undefined, except for:

1. the characters), (, {, and }
2. the digits 1 to 9 inclusive (see BREs Matching Multiple Characters, below)
3. a character inside a bracket expression.

BRE Special Characters

A BRE *special character* has special properties in certain contexts. Outside those contexts, or when preceded by a backslash, such a character will be a BRE that matches the special character itself. The BRE special characters and the contexts in which they have their special meaning are:

. [\ The period, left-bracket, and backslash are special except when used in a bracket expression (see RE Bracket Expression, below). An expression containing a [that is not preceded by a backslash and is not part of a bracket expression produces undefined results.

* The asterisk is special except when used:

- in a bracket expression
- as the first character of an entire BRE (after an initial ^, if any)

- as the first character of a subexpression (after an initial ^, if any); see BREs Matching Multiple Characters, below.

^ The circumflex is special when used:

- as an anchor (see BRE Expression Anchoring, below).
- as the first character of a bracket expression (see RE Bracket Expression, below).

$ The dollar sign is special when used as an anchor.

Periods in BREs

A period (.), when used outside a bracket expression, is a BRE that matches any character in the supported character set except NUL.

RE Bracket Expression

A bracket expression (an expression enclosed in square brackets, [ ]) is an RE that matches a single collating element contained in the non-empty set of collating elements represented by the bracket expression.

The following rules and definitions apply to bracket expressions:

1. A *bracket expression* is either a matching list expression or a non-matching list expression. It consists of one or more expressions: collating elements, collating symbols, equivalence classes, character classes, or range expressions (see rule 7 below). Portable applications must not use range expressions, even though all implementations support them. The right-bracket (]) loses its special meaning and represents itself in a bracket expression if it occurs first in the list (after an initial circumflex (^), if any). Otherwise, it terminates the bracket expression, unless it appears in a collating symbol (such as [.].]) or is the ending right-bracket for a collating symbol, equivalence class, or character class. The special characters:

   ```
   .   *   [   \
   ```

   (period, asterisk, left-bracket and backslash, respectively) lose their special meaning within a bracket expression.

   The character sequences:

   ```
   [.   [=   [:
   ```

   (left-bracket followed by a period, equals-sign, or colon) are special inside a bracket expression and are used to delimit collating symbols, equivalence class expressions, and character class expressions. These symbols must be followed by a valid expression and the matching terminating sequence .], =] or :], as described in the following items.
2. A *matching list* expression specifies a list that matches any one of the expressions represented in the list. The first character in the list must not be the circumflex. For example, `[abc]` is an RE that matches any of the characters `a`, `b` or `c`.
3. A *non-matching list* expression begins with a circumflex (^), and specifies a list that matches any character or collating element except for the expressions represented in the list after the leading circumflex. For example, [^abc] is an RE that matches any character or

collating element except the characters `a`, `b`, or `c`. The circumflex will have this special meaning only when it occurs first in the list, immediately following the left-bracket.

4. A *collating symbol* is a collating element enclosed within bracket-period ([..]) delimiters. Multi-character collating elements must be represented as collating symbols when it is necessary to distinguish them from a list of the individual characters that make up the multi-character collating element. For example, if the string `ch` is a collating element in the current collation sequence with the associated collating symbol <ch>, the expression [[.ch.]] will be treated as an RE matching the character sequence `ch`, while [ch] will be treated as an RE matching `c` or `h`. Collating symbols will be recognized only inside bracket expressions. This implies that the RE `[[.ch.]]*c` matches the first to fifth character in the string chchch. If the string is not a collating element in the current collating sequence definition, or if the collating element has no characters associated with it, the symbol will be treated as an invalid expression.

5. An *equivalence class expression* represents the set of collating elements belonging to an equivalence class. Only primary equivalence classes will be recognised. The class is expressed by enclosing any one of the collating elements in the equivalence class within bracket-equal ([==]) delimiters. For example, if a and b belong to the same equivalence class, then [[=a=]b], [[==]b] and [[==]b] will each be equivalent to [ab]. If the collating element does not belong to an equivalence class, the equivalence class expression will be treated as a *collating symbol*.

6. A *character class expression* represents the set of characters belonging to a character class, as defined in the `LC_CTYPE` category in the current locale. All character classes specified in the current locale will be recognized. A character class expression is expressed as a character class name enclosed within bracket-colon ([::]) delimiters.

   The following character class expressions are supported in all locales:

`[:alnum:]`	`[:cntrl:]`	`[:lower:]`	`[:space:]`
`[:alpha:]`	`[:digit:]`	`[:print:]`	`[:upper:]`
`[:blank:]`	`[:graph:]`	`[:punct:]`	`[:xdigit:]`

   In addition, character class expressions of the form:

   ```
   [:name:]
   ```

   are recognized in those locales where the *name* keyword has been given a `charclass` definition in the `LC_CTYPE` category.

7. A *range expression* represents the set of collating elements that fall between two elements in the current collation sequence, inclusively. It is expressed as the starting point and the ending point separated by a hyphen (–).

Range expressions must not be used in portable applications because their behavior is dependent on the collating sequence. Ranges will be treated according to the current collating sequence, and include such characters that fall within the range based on that collating sequence, regardless of character values. This, however, means that the interpretation will differ depending on collating sequence. If, for instance, one collating sequence defines as a variant of `a`, while another defines it as a letter following `z`, then the expression [–z] is valid in the first language and invalid in the second.

In the following, all examples assume the collation sequence specified for the POSIX locale, unless another collation sequence is specifically defined.

The starting range point and the ending range point must be a collating element or collating symbol. An equivalence class expression used as a starting or ending point of a range expression produces unspecified results. An equivalence class can be used portably within a bracket expression, but only outside the range. For example, the unspecified expression [[=e=]–f] should be given as [[=e=]e–f]. The ending range point must collate equal to or higher than the starting range point; otherwise, the expression will be treated as invalid. The order used is the order in which the collating elements are specified in the current collation definition. One-to-many mappings (see `locale(5)`) will not be performed. For example, assuming that the character eszet is placed in the collation sequence after `r` and `s`, but before `t`, and that it maps to the sequence `ss` for collation purposes, then the expression [r–s] matches only `r` and `s`, but the expression [s–t] matches `s`, `beta`, or `t`.

The interpretation of range expressions where the ending range point is also the starting range point of a subsequent range expression (for instance [a–m–o]) is undefined.

The hyphen character will be treated as itself if it occurs first (after an initial ^, if any) or last in the list, or as an ending range point in a range expression. As examples, the expressions [–ac] and [ac–] are equivalent and match any of the characters `a`, `c`, or –; [^ –ac] and [^ac–] are equivalent and match any characters except `a`, `c`, or –; the expression [%– –] matches any of the characters between % and – inclusive; the expression [– –@] matches any of the characters between – and @ inclusive; and the expression [a– –@] is invalid, because the letter `a` follows the symbol – in the POSIX locale. To use a hyphen as the starting range point, it must either come first in the bracket expression or be specified as a collating symbol, for example: [][.–.]–0], which matches either a right bracket or any character or collating element that collates between hyphen and 0, inclusive.

If a bracket expression must specify both – and], the] must be placed first (after the ^, if any) and the – last within the bracket expression.

Note: Latin-1 characters such as or are not printable in some locales, for example, the `ja` locale.

BREs Matching Multiple Characters

The following rules can be used to construct BREs matching multiple characters from BREs matching a single character:

1. The concatenation of BREs matches the concatenation of the strings matched by each component of the BRE.

2. A *subexpression* can be defined within a BRE by enclosing it between the character pairs \(and \) . Such a subexpression matches whatever it would have matched without the \(and \), except that anchoring within subexpressions is optional behavior; see `BRE Expression Anchoring`, below. Subexpressions can be arbitrarily nested.
3. The *back-reference* expression *n* matches the same (possibly empty) string of characters as was matched by a subexpression enclosed between \(and \) preceding the *n*. The character *n* must be a digit from 1 to 9 inclusive, *n*th subexpression (the one that begins with the *n*th \(and ends with the corresponding paired \)). The expression is invalid if less than *n* subexpressions precede the *n*. For example, the expression ^\(.*\)\1$ matches a line consisting of two adjacent appearances of the same string, and the expression \(a\)*\1 fails to match `a`. The limit of nine back-references to subexpressions in the RE is based on the use of a single digit identifier. This does not imply that only nine subexpressions are allowed in REs. The following is a valid BRE with ten subexpressions:

   ```
   \(\(\(ab\)*c\)*d\)\(ef\)*\(gh\)\{2\}\(ij\)*\(kl\)*\(mn\)*\(op\)*\(qr\)*
   ```

4. When a BRE matching a single character, a subexpression or a back-reference is followed by the special character asterisk (*), together with that asterisk it matches what zero or more consecutive occurrences of the BRE would match. For example, `[ab]*` and `[ab][ab]` are equivalent when matching the string `ab`.
5. When a BRE matching a single character, a subexpression, or a back-reference is followed by an *interval expression* of the format \{*m*\}, \{*m*,\} or \{*m*,*n*\}, together with that interval expression it matches what repeated consecutive occurrences of the BRE would match. The values of *m* and *n* will be decimal integers in the range 0 ≤ *m* ≤ *n* ≤ {`RE_DUP_MAX`}, where *m* specifies the exact or minimum number of occurrences and *n* specifies the maximum number of occurrences. The expression \{*m*\} matches exactly *m* occurrences of the preceding BRE, \{*m*,\} matches at least *m* occurrences and \{*m*,*n*\} matches any number of occurrences between *m* and *n*, inclusive.

   For example, in the string `abababccccccd`, the BRE c\{3\} is matched by characters seven to nine, the BRE \(ab\)\{4,\} is not matched at all and the BRE c\{1,3\}d is matched by characters ten to thirteen.

The behavior of multiple adjacent duplication symbols (* and intervals) produces undefined results.

BRE Precedence

The order of precedence is as shown in the following table:

BRE Precedence (from high to low)	
collation-related bracket symbols	[= =] [: :] [. .]
escaped characters	\<*special character*>
bracket expression	[ ]
subexpressions/back-references	\(\) *n*

single-character-BRE duplication	* \{*m*,*n*\}
concatenation	
anchoring	^ $

BRE Expression Anchoring

A BRE can be limited to matching strings that begin or end a line; this is called *anchoring*. The circumflex and dollar sign special characters will be considered BRE anchors in the following contexts:

1. A circumflex (`^`) is an anchor when used as the first character of an entire BRE. The implementation may treat circumflex as an anchor when used as the first character of a subexpression. The circumflex will anchor the expression to the beginning of a string; only sequences starting at the first character of a string will be matched by the BRE. For example, the BRE `^ab` matches `ab` in the string `abcdef`, but fails to match in the string `cdefab`. A portable BRE must escape a leading circumflex in a subexpression to match a literal circumflex.
2. A dollar sign (`$`) is an anchor when used as the last character of an entire BRE. The implementation may treat a dollar sign as an anchor when used as the last character of a subexpression. The dollar sign will anchor the expression to the end of the string being matched; the dollar sign can be said to match the end-of-string following the last character.
3. A BRE anchored by both `^` and `$` matches only an entire string. For example, the BRE `^abcdef$` matches strings consisting only of `abcdef`.
4. `^` and `$` are not special in subexpressions.

Note: The Solaris implementation does not support anchoring in BRE subexpressions.

Extended Regular Expressions

The rules specifiifed for BREs apply to Extended Regular Expressions (EREs) with the following exceptions:

- The characters `|`, `+`, and `?` have special meaning, as defined below.
- The `{` and `}` characters, when used as the duplication operator, are not preceded by backslashes. The constructs `\{` and `\}` simply match the characters `{` and `}`, respectively.
- The back reference operator is not supported.
- Anchoring (`^$`) is supported in subexpressions.

EREs Matching a Single Character

An ERE ordinary character, a special character preceded by a backslash, or a period matches a single character. A bracket expression matches a single character or a single collating element. An *ERE matching a single character* enclosed in parentheses matches the same as the ERE without parentheses would have matched.

ERE Ordinary Characters

An *ordinary character* is an ERE that matches itself. An ordinary character is any character in the supported character set, except for the ERE special characters listed in `ERE Special Characters` below. The interpretation of an ordinary character preceded by a backslash (`\`) is undefined.

ERE Special Characters

An *ERE special character* has special properties in certain contexts. Outside those contexts, or when preceded by a backslash, such a character is an ERE that matches the special character itself. The extended regular expression special characters and the contexts in which they have their special meaning are:

. [\ (
: The period, left-bracket, backslash, and left-parenthesis are special except when used in a bracket expression (see RE `Bracket Expression`, above). Outside a bracket expression, a left-parenthesis immediately followed by a right-parenthesis produces undefined results.

)
: The right-parenthesis is special when matched with a preceding left-parenthesis, both outside a bracket expression.

* + ? {
: The asterisk, plus-sign, question-mark, and left-brace are special except when used in a bracket expression (see RE `Bracket Expression`, above). Any of the following uses produce undefined results:

  - if these characters appear first in an ERE, or immediately following a vertical-line, circumflex or left-parenthesis
  - if a left-brace is not part of a valid interval expression.

|
: The vertical-line is special except when used in a bracket expression (see RE `Bracket Expression`, above). A vertical-line appearing first or last in an ERE, or immediately following a vertical-line or a left-parenthesis, or immediately preceding a right-parenthesis, produces undefined results.

^
: The circumflex is special when used:

  - as an anchor (see ERE `Expression Anchoring`, below).
  - as the first character of a bracket expression (see RE `Bracket Expression`, above).

$
: The dollar sign is special when used as an anchor.

Periods in EREs

A period (`.`), when used outside a bracket expression, is an ERE that matches any character in the supported character set except NUL.

ERE Bracket Expression

The rules for ERE Bracket Expressions are the same as for Basic Regular Expressions; see RE `Bracket Expression`, above).

EREs Matching Multiple Characters

The following rules will be used to construct EREs matching multiple characters from EREs matching a single character:

1. A *concatenation of EREs* matches the concatenation of the character sequences matched by each component of the ERE. A concatenation of EREs enclosed in parentheses matches whatever the concatenation without the parentheses matches. For example, both the ERE `cd` and the ERE `(cd)` are matched by the third and fourth character of the string `abcdefabcdef`.

2. When an ERE matching a single character or an ERE enclosed in parentheses is followed by the special character plus-sign (+), together with that plus-sign it matches what one or more consecutive occurrences of the ERE would match. For example, the ERE `b+(bc)` matches the fourth to seventh characters in the string `acabbbcde; [ab]` + and `[ab][ab]*` are equivalent.
3. When an ERE matching a single character or an ERE enclosed in parentheses is followed by the special character asterisk (*), together with that asterisk it matches what zero or more consecutive occurrences of the ERE would match. For example, the ERE `b*c` matches the first character in the string `cabbbcde,` and the ERE `b*cd` matches the third to seventh characters in the string `cabbbcdebbbbbbcdbc`. And, `[ab]*` and `[ab][ab]` are equivalent when matching the string `ab`.
4. When an ERE matching a single character or an ERE enclosed in parentheses is followed by the special character question-mark (?), together with that question-mark it matches what zero or one consecutive occurrences of the ERE would match. For example, the ERE `b?c` matches the second character in the string `acabbbcde`.
5. When an ERE matching a single character or an ERE enclosed in parentheses is followed by an *interval expression* of the format {*m*}, {*m*,} or {*m*,*n*}, together with that interval expression it matches what repeated consecutive occurrences of the ERE would match. The values of *m* and *n* will be decimal integers in the range $0 \le m \le n \le$ `{RE_DUP_MAX}`, where *m* specifies the exact or minimum number of occurrences and *n* specifies the maximum number of occurrences. The expression {*m*} matches exactly *m* occurrences of the preceding ERE, {*m*,} matches at least *m* occurrences and {*m*,*n*} matches any number of occurrences between *m* and *n*, inclusive.

For example, in the string `abababccccccd` the ERE c{3} is matched by characters seven to nine and the ERE (ab){2,} is matched by characters one to six.

The behavior of multiple adjacent duplication symbols (`+, *, ?` and intervals) produces undefined results.

ERE Alternation

Two EREs separated by the special character vertical-line (|) match a string that is matched by either. For example, the ERE a((bc)|d) matches the string abc and the string ad. Single characters, or expressions matching single characters, separated by the vertical bar and enclosed in parentheses, will be treated as an ERE matching a single character.

ERE Precedence

The order of precedence will be as shown in the following table:

ERE Precedence (from high to low)	
collation-related bracket symbols	[= =] [: :] [. .]
escaped characters	\<*special character*>
bracket expression	[ ]

grouping	( )
single-character-ERE duplication	* + ? {*m*,*n*}
concatenation	
anchoring	^ $
alternation	|

For example, the ERE `abba | cde` matches either the string `abba` or the string `cde` (rather than the string `abbade` or `abbcde`, because concatenation has a higher order of precedence than alternation).

ERE Expression Anchoring

An ERE can be limited to matching strings that begin or end a line; this is called *anchoring*. The circumflex and dollar sign special characters are considered ERE anchors when used anywhere outside a bracket expression. This has the following effects:

1. A circumflex (^) outside a bracket expression anchors the expression or subexpression it begins to the beginning of a string; such an expression or subexpression can match only a sequence starting at the first character of a string. For example, the EREs ^ab and (^ab) match ab in the string abcdef, but fail to match in the string cdefab, and the ERE a^b is valid, but can never match because the `a` prevents the expression ^b from matching starting at the first character.
2. A dollar sign (`$`) outside a bracket expression anchors the expression or subexpression it ends to the end of a string; such an expression or subexpression can match only a sequence ending at the last character of a string. For example, the EREs ef$ and (ef$) match ef in the string abcdef, but fail to match in the string cdefab, and the ERE e$f is valid, but can never match because the `f` prevents the expression e$ from matching ending at the last character.

関連項目

`localedef(1)`, `regcomp(3C)`, `attributes(5)`, `environ(5)`, `locale(5)`, `regexp(5)`

名前

regexp, compile, step, advance – simple regular expression compile and match routines

形式

```
#define INIT declarations
#define GETC(void) getc code
#define PEEKC(void) peekc code
#define UNGETC(void) ungetc code
#define RETURN(ptr) return code
#define ERROR(val) error code

extern char *loc1, *loc2, *locs;

#include <regexp.h>

char *compile(char *instring, char *expbuf, const char *endfug, int eof);

int step(const char *string, const char *expbuf);

int advance(const char *string, const char *expbuf);
```

機能説明

Regular Expressions (REs) provide a mechanism to select specific strings from a set of character strings. The Simple Regular Expressions described below differ from the Internationalized Regular Expressions described on the regex(5) manual page in the following ways:

- only Basic Regular Expressions are supported
- the Internationalization features—character class, equivalence class, and multi-character collation—are not supported.

The functions `step()`, `advance()`, and `compile()` are general purpose regular expression matching routines to be used in programs that perform regular expression matching. These functions are defined by the `<regexp.h>` header.

The functions `step()` and `advance()` do pattern matching given a character string and a compiled regular expression as input.

The function `compile()` takes as input a regular expression as defined below and produces a compiled expression that can be used with `step()` or `advance()`.

Basic Regular Expressions

A regular expression specifies a set of character strings. A member of this set of strings is said to be matched by the regular expression. Some characters have special meaning when used in a regular expression; other characters stand for themselves.

The following *one-character RE*s match a *single* character:

1.1 An ordinary character (*not* one of those discussed in 1.2 below) is a one-character RE that matches itself.

1.2 A backslash (`\`) followed by any special character is a one-character RE that matches the special character itself. The special characters are:

a. `.`, `*`, `[` , and `\` (period, asterisk, left square bracket, and backslash, respectively), which are always special, *except* when they appear within square brackets (`[ ]`; see 1.4 below).

b. `^` (caret or circumflex), which is special at the *beginning* of an *entire* RE (see 4.1 and 4.3 below), or when it immediately follows the left of a pair of square brackets (`[ ]`) (see 1.4 below).

c. `$` (dollar sign), which is special at the end of an *entire* RE (see 4.2 below).

d. The character used to bound (that is, delimit) an entire RE, which is special for that RE (for example, see how slash (`/`) is used in the `g` command, below.)

1.3 A period (`.`) is a one-character RE that matches any character except new-line.

1.4 A non-empty string of characters enclosed in square brackets (`[ ]`) is a one-character RE that matches *any one* character in that string. If, however, the first character of the string is a circumflex (`^`), the one-character RE matches any character *except* new-line and the remaining characters in the string. The `^` has this special meaning *only* if it occurs first in the string. The minus (–) may be used to indicate a range of consecutive characters; for example, `[0–9]` is equivalent to `[0123456789]`. The – loses this special meaning if it occurs first (after an initial `^`, if any) or last in the string. The right square bracket (`]`) does not terminate such a string when it is the first character within it (after an initial `^`, if any); for example, `[ ]a–f]` matches either a right square bracket (`]`) or one of the ASCII letters `a` through `f` inclusive. The four characters listed in 1.2.a above stand for themselves within such a string of characters.

The following rules may be used to construct REs from one-character REs:

2.1 A one-character RE is a RE that matches whatever the one-character RE matches.

2.2 A one-character RE followed by an asterisk (`*`) is a RE that matches `0` or more occurrences of the one-character RE. If there is any choice, the longest leftmost string that permits a match is chosen.

2.3 A one-character RE followed by `\{`*m*`\}`, `\{`*m*`,\}`, or `\{`*m*`,`*n*`\}` is a RE that matches a *range* of occurrences of the one-character RE. The values of *m* and *n* must be non-negative integers less than 256; `\{`*m*`\}` matches *exactly m* occurrences; `\{`*m*`,\}` matches *at least m* occurrences; `\{`*m*`,`*n*`\}` matches *any number* of occurrences *between m* and *n* inclusive. Whenever a choice exists, the RE matches as many occurrences as possible.

2.4 The concatenation of REs is a RE that matches the concatenation of the strings matched by each component of the RE.

2.5 A RE enclosed between the character sequences `\ (` and `\ )` is a RE that matches whatever the unadorned RE matches.

2.6 The expression \ *n* matches the same string of characters as was matched by an expression enclosed between \ (and \ ) *earlier* in the same RE. Here *n* is a digit; the sub-expression specified is that beginning with the *n*-th occurrence of \ (counting from the left. For example, the expression ^ \ (. * \ ) \ 1 $ matches a line consisting of two repeated appearances of the same string.

An RE may be constrained to match words.

3.1 \ < constrains a RE to match the beginning of a string or to follow a character that is not a digit, underscore, or letter. The first character matching the RE must be a digit, underscore, or letter.

3.2 \ > constrains a RE to match the end of a string or to precede a character that is not a digit, underscore, or letter.

An *entire RE* may be constrained to match only an initial segment or final segment of a line (or both).

4.1 A circumflex (^) at the beginning of an entire RE constrains that RE to match an *initial* segment of a line.

4.2 A dollar sign ($) at the end of an entire RE constrains that RE to match a *final* segment of a line.

4.3 The construction ^*entire RE* $ constrains the entire RE to match the entire line.

The null RE (for example, //) is equivalent to the last RE encountered.

Addressing with REs

Addresses are constructed as follows:

1. The character " . " addresses the current line.
2. The character "$" addresses the last line of the buffer.
3. A decimal number *n* addresses the *n*-th line of the buffer.
4. *'x* addresses the line marked with the mark name character *x*, which must be an ASCII lower-case letter (a–z). Lines are marked with the k command described below.
5. A RE enclosed by slashes (/) addresses the first line found by searching *forward* from the line *following* the current line toward the end of the buffer and stopping at the first line containing a string matching the RE. If necessary, the search wraps around to the beginning of the buffer and continues up to and including the current line, so that the entire buffer is searched.
6. A RE enclosed in question marks (?) addresses the first line found by searching *backward* from the line *preceding* the current line toward the beginning of the buffer and stopping at the first line containing a string matching the RE. If necessary, the search wraps around to the end of the buffer and continues up to and including the current line.

7. An address followed by a plus sign (+) or a minus sign (–) followed by a decimal number specifies that address plus (respectively minus) the indicated number of lines. A shorthand for .+5 is .5.
8. If an address begins with + or –, the addition or subtraction is taken with respect to the current line; for example, –5 is understood to mean .–5.
9. If an address ends with + or –, then 1 is added to or subtracted from the address, respectively. As a consequence of this rule and of Rule 8, immediately above, the address – refers to the line preceding the current line. (To maintain compatibility with earlier versions of the editor, the character ^ in addresses is entirely equivalent to –.) Moreover, trailing + and – characters have a cumulative effect, so —— refers to the current line less 2.
10. For convenience, a comma (,) stands for the address pair 1,$, while a semicolon (;) stands for the pair .,$.

Characters With Special Meaning

Characters that have special meaning except when they appear within square brackets ([ ]) or are preceded by \ are: . , *, [, \ . Other special characters, such as $ have special meaning in more restricted contexts.

The character ^ at the beginning of an expression permits a successful match only immediately after a newline, and the character $ at the end of an expression requires a trailing newline.

Two characters have special meaning only when used within square brackets. The character – denotes a range, [*c*–*c*], unless it is just after the open bracket or before the closing bracket, [–*c*] or [*c*–] in which case it has no special meaning. When used within brackets, the character ^ has the meaning *complement of* if it immediately follows the open bracket (example: [^*c*]); elsewhere between brackets (example: [*c*^]) it stands for the ordinary character ^.

The special meaning of the \ operator can be escaped only by preceding it with another \ , for example \\ .

Macros

Programs must have the following five macros declared before the #include <regexp.h> statement. These macros are used by the compile() routine. The macros GETC, PEEKC, and UNGETC operate on the regular expression given as input to compile().

GETC	This macro returns the value of the next character (byte) in the regular expression pattern. Successive calls to GETC should return successive characters of the regular expression.
PEEKC	This macro returns the next character (byte) in the regular expression. Immediately successive calls to PEEKC should return the same character, which should also be the next character returned by GETC.
UNGETC	This macro causes the argument c to be returned by the next call to GETC and PEEKC. No more than one character of pushback is ever needed and this

character is guaranteed to be the last character read by GETC. The return value of the macro UNGETC(c) is always ignored.

RETURN(*ptr*) This macro is used on normal exit of the compile() routine. The value of the argument *ptr* is a pointer to the character after the last character of the compiled regular expression. This is useful to programs which have memory allocation to manage.

ERROR(*val*) This macro is the abnormal return from the compile() routine. The argument *val* is an error number (see ERRORS below for meanings). This call should never return.

compile()

The syntax of the compile() routine is as follows:

compile(*instring*, *expbuf*, *endbuf*, *eof*)

The first parameter, *instring*, is never used explicitly by the compile() routine but is useful for programs that pass down different pointers to input characters. It is sometimes used in the INIT declaration (see below). Programs which call functions to input characters or have characters in an external array can pass down a value of (char *)0 for this parameter.

The next parameter, *expbuf*, is a character pointer. It points to the place where the compiled regular expression will be placed.

The parameter *endbuf* is one more than the highest address where the compiled regular expression may be placed. If the compiled expression cannot fit in (endbuf–expbuf) bytes, a call to ERROR(50) is made.

The parameter *eof* is the character which marks the end of the regular expression. This character is usually a /.

Each program that includes the <regexp.h> header file must have a #define statement for INIT. It is used for dependent declarations and initializations. Most often it is used to set a register variable to point to the beginning of the regular expression so that this register variable can be used in the declarations for GETC, PEEKC, and UNGETC. Otherwise it can be used to declare external variables that might be used by GETC, PEEKC and UNGETC. (See EXAMPLES below.)

step( ), advance( )

The first parameter to the step() and advance() functions is a pointer to a string of characters to be checked for a match. This string should be null terminated.

The second parameter, *expbuf*, is the compiled regular expression which was obtained by a call to the function compile().

The function step() returns non-zero if some substring of *string* matches the regular expression in *expbuf* and 0 if there is no match. If there is a match, two external character pointers are set as a side effect to the call to step(). The variable loc1 points to the first

character that matched the regular expression; the variable `loc2` points to the character after the last character that matches the regular expression. Thus if the regular expression matches the entire input string, `loc1` will point to the first character of *string* and `loc2` will point to the null at the end of *string*.

The function `advance()` returns non-zero if the initial substring of *string* matches the regular expression in *expbuf*. If there is a match, an external character pointer, `loc2`, is set as a side effect. The variable `loc2` points to the next character in *string* after the last character that matched.

When `advance()` encounters a * or `\{ \}` sequence in the regular expression, it will advance its pointer to the string to be matched as far as possible and will recursively call itself trying to match the rest of the string to the rest of the regular expression. As long as there is no match, `advance()` will back up along the string until it finds a match or reaches the point in the string that initially matched the * or `\{ \}`. It is sometimes desirable to stop this backing up before the initial point in the string is reached. If the external character pointer `locs` is equal to the point in the string at sometime during the backing up process, `advance()` will break out of the loop that backs up and will return zero.

The external variables `circf`, `sed`, and `nbra` are reserved.

使用例

例 1 Using Regular Expression Macros and Calls

The following is an example of how the regular expression macros and calls might be defined by an application program:

```
#define INIT       register char *sp = instring;
#define GETC()     (*sp++)
#define PEEKC()    (*sp)
#define UNGETC(c)  (—sp)
#define RETURN(c)  return;
#define ERROR(c)   regerr()

#include <regexp.h>
 . . .
     (void) compile(*argv, expbuf, &expbuf[ESIZE],'\0');
 . . .
     if (step(linebuf, expbuf))
                      succeed;
```

診断

The function `compile()` uses the macro `RETURN` on success and the macro `ERROR` on failure (see above). The functions `step()` and `advance()` return non-zero on a successful match and zero if there is no match. Errors are:

11 range endpoint too large.

16 bad number.

25 \ *digit* out of range.

36 illegal or missing delimiter.

41 no remembered search string.

42 \(\) imbalance.

43 too many \(.

44 more than 2 numbers given in \{ \}.

45 } expected after \.

46 first number exceeds second in \{ \}.

49 [ ] imbalance.

50 regular expression overflow.

関連項目

regex(5)

名前

resource_controls – resource controls available through project database

機能説明

The resource controls facility is configured through the project database. See project(4). You can set and modify resource controls through the following utilities:

- prctl(1)
- projadd(1M)
- projmod(1M)
- rctladm(1M)

In a program, you use setrctl(2) to set resource control values.

In addition to the preceding resource controls, there are resource pools, accessible through the pooladm(1M) and poolcfg(1M) utilities. In a program, resource pools can be manipulated through the libpool(3LIB) library.

The following are the resource controls are available:

process.max-address-space
: Maximum amount of address space, as summed over segment sizes, that is available to this process, expressed as a number of bytes.

process.max-core-size
: Maximum size of a core file created by this process, expressed as a number of bytes.

process.max-cpu-time
: Maximum CPU time that is available to this process, expressed as a number of seconds.

process.max-data-size
: Maximum heap memory available to this process, expressed as a number of bytes.

process.max-file-descriptor
: Maximum file descriptor index available to this process, expressed as an integer.

process.max-file-size
: Maximum file offset available for writing by this process, expressed as a number of bytes.

process.max-msg-messages
: Maximum number of messages on a message queue (value copied from the resource control at msgget() time), expressed as an integer.

process.max-msg-qbytes
: Maximum number of bytes of messages on a message queue (value copied from the resource control at msgget() time), expressed as a number of bytes.

process.max-port-events
: Maximum allowable number of events per event port, expressed as an integer.

process.max-sem-nsems
: Maximum number of semaphores allowed per semaphore set, expressed as an integer.

`process.max-sem-ops`
Maximum number of semaphore operations allowed per `semop` call (value copied from the resource control at `semget()` time). Expressed as an integer, specifying the number of operations.

`process.max-stack-size`
Maximum stack memory segment available to this process, expressed as a number of bytes.

`project.cpu-caps`
Maximum amount of CPU resources that a project can use. The unit used is the percentage of a single CPU that can be used by all user threads in a project. Expressed as an integer. The cap does not apply to threads running in real-time scheduling class. This resource control does not support the `syslog` action.

`project.cpu-shares`
Number of CPU shares granted to a project for use with the fair share scheduler (see FSS(7)). The unit used is the number of shares (an integer). This resource control does not support the `syslog` action.

`project.max-contracts`
Maximum number of contracts allowed in a project, expressed as an integer.

`project.max-crypto-memory`
Maximum amount of kernel memory that can be used for crypto operations. Allocations in the kernel for buffers and session-related structures are charged against this resource control.

`project.max-locked-memory`
Total amount of physical memory locked by device drivers and user processes (including D/ISM), expressed as a number of bytes.

`project.max-lwps`
Maximum number of LWPs simultaneously available to a project, expressed as an integer.

`project.max-msg-ids`
Maximum number of message queue IDs allowed for a project, expressed as an integer.

`project.max-port-ids`
Maximum allowable number of event ports, expressed as an integer.

`project.max-processes`
Maximum number of processes simultaneously available to a project, expressed as an integer.

`project.max-sem-ids`
Maximum number of semaphore IDs allowed for a project, expressed as an integer.

`project.max-shm-ids`
Maximum number of shared memory IDs allowed for a project, expressed as an integer.

`project.max-shm-memory`
Total amount of shared memory allowed for a project, expressed as a number of bytes.

`project.max-tasks`
Maximum number of tasks allowable in a project, expressed as an integer.

`project.pool`
Binds a specified resource pool with a project.

`rcap.max-rss`
The total amount of physical memory, in bytes, that is available to processes in a project.

`task.max-cpu-time`
Maximum CPU time that is available to this task's processes, expressed as a number of seconds.

`task.max-lwps`
Maximum number of LWPs simultaneously available to this task's processes, expressed as an integer.

`task.max-processes`
Maximum number of processes simultaneously available to a task, expressed as an integer.

The following zone-wide resource controls are available:

`zone.cpu-cap`
Sets a limit on the amount of CPU time that can be used by a zone. The unit used is the percentage of a single CPU that can be used by all user threads in a zone. Expressed as an integer. When projects within the capped zone have their own caps, the minimum value takes precedence. This resource control does not support the `syslog` action.

`zone.cpu-shares`
Sets a limit on the number of fair share scheduler (FSS) CPU shares for a zone. CPU shares are first allocated to the zone, and then further subdivided among projects within the zone as specified in the `project.cpu-shares` entries. Expressed as an integer. This resource control does not support the `syslog` action.

`zone.max-locked-memory`
Total amount of physical locked memory available to a zone.

`zone.max-lofi`
Maximum number of `lofi(7D)` devices available to a zone.

`zone.max-lwps`
Enhances resource isolation by preventing too many LWPs in one zone from affecting other zones. A zone's total LWPs can be further subdivided among projects within the zone within the zone by using `project.max-lwps` entries. Expressed as an integer.

`zone.max-msg-ids`
Maximum number of message queue IDs allowed for a zone, expressed as an integer.

`zone.max-processes`
Maximum number of processes simultaneously available to a zone, expressed as an integer.

`zone.max-sem-ids`
Maximum number of semaphore IDs allowed for a zone, expressed as an integer.

`zone.max-shm-ids`
Maximum number of shared memory IDs allowed for a zone, expressed as an integer.

`zone.max-shm-memory`
Total amount of shared memory allowed for a zone, expressed as a number of bytes.

`zone.max-swap`
Total amount of swap that can be consumed by user process address space mappings and `tmpfs` mounts for this zone.

See zones(5).

Units Used in Resource Controls

Resource controls can be expressed as in units of size (bytes), time (seconds), or as a count (integer). These units use the strings specified below.

Category	Res Ctrl Type String	Modifier	Scale
Size	bytes	B	1
		KB	2^10
		MB	2^20
		GB	2^30
		TB	2^40
		PB	2^50
		EB	2^60
Time	seconds	s	1
		Ks	10^3
		Ms	10^6
		Gs	10^9
		Ts	10^12
		Ps	10^15
		Es	10^18
Count	integer	none	1
		K	10^3
		M	10^6
		G	10^9
		T	10^12
		P	10^15
		Es	10^18

Scaled values can be used with resource controls. The following example shows a scaled threshold value:

```
task.max-lwps=(priv,1K,deny)
```

In the `project` file, the value `1K` is expanded to `1000`:

```
task.max-lwps=(priv,1000,deny)
```

A second example uses a larger scaled value:

```
process.max-file-size=(priv,5G,deny)
```

In the `project` file, the value `5G` is expanded to `5368709120`:

```
process.max-file-size=(priv,5368709120,deny)
```

The preceding examples use the scaling factors specified in the table above.

Note that unit modifiers (for example, `5G`) are accepted by the `prctl(1)`, `projadd(1M)`, and `projmod(1M)` commands. You cannot use unit modifiers in the project database itself.

Resource Control Values and Privilege Levels

A threshold value on a resource control constitutes a point at which local actions can be triggered or global actions, such as logging, can occur.

Each threshold value on a resource control must be associated with a privilege level. The privilege level must be one of the following three types:

`basic`
: Can be modified by the owner of the calling process.

`privileged`
: Can be modified by the current process (requiring `sys_resource` privilege) or by `prctl(1)` (requiring `proc_owner` privilege).

`system`
: Fixed for the duration of the operating system instance.

A resource control is guaranteed to have one `system` value, which is defined by the system, or resource provider. The `system` value represents how much of the resource the current implementation of the operating system is capable of providing.

Any number of privileged values can be defined, and only one basic value is allowed. Operations that are performed without specifying a privilege value are assigned a basic privilege by default.

The privilege level for a resource control value is defined in the privilege field of the resource control block as `RCTL_BASIC`, `RCTL_PRIVILEGED`, or `RCTL_SYSTEM`. See `setrctl(2)` for more information. You can use the `prctl` command to modify values that are associated with basic and privileged levels.

In specifying the privilege level of `privileged`, you can use the abbreviation `priv`. For example:

```
task.max-lwps=(priv,1K,deny)
```

Global and Local Actions on Resource Control Values

There are two categories of actions on resource control values: global and local.

Global actions apply to resource control values for every resource control on the system. You can use `rctladm(1M)` to perform the following actions:

- Display the global state of active system resource controls.
- Set global logging actions.

You can disable or enable the global logging action on resource controls. You can set the `syslog` action to a specific degree by assigning a severity level, `syslog=`*level*. The possible settings for *level* are as follows:

- `debug`
- `info`
- `notice`
- `warning`
- `err`
- `crit`
- `alert`
- `emerg`

By default, there is no global logging of resource control violations.

Local actions are taken on a process that attempts to exceed the control value. For each threshold value that is placed on a resource control, you can associate one or more actions. There are three types of local actions: `none`, `deny`, and `signal=`. These three actions are used as follows:

`none`
: No action is taken on resource requests for an amount that is greater than the threshold. This action is useful for monitoring resource usage without affecting the progress of applications. You can also enable a global message that displays when the resource control is exceeded, while, at the same time, the process exceeding the threshhold is not affected.

`deny`
: You can deny resource requests for an amount that is greater than the threshold. For example, a `task.max-lwps` resource control with action deny causes a `fork()` system call to fail if the new process would exceed the control value. See the `fork(2)`.

`signal=`
: You can enable a global signal message action when the resource control is exceeded. A signal is sent to the process when the threshold value is exceeded. Additional signals are not sent if the process consumes additional resources. Available signals are listed below.

Not all of the actions can be applied to every resource control. For example, a process cannot exceed the number of CPU shares assigned to the project of which it is a member. Therefore, a deny action is not allowed on the `project.cpu-shares` resource control.

Due to implementation restrictions, the global properties of each control can restrict the range of available actions that can be set on the threshold value. (See rctladm(1M).) A list of available signal actions is presented in the following list. For additional information about signals, see signal(3HEAD).

The following are the signals available to resource control values:

SIGABRT
: Terminate the process.

SIGHUP
: Send a hangup signal. Occurs when carrier drops on an open line. Signal sent to the process group that controls the terminal.

SIGTERM
: Terminate the process. Termination signal sent by software.

SIGKILL
: Terminate the process and kill the program.

SIGSTOP
: Stop the process. Job control signal.

SIGXRES
: Resource control limit exceeded. Generated by resource control facility.

SIGXFSZ
: Terminate the process. File size limit exceeded. Available only to resource controls with the RCTL_GLOBAL_FILE_SIZE property (process.max-file-size). See rctlblk_set_value(3C).

SIGXCPU
: Terminate the process. CPU time limit exceeded. Available only to resource controls with the RCTL_GLOBAL_CPUTIME property (process.max-cpu-time). See rctlblk_set_value(3C).

Resource Control Flags and Properties

Each resource control on the system has a certain set of associated properties. This set of properties is defined as a set of flags, which are associated with all controlled instances of that resource. Global flags cannot be modified, but the flags can be retrieved by using either rctladm(1M) or the setrctl(2) system call.

Local flags define the default behavior and configuration for a specific threshold value of that resource control on a specific process or process collective. The local flags for one threshold value do not affect the behavior of other defined threshold values for the same resource control. However, the global flags affect the behavior for every value associated with a particular control. Local flags can be modified, within the constraints supplied by their corresponding global flags, by the prctl command or the setrctl system call. See setrctl(2).

For the complete list of local flags, global flags, and their definitions, see `rctlblk_set_value(3C)`.

To determine system behavior when a threshold value for a particular resource control is reached, use `rctladm` to display the global flags for the resource control . For example, to display the values for `process.max-cpu-time`, enter:

```
$ rctladm process.max-cpu-time
process.max-cpu-time  syslog=off [ lowerable no-deny cpu-time inf seconds ]
```

The global flags indicate the following:

`lowerable`
: Superuser privileges are not required to lower the privileged values for this control.

`no-deny`
: Even when threshold values are exceeded, access to the resource is never denied.

`cpu-time`
: `SIGXCPU` is available to be sent when threshold values of this resource are reached.

`seconds`
: The time value for the resource control.

Use the `prctl` command to display local values and actions for the resource control. For example:

```
$ prctl -n process.max-cpu-time $$
    process 353939: -ksh
    NAME    PRIVILEGE    VALUE    FLAG   ACTION              RECIPIENT
 process.max-cpu-time
         privileged   18.4Es    inf   signal=XCPU                -
         system       18.4Es    inf   none
```

The `max` (`RCTL_LOCAL_MAXIMAL`) flag is set for both threshold values, and the `inf` (`RCTL_GLOBAL_INFINITE`) flag is defined for this resource control. An `inf` value has an infinite quantity. The value is never enforced. Hence, as configured, both threshold quantities represent infinite values that are never exceeded.

Resource Control Enforcement

More than one resource control can exist on a resource. A resource control can exist at each containment level in the process model. If resource controls are active on the same resource at different container levels, the smallest container's control is enforced first. Thus, action is taken on `process.max-cpu-time` before `task.max-cpu-time` if both controls are encountered simultaneously.

属性

See `attributes(5)` for a description of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Interface Stability	Committed

関連項目

prctl(1), pooladm(1M), poolcfg(1M), projadd(1M), projmod(1M), rctladm(1M), setrctl(2), rctlblk_set_value(3C), libpool(3LIB), project(4), attributes(5), FSS(7), lofi(7D)

『Oracle Solaris のシステム管理 (Oracle Solaris ゾーン、Oracle Solaris 10 ゾーン、およびリソース管理)』

名前 sgml, solbook – Standard Generalized Markup Language

機能説明 Standard Generalized Markup Language (SGML) is the ISO standard 8879:1986 that describes a syntax for marking up documents with tags that describe the purpose of the text rather than the appearance on the page. This form of markup facilitates document interchange between different platforms and applications. SGML allows the management of information as data objects rather than text on a page.

In an SGML document the main structural components are called `elements`. The organization and structure of a document and the meaning of elements are described in the Document Type Definition (DTD). Elements are the *tags* that identify the content. Element names may be descriptive of the content for ease of use. For example <para> for paragraphs. Elements can have `attributes` which are used to modify or refine the properties or characteristics of the element. Within the DTD a valid context for each element is defined and a framework is provided for the types of elements that constitute a compliant document.

Another component of the DTD is `entities`. Entities are a collection of characters that can be referenced as a unit. Entities are similar to constants in a programming language such as C. They can be defined and referenced. An entity can represent one character or symbol which does not appear on a standard keyboard, a word or group of words, or an entire separate sgml marked-up file. Entities allow reuse of standard text.

There is no single standard DTD , but the de facto standard for the computer industry is the DocBook DTD , developed and maintained by the Davenport Group. Within Sun, the SolBook DTD , which is a proper subset of DocBook DTD , is used when writing reference manual pages. The SolBook DTD contains a number of tags that are designed for the unique needs of the reference pages.

SolBook Elements Elements are defined with a hierarchical structure that gives a structure to the document. The following is a description of some of the elements from the SolBook DTD which are used for reference pages.

DOCTYPE The first line in an SGML file that identifies the location of the DTD that is used to define the document. The <!DOCTYPE string is what the SGML -aware man(1) command uses to identify that a file is formatted in SGML rather than nroff(1).

RefEntry The top layer element that contains a reference page is <refentry>. All of the text and other tags must be contained within this tag.

RefMeta The next tag in a reference page is <refmeta>, which is a container for several other tags. They are:

<refentrytitle> This is the title of the reference page. It is equivalent to the name of the reference page's file name, without the section number extension.

<manvolnum> This is the section number that the reference page resides in. The contents may be a text entity reference.

<refmiscinfo> There are one or more <refmiscinfo> tags which contain *meta* information. Meta information is information about the reference page. The <refmiscinfo> tag has the class attribute. There are four classes that are routinely used.

- date — This is the date that the file was last modified. By consensus this date is changed only when the technical information on the page changes and not simply for an editorial change.
- sectdesc — This is the section title of the reference page; for example User Commands. The value of this attribute may be a text entity reference.
- software — This is the name of the software product that the topic discussed on the reference page belongs to. For example UNIX commands are part of the SunOS x.x release. The value of this attribute may be a text entity reference.
- arch — This is the architectural platform limitation of the subject discussed on the reference page. If there are no limitations the value used is generic. Other values are sparc and x86.
- copyright — This attribute contains the Sun Microsystems copyright. Any other copyrights that may pertain to the individual reference page file should be entered as separate <refmiscinfo> entries. The value of this attribute may be a text entity reference.

RefNameDiv This tag contains the equivalent information to the .TH macro line in an nroff(1) reference page. <refnamediv> contains three tags. These tags contain the text that is before and after the '–' (dash) on the NAME line.

<refname> These are the names of the topics that are discussed in the file. There may be more than one <refname> for a page. The first <refname> must match the name of the file and the <refentrytitle>. If there are more than one <refname> tags, each is separated by a ',' (comma). The comma is generated by the publisher of sgml files, so it should not be typed. This is referred to as *auto-generated* text.

<refpurpose> The text after the dash on the NAME line is contained in this tag. This is a short summary of what the object or objects described on the reference page do or are used for. The dash is also auto-generated and should not be typed in.

<refdiscriptor> In some cases the <refentrytitle> is a general topic descriptor of a group of related objects that are discussed on the same page. In this case the first tag after the <refnamediv> is a <refdiscriptor>. The <refname> tags follow. Only one <refdiscriptor> is allowed, and it

should match the <refentrytitle>.

RefSynopsisDiv — The SYNOPSIS line of the reference page is contained by this tag. There is a <title> that usually contains an entity reference. The text is the word SYNOPSIS. There are several tags within <refsynopsisdiv> that are designed specifically for the type of synopsis that is used in the different reference page sections. The three types are:

<cmdsynopsis>	Used for commands and utilities pages.
<funcsynopsis>	Used for programming interface pages.
<synopsis>	Used for pages that do not fall into the other two categories.

RefSect1 — This tag is equivalent to the .SH nroff macro. It contains a <title> element that is the title of the reference page section. Section names are the standard names such as DESCRIPTION, OPTIONS, PARAMETERS, SEE ALSO, and others. The contents of the <title> may be a text entity reference.

RefSect2 — This tag is equivalent to the .SS nroff macro. It contains a <title> element that contains the text of the sub-section heading. <refsect2> tags may also be used within a <refsynopsisdiv> as a sub-section heading for the SYNOPSIS section.

Block Elements — There are a number of block elements that are used for grouping text. This is a list of some of these elements.

<para>	This tag is used to contain a paragraph of text.
<variablelist>	This tag is used to create two column lists. For example descriptions for command options, where the first column lists the option and the second column describes the option.
<orderedlist>	An list of items in a specific order.
<itemizedlist>	A list of items that are marked with a character such as a bullet or a dash.
<literallayout>	Formatted program output as produced by a program or command. This tag is a container for lines set off from the main text in which line breaks, tabs, and leading white space are significant.
<programlisting>	A segment of program code. Line breaks and leading white space are significant.
<table>	This tag contains the layout and content for tabular formatting of information. <table> has a required <title>.
<informaltable>	This tag is the same as the <table> tag except the <title> is not required.

<example>	This tag contains examples of source code or usage of commands. It contains a required <title>.
<informalexample>	This tag is the same as the <example> tag except the <title> is not required.

Inline Elements

The inline elements are used for tagging text.

<command>	An executable program or the entry a user makes to execute a command.
<function>	A subroutine in a program or external library.
<literal>	Contains any literal string.
<parameter>	An argument passed to a computer program by a function or routine.
<inlineequation>	An untitled mathematical equation occurring in-line.
<link>	A hypertext link to text within a book, in the case of the reference manual it is used to cross reference to another reference page.
<olink>	A hypertext link used to create cross references to books other than the reference manual.
<xref>	A cross reference to another part of the same reference page.

関連項目

man(1), nroff(1), man(5)

名前

smf – サービス管理機能

機能説明

Solaris サービス管理機能は、「サービス」と呼ばれる永続的に実行されるアプリケーションを提供するためのプログラミングモデルを定義します。また、この機能は、サービスを実行するためのインフラストラクチャーも提供します。サービスは、実行中のアプリケーション、デバイスのソフトウェア状態、その他の一連のサービスのいずれかを表現できます。このフレームワーク内では、サービスは「サービスインスタンス」オブジェクトとして表現されます。これは、サービスオブジェクトの子になります。インスタンスオブジェクトは、親であるサービスオブジェクトの構成を継承または上書きできます。これにより、複数のサービスインスタンス間で構成情報を共有することができます。すべてのサービスオブジェクトとインスタンスオブジェクトは、一連の構成情報を表現した単一の「スコープ」内に格納されます。ローカル Solaris インスタンスの構成は「localhost」スコープと呼ばれますが、これが現在サポートされている唯一のスコープとなります。

各サービスインスタンスの名前は、障害管理リソース識別子 (Fault Management Resource Identifier、FMRI) に基づいて、スキーマ「svc:」を使って付けられます。たとえば、システム起動時に起動される syslogd(1M) デーモンは、次のような名前を持つデフォルトサービスインスタンスです。

```
svc://localhost/system/system-log:default
svc:/system/system-log:default
system/system-log:default
```

多くのコマンドでは FMRI の省略形も使用できます。そのような例については、svcs(1) のマニュアルページを参照してください。

上の例では、「default」がインスタンス名、「system/system-log」がサービス名になります。サービス名は、スラッシュ (/) で区切られた複数のコンポーネントから構成される場合があります。最後のコンポーネントを除くすべてのコンポーネントは、そのサービスの「カテゴリ」を構成します。サイト固有のサービスの名前は、「site」で始まるカテゴリを使って付けることをお勧めします。

サービスインスタンスは、有効化または無効化されます。すべてのサービスは、svcadm(1M) コマンドを使って有効化または無効化できます。

システム上の管理対象サービスインスタンスを一覧表示するには、svcs(1) コマンドを使用します。

依存関係

サービスインスタンスは、サービス、インスタンス、ファイルなどの一連の entities (エンティティー) に対する依存関係を持つ可能性があります。依存関係により、サービスがいつ起動され、いつ自動的に停止されるかが左右されます。サービスが有効化されていてもその依存関係が満たされていない場合、そのサービスはオフライン状態に保たれます。その依存関係が満たされると、そのサービスは起動されます。起動が成功すると、そのサービスはオンライン状態に移

行します。サービスやインスタンスとは異なり、ファイルの依存関係は、ファイルが作成または削除されるたびに動的に評価されるということはありません。これらは 1 回だけ評価されます。

依存関係が満たされるかどうかは、サービスの `grouping` (グループ化) によって決まります。

`require_all` 引用されているすべてのサービスが実行中 (オンライン、機能低下のいずれか) の場合、または指定されているすべてのファイルが存在している場合に満たされます。

`require_any` 引用されているサービスのいずれかが実行中 (オンライン、機能低下のいずれか) の場合、または指定されているファイルの少なくとも 1 つが存在している場合に満たされます。

`optional_all` 引用されているサービスが実行中 (オンライン、機能低下のいずれか) の場合、または管理作業が行われないためにそれらのサービスが実行されていない場合 (つまり、管理作業が行われないために起動されない依存関係に対して待機状態にあるために、それらのサービスが無効、保守、存在しない、またはオフライン状態になっている場合) に満たされます。不完全なサービスも、オプションの依存関係を満たします。

`exclude_all` 引用されているすべてのサービスが無効になっているか保守状態にある場合、または引用されているサービスまたはファイルが存在していない場合に満たされます。

`require_all`、`require_any`、`optional_all` のいずれかの依存関係から引用されている特定のサービスが、いったん実行中 (オンライン、機能低下のいずれか) になったあとで停止または更新された場合、SMF は、そのサービスが停止した理由とその依存関係の `restart_on` 属性に基づいて、サービスを停止するかどうかを決定します。

```
                  |  restart_on value
event             |  none  error restart refresh
------------------+----------------------------
stop due to error |  no    yes   yes     yes
non-error stop    |  no    no    yes     yes
refresh           |  no    no    no      yes
```

あるサービスがエラーによって停止したとみなされるのは、コアダンプなどのハードウェアエラーやソフトウェアエラーがそのサービスで発生した場合です。`exclude_all` 依存関係の場合、引用されているサービスが起動され、かつ `restart_on` 属性が `none` 以外になっている場合にサービスが停止されます。

特定のサービスの依存関係を一覧表示するには svcs(1) または svccfg(1M) を使用し、変更するには svccfg(1M) を使用します。

リスタータ

各サービスは特定のリスタータによって管理されます。マスターリスタータ svc.startd(1M) は、一連のサービスインスタンスとその依存関係の状態をすべて管理します。マスターリスタータは、自身のサービスに代って各種処理を行うほか、特定アプリケーションクラス向けの特定実行環境を提供できる委任リスタータを制御します。たとえば、inetd(1M) は委任リスタータであり、入力ファイル記述子と出力ファイル記述子で表されるネットワーク接続から成る初期環境を、自身のサービスインスタンスに対して提供します。inetd(1M) に委任された各インスタンスは、オンライン状態になっています。ある特定のインスタンスのデーモンが実行されていなくても、そのインスタンスを実行することは可能です。

依存関係が満たされるには、各インスタンスがオンライン状態に移行する必要があります。このため、svc.startd(1M) は、ほかのインスタンスの起動メソッドを呼び出すか、委任リスタータにそうするように指示します。これらの処理はオーバーラップする可能性があります。

現在のサービス群およびそれらに関連付けられたリスタータを確認するには、svcs(1) を使用します。すべてのリスタータが使用する共通の構成については、smf_restarter(5) を参照してください。

メソッド

各サービスまたはサービスインスタンスは、サービスの起動、停止、および更新 (省略可能) を行う一連のメソッドを定義する必要があります。svc.startd(1M) および類似の fork(2)-exec(2) リスタータ用のメソッド規約の詳細については、smf_method(5) を参照してください。

レガシー構成情報を取得してリポジトリ内に格納するメソッドなど、各種の管理メソッドについては、svccfg(1M) のマニュアルページを参照してください。

特定のサービスのメソッドを一覧表示したり変更したりするには、svccfg(1M) コマンドを使用します。

状態

各サービスインスタンスは常に明確に定義された特定の状態にありますが、どの状態になるかは、その依存関係、メソッドの実行結果、および契約イベントの可能性によって決まります。定義されている状態は、次のとおりです。

未初期化
: これは、すべてのサービスインスタンスの初期状態です。インスタンスは、svc.startd(1M) または適切なリスタータによって評価された結果、保守、オフライン、無効のいずれかの状態に移行します。

OFFLINE
: インスタンスは有効になっていますが、まだ実行中でも実行可能でもありません。リスタータがあるサービスの起動メソッドまたはそれと同等のメソッドを正常に実行できた場合、そのインスタンスはオンライン状態に移行します。失敗した場合は通常、機能低下、保守のいずれかの状態に移行することがあります。管理作業を行うと未初期化状態に移行する可能性があります。

ONLINE	インスタンスは有効になっており、実行中であるか実行可能になっています。オンライン状態の具体的な内容はアプリケーションモデルに固有であり、サービスインスタンスを管理するリスタータによって定義されます。オンラインは、適切に構成されたサービスのすべての依存関係が満たされた場合に予想される動作状態です。インスタンスで障害が発生すると、機能低下、保守のいずれかの状態に移行する可能性があります。インスタンスが依存するサービスで障害が発生すると、オフライン、機能低下のいずれかの状態に移行する可能性があります。
DEGRADED	インスタンスは有効になっており、実行中であるか実行可能になっています。ただし、通常の動作と比較すると、インスタンスはある制限された機能レベルで動作しています。インスタンスで障害が発生すると、保守状態に移行する可能性があります。インスタンスが依存するサービスで障害が発生すると、オフライン、機能低下のいずれかの状態に移行する可能性があります。機能が回復すると、オンライン状態に移行します。
保守	インスタンスは有効になっていますが、実行可能ではありません。インスタンスを保守状態から移行させるには、`svcadm clear` による管理作業が必要です。何らかの管理操作を実施中の場合、この保守状態に一時的に達する場合があります。
無効	インスタンスは無効になっています。サービスを有効化するとオフライン状態に移行し、最終的には、すべての依存関係が満たされた時点でオンライン状態に移行します。
レガシー実行	この状態は、サービス管理機能によって管理されていないレガシーインスタンスを表します。この状態のインスタンスはある時点で起動されたものですが、それが実行中かどうかはわかりません。この機能を使って行えるのは、インスタンスの監視だけであり、ほかの状態に移行させることはできません。

状態の移行には、結果的に元の状態に戻るようなものもあります。

イベント通知

SMF では、SNMP または SMTP を使用することで状態の遷移を通知できます。状態遷移に関する情報イベントが発行され、`snmp-notify(1M)` や `smtp-notify(1M)` などの通知デーモンによって処理されます。無効になっているサービスの SMF 状態遷移では、通知は生成されません。ただし、遷移の最終状態が「無効」で、その遷移に関する通知パラメータが存在する場合に限り、通知が生成されます。遷移の初期状態と最終状態が同じである場合、通知は生成されません。

通知パラメータ

SMF 状態遷移によって生成される情報イベントを除き、FMA イベントの通知パラメータは `svc:/system/fm/notify-params:default` に保存されます。これらは、サービスまたは遷移中のサービスのインスタンスに保存されます。SMF 状態遷移によって生成されるイベントの通知パラメータは、システム全体のパラメータと

して svc:/system/svc/global:default で設定できます。システム全体の通知パラメータは、scf_instance_get_pg_composed(3SCF) と同様の合成検索が遷移中のインスタンスに見つからない場合に使用されます。通知パラメータは svccfg(1M) を使用すると操作できます。DTD に記述されている notification_parameters 要素を使用すると、サービスマニフェストまたはサービスプロファイルで通知パラメータを構成できます。次に例を示します。

```
<notification_parameters>
     <event  value='from-online' />
     <type name='smtp' active="false">
        <parameter name='to'>
            <value_node value='root@local' />
            <value_node value='admin-alias@eng' />
        </parameter>
     </type>
     <type name='snmp' />
</notification_parameters>
```

events は、SMF 状態遷移セットをコンマで区切ったリストか、または FMA イベントクラスをコンマで区切ったリストです。*events* に SMF 状態遷移セットと FMA イベントクラスを混在させることはできません。

FMA サブシステムで診断される問題のライフサイクルを、初期の診断から暫定的な更新、最後の問題解決まで、problem- {diagnosed,updated,repaired,resolved} の各タグを利用して記述できます。これらのタグは、基になる FMA プロトコルイベントクラス (すべて list.* 階層に含まれる) の別名ですが、後者は通知の構成に使用しないようにしてください。

problem-diagnosed
: 新しい問題が FMA サブシステムによって診断されました。診断には、1 つ以上の疑わしいリソースからなるリストが含まれています。これらのリソースは、それ以上のエラーの発生を防ぐために、自動的に隔離されている可能性があります (適切な場合)。問題はイベントペイロードの UUID で識別されます。この問題の解決ライフサイクルを表す追加のイベントには、一致する UUID が使用されます。

problem-updated
: 問題の診断に含まれていた疑わしいリソースの 1 つ以上が、修復または交換されたか、または疑いがなくなりました (あるいは、再度障害が発生しました)。ただし、障害の発生したリソースが少なくとも 1 つリストに残っています。修復は、fmadm コマンド行 (fmadm repaired、fmadm acquit、fmadm replaced) の結果として、あるいは部品シリアル番号の変更の検出などを通して自動的に検出された可能性があります。

`problem-repaired`
問題の診断に含まれていた疑わしいリソースのすべてが、修復または解決されたか、または疑いがなくなりました。この段階では、一部またはすべてのリソースがまだ隔離されている可能性があります。

`problem-resolved`
問題の診断に含まれていた疑わしいリソースのすべてが、修復または解決されたか、疑いがなくなりました。さらに、隔離も解除されました (オフラインになっていた疑わしい CPU がオンラインに戻った場合など。通常、この隔離解除の処理は自動的に行われます)。

状態遷移セットは次のように定義されます。

`to-<state>`	遷移の最終状態が <state> である、すべての遷移のセット。
`from-<state>`	遷移の初期状態が <state> である、すべての遷移のセット。
`<state>`	遷移の初期状態が <state> である、すべての遷移のセット。
`all`	すべての遷移のセット。

state の有効な値は、maintenance、offline、disabled、online、および degraded です。遷移セットの定義の例は、`maintenance`、 `from-online`、`to-degraded` などです。

プロパティーとプロパティーグループ

これまでに説明した依存関係、メソッド、委任リスタータ、およびインスタンス状態は、サービスまたはサービスインスタンスのプロパティーまたはプロパティーグループとして表現されます。サービスまたはサービスインスタンスは、任意の数のプロパティーグループを、アプリケーションデータの格納先として持つことができます。プロパティーグループをこのような方法で使用すれば、リポジトリがこの機能内のすべてのデータに対して提供する属性を、アプリケーションの構成情報から導き出すことができます。また、アプリケーションは、`service_bundle(4)` DTD の適切なサブセットを使ってフレームワーク内の自身の構成データを表現することもできます。

プロパティーの検索は合成されます。あるプロパティーグループとプロパティーの組み合わせがサービスインスタンス上で見つからなかった場合、`libscf(3LIB)` の大部分のコマンドや高レベルインタフェースは、その同じプロパティーとプロパティーグループの組み合わせを、そのインスタントを含むサービス上で検索します。これにより、共通の構成をサービスインスタンス間で共有することが可能になります。この合成は、サービスインスタンスとその親であるサービスとの間の一種の継承関係として捉えることができます。

プロパティーは、承認されていないプロセスによる変更から保護されます。`smf_security(5)` を参照してください。

general プロパティーグループ

general プロパティーグループはすべてのサービスインスタンスに適用されます。次のプロパティーが含まれています。

enabled (boolean)　インスタンスが有効になっているかどうかを指定します。インスタンスにこのプロパティーが存在しない場合、SMF はインスタンスのリスタータにリスタータの存在を通知しません。

restarter (fmri)　このサービスのリスタータ。詳細については、「リスタータ」の節を参照してください。このプロパティーが設定されていない場合は、システムのデフォルトのリスタータが使用されます。

complete (astring)　このサービスが完了したか、または開始すべきでない部分的な定義であるかを示します。このプロパティーは、マニフェストのインポート時、または管理者がインスタンスを手動で作成するときに自動的に設定されるため、変更は不要なはずです。

レイヤー

リポジトリは、管理カスタマイズ、現在の状態、および標準の場所にあるファイルからのデフォルト値の組み合わせで構成されています。SMF 管理のファイルシステムの位置にあるマニフェストによって定義されているサービス、インスタンス、プロパティーグループ、およびプロパティーは、リポジトリ内で常に正確に表現されます。管理者またはほかのプログラムによって実行時に行われたカスタマイズは、捕獲されてリポジトリに保管されます。

プロパティーはリポジトリ内で、マニフェスト、プロファイル、および管理カスタマイズからの異なる設定を反映した異なる値を持つ場合があります。デフォルトでユーザーおよびサービスに提供される値は、 レイヤーと呼ばれる単純な優先順位スキームによって調停されます。

SMF によって 4 つのレイヤーが追跡されます。優先順位の高い順に示すと、次のようになります。

admin　SMF コマンドまたはライブラリの対話型使用によって実行されたすべての変更。このレイヤーは優先順位がもっとも高くなります。

site-profile　/etc/svc/profile/site ディレクトリのファイルか、レガシーの /etc/svc/profile/site.xml および /var/svc/profile/site.xml ファイルのすべての値。

system-profile　システムプロファイルの場所 /etc/svc/profile/generic.xml および /etc/svc/profile/platform.xml のすべての値

manifest　システムマニフェストの場所 /lib/svc/manifest または /var/svc/manifest のすべての値。

個々のレイヤー内におけるプロパティーの競合は許可されません。admin レイヤーに競合するプロパティーがある場合、以前のプロパティーが単純に上書きされ

ます。同じプロパティーが複数のファイルによってほかのレイヤーで配信され、高いレイヤーで設定されない場合、インスタンス全体に競合状態のタグが付けられ、競合中の定義が削除されるか高いレイヤーでプロパティーが設定されるまでは、svc.startd(1M) によって開始されません。svccfg および svcprop などの単一の値を要求するその他の libscf 利用者は、すべての適切な値からランダムなプロパティー設定を取得します。競合中のどの値が返されるかは保証されません。

スナップショット

リポジトリ内の各インスタンスに関する履歴データが、サービス管理機能によって管理されます。このデータは、管理上の検査やロールバック向けの読み取り専用スナップショットとして利用可能となります。利用可能なスナップショットタイプは次のとおりです。

`initial` 管理者によって作成されたかパッケージインストール中に生成されたインスタンスの初期構成。

`previous` 元に戻す管理操作を実行する際に取得された、その時点における構成。

`running` インスタンスの実行中の構成。

`start` オンライン状態への正常移行中に取得された構成。

svccfg(1M) コマンドを使用すれば、スナップショットを操作できます。

特殊なプロパティーグループ

プロパティーグループの中には、「非永続的」とマークされているものがあります。それらのグループはスナップショット内にバックアップされず、その内容はシステムブート中にクリアされます。そのようなグループは一般に、システムの再起動時に消えてもかまわないようなアクティブプログラム状態を保持します。

構成リポジトリ

サービスやサービスインスタンスに関連付けられたプロパティーに加え、各サービスインスタンスの現在の状態が、svc.configd(1M) が管理するシステムリポジトリ内に格納されます。

サービス管理機能データ用のリポジトリを管理するには、svc.configd(1M) を使用します。

サービスバンドル、マニフェスト、およびプロファイル

構成リポジトリ内に格納されている、サービスまたはサービスインスタンスに関連付けられた情報は、XML ベースのファイルとしてエクスポートできます。サービスバンドルと呼ばれるそれらの XML ファイルは移植性に優れており、バックアップ用途に適しています。サービスバンドルは次のいずれかのタイプに分類されます。

`manifests` 特定のサービス群またはサービスインスタンス群に関連付けられたプロパティーをすべて含んだファイル。

`profiles` 一連のサービスインスタンスと各インスタンスの enabled プロパティー (general プロパティーグループの `boolean` 型プロパティー) の値を含んだファイル。

プロファイルには、サービスおよびインスタンスのプロパティーの構成値も含まれることがあります。プロファイルにテンプレート要素を定義することはできません。

プロファイルでは、service_bundle(4) で説明されている DTD の要素の緩和されたセットを使用できます。これらを使用するには、DOCTYPE エントリに次の定義を追加するようにしてください。

```
<!ENTITY % profile "INCLUDE">
<!ENTITY % manifest "IGNORE">
```

特定のリポジトリに対してサービスバンドルのインポート、エクスポートを行うには、svccfg(1M) コマンドを使用します。サービスバンドルのファイル形式や作成時のガイドラインについては、service_bundle(4) を参照してください。

マイルストーン

smf マイルストーンは、複数のサービス依存関係を集約するサービスです。通常、マイルストーンは、それ自体で有用な機能を果たすことはありませんが、ほかのサービスが利用できるようにシステム対応状況の特定の状態を宣言します。たとえば、name-services マイルストーンは、単に現在有効になっているネームサービスに依存します。

レガシー起動スクリプト

/etc/rc?.d ディレクトリ内の起動プログラムは、対応する実行レベルのマイルストーンの一部として実行されます。

```
/etc/rcS.d    milestone/single-user:default

/etc/rc2.d    milestone/multi-user:default

/etc/rc3.d    milestone/multi-user-server:default
```

各プログラムの実行は特定の機能限定版のサービスインスタンスとして表現され、プログラムのパスに基づいて命名されます。これらのインスタンスは、特殊な状態であるレガシー実行状態に保たれます。

これらのインスタンスは enabled プロパティー (general プロパティーグループの boolean 型プロパティー) を持たず、一般に svcadm(1M) コマンドを使って操作することもできません。これらのプログラムについては、エラー診断や再起動は行われません。

関連項目

svcs(1), inetd(1M), snmp-notify(1M), smtp-notify(1M),svcadm(1M), svccfg(1M), svc.configd(1M), svc.startd(1M), exec(2), fork(2), libscf(3LIB), strftime(3C), contract(4), service_bundle(4), smf_bootstrap(5), smf_method(5), smf_restarter(5), smf_security(5)

名前

smf_bootstrap – サービス管理機能のブート、パッケージ化、および互換性の動作

機能説明

サービス管理機能は、サービスマニフェストの配信、サービスマニフェストの変更の組み込み、サービス構成の安定性の記述、サービス構成の優先指定の使用、およびサービスプロファイルの使用に関する規約を定めます。

ブート時のマニフェストの読み込み

システムのブート時と、管理者またはプログラムが実行するときは常に、標準のディレクトリツリー /lib/svc/manifest および /var/svc/manifest からのマニフェストが処理されます。

```
$ svcadm restart manifest-import
```

以前インポートされなかったか、最後にインポートされてから変更されたマニフェストが処理されます。マニフェストが変更されたかどうかを判断するためにハッシュが使用されます。

標準の場所にあるマニフェストがはじめてインポートされると、マニフェストのプロパティー、インスタンス、およびサービスが、manifest レイヤーの一部としてリポジトリに追加されます。

標準の場所にあるマニフェストは、更新されると自動的にインポートされます。新しいサービスおよびインスタンスは追加され、変更されたプロパティーはアップグレードされ、削除されたサービス、インスタンス、およびプロパティーは削除されます。

マニフェストはブート中に 2 つの段階で処理されます。

サービス svc:/system/early-manifest-import:default は、最初のマニフェスト処理を担当する擬似サービスです。このサービスは /lib/svc/manifest ディレクトリツリーにあるマニフェストだけを処理します。この処理は、svc.startd(1M) がサービスを初期化する前に行われるため、/lib/svc/manifest で配信されているサービスは常に最新の定義で起動されます。これは擬似サービスなので svcadm(1M) コマンドは無視されます。ただし、svcs(1) を使用して、ステータスの監視とログファイル情報の取得を行うことはできます。

svc:/system/manifest-import:default サービスは 2 番目のマニフェスト処理を担当し、まず /lib/svc/manifest、次に /var/svc/manifest の順に、これら両方のディレクトリツリーからマニフェストファイルをインポートします。

/var/svc/manifest のサポートは、system/early-manifest-import:default の導入より前にそのディレクトリツリーで配信されていたマニフェストに対する互換性サポートです。/var/svc/manifest で配信されているサービスには、アップグレード関連の問題が発生する可能性があります。つまり、更新されたマニフェストがまだインポートされていないために、サービスが古いリポジトリ構成で起動する可能性があります。同様に、マニフェストファイルがまだ処理されていないために、新たに追加されたサービスが使用できなくなったり、削除されたサービスがブート中に

起動したりすることもあります。このような問題を避けるために、開発者にはマニフェストを /lib/svc/manifest に移動することを強くお勧めします。

プロファイルの適用

プロファイルは early-manifest-import サービスおよび manifest-import サービスによっても適用されます。

/etc/svc/profile/generic.xml および /etc/svc/profile/platform.xml にあるシステム配信プロファイルは system-profile レイヤーにインポートされます。

/etc/svc/profile/site ディレクトリにあるサイト固有プロファイルと、レガシーサイトファイル /etc/svc/profile/site.xml および /var/svc/profile/site.xml は、site-profile レイヤーにインポートされます。

管理者は次を実行することによって、これらのプロファイルが再適用されることを要求できます。

```
$ svcadm restart manifest-import
```

プロファイルによって定義されるプロパティー、インスタンス、およびサービスの動作は、マニフェストによって定義される動作と同じです。

パッケージ化操作中のマニフェストの処理

パッケージ内のサービスマニフェストは、クラス manifest によって識別されます。サービスマニフェストのインストールと削除を行うクラスアクションスクリプトは、パッケージ化サブシステムに含まれています。pkg install が呼び出されると、サービスマニフェストがインポートされます。

pkg uninstall が呼び出されると、無効になっているマニフェスト内のインスタンスが削除されます。マニフェスト内のインスタンスで、オンライン状態または機能低下状態になっているものは、まず無効化され、そのあとで削除されます。また、インスタンスが残っていないマニフェスト内のサービスもすべて削除されます。

安定性の宣言

マニフェストで配信する各サービスグループおよび各プロパティーグループには、attributes(5) の定義に基づく安定性レベルを宣言するようにしてください。アプリケーション開発者は、サービスやオブジェクトの存在またはそのコンポーネントを基に機能を開発する場合に、安定性レベルがわかっていれば、リリースが変わっても動作するかどうかを判断しやすくなります。

smf(5) のコンテキストでは、安定性の値は、そのサービスのリリースが変わるときに想定される、プロパティーグループ内のプロパティーに対する変更の範囲も示します。これにはそのサービスのパッチも含まれます。次の 2 つの節では、これについて詳細に説明します。

プロパティーグループの削除

service_bundle(4) ドキュメント型定義には、サービスマニフェスト内の各プロパティーグループに適用できる delete 属性があります。 true に設定されている場合、delete 属性は svccfg(1M) およびほかのマニフェストインポートツールに対

し、このプロパティーグループをリポジトリから削除するように指示します。delete 属性が存在しないか false に設定されている場合、そのプロパティーグループはリポジトリに保持されます。

「安定」または「開発中」と宣言されているプロパティーグループは削除されません。「不安定」と宣言されているプロパティーグループは、リリースが変わるときに削除される可能性があります。

関連項目

svcs(1), svcadm(1M), svccfg(1M), svc.startd(1M), libscf(3LIB), service_bundle(4), attributes(5), smf(5), smf_security(5)

pkg(1)

注意事項

smf(5) の現在のバージョンでは、複数のリポジトリはサポートされていません。

名前

smf_method – サービス管理フレームワークのメソッド規約

機能説明

サービス管理フレームワーク smf(5) で svc.startd(1M) によって管理されるサービスのクラスは、単純な fork(2)-exec(2) モデルに適合するアプリケーションから成ります。svc.startd(1M) マスターデーモンとほかのリスタータは fork(2)-exec(2) モデルをサポートしており、追加の機能を備えている場合もあります。svc.startd(1M) デーモンとほかのリスタータにとっては、サービスインスタンスのアクティブ化、操作、または検査を行うメソッドがこのマニュアルページで説明されている規約に従っている必要があります。

呼び出しの形式

メソッド呼び出しの形式は規約で規定されていません。メソッドの呼び出しは、デーモンまたはサービスを提供するほかの実行可能バイナリの直接呼び出しの場合もあります。実行可能スクリプトなどの間接実行可能ファイルを使用する場合は、規約では次の形式が推奨されています。

```
/path/to/method_executable abbr_method_name
```

この推奨形式の *abbr_method_name* は、start や stop など、サポートされているメソッドです。リスタータでサポートされているメソッドセットについては、そのリスタータの関連ページで説明されています。svc.startd(1M) デーモンは start、stop、および refresh メソッドをサポートしています。

リスタータには、このページで説明するメソッドのほかにも各種のメソッドが定義されていることがあります。そのような拡張も含めた規約はリスタータによって定義され、ここで説明する規約とは異なる場合があります。

環境変数

リスタータは、メソッド呼び出しのコンテキストを決定する 4 つの環境変数をメソッドに提供します。

SMF_FMRI
: メソッド呼び出しの対象であるインスタンスのサービス障害管理リソース識別子 (FMRI)。

SMF_METHOD
: 呼び出されるメソッドの完全な名前。start や stop など。

SMF_RESTARTER
: メソッドを呼び出すリスタータのサービス FMRI。

SMF_ZONENAME
: メソッドが実行されているゾーンの名前。これは zonename(1) コマンドでも取得できます。

メソッドで永続的プロセスを呼び出す場合は、その前にこれらの変数を環境から削除するようにしてください。サービスの作成者が Bourne 互換のシェルスクリプトを使用して後述のインクルードファイルにサービスメソッドを合成できるように、簡易シェル関数 smf_clear_env が用意されています。

後述のとおり、メソッドコンテキストによってほかの環境変数が設定されることもあります。

メソッドの定義

メソッドは、`method` タイプのプロパティーグループの 3 つのプロパティーで最小限定義されます。

これらのプロパティーは次のとおりです。

exec (*astring*) メソッドの実行可能ファイルの文字列。

timeout_seconds (*count*) メソッドがタイムアウトするまでの秒数。詳細については、「タイムアウト」の節を参照してください。

type (*astring*) メソッドのタイプ。現在は常に `method` に設定されます。

メソッドコンテキストを定義して、メソッドの実行環境をより詳細に指定することもできます。詳細については、「メソッドコンテキスト」の節を参照してください。

メソッドトークン

リスタータ `svc.startd` によってメソッドの `exec` 文字列に一連のトークンが定義されている場合は、それらが解析され、適切な値で展開されます。ほかのリスタータはメソッドトークンをサポートしていない場合があります。inet サービスの委任リスタータ `inetd(1M)` は、次のメソッド展開をサポートしていません。

`%%`
: %

`%r`
: リスタータの名前。`svc.startd` など。

`%m`
: 呼び出されるメソッドの完全な名前。`start` や `stop` など。

`%s`
: サービスの名前

`%i`
: インスタンスの名前

`%f`
: インスタンスの FMRI

`%{prop[:,]}`
: プロパティーの値。`prop` は、プロパティーの FMRI、プロパティーグループ名とプロパティー名を `/` で区切ったもの、または `application` プロパティーグループ内のプロパティー名です。これらの値のあとに `,` (コンマ) または `:` (コロン) が続く場合があります。ある場合、その区切り文字が複数の値を区切るために使用されます。ない場合は、スペースが使用されます。次に示すシェルのメタキャラクタが文字列値の中に見つかった場合は、`\` (バックスラッシュ) でクォートされます。

```
; & ( ) | ^ < > newline space tab  \  " '
```

展開が正しくないとメソッドの失敗を招きます。

メソッドコマンドの代わりに、2 つの明示的なトークンを使用できます。

`:kill [-signal]`
: 指定されたシグナルを主インスタンス契約のすべてのプロセスに送信します。デフォルトのシグナルは SIGTERM です。常に SMF_EXIT_OK を返します。このトークンは、一般的な pkill の呼び出しの代わりに使用するようにしてください。

`:true`
: 常に SMF_EXIT_OK を返します。このトークンは、リスタータには必要であっても、特定のサービス実装には必要のないメソッドに使用するようにしてください。

終了と終了ステータス

start メソッドは、サービスインスタンスが要求に応答できる状態になるか、あるいは機能するまで、終了を遅らせる必要があります。

次の終了ステータスコードが <libscf.h> とシェルサポートファイルに定義されています。

SMF_EXIT_OK	0	メソッドは処理を正常に実行して終了しました。
SMF_EXIT_ERR_FATAL	95	メソッドで致命的な失敗が発生し、管理者の操作なしでは回復不可能です。
SMF_EXIT_ERR_CONFIG	96	回復不可能な構成エラーです。一般に、この終了ステータスが返されるのは、有効になっているサービスインスタンスに必要な構成ファイルが見つからない場合です。
SMF_EXIT_ERR_NOSMF	99	メソッドは誤って smf(5) 機能の外部で呼び出されました。smf(5) の機能に依存しているサービスは、このステータス値で終了するようにしてください。
SMF_EXIT_ERR_PERM	100	メソッドには、ファイルのアクセス権、特権、承認、資格情報といった形式の特権が必要ですが、呼び出し時には使用できませんでした。
SMF_EXIT_ERR_OTHER	0 以外	メソッドから 0 以外の終了ステータスが返された場合、それは不明なエラーとして扱われます。一連の不明なエラーは、リスタータで、あるいはリスタータに代わって、障害として診断できます。

正確な終了コードを使用することで、担当のリスタータでエラー応答を診断して、再起動が適切と考えられる断続的なエラーと、管理者の操作を必要とする永続的なエラーとに分類できます。

タイムアウト

メソッドごとに個別のタイムアウトを秒単位で設定できます。特定のタイムアウトを選択する場合は、メソッドが応答しなくなったことによるメソッド失敗をサイトで検出できる見込みに基づくようにしてください。たとえば、複製されたファイルシステムなどのフェイルオーバーリソースを備えたサイトでは、メソッドのタイムアウトをデフォルト値より長くします。リモートリソースのないサイトでは、タイムアウトを短くすることができます。メソッドのタイムアウトは `timeout_seconds` プロパティーで指定されます。

メソッドに `0 timeout_seconds` を指定すると、サービスにはタイムアウトが存在しないことをリスタータに対して宣言することになります。この設定は推奨されませんが、どうしてもそれを必要とするサービスのために用意されています。

`-1 timeout_seconds` も使用できますが、非推奨になった仕様です。

シェルプログラムのサポート

前述の終了ステータス値を定義する一連の環境変数が、`/lib/svc/share/smf_include.sh` ファイル内の簡易シェル関数で提供されます。このファイルは Bourne シェルスクリプトであり、任意の Bourne 互換シェルのソース演算子を介したインクルードに適しています。

SMF メソッドとして機能するスクリプトおよび `/etc/init.d` スクリプトの合成を容易にするために、`smf_present()` シェル関数が用意されています。smf(5) 機能を使用できない場合、`smf_present()` は 0 以外の終了ステータスを返します。

そのようなスクリプトの構造の例を次に示します。

```
if smf_present; then
      # Shell code to run application as managed service
      ....

      smf_clear_env
else
      # Shell code to run application as /etc/init.d script
      ....
fi
```

この例では、用意されている両方の簡易関数の使用方法が示されています。

メソッドコンテキスト

サービス管理機能は、fork(2)-exec(2) モデルのサービスを実行するコンテキストを、共通のメカニズムセットに提供します。

必要なメソッドコンテキストはサービス開発者が指定するようにしてください。セキュリティーが損なわれることをできるだけ防ぐために、すべてのサービスインスタンスは最低限の特権で実行されるべきです。

メソッドコンテキストには次のプロパティーを含めることができます。

use_profile
user、group、privileges、および limit_privileges プロパティーの代わりにプロファイルを使用するかどうかを指定するブール値。

environment
メソッドの環境に挿入する環境変数を、いくつかの NAME=value 文字列で指定します。

profile
RBAC (役割に基づくアクセス制御) プロファイルの名前。メソッドの実行可能ファイルとの組み合わせで、exec_attr(4) 内のエントリを識別します。

user
数値またはテキスト形式のユーザー ID。

group
数値またはテキスト形式のグループ ID。

supp_groups
補助グループメンバーシップを数値またはテキスト形式の ID で指定する、省略可能な文字列。

privileges
privileges(5) で定義されている特権セットを指定する、省略可能な文字列。

limit_privileges
privileges(5) で定義されている制限特権セットを指定する、省略可能な文字列。

working_directory
メソッドを起動するホームディレクトリ。トークンとして :home を使用すると、メソッドの起動に使用された uid に該当するユーザーのホームディレクトリを指定できます。このプロパティーが設定されていない場合は、:home が使用されます。

corefile_pattern
coreadm(1M) に従ってサービスに使用するコアファイルパターンを指定する、省略可能な文字列。ほとんどのリスタータにはデフォルトが用意されています。このプロパティーの設定は、グローバルなコアパターンをローカルでカスタマイズした設定よりも優先されます。

project
数値またはテキスト形式のプロジェクト ID。トークンとして :default を使用すると、メソッドの起動に使用された uid に該当するユーザーの、getdefaultproj(3PROJECT) で識別されるプロジェクトを指定できます。

resource_pool
メソッドを起動するリソースプールの名前。トークンとして :default を使用すると、上記の project 属性で示された project(4) エントリに指定されている

プールを指定できます。

サービスまたはインスタンスの method_context プロパティーグループを指定することにより、サービスインスタンス全体のメソッドコンテキストを設定できます。メソッドプロパティーグループのメソッドコンテキストプロパティーを指定することで、メソッドがインスタンスのメソッドコンテキストを上書きする場合もあります。

メソッドコンテキストの設定が正しくないと、メソッドは常に失敗しますが、環境変数が無効な場合は警告が発行されます。

上記で定義されるコンテキストに加え、fork(2)-exec(2) モデルのリスタータは、実行可能ファイルをメソッドとして呼び出すときに次の規約も使用します。

引数配列
: argv[] 内の引数は、exec 文字列の /bin/sh -c の結果と一致するように設定されます。

ファイル記述子
: ファイル記述子 0 は /dev/null です。ファイル記述子 1 と 2 は、サービスごとのログファイルに推奨されます。

ファイル

/lib/svc/share/smf_include.sh
: 終了ステータス値の定義。

/usr/include/libscf.h
: 終了ステータスコードの定義。

関連項目

zonename(1), coreadm(1M), inetd(1M), svccfg(1M), svc.startd(1M), exec(2), fork(2), getdefaultproj(3PROJECT), exec_attr(4), project(4), service_bundle(4), attributes(5), privileges(5), rbac(5), smf(5), smf_bootstrap(5), zones(5)

注意事項

smf(5) の現在のバージョンでは、複数のリポジトリはサポートされていません。

サービスが limit_privileges とは異なる特権で root ユーザーとして起動するように構成されている場合、結果として得られるプロセスは特権に対応したものになります。これは、seteuid(<non-zero UID>) によって特権が basic 以下に下がると考えている開発者には予期しないことです。

名前

smf_restarter – サービス管理機能のリスタータ規約

機能説明

サービス管理機能のすべてのサービスインスタンスは、リスタータによって管理される必要があります。このマニュアルページでは、フレームワークのすべてのリスタータに共通する構成、機能、およびレポートの特徴について説明します。特定のリスタータに固有の特徴については、そのリスタータのマニュアルページを参照してください。

各管理対象サービスについて、リスタータはサービスインスタンスのプロパティーを取得することによって構成を判定します。リスタータは一連のプロパティーグループを利用して、サービスの現在の配置を svcs(1) などの表示ツールに伝達します。

サービスの構成

すべてのサービスに共通するリスタータの構成は general プロパティーグループにまとめられています。このグループには、次に示す必須プロパティーおよび省略可能プロパティーの設定が含まれています。

enabled
: これは必須プロパティーです。これが設定されている場合、インスタンスのリスタータはサービスを使用可能な状態に維持しようとします。

restarter
: これは省略可能プロパティーで、サービスインスタンスを管理する代替リスタータを指定できます。restarter プロパティーが空または省略されている場合、リスタータはデフォルトとして svc.startd(1M) になります。

single_instance
: これは省略可能プロパティーです。これが設定されている場合、オンラインステータスまたは機能低下ステータスに移行できるサービスインスタンスは一度に 1 つだけです。

サービスの報告機能

すべてのリスタータが restarter プロパティーグループを使用してステータスを報告します。このグループには次のプロパティーが含まれています。

next_state
: これらのプロパティーに保存されているインスタンスの現在の状態および次の状態 (移行中の場合)。取り得る状態については、smf(5) を参照してください。

auxiliary_state
: リスタータの state プロパティーとの組み合わせで完全なリスタータ固有の状態を表す明確な語句を含んだ astring。スペースは含まれません。この補助状態は常に設定できるわけではなく、どの状態からでも移行時に必ずクリアされます。リスタータごとに、使用する補助状態の正確なリストを定義する必要があります。

state_timestamp
: 現在の状態に到達した時刻。

contract
: サービスインスタンスを実行している主プロセス契約 ID (存在する場合)。

関連項目 svcs(1), svc.startd(1M), service_bundle(4), smf(5), smf_method(5)

名前

smf_security – サービス管理機能のセキュリティー動作

機能説明

サービス管理機能の構成サブシステム smf(5) には、サービスの構成を変更するための特権が必要です。ユーザーに特権を付与するには、user_attr(4) および prof_attr(4) を通して、次に説明する承認をユーザーに関連付けます。rbac(5) を参照してください。

サービスおよびサービスインスタンスの操作には次の承認が使用されます。

`solaris.smf.modify` サービス、サービスインスタンス、またはそれらのプロパティーの追加、削除、変更、および保護されたプロパティー値の読み取りが承認されます。

プロパティーグループ承認

smf(5) 構成サブシステムは、各サービスおよびサービスインスタンスにプロパティーを関連付けます。関連するプロパティーはグループ化されています。グループは、実行メソッド、資格情報、アプリケーションデータ、リスタータの状態を表す場合があります。プロパティーグループを作成または変更する機能がある場合、オペレーティングシステム特権を必要とする可能性のあるアクションを smf(5) コンポーネントで実行させることができます。それに従って、フレームワークでは、プロパティーグループを操作するための適切な承認が要求されます。

各プロパティーグループには、その目的に対応するタイプがあります。コアとなるプロパティーグループタイプは、`method`、`dependency`、`application`、および `framework` です。追加のプロパティーグループタイプを導入することもできますが、smf(5) の拡張命名規約に適合する必要があります。ただし、次の基本承認は、コアとなるプロパティーグループタイプだけに適用されます。

`solaris.smf.modify.method` `method` タイプのプロパティーグループの値の変更または作成、削除、変更が承認されます。

`solaris.smf.modify.dependency` `dependency` タイプのプロパティーグループの値の変更または作成、削除、変更が承認されます。

`solaris.smf.modify.application` application タイプのプロパティーグループの値の変更、保護された値の読み取り、および作成、削除、変更が承認されます。

`solaris.smf.modify.framework` `framework` タイプのプロパティーグループの値の変更または作成、削除、変更が承認されます。

`solaris.smf.modify` サービス、サービスインスタンス、またはそれらのプロパティーの追加、削除、変更、および保護されたプロパティー値の読み取りが承認されます。

プロパティーグループ固有の承認は、そのプロパティーグループに含まれているプロパティーによって指定できます。

`modify_authorization` 承認は、プロパティーグループ内のプロパティーの追加、削除、または変更を許可します。また、プロパティーグループが保護されている場合は、そのグループからプロパティー値を取得することも許可します。

`value_authorization` 承認は、`modify_authorization` を除くプロパティーグループの任意のプロパティーに対する値の変更を許可します。また、プロパティーグループが保護されている場合は、そのグループから modify_authorization 以外の任意のプロパティー値を取得することも許可します。

`read_authorization` 承認は、プロパティーグループ内のプロパティー値の取得を許可します。プロパティーグループ内にこの名前の文字列値プロパティーが存在する場合、そのプロパティーグループは保護されています。このプロパティーは、application タイプ以外のプロパティーグループには影響しません。「保護されたプロパティーグループ」を参照してください。

前述の承認プロパティーは、そのタイプが `astring` の場合だけ使用されます。インスタンスプロパティーグループにいずれかのプロパティーがない場合でも、そのプロパティーと同じ名前を持つプロパティーグループがインスタンスのサービスにあるときは、その値が使用されます。

保護されたプロパティーグループ

通常、リポジトリ内のすべてのプロパティー値は、明示的な承認なしで任意のユーザーが読み取ることができます。framework タイプ以外のプロパティーグループは、値の保護を必要とするプロパティーを格納するために使用できます。適切な承認がない場合、これらは公開できません。プロパティーグループのステータスが保護されたステータスであることは、文字列値の `read_authorization` プロパティーの存在によって示されます。このプロパティーが存在する場合、そのプロパティーグループに含まれているプロパティーの値は、「プロパティーグループ承認」で説明されている方法によってのみ取得可能です。

機密性が高いとみなされるデータのバックアップをポリシーによって禁止している管理ドメインでは、SMF リポジトリデータベースをバックアップから除外するようにしてください。そのようなポリシーが存在しても、保護されていないプロパティー値は svccfg(1M) アーカイブコマンドでバックアップできるため、保護されたプロパティー値を除いたリポジトリのアーカイブを作成できます。

サービスアクション承認

サービスインスタンスに対する特定のアクションは、結果としてサービスを中断または非アクティブ化する場合があります。どのようなサービス拒否も意図的な管理操作であることを保証するために、これらのアクションには承認が必要です。このようなアクションには、refresh メソッドや restart メソッドを実行する要求、サービ

スインスタンスを保守に配置するなどの非稼働状態にする要求があります。次の承認は、このようなアクションの要求を許可します。

`solaris.smf.manage` 任意のサービスインスタンスの再起動、更新、またはその他の状態変更を要求することが承認されます。

さらに、`general/action_authorization` プロパティーで追加の承認を指定して、そのサービスインスタンスに対するサービスアクションの要求を許可できます。このプロパティーを変更するには、`solaris.smf.manage` 承認が必要です。

定義済み権利プロファイル

smf(5) の一般的な処理を操作するための承認をグループ化した 2 つの権利プロファイルが用意されています。

サービス管理 サービスマネージャーはリポジトリ内のすべてのサービスを任意の方法で操作できます。これは、`solaris.smf.manage` 承認と `solaris.smf.modify` 承認に対応します。

pkg(1) コマンドを使用して、サービスマニフェスト内にサービスインベントリを含んでいるソフトウェアパッケージの追加や削除を行うには、少なくともサービス管理プロファイルが必要です。

サービスオペレータ サービスオペレータは、システムの任意のサービスインスタンスを有効または無効にしたり、その restart メソッドや refresh メソッドの実行を要求したりできます。これは、`solaris.smf.manage` 承認と `solaris.smf.modify.framework` 承認に対応します。

サイトでは、必要に応じてカスタマイズした追加の権利プロファイルを定義することもできます。

リモートリポジトリの変更

リモートリポジトリサーバーは、追加の特権確認の結果、変更要求を拒否することがあります。「注意事項」を参照してください。

関連項目

auths(1), profiles(1), svccfg(1M), prof_attr(4), user_attr(4), rbac(5), smf(5)

pkg(1)

注意事項

smf(5) の現在のバージョンでは、リモートリポジトリはサポートされていません。

サービスが `limit_privileges` とは異なる特権で root ユーザーとして起動するように構成されている場合、結果として得られるプロセスは特権に対応したものになります。これは、`seteuid(<non-zero UID>)` によって特権が basic 以下に下がると考えている開発者には予期しないことです。

名前

smf_template – サービス管理フレームワークのサービスメタデータのサポート

機能説明

テンプレートはサービス開発者によって定義され、サービスに関するメタデータを記述します。サービスの全体的な構成プロパティーや個別の構成プロパティーに記述され、人間が読める形式の説明と、有効な構成の定義を含んでいます。

管理者はSMFコマンドを介してテンプレートにアクセスし、構成値を記述したり、テンプレートと照合して構成を検証したりできます。

ツール開発者はテンプレートを使用して、サービスの構成に役立つユーザーインタフェースを作成できます。

テンプレートデータ

サービスのメタデータは、テンプレートでサービスマニフェストの一部として定義されます。

テンプレートデータの使用

`svcs -lv` コマンドと `svccfg describe` コマンドを使用すると、人間が読める形式でプロパティーに関するメタデータにアクセスできます。

svccfg(1M) の `validate` サブコマンドを使用すると、テンプレートデータと照合してサービスインスタンスやマニフェストを検証できます。テンプレートデータにアクセスするには、一連の libscf(3LIB) インタフェースを使用できます。

テンプレートの定義

テンプレートを定義するための唯一のインタフェースはサービスマニフェストです。

サービスの作成者は、サービス固有のプロパティーグループおよびそれらに導入されるプロパティーに、`common_names`、`descriptions`、`choices`、`constraints` などのテンプレートメタデータを指定するようにしてください。サービスの作成者は、少なくともプロパティーグループとプロパティーの説明をCロケールで指定する必要があります。サービスの作成者は、メソッドや依存関係といったフレームワークによって提供されるプロパティーグループには、テンプレートメタデータを指定しないようにしてください。

サービスのテンプレート定義の作成例については、「使用例」の節を参照してください。

テンプレートの構成

すべてのテンプレートインタフェースは、プロパティーグループに関するテンプレートデータを、最初にインスタンスで、次にサービスで、3番目にサービスのリスタータで、最後にグローバルに検索します。

プロパティーグループのテンプレートはその作成者によって定義され、特定のインスタンス、サービスとそのすべてのインスタンス、リスタータの委任、あるいはグローバルに適用されます。通常、サービスの作成者はインスタンスまたはサービスにテンプレートを定義します。インスタンスに定義されたテンプレートは、そのインスタンスだけに適用され、サービスに定義されているそのプロパティーグループ

のテンプレートよりも優先されます。サービスに定義されたテンプレートは、そのサービスのすべてのインスタンスに適用されます。

リスタータの作成者は、そのリスタータを使用するすべてのサービスに適用されるテンプレートをマニフェストで定義できます。これは「委任」とも呼ばれます。SMF フレームワークの作成者は、SMF フレームワーク全体に対する既知の意味を指定したプロパティーグループのテンプレートを `svc:/system/svc/global` のマニフェストに定義してあります。

グローバルにまたはリスタータによって定義されたテンプレートは、サービスまたはインスタンスで再定義されると、検証エラーとしてフラグが設定されます。サービスの作成者は、SMF フレームワークでは使用されない、そのサービスに固有のプロパティーグループだけにテンプレートを作成することで、このようなエラーを避けることができます。

プロパティーグループのテンプレートは、名前やタイプによるワイルドカード方式でも指定できます。プロパティーグループに適用可能なテンプレート定義のうち、もっとも限定的なものだけが適用されます。

テンプレートの詳細

サービスおよびインスタンスのテンプレート

`template` 要素は、template ブロックの開始を定義します。後述するほかの定義はすべて、template ブロックに含めることができます。`template` 要素は、`service` 要素または `instance` 要素に含めることができます。`service` 要素に含めた場合は、サービスおよびそのサービスのすべてのインスタンスに適用されます。`instance` 要素に含めた場合は、サービスのそのインスタンスだけに適用されます。

可能な場合は常に、サービス全体のテンプレートデータを定義することをお勧めします。

```
<service ... >
   <template>
   </template>
</service>
```

サービスおよびインスタンスの一般的な名前

サービス全体またはインスタンスには、そのサービスまたはインスタンスの目的を表す一般的な名前を定義できます。

```
<template>
  <common_name>
      <loctext xml:lang='C'>console login</loctext>
  </common_name>
<template>
```

common_name は自由形式の文字列ですが、GUI または CLI でラベルとして使用されます。

一般的な名前を定義するときは、次のガイドラインに従ってください。

- 短くします。通常は、1 語または 2 語が適切です。名前の長さは 40 文字以下にしてください。
- 明確にします。サービス名、プロパティーグループ名、またはプロパティー名は人間にはわかりにくい場合がありますが、*common_name* はその目的を明確に示すようにしてください。
- 句読文字は使用しません。*common_name* は文章ではありません。節や句を含むべきではありません。句読文字は、商標で必要になる場合にかぎり使用するようにしてください。
- 大文字は頭字語または固有名だけに使用する必要があります。英語以外のロケールでは、文の要素に適切な大文字を使用してください。

サービスおよびインスタンスの説明

description 要素には、ステータス行やツールヒントに適した、プロパティーグループに関する長い説明が記述されます。

```
<template>
  <description>
     <loctext xml:lang='C'>Provide the text login prompt on console.
     </loctext>
  </description>
<template>
```

description のガイドライン

- 正しい文法を使用します。*description* は人間が読むための文です。
- 短くします。通常は、数個の文がもっとも適切です。

ドキュメント

このサービスのドキュメントを明示的に定義することにより、サービスで問題が発生した場合やサービスの利用者が詳細な情報を必要としている場合に、ドキュメントを簡単に見つけることができます。

プロパティーグループ

pg_pattern 要素には、プロパティーグループの定義が記述されます。

```
<template>
  <pg_pattern name="pgname" type="pgtype" target="this" required="true">
  </pg_pattern>
</template>
```

name はプロパティーグループの名前、*type* はプロパティーグループのタイプです。

target は、この定義の対象を指定します。"this" と指定すると、これを定義しているサービスまたはインスタンスを指します。"instance" は、サービスの template ブロックでのみ使用でき、定義がこのサービスのすべてのインスタンスに適用されることを意味します。 "delegate" は、リスタータの template ブロックでのみ使用でき、そのリスタータに委任されたすべてのインスタンスに適用されることを意味します。"all" は、マスターリスタータでのみ使用でき、システム上のすべてのサービスを指します。target のデフォルト値は "this" です。

required は、このプロパティーグループが必須かどうかを示します。*required* のデフォルト値は false です。*required* が true の場合は、*name* と *type* の両方を指定する必要があります。

name と *type* は、一方または両方を省略できます。これらの属性のいずれかが省略されている場合、その属性はワイルドカードとして扱われます。たとえば、pg_pattern 定義で name 属性が省略されている場合、pg_pattern は指定されたタイプのすべてのプロパティーグループに適用されます。

プロパティーグループの名前

common_name 要素には、人間が読めるローカライズされた形式で、プロパティーグループの名前が記述されます。

```
<pg_pattern ...>
  <common_name>
    <loctext xml:lang='C'>start method</loctext>
  </common_name>
</pg_pattern>
```

common_name は自由形式の文字列ですが、GUI または CLI でラベルとして使用されます。

前述の「サービスおよびインスタンスの一般的な名前」に示されている *common_name* に関するガイドラインを参照してください。

プロパティーグループの説明

description 要素には、ステータス行やツールヒントに適した、プロパティーグループに関する長い説明が記述されます。

```
<pg_pattern ...>
  <description>
    <loctext xml:lang='C'>A required method which starts the service.
   </loctext>
   </description>
</pg_pattern>
```

前述の「サービスおよびインスタンスの説明」に示されている *description* の指定方法に関するガイドラインを参照してください。

プロパティー

prop_pattern 要素には、特定のプロパティーの定義が記述されます。

```
<pg_pattern ...>
  <prop_pattern name="propname" type="proptype" required="true">
  </prop_pattern>
</pg_pattern>
```

name はプロパティーの名前、*type* はプロパティーのタイプです。

`required` は、このプロパティーが必須かどうかを示します。`required` のデフォルト値は `false` です。

name は常に必須です。`required` が `false` の場合のみ、*type* は省略可能です。

プロパティーの名前

common_name 要素には、人間が読めるローカライズされた形式で、プロパティーの名前が記述されます。

common_name は自由形式の文字列フィールドですが、GUI または CLI でラベルとして使用されます。

```
<prop_pattern ...>
<common_name>
  <loctext xml:lang='C'>retry interval</loctext>
</common_name>
</prop_pattern>
```

前述の「サービスおよびインスタンスの一般的な名前」に示されている *common_name* に関するガイドラインを参照してください。

プロパティーの単位

units 要素には、人間が読めるローカライズされた形式で、数値プロパティーの単位が記述されます。

```
<prop_pattern ...>
  <units>
    <loctext xml:lang='C'>seconds</loctext>
  </units>
</prop_pattern>
```

units のガイドライン

- 短くします。1 語または 1 ラベルだけを使用するようにします。通常は、複数形がもっとも適切です。
- 句読文字は使用しません。*units* は文章ではありません。節や句を含むべきではありません。句読文字は、商標で必要になる場合にかぎり使用するようにしてください。

プロパティーの説明

description 要素には、ステータス行やツールヒントに適した、プロパティーに関する長い説明が記述されます。

```
<prop_pattern ...>
   <description> <loctext xml:lang='C'>
    The number of seconds to wait before retry.
    </loctext> </description>
</prop_pattern>
```

前述の「サービスおよびインスタンスの説明」に示されている *description* の指定方法に関するガイドラインを参照してください。

プロパティーの可視設定

visibility 要素は、より上位のソフトウェアの簡易表示でこのプロパティーを表示するかどうかを指定します。

```
<prop_pattern ...>
  <visibility value="hidden | readonly | readwrite"/>
</prop_pattern>
```

一部のプロパティーは、内部の実装の詳細であり、構成の設定として表示されるべきではありません。単に読み取り専用のものもあります。このプロパティーは、このような制約を指定するために使用されます。値 hidden は、そのプロパティーを表示しないことを示します。`readonly` は、そのプロパティーを変更できないことを意味します。`readwrite` は、そのプロパティーが変更可能であることを示します。

これはセキュリティーメカニズムでなく、単にユーザー自身の誤りを防ぎ、CLI の出力や GUI の表示から不要な情報を取り除くためのものです。非表示のプロパティーは、多くのコマンドおよび UI の完全開示モードで表示されます。

プロパティーの形式

cardinality 要素と *internal_separators* 要素には、プロパティーの構造が記述されます。

```
<prop_pattern ...>
  <cardinality min="1" max="1"/>
  <internal_separators>,</internal_separators>
</prop_pattern>
```

cardinality は、指定できるプロパティー値の数を示します。*min* は最小数、*max* は最大数です。どちらも省略可能です。どちらも指定されていない場合、<cardinality/> はデフォルトと同じ、0 個以上の値になります。

internal_separators は、実際の値を複数保持するプロパティー値に使用する区切り文字を指定します。

値の制約

constraints 要素は、プロパティーに使用できる値を指定します。

```
<prop_pattern ...>
<constraints>
       <value name="blue" />
       <range min="1" max="7"/>
       <include_values type="values"/>
</constraints>
</prop_pattern>
```

value 要素には、プロパティーの取り得る値が記述されます。range には、整数の範囲が記述されます。

value と *range* は、使用を制限すると有効な説明の多くが使用できなくなるため、任意の組み合わせで使用できます。値の制約が指定されていない場合、そのプロパティーは任意の値を取ることができます。

include_values には、values ブロックで指定されたすべての値が記述されます (「値の説明」の節を参照)。

値の選択肢

choices ブロックは、UI でユーザーに提供する値を示します。

```
<prop_pattern ...>
<choices>
      <range min="1" max="3"/>
      <value name="vt100" />
      <value name="xterm" />
      <include_values type="constraints"/>
      <include_values type="values"/>
</choices>
</prop_pattern>
```

constraints と同様に、range と value には範囲と個々の値が記述されます。

include_values には、constraints ブロックまたは values ブロックで指定されたすべての値が記述されます (次の節を参照)。

値の説明

プロパティー名と同様に、プロパティーが取る値にも、わかりにくい表現のものが存在します。values 要素には、人間が読めるローカライズされた形式で、特定のプロパティー値の説明が記述されます。

```
<prop_pattern>
<values>
      <value name="blue">
              <common_name>
                      <loctext xml:lang='C'>blue</loctext>
              </common_name>
              <description>
                      <loctext xml:lang='C>
                              The color between green and indigo.
                      </loctext>
              </description>
      </value>
</values>
</prop_pattern>
```

common_name は自由形式の文字列フィールドですが、GUI または CLI でラベルとして使用されます。

前述の「サービスおよびインスタンスの一般的な名前」に示されている *common_name* に関するガイドラインを参照してください。

使用例

次のような基本的なサービスがあり、その基本的なテンプレートデータを定義する場合を考えます。

```
<?xml version="1.0"?
<!DOCTYPE service_bundle SYSTEM "/usr/share/lib/xml/dtd/service_bundle.dtd.1">
<service_bundle type='manifest' name='FOOfoo:foo'>
<service name='system/foo' type='service' version='1'>
      <dependency>
              name='multi-user'
              type='service'
              grouping='require_all'
              restart_on='none'
              <service_fmri value='svc:/milestone/multi-user' />
      </dependency>
      <exec_method
              type='method'
              name='start'
              exec='/opt/foo/food'
              timeout_seconds='60'>
      </exec_method>
      <exec_method
              type='method'
              name='stop'
```

```
            exec=':kill'
            timeout_seconds='60'>
        </exec_method>
        <property_group name='config' type='application'>
            <propval name='local_only' type='boolean' value='false' />
            <propval name='config_file' type='astring'
                value='/opt/foo/foo.conf' />
        <property name='modules' type='astring'>
           <astring_list>
                 <value_node value='bar'/>
                 <value_node value='baz'/>
           </astring_list>
          </property>
        </property_group>

        <instance name='default' enabled='false' />
</service>
</service_bundle>
```

このサービスを使用する管理者に役立つように、基本的なテンプレートデータを <service> タグの内側に定義できます。もっとも役立つのは、サービス自体の目的と、サービス固有の構成を記述することです。

```
<template>
       <common_name> <loctext xml:lang='C'>
           all-purpose demonstration
       </loctext> </common_name>
       <documentation>
            <manpage title='food' section='1M'
                     manpath='/opt/foo/man' />
       </documentation>

       <pg_pattern name='config' type='application' target='this'
           required='true'>
               <description> <loctext xml:lang='C'>
                   Basic configuration for foo.
                </loctext> </description>
                <prop_pattern name='local_only' type='boolean'
                    required='false'>
                      <description> <loctext xml:lang='C'>
                          Only listen to local connection requests.
                      </loctext> </description>
                </prop_pattern>
                <prop_pattern name='config_file' type='astring'
                     required='true'>
                        <cardinality min='1' max='1'/>
                        <description> <loctext xml:lang='C'>
                             Configuration file for foo.
```

```
                        </loctext> </description>
                    </prop_pattern>
                    <prop_pattern name='modules' type='astring'
                        required='false'>
                        <description> <loctext xml:lang='C'>
                            Plugin modules for foo.
                         </loctext> /description>
                         <values>
                                  <value name='bar'>
                                  <description> <loctext xml:lang='C'>
                                      Allow foo to access the bar.
                                   </loctext> </description>
                                   </value>
                                   <value name='baz'>
                                   <description> <loctext xml:lang='C'>
                                      Allow foo to access baz functions.
                                   </loctext> </description>
                                   </value>
                                   <value name='qux'>
                                   <description> <loctext xml:lang='C'>
                                      Allow foo to access qux functions.
                                    </loctext> </description>
                                    </value>
                        </values>
                        <choices>
                            <include_values type='values'/>
                        </choices>
                     <prop_pattern>
            </pg_pattern>
    </template>
```

ファイル　/usr/share/lib/xml/dtd/service_bundle.dtd.1

関連項目　svcs(1), svccfg(1M), libscf(3LIB), service_bundle(4), smf(5)

名前

solaris10 – Solaris 10 ブランドゾーン

機能説明

solaris10 ブランドは、brands(5) で説明されているブランドゾーンフレームワークを使用して、Solaris 10 バイナリアプリケーションを変更することなく、最新の Solaris オペレーティングシステムカーネルを備えたマシンで実行できるようにします。

solaris10 ブランドでは、ゾーン内での Solaris 10 10/09 (Solaris 10 Update 8) リリース以降の実行のみをサポートしています。

solaris10 ブランドには、Solaris 10 システムイメージを非大域ゾーンにインストールするために必要なツールが含まれています。Solaris 10 ネイティブゾーンを solaris10 ブランドゾーンに移行するために必要なツールもサポートされています。このブランドでは、最新の Solaris オペレーティングシステムが稼働している SPARC または x86 マシンのいずれかでの、32 ビットおよび 64 ビットの Solaris 10 アプリケーションの実行をサポートしています。

構成と管理

solaris10 ブランドは完全ルート非大域ゾーンモデルをサポートします。Solaris 10 ソフトウェアの必須パッケージおよび追加パッケージのすべてが、ゾーン固有のファイルシステムにインストールされます。

ゾーンは固有の zfs(1M) データセット上に構築される必要があり、ZFS だけがサポートされています。ZFS データセットは、ゾーンのインストール時または接続時に自動的に作成されます。ZFS データセットを作成できない場合、ゾーンのインストールや接続は行われません。

zonecfg(1M) ユーティリティーは、solaris10 ブランドゾーンを構成するために使用されます。ゾーンの作成時に SUNWsolaris10 テンプレートを使用することも、構成を手動で設定することもできます。ブランドゾーンのインストールが完了したあとは、そのゾーンのブランドの変更や削除を行うことはできません。zoneadm(1M) ユーティリティーは、ゾーンのブランドタイプの報告およびゾーンの管理に使用されます。zlogin(1) ユーティリティーは、ゾーンにログインするために使用されます。

現在、委任された ZFS データセット構成のサポートは実験的なもので、まだテストされていません。準仮想化された xVM ドメインでこれらのゾーンを実行するためのサポートは実験的なもので、ゾーン内の 64 ビット x86 アプリケーションで問題が見つかっています。/dev/sound デバイスをブランドゾーン内に構成することはできません。また、大域ゾーンで mdb(1) と dtrace(1M) を使用して solaris10 ブランドゾーン内で実行されているプロセスを検査する場合、これらは完全には機能しません。

solaris10 ブランドのインストーラでは、インストール済み Solaris 10 システムのイメージからのゾーンのインストールをサポートしています。これには、完全な flash_archive(4)、cpio(1)、または pax(1) xustar アーカイブを使用できます。cpio

アーカイブは gzip(1) または bzip2(1) で圧縮することもできます。このイメージとしては、レベル 0 ufsdump(1M)、または Solaris 10 システムのルートディレクトリツリーの最上位パスも使用できます。標準の Solaris 10 配布メディアからゾーンをインストールすることはできません。

ネイティブゾーンを Solaris 10 システムから最新の Solaris オペレーティングシステムカーネルに移行するするために、attach サブコマンドでは、インストール済み Solaris 10 ネイティブゾーンのアーカイブからのゾーンのインストールをサポートしています。インストーラの場合と同様に、zonepath の cpio(1) または pax(1) xustar アーカイブを使用できます。cpio アーカイブは gzip(1) または bzip2(1) で圧縮することもできます。このイメージとしては、Solaris 10 ゾーンの zonepath ディレクトリツリーの最上位パスもイメージとして使用できます。Solaris 10 ネイティブゾーンからの移行に加え、同じ移行オプションを使用して solaris10 ブランドゾーンをあるホストから別のホストに移行することもできます。Solaris 10 を移行するときに、ゾーンが「疎ルート」ゾーンとして構成されている場合があります。この場合、アーカイブを作成する前に、ホスト上でゾーンを準備するようにしてください。これにより、継承されたディレクトリがアーカイブに含まれることが保証されます。

サブコマンド

サポートされている zoneadm(1M) ブランド固有サブコマンドの引数は次のとおりです。

attach [-a *archive* | -d *path*] [-c *sysidcfg*]
: 指定された Solaris 10 ネイティブゾーンイメージをブランドゾーンに接続します。-a も -d も指定されていない場合は、ゾーンの zonepath にゾーンのファイルがすでに正しくインストールされているとみなされます。

  -a *archive*
  : インストール済み Solaris 10 ネイティブゾーンまたは solaris10 ブランドゾーンの zonepath にある、cpio(1)、pax(1) xustar、または zfs アーカイブへのパス。cpio および zfs アーカイブは、 gzip または bzip2 を使用して圧縮できます。

  -c *sysidcfg*
  : *sysidcfg* ファイルを指定すると、接続後にゾーン上で sys-unconfig が実行されます。その後、*sysidcfg* ファイルがゾーンに適用されます。

  -d *path*
  : インストール済み Solaris 10 ネイティブゾーンまたは solaris10 ブランドゾーンの zonepath の、zonepath ディレクトリのパス。

clone [-c sysidcfg]
: 既存のインストール済みゾーンをコピーすることでゾーンのインストールを行います。このサブコマンドは、ゾーンをインストールするための代替手段となります。

  -c sysidcfg
  : 複製されたゾーンの構成解除後に適用する *sysidcfg* ファイルを指定します。

`install` [`-a` *archive*] [`-d` *path*] [`-p`] [`-s`] [`-u`] [`-v`] \
[`-c sysidcfg`]
指定された Solaris 10 システムイメージをゾーンにインストールします。`-u` オプションまたは `-p` オプションのどちらかが必須で、`-a` オプションまたは `-d` オプションのどちらかが必須です。

`-a` *archive*
インストール済み Solaris 10 システムの `flash_archive(4)`、`cpio(1)`、`pax(1)` `xustar`、`zfs` アーカイブ、またはレベル `0` `ufsdump(1M)` へのパス。`cpio` および `zfs` アーカイブは、`gzip` または `bzip2` を使用して圧縮できます。

`-c` *sysidcfg*
インストール後に適用する *sysidcfg* ファイルを指定します。

`-d` *path*
インストール済み Solaris 10 システムのルートディレクトリのパス。

`-p`
ゾーンのインストール後にシステム構成を維持します。

`-s`
サイレントインストールします。

`-u`
ゾーンのインストール後にゾーンに対して `sys-unconfig` を実行します。

`-v`
インストールプロセスの詳細情報を出力します。

アプリケーションのサポート

`solaris10` ゾーンはユーザーレベルの Solaris 10 アプリケーションだけをサポートします。Solaris 10 デバイスドライバや Solaris 10 カーネルモジュールを `solaris10` ゾーン内から使用することはできません。ただし、カーネルモジュールによっては、最新バージョンの Solaris カーネルモジュールをユーザーレベルの Solaris 10 アプリケーションに使用できる場合があります。

属性

属性についての詳細は、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
使用条件	system/zones/brand/brand-solaris10
インタフェースの安定性	確実

関連項目

`cpio(1)`, `mdb(1)`, `pax(1)`, `zlogin(1)`, `dtrace(1M)`, `ufsdump(1M)`, `zfs(1M)`, `zoneadm(1M)`, `zonecfg(1M)`, `flash_archive(4)`, `attributes(5)`, `brands(5)`, `zones(5)`

名前

solaris, ipkg – solaris ブランドゾーン

機能説明

solaris ブランドは、brands(5) で説明されているブランドゾーンフレームワークを使用して、大域ゾーンにインストールされているものと同じソフトウェアがインストールされたゾーンを実行します。solaris ブランドを使用するときは、大域ゾーンとの間でシステムソフトウェアの同期が常に保たれている必要があります。ゾーン内のシステムソフトウェアパッケージは、イメージパッケージングシステムを使用して管理されます。pkg(5) を参照してください。

構成と管理

solaris ブランドは完全ルート非大域ゾーンモデルをサポートします。システムソフトウェアの必須パッケージおよび追加パッケージのすべてが、ゾーン固有のファイルシステムにインストールされます。ゾーンは固有の zfs(1M) データセット上に構築される必要があり、ZFS だけがサポートされています。ZFS データセットは、ゾーンのインストール時または接続時に自動的に作成されます。ZFS データセットを作成できない場合、ゾーンのインストールや接続は行われません。

サブコマンド

zoneadm(1M) でサポートされている solaris ブランド固有サブコマンドのオプションは次のとおりです。

attach [-a *archive* | -d *path* | -z *ZBE*] [-u] [-c *config_profile*.xml | *dir*]

指定された solaris ブランドゾーンイメージをゾーンに接続します。-a も -d も指定されていない場合は、ゾーンのゾーンパスにゾーンのファイルがすでに正しくインストールされているとみなされます。zoneadm は、ゾーンの接続先となるマシンのパッケージのレベルを確認します。ゾーンが依存する大域ゾーンのパッケージが、ソースマシンの依存パッケージと異なっている (リビジョン番号が異なっている) 場合、zoneadm はこれらの競合を報告し、接続は実行しません。

接続先のシステムにある依存パッケージの方がソースシステムのものよりすべて新しい (リビジョン番号が大きい) 場合は、依存パッケージを -u または -U オプションで更新して、新しいシステムにあるパッケージのリビジョンに一致させることができます。

ゾーンを接続する際、複数のゾーンブート環境 (ZBE) を存在させることが可能であり、attach サブコマンドがどれを接続するかを決定します。選択条件は次のとおりです。最初に一致したものが使用されます。

- -z オプションを使用して ZBE が指定された場合、それが選択されます。
- ZBE が 1 つしかない場合、それが選択されます。
- 大域ゾーンブート環境に関連付けられた ZBE が 1 つしかない場合、それが選択されます。
- 大域ゾーンブート環境に関連付けられたアクティブな ZBE が 1 つしかない場合、それが選択されます。
- アクティブな ZBE が 1 つしかない場合、それが選択されます。

選択された ZBE が別の大域ブート環境に関連付けられている場合、ZBE のクローンが作成され、選択された ZBE のクローンが接続されます。ブート環境に関する詳細情報については、beadm(1M) を参照してください。

-a *archive*
インストールされた Oracle Solaris ブランドゾーンの cpio(1)、pax(1) xustar、または zfs(1M) アーカイブへのパス。

cpio および pax アーカイブは、ゾーンパスまたはゾーンルートのものである必要があり、絶対パスを含めてはいけません (パスが / で始まってはいけない)。ZFS アーカイブは、zonepath dataset、zone rpool dataset、または単一のゾーンブート環境のものにできます。

ZFS アーカイブに複数の ZBE が含まれている場合、-z オプションを使用して特定の ZBE を接続する必要があることを示すメッセージが表示され、接続が失敗することがあります。このような場合、アーカイブからの ZBE は抽出されたままになり、抽出された ZBE のうちの 1 つが -z オプションを使用して接続されるまでは、このゾーンでこれ以上 -a および -d オプションを使用しても無効になります。抽出された ZBE のうちの 1 つを接続するのではなく、抽出された ZBE を削除するのが望ましい場合は、zoneadm -z <zone> mark incomplete のあとに zoneadm -z <zone> uninstall を使用します。

cpio および ZFS アーカイブは、gzip または bzip2 で圧縮できます。

-c *config_profile*.xml | *dir*
リポジトリからのインストール後に適用するプロファイルまたはプロファイルのディレクトリを指定します。

すべてのプロファイルは、.xml 拡張子を持つ必要があります。

-d *path*
ipkg ブランドゾーンのゾーンパスの、ゾーンパスディレクトリへのパス。

-u
ゾーン内にある最小限の数のパッケージを更新して、大域ゾーンにインストールされているパッケージとの互換性をゾーンのパッケージに持たせます。

-U
ゾーン内にあるすべてのパッケージを、大域ゾーンにインストールされているパッケージと互換性のある最新のバージョンに更新します。

-z *ZBE*
指定された既存のゾーンブート環境を接続します。指定されたゾーンブート環境が異なる大域ゾーンに関連付けられている場合は、指定された ZBE のクローンが作成され、ZBE のクローンが接続されます。

`clone` [`-c` *config_profile*`.xml` | *dir*]

`-c` *config_profile*`.xml` | *dir*
: リポジトリからのインストール後に適用するプロファイルまたはプロファイルのディレクトリを指定します。

  すべてのプロファイルは、`.xml` 拡張子を持つ必要があります。

`install` [`-m` *manifest.xml*] [`-c` *config_profile*`.xml` | *dir*]
`install` [`-a` *archive* | `-d` *path* | `-z` *ZBE*] [`-p`] [`-s`] [`-u`] [`-v`] [`-c` *config_profile*`.xml` | *dir*]
: `solaris` ブランドのインストーラでは、ゾーンをソフトウェアリポジトリからインストールすることも、同じリリースが稼働しているインストール済みシステムのイメージからインストールすることもサポートしています。これは、`cpio`(1)、`pax`(1) `xustar`、または ZFS アーカイブにできます。`cpio` または ZFS アーカイブは、`gzip` または `bzip2` で圧縮できます。また、イメージとして、システムのルートツリーの最上位パス、または既存のゾーンパスも使用できます。

  `-a`、`-d`、または `-z` オプションがどれも指定されなかった場合、ゾーンはリポジトリからインストールされます。ゾーン内の追加のパッケージをインストールする場合、デフォルトのゾーンマニフェスト `/usr/share/auto_install/manifest/zone_default.xml` をコピーして、必要なパッケージを含むように編集することができます。この変更されたマニフェストは、`-m` オプションを付けてインストールするように指定してください。

  システムイメージからゾーンをインストールするには、`-a`、`-d`、`-z` オプションのうち 1 つが必要です。この場合は、さらに `-u` オプションと `-p` オプションのどちらかが必須です。

  `-a` *archive*
  : インストール済みシステムの `cpio`(1)、`pax`(1) `xustar`、または ZFS アーカイブへのパス。

    ZFS アーカイブに複数のブート環境が含まれている場合は、アクティブなブート環境がインストールされます。どのブート環境がアクティブなブート環境なのかをインストールが決定できない場合、インストールは抽出されたブート環境の一覧を表示し、`-z` オプションを使用した attach コマンドで特定のブート環境を接続するように提案します。

    `cpio` および ZFS アーカイブは、`gzip` または `bzip2` で圧縮できます。

  `-c` *config_profile*`.xml` | *dir*
  : リポジトリからのインストール後に適用するプロファイルまたはプロファイルのディレクトリを指定します。

すべてのプロファイルは、.xml 拡張子を持つ必要があります。

-d *path*
: ipkg ブランドゾーンのゾーンパスの、ゾーンパスディレクトリへのパス。

-m *manifest.xml*
: 自動インストーラに対して指定されるマニフェストファイル。

-p
: アーカイブまたはパスからゾーンをインストールしたあと、システム構成を保持します。

-s
: サイレントインストール

-u
: システムをインストールしたあと、構成解除します。

-v
: インストールプロセスの詳細情報を出力します。

-z *ZBE*
: 指定された既存のゾーンブート環境を接続します。指定されたゾーンブート環境が異なる大域ゾーンに関連付けられている場合、指定された ZBE のクローンが作成され、ZBE のクローンが接続されます。

使用例

例 1 インストール用の ZFS アーカイブを作成する

次の例では、物理から仮想 (P2V) 移行用のアーカイブを作成する方法を示しています。これは、構成済み、インストール済み、または稼働中の非大域ゾーンがないシステムの大域ゾーンで実行されます。ルートプールは rpool という名前であると仮定しています。

まず、ルートプール全体のスナップショットを作成します。

```
# zfs snapshot -r rpool@p2v
```

次に、対象システムでは必要にならないため、スワップおよびダンプデバイスに関連したスナップショットを破棄します。

```
# zfs destroy rpool/swap@p2v
# zfs destroy rpool/dump@p2v
```

最後に、gzip で圧縮された ZFS レプリケーションストリームアーカイブを生成します。この例では、これはリモート NFS サーバーに格納されています。

```
# zfs send -R rpool@p2v | gzip > /net/somehost/p2v/p2v.zfs.gz
```

例 2 ZFS アーカイブを使用してゾーンをインストールする

次の例では、例 1 のアーカイブを使用してゾーンをインストールします。

```
# zoneadm -z p2vzone install -a /net/somehost/p2v/p2v.zfs.gz -p
```

例 3　接続用の ZFS アーカイブを作成する

次の例では、仮想から仮想 (V2V) 移行用のアーカイブを作成する方法を示しています。ゾーンの zonepath は /zones/v2vzone と仮定しています。

まず、zonepath データセットの名前を決定します。

```
# dataset=$(zfs list -H -o name /zones/v2vzone)
```

次に、ゾーンのデータセットのスナップショットを作成します。

```
# zfs snapshot -r $dataset@v2v
```

最後に、bzip2 で圧縮された ZFS 内蔵式の再帰的ストリームを生成します。

```
# zfs send -rc $dataset@v2v | bzip2 > /net/somehost/v2v/v2v.zfs.bz2
```

例 4　ZFS アーカイブを使用してゾーンを接続する

次の例では、ZFS アーカイブを使用してゾーンを接続します。

```
# zoneadm -z v2vzone attach -a /net/somehost/v2v/v2v.zfs.bz2
```

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
使用条件	system/zones
インタフェースの安定性	不確実

関連項目

cpio(1), pax(1), beadm(1M), sysconfig(1M), zfs(1M), zlogin(1), zonename(1), zoneadm(1M), zonecfg(1M), attributes(5), brands(5), privileges(5), zones(5)

pkg(5)、IPS 統合で利用可能

名前

standards, ANSI, C, C++, ISO, POSIX, POSIX.1, POSIX.2, SUS, SUSv2, SUSv3, SVID, SVID3, XNS, XNS4, XNS5, XPG, XPG3, XPG4, XPG4v2 – standards and specifications supported by Oracle Solaris

機能説明

Oracle Solaris supports IEEE Std 1003.1 and IEEE Std 1003.2, commonly known as POSIX.1 and POSIX.2, respectively. The following table lists each version of these standards with a brief description and the SunOS or Solaris release that first conformed to it.

POSIX Standard	Description	Release
POSIX.1-1988	system interfaces and headers	SunOS 4.1
POSIX.1-1990	POSIX.1-1988 update	Solaris 2.0
POSIX.1b-1993	realtime extensions	Solaris 2.4
POSIX.1c-1996	threads extensions	Solaris 2.6
POSIX.2-1992	shell and utilities	Solaris 2.5
POSIX.2a-1992	interactive shell and utilities	Solaris 2.5
POSIX.1–2001	POSIX.1-1990, POSIX.1b-1993, POSIX.1c-1996, POSIX.2-1992, and POSIX.2a-1992 updates	Solaris 10
POSIX.1-2004	POSIX.1-2001 update	Oracle Solaris 11
POSIX.1-2008	POSIX.1-2004 update	Oracle Solaris 11

Oracle Solaris also supports the X/Open Common Applications Environment (CAE) Portability Guide Issue 3 (XPG3) and Issue 4 (XPG4); Single UNIX Specification (SUS, also known as XPG4v2); Single UNIX Specification, Version 2 (SUSv2); and Single UNIX Specification, Version 3 (SUSv3). Both XPG4 and SUS include Networking Services Issue 4 (XNS4). SUSv2 includes Networking Services Issue 5 (XNS5).

The following table lists each X/Open specification with a brief description and the SunOS or Solaris release that first conformed to it.

X/Open CAE Specification	Description	Release
XPG3	superset of POSIX.1-1988 containing utilities from SVID3	SunOS 4.1
XPG4	superset of POSIX.1-1990, POSIX.2-1992, and POSIX.2a-1992 containing extensions to POSIX standards from XPG3	Solaris 2.4
SUS (XPG4v2)	superset of XPG4 containing historical BSD interfaces widely used by common application packages	Solaris 2.6

X/Open CAE Specification	Description	Release
XNS4	sockets and XTI interfaces	Solaris 2.6
SUSv2	superset of SUS extended to support POSIX.1b-1993, POSIX.1c-1996, and ISO/IEC 9899 (C Standard) Amendment 1	Solaris 7
XNS5	superset and LP64-clean derivative of XNS4.	Solaris 7
SUSv3	same as POSIX.1–2001	Solaris 10

The XNS4 specification is safe for use only in ILP32 (32-bit) environments and should not be used for LP64 (64-bit) application environments. Use XNS5 or SUSv3, which have LP64-clean interfaces that are portable across ILP32 and LP64 environments. Solaris releases 7 through Oracle Solaris 11 support both the ILP32 and LP64 environments.

Solaris releases 7 through 10 have been branded to conform to The Open Group's UNIX 98 Product Standard. Solaris 10 through Oracle Solaris 11 have been branded to conform to The Open Group's UNIX 03 Product Standard.

Solaris releases 2.0 through Oracle Solaris 11 support the interfaces specified by the System V Interface Definition, Third Edition, Volumes 1 through 4 (SVID3). Note, however, that since the developers of this specification (UNIX Systems Laboratories) are no longer in business and since this specification defers to POSIX and X/Open CAE specifications, there is some disagreement about what is currently required for conformance to this specification.

When Oracle Solaris Studio 12.2 C Compiler is installed, Oracle Solaris 11 supports the ANSI X3.159-1989 Programming Language - C and ISO/IEC 9899:1990 Programming Language - C (C) interfaces.

When Oracle Solaris Studio 12.2 C Compiler is installed, Oracle Solaris 11 supports ISO/IEC 9899:1990 Amendment 1:1995: C Integrity.

When Oracle Solaris Studio 12.2 C Compiler is installed, Oracle Solaris 11 supports ISO/IEC 9899:1999 Programming Languages – C.

When Oracle Solaris Studio 12.2 C++ Compiler is installed, Oracle Solaris 11 supports ISO/IEC 14882:1998 Programming Languages - C++. Unsupported features of that standard are described in the compiler README file.

Utilities

If the behavior required by POSIX.2, POSIX.2a, XPG4, SUS, or SUSv2 conflicts with historical Solaris utility behavior, the original Solaris version of the utility is unchanged; a new version that is standard-conforming has been provided in `/usr/xpg4/bin`. If the behavior required by POSIX.1–2001 or SUSv3 conflicts with historical Solaris utility behavior, a new version that is standard-conforming has been provided in `/usr/xpg4/bin` or in `/usr/xpg6/bin`. If the

behavior required by POSIX.1–2001 or SUSv3 conflicts with POSIX.2, POSIX.2a, SUS, or SUSv2, a new version that is SUSv3 standard-conforming has been provided in `/usr/xpg6/bin`.

An application that wants to use standard-conforming utilitues must set the `PATH` (`sh(1)` or `ksh(1)`) or `path` (`csh(1)`) environment variable to specify the directories listed below in the order specified to get the appropriate utilities:

SVID3, XPG3

1. `/usr/bin`
2. directory containing binaries for your compiler
3. other directories containing binaries needed by the application

POSIX.2, POSIX.2a, SUS, SUSv2, XPG4

1. `/usr/xpg4/bin`
2. `/usr/bin`
3. directory containing binaries for your compiler
4. other directories containing binaries needed by the application

POSIX.1–2001, SUSv3

1. `/usr/xpg6/bin`
2. `/usr/xpg4/bin`
3. `/usr/bin`
4. directory containing binaries for your compiler
5. other directories containing binaries needed by the application

When an application uses `execlp()` or `execvp()` (see `exec(2)`) to execute a shell file, or uses `system(3C)`, the shell used to interpret the shell file depends on the standard to which the caller conforms:

Standard	Shell Used
1989 ANSI C, 1990 ISO C, 1999 ISO C, POSIX.1 (1990–2001), SUS, SUSv2, SUSv3, XPG4	`/usr/xpg4/bin/sh`
POSIX.1 (1988), SVID3, XPG3, no standard specified	`/usr/bin/sh`

Feature Test Macros

Feature test macros are used by applications to indicate additional sets of features that are desired beyond those specified by the C standard. If an application uses only those interfaces and headers defined by a particular standard (such as POSIX or X/Open CAE), then it need only define the appropriate feature test macro specified by that standard. If the application is using interfaces and headers not defined by that standard, then in addition to defining the appropriate standard feature test macro, it must also define `__EXTENSIONS__`. Defining `__EXTENSIONS__` provides the application with access to all interfaces and headers not in conflict with the specified standard. The application must define `__EXTENSIONS__` either on the compile command line or within the application source files.

1989 ANSI C, 1990 ISO C, 1999 ISO C

No feature test macros need to be defined to indicate that an application is a conforming C application.

ANSI/ISO C++

ANSI/ISO C++ does not define any feature test macros. If the standard C++ announcement macro `__cplusplus`, predefined by the compiler based on compiler defaults and command-line options, is set to a value of 199711 or greater, the compiler operates in a standard-conforming mode, indicating C++ standards conformance. The value 199711 indicates conformance to ISO/IEC 14882:1998, as required by that standard. (As noted above, conformance to the standard is incomplete.)

C++ bindings are not defined for POSIX or X/Open CAE, so specifying feature test macros such as `_POSIX_SOURCE`, `_POSIX_C_SOURCE`, and `_XOPEN_SOURCE` can result in compilation errors due to conflicting requirements of standard C++ and those specifications.

POSIX

Applications that are intended to be conforming POSIX.1 applications must define the feature test macros specified by the standard before including any headers. For the standards listed below, applications must define the feature test macros listed. Application writers must check the corresponding standards for other macros that can be queried to determine if desired options are supported by the implementation.

POSIX Standard	Feature Test Macros
POSIX.1-1990	`_POSIX_SOURCE`
POSIX.1-1990 and POSIX.2-1992 C-Language Bindings Option	`_POSIX_SOURCE` and `_POSIX_C_SOURCE=2`
POSIX.1b-1993	`_POSIX_C_SOURCE=199309L`
POSIX.1c-1996	`_POSIX_C_SOURCE=199506L`
POSIX.1–2001	`_POSIX_C_SOURCE=200112L`

SVID3

The SVID3 specification does not specify any feature test macros to indicate that an application is written to meet SVID3 requirements. The SVID3 specification was written before the C standard was completed.

X/Open CAE

To build or compile an application that conforms to one of the X/Open CAE specifications, use the following guidelines. Applications need not set the POSIX feature test macros if they require both CAE and POSIX functionality.

XPG3	The application must define `_XOPEN_SOURCE`. If `_XOPEN_SOURCE` is defined with a value, the value must be less than 500.
XPG4	The application must define `_XOPEN_SOURCE` and set `_XOPEN_VERSION=4`. If `_XOPEN_SOURCE` is defined with a value, the value must be less than 500.
SUS (XPG4v2)	The application must define `_XOPEN_SOURCE` and set `_XOPEN_SOURCE_EXTENDED=1`. If `_XOPEN_SOURCE` is defined with a value, the value must be less than 500.
SUSv2	The application must define `_XOPEN_SOURCE=500`.
SUSv3	The application must define `_XOPEN_SOURCE=600`.

Compilation

The Oracle Solaris Studio 12.2 C Compiler provides the ISO/IEC 99899:1999 (1999 ISO C Language) standard-conforming compilation system and the `c99` utility.

When `ld` is used directly to link applications, `/usr/lib/values-xpg4.o` must be specified on any link/load command line, unless the application is POSIX.1–2001– or SUSv3–conforming, in which case `/usr/lib/values-xpg6.o` must be specified on any link/load compile line. When `cc` or `CC` is used to link applications, the compiler automatically adds the appropriate file. The preferred way to build applications, however, is described in the table below.

An XNS4- or XNS5-conforming application must include `-l XNS` on any link/load command line in addition to defining the feature test macros specified for SUS or SUSv2, respectively.

If the compiler supports the `redefine_extname` pragma feature (the Oracle Solaris Studio 12.2 C Compiler and the Oracle Solaris Studio 12.2 C++ Compiler define the macro `__PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME` to indicate that they support this feature), then the standard headers use `#pragma redefine_extname` directives to properly map function names onto library entry point names. This mapping provides full support for ISO C, POSIX, and X/Open namespace reservations.

If this pragma feature is not supported by the compiler, the headers use the `#define` directive to map internal function names onto appropriate library entry point names. In this instance, applications should avoid using the explicit 64-bit file offset symbols listed on the `lf64(5)` manual page, since these names are used by the implementation to name the alternative entry points.

When using the Oracle Solaris Studio 12.2 C Compiler, applications conforming to the specifications listed above should be compiled using the utilities and flags indicated in the following table:

Specification	Compiler/Flags	Feature Test Macros
1989 ANSI C and 1990 ISO C	c89	none
1999 ISO C	c99	none

SVID3	cc -Xt -xc99=none	none
POSIX.1-1990	c89	_POSIX_SOURCE
POSIX.1-1990 and POSIX.2-1992 C-Language Bindings Option	c89	_POSIX_SOURCE and POSIX_C_SOURCE=2
POSIX.1b-1993	c89	_POSIX_C_SOURCE=199309L
POSIX.1c-1996	c89	_POSIX_C_SOURCE=199506L
POSIX.1-2001	c99	_POSIX_C_SOURCE=200112L
POSIX.1c-1996	c89	_POSIX_C_SOURCE=199506L
CAE XPG3	cc -Xa -xc99=none	_XOPEN_SOURCE
CAE XPG4	c89	_XOPEN_SOURCE and _XOPEN_VERSION=4
SUS (CAE XPG4v2) (includes XNS4)	c89	_XOPEN_SOURCE and _XOPEN_SOURCE_EXTENDED=1
SUSv2 (includes XNS5)	c89	_XOPEN_SOURCE=500
SUSv3	c99	_XOPEN_SOURCE=600

For platforms supporting the LP64 (64-bit) programming environment, SUSv2–conforming LP64 applications using XNS5 library calls should be built with command lines of the form:

```
c89 $(getconf XBS5_LP64_OFF64_CFLAGS) -D_XOPEN_SOURCE=500 \
    $(getconf XBS5_LP64_OFF64_LDFLAGS) foo.c -o foo \
    $(getconf XBS5_LP64_OFF64_LIBS) -lxnet
```

Similar SUSv3–conforming LP64 applications should be built with command lines of the form:

```
c99 $(getconf POSIX_V6_LP64_OFF64_CFLAGS) -D_XOPEN_SOURCE=600 \
    $(getconf POSIX_V6_LP64_OFF64_LDFLAGS) foo.c -o foo \
    $(getconf POSIX_V6_LP64_OFF64_LIBS) -lxnet
```

SUSv3

```
c99                          _XOPEN_SOURCE=600
```

関連項目

csh(1), ksh(1), sh(1), exec(2), sysconf(3C), system(3C), environ(5), lf64(5)

名前

sticky – mark files for special treatment

機能説明

The *sticky bit* (file mode bit `01000`, see chmod(2)) is used to indicate special treatment of certain files and directories. A directory for which the sticky bit is set restricts deletion of files it contains. A file in a sticky directory can only be removed or renamed by a user who has write permission on the directory, and either owns the file, owns the directory, has write permission on the file, or is a privileged user. Setting the sticky bit is useful for directories such as `/tmp`, which must be publicly writable but should deny users permission to arbitrarily delete or rename the files of others.

If the sticky bit is set on a regular file and no execute bits are set, the system's page cache will not be used to hold the file's data. This bit is normally set on swap files of diskless clients so that accesses to these files do not flush more valuable data from the system's cache. Moreover, by default such files are treated as swap files, whose inode modification times may not necessarily be correctly recorded on permanent storage.

Any user may create a sticky directory. See `chmod` for details about modifying file modes.

関連項目

chmod(1), chmod(2), chown(2), mkdir(2), rename(2), unlink(2)

使用上の留意点

The mkdir(2) function will not create a directory with the sticky bit set.

名前

tecla, teclarc – User interface provided by the tecla library.

機能説明

This man page describes the command-line editing features that are available to users of programs that read keyboard input via the tecla library. Users of the `tcsh shell` will find the default key bindings very familiar. Users of the `bash` shell will also find it quite familiar, but with a few minor differences, most notably in how forward and backward searches through the list of historical commands are performed. There are two major editing modes, one with `emacs`-like key bindings and another with `vi`-like key bindings. By default `emacs` mode is enabled, but `vi(1)` mode can alternatively be selected via the user's configuration file. This file can also be used to change the bindings of individual keys to suit the user's preferences. By default, tab completion is provided. If the application hasn't reconfigured this to complete other types of symbols, then tab completion completes file names.

Key Sequence Notation

In the rest of this man page, and also in all tecla configuration files, key sequences are expressed as follows.

`^A` or `C-a`	This is a 'CONTROL-A', entered by pressing the CONTROL key at the same time as the 'A' key.
`\\E` or `M-`	In key sequences, both of these notations can be entered either by pressing the ESCAPE key, then the following key, or by pressing the META key at the same time as the following key. Thus the key sequence `M-p` can be typed in two ways, by pressing the ESCAPE key, followed by pressing 'P', or by pressing the META key at the same time as 'P'.
up	This refers to the up-arrow key.
down	This refers to the down-arrow key.
left	This refers to the left-arrow key.
right	This refers to the right-arrow key.
a	This is just a normal 'A' key.

The Tecla Configuration File

By default, tecla looks for a file called `.teclarc` in your home directory (ie. `~/.teclarc`). If it finds this file, it reads it, interpreting each line as defining a new key binding or an editing configuration option. Since the `emacs` key-bindings are installed by default, if you want to use the non-default `vi` editing mode, the most important item to go in this file is the following line:

```
edit-mode vi
```

This will re-configure the default bindings for `vi`-mode. The complete set of arguments that this command accepts are:

vi	Install key bindings like those of the `vi` editor.
emacs	Install key bindings like those of the `emacs` editor. This is the default.

none Use just the native line editing facilities provided by the terminal driver.

To prevent the terminal bell from being rung, such as when an unrecognized control-sequence is typed, place the following line in the configuration file:

```
nobeep
```

An example of a key binding line in the configuration file is the following.

```
bind M-[2~ insert-mode
```

On many keyboards, the above key sequence is generated when one presses the insert key, so with this key binding, one can toggle between the `emacs`-mode insert and overwrite modes by hitting one key. One could also do it by typing out the above sequence of characters one by one. As explained above, the `M-` part of this sequence can be typed either by pressing the ESCAPE key before the following key, or by pressing the META key at the same time as the following key. Thus if you had set the above key binding, and the insert key on your keyboard didn't generate the above key sequence, you could still type it in either of the following 2 ways.

1. Hit the ESCAPE key momentarily, then press '[', then '2', then finally '~'.
2. Press the META key at the same time as pressing the '[' key, then press '2', then '~'.

If you set a key binding for a key sequence that is already bound to a function, the new binding overrides the old one. If in the new binding you omit the name of the new function to bind to the key sequence, the original binding becomes undefined.

Starting with versions of `libtecla` later than 1.3.3 it is now possible to bind key sequences that begin with a printable character. Previously key sequences were required to start with a CONTROL or META character.

Note that the special keywords "up", "down", "left", and "right" refer to the arrow keys, and are thus not treated as key sequences. So, for example, to rebind the up and down arrow keys to use the history search mechanism instead of the simple history recall method, you could place the following in your configuration file:

```
bind up history-search-backwards
bind down history-search-backwards
```

To unbind an existing binding, you can do this with the bind command by omitting to name any action to rebind the key sequence to. For example, by not specifying an action function, the following command unbinds the default beginning-of-line action from the `^A` key sequence:

```
bind ^A
```

If you create a `~/.teclarc` configuration file, but it appears to have no effect on the program, check the documentation of the program to see if the author chose a different name for this file.

Filename and Tilde Completion

With the default key bindings, pressing the TAB key (aka. ^I) results in tecla attempting to complete the incomplete file name that precedes the cursor. Tecla searches backwards from the cursor, looking for the start of the file name, stopping when it hits either a space or the start of the line. If more than one file has the specified prefix, then tecla completes the file name up to the point at which the ambiguous matches start to differ, then lists the possible matches.

In addition to literally written file names, tecla can complete files that start with ~/ and ~user/ expressions and that contain $envvar expressions. In particular, if you hit TAB within an incomplete ~user, expression, tecla will attempt to complete the username, listing any ambiguous matches.

The completion binding is implemented using the cpl_complete_word() function, which is also available separately to users of this library. See the cpl_complete_word(3TECLA) man page for more details.

Filename Expansion

With the default key bindings, pressing ^X* causes tecla to expand the file name that precedes the cursor, replacing ~/ and ~user/ expressions with the corresponding home directories, and replacing $envvar expressions with the value of the specified environment variable, then if there are any wildcards, replacing the so far expanded file name with a space-separated list of the files which match the wild cards.

The expansion binding is implemented using the ef_expand_file() function. See the ef_expand_file(3TECLA) man page for more details.

Recalling Previously Typed Lines

Every time that a new line is entered by the user, it is appended to a list of historical input lines maintained within the GetLine resource object. You can traverse up and down this list using the up and down arrow keys. Alternatively, you can do the same with the ^P, and ^N keys, and in vi command mode you can alternatively use the k and j characters. Thus pressing up-arrow once, replaces the current input line with the previously entered line. Pressing up-arrow again, replaces this with the line that was entered before it, etc.. Having gone back one or more lines into the history list, one can return to newer lines by pressing down-arrow one or more times. If you do this sufficient times, you will return to the original line that you were entering when you first hit up-arrow.

Note that in vi mode, all of the history recall functions switch the library into command mode.

In emacs mode the M-p and M-n keys work just like the ^P and ^N keys, except that they skip all but those historical lines which share the prefix that precedes the cursor. In vi command mode the upper case 'K' and 'J' characters do the same thing, except that the string that they search for includes the character under the cursor as well as what precedes it.

Thus for example, suppose that you were in emacs mode, and you had just entered the following list of commands in the order shown:

```
ls ~/tecla/
cd ~/tecla
ls -l getline.c
emacs ~/tecla/getline.c
```

If you next typed:

```
ls
```

and then hit `M-p`, then rather than returning the previously typed `emacs` line, which doesn't start with "ls", tecla would recall the "ls -l getline.c" line. Pressing `M-p` again would recall the "ls ~/tecla/" line.

Note that if the string that you are searching for, contains any of the special characters, *, ?, or '[', then it is interpretted as a pattern to be matched. Thus, cotinuing with the above example, after typing in the list of commands shown, if you then typed:

```
*tecla*
```

and hit `M-p`, then the "`emacs` ~/tecla/getline.c" line would be recalled first, since it contains the word tecla somewhere in the line, Similarly, hitting `M-p` again, would recall the "ls ~/tecla/" line, and hitting it once more would recall the "ls ~/tecla/" line. The pattern syntax is the same as that described for file name expansion, in the `ef_expand_file`(3TECLA).

History Files

Authors of programs that use the tecla library have the option of saving historical command-lines in a file before exiting, and subsequently reading them back in from this file when the program is next started. There is no standard name for this file, since it makes sense for each application to use its own history file, so that commands from different applications don't get mixed up.

International Character Sets

Since `libtecla` version 1.4.0, tecla has been 8-bit clean. This means that all 8-bit characters that are printable in the user's current locale are now displayed verbatim and included in the returned input line. Assuming that the calling program correctly contains a call like the following,

```
setlocale(LC_CTYPE, "");
```

then the current locale is determined by the first of the environment variables `LC_CTYPE`, `LC_ALL`, and `LANG`, that is found to contain a valid locale name. If none of these variables are defined, or the program neglects to call `setlocale`, then the default C locale is used, which is US 7-bit ASCII. On most unix-like platforms, you can get a list of valid locales by typing the command:

```
locale -a
```

at the shell prompt.

Meta Keys and Locales

Beware that in most locales other than the default C locale, META characters become printable, and they are then no longer considered to match `M-c` style key bindings. This allows international characters to be entered with the compose key without unexpectedly triggering META key bindings. You can still invoke META bindings, since there are actually two ways to do this. For example the binding `M-c` can also be invoked by pressing the ESCAPE key momentarily, then pressing the c key, and this will work regardless of locale. Moreover, many modern terminal emulators, such as gnome's gnome-terminal's and KDE's konsole terminals, already generate escape pairs like this when you use the META key, rather than a real meta character, and other emulators usually have a way to request this behavior, so you can continue to use the META key on most systems.

For example, although xterm terminal emulators generate real 8-bit meta characters by default when you use the META key, they can be configured to output the equivalent escape pair by setting their `EightBitInput` X resource to False. You can either do this by placing a line like the following in your `~/.Xdefaults` file,

```
XTerm*EightBitInput: False
```

or by starting an `xterm` with an `-xrm` '*EightBitInput: False' command-line argument. In recent versions of xterm you can toggle this feature on and off with the 'Meta Sends Escape' option in the menu that is displayed when you press the left mouse button and the CONTROL key within an xterm window. In CDE, dtterms can be similarly coerced to generate escape pairs in place of meta characters, by setting the `Dtterm*KshMode` resource to True.

Entering International Characters

If you don't have a keyboard that generates all of the international characters that you need, there is usually a compose key that will allow you to enter special characters, or a way to create one. For example, under X windows on unix-like systems, if your keyboard doesn't have a compose key, you can designate a redundant key to serve this purpose with the xmodmap command. For example, on many PC keyboards there is a microsoft-windows key, which is otherwise useless under Linux. On a laptop, for example, the `xev` program might report that pressing this key generates keycode 115. To turn this key into a COMPOSE key, do the following:

```
xmodmap -e 'keycode 115 = Multi_key'
```

Type this key followed by a " character to enter an 'I' with a umlaut over it.

The Available Key Binding Functions

The following is a list of the editing functions provided by the tecla library. The names in the leftmost column of the list can be used in configuration files to specify which function a given key or combination of keys should invoke. They are also used in the next two sections to list the default key bindings in `emacs` and `vi` modes.

user-interrupt	Send a SIGINT signal to the parent process.
suspend	Suspend the parent process.

stop-output	Pause terminal output.
start-output	Resume paused terminal output.
literal-next	Arrange for the next character to be treated as a normal character. This allows control characters to be entered.
cursor-right	Move the cursor one character right.
cursor-left	Move the cursor one character left.
insert-mode	Toggle between insert mode and overwrite mode.
beginning-of-line	Move the cursor to the beginning of the line.
end-of-line	Move the cursor to the end of the line.
delete-line	Delete the contents of the current line.
kill-line	Delete everything that follows the cursor.
backward-kill-line	Delete all characters between the cursor and the start of the line.
forward-word	Move to the end of the word which follows the cursor.
forward-to-word	Move the cursor to the start of the word that follows the cursor.
backward-word	Move to the start of the word which precedes the cursor.
goto-column	Move the cursor to the 1-relative column in the line specified by any preceding digit-argument sequences (see Entering Repeat Counts below).
find-parenthesis	If the cursor is currently over a parenthesis character, move it to the matching parenthesis character. If not over a parenthesis character move right to the next close parenthesis.
forward-delete-char	Delete the character under the cursor.
backward-delete-char	Delete the character which precedes the cursor.
list-or-eof	This is intended for binding to `^D`. When invoked when the cursor is within the line it displays all possible completions then redisplays the line unchanged. When invoked on an empty line, it signals end-of-input (EOF) to the caller of `gl_get_line()`.
del-char-or-list-or-eof	This is intended for binding to `^D`. When invoked when the cursor is within the line it invokes forward-delete-char. When invoked at the end of the line it displays all possible

	completions then redisplays the line unchanged. When invoked on an empty line, it signals end-of-input (EOF) to the caller of `gl_get_line()`.
forward-delete-word	Delete the word which follows the cursor.
backward-delete-word	Delete the word which precedes the cursor.
upcase-word	Convert all of the characters of the word which follows the cursor, to upper case.
downcase-word	Convert all of the characters of the word which follows the cursor, to lower case.
capitalize-word	Capitalize the word which follows the cursor.
change-case	If the next character is upper case, toggle it to lower case and vice versa.
redisplay	Redisplay the line.
clear-screen	Clear the terminal, then redisplay the current line.
transpose-chars	Swap the character under the cursor with the character just before the cursor.
set-mark	Set a mark at the position of the cursor.
exchange-point-and-mark	Move the cursor to the last mark that was set, and move the mark to where the cursor used to be.
kill-region	Delete the characters that lie between the last mark that was set, and the cursor.
copy-region-as-kill	Copy the text between the mark and the cursor to the cut buffer, without deleting the original text.
yank	Insert the text that was last deleted, just before the current position of the cursor.
append-yank	Paste the current contents of the cut buffer, after the cursor.
up-history	Recall the next oldest line that was entered. Note that in `vi` mode you are left in command mode.
down-history	Recall the next most recent line that was entered. If no history recall session is currently active, the next line from a previous recall session is recalled. Note that in vi mode you are left in command mode.
history-search-backward	Recall the next oldest line who's prefix matches the string which currently precedes the cursor (in `vi` command-mode

	the character under the cursor is also included in the search string). Note that in `vi` mode you are left in command mode.
history-search-forward	Recall the next newest line who's prefix matches the string which currently precedes the cursor (in `vi` command-mode the character under the cursor is also included in the search string). Note that in `vi` mode you are left in command mode.
history-re-search-backward	Recall the next oldest line who's prefix matches that established by the last invocation of either history-search-forward or history-search-backward.
history-re-search-forward	Recall the next newest line who's prefix matches that established by the last invocation of either history-search-forward or history-search-backward.
complete-word	Attempt to complete the incomplete word which precedes the cursor. Unless the host program has customized word completion, file name completion is attempted. In `vi` commmand mode the character under the cursor is also included in the word being completed, and you are left in `vi` insert mode.
expand-filename	Within the command line, expand wild cards, tilde expressions and dollar expressions in the file name which immediately precedes the cursor. In `vi` commmand mode the character under the cursor is also included in the file name being expanded, and you are left in `vi` insert mode.
list-glob	List any file names which match the wild-card, tilde and dollar expressions in the file name which immediately precedes the cursor, then redraw the input line unchanged.
list-history	Display the contents of the history list for the current history group. If a repeat count of > `1` is specified, only that many of the most recent lines are displayed. See the Entering Repeat Counts section.
read-from-file	Temporarily switch to reading input from the file who's name precedes the cursor.
read-init-files	Re-read `teclarc` configuration files.
beginning-of-history	Move to the oldest line in the history list. Note that in `vi` mode you are left in command mode.
end-of-history	Move to the newest line in the history list (ie. the current line). Note that in `vi` mode this leaves you in command mode.

digit-argument	Enter a repeat count for the next key binding function. For details, see the Entering Repeat Counts section.
newline	Terminate and return the current contents of the line, after appending a newline character. The newline character is normally '\ ', but will be the first character of the key sequence that invoked the newline action, if this happens to be a printable character. If the action was invoked by the '\ ' newline character or the '\\r' carriage return character, the line is appended to the history buffer.
repeat-history	Return the line that is being edited, then arrange for the next most recent entry in the history buffer to be recalled when tecla is next called. Repeatedly invoking this action causes successive historical input lines to be re-executed. Note that this action is equivalent to the 'Operate' action in ksh.
ring-bell	Ring the terminal bell, unless the bell has been silenced via the nobeep configuration option (see The Tecla Configuration File section).
forward-copy-char	Copy the next character into the cut buffer (NB. use repeat counts to copy more than one).
backward-copy-char	Copy the previous character into the cut buffer.
forward-copy-word	Copy the next word into the cut buffer.
backward-copy-word	Copy the previous word into the cut buffer.
forward-find-char	Move the cursor to the next occurrence of the next character that you type.
backward-find-char	Move the cursor to the last occurrence of the next character that you type.
forward-to-char	Move the cursor to the character just before the next occurrence of the next character that the user types.
backward-to-char	Move the cursor to the character just after the last occurrence before the cursor of the next character that the user types.
repeat-find-char	Repeat the last backward-find-char, forward-find-char, backward-to-char or forward-to-char.
invert-refind-char	Repeat the last backward-find-char, forward-find-char, backward-to-char, or forward-to-char in the opposite direction.

delete-to-column	Delete the characters from the cursor up to the column that is specified by the repeat count.
delete-to-parenthesis	Delete the characters from the cursor up to and including the matching parenthesis, or next close parenthesis.
forward-delete-find	Delete the characters from the cursor up to and including the following occurence of the next character typed.
backward-delete-find	Delete the characters from the cursor up to and including the preceding occurence of the next character typed.
forward-delete-to	Delete the characters from the cursor up to, but not including, the following occurence of the next character typed.
backward-delete-to	Delete the characters from the cursor up to, but not including, the preceding occurence of the next character typed.
delete-refind	Repeat the last *-delete-find or *-delete-to action.
delete-invert-refind	Repeat the last *-delete-find or *-delete-to action, in the opposite direction.
copy-to-column	Copy the characters from the cursor up to the column that is specified by the repeat count, into the cut buffer.
copy-to-parenthesis	Copy the characters from the cursor up to and including the matching parenthesis, or next close parenthesis, into the cut buffer.
forward-copy-find	Copy the characters from the cursor up to and including the following occurence of the next character typed, into the cut buffer.
backward-copy-find	Copy the characters from the cursor up to and including the preceding occurence of the next character typed, into the cut buffer.
forward-copy-to	Copy the characters from the cursor up to, but not including, the following occurence of the next character typed, into the cut buffer.
backward-copy-to	Copy the characters from the cursor up to, but not including, the preceding occurence of the next character typed, into the cut buffer.
copy-refind	Repeat the last *-copy-find or *-copy-to action.

copy-invert-refind	Repeat the last *-copy-find or *-copy-to action, in the opposite direction.
vi-mode	Switch to `vi` mode from emacs mode.
emacs-mode	Switch to `emacs` mode from `vi` mode.
vi-insert	From `vi` command mode, switch to insert mode.
vi-overwrite	From `vi` command mode, switch to overwrite mode.
vi-insert-at-bol	From `vi` command mode, move the cursor to the start of the line and switch to insert mode.
vi-append-at-eol	From `vi` command mode, move the cursor to the end of the line and switch to append mode.
vi-append	From `vi` command mode, move the cursor one position right, and switch to insert mode.
vi-replace-char	From `vi` command mode, replace the character under the cursor with the next character entered.
vi-forward-change-char	From `vi` command mode, delete the next character then enter insert mode.
vi-backward-change-char	From vi command mode, delete the preceding character then enter insert mode.
vi-forward-change-word	From `vi` command mode, delete the next word then enter insert mode.
vi-backward-change-word	From vi command mode, delete the preceding word then enter insert mode.
vi-change-rest-of-line	From `vi` command mode, delete from the cursor to the end of the line, then enter insert mode.
vi-change-line	From `vi` command mode, delete the current line, then enter insert mode.
vi-change-to-bol	From `vi` command mode, delete all characters between the cursor and the beginning of the line, then enter insert mode.
vi-change-to-column	From `vi` command mode, delete the characters from the cursor up to the column that is specified by the repeat count, then enter insert mode.
vi-change-to-parenthesis	Delete the characters from the cursor up to and including the matching parenthesis, or next close parenthesis, then enter `vi` insert mode.

vi-forward-change-find	From `vi` command mode, delete the characters from the cursor up to and including the following occurence of the next character typed, then enter insert mode.
vi-backward-change-find	From vi command mode, delete the characters from the cursor up to and including the preceding occurence of the next character typed, then enter insert mode.
vi-forward-change-to	From `vi` command mode, delete the characters from the cursor up to, but not including, the following occurence of the next character typed, then enter insert mode.
vi-backward-change-to	From `vi` command mode, delete the characters from the cursor up to, but not including, the preceding occurence of the next character typed, then enter insert mode.
vi-change-refind	Repeat the last vi-*-change-find or vi-*-change-to action.
vi-change-invert-refind	Repeat the last vi-*-change-find or vi-*-change-to action, in the opposite direction.
vi-undo	In `vi` mode, undo the last editing operation.
vi-repeat-change	In `vi` command mode, repeat the last command that modified the line.

Default Key Bindings In emacs Mode

The following default key bindings, which can be overriden by the tecla configuration file, are designed to mimic most of the bindings of the unix `tcsh` `shell` shell, when it is in `emacs` editing mode.

This is the default editing mode of the tecla library.

Under UNIX the terminal driver sets a number of special keys for certain functions. The tecla library attempts to use the same key bindings to maintain consistency. The key sequences shown for the following 6 bindings are thus just examples of what they will probably be set to. If you have used the stty command to change these keys, then the default bindings should match.

`^C` user-interrupt

`^\\` abort

`^Z` suspend

`^Q` start-output

`^S` stop-output

`^V` literal-next

The cursor keys are refered to by name, as follows. This is necessary because different types of terminals generate different key sequences when their cursor keys are pressed.

right	cursor-right
left	cursor-left
up	up-history
down	down-history

The remaining bindings don't depend on the terminal setttings.

`^F`	cursor-right
`^B`	cursor-left
`M-i`	insert-mode
`^A`	beginning-of-line
`^E`	end-of-line
`^U`	delete-line
`^K`	kill-line
`M-f`	forward-word
`M-b`	backward-word
`^D`	del-char-or-list-or-eof
`^H`	backward-delete-char
`^?`	backward-delete-char
`M-d`	forward-delete-word
`M-^H`	backward-delete-word
`M-^?`	backward-delete-word
`M-u`	upcase-word
`M-l`	downcase-word
`M-c`	capitalize-word
`^R`	redisplay
`^L`	clear-screen
`^T`	transpose-chars
`^@`	set-mark

^X^X	exchange-point-and-mark
^W	kill-region
M-w	copy-region-as-kill
^Y	yank
^P	up-history
^N	down-history
M-p	history-search-backward
M-n	history-search-forward
^I	complete-word
^X*	expand-filename
^X^F	read-from-file
^X^R	read-init-files
^Xg	list-glob
^Xh	list-history
M-<	beginning-of-history
M->	end-of-history
\	newline
\\r	newline
M-o	repeat-history
M-^V	vi-mode
M-0, M-1, ... M-9	digit-argument (see below)

Note that ^I is what the TAB key generates, and that ^@ can be generated not only by pressing the CONTROL key and the @ key simultaneously, but also by pressing the CONTROL key and the space bar at the same time.

Default Key Bindings in vi Mode

The following default key bindings are designed to mimic the vi style of editing as closely as possible. This means that very few editing functions are provided in the initial character input mode, editing functions instead being provided by the vi command mode. The vi command mode is entered whenever the ESCAPE character is pressed, or whenever a key sequence that starts with a meta character is entered. In addition to mimicing vi, libtecla provides bindings for tab completion, wild-card expansion of file names, and historical line recall.

To learn how to tell the tecla library to use `vi` mode instead of the default `emacs` editing mode, see the earlier section entitled The Tecla Configuration File.

Under UNIX the terminal driver sets a number of special keys for certain functions. The tecla library attempts to use the same key bindings to maintain consistency, binding them both in input mode and in command mode. The key sequences shown for the following 6 bindings are thus just examples of what they will probably be set to. If you have used the `stty` command to change these keys, then the default bindings should match.

`^C`	user-interrupt
`^\\`	abort
`^Z`	suspend
`^Q`	start-output
`^S`	stop-output
`^V`	literal-next
`M-^C`	user-interrupt
`M-^\\`	abort
`M-^Z`	suspend
`M-^Q`	start-output
`M-^S`	stop-output

Note that above, most of the bindings are defined twice, once as a raw control code like `^C` and then a second time as a META character like `M-^C`. The former is the binding for `vi` input mode, whereas the latter is the binding for `vi` command mode. Once in command mode all key sequences that the user types that they don't explicitly start with an ESCAPE or a META key, have their first key secretly converted to a META character before the key sequence is looked up in the key binding table. Thus, once in command mode, when you type the letter i, for example, the tecla library actually looks up the binding for `M-i`.

The cursor keys are refered to by name, as follows. This is necessary because different types of terminals generate different key sequences when their cursor keys are pressed.

`right`	cursor-right
`left`	cursor-left
`up`	up-history
`down`	down-history

The cursor keys normally generate a key sequence that start with an ESCAPE character, so beware that using the arrow keys will put you into command mode (if you aren't already in command mode).

The following are the terminal-independent key bindings for `vi` input mode.

`^D`	list-or-eof
`^G`	list-glob
`^H`	backward-delete-char
`^I`	complete-word
`\\r`	newline
`\`	newline
`^L`	clear-screen
`^N`	down-history
`^P`	up-history
`^R`	redisplay
`^U`	backward-kill-line
`^W`	backward-delete-word
`^X*`	expand-filename
`^X^F`	read-from-file
`^X^R`	read-init-files
`^?`	backward-delete-char

The following are the key bindings that are defined in `vi` command mode, this being specified by them all starting with a META character. As mentioned above, once in command mode the initial meta character is optional. For example, you might enter command mode by typing ESCAPE, and then press 'H' twice to move the cursor two positions to the left. Both 'H' characters get quietly converted to `M-h` before being compared to the key binding table, the first one because ESCAPE followed by a character is always converted to the equivalent META character, and the second because command mode was already active.

`M-\\`	cursor-right (META-space)
`M-$`	end-of-line
`M-*`	expand-filename
`M-+`	down-history

M--	up-history
M-<	beginning-of-history
M->	end-of-history
M-^	beginning-of-line
M-	repeat-find-char
M-,	invert-refind-char
M-|	goto-column
M-~	change-case
M-.	vi-repeat-change
M-%	find-parenthesis
M-a	vi-append
M-A	vi-append-at-eol
M-b	backward-word
M-B	backward-word
M-C	vi-change-rest-of-line
M-cb	vi-backward-change-word
M-cB	vi-backward-change-word
M-cc	vi-change-line
M-ce	vi-forward-change-word
M-cE	vi-forward-change-word
M-cw	vi-forward-change-word
M-cW	vi-forward-change-word
M-cF	vi-backward-change-find
M-cf	vi-forward-change-find
M-cT	vi-backward-change-to
M-ct	vi-forward-change-to
M-c;	vi-change-refind
M-c,	vi-change-invert-refind
M-ch	vi-backward-change-char

M-c^H	vi-backward-change-char
M-c^?	vi-backward-change-char
M-cl	vi-forward-change-char
M-c\\	vi-forward-change-char (META-c-space)
M-c^	vi-change-to-bol
M-c0	vi-change-to-bol
M-c$	vi-change-rest-of-line
M-c|	vi-change-to-column
M-c%	vi-change-to-parenthesis
M-dh	backward-delete-char
M-d^H	backward-delete-char
M-d^?	backward-delete-char
M-dl	forward-delete-char
M-d	forward-delete-char (META-d-space)
M-dd	delete-line
M-db	backward-delete-word
M-dB	backward-delete-word
M-de	forward-delete-word
M-dE	forward-delete-word
M-dw	forward-delete-word
M-dW	forward-delete-word
M-dF	backward-delete-find
M-df	forward-delete-find
M-dT	backward-delete-to
M-dt	forward-delete-to
M-d;	delete-refind
M-d,	delete-invert-refind
M-d^	backward-kill-line
M-d0	backward-kill-line

M-d$	kill-line
M-D	kill-line
M-d|	delete-to-column
M-d%	delete-to-parenthesis
M-e	forward-word
M-E	forward-word
M-f	forward-find-char
M-F	backward-find-char
M--	up-history
M-h	cursor-left
M-H	beginning-of-history
M-i	vi-insert
M-I	vi-insert-at-bol
M-j	down-history
M-J	history-search-forward
M-k	up-history
M-K	history-search-backward
M-l	cursor-right
M-L	end-of-history
M-n	history-re-search-forward
M-N	history-re-search-backward
M-p	append-yank
M-P	yank
M-r	vi-replace-char
M-R	vi-overwrite
M-s	vi-forward-change-char
M-S	vi-change-line
M-t	forward-to-char
M-T	backward-to-char

M-u	vi-undo
M-w	forward-to-word
M-W	forward-to-word
M-x	forward-delete-char
M-X	backward-delete-char
M-yh	backward-copy-char
M-y^H	backward-copy-char
M-y^?	backward-copy-char
M-yl	forward-copy-char
M-y\\	forward-copy-char (META-y-space)
M-ye	forward-copy-word
M-yE	forward-copy-word
M-yw	forward-copy-word
M-yW	forward-copy-word
M-yb	backward-copy-word
M-yB	backward-copy-word
M-yf	forward-copy-find
M-yF	backward-copy-find
M-yt	forward-copy-to
M-yT	backward-copy-to
M-y;	copy-refind
M-y,	copy-invert-refind
M-y^	copy-to-bol
M-y0	copy-to-bol
M-y$	copy-rest-of-line
M-yy	copy-line
M-Y	copy-line
M-y|	copy-to-column
M-y%	copy-to-parenthesis

`M-^E`	emacs-mode
`M-^H`	cursor-left
`M-^?`	cursor-left
`M-^L`	clear-screen
`M-^N`	down-history
`M-^P`	up-history
`M-^R`	redisplay
`M-^D`	list-or-eof
`M-^I`	complete-word
`M-\\r`	newline
`M-\`	newline
`M-^X^R`	read-init-files
`M-^Xh`	list-history
`M-0, M-1, ... M-9`	digit-argument (see below)

Note that `^I` is what the TAB key generates.

Entering Repeat Counts

Many of the key binding functions described previously, take an optional count, typed in before the target key sequence. This is interpreted as a repeat count by most bindings. A notable exception is the goto-column binding, which interprets the count as a column number.

By default you can specify this count argument by pressing the META key while typing in the numeric count. This relies on the digit-argument action being bound to 'META-0', 'META-1' etc. Once any one of these bindings has been activated, you can optionally take your finger off the META key to type in the rest of the number, since every numeric digit thereafter is treated as part of the number, unless it is preceded by the literal-next binding. As soon as a non-digit, or literal digit key is pressed the repeat count is terminated and either causes the just typed character to be added to the line that many times, or causes the next key binding function to be given that argument.

For example, in `emacs` mode, typing:

```
M-12a
```

causes the letter 'a' to be added to the line 12 times, whereas

```
M-4M-c
```

Capitalizes the next 4 words.

In vi command mode the meta modifier is automatically added to all characters typed in, so to enter a count in vi command-mode, just involves typing in the number, just as it does in the vi editor itself. So for example, in vi command mode, typing:

```
4w2x
```

moves the cursor four words to the right, then deletes two characters.

You can also bind digit-argument to other key sequences. If these end in a numeric digit, that digit gets appended to the current repeat count. If it doesn't end in a numeric digit, a new repeat count is started with a value of zero, and can be completed by typing in the number, after letting go of the key which triggered the digit-argument action.

ファイル

/usr/lib/libtecla.so	The tecla library
/usr/include/libtecla.h	The tecla header file
~/.teclarc	The personal tecla customization file

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	library/libtecla
Interface Stability	Committed

関連項目

vi(1), cpl_complete_word(3TECLA), ef_expand_file(3TECLA), gl_get_line(3TECLA), gl_io_mode(3TECLA), libtecla(3LIB), pca_lookup_file(3TECLA), attributes(5)

名前

term – conventional names for terminals

機能説明

Terminal names are maintained as part of the shell environment in the environment variable `TERM`. See sh(1), profile(4), and environ(5). These names are used by certain commands (for example, `tabs`, `tput`, and `vi`) and certain functions (for example, see curses(3CURSES)).

Files under `/usr/share/lib/terminfo` are used to name terminals and describe their capabilities. These files are in the format described in terminfo(4). Entries in `terminfo` source files consist of a number of comma-separated fields. To print a description of a terminal *term*, use the command `infocmp -I` *term*. See infocmp(1M). White space after each comma is ignored. The first line of each terminal description in the `terminfo` database gives the names by which `terminfo` knows the terminal, separated by bar (`|`) characters. The first name given is the most common abbreviation for the terminal (this is the one to use to set the environment variable `TERMINFO` in `$HOME/.profile`; see profile(4)), the last name given should be a long name fully identifying the terminal, and all others are understood as synonyms for the terminal name. All names but the last should contain no blanks and must be unique in the first 14 characters; the last name may contain blanks for readability.

Terminal names (except for the last, verbose entry) should be chosen using the following conventions. The particular piece of hardware making up the terminal should have a root name chosen, for example, for the AT&T 4425 terminal, `att4425`. This name should not contain hyphens, except that synonyms may be chosen that do not conflict with other names. Up to 8 characters, chosen from the set `a` through `z` and `0` through `9`, make up a basic terminal name. Names should generally be based on original vendors rather than local distributors. A terminal acquired from one vendor should not have more than one distinct basic name. Terminal sub-models, operational modes that the hardware can be in, or user preferences should be indicated by appending a hyphen and an indicator of the mode. Thus, an AT&T 4425 terminal in 132 column mode is `att4425–w`. The following suffixes should be used where possible:

Suffix	Meaning	Example
–w	Wide mode (more than 80 columns)	att4425–w
–am	With auto. margins (usually default)	vt100–am
–nam	Without automatic margins	vt100–nam
–*n*	Number of lines on the screen	aaa–60
–na	No arrow keys (leave them in local)	c100–na
–np	Number of pages of memory	c100–4p
–rv	Reverse video	att4415–rv

To avoid conflicts with the naming conventions used in describing the different modes of a terminal (for example, `-w`), it is recommended that a terminal's root name not contain hyphens. Further, it is good practice to make all terminal names used in the `terminfo(4)` database unique. Terminal entries that are present only for inclusion in other entries via the `use=` facilities should have a '+' in their name, as in `4415+nl`.

Here are some of the known terminal names: (For a complete list, enter the command `ls -C /usr/share/lib/terminfo/?`).

2621,hp2621	Hewlett-Packard 2621 series
2631	Hewlett-Packard 2631 line printer
2631–c	Hewlett-Packard 2631 line printer, compressed mode
2631–e	Hewlett-Packard 2631 line printer, expanded mode
2640,hp2640	Hewlett-Packard 2640 series
2645,hp2645	Hewlett-Packard 2645 series
3270	IBM Model 3270
33,tty33	AT&T Teletype Model 33 KSR
35,tty35	AT&T Teletype Model 35 KSR
37,tty37	AT&T Teletype Model 37 KSR
4000a	Trendata 4000a
4014,tek4014	TEKTRONIX 4014
40,tty40	AT&T Teletype Dataspeed 40/2
43,tty43	AT&T Teletype Model 43 KSR
4410,5410	AT&T 4410/5410 in 80-column mode, version 2
4410–nfk,5410–nfk	AT&T 4410/5410 without function keys, version 1
4410–nsl,5410–nsl	AT&T 4410/5410 without pln defined
4410–w,5410–w	AT&T 4410/5410 in 132-column mode
4410v1,5410v1	AT&T 4410/5410 in 80-column mode, version 1
4410v1–w,5410v1–w	AT&T 4410/5410 in 132-column mode, version 1
4415,5420	AT&T 4415/5420 in 80-column mode
4415–nl,5420–nl	AT&T 4415/5420 without changing labels
4415–rv,5420–rv	AT&T 4415/5420 80 columns in reverse video

4415–rv–nl,5420–rv–nl	AT&T 4415/5420 reverse video without changing labels
4415–w,5420–w	AT&T 4415/5420 in 132-column mode
4415–w–nl,5420–w–nl	AT&T 4415/5420 in 132-column mode without changing labels
4415–w–rv,5420–w–rv	AT&T 4415/5420 132 columns in reverse video
4418,5418	AT&T 5418 in 80-column mode
4418–w,5418–w	AT&T 5418 in 132-column mode
4420	AT&T Teletype Model 4420
4424	AT&T Teletype Model 4424
4424-2	AT&T Teletype Model 4424 in display function group ii
4425,5425	AT&T 4425/5425
4425–fk,5425–fk	AT&T 4425/5425 without function keys
4425–nl,5425–nl	AT&T 4425/5425 without changing labels in 80-column mode
4425–w,5425–w	AT&T 4425/5425 in 132-column mode
4425–w–fk,5425–w–fk	AT&T 4425/5425 without function keys in 132-column mode
4425–nl–w,5425–nl–w	AT&T 4425/5425 without changing labels in 132-column mode
4426	AT&T Teletype Model 4426S
450	DASI 450 (same as Diablo 1620)
450–12	DASI 450 in 12-pitch mode
500,att500	AT&T-IS 500 terminal
510,510a	AT&T 510/510a in 80-column mode
513bct,att513	AT&T 513 bct terminal
5320	AT&T 5320 hardcopy terminal
5420_2	AT&T 5420 model 2 in 80-column mode
5420_2–w	AT&T 5420 model 2 in 132-column mode
5620,dmd	AT&T 5620 terminal 88 columns
5620–24,dmd–24	AT&T Teletype Model DMD 5620 in a 24x80 layer
5620–34,dmd–34	AT&T Teletype Model DMD 5620 in a 34x80 layer
610,610bct	AT&T 610 bct terminal in 80-column mode
610–w,610bct–w	AT&T 610 bct terminal in 132-column mode

630,630MTG	AT&T 630 Multi-Tasking Graphics terminal
7300,pc7300,unix_pc	AT&T UNIX PC Model 7300
735,ti	Texas Instruments TI735 and TI725
745	Texas Instruments TI745
dumb	generic name for terminals that lack reverse line-feed and other special escape sequences
hp	Hewlett-Packard (same as 2645)
lp	generic name for a line printer
pt505	AT&T Personal Terminal 505 (22 lines)
pt505–24	AT&T Personal Terminal 505 (24-line mode)
sync	generic name for synchronous Teletype Model 4540-compatible terminals

Commands whose behavior depends on the type of terminal should accept arguments of the form `-T`*term* where *term* is one of the names given above; if no such argument is present, such commands should obtain the terminal type from the environment variable `TERM`, which, in turn, should contain *term*.

ファイル

`/usr/share/lib/terminfo/?/*` compiled terminal description database

関連項目

`sh`(1), `stty`(1), `tabs`(1), `tput`(1), `vi`(1), `infocmp`(1M), `curses`(3CURSES), `profile`(4), `terminfo`(4), `environ`(5)

名前

threads, pthreads – POSIX pthreads and Solaris threads concepts

形式

POSIX

```
cc –mt [ flag... ] file... [ -lrt library... ]
#include <pthread.h>
```

Solaris

```
cc –mt [ flag... ] file... [ library... ]
#include <sched.h>
#include <thread.h>
```

機能説明

POSIX and Solaris threads each have their own implementation within libc(3LIB). Both implementations are interoperable, their functionality similar, and can be used within the same application. Only POSIX threads are guaranteed to be fully portable to other POSIX-compliant environments. POSIX and Solaris threads require different source, include files and linking libraries. See SYNOPSIS.

Similarities

Most of the POSIX and Solaris threading functions have counterparts with each other. POSIX function names, with the exception of the semaphore names, have a "pthread" prefix. Function names for similar POSIX and Solaris functions have similar endings. Typically, similar POSIX and Solaris functions have the same number and use of arguments.

Differences

POSIX pthreads and Solaris threads differ in the following ways:

- POSIX threads are more portable.
- POSIX threads establish characteristics for each thread according to configurable attribute objects.
- POSIX pthreads implement thread cancellation.
- POSIX pthreads enforce scheduling algorithms.
- POSIX pthreads allow for clean-up handlers for fork(2) calls.
- Solaris threads can be suspended and continued.
- Solaris threads implement daemon threads, for whose demise the process does not wait.

Function Comparison

The following table compares the POSIX pthreads and Solaris threads functions. When a comparable interface is not available either in POSIX pthreads or Solaris threads, a hyphen (–) appears in the column.

Functions Related to Creation

POSIX	Solaris
pthread_create()	thr_create()
pthread_attr_init()	–

pthread_attr_setdetachstate()	–
pthread_attr_getdetachstate()	–
pthread_attr_setinheritsched()	–
pthread_attr_getinheritsched()	–
pthread_attr_setschedparam()	–
pthread_attr_getschedparam()	–
pthread_attr_setschedpolicy()	–
pthread_attr_getschedpolicy()	–
pthread_attr_setscope()	–
pthread_attr_getscope()	–
pthread_attr_setstackaddr()	–
pthread_attr_getstackaddr()	–
pthread_attr_setstacksize()	–
pthread_attr_getstacksize()	–
pthread_attr_getguardsize()	–
pthread_attr_setguardsize()	–
pthread_attr_destroy()	–
–	thr_min_stack()

Functions Related to Exit

POSIX	Solaris
pthread_exit()	thr_exit()
pthread_join()	thr_join()
pthread_detach()	–

Functions Related to Thread Specific Data

POSIX	Solaris
pthread_key_create()	thr_keycreate()
pthread_setspecific()	thr_setspecific()
pthread_getspecific()	thr_getspecific()
pthread_key_delete()	–

Functions Related to Signals

POSIX	Solaris
pthread_sigmask()	thr_sigsetmask()
pthread_kill()	thr_kill()

Functions Related to IDs

POSIX	Solaris
pthread_self()	thr_self()
pthread_equal()	–
–	thr_main()

Functions Related to Scheduling

POSIX	Solaris
–	thr_yield()
–	thr_suspend()
–	thr_continue()
pthread_setconcurrency()	thr_setconcurrency()
pthread_getconcurrency()	thr_getconcurrency()
pthread_setschedparam()	thr_setprio()
pthread_setschedprio()	thr_setprio()
pthread_getschedparam()	thr_getprio()

Functions Related to Cancellation

POSIX	Solaris
pthread_cancel()	–
pthread_setcancelstate()	–
pthread_setcanceltype()	–
pthread_testcancel()	–
pthread_cleanup_pop()	–
pthread_cleanup_push()	–

Functions Related to Mutexes

POSIX	Solaris
pthread_mutex_init()	mutex_init()

pthread_mutexattr_init()	–
pthread_mutexattr_setpshared()	–
pthread_mutexattr_getpshared()	–
pthread_mutexattr_setprotocol()	–
pthread_mutexattr_getprotocol()	–
pthread_mutexattr_setprioceiling()	–
pthread_mutexattr_getprioceiling()	–
pthread_mutexattr_settype()	–
pthread_mutexattr_gettype()	–
pthread_mutexattr_setrobust()	–
pthread_mutexattr_getrobust()	–
pthread_mutexattr_destroy()	–
pthread_mutex_setprioceiling()	–
pthread_mutex_getprioceiling()	–
pthread_mutex_lock()	mutex_lock()
pthread_mutex_trylock()	mutex_trylock()
pthread_mutex_unlock()	mutex_unlock()
pthread_mutex_destroy()	mutex_destroy()

Functions Related to Condition Variables

POSIX	Solaris
pthread_cond_init()	cond_init()
pthread_condattr_init()	–
pthread_condattr_setpshared()	–
pthread_condattr_getpshared()	–
pthread_condattr_destroy()	–
pthread_cond_wait()	cond_wait()
pthread_cond_timedwait()	cond_timedwait()
pthread_cond_signal()	cond_signal()
pthread_cond_broadcast()	cond_broadcast()

pthread_cond_destroy()	cond_destroy()

Functions Related to Reader/Writer Locking

POSIX	Solaris
pthread_rwlock_init()	rwlock_init()
pthread_rwlock_rdlock()	rw_rdlock()
pthread_rwlock_tryrdlock()	rw_tryrdlock()
pthread_rwlock_wrlock()	rw_wrlock()
pthread_rwlock_trywrlock()	rw_trywrlock()
pthread_rwlock_unlock()	rw_unlock()
pthread_rwlock_destroy()	rwlock_destroy()
pthread_rwlockattr_init()	–
pthread_rwlockattr_destroy()	–
pthread_rwlockattr_getpshared()	–
pthread_rwlockattr_setpshared()	–

Functions Related to Semaphores

POSIX	Solaris
sem_init()	sema_init()
sem_open()	–
sem_close()	–
sem_wait()	sema_wait()
sem_trywait()	sema_trywait()
sem_post()	sema_post()
sem_getvalue()	–
sem_unlink()	–
sem_destroy()	sema_destroy()

Functions Related to fork( ) Clean Up

POSIX	Solaris
pthread_atfork()	–

Functions Related to Limits

POSIX	Solaris
pthread_once()	–

Functions Related to Debugging

POSIX	Solaris
–	thr_stksegment()

Locking

Synchronization

Multithreaded behavior is asynchronous, and therefore, optimized for concurrent and parallel processing. As threads, always from within the same process and sometimes from multiple processes, share global data with each other, they are not guaranteed exclusive access to the shared data at any point in time. Securing mutually exclusive access to shared data requires synchronization among the threads. Both POSIX and Solaris implement four synchronization mechanisms: mutexes, condition variables, reader/writer locking (*optimized frequent-read occasional-write mutex*), and semaphores.

Synchronizing multiple threads diminishes their concurrency. The coarser the grain of synchronization, that is, the larger the block of code that is locked, the lesser the concurrency.

MT fork()

If a threads program calls fork(2), it implicitly calls fork1(2), which replicates only the calling thread. Should there be any outstanding mutexes throughout the process, the application should call pthread_atfork(3C) to wait for and acquire those mutexes prior to calling fork().

Scheduling

POSIX Threads

Solaris supports the following three POSIX scheduling policies:

SCHED_OTHER — Traditional Timesharing scheduling policy. It is based on the timesharing (TS) scheduling class.

SCHED_FIFO — First-In-First-Out scheduling policy. Threads scheduled to this policy, if not preempted by a higher priority, will proceed until completion. Such threads are in real-time (RT) scheduling class. The calling process must have the {PRIV_PROC_PRIOCNTL} privilege asserted in its effective set.

SCHED_RR — Round-Robin scheduling policy. Threads scheduled to this policy, if not preempted by a higher priority, will execute for a time period determined by the system. Such threads are in real-time (RT) scheduling class and the calling process must have the {PRIV_PROC_PRIOCNTL} privilege asserted in its effective set.

In addition to the POSIX-specified scheduling policies above, Solaris also supports these scheduling policies:

SCHED_IA Threads are scheduled according to the Inter-Active Class (IA) policy as described in priocntl(2).

SCHED_FSS Threads are scheduled according to the Fair-Share Class (FSS) policy as described in priocntl(2).

SCHED_FX Threads are scheduled according to the Fixed-Priority Class (FX) policy as described in priocntl(2).

Solaris Threads

Only scheduling policy supported is SCHED_OTHER, which is timesharing, based on the TS scheduling class.

エラー

In a multithreaded application, EINTR can be returned from blocking system calls when another thread calls forkall(2).

使用法

-mt compiler option

The -mt compiler option compiles and links for multithreaded code. It compiles source files with –D_REENTRANT and augments the set of support libraries properly.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
MT-Level	MT-Safe, Fork 1-Safe

関連項目

crle(1), fork(2), priocntl(2), libpthread(3LIB), librt(3LIB), libthread(3LIB), pthread_atfork(3C), pthread_create(3C), attributes(5), privileges(5), standards(5)

『リンカーとライブラリ』

名前

trusted_extensions – Solaris Trusted Extensions

機能説明

Solaris Trusted Extensions ソフトウェアは、Solaris オペレーティングシステム (Solaris OS) 構成の 1 つです。Solaris Trusted Extensions (Trusted Extensions) には、デスクトップシステム、ウィンドウシステム、ゾーンシステム、ファイルシステム、およびネットワーク通信用に、ローカルオブジェクトとローカルプロセスのラベルが提供されています。これらのラベルは、ラベルの関係に基づいて情報のフローを制限するマルチレベルセキュリティー (MLS) ポリシーの実装に使用されます。所有権に基づく随意アクセス制御 (Discretionary Access Control、DAC) とは異なり、Trusted Extensions によって適用される MLS ポリシーは必須アクセス制御 (Mandatory Access Control、MAC) の一例です。

デフォルトでは、Trusted Extensions ソフトウェアは無効になっています。これは、次の FMRI で識別される `labeld(1M)` サービスによって有効化または無効化されます (ただし、構成はされません)。

```
svc:/system/labeld:default
```

Trusted Extensions ソフトウェアを使用する前に必要な構成については、下記の管理者ガイドを参照してください。Trusted Extensions ソフトウェアをアクティブ化または非アクティブ化するには、`labeld` を有効または無効にしたあとでシステムをリブートする必要があります。

関連項目

`labeld(1M)`, `label_encodings(4)`, `labels(5)`

『Trusted Extensions 構成と管理』

『Trusted Extensions ユーザーガイド』

名前 vgrindefs – vgrind's language definition data base

形式 `/usr/lib/vgrindefs`

機能説明 `vgrindefs` contains all language definitions for `vgrind(1)`. Capabilities in `vgrindefs` are of two types: Boolean capabilities which indicate that the language has some particular feature and string capabilities which give a regular expression or keyword list. Entries may continue onto multiple lines by giving a \ as the last character of a line. Lines starting with # are comments.

Capabilities The following table names and describes each capability.

Name	Type	Description
ab	str	Regular expression for the start of an alternate form comment
ae	str	Regular expression for the end of an alternate form comment
bb	str	Regular expression for the start of a block
be	str	Regular expression for the end of a lexical block
cb	str	Regular expression for the start of a comment
ce	str	Regular expression for the end of a comment
id	str	String giving characters other than letters and digits that may legally occur in identifiers (default '_')
kw	str	A list of keywords separated by spaces
lb	str	Regular expression for the start of a character constant
le	str	Regular expression for the end of a character constant
oc	bool	Present means upper and lower case are equivalent
pb	str	Regular expression for start of a procedure
pl	bool	Procedure definitions are constrained to the lexical level matched by the 'px' capability
px	str	A match for this regular expression indicates that procedure definitions may occur at the next lexical level. Useful for lisp-like languages in which procedure definitions occur as subexpressions of defuns.
sb	str	Regular expression for the start of a string
se	str	Regular expression for the end of a string
tc	str	Use the named entry as a continuation of this one
tl	bool	Present means procedures are only defined at the top lexical level

Regular Expressions

`vgrindefs` uses regular expressions similar to those of `ex(1)` and `lex(1)`. The characters '^', '$', ':', and '\' are reserved characters and must be 'quoted' with a preceding \ if they are to be included as normal characters. The metasymbols and their meanings are:

`$`	The end of a line
`^`	The beginning of a line
`\d`	A delimiter (space, tab, newline, start of line)
`\a`	Matches any string of symbols (like '.*' in lex)
`\p`	Matches any identifier. In a procedure definition (the 'pb' capability) the string that matches this symbol is used as the procedure name.
`()`	Grouping
`|`	Alternation
`?`	Last item is optional
`\e`	Preceding any string means that the string will not match an input string if the input string is preceded by an escape character (\). This is typically used for languages (like C) that can include the string delimiter in a string by escaping it.

Unlike other regular expressions in the system, these match words and not characters. Hence something like '(tramp|steamer)flies?' would match 'tramp', 'steamer', 'trampflies', or 'steamerflies'. Contrary to some forms of regular expressions, `vgrindef` alternation binds very tightly. Grouping parentheses are likely to be necessary in expressions involving alternation.

Keyword List

The keyword list is just a list of keywords in the language separated by spaces. If the 'oc' boolean is specified, indicating that upper and lower case are equivalent, then all the keywords should be specified in lower case.

使用例

例 1 A sample program.

The following entry, which describes the C language, is typical of a language entry.

```
C|c|the C programming language:\
    :pb=^\d?*?\d?\p\d?(\a?\)(\d|{):bb={:be=}:cb=/*:ce=*/:sb=":se=\e":\
    :le=\e':tl:\
    :kw=asm auto break case char continue default do double else enum\
    extern float for fortran goto if int long register return short\
    sizeof static struct switch typedef union unsigned void while #define\
    #else #endif #if #ifdef #ifndef #include #undef # define endif\
    ifdef ifndef include undef defined:
```

Note that the first field is just the language name (and any variants of it). Thus the C language could be specified to `vgrind(1)` as 'c' or 'C'.

ファイル　　`/usr/lib/vgrindefs`　file containing vgrind descriptions

関連項目　　ex(1), lex(1), troff(1), vgrind(1)

名前

wbem – Web-Based Enterprise Management

機能説明

Web-Based Enterprise Management (WBEM) is a set of management and Internet-related technologies intended to unify the management of enterprise computing environments. Developed by the Distributed Management Task Force (DMTF), WBEM enables organizations to deliver an integrated set of standards-based management tools that support and promote World Wide Web technology. The DMTF has developed a set of standards that make up WBEM. This set of standards includes:

Common Information Model (CIM)

CIM is an object-oriented data model that describes the overall management of information in an enterprise network environment. CIM consists of a CIM specification and a CIM schema:

CIM Specification	Consists of the language and methodology that describes management data.
CIM Schema	Provides actual model descriptions of systems, applications, large area networks, and devices. The CIM Schema enables applications from different developers on different platforms to describe management data in a standard format. As a result, a variety of management applications can share this information.

CIM Operations Over HyperText Transport Protocol (HTTP) 1.1 is a transport mechanism that maps CIM operations to HTTP to allow implementations of CIM to interoperate in an open, standardized manner.

CIM Operations Over HTTP 1.1 uses eXtensible Markup Language (XML), which is a markup language that represents management information in textual form.

In addition to the XML representation, CIM information is also represented textually by the managed object format (MOF). These MOF representations are typically stored as text files that developers compile into a CIM Object Manager.

WBEM Tools and Services

Tools and services that enable developers to create and Services management applications and instrumentation that manage heterogeneous computer environments include:

- Solaris WBEM Services
- Solaris WBEM Software Development Kit (SDK)

Solaris WBEM Services

These services consist of a set of value-added Services components. These services make it easier for developers to create management applications that run in the Solaris operating environment. They also make the Solaris operating environment easier to manage. Solaris WBEM Services consists of:

- CIM Object Manager, CIM Repository, and MOF Compiler

- CIM and Solaris Schema, which is an extension schema of CIM. CIM and Solaris Schema is a collection of CIM classes that describe managed elements in the Solaris operating environment. These classes are available from the CIM Object Manager at start up.
- Solaris Providers, which are programs that communicate information between the Solaris operating environment and the CIM Object Manager (providers get and set dynamic information about managed elements, acting as an intermediary between the CIM Object Manager and the managed elements).

  Solaris software providers have been developed for a variety of areas: users, roles, file systems, and network configuration, for example. A remote provider is also available to distribute agents away from the CIM Object Manager when required. Because of the incremental development capabilities of the WBEM instrumentation framework, developers can progressively and consistently add more providers for additional Solaris software services.
- SNMP Adapter for WBEM, which enables Simple Network Management Protocol (SNMP) management applications to access system management information that is provided by Solaris WBEM Services. Used with the Solstice Enterprise Agent (SEA) Master Agent `snmpdx(1M)`, the SNMP Adapter for WBEM maps SNMP requests into equivalent WBEM Common Information Model (CIM) properties or instances.

  The SNMP Adapter for WBEM also remaps the response from the CIM Object Manager into an SNMP response, which is returned to the management application.

  A mapping file contains the corresponding Object Identifier (OID), class name, property name, and Abstract Syntax Notation One (ASN.1) type for each object. Developers can create their own mapping files.
- SNMP Provider, which enables WBEM services to deliver SNMP information.

Solaris WBEM SDK

The Solaris WBEM SDK is a set of application programming interfaces (APIs) that contain the components necessary to write management applications. These applications communicate with WBEM-enabled management devices by using XML and HTTP communication standards.

Solaris WBEM applications request information or services from the Common Information Model (CIM) Object Manager through the WBEM APIs. These APIs represent CIM objects as Java classes. The APIs are used to describe managed objects and to retrieve information about managed objects in a system environment. The advantage of modeling managed resources by using CIM is that those objects can be shared across any system that is CIM-compliant.

For more information on the Solaris WBEM SDK, see the Solaris WBEM Developer's Guide. The Solaris WBEM API documentation is available in Javadoc format with the Solaris OS installation at `/usr/sadm/lib/wbem/doc/index.html`.

Compatibility of Solaris WBEM Services with Existing Protocols

Adapters and converters enable Solaris WBEM Services of Solaris to work compatibly with existing protocols by mapping WBEM information to these protocols. One such protocol is Simple Network Management Protocol (SNMP).

Legacy management applications can administer WBEM-enabled software in the Solaris operating environment. Developers can write agents or providers that convert information from these protocols to WBEM, and they can write adapters that convert WBEM information into these protocols.

属性

See attributes(5) for descriptions of the following attributes:

ATTRIBUTE TYPE	ATTRIBUTE VALUE
Availability	SPARC and x86
Architecture	SUNWwbapi, SUNWwbco, SUNWwbco, SUNWwbdev, SUNWwbdoc, SUNWwbpro
CSI	Enabled

関連項目

appletviewer(1), cimworkshop(1M), init.wbem(1M), mofcomp(1M), mofreg(1M), snmpdx(1M), wbemadmin(1M), wbemconfig(1M), wbemlogviewer(1M), attributes(5)

名前

zones – Solaris アプリケーションコンテナ

機能説明

Solaris のゾーン機能を使用して、アプリケーションを実行するための独立した環境を作成することができます。ゾーンで実行するプロセスは、システム上のほかのアクティビティーから監視されたり干渉されたりすることはありません。ほかのプロセス、ネットワークインタフェース、ファイルシステム、デバイス、およびプロセス間通信機能へのアクセスは、別のゾーンで実行されているプロセスと対話することがないように制限されます。

ゾーンで使用できる特権は、操作がシステム全体に影響することがないように制限されます。privileges(5) を参照してください。

ゾーンの構成と管理は、zoneadm(1M) および zonecfg(1M) ユーティリティーを使って行います。ゾーンごとに詳細な構成を指定し、ファイルシステムの内容 (ソフトウェアパッケージなど) をゾーンにインストールし、ゾーンの実行時の状態を管理することができます。zlogin(1) を使用すれば、アクティブなゾーンでコマンドを実行することができます。この操作を行うときに、in.rlogind(1M) や sshd(1M) などのネットワークベースのログインサーバーからログインする必要はありません。

ゾーンを自動的にブートするかどうかは、次のように FMRI で識別されるゾーンサービスを使って切り替えます。

svc:/system/zones:default

zoneadm(1M) を参照してください。ゾーンの autoboot プロパティーに true を設定して、常に自動的にブートする方法もあります。ただし、ゾーンサービスが無効になっている場合は、ゾーンの autoboot プロパティーの設定に関係なく、ゾーンは自動的にブートしません。zonecfg(1M) を参照してください。

アクティブなゾーンは、英数字の名前と数値の ID によって識別されます。英数字の名前は、zonecfg(1M) ユーティリティーを使用して構成します。数値の ID は、ゾーンがブートするときに自動的に割り当てられます。zonename(1) ユーティリティーを実行すると、現在のゾーン名が報告されます。zoneadm(1M) ユーティリティーを実行すると、構成済みゾーンの名前と ID が報告されます。

ゾーンの状態には、次のいくつかの種類があります。

構成済み	ゾーンの構成が完全に指定および確定されて、安定した記憶領域に保存されていることを示します。
不完全	ゾーンのインストールまたはアンインストールが完了していないか、またはそのような状態への移行中に操作が中断されたことを示します。
インストール済み	ゾーンの構成がシステムにインストールされたことを示します。 パッケージはゾーンのルートパスにインストールされています。

準備完了
: ゾーンの仮想プラットフォームが確立されていることを示します。たとえば、ファイルシステムのマウントおよびデバイスの構成は完了していますが、ゾーンに関連付けられているプロセスはまだ開始していません。

稼働
: ゾーンのアプリケーション環境に関連付けられたユーザープロセスが稼働状態であることを示します。

停止処理中
停止
: ゾーンが停止していることを示します。アプリケーション環境の状態 (ファイルシステムをマウントした状態など) を切り離せない場合、または仮想プラットフォームの一部を破棄できない場合に、ゾーンがそれらの状態に固定されることがあります。そのような場合には、オペレータの介入が必要です。

プロセスのアクセス制限

あるゾーン (大域ゾーンを除く) で実行中のプロセスからほかのプロセスへのアクセスは制限されています。`/proc` (`proc(4)` を参照) またはプロセス ID を引数に持つシステムコールインタフェース (`kill(2)`、`priocntl(2)` など) を使用してアクセスできるプロセスは、同じゾーンのプロセスだけです。ほかのゾーン (大域ゾーンを含む) にあるプロセスにアクセスしようとすると、指定したプロセスがなかった場合に返されるエラーコードと同じエラーコードで失敗します。

特権の制限

非大域ゾーンで実行されるプロセスでは、あるゾーンで実行する操作がほかのゾーンの操作に影響することがないように、一部の特権が制限されています。特権が制限されることによって、そのゾーンで特権ユーザー (スーパーユーザー、ルートユーザーなど) が実行できる操作が制限されます。ゾーンで許可される特権のリストは、`ppriv(1)` ユーティリティーを使って表示できます。特権に関する詳細については、`privileges(5)` を参照してください。

デバイスの制限

あるゾーンのプロセスが別のゾーンのプロセスに干渉することがないよう、ゾーン内部で利用可能なデバイスセットには制限があります。たとえば、ゾーンで実行されるプロセスから、`/dev/kmem` を使用してカーネルメモリーを変更したり、ルートディスクの内容を変更したりすることはできません。このため、デフォルトでは、ゾーン内で安全に利用可能であると見なされるいくつかの仮想デバイスだけを使用できます。特定のゾーンで使用できるデバイスを追加するときは、`zonecfg(1M)` ユーティリティーを使用します。

デバイスおよび特権が制限されることで、非大域ゾーンで実行できるユーティリティーにもいくつかの影響があります。たとえば、`eeprom(1M)`、`prtdiag(1M)`、および `prtconf(1M)` ユーティリティーは、通常は利用できないデバイスを操作するため、ゾーンでは使用できません。

ブランド

ゾーンを最初に作成するとき、ゾーンにブランドを割り当てることができます。ブランドゾーン内のソフトウェアは、大域ゾーンにある同じソフトウェアとは異なります。このようなソフトウェアには、構成や配置の異なる Solaris ソフト

ウェア、Solaris 以外のソフトウェアなどがあります。このような特定のソフトウェアの集まりを「ブランド」と呼びます (brands(5) を参照)。いったんインストールされると、ゾーンをアンインストールしない限り、ゾーンのブランドは変更できません。

ファイルシステム

各ゾーンは、ゾーンの root と呼ばれるディレクトリをルートとする、ファイルシステム階層の独自領域を保持します。ゾーンで実行されるプロセスがアクセスできるファイルは、階層のその領域にあるファイル (ゾーンのルートにあるファイル) だけです。この制限により、あるゾーンのプロセスから、別のゾーンに関連付けられているファイルシステムのデータを破壊または検査できないようになっています。chroot(1M) ユーティリティーをゾーンで使用することはできますが、その処理はゾーンでアクセスできるルートパスだけに制限されます。

ファイルシステムの領域を保護するために、ファイルシステムの領域を 1 つ以上のゾーンにマウントするときには、lofs(7FS) ファイルシステムの読み取り専用オプションを使用して行います。このように操作することで、同じファイルシステムのデータを複数のゾーンで共有するときに、ゾーンのセキュリティーを確保することができます。

あるゾーンで確立された NFS および autofs マウントへのアクセスは、そのゾーンだけに制限され、ほかのゾーン (大域ゾーンを含む) からアクセスすることはできません。ゾーンが停止またはリブートすると、マウントは削除されます。

ゾーンに委任された ZFS データセットは、そのゾーン内で管理できます。委任されたデータセット内に子データセットを作成できます。委任されたデータセット内にデータセットを作成すると、それらも委任されます。委任されたデータセットは、最上位のもの以外は破棄できます。委任されたデータセットには、ほとんどのプロパティーを設定できます。詳細については、zfs(1M) を参照してください。

各ゾーンには委任された最上位のデータセットが 1 つあり、そのデータセットには ROOT データセットがあるほか、.../export や .../export/home などのデータセットが含まれる場合もあります。ROOT データセットの下にあるデータセットは、そのゾーンのブート環境を構成します。ブート環境のデータセットを作成または破棄する場合は、必ず zoneadm(1M) コマンドまたは beadm(1M) コマンドを使用するようにしてください。

ネットワーク

ゾーンでは、TCP、UDP、および SCTP アプリケーションに独自のポート番号空間を使用し、通常は 1 つ以上の個別の IP アドレスを使用します (ただし、Trusted Extensions の特定の構成ではゾーン間で IP アドレスが共有される)。

ゾーンでは、IP レイヤー (IP ルーティング、ARP、IPsec、IP フィルタなど) の構成および状態を大域ゾーンと共有するか (共有 IP ゾーン)、異なる IP レイヤーの構成および状態を使用する (排他的 IP ゾーン) ことができます。

ゾーンが大域ゾーンと同じデータリンクに接続される、つまり、同じ IP サブネット上に配置される場合は、ゾーンに共有 IP インスタンスを使用することをお勧めします。

ゾーンが大域ゾーンやほかの非大域ゾーンとは異なる VLAN や LAN に接続される場合など、ネットワークの IP レイヤーで隔離されている必要がある場合は、隔離の理由から、ゾーンに排他的 IP を使用するようにしてください。

共有 IP ゾーンでは、ネットワークに対する特定の操作 (IP アドレスの変更、IP または Ethernet の偽装パケットの送信など) が禁止されます。これに対し、排他的 IP ゾーンでは、同じネットワークインタフェースに接続されている独立したホストと同等のネットワーク機能を使用できます。特に、そのようなゾーンのスーパーユーザーは、IP アドレスの変更および ARP パケットの偽装を行うことができます。

共有 IP ゾーンには、1 つ以上のネットワークインタフェース名と IP アドレスが zonecfg(1M) で割り当てられます。ネットワークインタフェース名は大域ゾーンでも構成する必要があります。

排他的 IP ゾーンには、1 つ以上のネットワークインタフェース名が zonecfg(1M) で割り当てられます。ネットワークインタフェース名はそのゾーンに排他的に割り当てる必要があります。つまり、同じネットワークインタフェース名をほかの稼働中のゾーンに割り当てたり、大域ゾーンで使用したりすることはできません。

DHCP クライアント、IPsec および IP フィルタという形での IP レベルの完全な機能は、排他的 IP ゾーンで使用できますが、共有 IP ゾーンでは使用できません。

ホスト識別子

ゾーンは 32 ビットのホスト識別子をエミュレートできます。ホスト識別子は、システム統合を目的として、zonecfg(1M) 経由で構成できます。ゾーンがホスト識別子をエミュレートすると、hostid(1) や sysdef(1M) などのコマンドだけでなく、ゾーンのコンテキスト内で実行される sysinfo(2) や gethostid(3C) などの C インタフェースも、ホストマシンの識別子ではなく、エミュレートされたゾーンのホスト識別子を表示するか、返します。

属性

属性についての詳細は、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
使用条件	system/core-os

関連項目

hostid(1), zlogin(1), zonename(1), beadm(1M), in.rlogind(1M), sshd(1M), sysdef(1M), zfs(1M), zoneadm(1M), zonecfg(1M), kill(2), priocntl(2), sysinfo(2), gethostid(3C), getzoneid(3C), ucred_get(3C), proc(4), attributes(5), brands(5), privileges(5), crgetzoneid(9F)